

# 矢加部町屋敷遺跡Ⅳ 蒲船津西ノ内遺跡 蒲船津水町遺跡

福岡県柳川市大字矢加部・蒲船津所在遺跡の調査

2012

九州歴史資料館

や か べ ま ち や し き  
矢加部町屋敷遺跡IV  
か ま ふ な つ に し の う ち  
蒲船津西ノ内遺跡  
か ま ふ な つ み ず ま ち  
蒲船津水町遺跡

福岡県柳川市大字矢加部・蒲船津所在遺跡の調査

1. 矢加部町屋敷遺跡遠景  
(北上空から)



2. 矢加部町屋敷遺跡5次調査  
出土手形付摺鉢



66図8

3. 矢加部町屋敷遺跡5次調査  
出土漆器



# 序

福岡県では、平成14年度から国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所の委託を受けて、有明海沿岸道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

本報告書は平成16・18・19年度にかけて行った、福岡県柳川市大字矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡、大字蒲船津に所在する矢加部町蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡の記録で、矢加部町屋敷遺跡の調査報告としては4冊目になります。

矢加部町屋敷遺跡は江戸時代の街道である「久留米柳川往還道」沿いに位置しており、本書に報告した調査区では久留米柳川街道の東側溝の南側が発見されました。このほかにも、明治期に排水用の土管が使用されていることや、大正期まで鋳物師が存在していたことが明らかになりました。蒲船津西ノ内遺跡は中世後期の集落跡であり、蒲船津城との関係が想定されます。蒲船津水町遺跡では平安時代前期の多くの墨書土器が発見され、蒲船津地区の重要な場所であったことがわかりました。

今回の調査ではこのように矢加部・蒲船津両集落の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。本書が文化財保護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成24年3月31日

九州歴史資料館  
館長 西谷 正

## 例言

1. 本書は有明海沿岸道路建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県柳川市大字町屋敷に所在する矢加部町屋敷遺跡と、大字蒲船津に所在する蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡の記録で、有明海沿岸道路建設関係埋蔵文化財調査報告では第12集に当る。矢加部町屋敷遺跡調査報告書としては第4冊目であり、本書では5次調査区の遺物と1次調査の遺構・遺物を報告する。
2. 本遺跡の発掘調査・整理報告は国土交通省九州整備局福岡国道事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施した。
3. 本書所収遺跡は有明海沿岸道路調査地点の第11・16・17地点にあたる。
4. 本書に掲載した遺構写真は、矢加部町屋敷遺跡については秦憲二が、蒲船津西ノ内遺跡については進村真之が、蒲船津水町遺跡については小川泰樹が撮影した。なお、空中写真は矢加部町屋敷遺跡・蒲船津西ノ内遺跡については九州航空株式会社に、蒲船津水町遺跡は(株)東亜航空技研に委託した。出土遺物については九州歴史資料館北岡伸一が撮影した。
5. 本書に掲載した遺構図は秦・進村・小川が作成し、発掘作業員が補助した。
6. 出土遺物の整理作業は、福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所および九州歴史資料館において、濱田信也・新原正典・小池史哲の下に実施した。
7. 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館に保管している。
8. 本書に使用した分布図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「羽犬塚」を改変したものである。本書に掲載した遺構図の方位は全て日本座標の座標北(G.N.)である。
9. 平成23年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織変更のため、九州歴史資料館に移管された。
10. Ⅲ-4の自然科学分析は赤色顔料分析については九州歴史資料館文化財調査室保存管理班加藤和蔵が行い、骨貝種子同定はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
11. X線CTスキャンは図版1については九州国立博物館で、図版2については九州歴史資料館で実施した。
12. 本書は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-1～3を秦が、Ⅲ-4を九州歴史資料館文化財調査室保存管理班加藤とバリノ・サーヴェイ株式会社佐々木由香・バンドリ スダルシャン・中村賢太郎が、Ⅲ-5を進村が、Ⅲ-6を小川が執筆し、編集は各執筆者の協力を得て秦が行った。

# 目次

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

I. はじめに	1
1. 調査の経過	1
2. 調査の組織	4
II. 位置と環境	6
III. 調査の内容	9
1. 矢加部町屋敷遺跡5次調査の出土遺物	9
2. 矢加部町屋敷遺跡1次調査	86
3. 矢加部町屋敷遺跡のまとめ	201
4. 矢加部町屋敷遺跡の自然科学系の分析	217
5. 蒲船津西ノ内遺跡	231
6. 蒲船津水町遺跡	239

# 図版目次

巻頭図版1	1. 矢加部町屋敷遺跡遠景(北上空から)	
	2. 矢加部町屋敷遺跡5次調査出土手形付摺鉢	
	3. 矢加部町屋敷遺跡5次調査出土漆器	
図版1	5次調査出土土器・陶磁器	
図版2	5次調査出土土器・陶磁器・土製品	
図版3	5次調査出土瓦・石製品	
図版4	5次調査出土金属製品	
図版5	5次調査出土金属製品・ガラス製品・木製品	
図版6	5次調査出土木製品1	
図版7	5次調査出土木製品2	
図版8	5次調査出土木製品3	
図版9	5次調査出土木製品4	
図版10	5次調査出土木製品5	
図版11	1. 矢加部町屋敷遺跡遠景(西上空から)	2. 1次調査区全景(上空から)
図版12	1. 1号土坑(北東から)	2. 3号土坑(南東から)
	3. 4・33号土坑(北から)	4. 4号土坑遺物出土状態(西から)
	5. 6号土坑(東から)	6. 7号土坑(南東から)
	7. 8号土坑(西から)	8. 9号土坑(北東から)
	9. 11・22号土坑(北から)	10. 12号土坑(北東から)
図版13	1. 15・19・41号土坑(南から)	2. 16号土坑(南西から)
	3. 16・17号土坑(北東から)	4. 21号土坑(北東から)

	5. 23・25号土坑(南東から)	6. 23号土坑遺物出土状態(北西から)
	7. 27号土坑(北から)	8. 28・35号土坑・1号井戸(西から)
図版14	1. 30・39号土坑(北西から)	2. 31・36号土坑(西から)
	3. 32号土坑(南西から)	4. 34号土坑(南から)
	5. 41号土坑(南西から)	6. 37号土坑(南西から)
図版15	7. 2号廃棄土坑(南西から)	8. 1号大土坑(北西から)
	1. 3号大土坑(北から)	2. 4号大土坑(南から)
	3. 2号大溝排水管(南西から)	4. 同上(西から)
	5. 1・2号埋甕(南西から)	6. 3号埋甕(南から)
	7. 4号埋甕(西から)	8. 5号埋甕(北東から)
	9. 6号埋甕(西から)	10. 7号埋甕(南から)
	11. 8号埋甕(南から)	12. 9号埋甕(北から)
図版16	1次調査出土土器・陶磁器	
図版17	1次調査出土陶磁器	
図版18	1次調査出土瓦	
図版19	1次調査出土土・金属・鹿角・貝製品	
図版20	1次調査出土石製品・鋳型	
図版21	1次調査出土ガラス・木製品	
図版22	1次調査出土木製品1	
図版23	1次調査出土木製品2	
図版24	1次調査出土木製品3	
図版25	1. 蒲船津西ノ内遺跡全景(西から)	2. 同上全景(北から)
図版26	1. 1号土坑(東から)	2. 2号土坑(南から)
	3. 灰だまり(南から)	
図版27	1. 1号溝状遺構(東から)	2. 1号溝状遺構(西から)
	3. 2号溝状遺構(南から)	
図版28	1. 2号溝状遺構(南から)	2. 西壁土層(東から)
	3. 西壁土層(東から)	
図版29	1. トレンチ(北東から)	2. トレンチ(南から)
	3. 全景(南東から)	
図版30	1号土坑、2号溝状遺構、遺構面出土土器	
図版31	1. 蒲船津水町遺跡全景(北上空から)	2. 同上全景(上空から)
図版32	1. 1号土坑(西から)	2. 2号土坑(南から)
	3. 3号土坑(南から)	
図版33	1. 4号土坑(北から)	2. 5号土坑(西から)
	3. 6号土坑土層(北西から)	
図版34	1. 6号土坑(西から)	2. 7号土坑土層(東から)
	3. 7号土坑(南から)	
図版35	1. 8号土坑土層(南から)	2. 8号土坑(東から)
	3. 9号土坑土層(南から)	
図版36	1. 9号土坑(東から)	2. 10号土坑(東から)
	3. 11号土坑(南から)	
図版37	1. 12号土坑土層(南から)	2. 12号土坑(東から)

	3. 13号土坑土層(南西から)	
図版38	1. 14号土坑土層(南から)	2. 14号土坑(南から)
	3. 15号土坑土層(南から)	
図版39	1. 16号土坑(西から)	2. 17号土坑(南から)
	3. 遺物包含層掘削状況(北から)	
図版40	出土遺物1	
図版41	出土遺物2	

## 挿図目次

第1図	柳川市位置図	1
第2図	有明海沿岸道路調査地点図(1/50,000)	2
第3図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	7
第4図	矢加部町屋敷遺跡調査範囲図(1/4,000)	9
第5図	矢加部町屋敷遺跡5次調査遺構略配置図(1/200)	11
第6図	5次調査1号土坑出土陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3)	12
第7図	5次調査2～4号土坑出土土器・陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3)	14
第8図	5次調査4・5号土坑出土陶磁器実測図(1・2・10は1/4、他は1/3)	15
第9図	5次調査6～11号土坑出土陶磁器実測図(6は1/4、他は1/3)	17
第10図	5次調査12・13号土坑出土陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3)	19
第11図	5次調査14号土坑出土陶磁器実測図(11は1/4、他は1/3)	20
第12図	5次調査14・16号土坑出土陶磁器実測図(5～7・13は1/4、他は1/3)	21
第13図	5次調査17号土坑出土土器・陶磁器実測図(9～11は1/4、他は1/3)	22
第14図	5次調査18～20号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)	24
第15図	5次調査21・23・24号土坑出土陶磁器実測図(1・7・8は1/4、他は1/3)	26
第16図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図1(1/3)	28
第17図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図2(1/3)	30
第18図	5次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)	32
第19図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図3(1/3)	34
第20図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図4(1/3)	36
第21図	5次調査1号大土坑出土磁器実測図(1/3)	38
第22図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図5(1/3)	40
第23図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図6(1/3)	41
第24図	5次調査1号大土坑出土土器・陶器実測図1(5～8は1/4、他は1/3)	43
第25図	5次調査1号大土坑出土陶器実測図1(1/4)	44
第26図	5次調査1号大土坑出土陶器実測図2(1・2・3は1/4、他は1/3)	45
第27図	5次調査1号大土坑出土陶器実測図3(1/4)	46
第28図	5次調査1号大土坑出土土器・陶器実測図2(7は1/4、他は1/3)	48
第29図	5次調査1号大土坑出土陶器実測図4(1・4～6は1/4、他は1/3)	49
第30図	5次調査1号大土坑出土土器・陶器実測図3(3は1/3、他は1/4)	50
第31図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図7(1/3)	51
第32図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図8(1/3)	52
第33図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図9(1/3)	54

第34図	5次調査1号大土坑出土陶器実測図5(1/4) .....	55
第35図	5次調査1号大土坑出土土器実測図(1/6) .....	56
第36図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図10(1/3) .....	58
第37図	5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図11(1/3) .....	60
第38図	5次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図5(1/3) .....	62
第39図	5次調査1・3号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3) .....	63
第40図	5次調査ビット出土土器・陶磁器実測図(2は1/4、他は1/3) .....	64
第41図	5次調査包含層・2号胎衣壺・排土出土土器・陶磁器実測図(1/3) .....	66
第42図	5次調査出土土師質瓦実測図1(1/6) .....	67
第43図	5次調査出土土師質瓦実測図2(1/6) .....	68
第44図	5次調査出土瓦実測図(1/6) .....	69
第45図	5次調査出土土製品実測図(1/3) .....	70
第46図	5次調査出土土・石製品実測図(1/3) .....	72
第47図	5次調査出土金属・鹿角製品実測図(7は1/2、他は1/3) .....	73
第48図	5次調査出土銭実測図(1/2) .....	74
第49図	5次調査出土木製品実測図1(22は1/4、他は1/3) .....	76
第50図	5次調査出土木製品実測図2(1/6) .....	77
第51図	5次調査出土木製品実測図3(1/6) .....	78
第52図	5次調査出土木製品実測図4(1~2は1/2、6・9~11・14・15は1/4、他は1/3) .....	80
第53図	5次調査出土木製品実測図5(16は1/3、他は1/4) .....	81
第54図	5次調査出土木製品実測図6(9~11は1/12、他は1/6) .....	85
第55図	矢加部町屋敷遺跡1次調査遺構配置図(1/200) .....	87-88
第56図	1次調査1・3~9号土坑実測図(1/60) .....	91
第57図	1次調査10~12・14~17号土坑実測図(1/60) .....	93
第58図	1次調査18・19・21~24・26・27号土坑実測図(1/60) .....	95
第59図	1次調査28~37・39号土坑実測図(1/60) .....	97
第60図	1次調査38・40・41号土坑実測図(1/60) .....	99
第61図	1次調査1・3・4号大土坑実測図(1/60) .....	101
第62図	1次調査1・2号廃棄土坑、2号井戸実測図、8号埋壘土層断面図(4は1/30、他は1/60) .....	103
第63図	1次調査1号土坑出土陶磁器実測図(1/3) .....	106
第64図	1次調査3号土坑出土土器・陶磁器実測図1(1/3) .....	108
第65図	1次調査3号土坑出土土器・陶磁器実測図2(12は1/6、6~9は1/4、1/3) .....	110
第66図	1次調査4号土坑出土陶磁器実測図(8・9は1/4、他は1/3) .....	111
第67図	1次調査5号土坑出土土器・陶磁器実測図(5・6は1/4、他は1/3) .....	112
第68図	1次調査7・8号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) .....	114
第69図	1次調査10号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) .....	115
第70図	1次調査11・12号土坑出土土器・陶磁器実測図(1・2・5~7は1/4、他は1/3) .....	116
第71図	1次調査12号土坑出土陶器実測図(2・3・5は1/4、他は1/3) .....	117
第72図	1次調査14号土坑出土土器・陶磁器実測図(14は1/4、他は1/3) .....	118
第73図	1次調査15号土坑出土土器・陶磁器実測図(10・11は1/6、他は1/3) .....	120
第74図	1次調査16~18号土坑出土土器・陶磁器実測図(6は1/4、他は1/3) .....	122
第75図	1次調査19号土坑出土土器・陶磁器実測図(16・17は1/4、他は1/3) .....	123
第76図	1次調査21・22号土坑出土土器・陶磁器実測図(15は1/4、他は1/3) .....	125

第77図	1次調査23号土坑出土土器・陶磁器実測図(3・5は1/4、8は1/6、他は1/3) .....	126
第78図	1次調査24・26・28号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) .....	127
第79図	1次調査29・33号土坑出土陶磁器実測図(5・9は1/4、他は1/3) .....	129
第80図	1次調査35～37・41号土坑出土土器・陶磁器実測図(11は1/4、他は1/3) .....	130
第81図	1次調査1号廃棄土坑出土土器・陶磁器実測図(8は1/4、2は1/3) .....	131
第82図	1次調査2号廃棄土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) .....	133
第83図	1次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図1(1/3) .....	134
第84図	1次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図2(2～4は1/4、他は1/3) .....	136
第85図	1次調査3号大土坑出土土器・陶磁器実測図(7・8は1/4、他は1/3) .....	138
第86図	1次調査4号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) .....	139
第87図	1次調査1号埋壘実測図(1/12) .....	140
第88図	1次調査2・3号埋壘出土土器・陶磁器実測図(1は1/6、4は1/4、他は1/3) .....	140
第89図	1次調査4号埋壘出土土器・磁器実測図(1は1/3、2は1/6) .....	142
第90図	1次調査5号埋壘出土土器・磁器実測図(1は1/6、2は1/3) .....	143
第91図	1次調査6号埋壘出土土器・陶磁器実測図(1・2は1/6、他は1/3) .....	144
第92図	1次調査7号埋壘出土陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3) .....	145
第93図	1次調査8・9号埋壘出土土器・磁器実測図(5は1/4、他は1/3) .....	146
第94図	1次調査1号大溝出土土器・陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3) .....	146
第95図	1次調査2号大溝出土陶磁器実測図1(1/3) .....	147
第96図	1次調査2号大溝出土陶磁器実測図2(1/3) .....	148
第97図	1次調査2号大溝出土磁器実測図1(1/3) .....	150
第98図	1次調査2号大溝出土磁器実測図2(1/3) .....	152
第99図	1次調査2号大溝出土陶磁器実測図3(1/3) .....	154
第100図	1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図1(1/4) .....	155
第101図	1次調査2号大溝出土陶器実測図(1/4) .....	156
第102図	1次調査2号大溝出土陶磁器実測図4(1/3) .....	157
第103図	1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図2(5は1/4、他は1/3) .....	158
第104図	1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図3(1/3) .....	160
第105図	1次調査2号大溝出土土器実測図(3は1/4、他は1/3) .....	161
第106図	1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図4(2は1/4、他は1/3) .....	162
第107図	1次調査2・3号大溝出土土器・陶器実測図5(19～21は1/6、22は1/4、他は1/3) .....	164
第108図	1次調査1号大溝出土土器・陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3) .....	166
第109図	1次調査2～4・6号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1・7は1/4、他は1/3) .....	167
第110図	1次調査7号溝状遺構・南西部クレーク出土土器・磁器実測図(2は1/4、他は1/3) .....	169
第111図	1次調査2号井戸・鋳造炉上面出土陶磁器実測図(8・9は1/4、他は1/3) .....	169
第112図	1次調査ビット出土土器・陶磁器実測図(12・13は1/4、他は1/3) .....	170
第113図	1次調査整地層出土土器・陶磁器実測図(6は1/4、他は1/3) .....	172
第114図	1次調査大正包含層出土土器・陶磁器実測図(1/3) .....	173
第115図	1次調査攪乱土坑出土陶磁器実測図(5・6は1/4、他は1/3) .....	174
第116図	1次調査出土土師質瓦実測図1(1/6) .....	175
第117図	1次調査出土土師質瓦実測図2(1/6) .....	176
第118図	1次調査出土瓦実測図(1/6) .....	177
第119図	1次調査出土土製品実測図(1/3) .....	179

第120図	1次調査出土土・金属製品実測図(1~5は1/4、他は1/3)	181
第121図	1次調査出土るつば実測図(1/3)	182
第122図	1次調査出土砥石実測図(1/3)	184
第123図	1次調査出土石製品実測図(1・9・10は1/2、7・8は1/6、他は1/3)	185
第124図	1次調査出土石塔部材実測図(1/3)	187
第125図	1次調査出土ガラス・鹿角・貝製品実測図(13は1/2、他は1/3)	188
第126図	1次調査出土銭実測図(1/2)	190
第127図	1次調査出土木製品実測図1(19は1/4、他は1/3)	191
第128図	1次調査出土木製品実測図2(1/3)	192
第129図	1次調査出土木製品実測図3(4・17は1/4、他は1/3)	193
第130図	1次調査出土木製品実測図4(4・5は1/2、他は1/3)	195
第131図	1次調査出土木製品実測図5(1/3)	196
第132図	1次調査出土木製品実測図6(1/6)	197
第133図	1次調査出土木製品実測図7(1/3)	198
第134図	矢加部町屋敷遺跡1~5次調査遺構変遷図1(1/800)	202
第135図	久留米柳川往還路線と現存する往還道跡	202
第136図	矢加部町屋敷遺跡1~5次調査遺構変遷図2(1/800)	203
第137図	藩境木位置図と推定復元図	203
第138図	矢加部町屋敷遺跡1~5次調査遺構変遷図3(1/800)	204
第139図	矢加部町屋敷遺跡1~5次調査遺構変遷図4(1/800)	205
第140図	棧瓦・軒平瓦当文と刻印の比較図	207
第141図	「クド造り」「漏斗造」家屋の分布と柱配置模式図	210
第142図	矢加部町屋敷遺跡出土鋳造関係遺物とこしき戸の例	211
第143図	矢加部町屋敷遺跡出土の主要な土人形(6・7は1/4、他は1/3)	212
第144図	福岡・北九州・筑後市域出土の土人形(1/2)	213
第145図	摺鉢(上)・硯(下)付着赤色顔料蛍光X線スペクトル図	218
第146図	蒲船津西ノ内遺跡調査区位置図(1/1,000)	232
第147図	蒲船津西ノ内遺跡遺構配置図(1/200)	233
第148図	1・2号土坑・灰だまり実測図(1/30)	234
第149図	1・2号溝状遺構土層実測図(1/30)	235
第150図	1号土坑・2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1~5は1/3、他は1/4)	236
第151図	遺構面出土土器・陶磁器実測図(13~16は1/6、他は1/4)	237
第152図	蒲船津水町遺跡周辺地形図(1/2,000)	239
第153図	蒲船津水町遺跡遺構配置図(1/300)	240
第154図	1~6号土坑実測図(1/30)	242
第155図	1~4・6号土坑出土遺物実測図(1/3)	243
第156図	7~10号土坑実測図(1/30)	245
第157図	7~10号土坑出土遺物実測図(1/3)	246
第158図	11~17号土坑実測図(1/30)	249
第159図	11~15・17号土坑出土遺物実測図(1/3)	250
第160図	包含層出土土器実測図(1/4)	251

# 表目次

表1	有明海沿岸道路調査一覽	3
表2	5次調査出土土器・陶磁器観察表1	13
表3	5次調査出土土器・陶磁器観察表2	16
表4	5次調査出土土器・陶磁器観察表3	18
表5	5次調査出土土器・陶磁器観察表4	23
表6	5次調査出土土器・陶磁器観察表5	25
表7	5次調査出土土器・陶磁器観察表6	27
表8	5次調査出土土器・陶磁器観察表7	29
表9	5次調査出土土器・陶磁器観察表8	31
表10	5次調査出土土器・陶磁器観察表9	33
表11	5次調査出土土器・陶磁器観察表10	35
表12	5次調査出土土器・陶磁器観察表11	37
表13	5次調査出土土器・陶磁器観察表12	39
表14	5次調査出土土器・陶磁器観察表13	42
表15	5次調査出土土器・陶磁器観察表14	47
表16	5次調査出土土器・陶磁器観察表15	53
表17	5次調査出土土器・陶磁器観察表16	57
表18	5次調査出土土器・陶磁器観察表17	59
表19	5次調査出土土器・陶磁器観察表18	61
表20	5次調査出土土器・陶磁器観察表19	65
表21	5次調査出土瓦観察表	69
表22	5次調査出土土製品観察表	71
表23	5次調査出土土・石製品観察表	74
表24	5次調査出土金属製品観察表	75
表25	5次調査出土木製品観察表1	79
表26	5次調査出土木製品観察表2	82
表27	5次調査出土木・ガラス製品観察表	84
表28	1次調査出土土器・陶磁器観察表1	107
表29	1次調査出土土器・陶磁器観察表2	109
表30	1次調査出土土器・陶磁器観察表3	113
表31	1次調査出土土器・陶磁器観察表4	117
表32	1次調査出土土器・陶磁器観察表5	118
表33	1次調査出土土器・陶磁器観察表6	119
表34	1次調査出土土器・陶磁器観察表7	121
表35	1次調査出土土器・陶磁器観察表8	124
表36	1次調査出土土器・陶磁器観察表9	125
表37	1次調査出土土器・陶磁器観察表10	127
表38	1次調査出土土器・陶磁器観察表11	128
表39	1次調査出土土器・陶磁器観察表12	132
表40	1次調査出土土器・陶磁器観察表13	135
表41	1次調査出土土器・陶磁器観察表14	137
表42	1次調査出土土器・陶磁器観察表15	141

表43	1次調査出土土器・陶磁器観察表16	149
表44	1次調査出土土器・陶磁器観察表17	151
表45	1次調査出土土器・陶磁器観察表18	153
表46	1次調査出土土器・陶磁器観察表19	159
表47	1次調査出土土器・陶磁器観察表20	163
表48	1次調査出土土器・陶磁器観察表21	165
表49	1次調査出土土器・陶磁器観察表22	168
表50	1次調査出土土器・陶磁器観察表23	171
表51	1次調査出土土器・陶磁器観察表24	174
表52	1次調査出土土器・陶磁器観察表25	175
表53	1次調査出土土器・陶磁器観察表26	177
表54	1次調査出土土器・陶磁器観察表27	178
表55	1次調査出土瓦観察表	178
表56	1次調査出土土製品観察表1	180
表57	1次調査出土土製品観察表2	182
表58	1次調査出土金属製品観察表	182
表59	1次調査出土土製品観察表3	183
表60	1次調査出土石製品観察表	186
表61	1次調査出土ガラス・鹿角・貝製品観察表	189
表62	1次調査出土銭観察表	190
表63	1次調査出土木製品観察表1	194
表64	1次調査出土木製品観察表2	199
表65	矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体	220
表66	矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体種名表	226
表67	矢加部町屋敷遺跡出土の魚類、爬虫類、哺乳類、鳥類	227
表68	矢加部町屋敷遺跡出土の貝類	228

## 写真目次

写真1	久留米市柳川往還道跡1(北東から)	202
写真2	久留米市柳川往還道跡2(北東から)	202
写真3	土師質瓦使用状況	209
写真4	使用変色のある土師質瓦	209
写真5	焼塩壺の蓋と見られる小皿と蛍光X線分析試料写真	216
写真6	矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(1)	223
写真7	矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(2)	224
写真8	矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体(1)	229
写真9	矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体(2)	230

## I. はじめに

### 1. 調査の経過

ここに報告する遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設工事に伴って発掘調査されたものである。有明海沿岸道路は福岡県大牟田市から柳川市・大川市を經由して、佐賀県鹿島市に至る概略延長55kmの国道208号のバイパス路線である。高規格道路として整備され、渋滞解消とともに佐賀空港や三池港などの交通拠点と連結するもので、地域間流通の活性化のために早期建設が望まれていた。

平成6(1994)年12月16日に計画路線として指定され、路線は大牟田高田道路・高田大和バイパス・大川バイパスに3区分されている。大川バイパスは柳川市三橋町徳益から大川市大野島までの延長10.0km区間であり、平成10(1998)年12月18日に柳川市三橋町徳益から柳川市西蒲池までが整備区間が指定された。

平成12(2000)年10月28日に建設工事が起工され、このうち大牟田市から大川市にいたる区間は暫定供用区間とされたことから、平成20(2008)年3月29日に、大牟田ICから大川中央IC(23.8km)の内、高田ICから大和南ICを除く21.8kmが暫定開通し、平成21(2009)年3月14日には全区間が暫定供用されている。

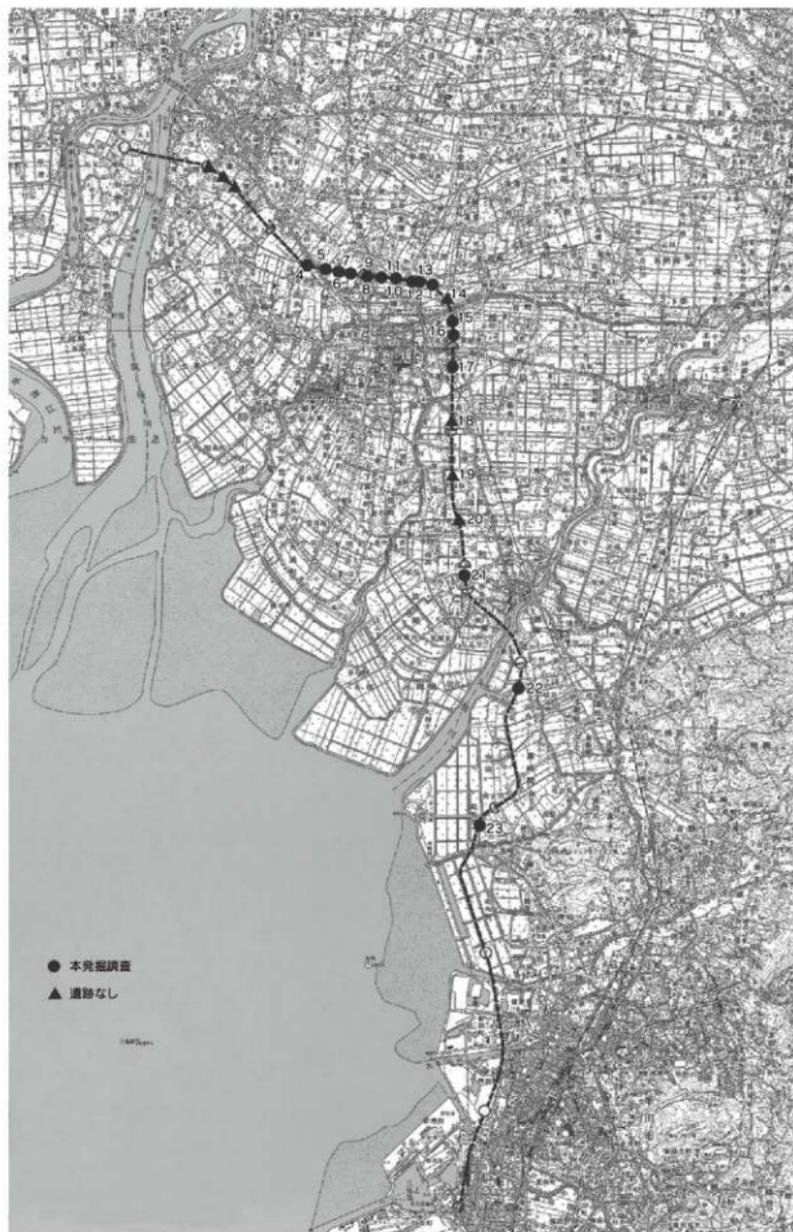
文化財調査についてはまず、平成12(2000)年11月16日付で、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所から福岡県教育庁文化財保護課に対し、この区間に係る埋蔵文化財の有無確認の依頼があり、これを受けて同課が平成15(2003)年10月6から8日に試掘調査を実施した。その結果、本調査を要する15遺跡が確認された(表1)。

本書に所収する遺跡の所在する3遺跡のうち、柳川市矢加部地区については平成15(2003)年10月6から8日に試掘調査を実施し、江戸時代の溝や土坑などが確認されたことから本調査が必要と判断された。蒲船津地区については、平成16から18年に試掘調査を実施し、平成18年3月22・23日に字水町で井戸か柱穴と思われる遺構が検出され、うち1基からは12世紀代の土器が出土した。平成18年8月17・22・23日に西ノ内地区で、土坑2基と中世後期の土器・陶磁器が発見され、それぞれ蒲船水町遺跡・蒲船津西ノ内遺跡として本調査の対象に加えられた。

矢加部町屋敷遺跡は、用地取得の終了した範囲から工事の工程にしたがって、平成16(2004)年6月15日から10月4日に矢加部町屋敷遺跡1次調査として調査区南東部から本調査を実施した後、県道西側のクリークの高架工事を行う必要が生じたため、2次調査を平成16(2004)年6月15日から10月4日に、3次調査を平成17(2005)年3月17日から4月24日に実施した。4次調査については、県道東側で柳川農林事務所が工事用地内のクリークの付け替え工事を先行して行うため、県道東側の用地内に工事用道路を設置することから西側を調査することとなり、平成



第1図 柳川市位置図



第2図 有明海沿岸道路調査地点図(1/50,000)

表1 有明海沿岸道路調査一覧

地点	市町名	大字名 (区画)	道跡名	H19.4.1 現在対象 面積 (㎡)	試掘確認調査		発掘調査		報告書作成		道跡の概要	
					試掘年度	未試掘 面積 (㎡)	調査 年度	面積 (㎡)	作成年度	面積 (㎡)	主な時代	特記事項
1	大川市	津(江点～皇道 新田横津線間)		12,900	H18	0						試掘済み、道跡無し
2	大川市	津(船道新田横 津線～大字境)		25,700	H14・15・18	0						試掘済み、道跡無し
3	大川市	幡保		15,400	H15・18	0						試掘済み、道跡無し
4	大川市	坂井	坂井長永	3,820	H17・18	0	H17	1,820	H19	3,020	鎌倉時代	・条里の区画溝
							H18	1,200				
5	柳川市	西蒲池	西蒲池古塚	14,200	H16	0	H16	4,390	H19	14,200	平安時代	・条里の区画溝
							H17	9,460			鎌倉時代	・黒土土器
							H18	350			室町時代	
6	柳川市	西蒲池	西蒲池付監坊	4,400	H16	0	H17	3,400	H19	3,400	古墳時代	・条里の区画溝
											奈良時代	
7	柳川市	西蒲池	西蒲池古溝	4,530	H16	0	H17	4,530	H19	4,530	平安時代	・条里の区画溝と畑紋跡
8	柳川市	西蒲池	西蒲池下里	2,800	H16	0	H17	2,800	H19	2,800	平安時代	・条里の区画溝
9	柳川市	東蒲池	東蒲池櫻町	5,700	H14	0	H15	5,700	H16	5,700	弥生時代	・中世の集落道跡
											古墳時代	
											平安時代	
											鎌倉時代	
10	柳川市	東蒲池	東蒲池大内曲り	1,200	H16	0	H17	1,200	H18	1,200	古墳時代	・中世の集落道跡
											平安時代	
											鎌倉時代	
11	柳川市	久加部	久加部町屋敷	4,855	H15・16	0	H16	2,040	H17整理	1,500	江戸時代	・江戸時代の町屋跡
							H17	430	H18	880	明治時代	・水田境の銘入り土器
							H18	1,820	H21	860		・鉄湯釜の跡型とるつば
							H19	565(860)	(H22～23)	560		・街道側溝らしい大溝
12	柳川市	久加部	久加部五反田	4,000	H17	0	H18	4,000	H20	4,000	戦国時代	・戦国時代の集落道跡
											江戸時代	
13	柳川市	久加部	久加部南屋敷	10,470	H16	0	H17	6,000	H20	10,470	戦国時代	・戦国時代の集落道跡
							H18	4,470			江戸時代	
14	柳川市	三崎町柳河		4,700	H18	0						試掘済み、道跡無し
15	柳川市	三崎町蒲船津	蒲船津江頭	9,700	H16	0	H17	4,700	H20	4,800	弥生時代	・弥生～中世の複合集落道跡
							H18	3,300	H21	3,300	古墳時代	・弥生時代後期の
							H19	1,700	(H22)	(1,600)	古代・中世	・礎石(圓立柱建物の柱の基礎)多数
16	柳川市	三崎町蒲船津	蒲船津水町	4,500	H17	0	H19	(1,400)	(H22)	4,500	弥生時代	・弥生～中世の複合集落道跡
								4,500			鎌倉時代	
17	柳川市	三崎町蒲船津	蒲船津西ノ内	2,280	H16～18	0	H18	2,280	(H22)	2,280	戦国時代	・戦国時代の集落道跡
18	柳川市	大船町徳益		4,500	H17・18	0						試掘済み、道跡無し
19	柳川市	大船町豊原		25,000	H17・18	0						試掘済み、道跡無し
20	柳川市	大船町塩塚	塩塚地蔵面	22,740	H17～19	0					江戸時代	一部本調査必要(塩塚地蔵面道跡)
												一部試掘済み、道跡無し
21	柳川市	大船町家	慶長本土居跡	64,500	H16～18	0			H20		江戸時代	・柳川市指定史跡慶長本土居跡
												一部試掘済み、道跡無し
22	高田町	黒崎間	新開村旧記石碑	-	0		H14		H20	-	江戸時代	・敷根築工法(草など植物を敷く工法)
							H19	-				
23	高田町	黒崎間	黒崎堤防	300	0		H16	移設作業 300	H20	300	江戸時代	・福岡県指定史跡旧柳川藩千石道跡

18(2006)年5月9日から平成19(2007)年1月に着手した。最後に、5次調査を平成19年6月15日から開始し、9月25日に埋め戻しを終了し、矢加部町屋敷遺跡の調査が完了した。

蒲船津水町遺跡は柳川市三橋町蒲船津534-1・2・11～14番地を対象範囲とした約1,800㎡を、平成19(2007)年5月10日から8月31日にかけて調査した。

蒲船津西ノ内遺跡は柳川市三橋町蒲船津314-1～4・5A番地を対象とした900㎡を、平成18(2006)年12月4日から平成19(2007)年1月31日にかけて調査した。

これらの調査成果の報告書作成業務については、矢加部町屋敷遺跡は、平成16年度の1次調査の遺構と遺物、平成19年度の5次調査の遺物について行い、蒲船津水町遺跡と蒲船津西ノ内遺跡の報告内容と合本して報告することで協議が整った。なお、福岡県教育委員会の組織改変により、これまで文化財保護課で行っていた国の機関等の受託業務は、平成23年度以降九州歴史資料館で実施することとなった。

## 2. 調査の組織

遺跡の発掘調査・整理報告に関わる平成16年から19年度、21年から23年度の関係者は次のとおりである。

### 国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
所 長	増田 博行	増田 博行 (～H17.8.1) 小口 浩 (H17.8.2～)	小口 浩	小口 浩	森山 誠二	山本 悟司	山本 悟司 (～H23.8.31) 富山 英範 (H23.9.1～)
副 所 長	後田 徹 徳留 忠	後田 徹 佐々木英明	春田 義信 佐々木英明 (～H19.6.30) 桑林 正純 (H19.7.1～)	春田 義信 佐々木英明	白川 逸喜	白川 逸喜 柳田 誠二	白田 雅彦 柳田 誠二
建 設 監 督 官	松尾淳一郎	松尾淳一郎 今村 隆浩	今村 隆浩 鶴林 保彦	今村 隆浩 鶴林 保彦	山北 賢二 鶴林 保彦	山北 賢二 柴尾 照雄	伊藤 康弘 柴尾 照雄
調 査 第 二 課 長	小椎尾 優	鈴木 昭人	鈴木 昭人	鈴木 昭人	今里 英美	今里 英美	清時 義雄
調 査 課 長		鈴木 昭人	鈴木 昭人	鈴木 昭人	今里 英美	今里 英美	清時 義雄
調 査 係 長	長友 浩信	松本 厚廣	松本 厚廣 (～H18.9) 川原 一哲 (H18.10～)	川原 一哲	矢野 幸樹	藤本 厚志	藤本 厚志
専 門 員	相島 伸行	相島 伸行	伊東 良二	伊東 良二	田中 博明	田中 博明	北御門繁己 大川優一郎 猿澤宗一郎
国 土 交 通 技 官	柳瀬 純矢	柳瀬 純矢	谷川 勝	谷川 勝	猿澤宗一郎	猿澤宗一郎	猿澤宗一郎
工 務 課 長	田中秀之進	堀 泰雄	堀 泰雄	堀 泰雄	今田 一典	山口 隆	山口 隆

## 福岡県教育委員会

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
	(発掘調査)	(発掘調査)	(発掘調査・整理)	(発掘調査・整理)	(整理報告)	(整理報告)	(整理報告)
<b>総括</b>							
教 育 長	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一	杉光 誠	
教 育 次 長	三瓶 寧夫	清水 主輔	清水 主輔	橋崎洋二郎			
総 務 部 長	清水 主輔	中原 一憲	大島 和寛	大島 和寛			
総務部副理事兼 文化財保護課長			磯村 幸男	磯村 幸男			
文化財保護課長	井上 祐弘	井上 祐弘	井上 祐弘		平川 昌弘	平川 昌弘	
副 課 長			佐々木隆彦	佐々木隆彦	池邊 元明	伊崎 俊秋	
参事兼課長技術補佐	川述 昭人		池邊 元明	池邊 元明	小池 史哲	小池 史哲	
	木下 修		小池 史哲	小池 史哲			
参 事			新原 正典	新原 正典			
参事兼課長補佐	久芳 昭文		安川 正郷	中園 宏			
課 長 補 佐		安川 正郷			前原 俊史		
<b>庶務</b>							
参事補佐兼管理係長	古賀 敏生						
管 理 係 長		船尾 茂	井手 優二	井手 優二	富永 育夫	富永 育夫	
事 務 主 査	宮崎 志行	宮崎 志行	野中 顯		藤木 豊	藤木 豊	
主 任 主 事	末竹 元	石橋 伸二	洲上 大輔	洲上 大輔	近藤 一崇	近藤 一崇	
	秦 俊二	末竹 元	柏村 正央	柏村 正央	野田 雅	内山 礼衣	
			小宮 辰之	小宮 辰之	仲野 洋輔	仲野 洋輔	
			野田 雅	野田 雅			
<b>調査・整理・報告</b>							
参事補佐兼調査第二係長	中間 研志	中間 研志	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文	
参 事 補 佐			濱田 信也	濱田 信也	新原 正典	新原 正典	
						池邊 元明	
技 術 主 査			小川 泰樹	秦 憲二	秦 憲二	秦 憲二	
主 任 技 師	秦 憲二	秦 憲二	秦 憲二	秦 憲二	秦 憲二	秦 憲二	
			進村 真之				

## 九州歴史資料館

### 総括

館 長	
副 館 長	

### 庶務

企画主幹兼総務室長	
企 画 主 査	
主 任 主 事	
主 任 主 事	
主 事	

### 整理・報告

企画主幹兼文化財調査室長	
参 事 補 佐	
文化財調査班長	
保存管理班長	
技 術 主 査	

平成23年度  
(整理報告)  
西谷 正  
南里 正美

圓城寺紀子  
塩塚 孝憲  
熊谷 泰容  
近藤 一崇  
谷川 賢治

飛野 博文  
小池 史哲  
小川 泰樹  
加藤 和成  
秦 憲二  
進村 真之

なお、発掘調査及び整理期間中には、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所・有明海沿岸道路出張所・柳川市教育委員会をはじめとする関係各位の御理解・御協力を得ることができた。特に、発掘作業員として参加された地元を中心とする多数の方々には、悪天候、悪条件の中、御協力いただいた。また、地元の方々にはひとかたならぬご理解をいただき、無事に発掘調査を終了することができた。ここに深甚の謝意を表します。

## II. 位置と環境

### 地理的環境

遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部に位置し、筑後平野南西部の有明海沿岸部に位置している。筑後平野・佐賀平野の有明粘土を基盤とする沖積地は標高10m以下の低平な平地であり、水田の灌漑・排水のためのクリークが網の目のように走る独特な景観を呈している。柳川市内は矢部川の支流である沖端川・塩塚川が東西に走っており、川の中の微高地や自然堤防上に集落が形成されている。平成17年2月5日付けで柳川市・三橋町・大和町が合併し、現柳川市となったが、合併後の市域でも最も内陸部で標高4m前後という低平地である。第3図には入っていないが、沿岸部には近世以降の干拓地が鱗状に広がっており、河口には干潟が発達している。

本書所収の矢加部町屋敷の所在する矢加部地区は柳川市の北東端の微高地に展開する村矢加部集落の南西にあり、調査地点の町矢加部は県道23号線沿いに所在する。蒲船津西ノ内遺跡・蒲津水町遺跡の所在する蒲船津地区は柳川市中心部の東に位置する。蒲船津西ノ内遺跡は微高地の中心部の国道443号沿いにあり、蒲津水町遺跡は沖端川と二ツ川に挟まれた自然堤防上に位置する。

### 歴史的環境

柳川市域では旧石器・縄文時代の遺跡は確認されておらず、集落が進出したのは弥生時代前期末以降である。市北部では蒲池遺跡群(注1)を拠点的な集落として、中期には微高地上に小集落が点在していたようだ。西蒲池扇ノ内遺跡(注2)では支石墓の上石と見られる巨石が発見されており、三鳥神社楼門前の石橋に使用された1枚石もこの巨石の1つといわれている。このほかに発掘調査の行われた弥生時代の遺跡としては、中期の磯鳥フケ遺跡(注3)や、後期の蒲船津江頭遺跡(注4)があり、後者では礎石が伴う掘立柱建物跡が多数検出されている。

古墳時代・古代の遺跡は散布地があるものの、実態のわからないものが多かったが、近年の有明海沿岸道路建設に伴う発掘調査によりわずかながら当該期の遺跡が発見されている。律令制下には市北部は三藩郡、市南・東部は山門郡に属したであろうが、その境界は不明である。平安時代に入ると柳川市東部の三橋町域は瀬高下庄に属しているが、一部は瀬高横手庄であった可能性もある。

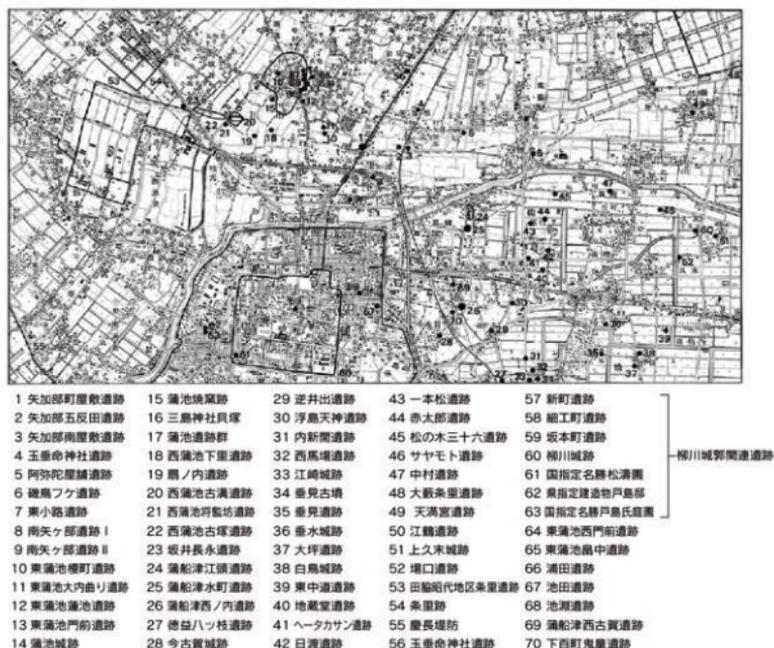
遺跡が増加するのは中世になってからである。柳川市北部地域には、蒲池氏の居城である蒲池城が造られ、城の西には東蒲池門前・西門前遺跡(注5)、南からは中世前期の東蒲池大内曲り遺

跡(注6)・東蒲池榎町遺跡(注7)が確認されている。その他にも中世後期の矢加部南屋敷遺跡(注8)などの集落や、西蒲池古塚遺跡・下里遺跡・将監坊遺跡・古溝遺跡、坂井長永遺跡など西蒲池地区で条里跡が発見されている(注9)。

戦国時代末期には、蒲池地区を本拠地として勢力を持っていた蒲池氏が滅亡し、天正15(1587)年立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三藩・下妻・山門の三郡を支配した。立花氏はその後関ヶ原の戦いで西軍に与して改易となり、替って田中吉政が筑後国主となり、慶長6(1601)年に入国した。

田中吉政は「慶長本土居」の建設、掘潮の掘削、街道整備などの多くの土木事業を行い、領国整備に努めた。慶長本土居は、慶長7年(1602)に柳川市大和町鷹尾から大川市酒見に及ぶ堤防を補強した総延長32キロメートルに及ぶ干拓堤防で、この「慶長本土居」を起点として、その後の干拓が行われることになる。掘潮は、飲用、農業用、舟運や戦時の防衛の目的で整備しており、市内の水路の総延長は、実に470キロメートルものぼる。この掘潮が現在の「水郷柳川」の景観を形成している。

本遺跡の中央を走る県道23号線は、「久留米柳川往還」と呼ばれる街道であり、田中吉政が整備



第3図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

したことから「田中道」とも呼ばれる。三橋町の柳河地区では、道路の両側に大きな溝を伴う旧状が残された部分を見ることができる。

田中氏改易後、筑後国は柳川藩と久留米藩に分断され、柳川藩は立花氏が、久留米藩は有馬氏が領有した。本遺跡の所在する矢加部地区は藩境となり、街道上に関所と藩境木が設置された。現在も藩境木跡の石碑が残されている。

#### 注

1. 福岡県教育委員会1978『福岡県遺跡等分布地図』(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編)
2. 前掲注1
3. 柳川市教育委員会2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第1集
4. 福岡県教育委員会2009『蒲船津江頭遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集  
福岡県教育委員会2010『蒲船津江頭遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集  
福岡県教育委員会2011『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第10集
5. 福岡県教育委員会にて整理中
6. 福岡県教育委員会2007『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集
7. 福岡県教育委員会2005『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集
8. 福岡県教育委員会2009『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集
9. 福岡県教育委員会2009『坂井長永遺跡(1・2次) 西蒲池古塚遺跡(1～4次) 西蒲池将監坊遺跡(1・2次) 西蒲池古溝遺跡 西蒲池下里遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集

# 矢加部町屋敷遺跡Ⅳ

## 5次調査の出土遺物

### 1次調査

### まとめ

### III. 調査の内容

#### 1. 矢加部町屋敷遺跡5次調査の出土遺物

5次調査の遺構については既報告の『矢加部町屋敷Ⅲ』で掲載しており、本書では出土遺物について報告する。5次調査では、土坑25基、大土坑1基、溝状遺構3条などを検出した。『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』において遺構だけを先に掲載しているが、出土遺物の説明の前に各遺構の時期のみ再度挙げておきたい。

1号土坑はせんじ碗と広東碗があるので18世紀後半から19世紀初頭である。

2号土坑は出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は特定できない。

3号土坑は4号土坑を切り、出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は半球形の無文磁器碗が出土していることから18世紀前葉から中葉である。

4号土坑は3号土坑に南部を切られ、東部を5号土坑に切られる。北側は4次調査東区に延び、4次調査の93号土坑に繋がる。出土遺物が少ないが、身の深い赤絵の腰丸碗が出土しているので18世紀中葉だろう。

5号土坑は4次調査の93号土坑に繋がる。南部を1号土坑に切られている。出土遺物はわずかだが、4号土坑を切ることと、氷裂文を地文とする菊花文染付から18世紀中葉だろう。

6号土坑は南東隅を7号土坑に切られる平面隅方形プランで、北側は4次調査東区に延びており、4次調査94号土坑を繋がる。出土遺物はわずかだが、出土した三鳥手の象嵌入り陶器鉢の口縁部形態から、年代は18世紀前半だろう。

7号土坑は出土遺物はわずかで、小片が多い。1・6号土坑に切られ1号溝状遺構を切ることから、18世紀中葉から19世紀中葉の間である。

8号土坑は出土遺物はわずかで、小片が多い。小型甕の口縁部形態から17世紀後半から18世紀代だろう。

9号土坑は12号土坑を切る長方形の土坑である。遺物がほとんど残っていなかったので時期を特定できない。

10号土坑は11号土坑に西端を切られて、平面略方形プランで、遺物がほとんど残っていなかったので確実性が弱い19世紀代か。

11号土坑は10号土坑を切る長方形プランで、無文の壁が直線的に緩やかに立ち上がる磁器碗が出土していることから18世紀代か。

12号土坑は1号大土坑を切り、9号土坑に北西隅を切られる。多条縞文の染付が入る蓋物が出土していることから18世紀後半か。

13号土坑は14号土坑を切る。型紙刷の端反碗染付が出土しているので19世紀中葉である。

14号土坑は13号土坑・2号溝状遺構に切ら



第4図 矢加部町屋敷遺跡調査範囲図(1/4,000)

れる。口縁下に突帯が付く摺鉢や京焼風陶器が出土していることや、内面口縁の肥厚が退化していることから18世紀前葉である。

15号土坑は出土遺物はわずかで小片が多く、年代が特定できない。

16号土坑は南東部は別の土坑かもしれない。出土遺物はわずかで小片が多いが、内面口縁部に袈裟文の入る筒形碗があるので18世紀後半だろう。

17号土坑は1号溝状遺構に近接しているが、切り合いは不明確だった。外面口縁部下に突帯が付くタイプと外面口縁部が肥厚するタイプの摺鉢が出土していることから、18世紀中葉である。

18号土坑は口縁部が玉縁状の摺鉢があり、せんじ碗が出土していることから18世紀初頭だろう。

19号土坑は北西隅をピットに切られ、南側を現代の井戸に切られており、鉄軸を外内に掛ける小型碗が出土しているので、17世紀末から18世紀後葉である。

20号土坑は南側を現代の井戸に切られており、21号土坑を切る。年代は台付皿から18世紀初頭から後葉である。

21号土坑は西側を20号土坑に切られており、1次調査29号土坑と同一遺構である。径の小さい平底の摺鉢が出土しているので、17世紀後半の遺構である。

22号土坑は遺物もほとんど残っていないかったが、18世紀中葉か。

23号土坑は18世紀中葉から19世紀中葉の口縁外面肥厚で、高台の付く摺鉢が出土しており、せんじ碗があることから18世紀中葉だろう。

24号土坑は口縁部が長い玉縁形に肥厚する摺鉢が出土していることから、17世紀後半代だろう。

25号土坑は当初24号土坑と一緒に掘り下げており、その途中で別遺構とわかったため、切り合いは不確実である。年代は特定できない。

1号大土坑は4次調査東区100・101号土坑に繋がる。12号土坑に切られており、南部には黒色土が厚く堆積しておりこれを南部上層として取り上げたが18世紀中葉から後葉の遺物の中に燻し瓦が見られた。出土遺物には18世紀前葉から中葉のものが多く出土しており、この時期に属する遺構である。19世紀中葉の遺物も一定量あるが、上層出土である。大正10年銘1銭銅貨は検出段階に上面にあったコンクリート基礎の掘り込み時の混入品だろう。

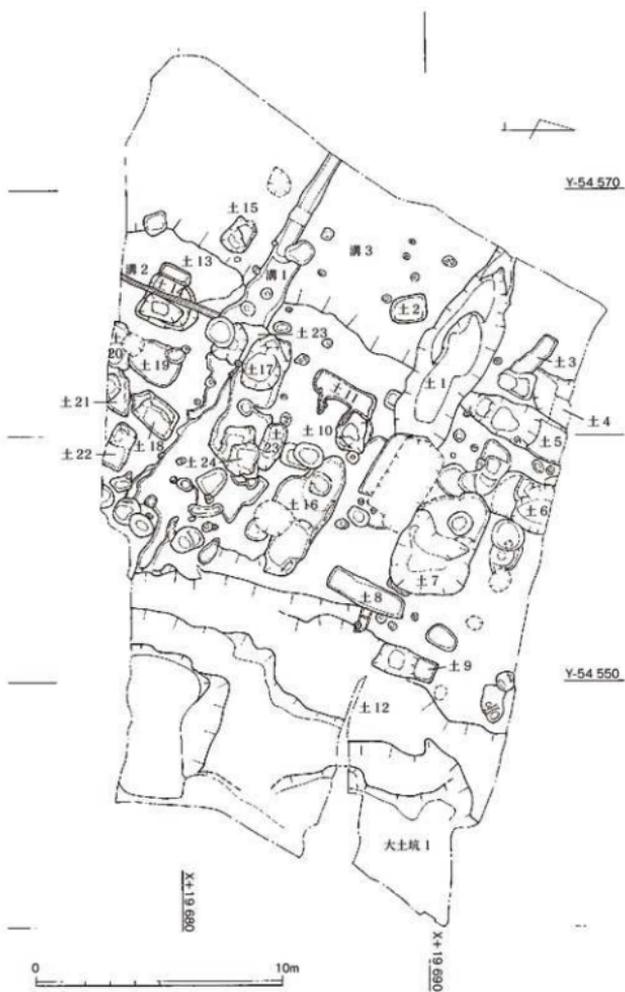
1号溝状遺構は3号溝状遺構を切り、2号溝状遺構は垂直方向に走るが、切り合いは不鮮明だった。17・23・24・25号土坑に切られていることと、草花文のモチーフから17世紀後葉から18世紀初頭のものと考えられる。

2号溝状遺構は14号土坑を切ることから、18世紀後半代の可能性が高い。

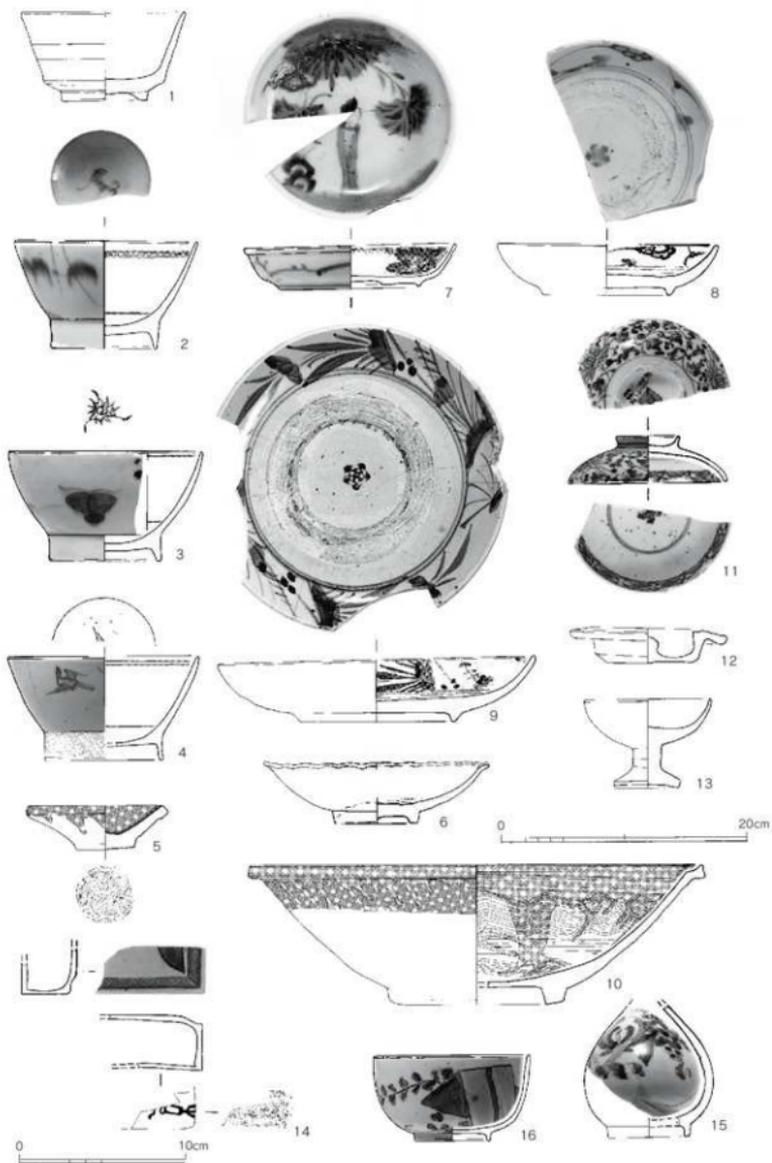
3号溝状遺構は2・15号土坑、1号溝状遺構に切られている。大振りの草花文碗や崩れた雨振り文碗が出土しており、17世紀後葉から18世紀初頭の1号溝状遺構に切られるので、17世紀後葉から末には完全に埋没している。

これより、出土遺物の説明を行うが、個々の遺物については観察表を掲載しているので、追記すべき事項のある遺物についてのみ記述する。

6図2は広東型の染付碗で、口縁部の窪んだ部分に別個体の融着があるので、焼成時に隣接する別個体に押されたために窪んだものとわかる。6図4は広東型の染付碗で、ハケ状の沈線が高



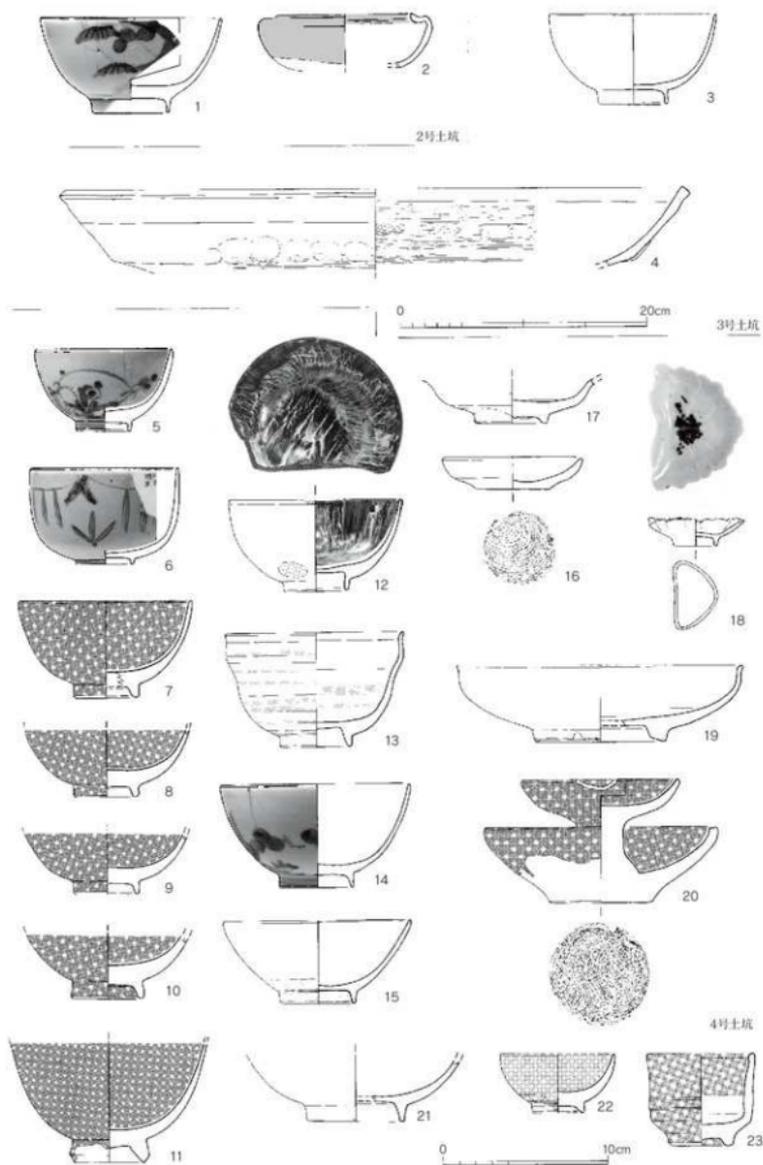
第5図 矢加部町屋敷遺跡5次調査遺構略配置図(1/200)



第6图 5次調査1号土坑出土陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3)

表2 5次調査出土土器・陶磁器観察表1

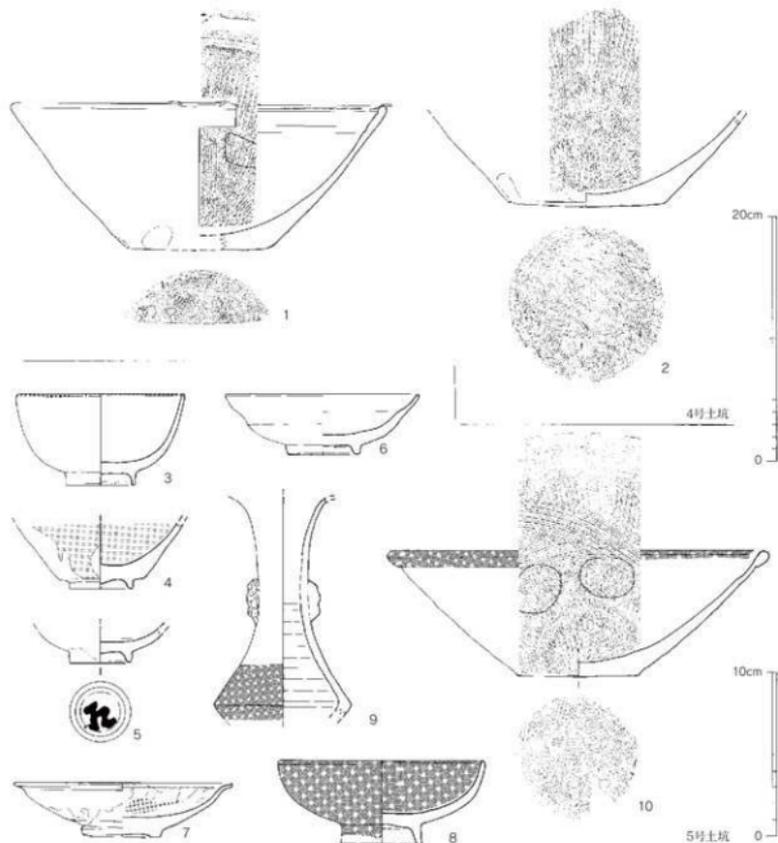
遺構名		器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰の技法	所 見		
母体番号	形状		( ) 内は元量					特定事項	推定産地	推定年代
採取番号	通称名									
土坑1 6図1	甕 杉形	口径10.0 高台径5.2 器高5.4		陶器 黄灰白色	黄灰色の灰釉を内面から外面削下位まで覆入あり	無文 高台内閉り出し	底部露胎	高台内に焼成時のひびあり	肥前	18世紀中葉
土坑1 6図2	甕 広底形	口径11.1 高台径6.4 器高6.5		磁器 灰白色	青みがかった透明釉を全面に掛ける	外面に亀文と柳文、見込みに幅輪文を染付 須弥に染みあり	覆付輪調子	外面に別個体の濃緑あり	肥前	19世紀前半
土坑1 6図3	甕 広底形	口径11.4 高台径6.7 器高6.6		磁器 灰白色	青みがかった透明釉を全面に掛ける	外面に亀文と柳文、見込みに火災宝珠文を染付 須弥に染みあり	覆付輪調子		肥前	1780 A 1810
土坑1 6図4	甕 広底形	口径11.6 高台径7.2 器高6.3		磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に赤鳥文、見込みに不明文を染付	覆付輪調子		肥前	19世紀前半
土坑1 6図5 図版1	小皿	口径8.0 底径3.5 器高2.7		陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面口縁部まで塗布 底面赤切り		底部露胎	定形 歪みあり	肥前	不明
土坑1 6図6	小皿 花弁形口縁	口径13.6 高台径5.0 器高3.7		陶器 灰白色 軟質	胎釉を内面から外面に削下位に掛ける	高台閉り出し	底部露胎 見込みに蛇ノ目輪調子		肥前か	不明
土坑1 6図7	小皿	口径12.8 高台径8.4 器高2.6		磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面に食物と人物文を染付	蛇ノ目高台 見込みに蛇ノ目輪調子	台座に砂目付着 内面に付着あり	肥前	1780 A 1860
土坑1 6図8	小皿 5寸皿	口径13.6 高台径7.8 器高3.1		磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面無文、内面割れた菊唐草文、見込みに5弁花文を染付	覆付輪調子 見込みに蛇ノ目輪調子		肥前	1820 A 1860
土坑1 6図9	中皿	口径19.2 高台径9.4 器高3.0		磁器 灰白色	黄色不貞で黄色がかかった透明釉を全面に掛ける	内面に花草文、見込みに5弁花文を染付	覆付輪調子 見込みに蛇ノ目輪調子	見込みに重ね焼き痕あり	肥前	1750 A 1810
土坑1 6図10	鉢	口径36.6 高台径14.2 器高11.4		陶器 橙褐色	外面口縁部下に鉄輪付け、内面全面に白化粧土を塗布した後を鉄器取り その上に内外口縁部にオリーブ色の灰釉を緑灰色の灰釉を体面に掛け、最後に外面口縁下を釉調子		底部露胎		肥前	1690 A 1750
土坑1 6図11	蓋	胴径9.5 つまみ径3.8 器高2.9		磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面割れた雲唐草文、内面天井部に5弁花文、裏面に鳥居を染付	つまみ上端輪調子		肥前	1710 A 1750
土坑1 6図12	蓋 土瓶蓋	胴径9.6 つまみ径1.4 器高2.1		陶器 暗紫灰色	鉄釉 上面 光沢あり		つまみ上端輪調子	内面は使用のため黒く変色	肥前	19世紀前半
土坑1 6図13	仏飯鉢	口径7.5 胴径3.8 器高5.3		磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	底部輪調子	8割残存	肥前	1690 A 1780
土坑1 6図14	水盂	—		磁器 灰白色	透明釉を外面に掛ける	上面外縁に割陶文帯、その内側に葉の一部が見られる 軟作りで、上面のみ磨削し、内底は布目が残る	不明	内面は黒で変色している	肥前	不明
土坑1 6図15	小型甕 仏花瓶	高台径(5.0) 最大径(7.8)		磁器 灰白色	透明釉を外面に掛ける	外面に蟹斗・菊文を染付	覆付輪調子		肥前	1650 A 1860
土坑1 6図16	蓋物	口径9.4 高台径4.6 器高5.1		磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	縁状の植物文と草紙文状のモチーフを赤・黒・緑彩で上絵付け 見込みのアルミナ散布は重ね焼きのためか	底部輪調子 内面口縁輪調子	9割残存	肥前	1650 A 1690
土坑2 7図1	甕	口径11.0 高台径4.8 器高5.8		磁器 灰白色	透明釉	外面は松文を染付	覆付輪調子	4割残存	肥前	1700 A 1740
土坑2 7図2	鉢	口径(8.2) 最大径(10.6)		陶器 黄白灰色 軟質	胎釉を内面口縁部から外面削下位に掛ける	口縁部が窪むのが意図的なものか不明	不明		肥前か	不明
土坑3 7図3	甕	口径10.2 高台径4.2 器高5.5		磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 黄色不貞	無文	覆付輪調子		肥前	1680 A 1700
土坑3 7図4	磁筒	口径51.0		土師質土器 ぶい・黄灰色	—	外面口縁下はナデ、胴部はオサエナデナ、割縁はハケ、内面は丁寧なハケ	不明	内面は変色なし、外面は煤付着	在池	不明
土坑4 7図5	小型甕	口径8.4 高台径3.3 器高5.0		磁器 灰白色	暗黄色がかかった透明釉全面掛け	外面に草文を染付	覆付輪調子		肥前	1700 A 1740
土坑4 7図6	甕 半球形	口径9.0 高台径3.4 器高5.9		磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 黄色不貞	外面に赤絵で注連縄文に羽子板と花文、緑彩で葉文を上絵付け	不明		肥前	1780 A 1810
土坑4 7図7	甕	口径10.6 高台径4.0 器高5.9		陶器 黄灰白色	胎釉を全面に掛ける	無文	覆付輪調子		肥前	1690 A 1780
土坑4 7図8	甕	高台径3.9		陶器 灰白色	胎釉を全面に掛ける	無文	覆付輪調子		肥前	1690 A 1780



第7図 5次調査2～4号土坑出土土器・陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3)

台外面にある。6図6は花弁形口縁の白磁の小皿で、見込みに重ね焼きの痕跡あり。胎にややざらつきがあることから、肥前産でない可能性もある。6図8は染付の5寸皿で、高台内部にカナナ痕が残る。6図9は染付の中皿で、見込みの重ね焼きの痕跡は幅が広く、高台径が異なるので、別の種類の個体を重ねたとわかる。6図14は水滴で、内面の底面には板作りの際の布目跡があり、そこに墨書がある。判読できないが、成形した後では書くことができないうえに、人目に触れることもなくなるので、陶工が書いたものだろう。

7図2は蓋物の鉢で、口縁が窪むのは意図的なものではなく焼成時のへたれの可能性もある。7図4は土師質土器の焙烙で実測図は接合しない2個体の図上接合である。7図15は陶器の碗で、胴下位から外底に鉄軸ではなく鉄漿が掛かる。7図16は土師質の小皿で、火を受けて赤変



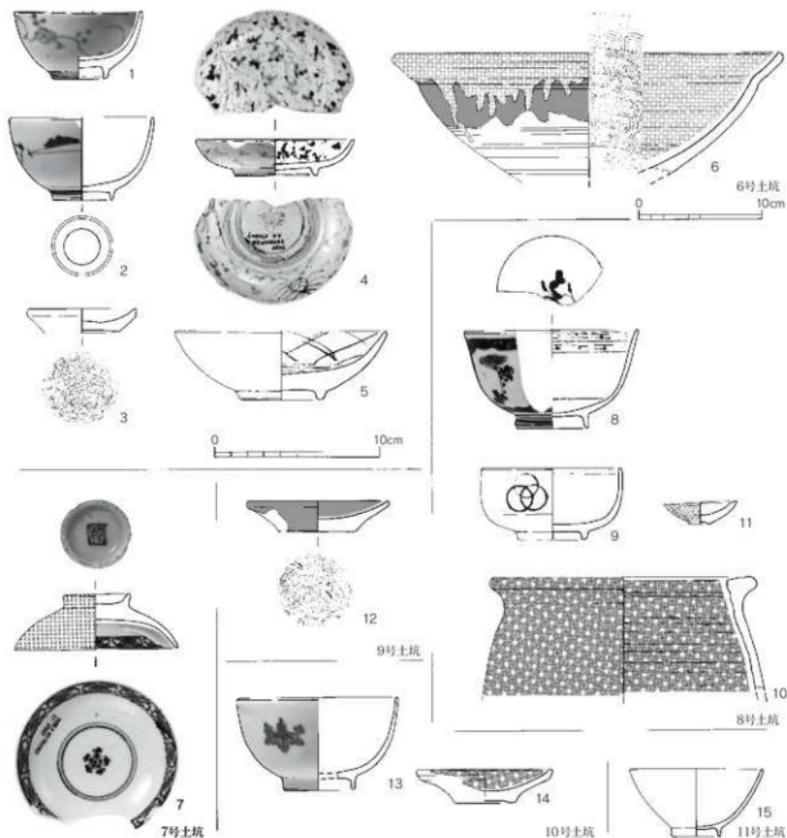
第8図 5次調査4・5号土坑出土陶磁器実測図(1・2・10は1/4、他は1/3)

表3 5次調査出土土器・陶磁器観察表2

遺物名 神居番号 図面番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見			
							特記事項	推定産地	推定年代	
土坑4 7図9	碗	高台径4.0	陶器 灰白色	黒釉を全面に掛ける	無文	覆付輪漕ぎ		肥前	1690 A 1780	
土坑4 7図10	碗	高台径4.4	陶器 灰白色	黒釉を全面に掛ける	無文	覆付輪漕ぎ		肥前	1690 A 1780	
土坑4 7図11	碗 梨蓋手	高台径4.2	陶器 灰白色	黒釉を高台以外全面に掛ける	無文	高台露胎		肥前	1690 A 1780	
土坑4 7図12	碗 蟹手	口径10.1 高台径4.0 器高5.6	陶器 暗茶褐色	白化粘土を外周は丸文、内面は打ち刷毛目掛けした後、透明釉を全面に掛ける		覆付輪漕ぎ		肥前	1690 A 1740	
土坑4 7図13	碗 新酒形	口径10.8 高台径4.4 器高6.9	陶器 暗黄灰白色	内外面白化粘土を刷毛掛けした後、透明釉を全面に掛ける		覆付輪漕ぎ		肥前	不明	
土坑4 7図14	碗	口径11.6 高台径4.6 器高7.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に樹文を呉須染付	覆付輪漕ぎ		長谷見	1680 A 1740	
土坑4 7図15	碗	口径11.5 高台径4.6 器高5.0	陶器 黄灰白色	内面から外面割下位まで透明釉を掛け、割下位から高台まで鉄漿塗布		覆付輪漕ぎ		肥前	18世紀前半	
土坑4 7図16	小皿	口径6.8,4 底径4.5 器高1.9	土師質土器 黄褐色～褐色	—	外面赤切り	不明		5割残存 赤染している	在地	不明
土坑4 7図17	小皿	高台径4.4	陶器 灰白色	オリーブ色の灰釉を高台以外全面に掛ける	外底削り出し	底面露胎 見込み焼ノ目輪漕ぎ		肥前	1690 A 1780	
土坑4 7図18	小皿 変形小皿 蟹形	長軸7.9 短軸5.6 器高1.6	磁器 完形のため不明	透明釉 全面	内面に羽の筋が墨押し彫刻され、中央に呉須掛け、高台は隅丸三角形赤切り面土の墨押し成型	覆付輪漕ぎ	完形	肥前	不明	
土坑4 7図19	小皿	口径17.4 高台径8.0 器高4.7	陶器 濃黄灰白色	黒釉を全面に掛ける	高台横に鉄線あり	覆付輪漕ぎ 見込み焼ノ目輪漕ぎ		肥前	不明	
土坑4 7図20	灯明受皿	口径9.6 最大径14.2 底径6.4	陶器 暗褐色	鉄釉を内面から新まで	外底は赤切り 口縁部の打ち欠いた部分が黒く変色している	割下平漕ぎ		肥前	不明	
土坑4 7図21	碗	高台径5.8	陶器 黄灰白色	内外面白化粘土を刷毛掛けした後、透明釉を高台以外全面に掛ける 貫入あり		底面露胎 見込み焼ノ目輪漕ぎ		肥前	1650 A 1690	
土坑4 7図22	小皿碗	口径7.0 高台径3.2 器高3.6	陶器 灰白～褐色灰白色 で敷貫	オリーブ色の灰釉を全面に掛け、口縁部に2度掛け		覆付輪漕ぎ		肥前	1690 A 1780	
土坑4 7図23	小皿鉢 香炉か	口径6.6 高台径4.0 器高5.6	磁器 灰白色	緑釉を内面割中位から外面全面に掛ける	外面に帯状の突部あり 口縁部は内側に返りがつく	覆付輪漕ぎ・砂目掛 付着		肥前	不明	
土坑4 8図1	摺鉢	口径30.4 底径12.0 器高12.0	陶器 橙～暗紫灰色	無釉	内側に折り返す口縁部の一部を逆に外側に返して注口を作る 内面磨り目11本単位 外底赤切り	底面露胎 外面割下位と見込みに胎土目跡2つあり		肥前	1620 A 1650	
土坑4 8図2	摺鉢	底径12.8	陶器 暗橙褐色～暗紫 灰色	無釉	内面磨り目12本単位 外底赤切り	底面露胎 外面割下位に胎土目跡7つあり 見込みは不鮮明		肥前	1620 A 1690	
土坑5 8図3	碗	口径10.2 高台径4.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	口縁あり	覆付輪漕ぎ		肥前	1700 A 1740	
土坑5 8図4	碗 鉢形	高台径3.8	陶器 にぶい灰黄白色	暗茶褐色の灰釉を内面から外面割中位に掛ける	無文 高台内削り出し	高台露胎		肥前	1650 A 1690	
土坑5 8図5	小皿	高台径3.8	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に墨書あり	底面露胎 見込み焼ノ目輪漕ぎ		肥前	不明	
土坑5 8図6	小皿	口径11.8 高台径4.4 器高3.7	陶器 黄灰白色	透明釉を高台以外の全面に掛ける		高台露胎 見込み焼ノ目輪漕ぎ		肥前	1690 A 1780	
土坑5 8図7	小皿	口径13.2 高台径4.7 器高3.3	陶器 灰白色	発色不良で灰白から透明釉を高台以外全面に掛け、緑灰色の灰釉を流し掛け		高台露胎 見込み焼ノ目輪漕ぎ部に胎土目跡4つあり		肥前	1690 A 1780	
土坑5 8図8	碗	口径12.6 高台径4.9 器高5.2	陶器 灰白色	黒釉を高台以外全面に掛ける	無文 高台内削り出し	高台露胎 見込み焼ノ目輪漕ぎ部に鉄線塗布		肥前	不明	
土坑5 8図9	瓶 仏花瓶	最大径8.2	陶器 灰白～褐色灰白色	割下に鉄釉を掛けた後、透明釉を胴部から割下位に掛ける 胴部の耳はモチーフが彫れている		—		透明釉は発色 不良で灰白色	肥前	1650 A 1690
土坑5 8図10	摺鉢	口径31.0 底径10.0 器高10.3	陶器 暗赤紫灰色	口縁部のみ鉄釉	内面磨り目12本単位 外底赤切りで、外縁をナデている	底面露胎 外面割下位と見込みに胎土目跡8つあり		肥前	1650 A 1690	

しているが、焼成時のものか2次の加熱によるものか不明である。7図17は陶器の小皿で、見込みの蛇ノ目軸剥ぎの重ね焼き痕部分に軸が付着している。7図19は陶器の中皿で、蛇ノ目軸剥ぎ部は黒軸の残りのため茶褐色を呈しているのであって、鉄漿塗布ではない。重ね焼き痕跡の部分に軸が付着している。7図20は陶器の灯明受皿で、大型の特異なものだが、胎は肥前のものである。口縁部の打ち欠いた部分が黒く変色しているので、本来注口が付いていた部分が欠損した後も使用している。

8図1・2は陶器の摺鉢で、1は通常この器形ならば口縁部に鉄軸が掛かるが、間違いなく鉄軸がない。8図5は陶器の碗で、外底に墨書が入るが、判読できない。8図7は陶器の小皿で、畳付に胎土目跡の痕跡が4つわずかに残る。8図9は仏花瓶で、焼成不良で、一部赤化している。



第9図 5次調査 6～11号土坑出土陶磁器実測図(6は1/4、他は1/3)

表4 5次調査出土土器・陶磁器観察表3

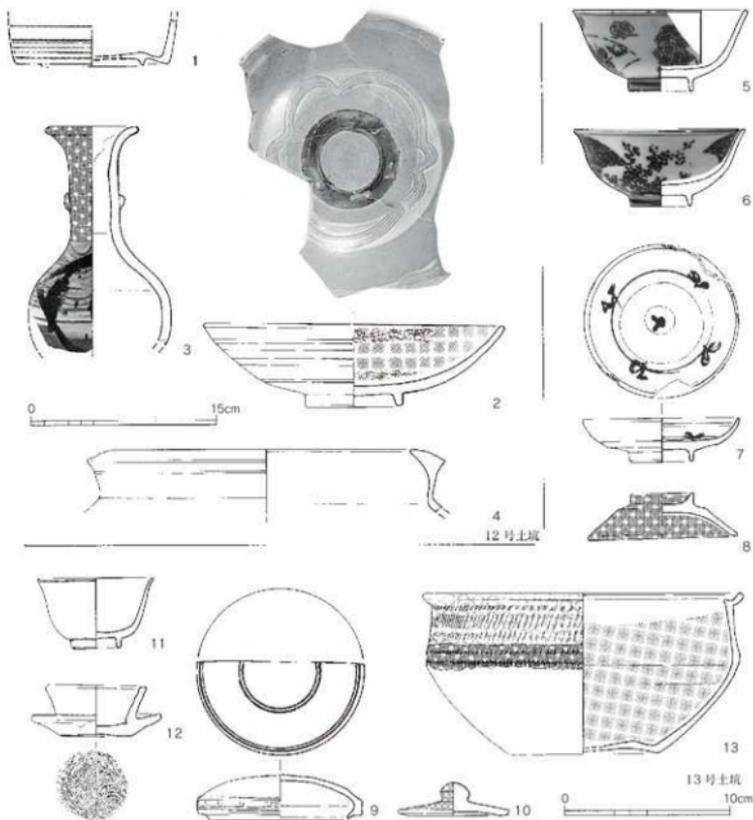
遺物名 検出番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の産地	胎色	調整・整形・装飾技法	装飾の技法	所 見			
							特記事項	推定産地	推定年代	
土坑6 9図1	小碗 口径7.8 底径3.4 器高4.2		磁器	灰色のため不明	発色不具の透明釉を全面に掛ける	外面に菊文を呉須染付	襷付輪割ぎ	完形	表裏見	1750 A 1770
土坑6 9図2	小碗 口径8.8 高台径3.6 器高5.0		磁器	灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に菊文文と折枝菊文を呉須染付	襷付輪割ぎ 斜目脚付き		裏面	1690 A 1720
土坑6 9図3 図版1	小皿 口径6.6 底径4.6 器高1.6		土師質土器 にふいぬ黄灰色	—	外底糸切り	不明	不明	ほぼ定形 底面が窪みしている	在地	不明
土坑6 9図4	小皿 口径9.6 高台径5.0 器高2.2		磁器	灰白色	発色不具の透明釉を全面に掛ける	外面に花文と折枝菊文を呉須染付	襷付輪割ぎ		裏面	1700 A 1730
土坑6 9図5	小皿 口径12.8 高台径5.0 器高4.2 5寸皿		磁器	灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不具	内面に2重斜格子文を呉須染付 呉須不具	襷付輪割ぎ 見込み 蛇ノ目輪割ぎ 下にアルミナ塗布		表裏見	1750 A 1810
土坑6 9図6	皿 口径32.0		陶器	橙褐色	内面に三鳥手の東洋 灰白～灰白褐色を呈する胎の内面から外面口縁部に掛けられている	外面体部下下に鉄葉ハケ掛け、発色不具で 灰白～灰白褐色を呈する胎の内面から外面口縁部に掛けられている	—		不明	不明
土坑7 9図7	蓋 新径9.9 つまみ径4.2 器高3.2		磁器	灰白色	透明釉を内面と高台内面に、外面に青磁釉を掛ける	外面は無文、内面口縁部は雲文帯文、内面天井部は5弁花文、裏面は二重蓮に「濃呉須染付	つまみ上端輪割ぎ		裏面	1770 A 1780
土坑8 9図8	碗 口径10.6 高台径4.6 器高6.0 福足形		磁器	灰白色	透明釉全面掛け	外面に引引きの意匠に寄芝文と欠縁のため不明なモチーフが交互に描かれ、見込みにも寄芝文、内面口縁部には「工」の字列が2段呉須染付されている	襷付輪割ぎ		裏面	1850 A 1860
土坑8 9図9	鉢 蓋物 口径8.3 高台径4.1 器高4.4		磁器	灰白色	透明釉全面掛け	外面に3つの門文と対面に福文を呉須染付	襷付輪割ぎ		裏面	18世紀後半 19世紀中葉
土坑8 9図10	小皿 口径16.0		陶器	黄灰白色	内外に鉄粉焼掛け	内面クズリ、外面カキ目状の横ナデ	口唇部輪割ぎ		小石原	不明
土坑8 9図11	紅皿1 口径4.5 高台径1.4 器高1.4 紅皿		磁器	完形のため不明	透明釉 内面から 外面口縁部	摺押し成型で、外面菊文文を陶刻する	底面露胎	完形	裏面	不明
土坑9 9図12	小皿 口径9.6 底径4.6 器高1.9		陶器	橙褐色	鉄粉を内面から外面に胴中に掛ける	外底糸切り	底面露胎		裏面	1690 A 1750
土坑10・16 9図13	碗 口径9.7 高台径(4.3) 器高5.7		磁器	灰白色	透明釉全面掛け	外面に楓文がコンニャク印呉須染付	襷付輪割ぎ		裏面	1700 A 1740
土坑10 9図14	小皿 口径8.2 底径3.6 器高2.1		陶器	粉橙灰褐色	鉄粉を内面から外面に胴中に掛ける	外底糸切り	底面露胎		裏面	1690 A 1750
土坑11 9図15	小型碗 口径8.0 高台径3.0 器高4.1		磁器	灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	襷付輪割ぎ		裏面	不明
土坑12 10図1	鉢 蓋物 高台径(6.0)		磁器	灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に福文を呉須染付	襷付輪割ぎ	襷付が細かく濃縮へたれている	裏面	1740 A 1780
土坑12 10図2	小皿 口径18.0 高台径6.0 器高5.2		陶器	黄白色	内面に白化粒を掛け、口縁部と胴下位を残して焼き取りし、残った部分を膠状に焼き取りする。見込みは蛇ノ目状に釉を焼き取り、鉄葉を塗布する。外面にも白化粒を掛ける。		襷付輪割ぎ	見込みの蛇ノ目状輪割ぎ部に斜目脚あり	裏面	1690 A 1780
土坑12 10図3	碗 口径5.7		陶器	粉橙茶褐色	胴中位まで白化粒を刷毛掛けし、膠状焼き取りし、釉を流し掛けたらうがに口縁から胴部は鉄粉を掛け、耳は豆状で、形状を成していない。	—	—		裏面	1650 A 1690
土坑12 10図4	蓋 口径29.0		陶器	にふい灰色	内外鉄粉で発色不具	外面口縁部は接合部の調整不具でひびが入っている	口唇部は輪割ぎ その上に貝目脚あり		裏面	17世紀後半
土坑13 10図5	碗 口径(10.6) 高台径4.0 器高5.0		磁器	灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にコバルト染付で桜文文と菊文・月を描いた福文と七宝文を施す	襷付輪割ぎ 見込み 蛇ノ目輪割ぎ	4割残存	裏面	19世紀後半
土坑13 10図6	碗 口径10.4 高台径3.8 器高4.7		磁器	灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にコバルト染付で花文と扇吉栗形文を描く	襷付輪割ぎ 見込み 蛇ノ目輪割ぎ	9割残存	裏面	19世紀後半
土坑13 10図7	小皿 口径9.4 高台径4.0 器高2.6 5寸皿		磁器	灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に花弁文を染付	襷付輪割ぎ 見込み に蛇ノ目に輪割ぎ 後アルミナ塗布		口縁部に打ち欠きと風変 表裏見	1680 A 1740
土坑13 10図8	蓋 新径9.2 器高2.8 つまみ径3.8		磁器	灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	つまみ上端輪割ぎ	胴部に打ち欠きと風変付存 9割残存	裏面	1700 A 1780
土坑13 10図9	蓋物 新径10.0 器高2.7		磁器	灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に雲文、上面に折枝を呉須染付	受け部輪割ぎ		裏面	不明

8図10は陶器の摺鉢で、全体に赤みをおびているので、焼成が強すぎたためだろう。

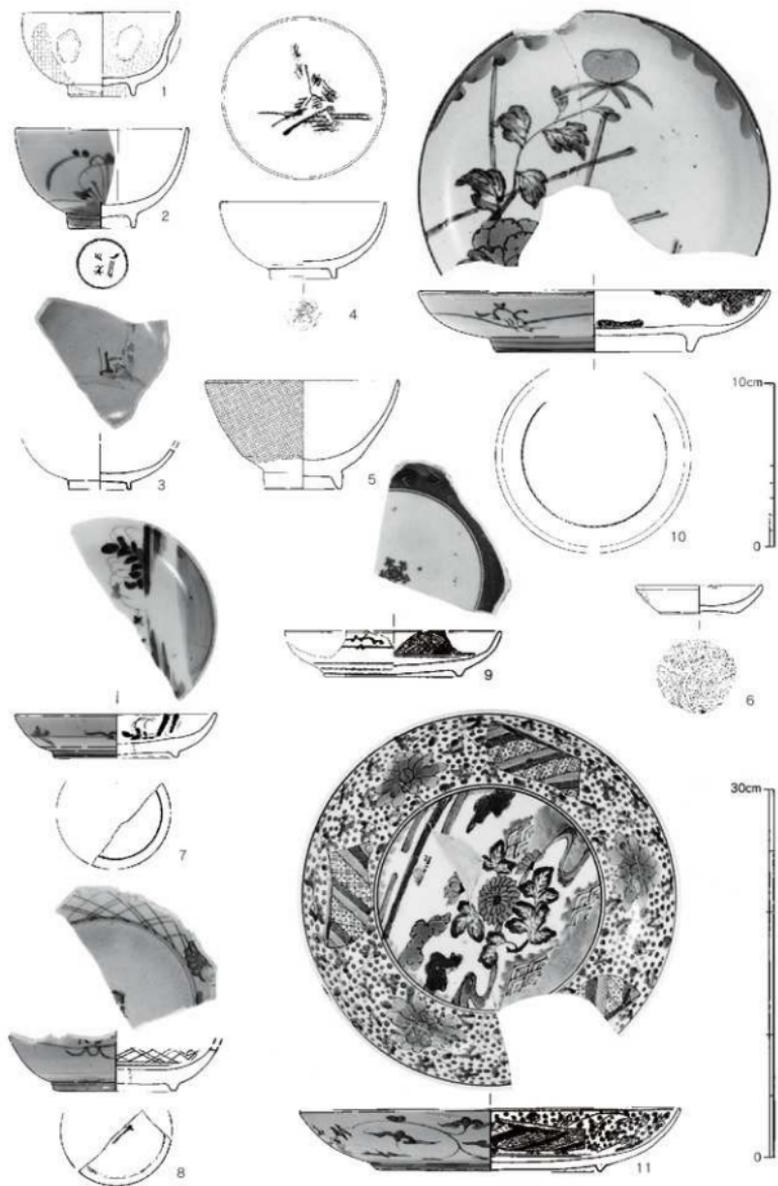
9図4は染付の小皿で、発色不良で乳白色を呈し、軸切れも起こしている。9図6は陶器の皿で、発色不良のため軸が灰白～灰白褐色を呈しており、本来の軸調がわからない。

10図1は磁器の筒形碗か蓋物の鉢で、畳付が細かく剥離しているのは焼き台から外した時のものだろう。10図7は磁器の小皿で、口縁部に打ち欠き部分に黒変があるので、灯明皿として使用されている。10図8は磁器の碗蓋だが、裾部の打ち欠き部に煤が付着しているので、本来蓋だが、灯明皿として転用されたことがわかる。10図10は陶器の土瓶蓋で、いわゆる肥前の青土瓶であり、受け部の痕跡が残らない程に丁寧に打ち欠いて急須蓋状に加工している。10図13は低火度の施釉陶器の行平鍋である。把手は接合痕跡が残る。

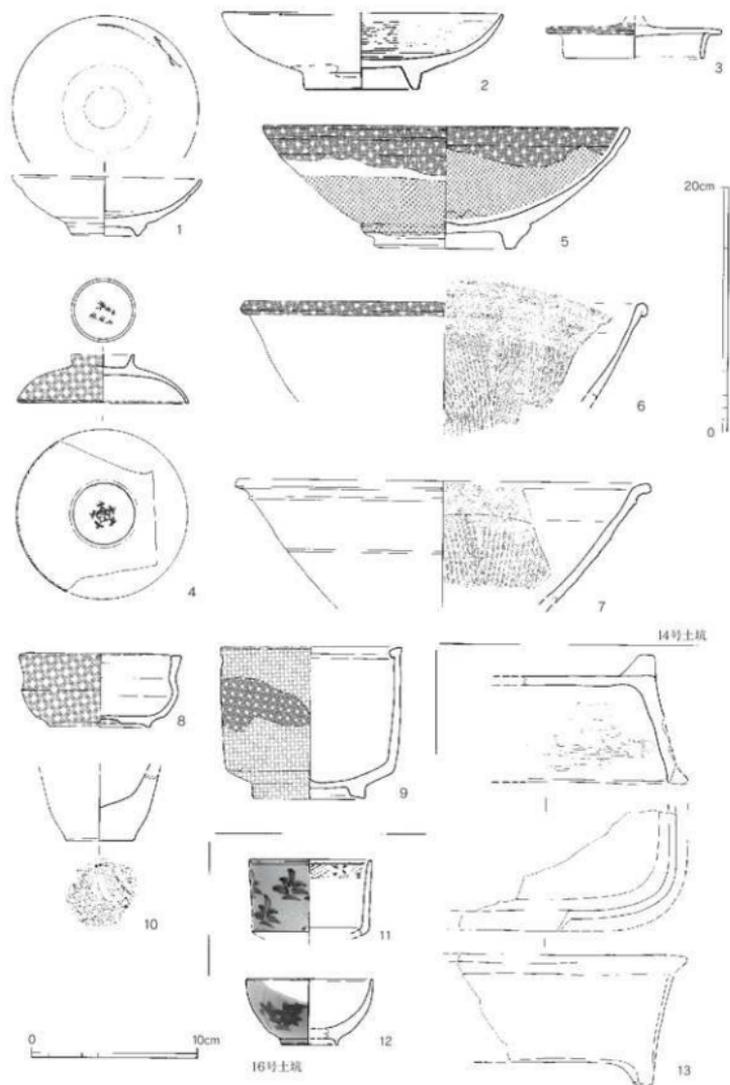
11図3は陶器の碗で、外底に円文などの刻印はない。11図9は染付の5寸皿で、外底のハリ



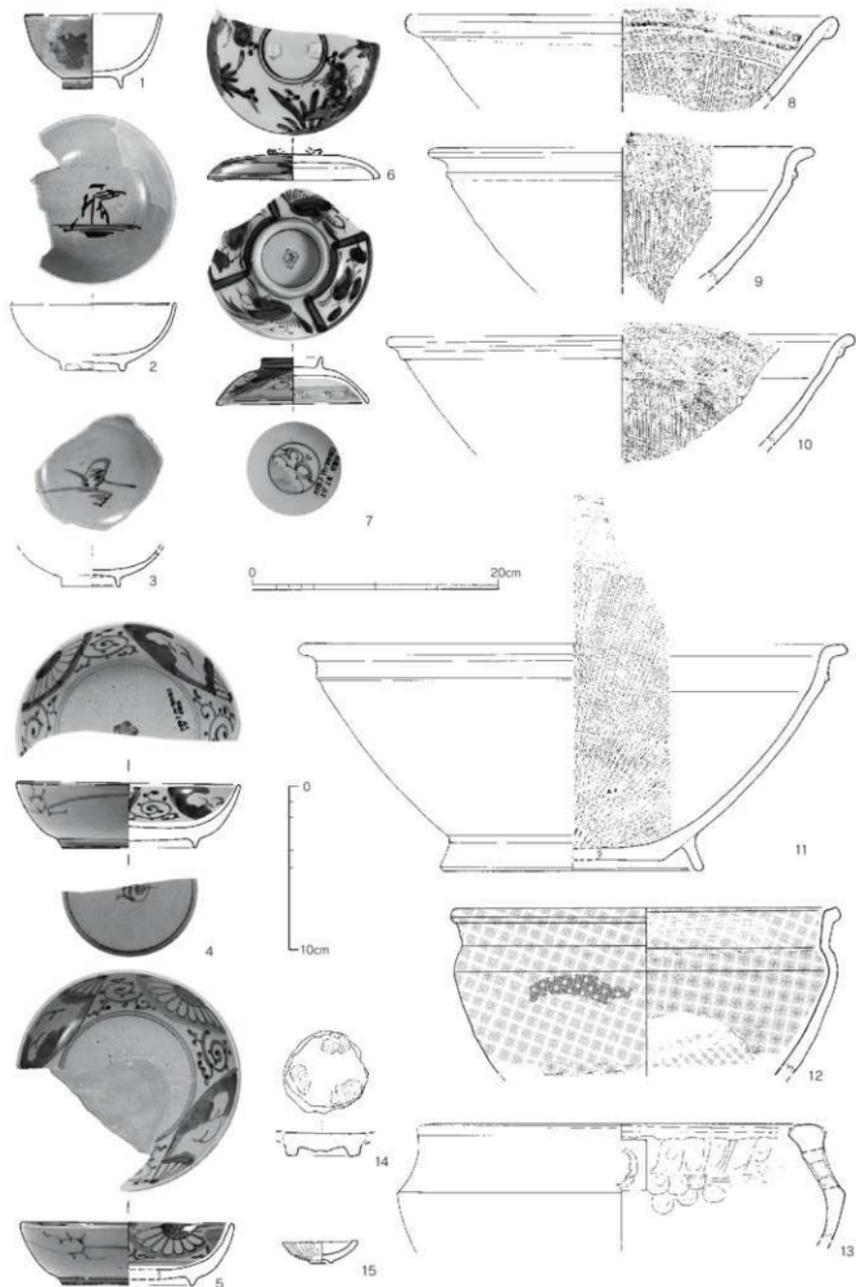
第10図 5次調査12・13号土坑出土陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3)



第11図 5次調査14号土坑出土陶磁器実測図(11は1/4、他は1/3)



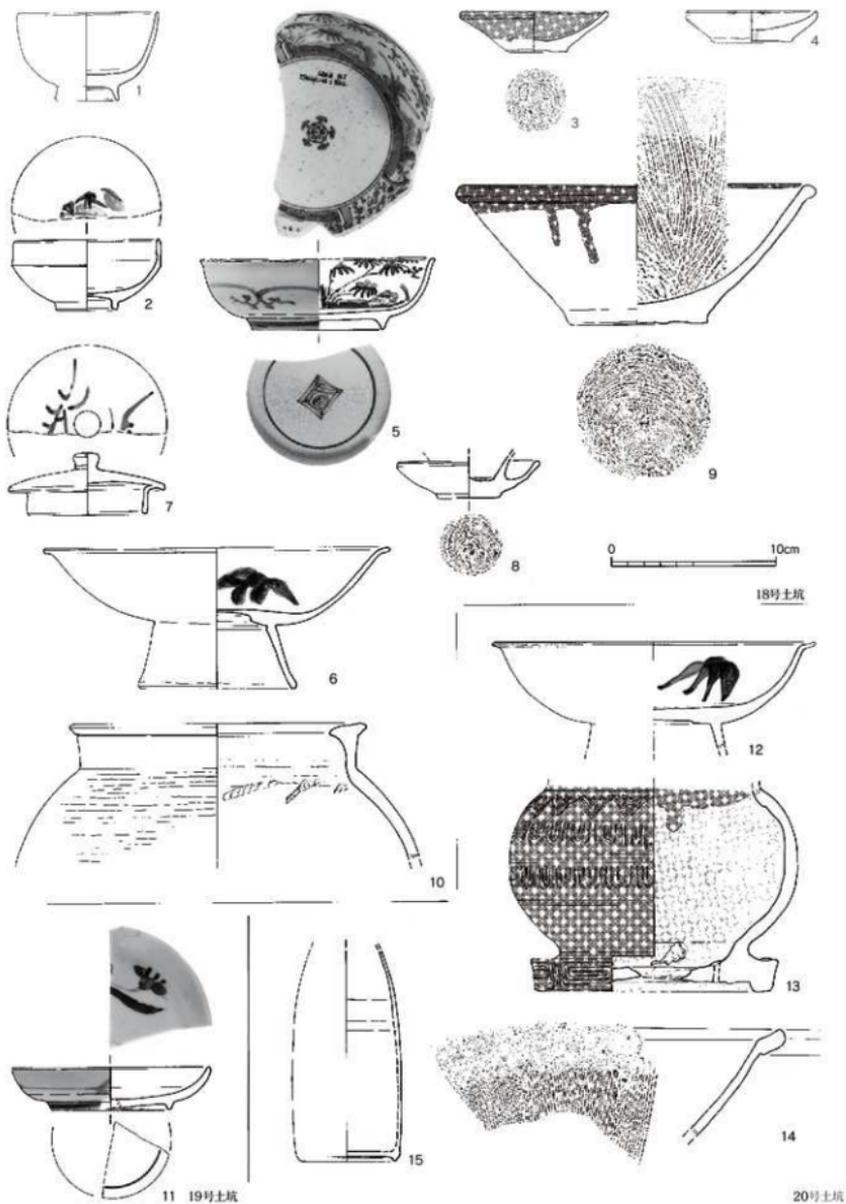
第12図 5次調査14・16号土坑出土陶磁器実測図(5~7・13は1/4、他は1/3)



第13図 5次調査17号土坑出土土器・陶磁器実測図(9~11は1/4、他は1/3)

表5 5次調査出土土器・陶磁器観察表4

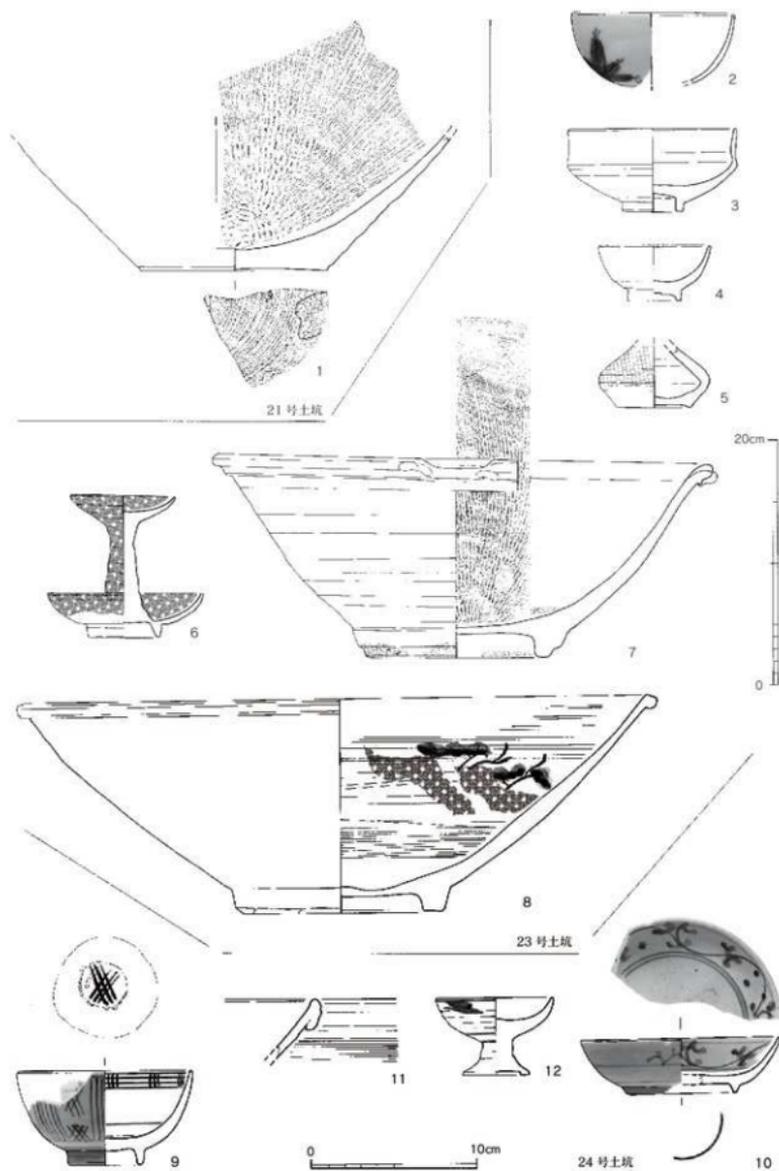
遺物番号 調査番号 図録番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整用・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑13 10010	蓋 土瓶蓋加工	胴径6.6 蓋径2.0	陶器 褐色	黒緑釉を外面に掛ける	胴面は平滑に整形している	—	—	肥前	19世紀前半
土坑13 10011	杯	口径7.0 高台径3.0 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に黒線を呉須染付	呉須染付 砂目付	—	肥前	1710 S 1780
土坑13 10012	灯明受皿	口径6.2 最大径7.8 底径4.4	陶器 褐色	鉄釉を内面から裏まで 着色不良で灰白色が残る	外底は赤切り	胴下平蓋跡 胎土目3つあり	—	肥前	不明
土坑13 10013	罎 行平蓋	口径(19.0)	灰火色の施釉 陶器 黄灰白色	内面口縁下以下は茶灰色の鉄釉厚掛け 外面口縁から肩部は鉄 び釉の上に鉄葉。肩部は鉄釉厚掛け 胴下位は回転ヘラケズリ	—	呉須染付 砂目付	肥土との接合部 のみ残る	肥前	不明
土坑14 11011	罎 赤蓋形	口径(9.4) 高台径4.0 器高5.1	陶器 黄灰白色	内外面胎釉の上に黒鉄釉厚掛け	—	高台蓋跡	小石塚	不明	
土坑14 11012	罎	口径(10.4) 高台径4.1 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面草花文、裏面は「大明」年製、を呉須染付	呉須染付	波佐見	1680 S 1740	
土坑14 11013	罎	高台径3.8	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に 掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台蓋跡	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑14 11014	罎	口径10.0 高台径4.0 器高4.6	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に 掛ける 貫入あり	外底に門文の刻印	高台蓋跡	山口安形 京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑14 11015	罎	口径11.6 高台径4.8 器高6.6	陶器 灰白色 軟質	黒緑釉を外面、透明 釉を内面に掛ける	—	底蓋蓋跡	肥前	1690 S 1780	
土坑14 11016	小皿	口径(7.5) 高台径(4.7) 器高1.8	土師質 にぶい黄白色	—	外底は赤切り	不明	器面摩滅 内外 底面中央が褐色 に着色	不明	
土坑14 11017	小皿 5寸皿	口径(12.2) 底径(7.4) 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に附れた唐草文、内面に山水文の呉 須染付	呉須染付 砂目付	肥前	1680 S 1716	
土坑14 11018	小皿 5寸皿	高台径(7.4)	磁器 灰白色	着色不良で灰白色を 見する透明釉を全面 に掛ける	外面に附れた唐草文、内面に斜格子の上 にコニヤク印判手の青花文を上に、見 込みに5弁花文、裏面は「大」まであるの で「大明」を呉須染付	呉須染付	内面の文様が口 縁部まで達して いる	波佐見	1680 S 1740
土坑14 11019	小皿 5寸皿	口径(11.6) 高台径(8.2) 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に附れた唐草文、内面に黒引で黒文 文、見込みに5弁花文の染付	呉須染付	外底にハリ目跡 1つ残る	肥前	1680 S 1710
土坑14 110110	中皿	口径(21.4) 高台径(12.0) 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面口縁部に黒引で唐文 牡丹文を呉須染付 口縁あり	呉須染付	外底にハリ目跡 1つ残る	肥前	1700 S 1730
土坑14 110111	中皿	口径31.1 高台径18.4 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面に牡丹唐草文と反 物文、見込みに雲と波と菊文、裏面は「大 明成化年製」を呉須染付	呉須染付 ハリ目 9個残存	肥前	1700 S 1730	
土坑14 12011	小皿 5寸皿	口径11.6 底径4.2 器高3.7	磁器 灰白色	着色不良で乳白色を 見する透明釉を全面 に掛ける	外面に附れ茶葉文を呉須染付	底蓋蓋跡 見込みに蛇ノ目に輪調子後 アルミナ散布	波佐見	1680 S 1740	
土坑14 12012	小皿	口径(16.8) 底径6.8 器高3.7	陶器 明緑黄灰色	内面白化粧土を網毛掛けし、内面から外面側部は透明釉を掛ける	—	高台蓋跡、裡付にアルミナ散布 見込 みは蛇の目輪調子し、アルミナ散布	肥前	1690 S 1780	
土坑14 12013	土瓶蓋	胴径(10.6)	陶器 黄灰色	外面天井部天目軸	無文 ボタン状のつまみがつくものと 思われる	胴下輪調子	肥前	不明	
土坑14 12014	蓋	胴径10.4 器高3.0 つまみ径3.8	磁器 灰白色	淡い緑釉を外面、外面 高台内と内面は透明 釉	淡い緑釉は「大明成化年製」、内面天井部 に5弁花文染付 口縁部1個	受け輪調子	肥前	1780 S 1810	
土坑14 12015	鉢	口径29.3 高台径11.6 器高10.0	陶器 暗紫灰色	内面口縁下以下は鉄釉厚掛け 外底に口縁部のみ茶色少かつた鉄釉厚 掛け	見込みに砂目跡あり 高台蓋蓋跡	見込みに鉄釉は 重なるため 着色不良	肥前	1750 S 1860	
土坑14 12016	割鉢	口径(33.0)	陶器 暗紫灰色	口縁部のみ鉄釉厚掛け	内面割り目12本単位	—	肥前	1650 S 1690	
土坑14 12017	割鉢	口径(23.6)	陶器 褐色	内外鉄釉 着色不良	内面割り目単位不明	—	肥前	1750 S 1860	
土坑14 12018	鉢 香形	口径(9.8) 高台径6.0 器高0.1	磁器 灰白色	淡い緑釉を全面掛け 着色不良で緑灰白色 を見する	—	蛇ノ目高台で、高台 部は鉄葉塗布	口縁外面の補輪 の色調子は重ね 焼きのためか	肥前	不明
土坑14 12019	鉢	口径(10.6) 高台径6.7 器高0.1	陶器 黄灰色	内面は輪軸の上に鉄絵	見込みにアルミナの門形に付着している	呉須染付	口縁外面の補輪 の色調子は重ね 焼きのためか	肥前	不明
土坑14 120110	庵蓋卓	胴径4.2	土師質土器 褐色～黄灰色 裏入物なし	—	外底赤切り 内外ナデ	不明	断面に褐色の着色 あり	在地	不明



第14图 5次調査18~20号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

表6 5次調査出土土器・陶磁器観察表5

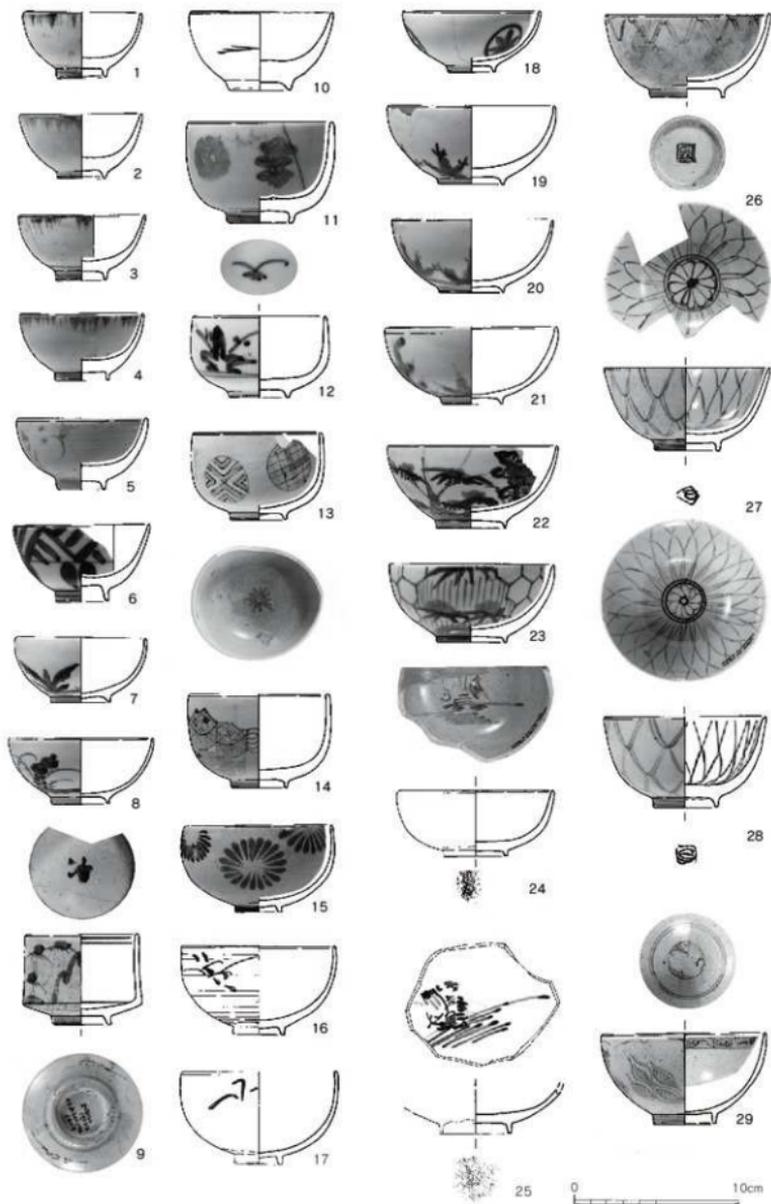
遺物番号 採得番号 図版番号	器種 形状 図版番号	法量(cm) ( )は復元額	胎の種類	釉薬	調整・整形・裝飾技法	窯詰の技法	所 見		
							特記事項	産定産地	産定年代
土坑16 12811	碗 圓形	口径(7.2)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花文と格子文を共須染付	—	発色やや不良	肥前	1770 S 1780
土坑16 12812	小碗	口径7.6 高台径(3.4) 器高3.8	磁器 灰白色 軟質	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面無文をコンニャク印刷網り須染付			筑前	1700 S 1740
土坑16 12813	鉢 方形	器高10.6	土加賀土器 黒灰～黄灰色 白色粒子多い	—	外面から口唇部まで須染濃縮 内面はヨコハケ 敷造りか 脚は角にある	不明	内面に煤が付着しているの で、火跡か	在池	不明
土坑17 13001	碗	口径6.4 高台径3.8 器高4.5	磁器 灰白色 軟質	透明釉 全面 発色不良	外面に磨き文と思われるのコンニャク印刷網り須染付	髹付軸割ぎ	5割残存	肥前	1700 S 1740
土坑17 13002	碗 半球形	口径9.9 高台径3.9 器高4.1	陶器 黄灰色	足込みに鉄絵の山水文を入れた後、透明釉を外面底部以外に全面掛ける		底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 S 1810
土坑17上位 13003	碗	高台径3.6	陶器 黄灰色	透明釉を高台以外に掛け、足込みに鉄絵の掛れた山水文		高台露胎	京焼風陶器	肥前	1650 S 1690
土坑17 13004	小皿 5寸皿	口径13.4 高台径8.2 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に掛れた磨き文、内面は平帯花文と半田扇文の間を横帯草文で埋める 見込みに5弁花文、裏筋は渦線を共須染付	髹付軸割ぎ	13割5と同一セット	筑前	1750 S 1810
土坑17 13005	小皿 5寸皿	口径13.1 高台径8.2 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に掛れた磨き文、内面は平帯花文と半田扇文の間を横帯草文で埋める 見込みに5弁花文、裏筋は渦線を共須染付	髹付軸割ぎ	13割4と同一セット	筑前	1750 S 1810
土坑17 13006	蓋	新径10.4 つまみ長軸 3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花文須染付、つまみは板状で貼り付け	受け部軸割ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑17 13007	蓋	新径9.1 つまみ径3.7 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面4分割に枠取りされた中に鳥文と花文が同じモチーフが配置するように入られており、内面は墨文彫、内面天井部は岩と波文、裏筋は口に青に逆うが入る 須染付	受け部軸割ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑17 13008	小型煎鉢	口径(25.3)	陶器 にぶい黒灰紫色	鉄絵を口縁部のみ	内面磨り目13本単位	—	鉄絵に光沢あり	肥前	1650 S 1690
土坑17 13009	小型煎鉢	口径(29.6)	陶器 にぶい灰白紫色	鉄絵を全面に掛ける	内面磨り目10本単位	—	鉄絵に光沢あり	小石原	不明
土坑17 13010	煎鉢	口径(37.0)	陶器 橙灰色	鉄絵を全面に掛ける	内面磨り目17本単位	—	鉄絵に濃縮痕あり	肥前	1750 S 1860
土坑17 13011	煎鉢	口径(43.4) 高台径(20.6) 器高18.5	陶器 にぶい灰白紫色	鉄絵を全面に掛ける	内面磨り目10本単位 外面割下位に格子目タタキ残る 高台割り付け	髹付軸割ぎ 見込みに胎土目跡3つあり		小石原	不明
土坑17 13012	小型鉢	口径(23.6)	陶器 淡橙灰色	割下位に内外鉄絵ハケ掛けし、上半にオーリーブ色の鉄絵を掛けて、口縁部から外面割上半に白化粒土を掛ける その上に鉄絵		—		肥前	19世紀前半
土坑17 13013	火鉢	口径(22.0) 最大径(27.0)	瓦質土器 灰白色か黒灰色を挟む 軟質	—	外面ミゾキがあったが摩滅している 内面口縁下部オサエとハケミ 口縁下に穿孔あり	不明	口縁部内外底部が欠損している	在池	不明
土坑17 13014	円盤形製品	直径4.3	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	小皿底部利用 裏縁打ち磨き	髹付軸割ぎ 見込みに胎土目跡3つあり		肥前	1650 S 1690
土坑17 13015 図版1	紅彩口 紅皿	口径4.5 高台径1.2 器高1.3	磁器 発色のため不明	透明釉 内面から外面口縁部	型押し成型で、外面磨き文	底部露胎	発形	肥前	不明
土坑18 14001	小型碗	口径(8.4) 高台径3.6 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉 全面に掛ける 貫入あり	内外無文	髹付軸割ぎ	5割残存	肥前	1780 S 1810
土坑18 14002	小型碗 腰折形	口径(8.6) 高台径3.7 器高4.3	陶器 黄灰色	緑灰色の鉄絵 内面から外面割下位まで	見込みに竹筒文の鉄絵	割下位露胎	5割残存	肥前	18世紀中葉
土坑18 14003	小皿	口径8.7 底径3.7 器高2.5	陶器 発色のため不明	鉄絵を内面から外面口縁部まで 発色不良	外底は赤切り	割下半露胎	髹付君なし 発形	肥前	1690 S 1750
土坑18 14004	小皿	口径(7.8) 高台径(4.9) 器高1.9	土加賀 黄白色	—	外底は赤切り	不明	口縁部に煤付着	備前	不明
土坑18 14005	小皿 5寸皿	口径(14.2) 高台径8.0 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	花弁状口縁 外面に磨き文、内面に松竹梅文、見込みに手摺きの5弁花文、裏筋は角筋を共須染付	髹付軸割ぎ 砂目付		肥前	1700 S 1740
土坑18 14006	台付皿	口径(20.7) 高台新径9.3 器高8.6	陶器 にぶい黄灰色	透明釉 内面から外面割下位まで	見込みに緑灰色の鉄絵で竹筒文	髹付軸割ぎ 見込みに胎土目跡あり		肥前	18世紀中葉



第15图 5次調査21・23・24号土坑出土陶磁器実測図(1・7・8は1/4、他は1/3)

表7 5次調査出土土器・陶磁器観察表6

遺物番号 探出番号 採集番号	器種 形状 ( )は復元図	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・裝飾技法	窯詰め技法	所 見			
							特記事項	鑑定産地	鑑定年代	
土坑18 14007	蓋	直径(7.0) つまみ径6.8 高さ3.8	陶器 黄灰色	長石釉を上面のみに 貫入あり	竹筴文を呉須染付か		下半輪滑ぎ		肥前か	不明
土坑18 14008	石明受皿	最大径8.4 底径5.8	陶器 暗茶灰色	鉄釉を内面から外 面脚中位まで 染 色不良	外底は糸切り		下半平磨胎	覆付磨なし	肥前	不明
土坑18 14009	小型磨鉢	口径21.8 底径8.3 高さ8.6	陶器 色ぶい暗褐色調	鉄釉を口縁部のみ	内面磨り目2本単位 外底は糸切り		底部の側面に鉄 土目の直線である 痕みあり	鉄胎に光沢あり	肥前	1650 S 1690
土坑18 14010	蓋	口径(17.1)	陶器 外面暗褐色 内面黄灰色	内外鉄釉で染色不 良	外面斜部に赤目 内面斜部は格子目タキ当て具 痕あり		口内縁は輪滑ぎ その上に貝目跡 あり	斜部内面はタキ当て具 痕跡が斜めに残っている	肥前	17世紀後半
土坑19 14011	小皿	口径(12.0) 高台径(7.2) 高さ2.6	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に附れた唐草文、内面に水 箱文を呉須染付		覆付輪滑ぎ 砂 目付		肥前	1680 S 1710
土坑20 14012	台付皿	口径19.3	陶器 色ぶい黄灰色	透明釉 内面から 外面脚中位まで	見込みで鉄釉で竹筴文を掛く		覆付輪滑ぎ 見 込みで肥 / 貝目 跡あり	台部に接合位置が中心か らずれている	肥前	18世紀中葉
土坑20 14013	鉢敷用木 鉢	底径14.2 最大径17.4	陶器 黄白色 黒粒子 でざらつく	内面口縁部から外 面は緑釉 貫入 あり 内面と外底は 鉄釉へラ掛け	外面三鳥手状の印型押し底面 に2箇所対面に穿孔しており、 内面はそれを覆っている		覆付輪滑ぎ 見込みで砂目跡 6つ付着	胎土が特徴的	肥前か	19世紀
土坑20 14014	磨鉢	—	陶器 暗茶灰色	内外鉄釉	内面磨り目2本単位		—		肥前	1750 S 1860
土坑20 14015	瓶	底径5.8	陶器 黄白色 黒粒子 でざらつく	透明釉 貫入あり	無文		覆付輪滑ぎ	胎土が特徴的	肥前か	不明
土坑21 15001	磨鉢	底径(11.2)	陶器 橙～暗褐色	鉄釉	内面磨り目13本単位		外面斜部に輪土 目跡あり		肥前	1650 S 1690
土坑23 15002	碗	口径(10.6)	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面花文と格子文を呉須染付		—		肥前	1710 S 1750
土坑23 15003	碗	口径19.2 高台径3.7 高さ5.1	陶器 黄灰色	貫入のある黄灰色 の鉄釉 内面から 外面脚中位まで	外面口縁下に竹筴文の鉄紋	底面磨胎	4割残存		肥前	18世紀中葉
土坑23 15004 15004 15004	小碗	口径6.6 高台径3.2 高さ3.5	陶器 完形のため不明	鉄釉を外表面脚中 位まで	無文 高台類り出し	底面磨胎	完形 覆付まで輪が掛 かったため付着して いる		肥前	1690 S 1780
土坑23 15005	梨輪壺	底径(4.6) 最大径(6.7)	陶器 灰白色	鉄釉を外表面脚中 位まで	無文 高台類り出し	底面磨胎	4割残存		小石原か	1780 S 1860
土坑23 15006	石明受皿	口径6.3 高台径4.4 最大径9.4	陶器 橙灰～暗青灰色	鉄釉を内面から外 面脚中位まで	上部と下部は別造りしたもの	底面磨胎	8割残存		肥前	不明
土坑23 15007	磨鉢	口径40.8 高台径15.3 高さ16.8	陶器 橙灰～暗青灰色	鉄釉を内面から外 面脚中位まで	内面磨り目単位不明	底面磨胎			肥前	不明
土坑23 15008	鉢	口径(52.4) 高台径16.4 高さ17.5	陶器 暗茶灰色	内面は白化粧土を網毛掛けし、鉄 紋で雲と山を描いた上に鉄 釉と緑釉で動物を上置き、外 面は上半に鉄釉を掛け、その 上に白化粧土を掛けた後に赤 鉄釉を掛け取り、下半は鉄 釉を掛け取り、脚口に掛取り		覆付輪滑ぎ	輪滑は白化粧土で、倒 立して掛取りして乗れた ものが、正置したため 逆に乗れたのであろう		肥前	1690 S 1750
土坑24 15009	碗	口径10.8 高台径4.4 高さ5.8	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文		覆付輪滑ぎ		肥前	不明
土坑24 15010	小皿	口径(12.8) 高台径(6.7) 高さ3.5	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に附れた唐草文、内面に水 箱文を呉須染付		覆付輪滑ぎ		高伏見	1680 S 1710
土坑24 15011	磨鉢	—	陶器 色ぶい灰褐色が 灰黒色をほきむ	鉄釉を全面	外面に附れた唐草文、内面に唐 草文を呉須染付		—	鉄胎に光沢なし	肥前	1650 S 1690
土坑24 15012	仏磨器	口径(7.1) 直径(4.0) 高さ4.7	陶器 灰白色	釉い透明釉を全面 に掛ける	外面に附れた、本来の文様のお からないモチーフを染付	底面輪滑ぎ	6割残存		高伏見	不明
大土坑1中層 16001	小碗	口径7.2 高台径2.8 高さ3.8	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける 染色不良	外面に雨降文を呉須染付		覆付輪滑ぎ 砂 目付	7割残存	肥前	1700 S 1740
大土坑1南層上層 16002	小碗	口径7.6 高台径2.8 高さ4.0	陶器 灰白色	光沢のある透明釉 を高台以外に掛ける	外面に雨降文を呉須染付		覆付輪滑ぎ 砂 目付	7割残存	肥前	1700 S 1740
大土坑1南層 16003	小碗	口径7.8 高台径3.2 高さ4.1	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける 貫入あり	外面に雨降文を呉須染付		覆付輪滑ぎ 砂 目付	染色不調	肥前	1700 S 1740



第16图 5次調査1号大土坑出土陶磁器実測图1(1/3)

表8 5次調査出土土器・陶磁器観察表7

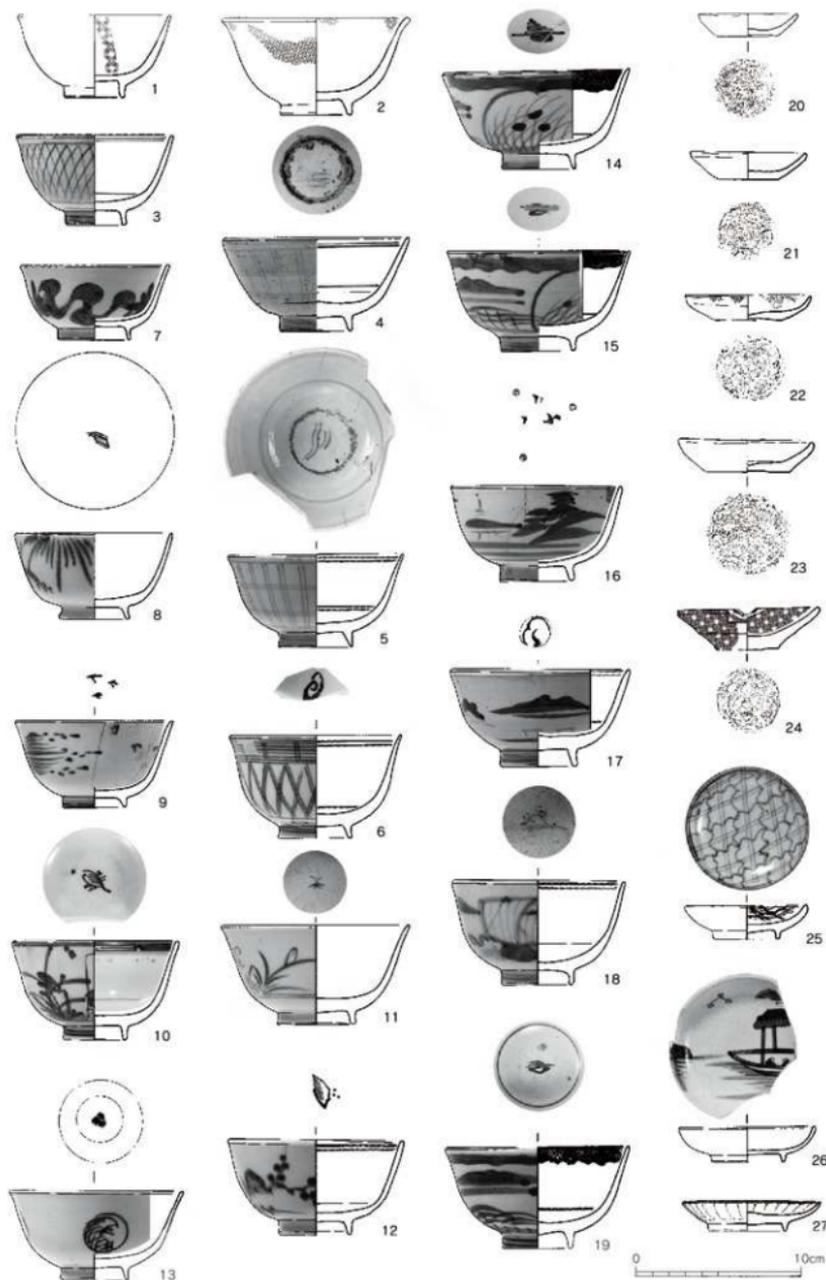
遺物番号 採掘番号 図版番号	器種 形状 通称名	容量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・裝飾技法	窯込の技法	備 考	
							特記事項	産定産地
大土坑1南塚上層 16084	小瓶	口径7.5 高台径3.3 器高4.1	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を高台以外に掛ける	外面に雨降文を供須染付	貫付輪漕ぎ	胎厚あり 完形品	肥前 1700 S 1740
大土坑1南塚上層 16085	小瓶	口径8.0 高台径2.9 器高4.8	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を高台以外に掛ける	外面に花草文を供須染付	貫付輪漕ぎ	完形品	肥前 1700 S 1740
大土坑1中層 16086	小瓶	口径8.3 高台径3.2 器高4.7	磁器 灰白色 ガラス質	内外あいつロム青磁釉を掛け、高台のみ透明釉	外面上半に土錆で御歯文、下半に花草文を供須で染付	貫付輪漕ぎ 砂目付		瀬戸 20世紀前半
大土坑1南塚上層 16087	小瓶 半球形	口径8.0 高台径2.6 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花草文を染付	貫付輪漕ぎ		肥前 1710 S 1750
大土坑1南塚上層 16088	小瓶 半球形	口径8.4 高台径3.3 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花草文が対面に供須で染付	貫付輪漕ぎ		肥前 1710 S 1750
大土坑1 16089	小瓶 四角形	口径(7.2) 高台径3.6 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良で白濁する	外面に箭文、内面口縁部に青線、見込みに附れた5弁花文供須で染付	貫付アルミナ塗布		肥前 1770 S 1780
大土坑1南塚上層 16010 図版4	小瓶 扁反形	口径8.7 高台径3.8 器高5.0	磁器 発色のため不明	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	口縁あり 外面の鉄砂状のもの は装飾的なもので、本来無文だろう	貫付輪漕ぎ	厚手	肥前か 1710 S 1750
大土坑1上層 160811	小瓶 扁反形	口径8.0 高台径4.1 器高5.7	磁器 発色のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面にはコンシヤク印製刷り 筋と松文を交互に供須染付	貫付輪漕ぎ	胎厚が厚く、 重い	肥前 1730 S 1740
大土坑1南塚上層 16012	小瓶	口径8.2 高台径3.4 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に観葉形の草文、見込みに 松文を供須染付	貫付輪漕ぎ		肥前 不明
大土坑1 16013	小瓶 腰形	口径7.9 高台径3.5 器高5.3	磁器 灰白色 軟質	透明釉全面掛け 発色 不良で乳白色	外面に丸文散らし、見込みに 昆虫文を供須染付	貫付輪漕ぎ		肥前 19世紀前期
大土坑1中層 16014	小瓶 半球形	口径8.5 高台径3.4 器高5.7	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全 面に掛ける	外面に附れた昆虫文と宝文、 見込みに火災宝珠文を供須染 付	貫付輪漕ぎ	8割残存	肥前 1780 S 1810
大土坑1南塚上層 16015	小瓶 半球形	口径9.0 高台径2.8 器高5.4	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛けした後、 土胎付け 貫入あり	外面に黒、緑と青の花草の 文を供須染付	貫付輪漕ぎ	京焼風陶器	肥前 1780 S 1810
大土坑1南塚上層 16016	小瓶 半球形	口径9.6 高台径3.0 器高5.6	陶器 黄灰白色	外面に鉄砂の竹節文を掛 ける	透明釉を高台以外に 掛ける	貫付輪漕ぎ	京焼風陶器	肥前 18世紀後半
大土坑1南塚上層 16017	小瓶 半球形	口径9.4 高台径3.1 器高5.7	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛けした後、 土胎付け 貫入あり	外面に黒、緑と青の花草の 文を供須染付	貫付輪漕ぎ	京焼風陶器	肥前 18世紀後半
大土坑1南塚上層 16018	小瓶	口径8.6 高台径4.0 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に丸に観葉文の手書き 供須染付	貫付輪漕ぎ		肥前 1710 S 1750
大土坑1南塚上層 16019	小瓶	口径9.9 高台径4.0 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に若松文を供須染付	貫付輪漕ぎ	底厚が厚い ほぼ完形	肥前 1710 S 1750
大土坑1南塚上層 16020	小瓶	口径10.1 高台径4.1 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に若松文を供須染付	貫付輪漕ぎ	底厚が厚い	肥前 1710 S 1750
大土坑1南塚上層 16021	小瓶	口径(10.5) 高台径3.7 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に若松文を供須染付	貫付輪漕ぎ		肥前 1710 S 1750
大土坑1南塚上層 16022	小瓶 半球形	口径10.3 高台径4.2 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文と竹文を供須染付	貫付輪漕ぎ		肥前 1710 S 1750
大土坑1中層 16023	小瓶 半球形	口径10.0 高台径4.2 器高4.8	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全 面に掛ける	外面に竹文と亀甲文を供須 染付	貫付輪漕ぎ	ほぼ完形	肥前 1700 S 1740
大土坑1南塚上層 16024	小瓶 半球形	口径9.4 高台径3.8 器高4.0	陶器 暗黄灰白色	見込みに鉄砂の山水文を入 れた後、発色の悪い透明 釉を外面底面に外に全面掛 ける 外底に「清水」の刻 印	貫付輪漕ぎ	京焼風陶器	肥前 1780 S 1810	
大土坑1中層 16025	小瓶	高台径4.4	陶器 黄灰白色	見込みに鉄砂の山水文を 書き、透明釉を高台以外全 面に掛け 裏底は「清水」と 門の刻印	高台蓋附	京焼風陶器		肥前 18世紀後半
大土坑1南塚上層 16026	小瓶	口径9.9 高台径4.6 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良で白濁する	外面は二重刺目文、裏底は 角福を供須染付	貫付輪漕ぎ	9割残存	肥前 1690 S 1720
大土坑1中層 16027	小瓶	口径(10.0) 高台径3.9 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は二重刺目文、内面は 刺目文、見込みに紫花文、 裏底は鳥輪を供須染付	貫付輪漕ぎ		肥前 1700 S 1750



第17图 5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図2(1/3)

表9 5次調査出土土器・陶磁器観察表8

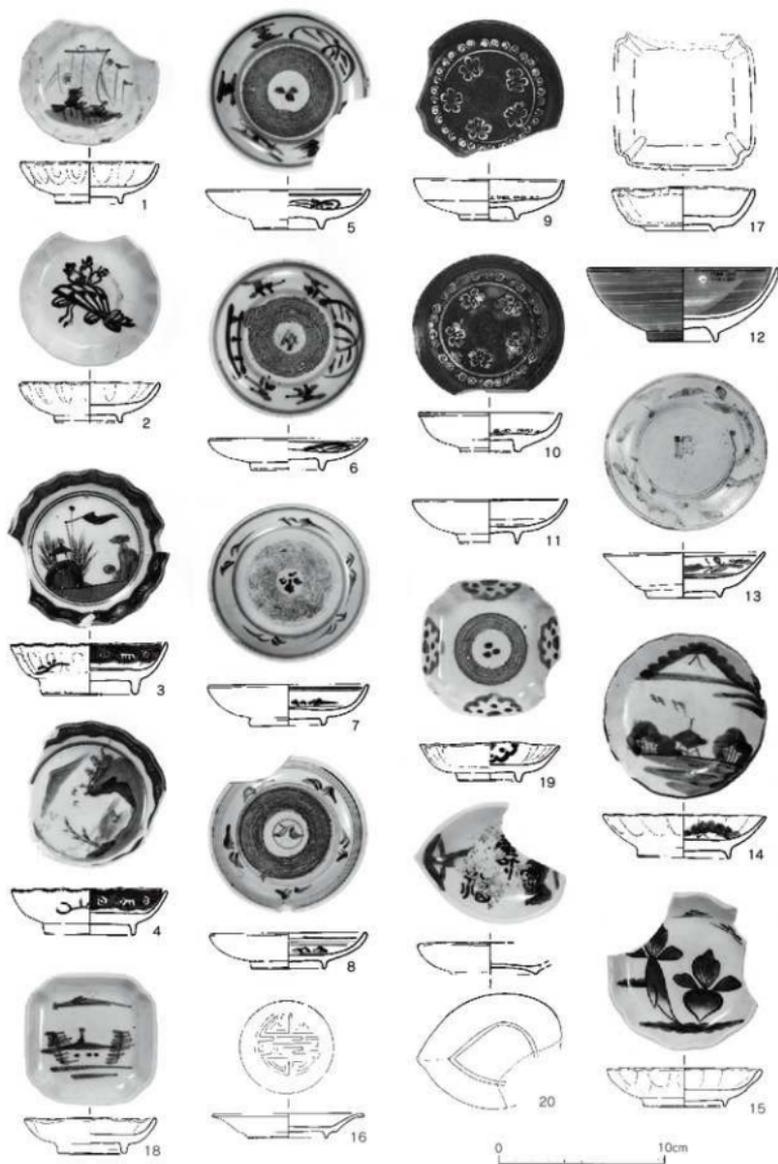
遺構名 探検番号 図面番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	染込技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大土坑1中層 180828	甕 口径9.7 高台径63.8 器高5.3	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面は2重線目文、内面は斜目文、見込みは菊花文、裏面は渦巻を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		肥前	1700 S 1750	
大土坑1中層 180829	甕 口径9.9 高台径63.8 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良で白濁する	外面はよろけ編文と菊花文が交互に入り、内面は口縁部に雲形雷文、見込みは附れた管状松竹梅文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		肥前	1850 S 1860	
大土坑1南庫上層 17081	甕 口径10.4 高台径4.2 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	口縁あり	襷付輪漉ぎ 見込みに船ノ目輪漉ぎ		肥前	1700 S 1740	
大土坑1 17082	甕 口径10.9 高台径4.3 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	襷付輪漉ぎ		肥前	1700 S 1740	
大土坑1中層 17083	甕 口径10.7 高台径4.3 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良で白濁する	外面は鳥・草花・雷文、高台内に界線を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		肥前	1700 S 1740	
大土坑1 17084	甕 口径10.4 高台径4.1 器高5.6	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面は花文地で、丸内に相向かいの龍文が入る。内面は口縁部に雲形雷文、見込みは附れた管状松竹梅文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		肥前	1850 S 1860	
大土坑1南庫上層 17085	甕 口径10.7 高台径4.4 器高5.3	陶器 にぎい暗黄灰色 積良	透明釉を全面に掛ける	無文	襷付輪漉ぎ		肥前	不明	
大土坑1南庫上層 17086	甕 口径9.9 高台径4.2 器高6.0 陶散染付	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良で全体に暗い	外面口縁下に2重界線と山水文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		肥前	18世紀中葉	
大土坑1南庫上層 17087	甕 口径9.6 高台径4.0 器高4.7 襷折形	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に鉄絵で竹筒文を描いた後、透明釉を高台以外に掛ける	襷付輪漉ぎ	8割残存 京焼風陶器	肥前	18世紀中葉	
大土坑1中層 17088	甕 口径11.8 高台径4.0 器高5.1 平形	磁器 灰白色 ガラス質	内面透明釉、外面薄くクロム青釉薬を掛ける	外面にイッチンで雷文を描く 位置から4割程にあっただろう	襷付輪漉ぎ 砂目付		瀬戸	20世紀前半	
大土坑1上層 17089	甕 口径10.2 高台径5.0 器高5.8 広東形	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に附れた鳥文と水魚文、見込みに鳥文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		肥前	1780 S 1810	
大土坑1中層 170810	甕 口径10.2 高台径5.1 器高6.8 広東形	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面によろけ編文、見込みに方字文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		肥前	焼成時のへたれ著しい	
大土坑1中層 170811	甕 口径10.2 高台径5.4 器高6.8 広東形	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面によろけ編文、見込みに方字文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		肥前	焼成時の歪み著しい	
大土坑1中層 170812	甕 口径10.3 高台径5.8 器高6.4 襷折形	陶器 灰白色	黄灰色の灰釉を外面側下位から内面に掛けた後、外面に鉄絵を描く 貫入あり				京焼風陶器	肥前	不明
大土坑1中層 170813	甕 口径10.8 高台径4.4 器高6.0 襷反形	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内外面の口縁部と外面側下位には重界線に連続雷文を加えた文様帯があり、外面はその間に宝珠文と鍵文が交互に入り、見込みに波瀾文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		肥前	19世紀中葉	
大土坑1中層 170814	甕 口径11.4 高台径4.8 器高6.0 襷反形	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には不明文、内面口縁部に編文に縦線が入り、見込みに波瀾文をコバルト染付	襷付輪漉ぎ		肥前	19世紀中葉	
大土坑1 170815	甕 口径10.4 高台径4.2 器高6.1 襷反形	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面の口縁部に墨引きによる雪ノ輪文帯、その下に枠内に編文と菊花文が交互に入る 内面は口縁部に雷文が入り、見込みに編文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ	15・16は同じセット	肥前	19世紀中葉	
大土坑1上層 170816	甕 口径10.7 高台径4.2 器高6.0 襷反形	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面の口縁部に墨引きによる雪ノ輪文帯、その下に枠内に編文と菊花文が交互に入る 内面は口縁部に雷文が入り、見込みに編文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ	15・16は同じセット	肥前	19世紀中葉	
大土坑1中層 170817	甕 口径10.4 高台径5.6 器高6.1 襷反形	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面は幾何学的な花文、内面は口縁部に雷文が入り、見込みに附れた管状松竹梅文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		肥前	19世紀中葉	
大土坑1南庫上層 18081	甕 口径9.3 高台径5.6 器高5.4 襷反形	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛けた後、内面口縁部に斜線輪を施し掛ける		見込みにハリ目跡3つあり 襷付輪漉ぎ		内面が変色しているのは重ね焼きのためだろう	肥前	不明
大土坑1南庫上層 18082	甕 口径11.4 高台径4.4 器高6.2 襷反形	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛けた後、口縁部に鉄絵と銅緑輪を施し掛ける 貫入あり		見込みにハリ目跡あり 襷付輪漉ぎ		内面が変色しているのは重ね焼きのためだろう	肥前	不明
大土坑1 18083	甕 口径9.6 高台径5.7 器高5.5 襷反形	磁器 灰白色	発色の悪い透明釉を全面に掛ける	外面に斜格子文、見込みに格子文を染付	襷付輪漉ぎ		肥前	1850 S 1860	
大土坑1中層 18084	甕 口径11.2 高台径4.2 器高5.7 襷反形	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面は2重格子文、見込みに松葉文を瓦須染付	襷付輪漉ぎ		発色不良で透明釉に孔があく	波佐見	19世紀中葉
大土坑1南庫上層 18085	甕 口径10.8 高台径4.4 器高5.5 襷反形	磁器 灰白色	外面は2重格子文、内面見込みに波文を瓦須染付 その後焼ノ目アルミナを密着して透明釉を掛けている		襷付輪漉ぎ 見込みに重ね焼き		波佐見	19世紀中葉	



第18图 5次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

表10 5次調査出土土器・陶磁器観察表9

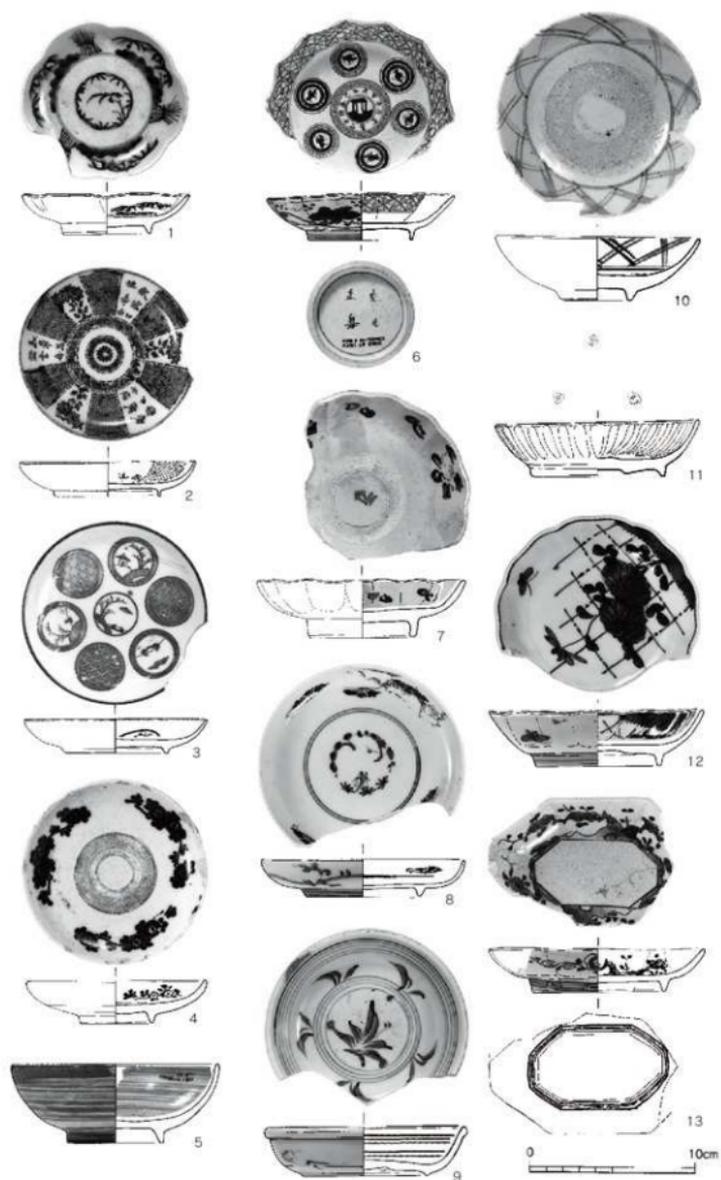
遺物名 採掘番号 展覧番号	器種 形状 ( )は復元額	寸法(cm)	胎の種類	胎薬	調整・整形・装飾技法	装飾の技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大土坑1上層 18016	甕 幅反形	口径10.4 高台径4.4 器高6.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には口縁部に筋文に2本単位の縦線が入り、その下に2重線の目文、下位は雲文帯、内面には口縁部2重縦線、見込みに附れた雲文をコバルト染付	復付輪漉ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑1中層 18017	甕 幅反形	口径9.0 高台径2.8 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を高台以外に掛ける	外面に若筋文と布文を共同染付	復付輪漉ぎ		肥前	19世紀前半
大土坑1中層 18018	甕 幅反形	口径9.7 高台径4.2 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を高台以外に掛ける	外面に草文、見込みに雲文をコバルト染付	復付輪漉ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑1中層 18019	甕 幅反形	口径9.5 高台径3.8 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に筋線文と鳥文、見込みに鳥文をコバルト染付	復付輪漉ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑1中層 18020	甕 幅反形	口径10.1 高台径4.0 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は花草文と縦文 内面は口縁部に雲文が入り、見込みに附れた出文をコバルト染付	復付輪漉ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑1南面上層 18021	甕 幅反形	口径11.4 高台径4.8 器高6.1	磁器 文形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面に草文・縦文、見込みに縦文をコバルト染付	復付輪漉ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑1中層 18022	甕 幅反形	口径10.5 高台径4.5 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に梅樹文、見込みに波線文を共同染付	復付輪漉ぎ	外底に漆みあり	肥前	19世紀中葉
大土坑1上層 18023	甕 幅反形	口径10.4 高台径4.0 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に丸にススキ文、見込みに不明文をコバルト染付	復付輪漉ぎ 見込みに蛇ノ目輪漉ぎ後アメリナ塗布		肥前	19世紀後半
大土坑1上層 18024	甕 幅反形	口径11.4 高台径4.4 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にはすすき文の入る丸区画と樹と雲文が交互に附かれており、内面は口縁部で、見込みに附れた波線文をコバルト染付	復付輪漉ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑1上層 18025	甕 幅反形	口径11.2 高台径4.6 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にはすすき文の入る丸区画と樹と雲文が交互に附かれており、内面は口縁部で、見込みに附れた波線文をコバルト染付	復付輪漉ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑1南面上層 18026	甕 幅反形	口径10.4 高台径4.5 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 変色不貞で白濁する	外面には木・建物文が、見込みに附れた鳥文をコバルト染付	復付輪漉ぎ 見込みにハコ目輪漉ぎつあり		肥前	19世紀後半
大土坑1中層 18027	甕 幅反形	口径10.7 高台径4.7 器高6.1	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面には筋・蛇・帆掛船文が、見込みに附れた雲文をコバルト染付	復付輪漉ぎ 見込みに蛇ノ目輪漉ぎ後アメリナ塗布	ほぼ定形	肥前	19世紀中葉
大土坑1上層 18028	甕 幅反形	口径10.5 高台径4.3 器高6.4	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面は雲から出る太陽、帆掛文、鳥文、見込みに波線文を共同染付	復付輪漉ぎ	見込みに施成時の付着物あり	波佐見	19世紀中葉
大土坑1上層 18029	甕 幅反形	口径11.1 高台径4.2 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にはすすき文の入る丸区画と樹と雲文が交互に附かれており、内面は口縁部で、見込みに附れた波線文をコバルト染付	復付輪漉ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑1南面上層 18030 図版1	小皿	口径6.1 高台径3.8 器高1.4	土師質土器 暗黄灰～褐色	—	外底糸切り	不明	定形 歪みあり	在池	不明
大土坑1南面上層 18031 図版2	小皿	口径7.1 底径2.4 器高1.7	土師質土器 黄褐色～褐色	—	外底糸切り	不明	9割残存 赤変は地染布の蓋として使用したためだろう	溝池地	不明
大土坑1上層 18032 図版1	小皿	口径7.8 底径3.8 器高1.6	土師質土器 黄褐色～褐色	—	外底糸切り	不明	定形 内面と口縁部が黒変しているので、打明皿として使用	溝池地	不明
大土坑1南面上層 18033 図版1	小皿	口径8.3 底径3.1 器高2.1	土師質土器 緑灰～暗黄灰色	—	外底糸切り	不明	定形 内面が変色しているが、外底も同様なで、黄変後の変色だろう	溝池地	不明
大土坑1中層 18034 図版1	小皿	口径8.6 底径3.9 器高2.6	陶器 褐色	—	鉄釉を内面から外面口縁部まで塗布 底面糸切り	底面筋動	定形 内面が変色しているが、外底も同様なで、打明皿として使用している	肥前	不明
大土坑1上層 18035	小皿	口径7.5 高台径4.2 器高2.1	磁器 文形のため不明	透明釉 全面	内面によろけ文と2重斜格子文、口縁部は口筋文に共同で染付	復付輪漉ぎ		波佐見	19世紀中葉
大土坑中層 18036 幅反	小皿	口径9.2 高台径4.6 器高1.5	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みは隼字の「寿」が印刷している	復付輪漉ぎ		美濃	19世紀中葉
大土坑1南面上層 18037 図版1	小皿 菊花形	口径8.4 高台径4.8 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉 全面	型打ち成型 口筋	復付輪漉ぎ		肥前	不明



第19图 5次調査1号大土坑出土陶磁器実測图3(1/3)

表11 5次調査出土土器・陶磁器観察表10

遺物名		器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・裝飾技法	装飾の技法	所 見			
採掘番号	層状		( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代	
採掘番号	遺物名										
大土坑1南壁上層	19011	小皿 5寸皿 菊形	口径8.5 高台径4.1 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面無文、内面に帆形動文をコバルトで染付	管付軸調子 見込みにハリ目跡3つ	8割残存	肥前	19世紀後半	
大土坑1中層	19012	小皿 5寸皿 菊形	口径8.6 高台径4.1 器高2.4	磁器 灰白色	発色不良で乳白色の透明釉全面	管打ち成型 見込みに花と福字文を須弥輪付	蛇ノ目高台で高台白化粧子 見込みにハリ目跡3つ		肥前か	19世紀中葉	
大土坑1中層	19013	小皿 菊形	口径9.3 高台径5.8 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	管打ち成型 外面唐草文 内面口縁部は墨引きの記号化文字文、見込みに山水文を須弥輪付	管付軸調子		肥前	19世紀後半	
大土坑1南壁上層	19014	小皿 菊形	口径9.3 高台径5.5 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	管打ち成型 外面唐草文 内面口縁部は墨引きの記号化文字文、見込みに山水文を須弥輪付	管付軸調子		肥前	19世紀後半	
大土坑1上層	19015	小皿	口径9.7 高台径4.5 器高2.4	磁器 完形のため不明	光沢のある透明釉 全面	内面に社・山・木文、見込みに不明モチーフを須弥輪付	管付軸調子 見込みに蛇の目跡3つ後アルミナ塗布		肥前	19世紀中葉	
大土坑1上層	19016	小皿	口径9.7 高台径4.6 器高2.0	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	内面は界線と界線の間と見込みに附れた山と木と鳥居文を須弥輪付	管付軸調子 見込みに蛇の目跡3つ後、アルミナ塗布		肥前	19世紀中葉	
大土坑1上層	19017	小皿	口径9.7 高台径4.6 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面は界線と界線の間と見込みに附れた花文を須弥輪付	管付軸調子 蛇の目跡3つ		肥前	19世紀中葉	
大土坑1中層	19018	小皿	口径9.5 高台径4.5 器高2.1	磁器 暗灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	内面は4重界線と3重界線の間と見込みに附れた花文を須弥輪付	管付軸調子 見込みに蛇の目跡3つ後、アルミナ塗布		肥前	19世紀中葉	
大土坑1中層	19019	小皿	口径9.1 高台径3.6 器高2.5	陶器 暗褐色～紫灰色	陶器 暗褐色	三島手のモチーフを見込みに刷印し、鉄釉を全面に掛けた後、印期部に白化粧土を掛けて、印期部以外を抜き取って象眼し、透明釉全面掛け	管付軸調子	発色不良で、器の色調不明	肥前	不明	
大土坑1中層	190110	小皿	口径8.6 高台径3.7 器高2.4	陶器 暗褐色	陶器 暗褐色	三島手のモチーフを見込みに刷印し、鉄釉を全面に掛けた後、印期部に白化粧土を掛けて、印期部以外を抜き取って象眼し、透明釉全面掛け	管付軸調子		肥前	不明	
大土坑1黒土1	190111	小皿	口径9.4 高台径3.6 器高2.7	磁器 暗灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	無文	管付軸調子 蛇ノ目跡3つ部にアルミナ塗布	見込みに赤色が残るので、赤が上塗り付けされていた可能性がある	肥前	不明	
大土坑1南壁上層	190112	小皿	口径11.4 高台径4.4 器高4.4	陶器 灰色	陶器 灰色	透明釉を全面に掛ける	高台を除く内外白化粧土の網毛掛け	管付軸調子	肥前	不明	
大土坑1南壁上層	190113	小皿	口径9.9 高台径4.6 器高2.7	磁器 暗灰白色	磁器 暗灰白色	発色不良の乳白色の透明釉を全面に掛ける 外面は発色不良のためモチーフ不明だが、内面には葉と木と虫などらしいもの、見込みにほつれ入る	管付軸調子		長尾見	19世紀中葉	
大土坑1南壁上層	190114	小皿 5寸皿 花弁形	口径9.9 高台径5.7 器高2.6	磁器 灰白色	磁器 灰白色	発色不良の透明釉	管打ち成型 内面に墨引きで山を描き、樹と雲を須弥輪付 口縁あり	管付軸調子	口縁部の欠損部が黒化	肥前か	19世紀中葉
大土坑1	190115	小皿 5寸皿 花弁形	口径9.4 高台径5.0 器高2.3	磁器 灰白色	透明釉 全面	管打ち成型 内面に大黒と雲を須弥輪付	管付軸調子		肥前か	19世紀中葉	
大土坑1中層	190116	小皿 扁反	口径9.9 高台径4.6 器高2.7	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに鎌字の「弓」が刷印している	管付軸調子		美濃	19世紀中葉	
大土坑1中層	190117	小皿 変形小皿 方形	口径9.9 高台径4.6 器高2.7	磁器 灰白色	長石釉を内面に掛ける	管打ち成型で、器面を伏せて、小さな高台をつくる 貫入を隠している	管付軸調子		不明	19世紀後半	
大土坑1中層	190118	小皿	口径8.3 高台径4.4 器高2.2	磁器 灰白色 発色不良でやや軟質	磁器 灰白色	発色不良で乳白色の透明釉全面	見込みに垂雲竜図の人物文をコバルト染付	管付軸調子	肥前	19世紀後半	
大土坑1中層	190119	小皿 変形小皿 方形	長径8.1 高台径3.9 器高2.3	磁器 暗灰色	暗い透明釉 全面	内面各辺口縁部に平文文、見込みに3つの点文をコバルト染付	管付軸調子		肥前	19世紀後半	
大土坑1	190120	小皿 変形小皿 扇形	長径8.7 短径1.1 器高1.9	磁器 灰白色	透明釉 全面	内面不明文と雲文、見込みに「寿」と「福」を須弥輪付	管付軸調子	見込みに鳩或の付着物あり	肥前	不明	
大土坑1中層	20011	小皿 5寸皿 花弁形	口径10.2 高台径5.4 器高2.4	磁器 灰白色	透明釉 全面	管打ち成型 内面に竹筴と稲葉文、見込みに環状の竹筴文を須弥輪付	管付軸調子		肥前か	19世紀中葉	
大土坑1上層(黒色土)	20012	小皿	口径10.7 高台径6.4 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に雲龍図で、点線文による区画が1つおきにあり、その間に牡丹文の入る区画と漢字文の入る区画が交互に入る 見込みに花文と扇形装紋文の環状文の中に花文をコバルト染付	管付軸調子		瀬戸	19世紀後半	
大土坑1上層(黒色土)	20013	小皿	口径11.1 高台径6.2 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に網版網りで、山水文と幾何学文の入る丸文を交互に配置し、見込みに山水文の小さい丸文をコバルト染付 口縁	管付軸調子		肥前	19世紀後半	
大土坑1中層	20014	小皿	口径10.9 高台径4.9 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に雲龍網りの雲花文をコバルト染付	管付軸調子 見込みに蛇の目跡3つ		肥前	19世紀中葉	



第20图 5次調査1号大土坑出土陶磁器実測图4(1/3)

表12 5次調査出土土器・陶磁器観察表11

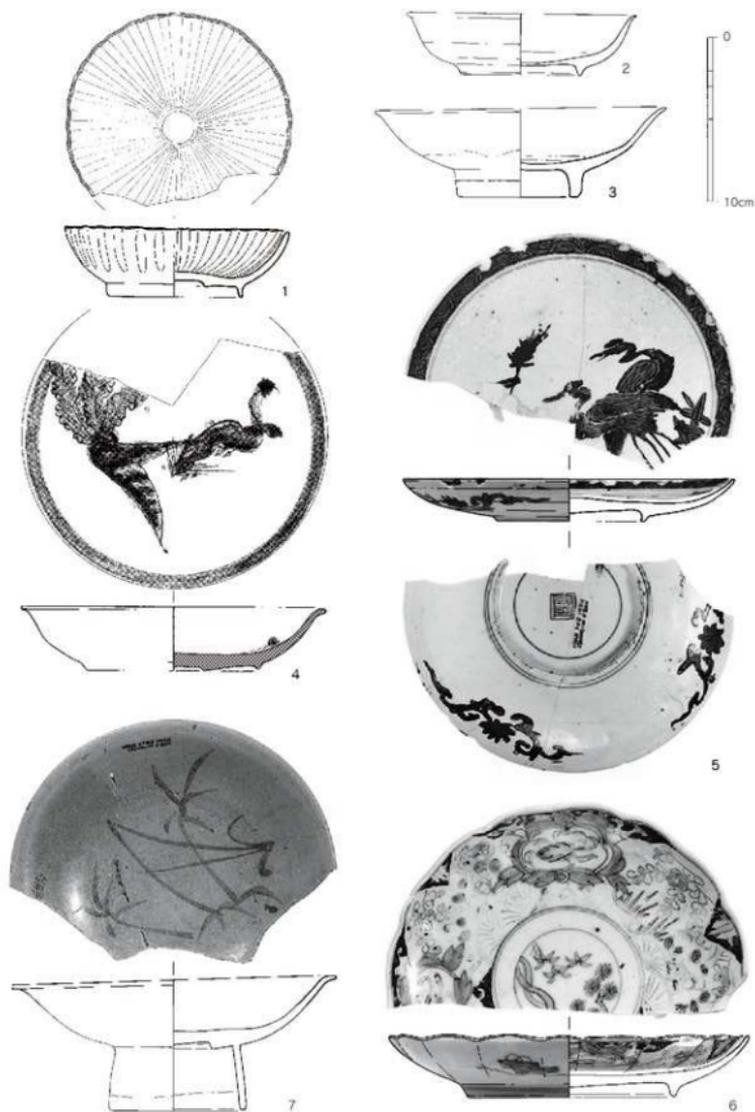
遺物番号 採掘番号 図録番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯跡の技法	所 見		
							特記事項	鑑定成産	鑑定年代
大土坑1中期 20085	小皿 口径12.4 高台径4.6 器高4.7		陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	高台を除く内外白化粧土の襷目掛け	襷付輪漕ぎ		肥前	不明
大土坑1中期 20086	小皿 変形小皿 14角形 口径11.4 高台径8.1 器高2.9		磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	突出する角を持つ型打ち成型 内面彫刻は斜格に掛け、内面に蓮文を散らすセラーフに梅花と水樹文を散らしている。見込み外周に銅目文を中心に入れた入れ文が6つあり、その内面に蓮文帯内に12文の漢字文帯が入り、中央は石取の上に建つ建物文が染付けされている。外面は彫刻に変形唐草文、異路は7成化年製。	襷付輪漕ぎ	6 撰残存	肥前	不明
大土坑1上期 20087	小皿 変形小皿 菊花形 口径12.3 高台径8.1 器高3.2		磁器 灰白色	透明釉全面掛け	型打ち成型 外面無文、内面に牡丹文、見込みに花文らしいモチーフを共煎染付	蛇の目輪漕ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑1 20088	小皿 口径12.2 高台径7.1 器高2.2		磁器 暗灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面扁文、見込みに類似動物文を共煎染付	襷付輪漕ぎ		肥前	不明
大土坑1上期 20089	小皿 口径12.3 高台径7.4 器高3.0 5寸皿		磁器 灰白色	透明釉 全面	外面唐文、内面に輪文、見込みに葉と草文を共煎で染付	見込みにハリ目跡3つ 蛇ノ目高台で台座輪漕ぎ	7 撰残存	肥前	19世紀後半
大土坑1中期 20090	小皿 口径12.4 高台径8.1 器高3.9 5寸皿		磁器 灰白色	やや暗い透明釉を全面に掛ける	内面に彫れた2重斜格子文を共煎染付	襷付輪漕ぎ 見込みに蛇ノ目に輪漕ぎ後砂目垂		浪佐見	1750 V 1810
大土坑1中期 20091	小皿 口径12.3 高台径8.1 器高3.2 菊花形		磁器 灰白色	青みがかった透明釉 全面	型打ち成型	蛇の目輪漕ぎ 見込みにハリ目跡3つ		肥前か	19世紀前半
大土坑1上期 20092	小皿 口径11.6 高台径7.7 器高3.4 5寸皿		磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	型打ち成型 内面に変形獅子と菊花と蓮、外面に楓文をコマムト染付	蛇ノ目高台で台座輪漕ぎ	6 撰残存	肥前	19世紀後半
大土坑1中期 20093	小皿 変形小皿 長8角形 長軸13.2 短軸8.2 器高2.6		磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	外面彫刻梅花唐草文、高台唐草文 内面彫刻文を共煎染付 赤切り面土の磨理し成型	襷付輪漕ぎ	5 撰残存	肥前	不明
大土坑1上期 21081	小皿 口径12.4 高台径7.1 器高3.2 5寸皿 花卉形		磁器 灰白色	発色不良の透明釉 全面	型打ち成型 内面に山と帆船彫。見込みに花文、異路に身を共煎で染付	襷付輪漕ぎ 見込みにハリ目跡3つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑1上期 21082	小皿 口径13.1 高台径7.8 器高3.6 5寸皿 花卉形		磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	型打ち成型 外面は唐草文、内面は彫刻唐草文、見込みに半花文帯を類似動物唐草文を共煎染付	蛇ノ目高台で台座輪漕ぎ	完形	肥前か	1780 V 1860
大土坑1南庫上層 21083	小皿 口径13.5 高台径7.4 器高3.5 5寸皿		磁器 灰白色	透明釉 全面	外面唐草文、内面に梅樹文・草葉文、見込みに花文、異路に身を共煎で染付	高台内に砂目跡付	8 撰残存	肥前	19世紀後半
大土坑1中期 21084	小皿 口径13.5 高台径7.8 器高3.4 5寸皿		磁器 灰白色	透明釉 全面	外面唐草文、内面に梅樹文・鳥文、見込みに5弁花文、異路に鳥筋を共煎で染付	襷付輪漕ぎ	ほぼ完形	浪佐見	1750 V 1810
大土坑1 21085	小皿 口径14.0 高台径7.5 器高2.8 5寸皿		磁器 灰白色	透明釉 全面	外面無文、内面に彫れた花唐草文、見込みに5弁花文、外底に鳥筋を共煎で染付	襷付輪漕ぎ 見込みにハリ目跡3つ	ほぼ完形	浪佐見	1680 V 1740
大土坑1 21086	小皿 口径13.6 高台径8.2 器高2.5 5寸皿		磁器 灰白色	透明釉 全面	外面唐草文、内面に彫れた草唐文、見込みに5弁花文、外底に鳥筋を共煎で染付	高台内にハリ目跡付	4 撰残存	肥前	19世紀後半
大土坑1上期 21087	小皿 口径13.1 高台径8.2 器高3.5 菊花形		磁器 灰白色	青みがかった透明釉 全面	型打ち成型 見込みに建物・樹・樹文を共煎染付	襷付輪漕ぎ 見込みにハリ目跡3つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑1中期 21088	小皿 口径12.3 高台径8.0 器高3.5 5寸皿 菊花形		磁器 灰白色	青みがかった透明釉 全面	型打ち成型 見込みに山水文を共煎染付	襷付輪漕ぎ 見込みにハリ目跡3つと襷付の重ね焼き痕		肥前か	19世紀中葉
大土坑1中期 21089	小皿 口径12.7 高台径7.6 器高3.6 菊花形		磁器 灰白色	青みがかった透明釉 全面	型打ち成型 見込みに雲・月・樹・鳥文文を共煎染付	襷付輪漕ぎ 見込みにハリ目跡3つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑1南庫上層 21090	小皿 口径12.6 高台径7.5 器高2.5 5寸皿 菊花形		磁器 灰白色	青みがかった透明釉 全面	型打ち成型 見込みに扁文を共煎染付	見込みにハリ目跡3つ 外底は蛇ノ目高台で台座輪漕ぎ	11 撰部分の欠損部が9成化	肥前	19世紀中葉
大土坑1南庫上層 22081	小皿 口径13.6 高台径8.2 器高4.0 菊花形		磁器 灰白色	青みがかった透明釉 全面	型打ち成型 目跡あり	蛇ノ目高台で台座輪漕ぎ		肥前	不明
大土坑1南庫 22082	小皿 口径14.0 高台径7.4 器高3.6 陶胎染付		陶器 暗灰色	乳白色がかった透明釉 全面	無文 貫入は意匠としてある可能性あり	襷付輪漕ぎ	6 撰残存	浪佐見か	不明
大土坑1中期 22083	小皿 口径17.6 高台径7.6 器高5.4		陶器 暗紫灰色	発色不良のオリブ色の灰釉を内面から外面側に掛ける		見込みに蛇の目輪漕ぎ		肥前	不明



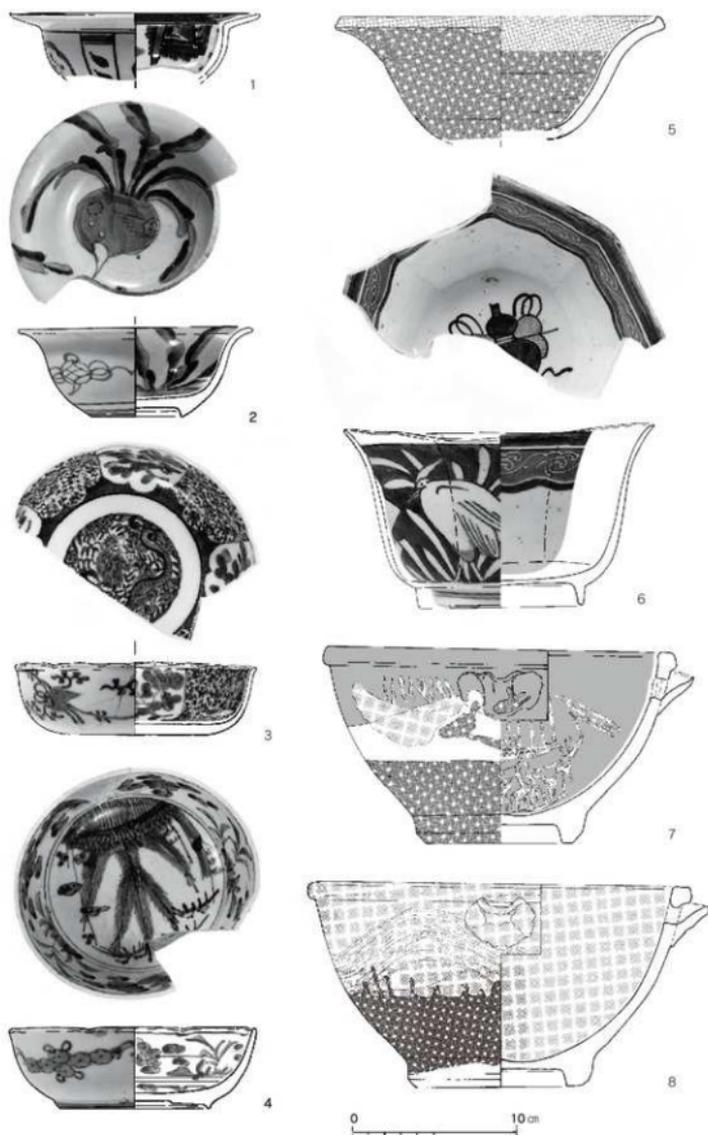
第21图 5次調査1号大土坑出土磁器実測図(1/3)

表13 5次調査出土土器・陶磁器観察表12

遺物名 （探出番号） 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元高	胎の種類	釉薬	調整・整形・裝飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大土坑1中層 2204	小皿 口径18.4 高台10.3 器高4.9 5才皿	中国	磁器 灰白色	透明釉 全面 買入あり	外面無文、内面に鼠と人歩文を呉須文染付	見込みにハリ目跡3才磨 蛇ノ目高台で白部釉施す	7割残存	肥前	19世紀後半
大土坑1上層 （黒色土） 2205	中国	口径19.9 高台18.8 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉 全面	内面口縁部は染付器内面に緑彩地に黒で篆文を撰く文様帯、見込みに外面は緑・青・紫・赤彩で鶴・草花・文文の上絵付け 器底は2重方形内に「鼠」のコボルト染付	復付輪施す	6割残存	肥前	19世紀後半
大土坑1 2206	中国	口径21.8 高台12.6 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉 全面	内面は染付地に花文の上絵付け、外面は宝文のコバルト染付	復付輪施す	5割残存	肥前	19世紀後半
大土坑1南面上層 2207	台付皿	口径19.6 高台18.3 器高8.2	陶器 灰白色	オリーブ色の灰釉全面掛け 買入あり	見込みに鉄絵で草文 台部裏面飾り掛け	台下部磨蝕	6割残存	肥前	1690 S 1780
大土坑1上層 2301	小型鉢	口径15.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は雁子文帯の間に雪ノ輪文、内面口縁部はゾミの上に樹文、内面より山水文の呉須染付	—	—	肥前	不明
大土坑1南面上層 2302	小型鉢	口径18.0 高台15.6 器高8.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	—	復付輪施す	—	肥前	不明
大土坑1 2303	小型鉢	口径14.6 高台8.8 器高4.2	磁器 灰白色	青みがかった透明釉 全面	花弁1輪、外面は宝・花鳥草文、内面は雷に草文と花鳥草文が交互に入る 見込みに篆文を呉須染付	底磨蝕ノ目輪施す	—	肥前	不明
大土坑1 2304	小型鉢	口径14.8 高台10.1 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は花鳥草文、内面は花葉文、見込みに若松文を呉須染付	蛇ノ目高台で白部釉施す	—	肥前	不明
大土坑1中層 2305	鉢	口径20.0	陶器 黄灰色 軟質	—	内外面鉄絵を掛けた上、口縁部にオリーブ色の灰釉を掛けている	不明	—	小石原	1682 S 1750
大土坑1南面上層 2306	鉢 8角鉢	口径18.5 高台10.9 器高11.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に墨引で篆文と扇形雲文を描き、意内は山水文、内面は墨引きで雲文、見込みに宝文を呉須染付	復付輪施す	—	肥前	不明
大土坑1南面上層 2307	片口鉢	口径21.4 高台18.8 器高12.0	陶器	—	外面割下半は鉄絵施布、外面割上半から内面は白化粧土を打ちハケ目掛けし、内面から外面割上半に透明釉掛け	底磨蝕施す 口唇部輪施す	—	肥前	1690 S 1750
大土坑1南面上層 2308	片口鉢	口径22.9 高台19.0 器高12.4	陶器 赤褐色	—	外面割上半から内面は白化粧土ハケ掛けし、外面は磨いた漆を塗り、下半は鉄絵施す 内面から外面口縁部は鉄絵不具の透明釉を掛け、割下半は鉄絵施布	復付輪施す	—	肥前	1690 S 1750
大土坑1南面上層 2401	鉢 方形鉢	器高11.1	瓦葺土器 表面は灰白色で、胎は黒灰色 白色粒子を多く含む	—	飯造りと思われる	不明	—	外面の磨蝕面落着しい	在池 不明
大土坑1上層 2402	鉢 方形鉢	器高7.1	土師質土器 白色 金ウソモを多く含む	—	飯造りで、1側面は調整が明（焼成に歪み）が大きい 1側面はハケ	不明	—	内面のみ	在池 不明
大土坑1南面上層 2403	鉢 楕木鉢	高台径11.1	瓦葺土器 灰白色 灰色粒子を多く含む	—	半月状の透し孔があり、見込みに孔があったような穴形の仕方をしているので、本来の器形も楕木鉢だろう	不明	—	在池	不明
大土坑1上層 （黒色土） 2404	鉢 こね鉢	口径29.6 高台15.8 器高14.4	陶器 淡黄白～暗黄灰白色 糖貝	—	内外両面以外に鉄絵を掛けた後、口縁部に黒鉄絵を掛けたうえで内外中央まで透明釉掛け	底磨蝕施す	—	小石原	不明
大土坑1中層 2405	鉢 こね鉢	口径34.3 高台18.6 器高11.8	陶器 淡黄白～黄灰白色 糖貝	—	口縁部は中まで丸めている 底面は内外外に鉄絵を高く掛ける	底磨蝕施す	—	小石原か	不明
大土坑1中層 2406	鉢 尖鉢	口径33.0	瓦葺土器 灰白色が灰色を挟む	—	口縁部から外面が傾きしており、ミガキで光沢をもつ 内面はハケ	—	—	在池	不明
大土坑1黒色土層 2407	鉢	口径38.5 高台16.0 器高15.1	陶器 暗紫色	—	外面は上半と下半に鉄絵を掛けた後、割下半に白化粧土を塗布後、帯状漆取りし、下半も鉄絵を磨いた漆取りする 内面は全面に白化粧土を掛け、内面から外面上半に透明釉を掛ける	見込みに砂目跡が暗状に付着	—	白化粧土が輪染れしている	肥前か 1690 S 1750
大土坑1南面上層 2408	鉢	口径40.0 高台18.5 器高15.6	陶器 暗緑灰色	—	内面白化粧土を磨いた漆取りし、外面割下半から内面口縁部に鉄絵を掛けた漆取りする	見込みに筋土目の理みがついており、復付部は不明	—	肥前	1690 S 1750
大土坑1黒色土層 2501	鉢	口径44.2 高台17.9 器高16.7	陶器 暗紫色	—	内外白化粧土を塗布後、外面は磨いた漆取りし、内面から外面上半に透明釉を掛ける	見込みに砂目跡が暗状に付着	—	白化粧土が輪染れしている	肥前か 1690 S 1750
大土坑1 2502	鉢	口径29.7 高台17.8 器高21.3	陶器 暗緑灰色	—	外面割下半から内面は白化粧土ハケ掛けし、外面は磨いた漆を塗り、下半は鉄絵を磨いた漆取りする 内面は全面に白化粧土を掛け、内面から外面上半に透明釉を掛けた上絵付け	見込みに砂目跡8才付磨 復付輪施す 磨蝕ノ目跡あり	—	透明釉は買入なし	肥前 1690 S 1750
大土坑1上層 2601	鉢	口径36.0 高台13.6 器高16.8	陶器 暗緑灰色	—	鉄絵を全面	内面磨り目25本単位 外面ナデ	復付輪施す	見込みに色ナ磨 磨蝕ノ目跡あり	肥前 1750 S 1860
大土坑1南面上層 2602	鉢	口径37.4 高台12.6 器高14.5	陶器 暗緑色	—	鉄絵を全面	内面磨り目23本単位 外面ナデ	復付輪施す	見込みに色ナ磨 磨蝕ノ目跡あり	肥前 1750 S 1860
大土坑1南面上層 2603	鉢	口径37.3 高台14.3 器高16.6	陶器 暗緑色	—	鉄絵を全面	内面磨り目20本単位 外面ナデ	復付輪施す	見込みに色ナ磨 磨蝕ノ目跡あり	肥前 1750 S 1860



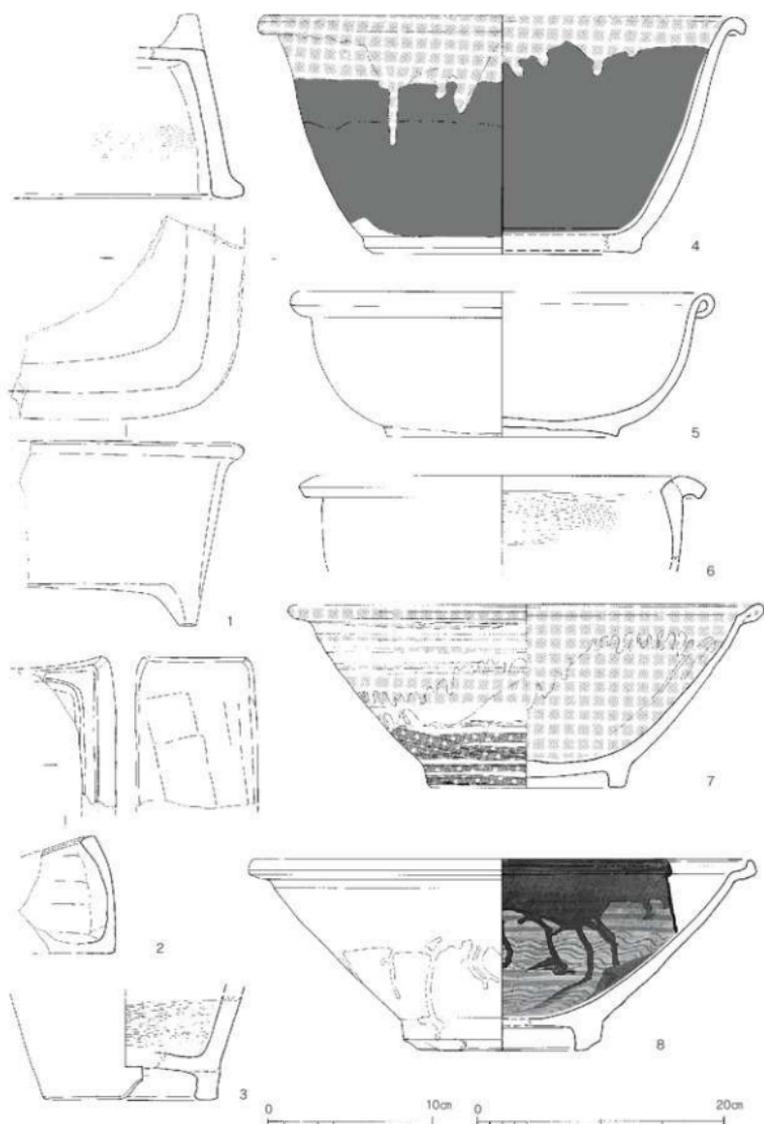
第22图 5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図5(1/3)



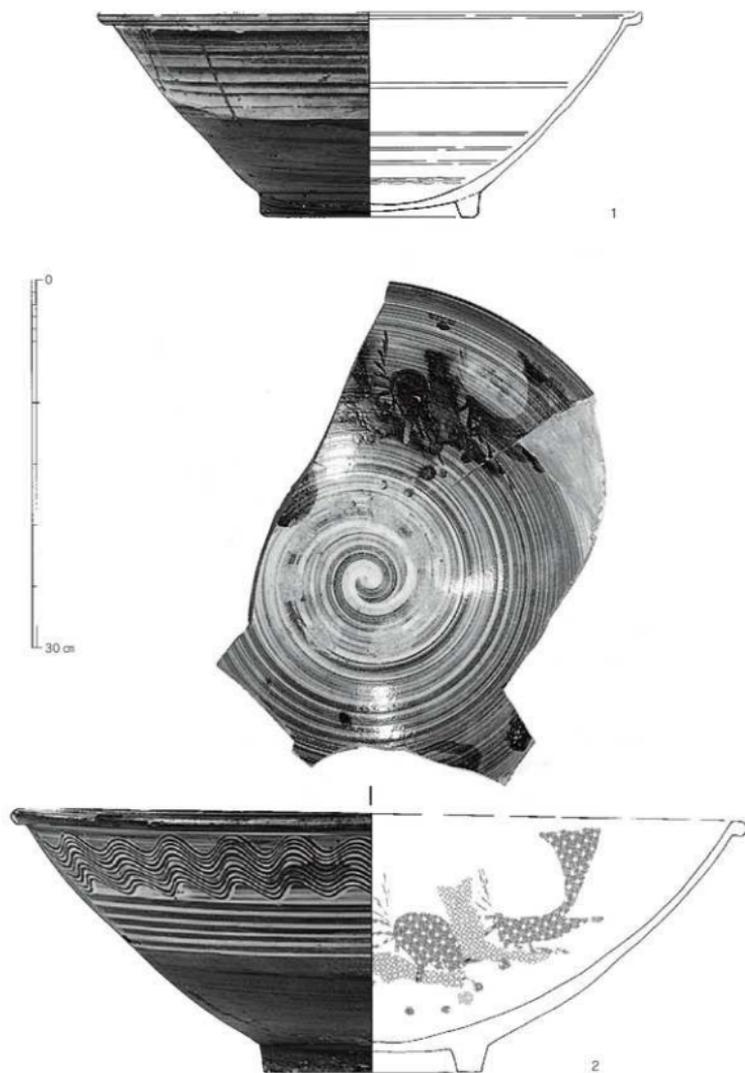
第23図 5次調査1号大土坑出土陶磁器6 (1/3)

表14 5次調査出土土器・陶磁器観察表13

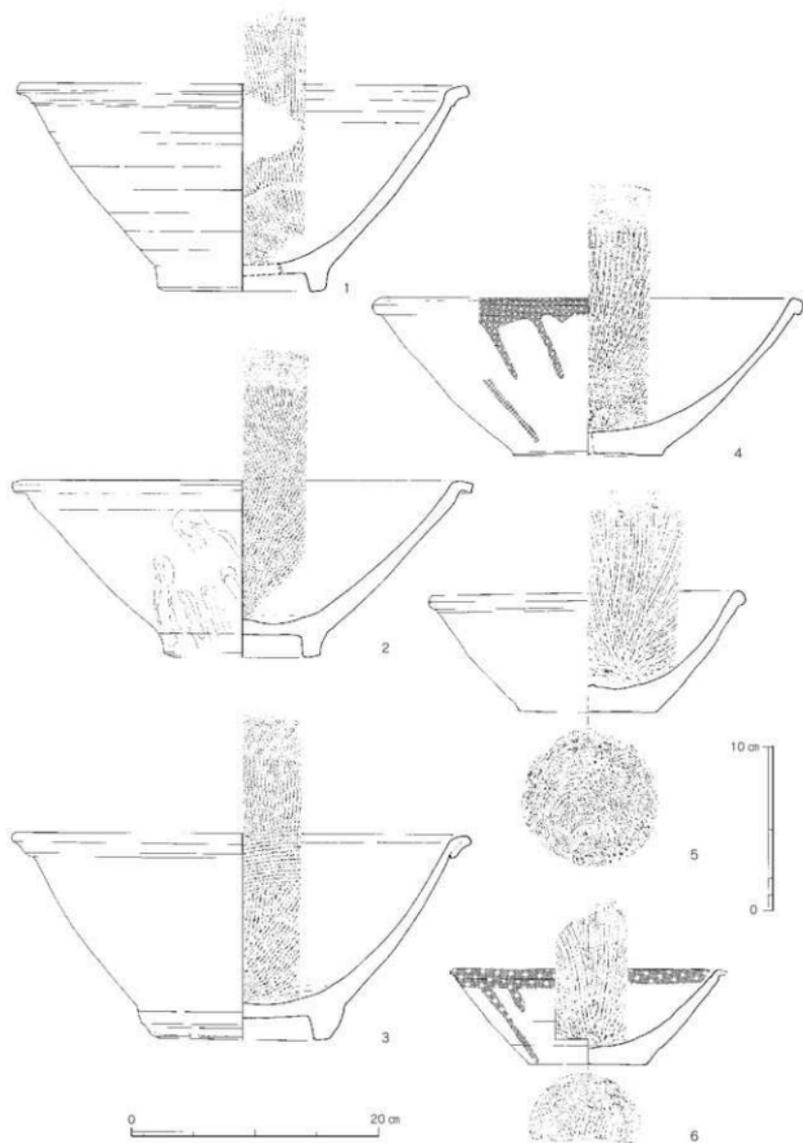
遺構名	器種	容量(cm)	胎の種類	胎差	調整・整形・裝飾技法	窯芸的技法	所 見		
							特記事項	鑑定産地	鑑定年代
種別番号 図版番号	形状 通称名	( )は復元値							
大土坑1中層 2604	小型甕鉢 底径25.8 底径19.0 器高9.0	陶器 胎差黒灰色	鉄軸を内面から外面 口縁部に掛ける	底面赤切り 磨り日は12本単位	底面磨削		肥前	1650 \	1690
大土坑1南面上層 2605	小型甕鉢 口径19.0 底径8.3 器高7.2	陶器 胎差黄褐色 軟質	鉄軸を全面に掛ける	底面赤切り 磨り日は13本単位		胎土目跡3つあり	赤色釉が内面に 付着する	小石原	不明
大土坑1中層 2606	小型甕鉢 口径15.8 高台径7.2 器高5.9	陶器 胎差褐色	発色不良のオリ ゾ色の鉄軸を口縁 部にのみ掛ける	底面赤切り 磨り日は9本単位		見込みに重ね焼きの 痕跡あり	高台に赤みあり	肥前	1650 \
大土坑1上層 2701	摺鉢 口径38.0 高台径14.2 器高11.7	陶器 胎差褐色	鉄軸を全面	内面磨り目28本単位 外面ナデ		襷付軸調整後アルミ ミナ塗布 見込みに環 状の砂目跡あり		肥前	1750 \
大土坑1上層 2702	摺鉢 口径37.5 高台径12.6 器高14.3	陶器 胎差褐色	鉄軸を外面の下半 から高台内はハケ 掛けで、内面から 外面と上半には通 常通りに掛ける	内面磨り目15本単位 外面ナデ		襷付軸調整 襷付と 見込みに胎土目跡あり	鉄軸が薄い	肥前	1750 \
大土坑1上層 2703	摺鉢 口径35.2 高台径12.0 器高12.7	陶器 胎差褐色	鉄軸を全面	内面磨り目単位 外面ナデ		襷付軸調整後アルミ ミナ塗布 見込みに環 状の砂目跡あり	底面がへたれて いる 口縁部が 湾曲しているの は口径が広い部 位のためだろう	肥前	1750 \
大土坑1中層 2704	摺鉢 口径36.0 底径12.0 器高15.8	陶器 胎差灰白色 軟質	鉄軸を全面薄く掛 ける	底面磨り施し後ナデ調整 外面カキ 目状のナデ 磨り日は16本単位	不明			小石原	不明
大土坑1中層 2801	鉢 口径(25.0) 平脚製	陶器 胎差灰色 白色粒子 入る	外面から内面口縁部は白化靴土ハケ掛けし、内面は透明釉掛け					二川焼	19世紀後半
大土坑1中層 2802	鉢 口径(24.2) 平脚製	陶器 胎差赤紫灰色	外面磨り目下位から内面は白化靴土ハケ掛けし、外面は難状 抜き取り 内面から外面口縁部は透明釉を掛け、裾部 外面は鉄軸に塗付け					肥前	18世紀後半 \
大土坑1中層 2803	火鉢 高台径(15.8) 最大径(26.0)	瓦質土器 にぶい胎差灰白色	—	割中位は外面は型押しで陶製し、内 面はオセオセ後ケズリ状のナデ 底面 は内外ハケで、高台部は外面ミガキ	不明			在池	不明
大土坑1南面上層 2804	火鉢 高台径(14.8) 最大径(18.2)	瓦質土器 にぶい胎差灰白色	—	割中位は外面は型押しで陶製し、内 面はオセオセ後ケズリ状のナデ 外面 にはミガキがあったと思われるが摩 滅している	不明			在池	焼成が不十分ら しい、外面は灰 色にとどまる
大土坑1 2805	火鉢 高台径(24.0) 最大径(25.4)	瓦質土器 灰色が黒灰色を 含む 金ウツネ を多く含む	—	外面型押しで陶製し、内面はナデ 高台部の外面はミガキ、内面はナデ	不明			在池	外面のミガキは 光沢をもつ
大土坑1南面上層 2806	火鉢 口径21.2 底径15.6 器高9.9	瓦質土器 胎差灰白色が灰色 を含む	—	内外面はナデ 跡に残った2本の位 置から本来3脚だっただろう。	不明			在池	口縁部内側と 脚部に僅かに付着 している
大土坑1上層 2807	鉢 口径(55.0) 底径(45.4) 器高16.1 植木鉢	土質瓦土器 にぶい胎差灰白色	—	手摺で内面内面を波状にする 内外ナデ				在池	内底面と外底縁 の摩滅が著しい
大土坑1中層 2808	小甕 口径16.1 底径16.0 器高18.6	土質瓦土器 にぶい胎差灰白色	—	内外ナデ 外底に板状圧痕が残る				在池	内底面と外底縁 の摩滅が著しい
大土坑1中層 2901	鉢 口径(27.7) 平脚製	陶器 胎差灰色 軟質	内面は鉄軸の上に発色不良及び灰白色を呈する跡を掛け、 外面から内面口縁部にオリゾ色の鉄軸を掛けている 最後にイチヤクを流し掛ける		不明			小石原か 外側の鉄軸は光 沢あり	不明
大土坑1南面上層 2902	小型甕鉢 口径(19.6) 平脚製	陶器 胎差灰紫褐色	内外鉄軸掛け、外面は白化靴土をハケ掛けしてなんらか の文様を置き、その上に透明釉を掛けている					肥前	18世紀後半 \
大土坑1中層 2903	小型鉢 口径24.8 高台径8.3 器高5.2 平脚製	陶器 胎差灰色 白色粒 子を含む	内外鉄軸軸厚付け	無文		底面アルミナ塗布		須賀 津村	18世紀後半 \
大土坑1南面上層 2904	鉢 口径(29.0) 底径(2.8) 器高27.5 平脚製	陶器 胎差灰白色 植貝	貫注文取付け後全面鉄軸掛け、その後外面裾部に帯 状鉄軸付け施し					小石原	19世紀中葉 \
大土坑1中層 2905	鉢 口径20.9 高台径10.6 器高19.0 平脚製	陶器 胎差灰白色	内外鉄軸をハケ掛けした後、外面割下位から内面口縁部 は白化靴土ハケ掛けし、外面に鉄軸で胎を土塗付け			高台部軸調整後アル ミナ塗布 見込みに 重ね焼きの痕跡あり		二川焼か	19世紀後半
大土坑1上層 2906	鉢 口径31.0 高台径13.4 器高30.0 平脚製	陶器 胎差褐色	内外面割下位は鉄軸ハケ掛け、その後内外中位以上に鉄 軸を掛け、外面割中位から内面口縁部は白化靴土を 重ね焼きの痕跡あり			高台部軸調整後アル ミナ塗布 見込みに 重ね焼きの痕跡あり		肥前	18世紀後半 \
大土坑1中層 2907	小型鉢 口径(14.0) 平脚製	陶器 胎差灰色	内外面黒釉掛け	無文				肥前	18世紀後半 \
大土坑1中層 2908	小型甕 口径(16.4) 平脚製	陶器 胎差灰色	薄い鉄軸全面掛け	口縁部外面の割み目は、施されてな い部分もあるので認別の物か不明		口唇部軸調整		小石原	不明



第24図 5次調査1号大土坑出土土器・陶器実測図2(5~8は1/4、他は1/3)



第25图 5次調査1号大土坑出土陶器実測图1(1/4)



第26図 5次調査1号大土坑出土陶器実測図2(1・2・3は1/4・他は1/3)

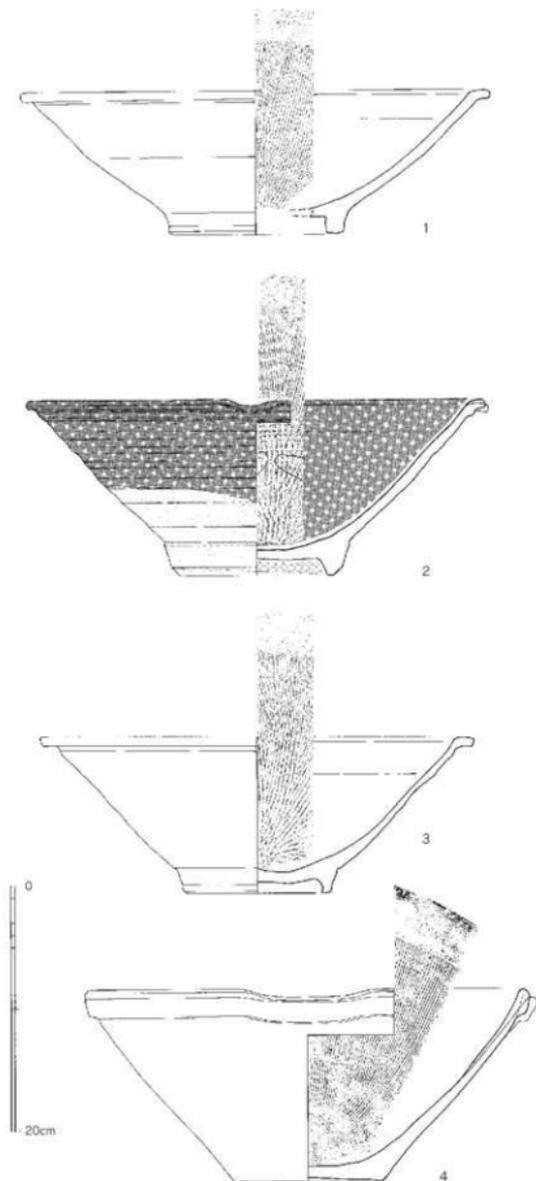
目跡は中央部に1つ残るが、底部残存部が1/3なので、本来他にもあったかもしれない。

12図5は陶器の鉢で、外面中央部に軸が掛かっていないのは、上下で掛け分けたことを示している。12図9は陶器の火入れで、口縁部は小さく欠損しているので、煙管の灰落としの可能性もある。12図13は土師質土器の方形鉢で、側面が平坦であることから板作りと考えられる。

13図2・3は肥前産の京焼風陶器碗で、高台内に円などの刻印はない。13図6は染付蓋で、残欠の形状から、中央に稜線をもつ細長い板状のつまみが付くものと思われる。13図13は瓦質土器の火鉢で、穿孔部分はわずかだが、単なる円坑ではない可能性がある。13図14は陶器の小皿の底部を転用した円盤形製品で、見込みに胎土目跡が3つ付着し、軸調や胎から肥前産陶器皿とわかる。

14図2は肥前産の陶器碗で、見込みに鉄絵の竹笹文が入る珍しいもの。14図6は高台付皿で、高台と皿底との接合部には隙間が残る。14図13は胎から瀬戸産のものとなる。14図11と11図7は軸調や外面文様など類似している。

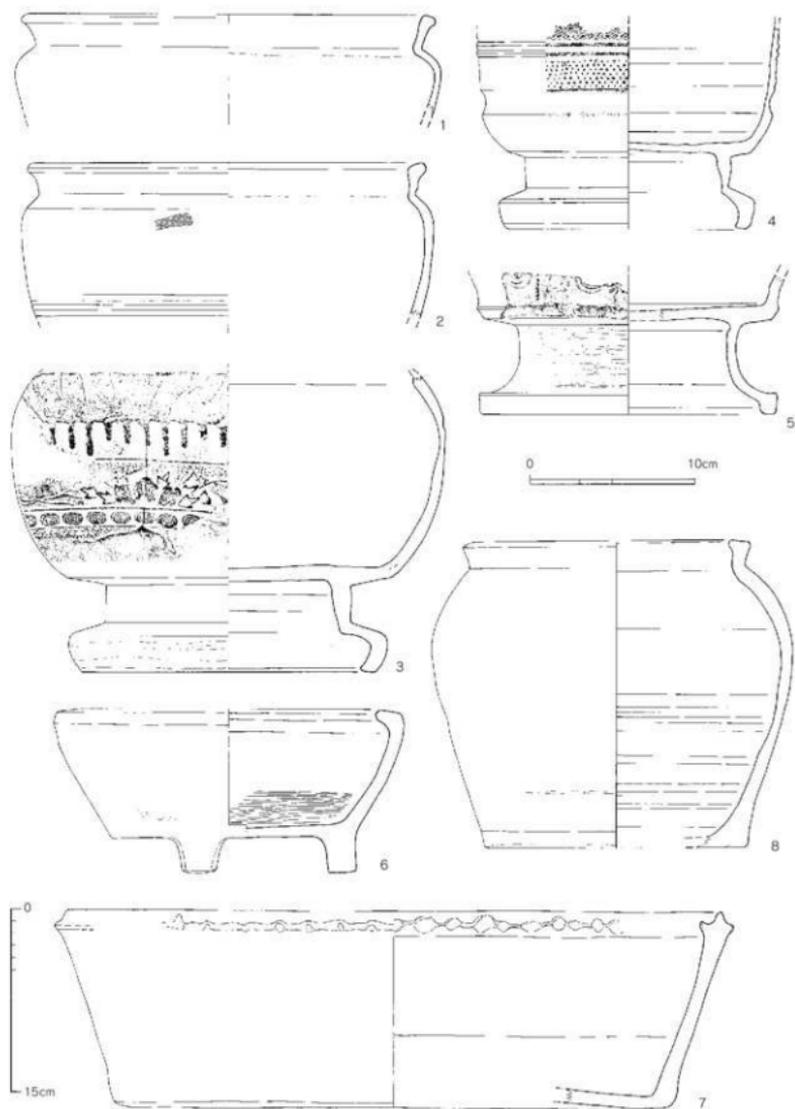
15図1は陶器の摺鉢で、平底であることから1650年以降の可能性が高い。15図5は



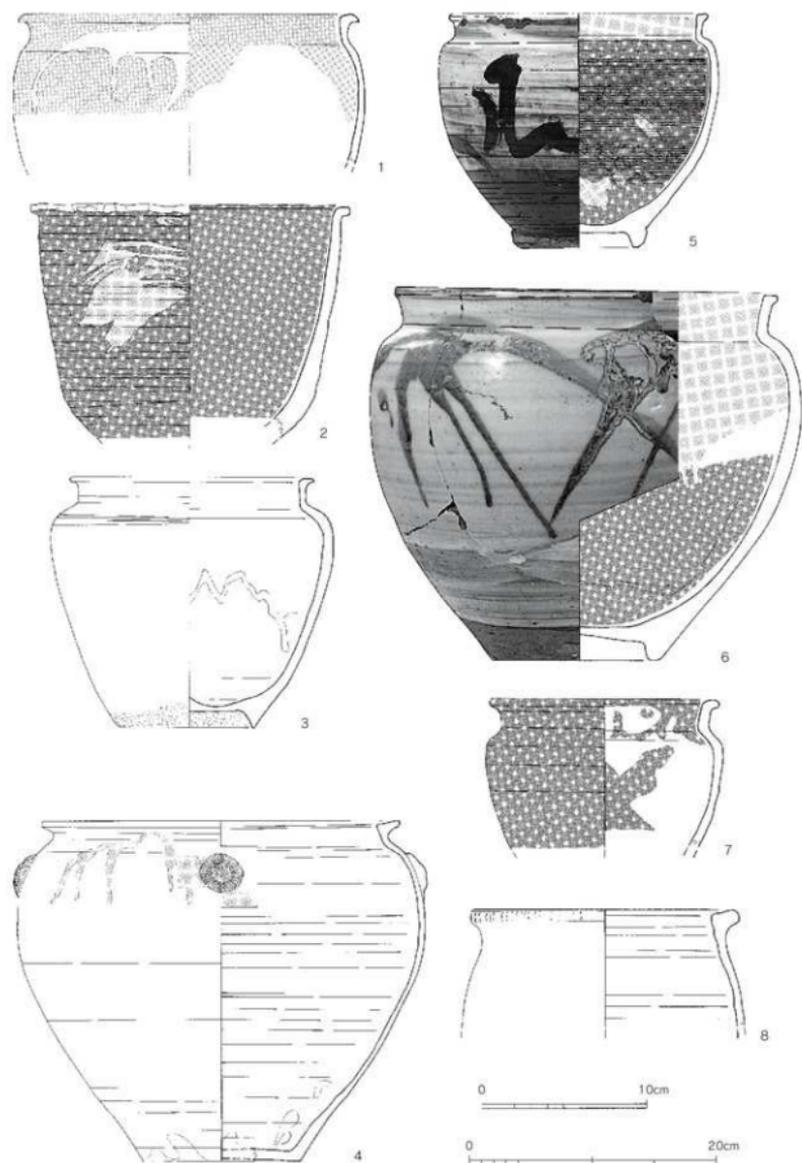
第27図 5次調査1号大土坑出土陶器実測図3(1/4)

表15 5次調査出土土器・陶磁器観察表14

遺構名 探検番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・裝飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	埋定産地	埋定年代
大土坑1中期 31001	甕	口径(33.0)	土質土器 にぶい煙灰白色	—	外面サテ、内面口の細いハケ	不明	内面は口縁部のみ、外面は上がが裏面磨光している	在地	不明
大土坑1南面上層 31002	鉢 平刷篋	口径(36.0)	陶磁 淡紫灰白色	内外側下位は鉄軸ハケ掛け、外面側下位から内面口縁部は白化剤土をハケ掛けし、外面下位は骨状焼き取り後、再度白化剤土をハケ掛けし、内面口縁部は骨状焼き取り後、再度白化剤土をハケ掛けし、内外側下位までオリーブ色の反軸を掛ける	内外側下位は鉄軸ハケ掛け、外面側下位から内面口縁部は白化剤土をハケ掛けし、外面下位は骨状焼き取り後、再度白化剤土をハケ掛けし、内面口縁部は骨状焼き取り後、再度白化剤土をハケ掛けし、内外側下位までオリーブ色の反軸を掛ける	—	弓野焼か	肥前	18世紀後半 19世紀中葉
大土坑1上層 31003	鉢 平刷篋	高台径13.3	陶磁 暗灰白色	内外側下位は鉄軸ハケ掛け、外面側下位は白化剤土をハケ掛けし、外面下位は骨状焼き取り後、再度白化剤土をハケ掛けし、内外側下位までオリーブ色の反軸を掛ける	内外側下位は鉄軸ハケ掛け、外面側下位は白化剤土をハケ掛けし、外面下位は骨状焼き取り後、再度白化剤土をハケ掛けし、内外側下位までオリーブ色の反軸を掛ける	—	弓野焼か	肥前	18世紀後半 19世紀中葉
大土坑1黒色土 31004	小鉢 蓋物	口径9.0 高台径4.8 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	側部外面に墨引きで散文を呉須染付	貫付輪漉ぎ 内面口縁部輪漉ぎ	—	肥前	不明
大土坑1中期 31002	小鉢 蓋物	口径9.3 高台径4.8 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	側部外面に靑文を呉須染付	貫付輪漉ぎ 内面口縁部輪漉ぎ	—	肥前	不明
大土坑1中期 31003	小鉢 蓋物	口径10.0 高台径5.6 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文と草文、見込みに5弁花文を呉須染付	貫付輪漉ぎ	7割残存	肥前	1780 1810
大土坑1南面上層 31004	小鉢 二段笠形	高台径5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	側部外面と見込みに墨と靑文、口縁部は内外散文か	高台部輪漉ぎ	—	肥前	不明
大土坑1中期 31005	小鉢 蓋物	口径11.7 高台径5.5 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	貫付輪漉ぎ 見込みに蛇ノ目輪漉ぎ	7割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑1 31006	小鉢 蓋物	口径12.2 高台径6.0 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に丸文散らしを呉須染付	貫付輪漉ぎ 内面口縁部輪漉ぎ	ほぼ完全	肥前	1710 1750
大土坑1中期 31007	小鉢 香炉か	口径(10.3) 高台径4.7 器高5.0	陶磁 暗青灰色	鉄軸を内面口縁部から外面側中位まで掛ける	高台は張り付け後削り出し	高台部露胎 見込みに重ね焼き痕あり	鉄軸は灰色不具内外変色がない	肥前	不明
大土坑1中期 31008	小鉢 香炉か	口径(12.1) 高台径5.4 器高5.3	陶磁 明濁褐色	鉄軸を内面口縁部から外面側中位まで掛ける	高台は張り付け後削り出し	高台部露胎	胎は灰色だが、焼成不良のためだろう	肥前	不明
大土坑1南面上層 31009 図版1	小鉢 変形	口径12.0 高台径5.8 器高6.2	陶磁 暗灰白色	内外両底縁の上に長石軸を掛け	口縁部を4ヵ所押さえて花文を作る	高台部露胎	9割残存	萩焼	不明
大土坑1中期 31010	小鉢 変形	口径11.1 高台径5.7 器高4.3	磁器 灰白色	青磁釉を全面に掛ける	外面無文、内面口縁部は赤彩で散文と花雲文と見込みに蔦と燈籠文の緑彩で燈籠文のタタキを、燈籠文自体は黒彩で描き、見込みに黒・黒彩で描く水車と黄・黒彩の亀文が交互に上絵付け	高台部露胎	—	肥前	不明
大土坑1南面上層 31011 図版1	小鉢 変形	口径19.6 高台径9.6 器高7.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	側部外面と内面口縁部の意匠に農作風景 見込みに宝珠文を呉須染付	貫付輪漉ぎ	—	肥前	不明
大土坑1上層 31012	小鉢 香炉か	口径9.7 高台径4.5 器高4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	側部外面に花雲彩を呉須染付	貫付輪漉ぎ	口縁部に付着している灰化物は使用によるものだろう	肥前	不明
大土坑1 31013	小鉢 香炉	口径8.4 高台径5.8 器高6.3	陶磁 灰白色	青磁釉を外底以外全面に掛ける	無文で、外面の形状のものは意匠したものではないと考えた	外底に緑に砂目付着	外底は輪漉ぎに軸が掛かっている。上げ状況なので周縁部が剥落している	肥前	不明
大土坑1南面上層 31014	小鉢 花弁形	口径9.1 高台径6.5 器高7.8	陶磁 暗紫灰色	白化剤土を外側下位から内面口縁部に掛けた後、側下位は輪漉ぎし、外面に青霞文の鉄軸を掛く	白化剤土を外側下位から内面口縁部に掛けた後、側下位は輪漉ぎし、外面に青霞文の鉄軸を掛く 底部に墨引きあり	側下位輪漉ぎ、 外部露胎	胎がびつつか 外部露胎	不明	
大土坑1 31015	小鉢 花弁形	口径9.1 高台径6.5 器高7.8	陶磁 暗紫灰色	白化剤土を外側下位から内面口縁部に掛けた後、側下位は輪漉ぎし、外面に青霞文の鉄軸を掛く 底部に墨引きあり	白化剤土を外側下位から内面口縁部に掛けた後、側下位は輪漉ぎし、外面に青霞文の鉄軸を掛く 底部に墨引きあり	側下位輪漉ぎ、 外部露胎	墨書きは「文」まで読める	肥前	不明
大土坑1南面上層 31016	小鉢 鉢形	口径15.6 高台径5.7 器高7.9	陶磁 暗紫灰色	内外側下位は鉄軸ハケ掛け、外面側下位から内面口縁部は白化剤土をハケ掛けし、外面下位は骨状焼き取り後、内外側下位までオリーブ色の反軸を掛ける	内外側下位は鉄軸ハケ掛け、外面側下位から内面口縁部は白化剤土をハケ掛けし、外面下位は骨状焼き取り後、内外側下位までオリーブ色の反軸を掛ける	貫付輪漉ぎ	口縁下に貫指体か確認した鉄軸あり	肥前	不明
大土坑1南面上層 31017	小鉢 鉢形	口径11.4 高台径4.9 器高6.0	陶磁 暗灰色で一部黒灰色	赤紫色の鉄軸全面掛け	外面側部の浅緑は意匠的な物か不明	外面側下位砂目付着甚しい	—	小石塚	不明
大土坑1中期 31018	鉢 鉢形	口径12.4	陶磁 暗紫灰色	白化剤土を外側下位から内面口縁部に掛けた後、外面に花文・散文の鉄軸を掛き、暗い透明釉を全面に掛ける 貫	白化剤土を外側下位から内面口縁部に掛けた後、外面に花文・散文の鉄軸を掛き、暗い透明釉を全面に掛ける 貫	—	—	肥前	不明
大土坑1上層 31019	鉢 政重	口径14.1 高台径4.8 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に割れた散敷花雲文を呉須染付	貫付輪漉ぎ 内面口縁部と外面高台部高台部輪漉ぎ	7割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑1中期 32001	瓶 壺形のため不明	口径2.7 高台径5.5 器高17.2	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	底部は中や上げ底	底部輪漉ぎ	—	瀬戸か	19世紀後半
大土坑1黒色土 3202	壺 徳利	口径3.0 高台径7.4 器高21.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	底部は上げ底でへたれている 外面口縁部はタタキ、側部は花雲散文をコバルト染付	貫付輪漉ぎ	—	肥前	19世紀後半



第28図 5次調査1号大土坑出土土器・陶器実測図2(7は1/4、他は1/3)



第29図 5次調査1号大土坑出土陶器実測図4 (1・4~6は1/4、他は1/3)

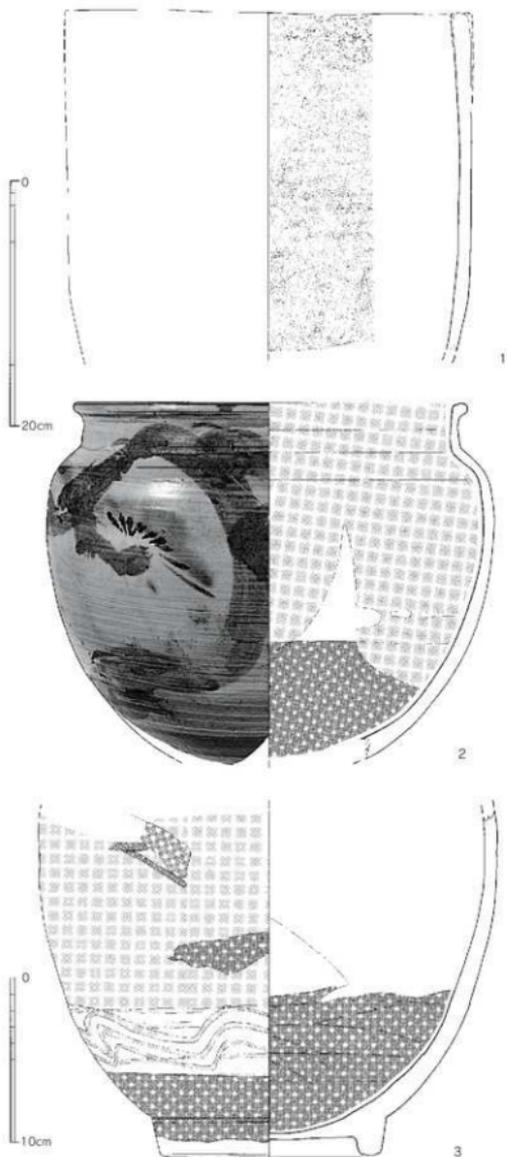
磁器の器形を模した陶器の髪油瓶であり、ざらつく胎に特徴がある。

15図6は陶器の灯明受皿で、下皿の外底は柱部との接合後に削られている。15図11は陶器の摺鉢で、胎は小石原焼に似るが、口縁部の形態は口縁部のみ鉄軸を施す肥前のものであるので、焼成不良によるものと考えられる。

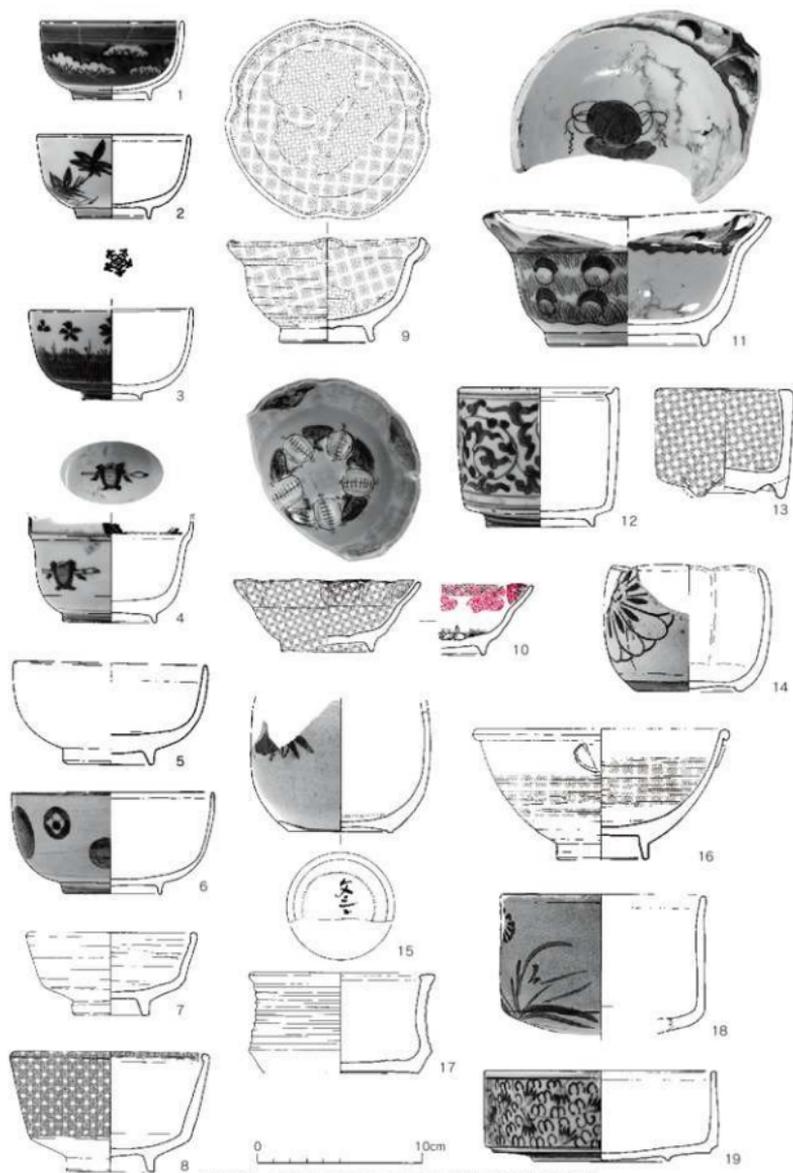
16図1から4は同じモチーフの磁器小碗だが、2・4は厚手な点で共通している。16図の19から21は同じモチーフの碗だが、19・20はモチーフと底部の厚い作りが一致し、焼成が異なるので、同じ窯で異なる陶工が絵を入れたものではなかろうか。16図22の磁器碗は焼成不良で赤変部分がある。

17図6は陶胎染付の碗で、18世紀前葉のものより文様が退化しているので、18世紀中葉のものと考えられる。17図10と11、15と16は同じモチーフであるので同一セットで購入したものでしょう。17図12は陶器の碗で、外面の青紫色は鉄絵が軸変したものである。18図4・5は磁器の碗で、4は見込みを蛇ノ目軸刺ぎせずに重ね焼きしているが、5は蛇ノ目軸刺ぎせずにアルミナを塗布し、その上に透明釉を描けている。

18図14・15・19は同じモチーフで1揃えのセットだろう。18図21・22は土師質土器



第30図 5次調査1号大土坑出土土器・陶器実測図3(3は1/3、他は1/4)



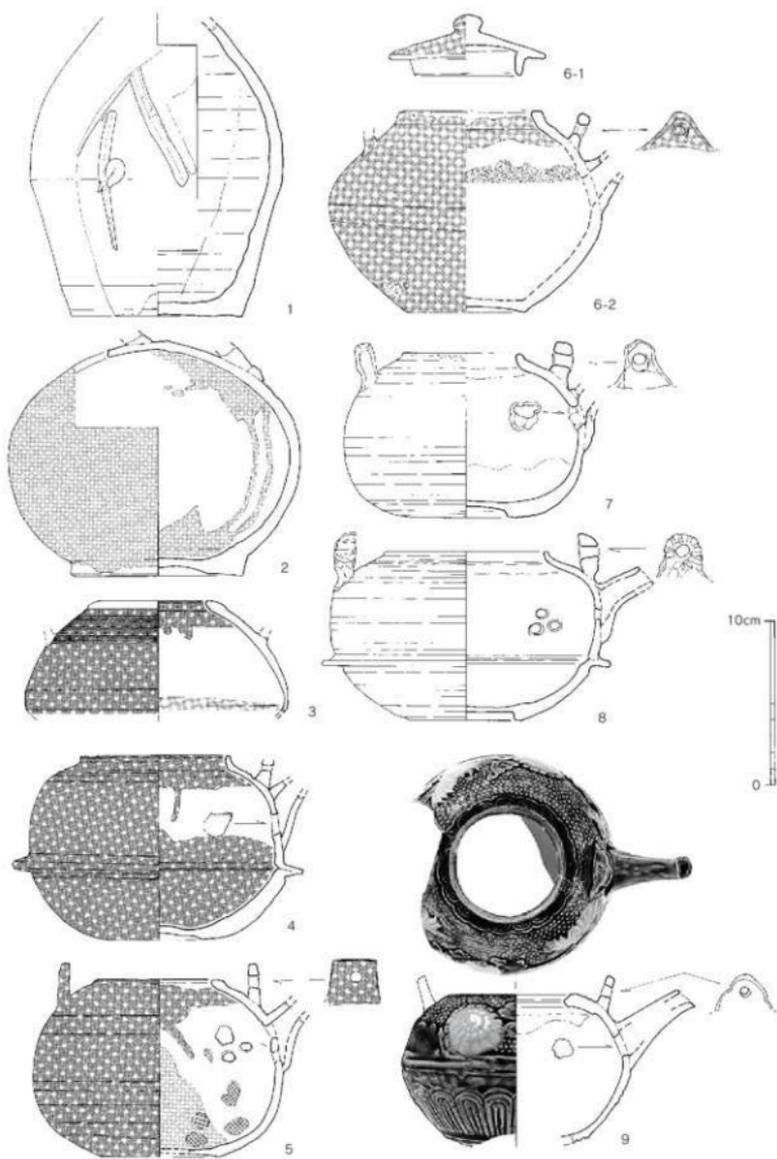
第31图 5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図7(1/3)



第32図 5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図8(1/3)

表16 5次調査出土土器・陶磁器観察表15

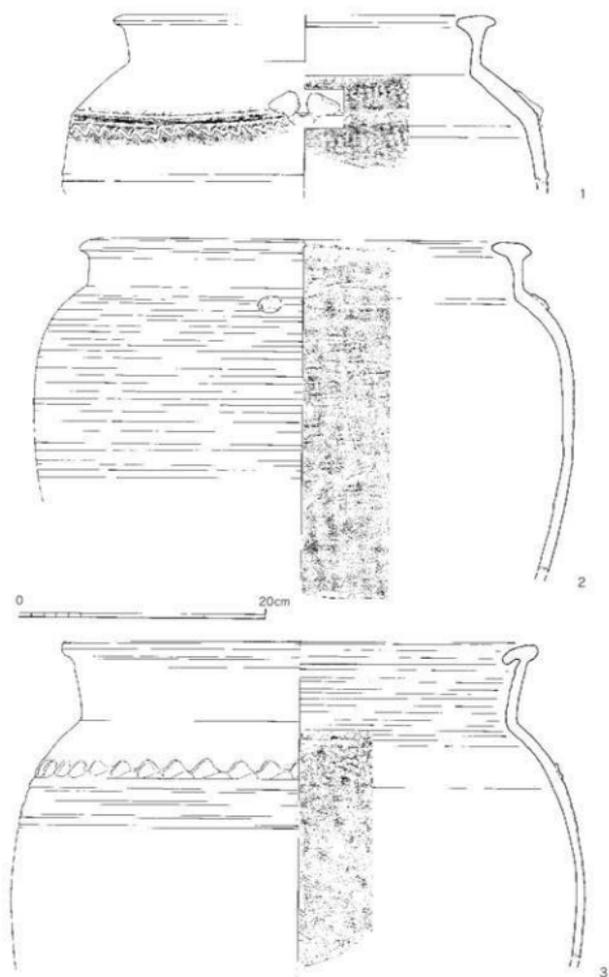
遺物名 検出番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯品の技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大土坑1 3203	甌 甌形	高台径7.4	磁器 灰白色	外面は頸部に胎物を掛け、胴部に輪痕文とその間に舟形文のセットを上と下2つ呉須刺付。最後に胴部まで透明釉掛け	貫付軸溝	肥前	19世紀中葉		
大土坑1南面上層 3204 図版1	甌 弘花甌 甌1口	口径8.3 高台径7.5 最大径15.5	陶器 灰黄色	鉄軸全面厚掛け	耳は手捏ね	貫付軸溝 後、アルミナ 散布	肥前	近世唐津 か、 不明	
大土坑1南面上層 3205	小甌 甌形	高台径6.6	陶器 灰黄色	長行軸を全面厚付けた後、光沢のない胎物軸中位より上に厚付け	貝目付着	貝目から17世紀代 だろう	肥前	17世紀代	
大土坑1南面上層 3206	甌 甌状	口径8.0 高台径9.1 最大径7.0	陶器 灰黄色	胴部から下の外面に白化粘土をハケ掛けし、胴部から上は内外鉄軸を掛け、下は透明釉を掛ける	貫付軸溝	肥前	18世紀代		
大土坑1 3207	甌 甌状	高台径15.3 最大径8.4	陶器 黄褐色	白化粘土を胴部以下に掛けた後、胴部以上に内外鉄軸掛け 外面鉄軸の取文	貫付軸溝 後、アルミナ 散布	透明釉を上掛けして いない	肥前	18世紀代	
大土坑1南面上層 3208	甌 弘花甌 甌1口	口径40.9 高台径15.3 最大径16.8	磁器 灰白色	透明釉を内面1口縁部 から外面に掛ける	外面に草花文をコバルト染付 耳は手捏ねか	—	肥前	不明	
大土坑1中層 3209	甌 甌形	口径1.8	陶器 胎灰色	胎物を全面に掛ける	受け部に穿孔と注口あり	—	小石原	不明	
大土坑1中層 32010	甌 甌形	高台径6.4 最大径10.2	陶器 胎灰色	鉄軸を外面に全面厚付 ます、色調の薄い方を胴にして置け、その境目を上下逆にして置けているので、内面はまつ 野なる胎物かかっているように見える	貫付軸溝 後、アルミナ 散布	肥前	不明		
大土坑1中層 32011	甌 甌形	高台径5.8 最大径8.4	陶器 黄褐色	鉄軸を外面に全面厚付 ける	注口は欠損しているが、肩部の孔 は残る	貫付軸溝 後、アルミナ 散布	肥前	不明	
大土坑1中層 32012	甌 甌形	高台径6.8 最大径12.2	陶器 胎灰色	緑色の灰軸を外面 底部以外厚付	外底は削り出し	高台置胎	肥前	1690 1780	
大土坑1中層 32013	甌 甌形	高台径7.3 最大径12.5	陶器 胎灰色	緑色の灰軸を外面 底部以外厚付	外底は削り出し	貫付軸溝 後、アルミナ 散布	肥前	1690 1780	
大土坑1南面上層 32014	甌 甌形	口径5.1 最大径12.2	陶器 胎灰色	緑色の灰軸を外面 から内面1口縁部に掛 けた後、最後にイッ チンを流し掛け	外底は削り出し	貫付軸溝 後、アルミナ 散布	肥前	1690 1780	
大土坑1南面上層 32015	小型甌 甌形	高台径6.8 最大径6.6	陶器 胎灰色	白化粘土を全面厚付下位から内面1口縁部にハケ掛けした後、中 位を胎物抜き取りし、1口縁部には鉄軸、胴部には黄色不良の オリープ色の灰軸と緑色の灰軸を流し掛け	底置胎	胴部以下残存	肥前	1600 1690	
大土坑1中層 3301	甌 甌形	口径(10.4) 最大径15.2	陶器 灰黄色	外面に山形の下の「ト」を模した、オリープ色の灰軸に薬品輪 を流し掛けし、内面は鉄軸を掛ける	外底は削り出し	外面は胎の発色不良 部分がある	小石原	不明	
大土坑1上層 3302	甌 甌形	高台径10.4 最大径17.8	陶器 胎灰色	胎物を底面以外に全 面に厚付	挿付の把手がつく	貫付軸溝 後、アルミナ 散布	肥前	不明	
大土坑1 3303	土甌 甌形	口径6.1 最大径14.9	陶器 暗赤紫灰色	鉄軸を内面1口縁部から外面厚付上下に掛け 外面胴部に沈線 把手は板状	貫付軸溝	肥前	不明		
大土坑1中層 3304	土甌 甌形	口径(9.1) 口径5.4 最大径11.7	陶器 黄灰色	鉄軸を内面中位と 外面脚以下以外全面 厚付	脚で上・下を接合 外面胴部に沈線 外底は削り出しで唐轆底状	底置胎	外底使用黄土	小石原	不明
大土坑1 3305	土甌 甌形	口径7.8 高台径7.1 最大径9.8	陶器 暗赤紫灰色	胎物を内面1口縁部から外面厚付中位に掛け 把手は板状	貫付軸溝	内面中位に発色あり	肥前	不明	
大土坑1黒色土 3306-1 図版1	甌 土甌	口径6.6 つまみ径1.4 最大径3.7	陶器 暗褐色	銅緑釉を外面に掛ける	受け胎物	ほぼ完成	肥前	19世紀前半	
大土坑1黒色土 3306-2 図版1	甌 土甌	口径8.6 口径7.2 最大径12.2	陶器 暗褐色	銅緑釉を外面に掛ける	注口欠損 内面に鉄 軸が充満している	19世紀前半			
大土坑1中層 3307	土甌 甌形	口径40.9 高台径15.3 最大径16.8	陶器 黄白～灰色 軟質	胎物を内面1口縁部から外面厚付中位に掛け 内面厚付下はオリ ープ色の灰軸 把手は型押し成型	底置胎	地成不良で、胎は軟 質、軸の色も悪い	肥前	不明	
大土坑1中層 3308	土甌 甌形	口径40.9 高台径15.3 最大径16.8	陶器 灰緑灰白色 軟質 粗孔	胎物を内面1口縁部から外面厚付中位に掛け 内面厚付下は胎物 把手は型押し成型	貫付軸溝	内面に使用黄土あり	肥前	不明	
大土坑1中層 3309	土甌 甌形	口径7.2 最大径13.7	磁器 灰白色	管作りで、型押しで外面に菊花文や珠文などを彫削している 鉄軸を外側下位まで掛け、量や1口縁部は只須が施し、菊花 部は胎物抜き取り 外面の厚付下位以下と内面1口縁部下位以下 は透明釉 外面厚付下位には凹線が2条ある	底置胎	底面保存	肥前	不明	
大土坑1 3401	甌 平脚甌	口径(31.0) 最大径(39.4)	陶器 暗褐色	鉄軸全面厚付	外面胴部には沈線刺付文と浮文、内面胴 部には格子目タタキの当て具がある が、外面はナゲ漆されている	—	肥前	18世紀前半	
大土坑1中層 3402	甌 甌形	口径36.0 最大径(44.0)	陶器 暗褐色	鉄軸全面厚付	外面胴部は肩口突帯と2条の沈線、内 面胴部には格子目タタキの当て具がある が、外面はナゲ漆されている	貫付軸溝	沈線は平行なので、 1つの工具で一度に 削いている 内面は 発色不良なので磨 削して施されている	肥前	18世紀前半
大土坑1中層 3403	甌 甌形	口径38.0 最大径(46.4)	陶器 灰黄色	鉄軸高く全面厚付	外面胴部は格子目タタキの当て具がある が、外面はナゲ漆されている	貫付軸溝	内面は胎物 は胎物	肥前	17世紀後半



第33图 5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図9(1/3)

の小皿で、22の外面の火を受けた赤変しているラインは、21の径と一致するので、重ねて焼かれたものではなかろうか。

19図8は磁器の小皿で、見込みのアルミナが変色しているのは灯明皿として使用したためだろう。19図9・10は陶器の小皿で胎から肥前産と判断される。19図14は磁器の小皿で、口縁部の



第34図 5次調査1号大土坑出土陶器実測図5(1/4)

打ち欠き部が黒変していることから、灯明皿として使用していたことがわかる。

20図7は磁器小皿で内面胴部に花文が配置されるというモチーフの構成が珍しい。

21図10は陶器小皿で口縁部の黒化は灯明皿として使用したためのもの。

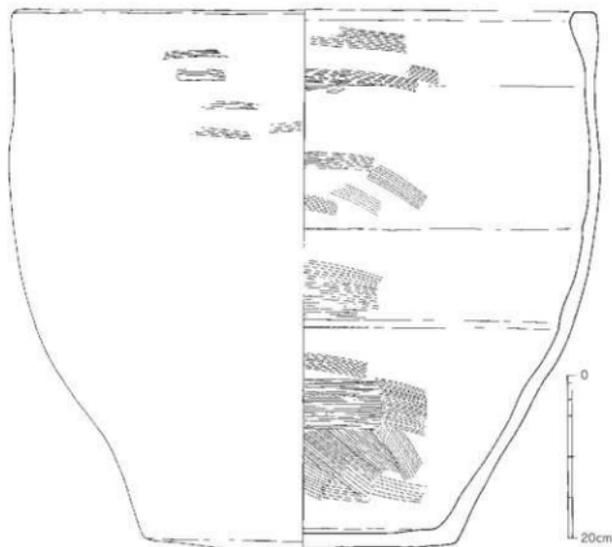
22図5は磁器の中皿で、多色の上絵があるが、発色がよくない。

23図3は磁器の皿で、欠損ではなく高台がなく、高台の付く位置には蛇ノ目軸刺ぎがあるのみで、成型途中での失敗品か、試作品なのか、類例を見ない。23図8は陶器の片口鉢で、内面から外面口縁部の透明釉は発色が悪く白濁する。

24図2は土師質土器の鉢で、内外面とも変色がなく、火入れや火鉢ではないようだ。24図3は瓦質の鉢で、本来器高が高いものだったようだが、欠損部を打ち欠いて新たな口縁部に整形して再利用している。24図4は陶器のこね鉢で、口縁部の釉は、灰白色の釉垂れがあるので白化粧土を使った可能性もあるが、藁灰釉の窯変とした。また、24図4と5は胎が近似しており、同じ系統の時期差の可能性もある。24図8は陶器の鉢で、畳付には見込みと同じように胎土目跡が残るはずだが、胎土目があったと思われる部分が剥落している。

25図1・2は陶器の鉢で、1は白化粧土の発色が悪く、掛け方も粗いことから、肥前産でなく二川焼の可能性もある。2は見込みに重ね焼き用の砂目跡があるのに、外底にはないので、重ね焼きの最下段であったのかも知れない。

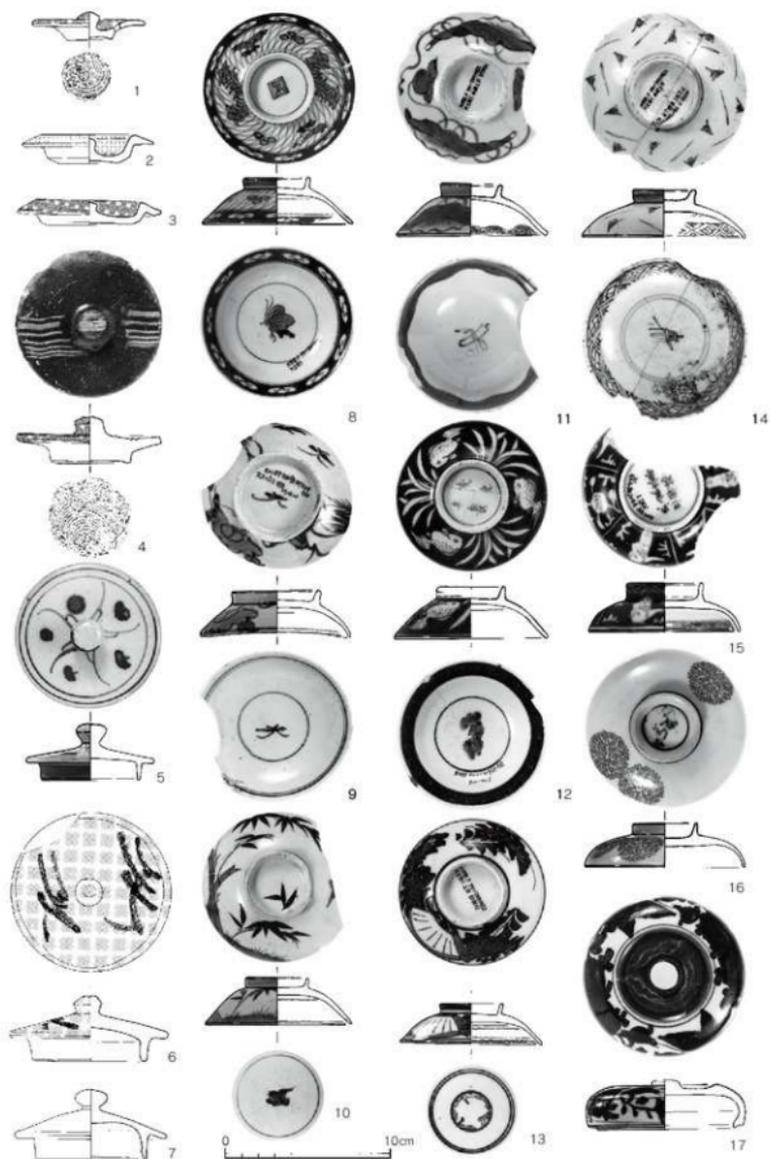
26図1・2・4から6は陶器の摺鉢で、1と2は見込みが使用により摩滅しているが、4から6は摩滅していない。小型の摺鉢であるためだろう。5は摺り目に赤色顔料が入っているのでベンガラを粉末にしたものではないか。6の見込みの重ね焼き痕は目跡ではなく、重ねた個体の底部の痕跡が残ったもの。



第35図 5次調査1号大土坑出土土器実測図(1/6)

表17 5次調査出土土器・陶磁器観察表16

遺物番号 採掘番号 図版番号	遺物名 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・裝飾技法	窯詰の技法	所 見			
							特記事項	鑑定産地	鑑定年代	
大土坑1 3681 3681	大甕 口径72.0 器高66.3 底径38.4			土質質土器 にぶい黄灰色		内面細かい目のハケ	不明	在地	不明	
大土坑1 3682 3682 3682	黒土 甕蓋 急須蓋 水注蓋	径径6.8 つまみ径2.0 器高1.7 径径8.2 つまみ径1.1 器高1.7	陶器	黒釉 にぶい暗黄灰色	黒釉を上塗りのみ	無文 底彫糸切り	下半輪割ぎ	ほぼ完成	肥前	不明
大土坑1 3683 3683	甕蓋 土瓶蓋	径径8.2 つまみ径1.1 器高1.7 径径8.8 つまみ径1.2 器高1.5	陶器	黄緑灰色の灰釉 にぶい黄灰色	黒釉を上塗りのみ	無文 底彫へら切り	下半輪割ぎ	ほぼ完成	肥前	不明
大土坑1 3684 3684 3684	中甕 土瓶蓋	径径8.9 つまみ径1.8 器高3.0	陶器	暗紫灰色	鉄釉を上塗りのみ	上面に膠状輪割ぎを文様としている 底彫糸切り	下半輪割	ほぼ完成	肥前	不明
大土坑1 3685 3685	中甕 土瓶蓋	径径8.0 つまみ径1.8 器高3.5	陶器	暗紫灰色		白化粧土を掛けた上に鉄絵と赤彩で文様を上絵捺し、 透明釉を上塗りに掛ける	下半輪割ぎ	完成	肥前	不明
大土坑1 3686 3686 3686	南甕上押 土瓶蓋	径径9.8 つまみ径1.6 器高4.1	陶器	灰色		長石釉を上塗りに掛けて、鉄絵を上絵捺さす	下半輪割ぎ	9割残存	長門か	不明
大土坑1 3687 3687	上甕 土瓶蓋	径径9.2 つまみ径2.0 器高4.4	陶器	灰色		透明釉を上塗りに掛ける	下半輪割ぎ	9割残存	不明	不明
大土坑1 3688 3688	甕蓋	径径10.0 つまみ径4.0 器高2.9	磁器	透明 完成のため不明	透明釉 全面	内外面口縁部は墨引きの雲文帯で、外 面は靑目文内に桔梗文、内面天井部は 模文。裏筋は「二重圓に」を呉須染付	受け部輪割ぎ	完成	肥前	1820 S 1860
大土坑1 3689 3689	中甕	径径8.9 つまみ径5.4 器高2.8	磁器	灰白色	透明釉 全面	外面は牡丹文と模文で、内外面天井 部に模文を呉須染付	受け部輪割ぎ 砂目 付着	9割残存	肥前	1780 S 1810
大土坑1 3690 3690	甕蓋	径径8.9 つまみ径3.8 器高3.0	磁器	灰白色	透明釉 全面	外面は竹文、内面天井部は鳥文を呉 須染付	受け部輪割ぎ	9割残存	肥前	19世紀後半 S 20世紀前半
大土坑1 3691 3691	南甕上押 土瓶蓋	径径9.6 つまみ径4.0 器高3.2	陶器	灰白色	透明釉 全面	外面は牡丹文、内面は口縁部がズミ の状文様、天井部は鳥文を呉須染 付	受け部輪割ぎ 砂目 付着	9割残存	肥前	1820 S 1860
大土坑1 3692 3692	甕蓋	径径9.4 つまみ径4.1 器高3.2	磁器	灰白色	透明釉 全面	外面は墨引きの金糸と水琴文、内面は 口縁部が墨引きの状文帯、天井部は 松文。裏筋は「成化年製」を呉須染 付	受け部輪割ぎ 砂目 付着	完成	肥前	1820 S 1860
大土坑1 3693 3693	上甕	径径8.9 つまみ径3.8 器高2.6	磁器	灰白色	透明釉 全面	外面は菊文葉文と扇文、内面は昇龍と 天井部は障子松竹梅文をコマト染付	受け部輪割ぎ 砂目 付着	9割残存	肥前か	19世紀後半
大土坑1 3694 3694	南甕上押 土瓶蓋	径径10.0 つまみ径4.0 器高3.0	磁器	灰白色	透明釉 全面	外面は寿文と折松葉文、内面は口縁部 に雲文帯、天井部は寿文を呉須染 付	受け部輪割ぎ 砂目 付着	9割残存	肥前	1780 S 1810
大土坑1 3695 3695	甕蓋	径径9.4 つまみ径4.8 器高3.0	磁器	灰白色	透明釉 全面	外面は墨引きで枠内に唐子文と花文が 交互に入る 内面は口縁部に龍文帯、 裏筋は押龍地模文を呉須染付 口縁あり	受け部輪割ぎ 砂目 付着	5割残存	肥前	1730 S 1740
大土坑1 3696 3696	黒土 甕蓋	径径9.8 つまみ径4.0 器高3.0	陶器	灰白色	透明釉 全面	茶とコバルトの2色銅版摺り染付で、 外面は海草文 裏筋は「日本物山製」	受け部輪割ぎ 砂目 付着	ほぼ完成	肥前	19世紀後半
大土坑1 3697 3697	中甕 蓋物蓋	径径9.8 つまみ径1.8 器高3.0	磁器	透明 完成のため不明	透明釉 全面	外面に花文をコマト染付	受け部輪割ぎ	完成	肥前	19世紀後半
大土坑1 3698 3698	中甕 蓋物蓋	径径9.4 つまみ径1.6 器高3.2	陶器	灰白色	透明釉 全面	外面は樹文を呉須染付	受け部輪割ぎ 砂目 付着	8割残存	肥前	1780 S 1860
大土坑1 3699 3699 3699	中甕 蓋物蓋	口径3.4 底径7.3 器高11.9	陶器	橙褐色	透明釉を底彫部 外に掛ける	柱部は中空らしく、瓶と穿孔により 内部に落ちた粘土の存在がわかる。外 底は削って上げられている	底彫露胎 口付部輪 割ぎ	9割残存	肥前	不明
大土坑1 3700 3700	南甕上押 土瓶蓋	口径7.0 最大径8.4 底径5.0	陶器	暗褐色	鉄釉を内面から 刷り中位まで	外底は糸切り	割下半露胎 胎土目跡あり	8割残存	肥前	不明
大土坑1 3701 3701	南甕上押 土瓶蓋	口径8.5 径径5.0 器高6.8	磁器	灰白色	透明釉を全面に 掛ける	外面杯部に唐子文様に菊文、杯部 底面と脚部には唐子文を呉須染付	底彫輪割ぎ	6割残存	肥前	不明
大土坑1 3702 3702	黒土 仏飯蓋	口径(6.4) 径径4.0 器高6.1	磁器	灰白色	透明釉を全面に 掛ける	外面に平文文を呉須染付	底彫輪割ぎ	8割残存	肥前	1780 S 1860
大土坑1 3703 3703	中甕 仏飯蓋	口径(6.1) 径径3.8 器高4.8	磁器	灰白色	釉薬を全面に掛 ける	無文	底彫輪割ぎ	6割残存	肥前	不明



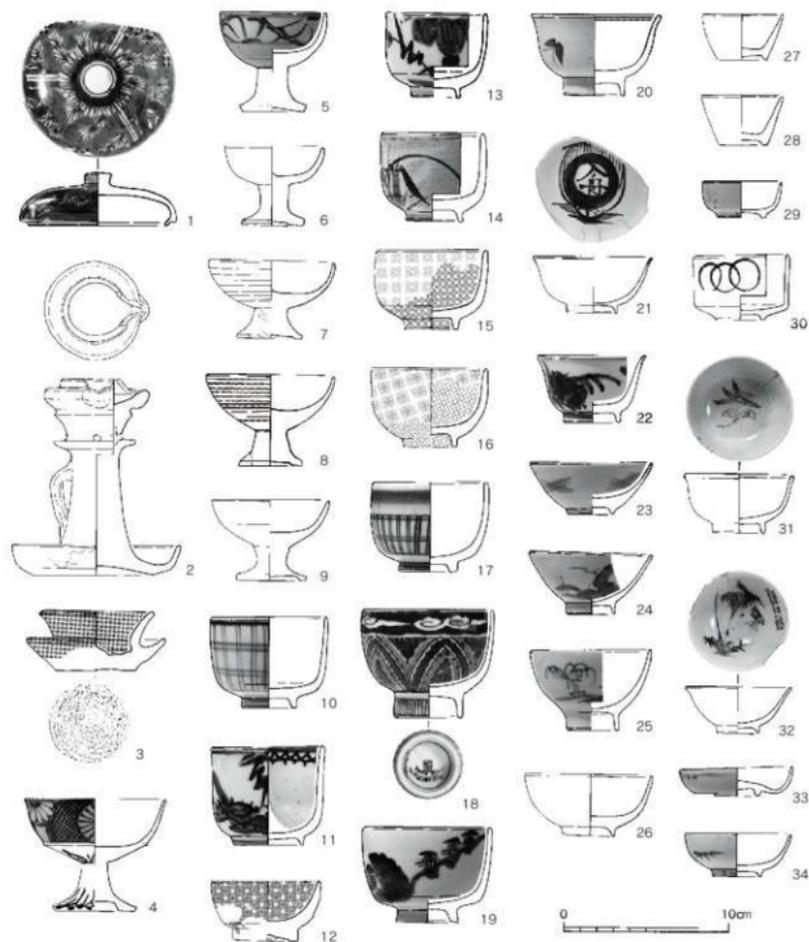
第36图 5次調査1号大土坑出土陶磁器実測图10(1/3)

表18 5次調査出土土器・陶磁器観察表17

遺物番号 採掘番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯治の技法	所 見		
							特記事項	鑑定産地	鑑定年代
大土坑1 南塚上層 37R7 図版1	仏飯器	口径7.8 胴径4.0 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	底面輪割ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑1 南塚上層 37R8	仏飯器	口径7.8 胴径3.9 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	昇線を乳須染付	底面磨胎	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑1 南塚上層 37R9	仏飯器	口径7.1 胴径3.2 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	底面輪割ぎ	8割残存	肥前	不明
大土坑1 37R10	小型碗 皿飲み	口径7.2 高台径3.4 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に二重格子文を乳須染付	脣付輪割ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大土坑1 上層 37R11	小型碗 皿飲み	口径6.9 高台径4.2 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に山水文、内面口縁部に複合平文をコバルト染付	脣付輪割ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑1 南塚上層 37R12 図版1	小型碗	口径6.8 高台径4.0 器高3.6	陶器 発色不良のため軟質で灰白色		鉄輪を内面から外面側下位まで掛ける	底面磨胎	ほぼ完形 発色不良で、内面のみ発色している		1600 \ 1780
大土坑1 南塚上層 37R13 皿飲み	小型碗	口径6.1 高台径2.9 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に山水文、内面口縁部に複合平文をコバルト染付	脣付輪割ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑1 黒色土 37R14	小型碗 皿飲み	口径6.4 高台径3.4 器高5.4	磁器 灰白色	発色不良で白濁した透明釉全面掛け	外面に水草文をコバルト染付	脣付輪割ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑1 中層 37R15 図版1	小型碗	口径6.8 高台径3.1 器高4.8	陶器 灰色		胎輪の上に透明感のある灰輪を外面口縁部から内面側上半に上げけ 灰輪は窯変が見られる	脣付輪割ぎ	完形	小石原	不明
大土坑1 中層 37R16	小型碗	口径7.1 高台径3.3 器高4.8	陶器 灰色		胎輪の上に透明感のある灰輪を外面口縁部から内面側上半に上げけ 灰輪は窯変が見られる	脣付輪割ぎ		小石原	不明
大土坑1 中層 37R17	小型碗 皿飲み	口径7.1 高台径3.4 器高5.4	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 買入あり		脣付輪割ぎ		波佐見	19世紀中葉
大土坑1 37R18	小型碗 皿飲み	口径6.2 高台径4.2 器高6.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 買入あり	外面に口縁下に張引きの雲文帯、その下に花草文、高台外面に舞鳳文、裏面に「風」を乳須で染付	脣付輪割ぎ	8割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑1 中層 37R19	小型碗	口径7.7 高台径3.8 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 買入あり	外面に1割乾して1つの紋になる山水文を乳須で染付	脣付輪割ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大土坑1 南塚上層 37R20 皿反形	小型碗	口径6.2 高台径3.8 器高5.0	磁器 灰白色	発色不良の透明釉全面掛け 買入をり	外面に菩薩花文と龍文、内面に昇線全面掛け 買入をり	脣付輪割ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑1 上層 (黒色土) 37R21	杯	口径7.4 高台径3.2 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉全面掛け		脣付輪割ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑1 上層 37R22	杯	口径6.4 高台径3.4 器高4.2	磁器 灰白色	光沢のある透明釉全面掛け	外面に菊文と龍文をコバルト染付 発色不良で黒色を見る	脣付輪割ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑1 中層 37R23	杯	口径7.5 高台径2.8 器高3.2	磁器 灰白色	発色不良の透明釉全面掛け 買入あり	外面に斜格子文を乳須染付	脣付輪割ぎ		肥前	不明
大土坑1 37R24	杯	口径7.4 高台径3.4 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉を高台以外に掛ける 買入あり	外面に山水文を乳須染付	脣付輪割ぎ		肥前	不明
大土坑1 中層 37R25	杯	口径7.4 高台径3.4 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に山水文を乳須染付	脣付輪割ぎ		肥前	不明
大土坑1 中層 37R26	杯	口径7.8 高台径3.1 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 買入あり	無文	脣付輪割ぎ		肥前	不明
大土坑1 上層 37R27 図版1	杯	口径4.8 高台径3.0 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 買入あり	無文	脣付輪割ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑1 中層 37R28 図版1	杯	口径5.0 高台径2.9 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 買入あり	無文	脣付輪割ぎ	完形	肥前	不明
大土坑1 37R29	杯	口径4.6 高台径3.0 器高2.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 買入あり	赤・緑彩で草花文を絵付け	脣付輪割ぎ	5割残存	肥前	不明
大土坑1 中層 37R30	小型碗 皿形	口径5.8 高台径2.8 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に3つの平文を乳須染付	脣付輪割ぎ		肥前	18世紀後半 \ 19世紀前葉

27図2は口縁部や高台の形態は18世紀後半から19世紀前半に見られるものだが、窯詰め技法が胎土目であることや、摺目単位が少ないことや、鉄軸の掛け分けがあることなどから、この器形の古い段階のものと考えられる。

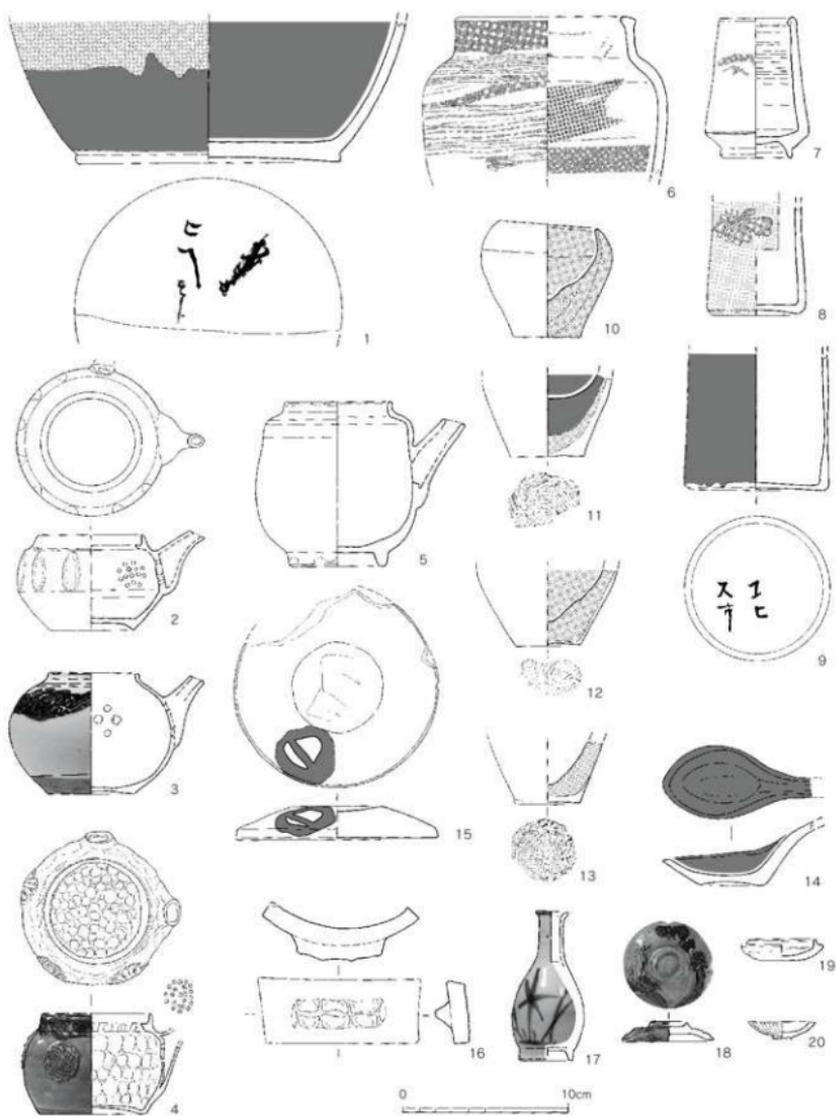
28図1は陶器の半胴甕で、胎土から二川焼と考えられる。28図6は口縁内面側にだけ煤が付着していることから、何かを口に掛けて使用したことが想定される。欠損している範囲に、通風のための窓があっただろう。28図7は煤付きや黒変がないので火鉢ではなく植木鉢と判断した。



第37図 5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図11(1/3)

表19 5次調査出土土器・陶磁器観察表18

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・彫刻・装飾技法	装飾の技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大土坑1中層 37031	杯	口径6.6 高台径3.2 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	見込みに花文を呉須染付	貫付軸割ぎ	完形	肥前	19世紀後半
大土坑1中層 37032	杯	口径6.4 高台径2.5 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	見込みに竹筵がコバルト吹き付けて、高が金彩で描かれている	貫付軸割ぎ	8割残存	肥前	19世紀後半
大土坑1上層 37033	杯	口径6.8 高台径2.8 器高1.8	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面に彫れた竹筵文を呉須染付	貫付軸割ぎ 砂目貫付とへたれた割下位に付着する	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑1南座上層 37034	杯	口径6.4 高台径3.0 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に竹筵文を呉須染付	貫付軸割ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑1 38081	鉢	口径16.0	陶器 淡黄緑灰～暗黄灰色	鉄釉の上に灰白色の灰釉が現に入る釉を外内面に掛渡す	鉄釉の上に灰白色の灰釉が現に入る釉を外内面に掛渡す。その上に黒鉄釉を塗り掛ける。外底に黒書もあるも記号らしく意味が通らない	外底軸割ぎ	「タヒモ」を二本の縦線で消して「ヒヘモ」と横に書き換えている	肥前か	不明
大土坑1黒色土 38082	急須	口径6.4 底径5.0 器高5.8	磁器 灰白色	型押し成型で、胴部の窪みに白化粧土を塗布	型押し成型で、胴部の窪みに白化粧土を塗布	外底軸割ぎ	把手のみ欠損	肥前	19世紀後半
大土坑1黒色土 38083	急須	口径5.4 底径5.2 器高7.4	磁器 灰白色	型押し成型で、片部の梅花文の陽刻にコバルトを塗布	型押し成型で、片部の梅花文の陽刻にコバルトを塗布	外底から割下位軸割ぎ	把手のみ欠損	肥前	19世紀後半
大土坑1黒色土 38084	急須	口径6.6 底径6.4 器高6.2	陶器 淡黄緑灰～暗黄灰色	体部は型成型し、内底は小さなオサエの痕跡がある	体部は型成型し、内底は小さなオサエの痕跡がある。外面に花文・雲文の浮文を彫り付け、そこ異なる濃さの灰釉を掛けている。外面口縁部は鉄釉掛け	不明	不明	不明	不明
大土坑1南座上層 38085	水注	口径6.4 高台径5.8 器高10.0	陶器 灰白色	外面にオリーブ色の灰釉を掛ける	外面にオリーブ色の灰釉を掛ける	貫付軸割ぎ 口唇部軸割ぎ	割下字は焼成不良で、釉の変色が感じ、外底の釉はちぎれている	小石原か	不明
大土坑1中層 38086	小型壺	口径11.0 最大径15.0	陶器 褐色	鉄釉外面軸割後脚状掛取り、内面口縁部以下に鉄釉ハケ掛け	鉄釉外面軸割後脚状掛取り、内面口縁部以下に鉄釉ハケ掛け	口唇部軸割ぎ		肥前	
大土坑1南座上層 38087 図版1	瓶	口径5.7 灰落とし	陶器	鉄釉の竹筵文を消した後に外面透明釉を掛け、割下位の筋線部以下を掛取り	鉄釉の竹筵文を消した後に外面透明釉を掛け、割下位の筋線部以下を掛取り	割下位筋線	完形 口唇部の欠けは埋塞を打ちつけた時のもの	肥前	18世紀代
大土坑1中層 38088	瓶	口径6.0	陶器	外面に白化粧土を掛けた後、貫入の入る透明釉を外面と内面下部に掛け、外面は緑と黒影の葉文の外側にびらびらつく	外面に白化粧土を掛けた後、貫入の入る透明釉を外面と内面下部に掛け、外面は緑と黒影の葉文の外側にびらびらつく	不明	胎が特徴的	京焼か	不明
大土坑1上層 38089	瓶	口径8.8	磁器 灰白色	黒鉄釉を外面に掛ける	黒鉄釉を外面に掛ける	割下位筋線	「ヌサ」を二本の縦線で消して「コ」土様に書き換えている	肥前	19世紀後半
大土坑1上層 38090 図版1	焼磁壺	口径6.0 底径4.0 器高6.8	土器質土器 内面は赤変しているが、本来にぶい黄灰色 精良	—	内外面ナデ	不明	ほぼ完形	溝池焼か	不明
大土坑1上層 38091	焼磁壺	口径4.8	土器質土器 内面は赤変しているが、本来にぶい黄灰色 精良	—	内外面ナデ 外底赤切り	不明	ほぼ完形	溝池焼か	不明
大土坑1南座上層 38092	焼磁壺	口径4.0	土器質土器 内面は赤変しているが、本来にぶい黄灰色 精良	—	内外面ナデ 外底赤切り	不明	不明	溝池焼か	不明
大土坑1南座上層 38093	焼磁壺	口径4.0	土器質土器 内面は赤変しているが、本来にぶい黄灰色 精良	—	内外面ナデ 外底赤切り	不明	不明	溝池焼か	不明
大土坑1黒色土 38094	蓮華	短軸4.5	磁器 灰白色	黒い緑釉を全面に掛ける	黒い緑釉を全面に掛ける	型押し成型	貫付筋線	肥前	不明
大土坑1中層 38095	ハマ	口径6.2 器高9.0	陶器 砂粒を多く含む 灰白色	—	外面に鉄釉で円に枠の記号を刻く	貫付筋線	記号のある面が良く焼けているので、下面を接地している	8割残存	不明
大土坑1中層 38096	七輪壺の蓋	直径9.8 短軸4.0 厚3.2	土器質土器 表面は黄灰色だが、胎は淡黄色 金ウレを多く含む	—	内面のオサエが口縁部で途切れていることから、製作ではなく、同じ径の筒状のものを蓋断している つまみの内面はオサエ	不明	ほぼ完形 胎から薄多7割のものではなく、在地のもの	在地	不明
大土坑1上層 38097	小型瓶 仏花瓶	口径1.4 高台径3.3 器高9.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文を呉須染付	貫付軸割ぎ	ほぼ完形	肥前	1780 ～ 1800
大土坑1中層 38098	ミニエナブ土鍋蓋	口径5.5 つまみ径2.2 器高1.2	陶器土器質土器 内面にぶい暗黄灰色	外面は透明釉の上に緑・黒・赤彩で上塗り 全面	外面は透明釉の上に緑・黒・赤彩で上塗り 全面	貫筋線	完形	在地	不明
大土坑1黒色土 38099 図版1	合子	口径4.5 高台径1.4 器高1.4	磁器	透明釉 内面から外面口縁部	無文	底面筋線	完形	肥前	不明
大土坑1黒色土 38100 図版1	紅彩口 紅皿	口径4.0 高台径1.0 器高1.0	磁器 完形のため不明	透明釉 内面から外面口縁部	型押し成型で、外面に菊花文を彫刻する	底面筋線	完形	肥前	不明



第38図 5次調査 1号大土坑出土土器・陶磁器実測図5 (1/3)

28図8は土師質土器の小甕で、外底の板状圧痕は幅が広い。

29図1から3・5・7は陶器の半甕で、1の内面の軸は発色が不十分なので何軸なのかかわからない。2の口縁部が鋸歯状だが意図的に打ち揃えたものかもしれない。3は鉄軸の軸調から須佐唐津と想定される。5は胎の色調が斑で、密度が高く、鉄絵が稚拙で、軸掛けの省略が見られることから二川焼の可能性が高い。7は内面の軸切れ部の灰黒色は焼成不良の胎の色であって軸の発色ではない。

30図1は土師質土器の甕で、胎・調整・焼成など土師質瓦と同じものだが、径が小さいことと、下位の湾曲があることから甕と考えた。

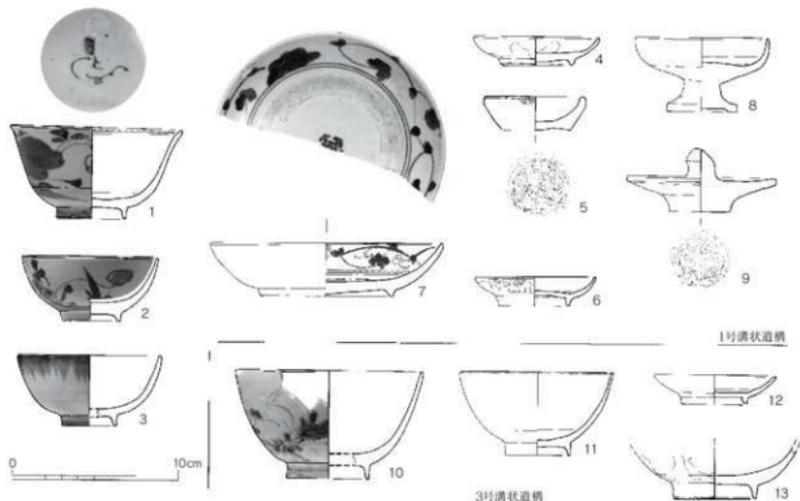
31図18は陶器の鉢で、胎が暗紫灰色なので、白化粘土を黄白色の下地とし、鉄絵を描いている。

33図1は陶器の瓶で、外面胴下位の軸が付着していない丸い部分は、軸葉に漬ける際に保持した指の跡だろう。外底には焼き台から外した際のものであろう欠損がある。33図2は陶器の尿瓶で、上半部は焼成が良いが、下半は胎軸が鉄軸状に発色する。33図6は土瓶の蓋と身ですが、いわゆる青土瓶である。

34図3は陶器の甕だが、内面の軸は薄く、露胎に見えるが、釉剥ぎした範囲と比べれば塗布されていることがわかる。36図15は染付の蓋で、裏銘は「五良大甫 吳祥瑞□」とあり、類例から最後の一字は「造」であり、「祥瑞焼」あるいは「祥瑞手」といわれるものである。銘については「吳」「祥瑞」ともに地名とする説と「五良大甫」「吳祥瑞」は人名とする説があり、後者では「五良大甫」は桃山時代～江戸時代に生きていた陶器商人とする説と、景徳鎮で陶芸を勉強し、中国名を「吳祥瑞」とした日本陶工とする説がある。本資料は軸調・胎から肥前染付である。

37図27は磁器の小杯で、27と28はほぼ同じものだが、畳付の形状が異なる。

38図10は焼塩壺で、胎は底部の中心部が暗紫灰色で、その周囲は淡赤黄灰色を呈する。外面口縁部が焼けているので外蓋がつくとわかる。38図18はミニチュアの土鍋の蓋で、胎は陶器ではないので、施釉土師質土器とした。胎は蒲池焼ではなく、搬入品だろう。



第39図 5次調査1・3号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)

39図5は土師質土器の小皿で、口縁部の窪んだ部分に、39図6・12は磁器の小皿で6は外面口縁部に煤付着しているので灯明皿として使用したとわかる。6と12はつくりが同じ成型方法なのでセットで購入したものでしょう。

40図3は陶器の小型甕で、釉に漬ける際の指の跡が残る。

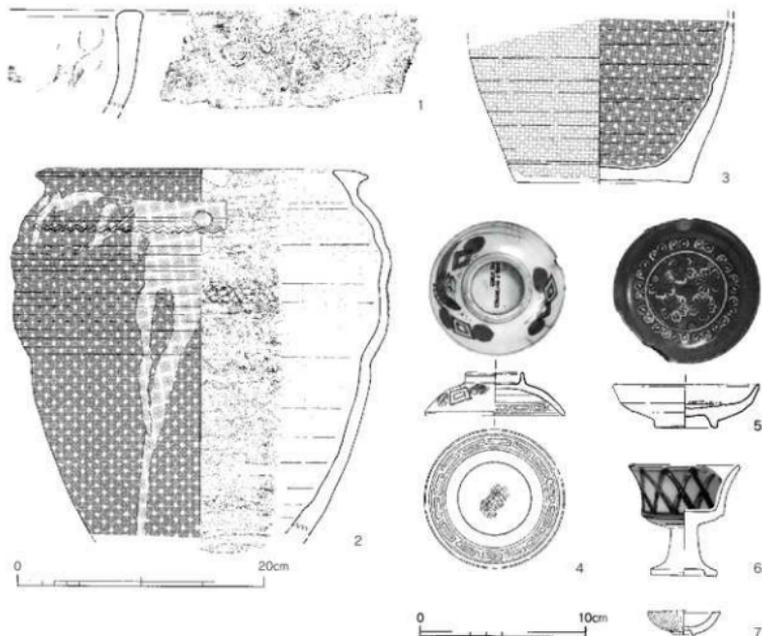
41図2は磁器の小皿で、同じ器形を重ねており、上の個体の一部が付着している。41図3は陶器の香炉か火入れで、緑色の釉は灰釉ではなく、青磁に使う軸調である。41図6は軟質施釉陶器で、作りが悪い。近代に属するものだろうが、類例がないので産地・時期ともにわからない。

42・43図は土師質の瓦で、42図6は凹面の中央部のみが暗褐色に変色しており、そこに汚水が流れたことがわかる。樋瓦であることを示す良好な資料である。(写真4)42図7は雁振瓦としたが、径が小さいので丸瓦の可能性もある。

43図4は端部との接合部は凸面側に丸みがあるので、雁振瓦にあたる。4の凸面の変色は、凸面から端面外側が露出していたことを示す。(写真4)42図2は樋瓦で凸面の黒変が著しく、凸面が屋内側に向いていたことを示している。

42図3・4、43図4は胎も内外面も橙褐色であり、胎土内の褐色パミスの多さから水田の赤瓦と考えられる。端部との接合部は内部側にオサエ列があり、外側は未調整である。

44図1・2・4は同じ調整が見られるので、同じ製作地の製品だろう。



第40図 5次調査ピット出土土器・陶磁器実測図(2は1/4、他は1/3)

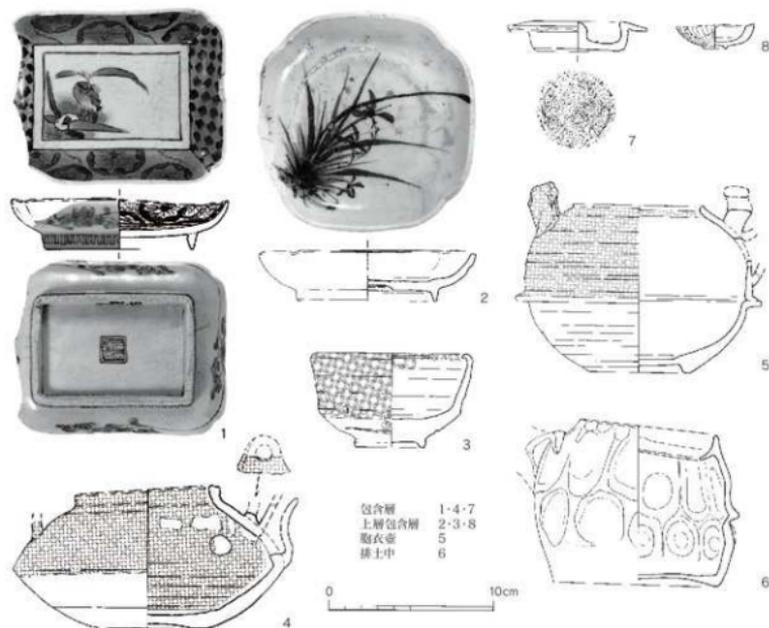
表20 5次調査出土土器・陶磁器観察表19

遺物番号 図版番号	器種 通称名	寸法(cm) ( )は復元高	胎の種類	胎質	調整・整形・装飾技法	窯詰の技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
溝1 30001 図版1	小瓶 扁球形	口径10.3 高台径4.2 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は花文、見込みは滑れてモチーフ不明、内面口縁部に口縁文を乳頭染付	覆付輪漉ぎ	見込みに焼成時の付着物あり	肥前	19世紀中葉
溝1 30002	小茶碗	口径8.2 高台径3.6 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面花文を乳頭染付	覆付輪漉ぎ	発色不良	肥前	不明
溝1 30003	小茶碗	口径8.9 高台径(3.3) 器高4.3	磁器 灰白色	細い透明釉を全面に掛ける	外面雨降文の乳頭染付	覆付輪漉ぎ	発色不良	肥前	不明
溝1 30004	小皿	口径7.6 高台径4.3 器高1.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	覆付輪漉ぎ	発色不良で、貫入化している部分がある	肥前	不明
溝1 30005 図版1	小皿	口径6.3 底径4.2 器高2.0	土師質土器 完形のため胎不明	—	無文	胎土目跡あり	完形 内面に黒変	瀬内	不明
溝1 30006	小皿	口径7.4 高台径4.2 器高1.7	磁器 灰白色	透明釉 内面から外面口縁部	摺押し成型で、外面菊文を陽刻し、高台はすり付け	底面露胎	6割残存 歪みあり	肥前	不明
溝1 30007	小皿 5寸皿	口径14.2 高台径8.0 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に菊文、見込みに5弁花文を乳頭染付 赤絵を菊文の上に描き、見込みに葉文とし、蛇ノ目輪漉ぎ部に紅花弁文が入る	覆付輪漉ぎ	見込みに蛇ノ目輪漉ぎ 葉文アルミ塗布	筑後見	1680 ~ 1740
溝1 30008	仏飯器	口径8.2 底径4.2 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	透明釉を全面に掛ける	底面露胎	6割残存	肥前	不明
溝1 30009 図版1	蓋 土瓶蓋	直径8.9 つまみ径1.8 器高1.8	陶器 完形のため胎不明だが、表面は橙褐色	—	オリーブ色の灰釉を上面のみに掛ける	下半輪漉ぎ	完形 釉の白色部は発色不良	不明	不明
溝3 30010	碗	口径11.4 高台径(5.0) 器高6.5	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面は菊文を乳頭染付	覆付輪漉ぎ		肥前	1700 ~ 1750
溝3 30011	碗	口径9.2 高台径4.0 器高5.0	磁器 灰白色	先沢のある透明釉を全面に掛ける	口縁あり	覆付輪漉ぎ		肥前	1700 ~ 1740
溝3 30012	小皿	口径7.4 高台径4.0 器高1.8	磁器 灰白色	透明釉 内面から外面口縁部	摺押し成型で、外面菊文を陽刻し、高台はすり付け	底面露胎	4割残存 歪みあり	肥前	不明
ビット7 40001	鉢	— 土師質土器 橙灰白色 軟質粗粒	—	—	外面に花付きの巴文のスタンプ 外面は焼した後にトギキ	不明	スタンプから水田焼わかかる	水田焼	不明
ビット7 40002	鉢 字割蓋	口径27.0 口径30.5	陶器 橙褐色	円形浮文押し付け後 全面鉄釉掛け、その後に外面に黒鉄釉掛け、内面には格子目タキ当て具が見える		口唇輪漉ぎ	釉が藍色なのは焼成が強いのだらう	肥前	不明
ビット24 40003	小壺か	底径10.3	陶器 橙褐色	外面オリーブ色の灰釉、内面鉄釉掛け		外面輪漉ぎ	釉の発色が良いのは胎が灰色の範囲	小石原	不明
ビット42 40004	蓋	直径8.3 つまみ径3.4 器高2.6	磁器 完形のため不明	透明釉を全面にのみ掛ける	外面は海老文と菱形文で、内面口縁部に雲文帯、天井部に松文を乳頭染付		黒部の欠損部が顕化	肥前	19世紀中葉
ビット42 40005	小皿	口径8.8 高台径3.8 器高2.6	陶器 橙褐色		三島手のモチーフを見込みに刻印し、鉄釉を全面掛けした後、印煎部に白化粧土を掛け、印煎部以外を吹き取って染出し、発色不良で黄色かった透明釉全面掛け	覆付輪漉ぎ	8割残存	肥前	不明
ビット12 40006	仏飯器	口径6.7 底径4.0 器高6.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面格子文を乳頭染付	覆付輪漉ぎ	8割残存	肥前	不明
ビット42 40007 図版1	紅皿 紅皿	口径4.5 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉 全面	摺押し成型で、外面菊文を陽刻する	覆付輪漉ぎ	完形	肥前	不明
土層包合層 41001	小皿 変形卵 方形	長軸13.1 短軸10.0 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	摺押し成型 内面に花文と 文を対面の外周内に入れ、見込みに鳥文、外面割部は牡丹文、裏底二重割部に 乳頭染付	覆付輪漉ぎ	8割残存	肥前か	19世紀中葉
土層包合層 41002	小皿 変形卵 方形	口径13.0 高台径8.2 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面無文、内面見込み草花文と5弁花文を乳頭染付	覆付輪漉ぎ	ほぼ完形 見込みに目跡5つあり 胎ノ目高台の古漆塗あり	肥前	19世紀後半
土層包合層 41003	小鉢 香炉か	口径9.8 高台径4.2 器高5.7	陶器 灰白色 軟質	青磁釉を内面口唇部から外面割中位まで掛ける	高台はすり付け後滑り出し	割付位輪漉	内面は口縁部以外は釉掛き取り	肥前	不明
包合層 41004	土瓶	口径8.9 最大径16.6 器高8.5	陶器 灰白色 灰入物多い	オリーブ色の灰釉を割中位まで、内面は口縁部と底面に鉄釉	把手部は摺作り	底面露胎 口唇部輪漉ぎ	外底部は黒く発色	小石原	19世紀代
飯倉2 41005	土瓶	口径7.8 最大径14.9 器高10.2	陶器 紫灰色 黒点	鉄釉を割中位以上と内面口縁部まで掛ける	把手部は摺作り	底面露胎 口唇部輪漉ぎ	鉄釉は発色悪く、白濁している	肥前	不明
溝1中 41006	急須	口径8.0 最大径11.2 底径9.7	軟質陶磁器 黄灰色		摺押し成型で、外面に凹凸を作り、受け部をすり付けた後、内面の受け部以下に透明釉を掛ける	底面露胎	つくりが悪い 内底と外面下半は覆付	不明	不明
土層包合層 41007 図版1	蓋 土瓶蓋	直径8.4 つまみ径1.1 器高1.8	陶器 完形のため胎不明だが、表面は橙褐色	—	黒釉を上面のみに	底面赤切り	完形	肥前	不明
ビット42 41008 図版1	紅皿 紅皿	口径4.8 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉 内面から外面口縁部まで	摺押し成型で、外面菊文を陽刻する	覆付輪漉ぎ	完形	肥前	不明

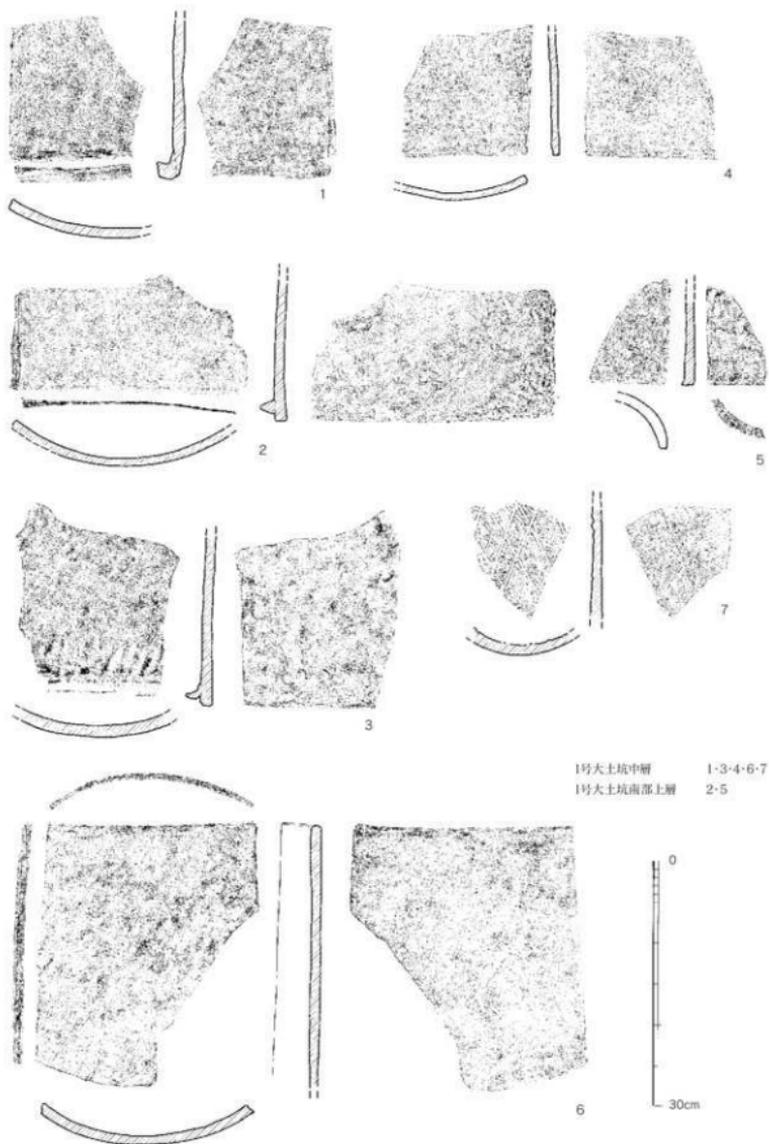
45図2は土人形の土馬で、騎人の痕跡ないが背中を窪ませているので、別造りの騎人人形と組み合わせた可能性がある。45図9は幼児人形で、頭の両横に穿孔があり、兜のしころの表現があるので、兜の鉢部は別造りで紐で組み合わせていたのではないだろうか。45図12は陶器の摺鉢で、内外露胎なので、口縁部のみ施釉する17世紀後半代の肥前産と考えられる。45図13は七輪のサナで、穿孔部の側面と外縁の側面は付着物がない。外縁の下半部は七輪の内面に固定されていたため、焼けが弱い。45図14は円盤形の土製品だが中央に穿孔があるので、メンコ形土製品ではない。上面にのみ線刻文様があるが、近世にこのような小型の紡錘車は実用的ではないので、紡錘車ではないだろう。砲弾型ではなくとも独菜とされる例はあるので、独菜としたい。(注1)

46図3・4は窯道具の土製品で、丁寧に平坦面が作られているので、積み重ねる部材だろう。まとめて後述するこしきがの壁体だろう。46図13は軽石製の砥石で、全面加工して小型の三角柱形状を呈している。曲面を研磨するための手持ち砥石と形態や大きさが同じなので、砥石に使う石材ではないが砥石と考えるべきだろう。46図14は硯で、側面・裏面に光沢のある付着物があるので、木枠に取めて膠などで固定していたものと思われる。

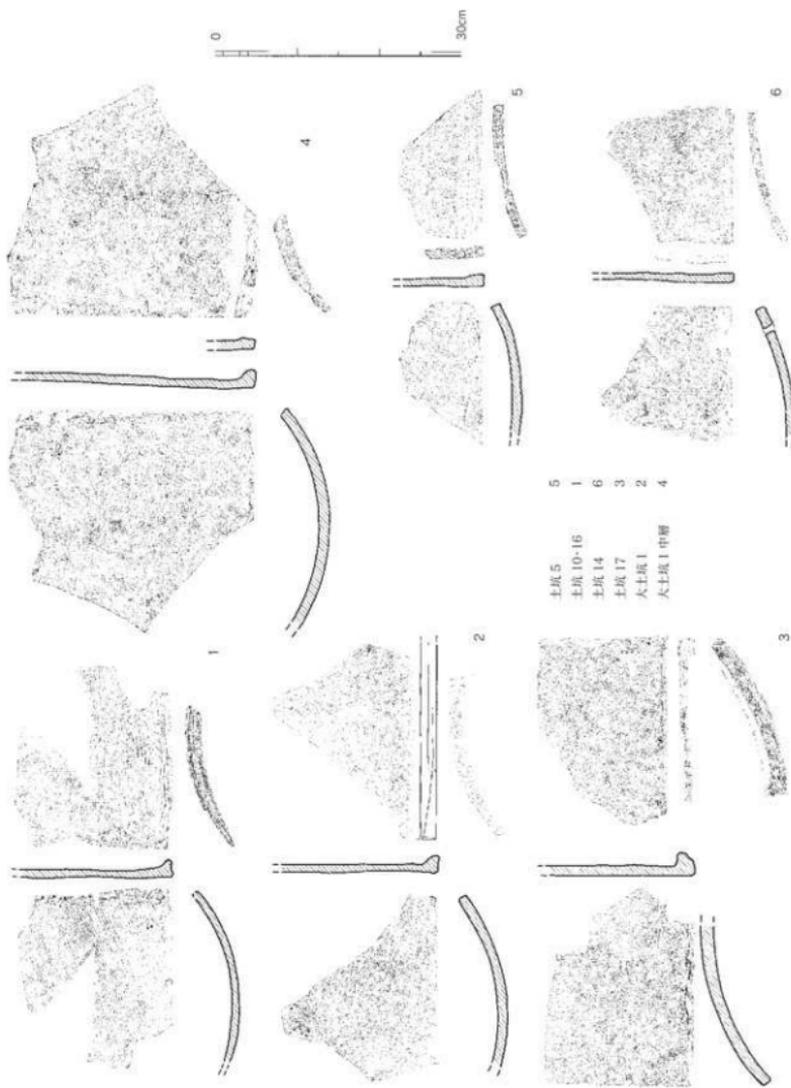
47図5は火打金で、三角形の下辺部分の中央部が使用により摩滅している。47図9～11は大型の縫い針だろう。9・10の短いものは筵で長いものは畳用だろうか。47図16は包丁で、17・18に比べて身が厚く、17・18は刃が付いておらず未成品の可能性はあるが、包丁にしては幅が広い



第41図 5次調査包含層・2号胎衣室・排土出土土器・陶磁器実測図(1/3)



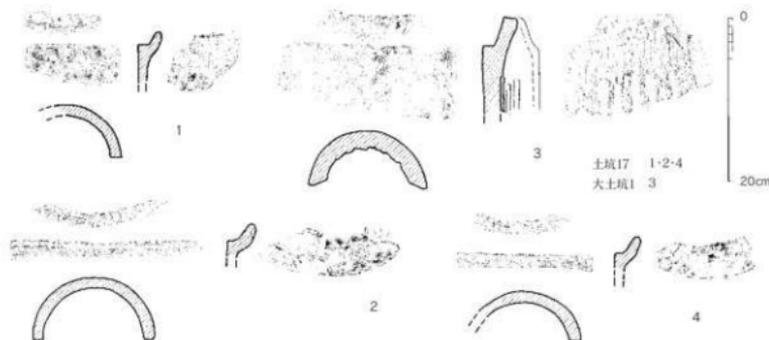
第42圖 5次調査出土土師質瓦実測図1 (1/6)



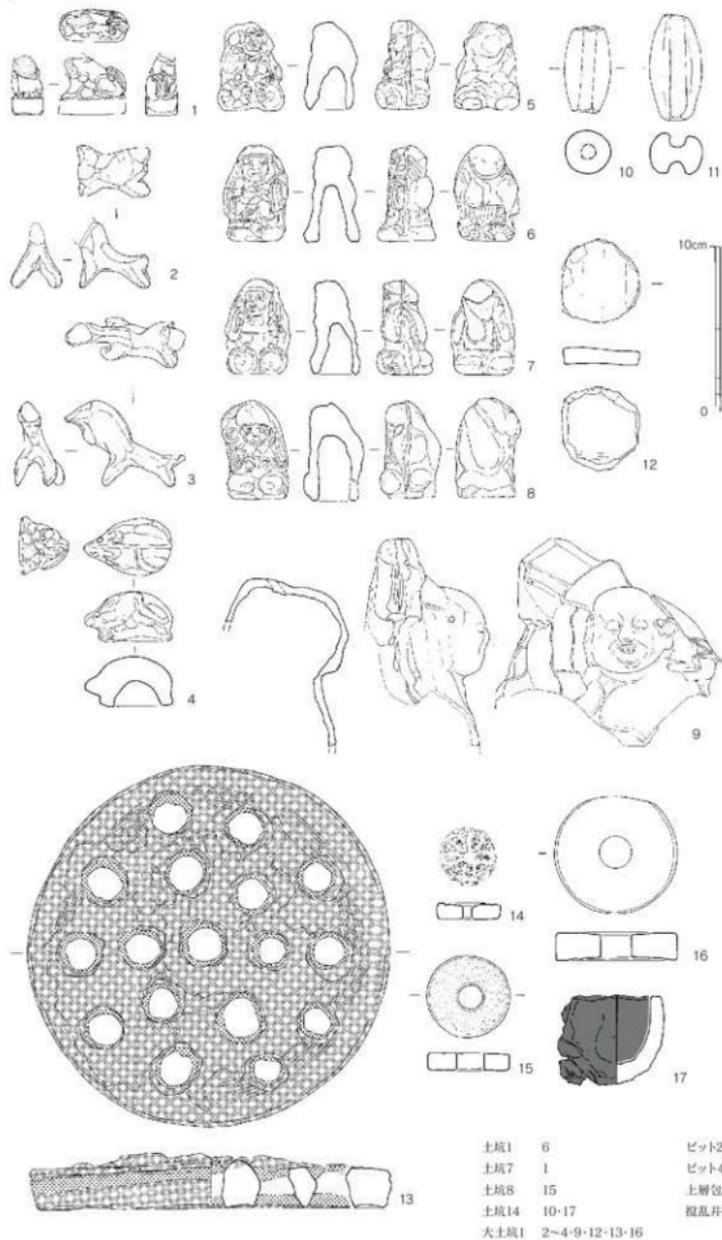
第43圖 5次調査出土師質瓦瓦圖2 (1/6)

表21 5次調査出土瓦観察表

遺構名 棟回番号 図版番号	屋根 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元前	胎の種類 胎の特徴	色調	調整・整形・装飾技法			製作技法	所見			
					凹面	凸面	上下端面・瓦当		側端面	特記事項	推定 産地	推定 年代
大土坑1中層 42図1 図版3	懸瓦	長さ19.6 幅16.3 厚さ1.2	土質黄土 黄灰白色が黄灰 色を挟む	黄灰白色	目の細かいハケを丁 事に施す	目の細かい ハケを丁事に 施す	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	1枚造り	白色底子を多 く含む 変色	在地	不明
大土坑1南面上層 43図2	懸瓦	長さ18.0 幅16.9 厚さ1.5	土質黄土 にぶい暗黄灰白 色を挟む	灰黒色	ナデ	目の細かい ハケ	ナデ	ケズリ	1枚造り	凸面から端面 外縁が変色	在地	不明
大土坑1中層 42図3 図版3	懸瓦	長さ21.4 幅18.5 厚さ1.3	土質黄土 暗茶褐色が黄灰 色を挟む	暗茶褐色	オサエ後ナデ	ハケ後ナデ	ナデ	—	1枚造り	凹面のみ端面 摩滅	在地	不明
大土坑1中層 42図4 図版3	懸瓦	長さ15.0 幅15.3 厚さ1.0	土質黄土 暗茶褐色がにぶ い黄灰色を挟む	暗茶褐色	目の細かいハケ	目の細かい ハケ	ナデ 函取り	中央まで切り 込みを入れ、 新っている	1枚造り	端面摩滅も変 色もなし	在地	不明
大土坑1中層 42図5 図版3	丸瓦	長さ10.6 幅5.5 厚さ1.0	土質黄土 にぶい暗黄灰白 色を挟む	灰黒色	オサエ後ナデ	目の粗いハ ケを丁事に 施す	ナデ	ナデ	1枚造り	凸面端面が突 出する	在地	不明
大土坑1中層 42図6	懸瓦	長さ32.5 幅26.3 厚さ1.2	土質黄土 にぶい暗黄灰白 灰色	にぶい暗 黄灰褐色	目の細かいハケ	目の細かい ハケ	ナデ	中央まで切り 込みを入れ、 新っている	1枚造り	凹面のみ端面 摩滅 変色あり	在地	不明
大土坑1中層 42図7 図版3	懸瓦	長さ14.2 幅12.4 厚さ1.2	土質黄土 暗茶褐色がにぶ い灰色を挟む	暗灰色	目の粗いハケの後務 目状残	目の細かい ハケ	—	—	1枚造り	凸面のみ端面 摩滅	在地	不明
土坑10・16 43図1 図版3	懸瓦	長さ19.0 幅16.4 厚さ1.2	土質黄土 灰黒色が灰白色 を挟む	灰黒色	目の粗いハケを丁事 に施す	目の粗いハ ケを丁事に 施す	ナデ	—	1枚造り	側面側の凹凸 面の断面潤滑 差しい	在地	不明
大土坑1 43図2 図版3	懸瓦	長さ19.5 幅21.3 厚さ1.0	土質黄土 黄褐色が暗黄灰 色を挟む	にぶい暗 褐色～灰 黒色	目の細かいハケ	目の細かい ハケ	ナデ	—	1枚造り	端面摩滅なし 内外変色あり	在地	不明
土坑17 43図3 図版3	懸瓦	長さ18.5 幅20.1 厚さ1.6	土質黄土 にぶい黄灰白 色を挟む	灰白褐色	目の細かいハケ	目の細かい ハケ	ケズリ	ケズリによる 函取り	1枚造り	内外変色ほと んどなし	在地	不明
大土坑1中層 43図4	懸瓦	長さ29.8 幅27.2 厚さ1.3	土質黄土 暗茶褐色が黄灰 色を挟む	暗茶褐色	目の細かいハケ後ナ デ	目の細かい ハケ後ナデ	ナデ	中央まで切り 込みを入れ、 新っている	1枚造り	凹面のみ変色	在地	不明
土坑5 43図5 図版3	懸瓦	長さ10.4 幅16.2 厚さ1.0	土質黄土 黄灰白色が黄灰 色を挟む	明黄灰褐 色	ハケ	ハケ後ナデ	ナデ	ケズリ	1枚造り	端面摩滅も変 色もなし	在地	不明
土坑14 43図6 図版3	懸瓦	長さ16.4 幅16.4 厚さ1.3	土質黄土 灰色 白色粒子 を多く含む	灰黒色	丁事なハケ	丁事なハケ	ナデ	ケズリ	1枚造り	釘孔あり	在地	不明
土坑17 44図1	丸瓦	長さ8.1 幅9.3 厚さ1.3	瓦質 灰色	灰黒色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	1枚造り		在地	不明
土坑17 44図2	丸瓦	長さ4.4 幅15.0 厚さ1.4	瓦質 灰色	灰黒色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	1枚造り		在地	不明
大土坑1 44図3 図版3	丸瓦	長さ11.8 幅14.5 厚さ2.5	瓦質 灰白色	灰黒色	横背縁が大きく窪む その隅りに張面のよ うな狂筋あり	ナデ	ナデ	ヘラケズリが 2面ある	1枚造り		在地	不明
土坑17 44図4	丸瓦	長さ4.6 幅13.6 厚さ1.3	瓦質 灰色	灰黒色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラケズリが 2面ある	1枚造り		在地	不明



第44図 5次調査出土瓦実測図(1/6)



第45図 5次調査出土土製品実測図(1/3)

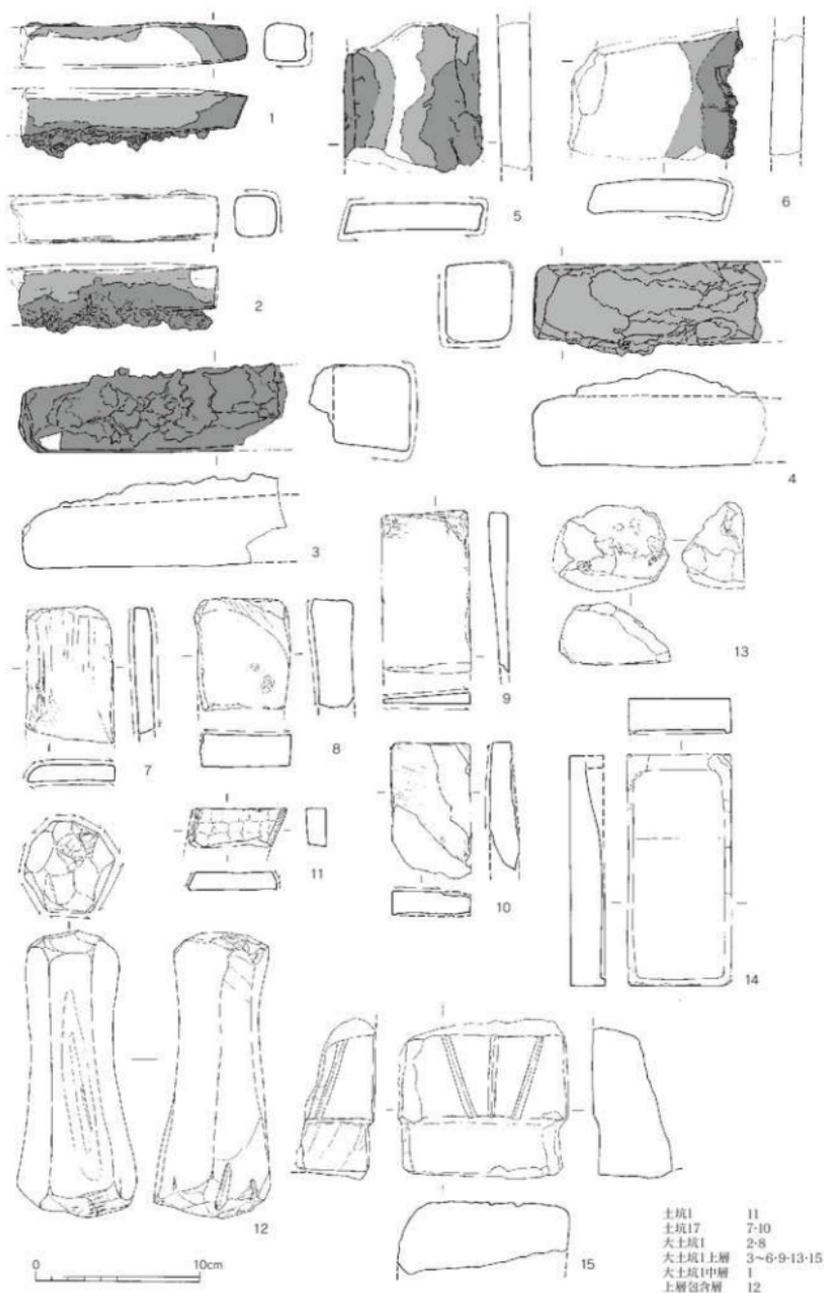
ので調理用ではなく、藁や草などを切るための農作業用かもしれない。

49図1・4は椀で、1は外面モチーフは欠損と剥落のため判然としない。金彩が剥げた下に赤漆が残っているので、赤漆だけになっている部分も本来金彩があったのだろう。4は高台側面に穿孔して椀の樹皮と思われるもの縋った紐を通しているが、樹皮の先端は端部は欠損している。椀の樹皮は緊縛具として使用されることから、柄や板と緊縛していたことが予測される。9は端反形で低い高台が底部端につく変わった器形の椀である。22は脚付盤であろう。残存する脚の位置関係から3脚であろう。

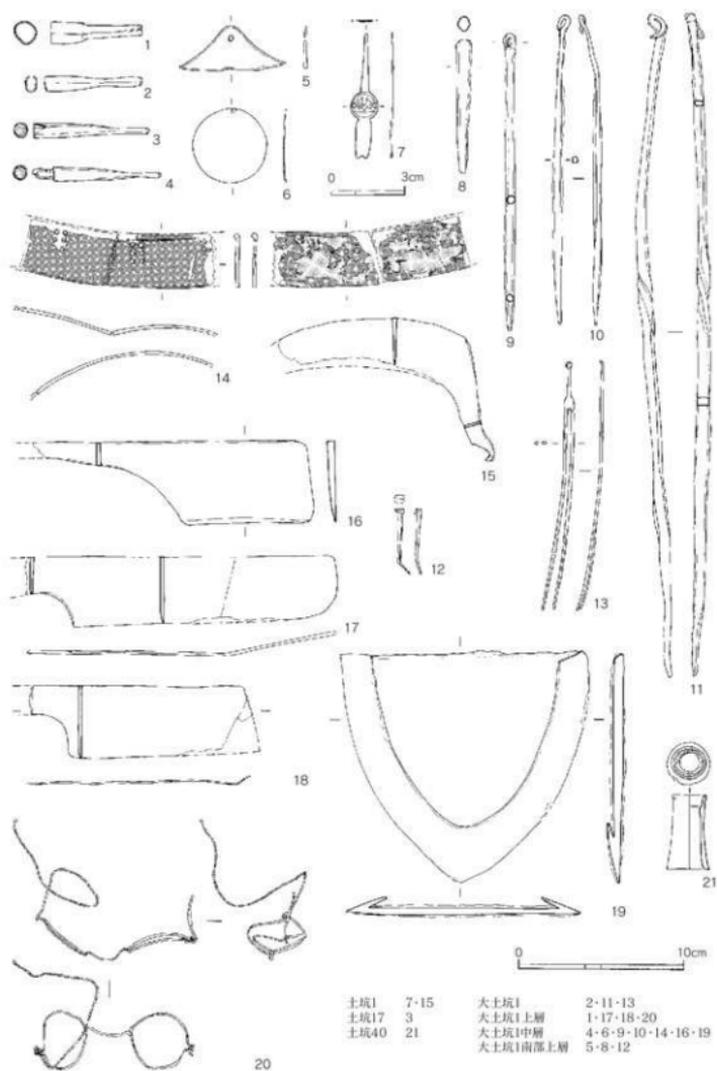
50図4・10・12は下駄で、4の台上面踵部の×印の沈線は秋田裕毅(文献1)によると、呪術的な封印の意味があるといわれている。10は歯の接地部分に砂が挟まっている。12は壺孔の周囲

表22 5次調査出土土製品観察表

遺物名 押印番号 図録番号	器種 形状 通称名	法量(cm)		胎の種類 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所 見		
		( )は復元値	胎の特徴				特記事項	産定産地	産定年代
土瓦7 45001 図録2	土人形 猫犬	長さ4.0 幅1.9 高さ3.5	土師質土器 暗赤灰白色	頭部は欠損。左右対称で、両尾は融合している	摺り合わせ成型		在地か	不明	
大土坑1上層 45002 図録2	土人形 土馬	長さ3.0 幅3.8 高さ4.0	土師質土器 暗灰白色	頭部は欠損だが鬣がある 尻尾は尖る	手捏ね		在地	不明	
大土坑1上層 45003 図録2	土人形 土馬	長さ3.2.8 幅7.1 高さ5.2	土師質土器 黄灰白色	顔は粘土貼り付けで表腹 尻尾は短い	手捏ね	成形	在地	不明	
大土坑1南席上層 45004 図録2	土人形 鼠	長さ3.6 幅5.3 高さ3.0	土師質土器 暗赤褐色	表面摺り合わせた後に下面を押し上げる	摺り合わせ成型	成形	在地	不明	
甕瓦井戸 45005 図録2	土人形 大塚天象	長さ3.6 幅5.8 高さ5.8	土師質土器 金雲母なし 黄褐色	摺り合わせ成型の接合部が隆起している 下面から穿孔あり	摺り合わせ成型	後面が高いのは髭のずればば成形	在地	不明	
土瓦1 45006 図録2	土人形 大塚天象	長さ3.5 幅5.5 高さ5.7	土師質土器 金雲母なし 黄褐色	2つの型で成型したものの1片 表面摺り合わせた後に下面を押し上げる	摺り合わせ成型	成形 着色なし	不明	不明	
ビツ2 45007 図録2	土人形 大塚天象	長さ3.8 幅5.4 高さ5.7	土師質土器 金雲母なし 黄灰白色	摺り合わせ成型の接合部が隆起している 下面から穿孔あり	摺り合わせ成型	後面も文様がよく出ている成形	在地	不明	
甕瓦井戸 45008 図録2	土人形 大塚天象	長さ3.9 幅5.4 高さ10.2	土師質土器 暗赤灰白色	表面摺り合わせた後に下面を押し上げる	摺り合わせ成型	後面厚減らばば成形	在地	不明	
大土坑1中層 45009 図録2	土人形 幼児人形	長さ11.6 幅7.4 高さ10.2	土師質土器 黄白色	2つの型で成型したものを接合している 接合部はケズリ 歯の両側に穿孔があり、発のしころの表面がある	摺り合わせ成型		在地	不明	
大瓦14 45010 図録2	土師 管笠	長さ5.1 最大径2.9 重量30	黄灰色	手捏ね ナデ 穿孔径0.8cm	—	ほぼ成形	在地	不明	
上層包含物 45011 図録2	土師 有溝陶工 字印	長さ9.3 幅3.9 厚さ2.4重34	黄灰色 淡褐色	手捏ね ナデ 孔幅1.0cm	—		在地	不明	
大土坑1上層 45012 図録2	陶器片転用 円形転用製品	長軸4.9 短軸4.7 厚さ1.0	土師質土器 黒人物あり 黄褐色	彫刻陶器の摺跡の転用 脚縁は全周打ち欠いている	転用		在地	不明	
大土坑1 45013 図録2	サナ	径21.8 孔径27-3.2 厚さ3.0	土師質土器 黄褐色	表面面にハケが残る 穿孔の縁が欠けているので両面から穿孔しており、貫通させるのではなく取り取っていることわかる 焼け方は両面とも同じくらいだが、上面より下面の方が付着物が多い	成形		在地	不明	
P42 45014 図録2	独家か	径3.8 厚さ1.0	土師質土器 黄灰色	ナデで上面は花形のスタンプ 中央に径4mmの穿孔あり	成形		在地	不明	
大瓦8 45015 図録2	戸車	径4.0 孔径1.6 厚さ1.1	磁器 灰白色	表面面にアルミナ付着 穿孔面に透明釉があるが側面は釉が摩滅して失われている	成形	彫刻	不明		
大土坑1黄土土 45016 図録2	戸車	径7.2 孔径1.8 厚さ1.7	磁器 灰白色	穿孔面に透明釉があるが側面は釉が摩滅して失われている 側面の一部が集中的に磨り減っている 一面に高台の痕跡があるので、焼き台の転用だろう	成形	彫刻	不明		
土瓦14 45017 図録2	るつぼ	径5.4 器高5.4	土師質土器 完形のため不明	全面ガラス化のため表面観察できないが手捏ねか	手捏ね	外面の赤茶色の付着物は陶器か	在地	不明	



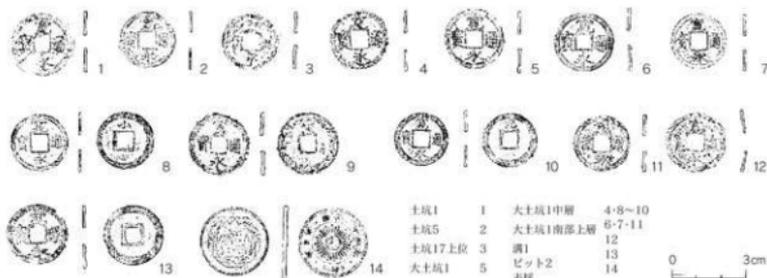
第46圖 5次調査出土土・石製品実測図(1/3)



第47图 5次調査出土金属・鹿角製品実測図(1/3)

表23 5次調査出土土・石製品観察表

遺構名 探頭番号 図取番号	形状 通称名	法量(cm, g) ( )は重量	胎の種類	調整・整形・裝飾技法	製作技法	所 見		
						特記事項	推定産地	推定年代
大土坑1中層 46021 図取2	棒状土製品	長さ13.7 幅2.8 厚さ3.0	土質土	下面がよく焼けており、付着物多い だけが赤化している	手捏ね 端部は斜めに 彫削されている		在地	不明
大土坑1 46022 図取2	棒状土製品	長さ12.5 幅2.7 厚さ2.9	土質土	下面がよく焼けており、付着物多い だけが赤化している	手捏ね 側面は丸 彫削されている	上面に板状瓦頭が残る	在地	不明
大土坑1上層 46023 図取2	棒状土製品	長さ16.3 幅5.1 厚さ4.2	土質土	上面がよく焼けており、付着物多い しているのみ	手捏ね 端部は面取り で丸く仕上げられている	側面に線割物が残った 痕跡あり	在地	不明
大土坑1上層 46024 図取2	棒状土製品	長さ14.0 幅4.9 厚さ4.0	土質土	上面がよく焼けており、付着物多い 側面は付着物なし	手捏ね 各面は丁寧 に整形されている		在地	不明
大土坑1上層 46025 図取2	板状土製品	長さ9.1 幅0.4 厚さ2.0	瓦質土	平瓦片の転用で、上下面とも端部がよく焼けて おり、側面は付着物あり		上下面とも中央が帯状に 焼けていない	在地	不明
大土坑1上層 46026 図取2	板状土製品	長さ9.0 幅10.2 厚さ1.9	瓦質土	平瓦片の転用で、上下面とも端部がよく焼けて おり、側面は付着物あり		下面は1つの角だけが焼 けておらず、上面は側面 以外は焼けていない	在地	不明
土坑17上位 46027 図取3	置き砥石	長さ8.2 幅5.2 厚さ1.2重量86	頁岩 大卒石	側面の丸みは使用によるもの 仕上げ砥石				
土坑1 46028 図取3	置き砥石	長さ7.0 幅5.6 厚さ2.7重量156	頁岩 大卒石	左側面は欠損、右側面と下面は整形面 仕上げ砥石				
大土坑1上層 46029 図取3	置き砥石	長さ9.8 幅5.3 厚さ0.8重量105	頁岩	上下面は使用面が調離しており、側面は整形されている 仕上げ砥石				
大土坑1 46030 図取3	置き砥石	長さ8.3 幅5.9 厚さ1.8重量96	頁岩	下面は使用面が調離しており、側面は整形されているが左側面の下部の角を使用している 仕上げ砥石				
土坑1 46031 図取3	置き砥石	長さ2.4 幅5.8 厚さ1.1重量25	頁岩	下面は研削されていない整形面、側面は整形されているが右側面の上部の角を使用している 仕上げ砥石				
上層包含物 46032 図取3	置き砥石	長さ17.7 幅7.3 厚さ5.7重量968	砂岩	側面は7面の使用面があり、上下端面は整形されている 粗砥石				
上層包含物 46033 図取3	手持ち砥石	長さ5.2 幅6.3 厚さ3.8重量21	軽石	表面は平滑な平面で、他の面には丸みがある 仕上げ砥石				
上層包含物 46034 図取3	石硯	長さ13.7 幅6.2 厚さ2.1重量359	凝灰岩	下面に沈殿はあるが、文字はなっていない 側面・裏面に光沢のある付着物がある				
上層包含物 46035 図取3	石磨部材	長さ9.3 幅10.3 厚さ4.2重量638	凝灰岩	1面しか残っていないが、直方体で下部は別の部材に挿入する形であろう。上面には沈殿による裝飾がある				



第48図 5次調査出土銭実測図(1/2)

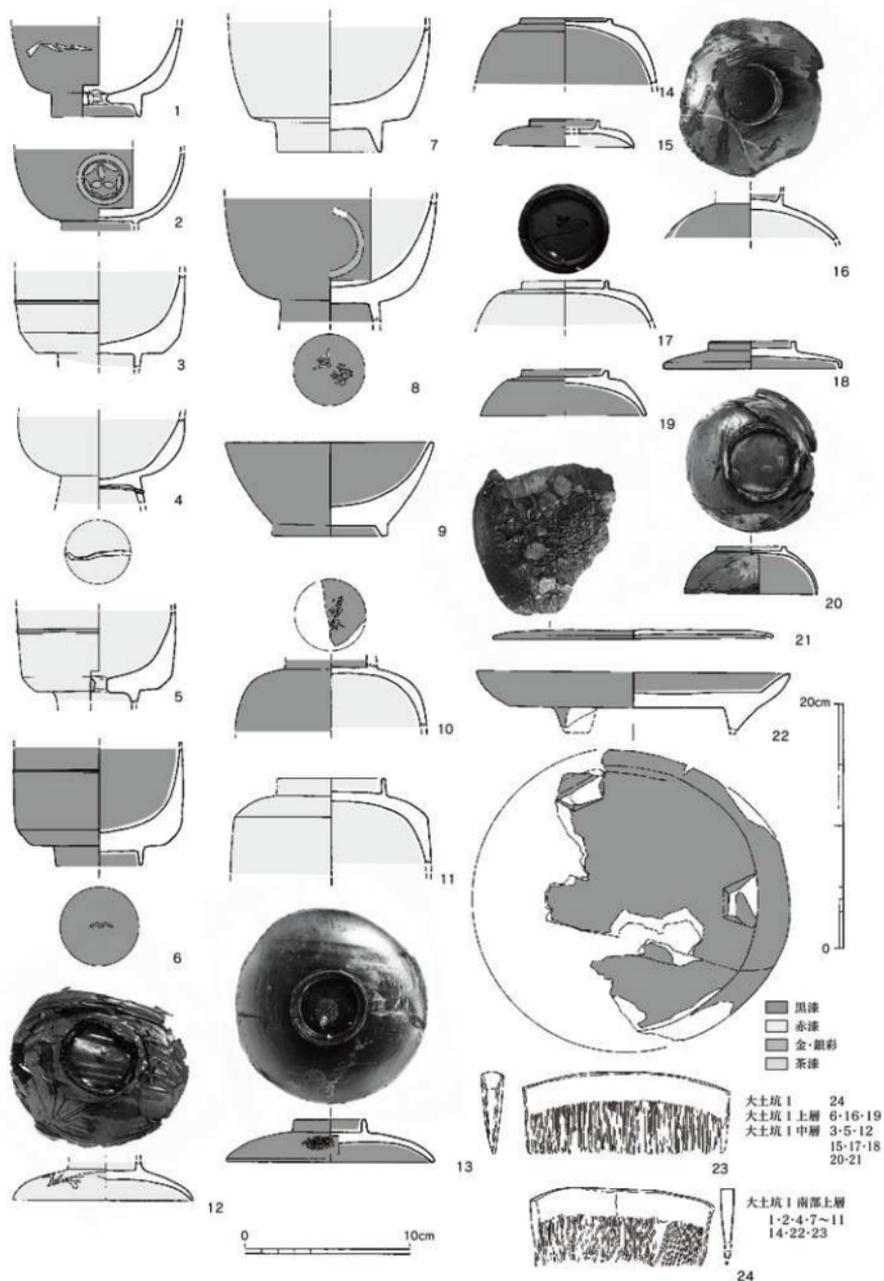
の窪みが鼻緒が玉止め状態で残っている。

52図3は傘の手元ロクロ部分で、刻みの入る部分に小骨が入る。54図12は行灯の部材で、円盤形の窪みを使った板材は乗駕や灯明皿を固定する台座であり、その台座を鉄釘で留めた方形の板材の縁には木釘列があるので、側板がつくことがわかるので、脚台部の天井板とわかる。四隅の断面方形の小柱は紙が貼られた部分であり、太い部分と細い部分があるので、細い部分から挿入して太い部分で固定したものと見られる。54図12は鋸の柄で、平鋸の躰孔に刺し込んだものであろう。

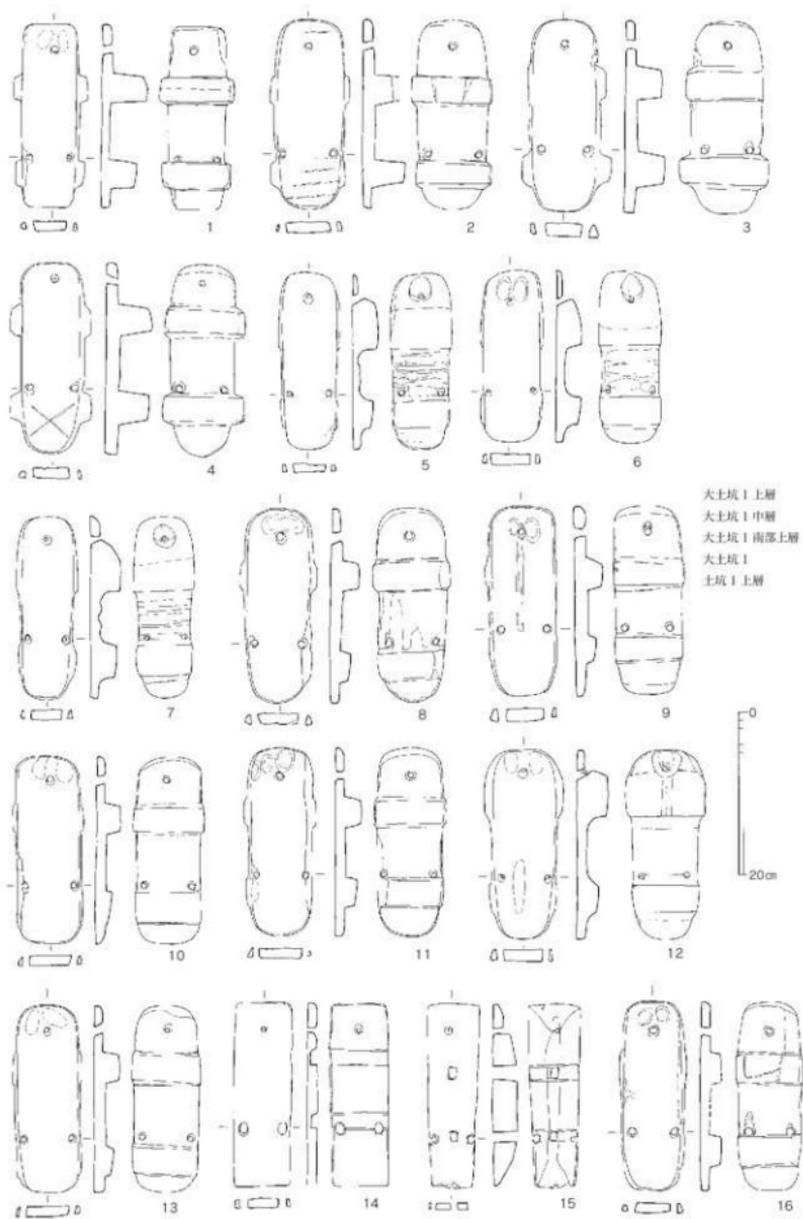
52図1・2、図版6-1は荷札木簡で、木簡1～3を付す。木簡1(図版6-1)は整理中に紛失したため

表24 5次調査出土金属製品観察表

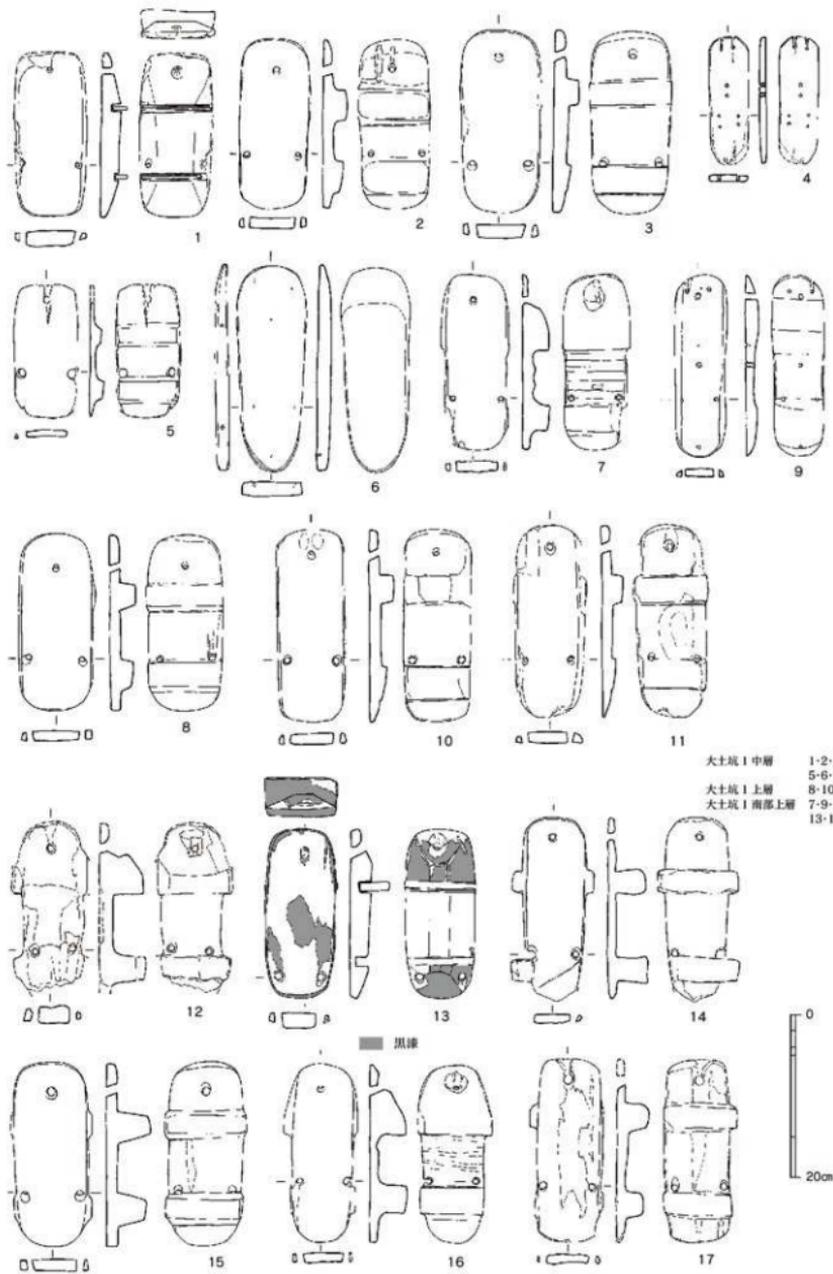
遺物名	部種	法量(cm・g)	特 徴	遺物名	部種	法量(cm・g)	特 徴
押印番号	形状	( )は復元値		押印番号	形状	( )は復元値	
図版番号	通称名			図版番号	通称名		
大土坑1 4701 図版3	棒管吸口	長さ5.5 最大径1.4	真鍮製だが、縁青付着 完全	大土坑1中層 47019 図版4	鋸先	長さ14.2 幅15.0 厚さ0.6	側縁の管部は折り返しでも、側部材との 嵌合でもないようなので、鋸端品だろう
大土坑1 4702 図版3	棒管吸口	長さ6.6 最大径0.8	完全 真鍮製 金メッキが1部だけ残っ ている	大土坑1上層 47020 図版4	メダナ アレーム	長さ9.7 高さ6.4 幅8.5	合金製 金メッキが1部だけ残っている レンズフレームと側部の部材は可動式
土坑17 4703 図版3	棒管吸口	長さ7.0 最大径0.9	真鍮製 側子の木質と金メッキが残っ ている 完全	土坑40 47021 図版3	鏡内製品	長さ4.6 最大径2.7	完全 外面は光沢を持つほど平滑で、上端 に沈線が入り、内面には段があるので、 上座に側部材に押し込んだものだろう
大土坑1 4704 図版3	棒管吸口	長さ7.5 最大径0.7	真鍮製 側子の木質が残っている 完全	土坑1 4801 図版4	雲水通宝 新貨水	径2.4 径16.5	表面は残りが良いが、裏面は摩滅して いる 一部文字が欠損しているため分 類できない
大土坑1 南座上層 4705 図版3	火打金 山形	長さ2.7 幅6.2 厚さ0.2	鉄製で、山形の頂部に穿孔 下辺は中央 部が窪む形状	土坑5 4802 新貨水	雲水通宝 新貨水	径2.3 径16.7	薄くややぬい 藍色に変色している 「永」の打ち込みから亀戸(四ツ宝)銭 (1708年初編)
大土坑1 中層 4706 図版3	不明金属製品	径4.6 厚さ0.1	真鍮製 円盤で、わずかに中央が窪む 穿孔部分が欠損しているが、ほぼ完全 凸面側に光沢を持つほど研磨されている	土坑17上位 4803 図版4	雲水通宝 新貨水	径2.3 径16.6	側面よく、摩滅して薄くなっている 「永」 の打ち込みから亀戸(四ツ宝)銭(1708 年初編)
土坑1 4707 図版4	測定針	長さ5.2 幅2.1 厚さ0.1	完全 真鍮製 金メッキが1部だけ残っ ている 円形部分には毛彫りの蓮花文が入 る	大土坑1中層 4804 図版4	雲水通宝 鉄銭	径2.3 径16.6	残りがよく、磨き跡もない 鋸のた めの分類が不能
大土坑1 南座上層 4708 図版3	鑿か	長さ8.0 最大径0.9	断面円形で、先端は欠損しているのか不 明	大土坑1 4805 古貨水 図版4	雲水通宝 古貨水	径2.5 径16.6	「永」の打ち込みから近江坂本銭(1716 年初編) (1659年初編) 裏面は磨き ずれている
大土坑1 中層 4709 図版3	鑿い針	長さ18.2 頭部幅0.7 径0.4	頭部の穿孔は板を折り返したものでら う 断面円形	大土坑1 南座上層 4806 古貨水 図版4	雲水通宝 古貨水	径2.3 径16.7	表面は摩滅が少ないが、裏面摩滅して おり、ややゆがれがある 武蔵小倉銭(安 政6年初編)
大土坑1 中層 47010 図版4	鑿い針	長さ21.0 頭部幅0.7 径0.4	頭部の穿孔は板を折り返したものでら う 断面方形	大土坑1 南座上層 4807 新貨水 図版4	雲水通宝 新貨水	径2.3 径16.7	側面は良いが、表裏面摩滅して薄くな っている 「永」の打ち込みから亀戸(四 ツ宝)銭(1708年初編)
大土坑1 47011 図版3	鑿い針	長さ40.5 頭部幅1.2 径0.9	上座は側面稍円形、中位以下は方形で、 頭部が形になる位置に鋭れが入る	大土坑1 中層 4808 新貨水 図版4	雲水通宝 新貨水	径2.5 径16.6	側面は良く、残りが多い 裏面に「小」が 入るから小樽銭(1735年初編) 裏面が ややゆがれがある
大土坑1 南座上層 47012 図版3	小釘	長さ4.1 頭部幅0.4	頭折れて、先端が折れているので抜かれ たものか	大土坑1 中層 4809 文銭 図版4	雲水通宝 文銭	径2.3 径16.7	側面は良く、残りもよい (1668年初編)
大土坑1 47013	簪	長さ15.2 最大幅0.7 厚さ0.1	真鍮製 毛彫りなどの文様はない	大土坑1 中層 4810 新貨水 図版4	雲水通宝 新貨水	径2.1 径16.6	側面は良く、摩滅のため内側が小さくな っている 裏面に「元」が入るから高津 地所銚銭(1740年初編)
大土坑1 47014 図版5	脚小札	長さ11.2 最大幅3.1 厚さ0.2	当世具足で、復元した曲線が大きいこと から初期か 鉄志の上に黒漆を塗り、内 面は金箔を貼る	大土坑1 南座上層 4811 古貨水 図版4	雲水通宝 古貨水	径2.4 径16.6	側面は良く、摩滅も少ない 建仁寺 銭(1636年初編)
大土坑1 47015 図版3	簪	長さ14.3 幅8.5 厚さ0.2	鉄製 先端欠損 基部は残っている	溝1 48012 図版4	雲水通宝 新貨水	径2.4 径16.6	側面は良いが素がわずかに入る 「宝」 の字体から平目(1726年初編)
大土坑1 中層 47016 図版3	釵丁	長さ14.2 幅5.0 厚さ0.1	鉄製 先端の丸みは意図的なもので、基 部は欠損	大土坑1 中層 48013 図版4	雲水通宝	径2.5 径16.6	側面は良く、摩滅のため内側が小さくな っている 「通」の字体から水戸銭(1717 年初編)
大土坑1 上層 47017 図版3	釵丁	長さ18.8 幅4.0 厚さ0.1	鉄製 先端の丸みは意図的なもので、基 部は欠損	表録 48014 図版4	一銭銅貨	径2.8	明治34年銘
大土坑1 上層 47018 図版3	釵丁	長さ13.4 幅4.3 厚さ0.1	鉄製 先端は欠損だが、基部は欠損で ない可能性あり				



第49図 5次調査出土木製品実測図1(22は1/4、他は1/3)



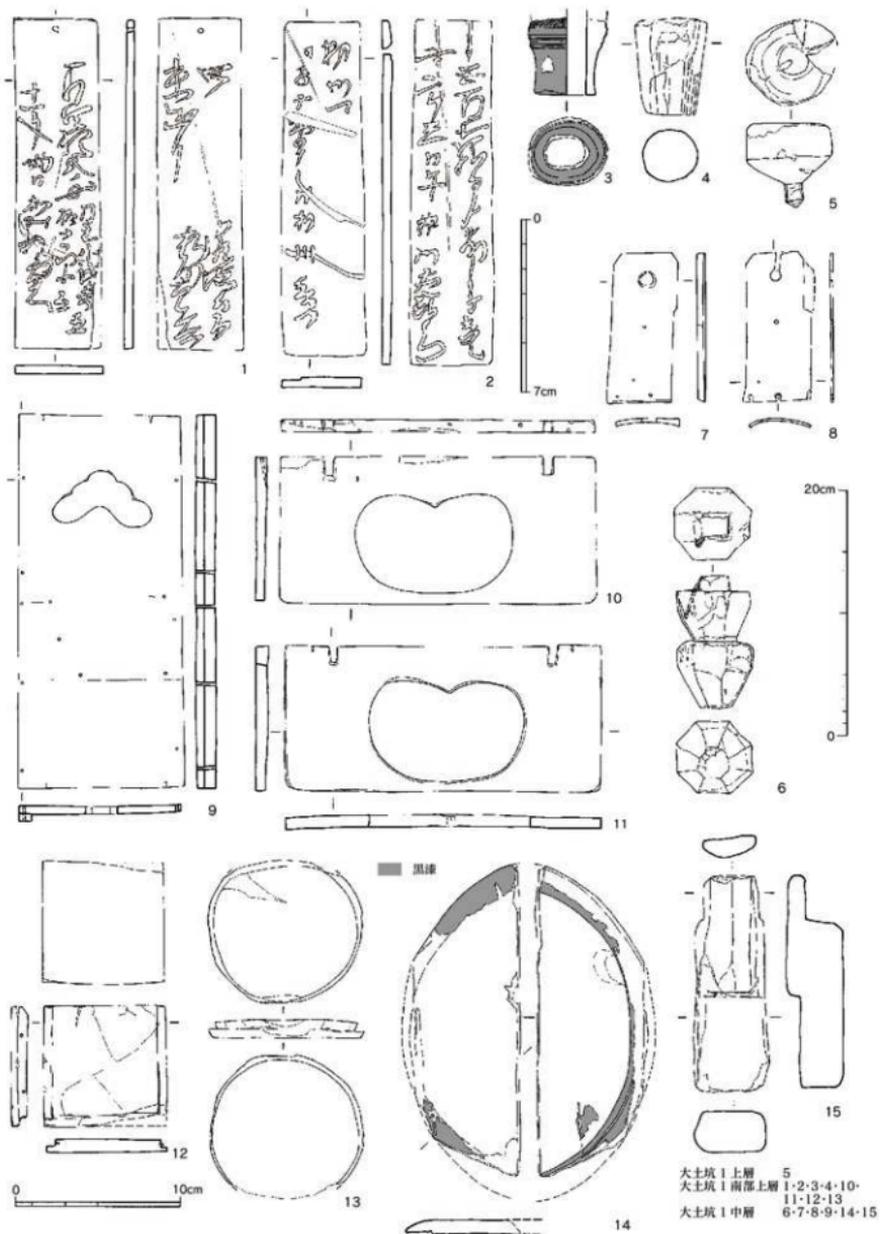
第50图 5次調査出土木製品実測图2(1/6)



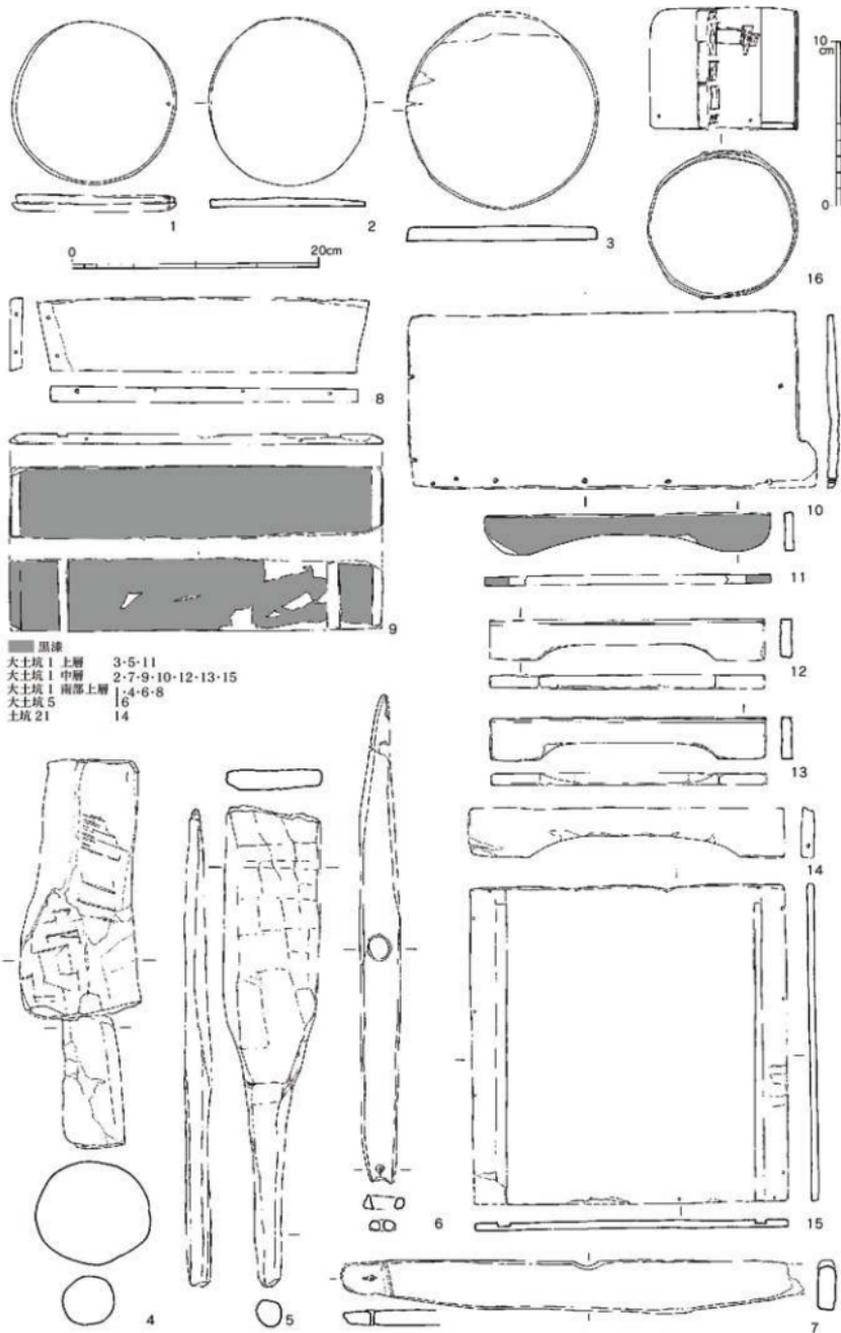
第51図 5次調査出土木製品実測図3 (1/6)

表25 5次調査出土木製品観察表1

遺構名	遺構 形状	法量(cm)	特 徴	遺構名	部 類	法量(cm)	特 徴
棟回番号	通称名			棟回番号	通称名		
大土坑1南上層 49081 図版5	匱 腰丸形	高台径5.5	歪みなく、底面に穿孔あり 外面黒漆 内面赤漆 外面に赤漆で下地塗りした上に金彩で不明モチーフを描いている 漆の遺存状態悪い	大土坑1 490824 図版8	匱	長さ4.3 幅11.0 厚3.1	変形し、中央部で欠損している 変形しているのが、本来は幅12cmほどあったと思われる
大土坑1中層 49082 巻頭図版	匱 腰丸形	最大径(10.4)	内外黒漆漆を下塗りした上に内面の赤漆を塗る 外面に赤漆で下地塗りした上に金彩で不明モチーフを描いている 漆の遺存状態悪い	大土坑1中層 50081 図版7	下駄	長さ22.4 幅10.9 厚3.5.5	変形 歯は右側が厚縁 歯の幅端が楕円に狭くになっている 歯面は右に偏っているので、左側部で、歯前のある位置が窪んでいる
大土坑1南上層 49083 図版5	匱 空形	最大径(10.2)	内外赤漆 歪みのため一部復元して実測	大土坑1中層 50082 図版7	下駄	長さ23.1 幅9.7 厚3.5.2	ほぼ変形 歯前が欠けている以外、厚縁や欠損がない 歯前と歯面の間に隙がある
大土坑1中層 49084 図版5	匱 腰丸形	最大径(10.1)	内外面赤漆 歪みあり 高台側面に穿孔して、板の痕跡を通して見えている	大土坑1中層 50083 図版7	下駄	長さ22.5 幅10.9 厚3.4.7	歯前の周りが窪んでおり、孔の左の窪みが大きく 歯は左側が厚縁し、歯が右に張り出しているの、右側面 ほぼ変形
大土坑1南上層 49085	匱 空形	最大径(9.6)	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆を塗る 漆の遺存状態悪い 底面に穿孔あり	大土坑1中層 50084 図版7	下駄	長さ22.5 幅10.0 厚3.7.8	歯前の周りが窪んでおり、孔の左の窪みが大きく 歯は右側が厚縁する 歯部分に×印がある 変形
大土坑1上層 49086 図版5	匱 空形	最大径(9.6)	内外赤漆 無文 高台外周に重なる山形が赤漆で描かれている	大土坑1上層 50085 図版7	下駄	長さ21.8 幅7.4 厚3.3.2	歯の間に大きな彫筋が3つが残る 歯は右側が厚縁 変形
大土坑1南上層 49087 図版5	蓋 一文字彫形	最大径(12.2) 高台径6.4	内外赤漆 無文 ほぼ変形	大土坑1上層 50086 図版7	下駄	長さ21.0 幅7.5 厚3.4.8	加工面が粗い、つくりが粗い 歯前が左に偏っており、穿孔も同じ方向に偏っている ほぼ変形
大土坑1南上層 49088	匱 腰丸形	最大径(12.8) 高台径7.1	歪みは少ないが、遺存状況は悪い 外面黒漆 内面赤漆 外面は金彩で不明モチーフ、真鍮に「清合」赤漆で描く	大土坑1南上層 50087 図版7	下駄	長さ22.4 幅7.4 厚3.7.7	歯の間に大きな彫筋が3つが残る 歯は右側が厚縁し 歯前が左に張り出しているの、左側面 変形
大土坑1南上層 49089 図版5	匱 扁反形	口径12.6 高台径7.0 底径5.8	内外赤漆 無文 歪みのため一部復元して実測	大土坑1中層 50088 図版7	下駄	長さ23.8 幅9.5 厚3.4.8	歯前の周りが窪んでおり、孔の左の窪みが大きく ほぼ変形 楕円状の右側が厚縁しているの左側面だろ
大土坑1南上層 49090	匱 空形	最大径(10.4)	内外赤漆 内面赤漆 裏面に赤漆で「清合」 歪みなし 径が小さいので歪みしたが、小型の可能性もある	大土坑1上層 50089 図版7	下駄	長さ23.2 幅8.8 厚3.2.9	後面は左側が張り出すので、左足用 変形 後面が厚縁で楕円に狭くになっている
大土坑1南上層 49091 図版5	匱 一文字彫形	つまみ径係(6.3)	内外赤漆 無文 歪みあり 接合して9割残存 漆の遺存状況は悪い	大土坑1南上層 50090 図版7	下駄	長さ23.0 幅8.7 厚3.2.9	歯前の周りが窪んでおり、孔の左の窪みが大きく、後面は左側が厚縁するので、右足用 変形 後面が厚縁で楕円に狭くになっている
大土坑1南上層 49092	匱 腰丸形	つまみ径係4.4	内外赤漆	大土坑1南上層 50091 図版7	下駄	長さ23.2 幅8.8 厚3.3.3	歯前の周りが窪んでおり、孔の左の窪みの形から左足用 変形 後面が厚縁で狭くになっている
出土不明	蓋 平形	つまみ径係4.4 新径12.8 底径2.8	内外面黒漆で、外面は彫筋が菊花文を描く ほぼ変形	大土坑1中層 50092 図版7	下駄	長さ23.0 幅9.2 厚3.2.5	後面が斜めに厚縁して、台と同じ角度になっている ほぼ変形
大土坑1南上層 49094 図版5	匱 空形	つまみ径係5.4 最大径(11.0)	内外赤漆 無文 9割残存	大土坑1中層 50093 図版7	下駄	長さ23.0 幅8.4 厚3.3.1	歯前の周りが窪んでおり、孔の左の窪みが大きく、後面は左側が厚縁するので、左足用 変形
大土坑1中層 49095	蓋 平形	つまみ径係(4.2) 新径8.4 底径1.6	内面赤漆 外面黒漆で、跡の存在は欠損のため不明 歪みはない	大土坑1 50094 図版7	下駄	長さ22.4 幅7.0 厚3.1.3	右側はほぼ変形 遺存状態が悪い
大土坑1上層 49096 巻頭図版	蓋 平形	つまみ径係4.1	外面黒漆、内面赤漆で、外面は赤漆と金彩で表の土を染み跡3羽を描く 9割残存	大土坑1南上層 50095 図版7	下駄	長さ22.4 幅6.3 厚3.2.8	右側はほぼ変形 遺存状態が悪い 上面は踵部分に×の彫筋あり
大土坑1中層 49097 巻頭図版	匱 腰丸形	最大径(10.4)	内外赤漆 無文 9割残存	大土坑1 50096 図版7	下駄	長さ23.1 幅8.1 厚3.2.5	歯前の周りが窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後面は右側が厚縁するので、左足用 変形
大土坑1中層 49098 巻頭図版	匱 平形	つまみ径係5.4 新径10.8 底径4.7	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆を塗る	大土坑1中層 51001 図版7	下駄	長さ20.1 幅8.8 厚3.3.0	歯前の幅端が欠けているのでほぼ変形 ほぼ変形だが遺存状態が悪い 後面が厚縁で楕円に狭くになっている
大土坑1上層 49099 図版5	蓋 一文字彫形	つまみ径係5.2 新径9.0 底径2.8	内外赤漆 無文 ほぼ変形	大土坑1中層 51002 図版7	下駄	長さ20.8 幅8.7 厚3.2.8	歯前の周りが窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後面は右側が厚縁するので左足用 変形
大土坑1中層 49099 巻頭図版	匱 腰丸形	つまみ径係4.4 新径8.2 底径3.0	内外面黒漆で、外面は金彩で楕文を対面に描く 接合してほぼ変形	大土坑1中層 51003 図版7	下駄	長さ22.2 幅10.0 厚3.3.4	変形 歯前も厚縁で狭くになっているが、後面が厚縁は著しい
大土坑1中層 49099 巻頭図版	蓋 合子蓋	新径(17.0)	内外面黒漆で、外面は赤漆と金彩で樹形文を描く 遺存状態悪くひずみあり	大土坑1中層 51004 図版8	下駄	長さ31.6 幅4.6 厚30.9	歯は右側が厚縁するので、左足用 ほぼ変形 孔のほとんどに木釘が残る
大土坑1南上層 49099 図版5	脚付皿	径(26.0) 底径3.0	内外面黒漆で、内底の赤漆を塗る 外縁は張り出した脚がつく 足置距離から本来4つだろう 今中のみあり	大土坑1中層 51005 図版8	下駄	長さ31.6 幅7.7 厚31.8	歯は右側が厚縁するので左足用 ほぼ変形 子供用
大土坑1南上層 49099 図版9	蓋	長さ8.0 幅12.5 厚3.1.3	変形 漆塗りなど装飾はない				



第52図 5次調査出土木製品実測図4 (1・2は1/2、6・9~11・14・15は1/4、他は1/3)



第53図 5次調査出土木製品実測図5 (16は1/3、他は1/4)

表26 5次調査出土木製品観察表2

遺物名	器種	法量(cm)	特徴	遺物名	器種	法量(cm)	特徴
検出番号	形状	( )は復元値		検出番号	形状	( )は復元値	
図版番号	通称名			図版番号	通称名		
大土坑1中層 51006 図版8	下駄 草履底	長さ24.2 幅8.5 厚さ3.1	裏は左側が摩滅するので、右足用 ほぼ 完全 木釘でなく釘打で、初期の遺品で いない	大土坑1中層 52099 図版8	襦袢	長さ30.4 幅13.5 厚さ1.6	松葉形の透かし窓なので、縦長の襦袢か たろう 襦袢には別の部材を木釘で留めて 肥厚させている
大土坑1南面上層 51007	下駄 げっくりり	長さ21.5 幅8.2 厚さ3.3	面の間に大きな繋ぎがうつが残る 裏は 左側の摩滅 先の先端の弧が右に届いて いない 完全	大土坑1南面上層 52010 図版8	鞆 足打首敷	長さ12.0 幅25.6 厚さ1.0	ハートの透かし窓がある 側面に木釘がないので、2脚だろう
大土坑1上層 51008	下駄 踵面下駄	長さ21.5 幅9.5 厚さ3.1	裏は左側が摩滅するので、右足用 完全 表面と後面の摩滅の差は小さい	大土坑1南面上層 52011 図版8	鞆 足打首敷	長さ12.0 幅25.8 厚さ1.0	ハートの透かし窓がある 側面に木釘がないので、2脚だろう
大土坑1南面上層 51009 図版8	下駄 草履底	長さ22.0 幅6.2 厚さ1.8	表面が左に傾り、裏は左側が摩滅するの で、右足用 ほぼ完全 孔のほとんどに 木釘が残る	大土坑1南面上層 52012 図版8	襦袢	長さ7.5 幅7.3 厚さ0.9	箱の襦袢で、上端は斜めに加工されて いる以外は平型で、側面には木釘が2 つあるが、下端面には見られない
大土坑1南面上層 51010	下駄 踵面下駄	長さ23.1 幅8.6 厚さ3.6	表面の間に隙間が入っており、右の孔の深み が大きく、後面は右側が摩滅するので、 左足用 完全 後面が摩滅で縁端に欠く なっている	大土坑1南面上層 52013 図版8	曲げ物底版	長さ9.3 幅9.1 厚さ1.2	穴開のため側面に見える 側端は丸み を持つ 持ち込みは約1.8cm程の幅の土 具によるもの 側面に木釘はない
大土坑1南面上層 51011	下駄 げっくりり	長さ23.3 幅9.6 厚さ3.8	表面の間に隙間が入っているが左右同じで ら 後面は右側が摩滅し、左側が張り出 すので右足用 完全 表面に釘が残る	大土坑1中層 52015 図版8	留め具か	長さ17.5 幅6.5 厚さ4.6	上下端で互い違いに釘が穿れているの で、部材を繋いで固定する材だろう
大土坑1南面上層 51012	下駄 げっくりり	長さ20.1 幅9.1 厚さ5.3	中心孔の穿孔が長方形 表面は右側が摩 滅し ほぼ完全	大土坑1南面上層 53011 図版8	曲げ物底版	径13.2 厚さ0.7	段差があるが、側面に木釘なし 表面端部の木釘は斜めの釘を固定し たものだろう
大土坑1南面上層 51013	下駄 踵面下駄	長さ20.6 幅8.2 厚さ4.7	表面裏面並行り ほぼ完全	大土坑1中層 53012 図版8	曲げ物底版	長さ12.8 幅12.6 厚さ0.7	段も側面の木釘もなし
大土坑1中層 51014	下駄 踵面下駄	長さ22.4 幅10.0 厚さ4.9	縫製が残る、高は高い 裏は右側が摩滅 する ほぼ完全	大土坑1上層 53013 図版8	曲げ物底版	径15.3	ほぼ正円形 段差はなく斜めに傾る
大土坑1上層 51015	下駄 踵面下駄	長さ22.5 幅10.0 厚さ4.4	完全 均一なつくりで、摩滅がほとんど ない	大土坑1南面上層 53014 図版8	木箱	長さ31.5 最大径9.7 納容径4.8	中央部が全周同じように窪んでいる
大土坑1南面上層 51016	下駄 げっくりり	長さ22.0 幅8.9 厚さ4.3	加工が浅く、つくりが粗い 表面の裏 が左に張り出しているので左用 ほぼ完全	大土坑1上層 53015 図版8	羽子板形木製品	長さ39.2 幅7.7 厚さ2.4	柄がうつ紙状のもので、先端を両側から 留めているが、尖っていない 何枚の 羽を挿入したかも知れない
大土坑1南面上層 51017	下駄 踵面下駄	長さ22.2 幅14.6 厚さ4.0	右側の存在が思い違い 表面は右が摩滅 し、後面は左が摩滅する 摩滅の程度は 同じ ほぼ完全	大土坑1南面上層 53016 図版8	網針形木製品	長さ40.0 幅3.5 厚さ1.1	先端は尖っており、基部は小さな釘が 入る 中央に径2.2cmの孔があるので、 そこに紐を通して編むものだろう ゴザ 作りと関係あるか 黒漆
大土坑1 図版6	荷札木箱	長さ約15 幅約5 厚さ約0.5	遺物の整理中に紛失したため、作図でき ず、X線写真のみ掲載している 法量は 概数	大土坑1中層 53017 図版8	細紐手	長さ4.4 幅3.7 厚さ1.5	紐手で、端部には斜めに縁孔あり 中央 部が窪む
大土坑1南面上層 52017 図版6	荷札木箱	長さ13.6 幅3.5 厚さ0.4	穿孔あり 側面を一部欠損 表面面に傾り傾が残る	大土坑1南面上層 53018 図版9	箱の襦袢	長さ7.0 幅26.8 厚さ1.2	側面に片側に木釘孔がなく、側面 面も同じであることから、互い違いの組 み合わせで襦袢を形成していたようだ
大土坑1南面上層 52018 図版6	荷札木箱	長さ13.7 幅3.6 厚さ0.4	穿孔あり 穿孔部分で中央から傾いている 表面面に傾り傾が残る	大土坑1中層 53019 図版9	箱蓋	長さ30.2 厚さ0.8	全面裏面並行り 側面端で約1/4残存
大土坑1南面上層 52019 図版8	箱手彫材 平元コロ	長さ4.6 幅4.8	外面裏面並行りで、やや歪みあり 木厚は最大径4.2cm前後だろう	大土坑1中層 53010 図版9	箱の襦袢	長さ14.2 幅32.5 厚さ0.8	側面に片側に木釘孔がなく、表面 は斜になっているので、側面部分を最後に 固定したものである
大土坑1南面上層 52014 図版8	杖	長さ5.9 最大径7.3	側面に孔が空いているが、これは木目の 節が脱落したものでしょう	大土坑1上層 53011 図版9	足打首敷の脚	長さ3.0 幅23.2 厚さ1.2	裏面並行り 接合部は漆が塗られている
大土坑1上層 52015 図版8	掛簾	最大径5.1 幅5.0 芯径1.0	変形し、欠損している 中央に半球状に窪む 芯は鉄で表面方	大土坑1中層 53012 図版9	鞆 足打首敷の脚	長さ3.5 幅22.3 厚さ0.9	12・13はセットで、下端部に漆がある ので、ここに板を挿入するものである 側面・上下端面には木釘なし
大土坑1中層 52016 図版8	袴脚簾	長さ10.7 最大径6.2	上端面に方形の溝を作り、挿し込むもの 側面は8面に面取りしている	大土坑1中層 53013 図版9	鞆 足打首敷の脚	長さ3.4 幅22.3 厚さ0.9	12・13はセットで、下端部に漆がある ので、ここに板を挿入するものである 側面・上下端面には木釘なし
大土坑1中層 52017 図版8	不明木製品 襦袢	長さ9.0 幅3.9 厚さ0.5	7・8がセットになる 薄く、側面に釘 孔はない 上端の穿孔は釘孔には大きい ので、縁が挿入されたのか	土坑21 53014 図版8	鞆 足打首敷の脚	長さ2.0 幅23.3 厚さ0.7	側面に片側に木釘孔があるので、方形節 か 上端は欠損しているもので、もう少し 長いものか つくりは粗雑
大土坑1中層 52018 図版8	不明木製品 襦袢	長さ9.1 幅4.0 厚さ0.5	7・8がセットになる 薄く、側面に釘 孔はない 上端の穿孔は釘孔には大きい ので、縁が挿入されたものか	大土坑1中層 53015 図版9	鞆	長さ26.0 幅25.4 厚さ0.7	表面裏面並行り、上面の端部は木釘あり、縁 がつく 表面の裏面りされている部分に は漆がついて、釘固定ではない
				土坑21 53016 図版9	曲げ物	径9.0 厚さ7.4	側面に木釘があるが、 底版を止めるには高い



共通しており、土留め材の杭にするため再加工した結果ではない。鋤以外に考えられるものとして脱粒用の棒が、柄にするのであれば断面逆台形でなく握りやすく円形にするべきであり、民俗的にもない。まとめて後述するが、堆肥小屋と思われる4次調査100号土坑から出土していることから、堆肥作りに使う鋤かもしれない。堆肥造りに使われたと考えられる土坑からは炭化物や初殻が互層に堆積しているが、深い土坑であり、上から投入した後で均さなければほぼ水平に同じ厚さの層にはならないことから均すための道具なのではなかろうか。先端に鉄製の刃をつけた痕跡がないのはそのためだろう。鋤の一種であろうからここでは鋤として報告しておく。

図版5-2は大學目業の目業瓶で、明治32(1899)年に田口参天堂から発売されたものである。昭和7年に両口点眼式目業瓶が発売されるまでの間のものだろう。図版5-3は「みや古染め」の染料瓶で、桂屋商店から明治29(1896)年に発売された家庭用染料である。

図版10-6は写真のみ掲載したもので、2本の撚り紐2本で、先端は帆船結びで、中央に2つの止め結びの結び目にもう1本の紐を通したものを。

#### 注

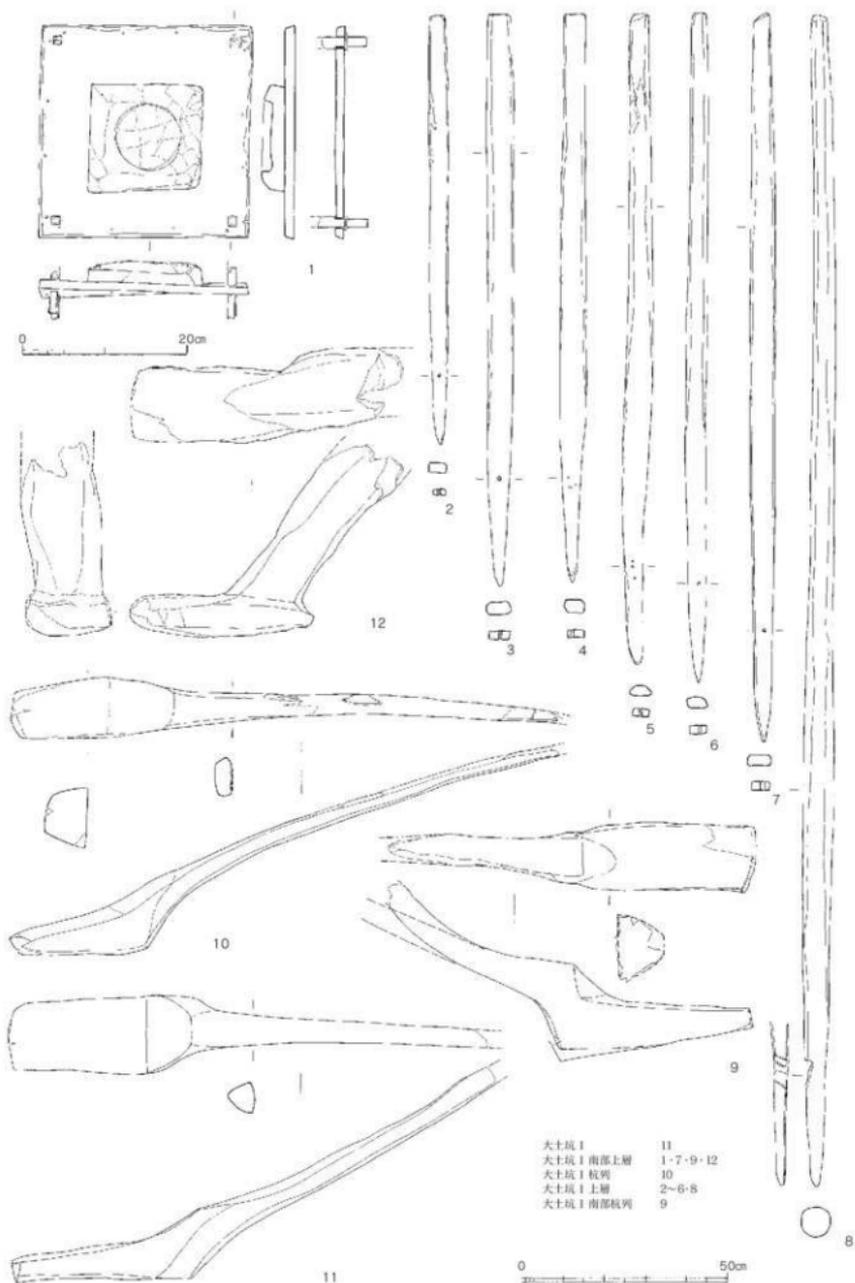
- 1 江戸遺跡研究会2001「遊・玩具6羽根つき・独楽」『図説 江戸考古学研究事典』柏書房

#### 参考文献

- 1 秋田裕毅2002『ものと人間の文化史104 下駄』法政大学出版局

表27 5次調査出土木・ガラス製品観察表

遺構名	器種	量目(cm)	特 徴	遺構名	器種	量目(cm)	特 徴
棟回番号 図版番号	形状 通称名	( )は数値類		棟回番号 図版番号	形状 通称名	( )は数値類	
大土坑1 南壁上層 5-4図1 図版9	行灯台座	長さ26.0 幅25.5 厚さ4.0	鉄釘で周りを止めている。数は周りに本釘があるのて、下に脚板がつくとわかる。数は下面が浮遊している。	大土坑1 5-4図11 図版10	鋤	長さ134.2 幅13.2 厚さ14.3	ほぼ定形で、乾燥で歪んでいるので図版による。
大土坑1 上層 5-4図2 図版9	柄杓の柄	長さ52.8 幅2.8 厚さ1.5	小型の柄杓	大土坑1 南壁上層 5-4図12 図版10	小型鋤	長さ31.3 幅9.6 厚さ5.0	1本作りで、平張の鍔口に挿し込むものだろう。乾燥による歪み大きい。
大土坑1 上層 5-4図3 図版9	柄杓の柄	長さ69.6 幅3.1 厚さ2.0	柄杓を固定する釘孔が3つある。	大土坑1 上層 図版5-1	瓶 ボガラス 両口点眼式目業瓶	長さ8.8 幅2.8 厚さ1.6	型合わせ「EYE LOTION BOTTLE」Z21」の周縁がある面の周縁にはシールを貼る跡が洋式酒形に隠れている。
大土坑1 上層 5-4図4 図版9	柄杓の柄	長さ70.0 幅3.2 厚さ1.8	側面の一部に窪みがあるが、意図的なものかわからない。	覆瓦井戸 図版5-2	瓶 透明ガラス 目業瓶	底面長軸2.9 底面短軸1.6	型合わせ珠文列で囲まれた内部に「大學目業」参天堂房の隠刻あり。側面は扁状、底面は田の字型の隠刻あり。
大土坑1 上層 5-4図5 図版9	柄杓の柄	長さ79.7 幅3.6 厚さ1.4	断面長方形の扁平部分が長く、通常の柄杓の柄ではないかもしれない。	覆瓦井戸 図版5-3	瓶 透明ガラス 染料瓶	口径2.1 最大径3.2 高さ6.1	型合わせ「みやこ染」の隠刻の裏面に目盛りが隠されている。底面には「三」の屋号が隠されている。
大土坑1 上層 5-4図6 図版9	柄杓の柄	長さ82.2 幅3.9 厚さ1.3	側面の一部に窪みがあるが、意図的なものかわからない。	大溝2 上層混合層 図版5-4	瓶 透明ガラス ボマード瓶	口径3.6 最大径3.2 高さ4.0	円柱状。側面は凸條付で、蓋が対面にあり、裏面に「東京會社N301瓶」と上下面に「IZUTSUYAMA」の隠刻がある。
大土坑1 南壁上層 5-4図7 図版9	柄杓の柄	長さ89.1 幅3.1 厚さ1.5	基部が欠損している。乾燥のためや反っているのて、長さに誤差あり。	覆瓦井戸 図版5-5	瓶 緑ガラス ボマード瓶	口径4.0 最大径4.8 高さ5.4	肩の張る寛形で、裏面にウテナの文字をゼライン化した三つ葉の隠刻がある昭和4(1929)年発売。
大土坑1 上層 5-4図8 図版9	柄杓	長さ143.1 幅3.6	長柄杓の柄であらう。先端の柄杓に差し込む部分だけ断面長方形だが、それ以外は断面円形。	覆瓦井戸 図版5-6	瓶 緑ガラス ニッコ瓶	口径3.6 最大径4.8 高さ5.1	肩の張る寛形で、底に2つの点の隠刻されている。裏面に「三」の屋号が隠れている。裏面に「三」の屋号が隠れているのは口縁部の処理の失敗。気泡あり。
大土坑1 南壁上層 5-4図9 図版9	鋤	長さ91.7 幅16.6 厚さ24.0	柄を欠損している。定形で、乾燥で歪んでいるので図版は復元。	出土地不明 図版5-7	瓶 緑ガラス ニッコ瓶	口径6.0 底径2.1 高さ12.3	口縁部は打ち欠き外し。定形。型合わせ。口縁部が曲がっているのは口縁部の処理の失敗。気泡あり。
大土坑1 上層 5-4図10 図版10	鋤	長さ117.6 幅18.1 厚さ15.3	柄の先端を欠損している。乾燥で歪んでいるので図版は復元。				



第54圖 5次調査出土木製品実測図6 (9~11は1/12、他は1/6)

### 3. 矢加部町屋敷遺跡1次調査

1次調査区は柳川市大字矢加部672-3・672-4・674・676-2・677・669-1・700-1・701-1・701-2・702-2・702-2・713-9番地の一部と、字橋本3・4・1・13-1番地の一部の1,730㎡で実施した。

平成16(2004)年6月15日、0.7のバックホーを搬入して掘削を開始した。整地面が何枚も見られ、調査すべき近世の整地面がわかりにくいいため遺構面を検討しながら慎重に掘り下げ、炭化物を多く含む遺構が見え始めた整地面まで掘削した。この整地面から検出される遺構には明治以降の遺物が混じるものの近世の遺物も混じることから、この面から調査を始めることにした。この面の上で検出された胞衣壺や埋甕については近代に属するものと判断し、調査から除外し、写真と位置記録を残すに留めた。重機で掘削した客土から出土する陶磁器が多く、これを包含層出土分として取り上げながら掘り下げたため、表土剥ぎに多くの時間を費やした。水路の東側の調査区は戦後の産業廃棄物を入れた客土を掘削すると遺構面が検出された。6月25日に作業員を投入、遺構検出を開始した。遺構プランは鮮明なものもあったが、不鮮明なものも多く、鮮明なプランの検出された遺構の壁面と底面に切られる遺構のプランが見えるので、さらに下層の整地面があることがわかった。そのため、最初の整地面を掘り下げて下位の遺構面を検出した。泉道側には大溝があることがわかり、さらに掘削しなければならない可能性があったので、トレンチを入れてみたところ、溝の規模が大きく出土遺物はほとんどないことがわかった。そこで、9月9日に重機を入れて溝を掘削した。9月15日に九州航空により空中写真を撮影した。実測終了後、10月4日に埋め戻しを完了し、調査を終了した。

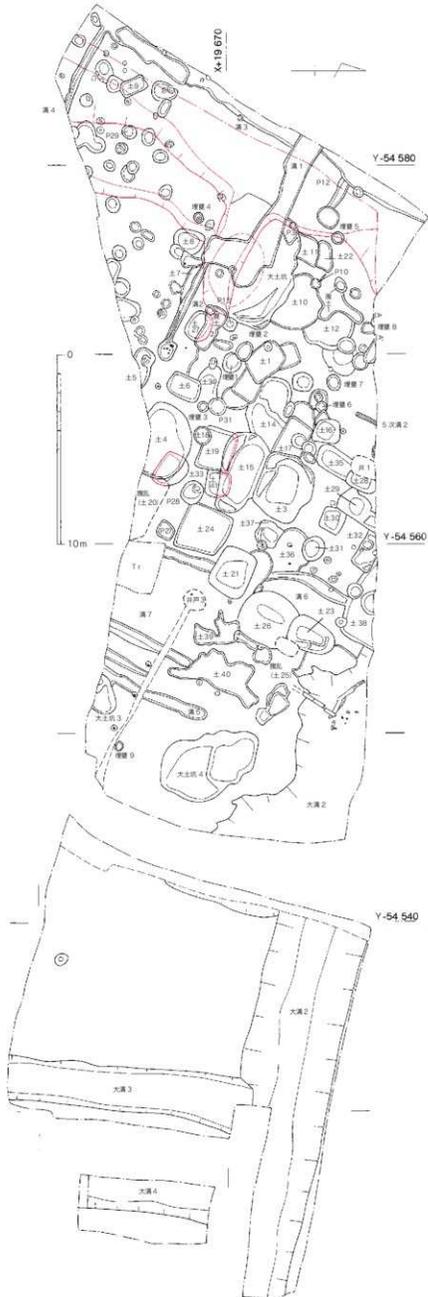
#### 1) 遺構

矢加部町屋敷遺跡1次調査は泉道23号線の東と、水路を挟んで東側の低地部分に分かれている。前者は旧状宅地だが、後者は水田であった。基盤層自体の高さに大きな差はないが、宅地側は90cm程の整地層・客土層で地上げされている。上から50cm程は昭和40年代以後の客土層でその下面にはコンクリート基礎が埋設された整地面があり、そこから大きな廃棄土坑が切り込んでいた。この整地面の下に炭化物を多く含む黒色土層が広がっており、攪乱土坑とした20号土坑がこの黒色土層を埋土としており、そこからは大正時代のものが出土しているため黒色土層は大正包含層とした。この包含層が炭化物を多く含むのはこの面に鈎造遺構が存在するためだろう。この黒色土層の下に整地面があり、上下層の時期から判断して明治後半代から大正時代のものと考えられる。その上面は硬化しており、埋甕の多くはここから掘り込まれている。

その下にさらに黄灰褐色粘土層の整地層があり、その下には洪水層と思われる砂を含む灰白色土が薄く堆積していた。この時期に水害の記録はなく、意図的に敷かれたものかもしれない。その堆積層が覆っていたのは黄緑灰色粘土の整地層であり、その上面は硬化していた。これが1号大土坑の最終堆積層だったところから明治前半代の遺構面と考えられる。

その整地層の下が江戸時代の遺構面である。1号大土坑と1号溝状遺構の検出面との間に整地層があったことから、その間にも薄い数枚の整地面があったものと思われるが、明瞭に捉えることのできたのは上記の2面のみであった。

報告する遺構は、土坑37基、廃棄土坑2基、大土坑3基、溝7条、大溝4条、埋甕8基、井戸1基である。



第55図 矢加部町屋敷遺跡1次調査遺構配置図 (1/200)

## a) 土坑

土坑は現場で41基まで番号をつけたが、このうち2号土坑は15号土坑の埋土の差で同一遺構とわかったため、2号を欠番とした。13号土坑もまた、8号土坑の埋土の差で同一遺構とわかったため、13号土坑を欠番とした。20号土坑は掘削してみても大正時代のものと判明したので、本来は掲載しない時期のものだが、鋳型など重要な遺物を出し、大正包合層である黒色土の時期を判断する根拠となることから、攪乱土坑として遺物のみ掲載した。25号土坑は近代のもので遺構・遺物ともに掲載していない。結果、ここでは37基の土坑を掲載する。

### 1号土坑 (図版12、第56図)

調査区水路西側の西部中央に位置する略方形の土坑である。南西部のビットとの切り合いは不明瞭だった。1号土坑が切る方形のビットは浅い落ち込みなので、土坑として報告していない。2号埋土は1号土坑を切っている。床面はほぼ平坦で、現存で長軸215cm、短軸で161cm、深さ16cm程度を測る。主軸方向はN-43°-Wで、にぶい暗黄灰褐色土の埋土であった。

出土遺物は少なく、見込みに菊花文の染付碗があることから18世紀中葉に属する。

### 3号土坑 (図版12、第56図)

調査区水路西側の中央に位置する略方形の土坑である。14・15・17号土坑を切っており、南側のテラスは別の遺構であった可能性もある。主軸方向はN-24°-Eで、現存長軸347cm、短軸279cmを測り、177cmと深い。底面は略方形で、ほぼ平坦である。種子や魚骨・魚鱗などが初級と一緒に出土した。床面近くに初級の堆積があるが、炭化していなかった。

出土遺物はわずかで、広東碗や外面古相の蛸唐草文と内面袈裟禪文帯の染付鉢があることから、19世紀初頭に属する。

### 4号土坑 (図版12、第56図)

調査区水路西側の中央南端に位置する黒色土層の下位から検出された不整楕円形プランの土坑である。東側に攪乱土坑である20号土坑に切られ、北に33号土坑を切り、南は調査区外に延びる。現存長軸395cm、短軸290cmで、41cmほどの深さを測る。主軸方向はN-18°-Wである。床面は平坦で、北側斜面は緩やかである。混入物の多い黄灰色粘土層を下げると6号土坑に近い黒色土層になり、木片・木材・萱のような草状の植物が見られた。

出土遺物はパンケース1箱分あり、4号土坑が切る土坑も掘り抜いてしまったので遺物が混ざった可能性もある。花唐草文染付小皿や半球形家紋文染付碗、京焼風陶器碗から18世紀前葉に属するとわかる。

### 5号土坑 (第56図)

調査区水路西側の中央南端に位置する隅円長方形プランの土坑で、北側のビットとの切り合い関係は不明である。南は調査区外に延びる。現存長軸約210cm、短軸110cmで、深さは17cmと浅い。主軸方向はN-67°20'-Wである。にぶい黄灰褐色土を埋土とする。

出土遺物はパンケース1箱あるが、摺鉢が大きいので、器種は少ない。銅緑釉の小皿や渦福の裏銘入り染付皿、皿の見込みに整った5弁花文の染付があることから、18世紀後葉に属する。

### 6号土坑 (図版12、第56図)

調査区水路西側の中央南端に位置する整った隅円長方形プランの土坑で、34号土坑を切る。現存長軸188cm、短軸72cmである。深さ29cmほどの深さで、主軸方向はN-24°20'-Eである。中に軟質の黒色土があり、その上位に黄灰色粘土が被っている。これは周囲に見られた整地層が被ったものだろう。

出土遺物はわずかで、小片ながら筒形碗や内面口縁部に袈裟禪文帯の染付碗があることから18世紀後葉に属する。

### 7号土坑 (図版12、第56図)

調査区水路西側の西部に位置する不整形の細長い土坑で、2号溝状遺構に切られている。2号溝状遺構の北側に遺構の続きの痕跡が見られたが、図化する段階ではプランが確認できなかった。そのため現存で長軸210cm、短軸70cmである。12cmほどの深さしかなく、主軸方向はN-61°20'-Wである。西側は1号溝状遺構の南北軸に切られており、1号大土坑の上面を切っている。

出土遺物はわずかで、土師質土器が数個体とコンニャク印判の桐文の入る染付碗があるが、遺構の重複範囲が大きく、遺構が浅いので本土坑の出土遺物は混入の可能性があるため確実な時期はわからない。

### 8号土坑 (図版12、第56図)

調査区水路西側の西部に位置する略方形プランの土坑で、東側はビットに切られている。現存長軸161cm、短軸121cmである。深さは17cmほどしかなく、主軸方向はN-21°10'-Eである。当初13号土坑としていたものを付け替えている。埋土中の黒色土が北側に偏っていた。

出土遺物はわずかながら、京焼風陶器碗や呉器手陶器碗の小片があることから18世紀前葉に属する。

### 9号土坑 (図版12、第56図)

調査区南西側に位置する方形プランの土坑で、ビットを切る。現存長軸141cm、短軸87cmで25cmほどしかなく、主軸方向はN-26°20'-Wである。南東部床面に木質が出土したが、9号土坑の下の 号溝状遺構の埋土内のものが露出した可能性もある。

出土遺物はなく、時期不明。

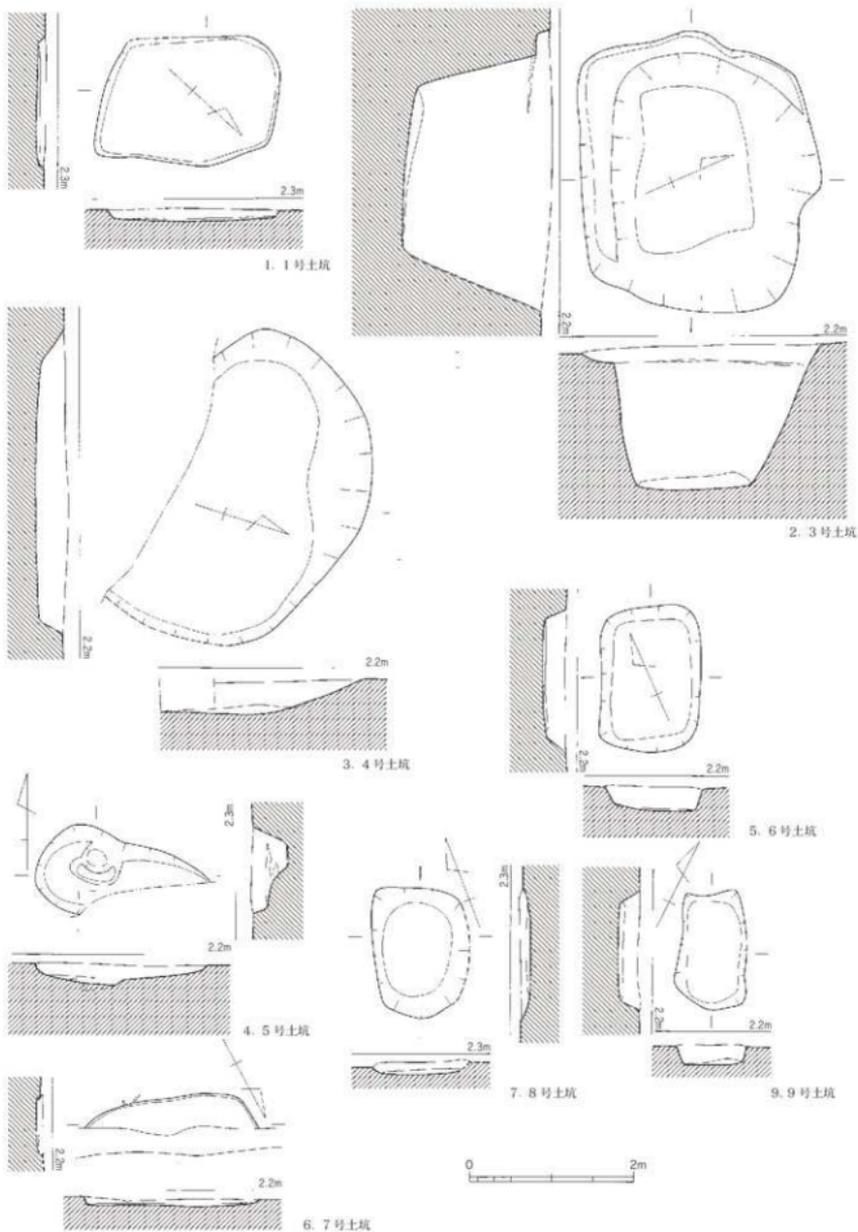
### 10号土坑 (第57図)

調査区西側に位置する不整形プランの土坑で、1号大土坑に南側を切られ、北は1号廃棄土坑に切られ、12号土坑を切る。長軸は約300cmほどに還元され、短軸296cmである。深さは20cmほどしかない。主軸方向はN-62°10'-Wである。1号大土坑との切り合いは明確に検出された。埋土上面を覆う明黄色粘土は整地層だが、炭化物を含む。

出土遺物はパンケース半分ほどで、家紋文半球形染付碗や京焼風陶器碗から18世紀前葉から中葉と考えられる。

### 11号土坑 (図版12、第57図)

調査区西側に位置する略方形の土坑で、22号土坑に北側を、南を1号大土坑に切られる。長



第56图 1次調査1・3~9号土坑実測図(1/60)

軸約190cm、短軸132cmで、主軸方向はN-9°30'-Eである。整地面で検出され、暗黒灰色粘土の埋土上層は北側に偏っていた。

出土遺物はわずかにビニール1袋だが、肥前産摺鉢の形態から18世紀代に属すると推定される。

#### 12号土坑 (図版12、第57図)

調査区西側に位置する不整形プランの土坑で、10号土坑に南側を切られ、西は1号廃棄土坑に切られる。現存長軸278cm、短軸164cmである。76cmほどの深さがあり、主軸方向はN-11°30'-Wである。上面整地層では鮮明には検出できず、周囲を1段下げたところで発見されたので、整地層の下位の面から掘り込まれたものだろう。底面にビットからカボチャの種が30個ほどまとまって出土した。埋土は暗灰色である。

出土遺物は少なく時期の特定しづらいものだが、17世紀後半代に属するといえる。

#### 14号土坑 (第57図)

調査区水路西側の中央部に位置する。平面不整形プランの土坑で、長軸320cm、短軸約120cmである。17号土坑に北側を切られ、東は15号土坑に切られる。15号土坑との切り合いは不明確だった。西に緩やかに傾斜し、最深部でも37cmほどの深さしかない。主軸方向はN-70'-Wである。埋土は黒灰色土であった。

出土遺物はわずかで、矢羽文の染付猪口片やコンニャク印判刷りの染付碗から18世紀前葉である。

#### 15号土坑 (図版13、第57図)

調査区水路西側の中央部に位置する平面長方形プランの大型土坑で、西は14号土坑を切り、南は19・41号土坑を切り、北は3号土坑に切られる。14号土坑との切り合いは不明確であった。19号土坑は当初15b号土坑としていたが、プランが15号土坑に取まらないことがわかったので、19号土坑に付け替えた。長軸は246cm、短軸で129cmを測り、主軸方向はN-58°50'-Wをとる。床面はほぼ平坦で、深さは88cm程である。

埋土上面の土層は当初別遺構としたほど西側に偏っており、中位では木質層と炭化層が互層に入っていた下位からは自然木や木器が多く出土し、そのうち1点の倒置状態で出土した漆碗を取り上げると、その内側にウリ科のものとカボチャなどの種子、焼けた粉殻が入っていた。

出土した折松葉文染付皿、竹文の染付碗、猪口が存在することから年代は18世紀前葉であろう。

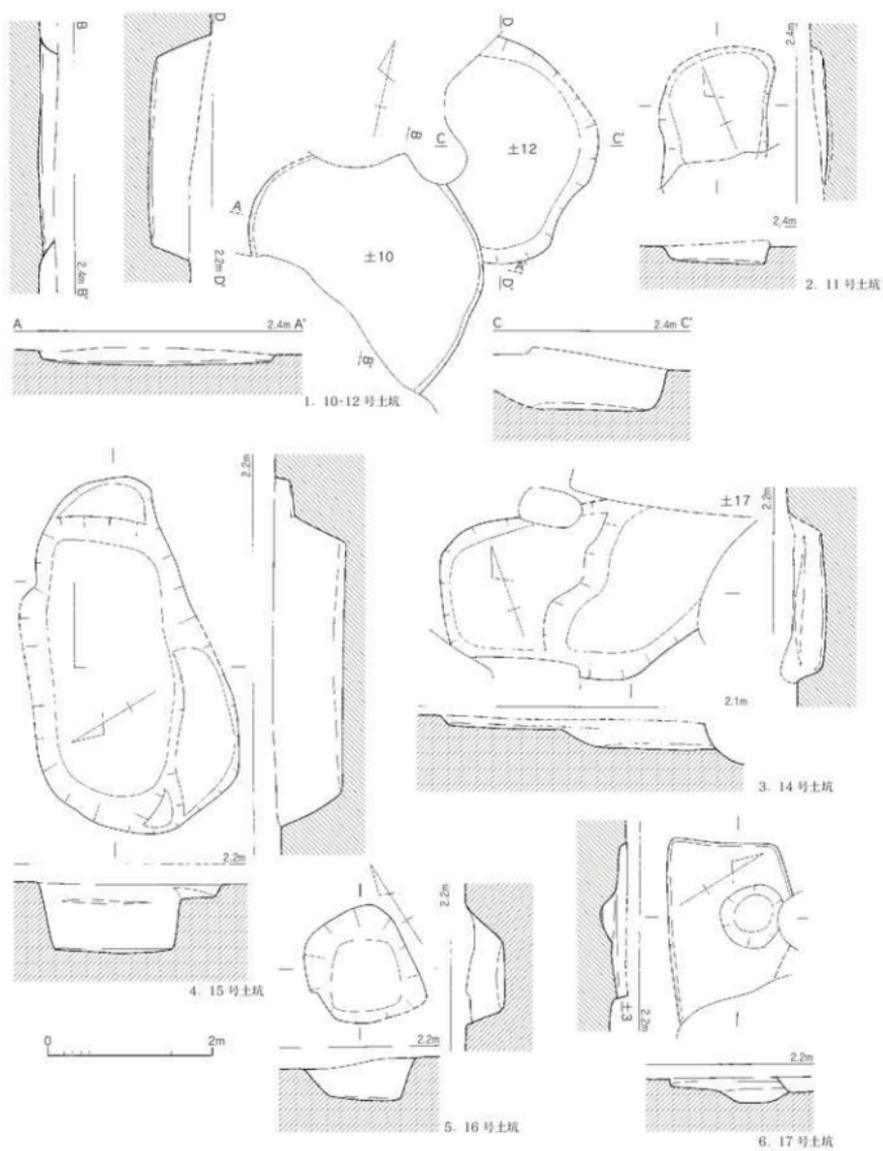
#### 16号土坑 (図版13、第57図)

調査区水路西側の中央部北側に位置する隅円方形プランの土坑で、10号土坑を切る。長軸146cm、短軸132cmを測る。深さは52cmを測る。主軸方向はN-31°40'-Eをとる。

出土遺物はわずかで、時期と特定できない。倒置状態で出土した漆碗を取り上げると、その内側にウリ科のものとカボチャなどの種子、焼けた粉殻が入っていた。菊花文の半球形染付碗や花唐草文があるので、18世紀前葉に属する。

#### 17号土坑 (図版13、第57図)

調査区南東部に位置する平面方形プランで、長軸が130cm以上で、短軸152cm、深さ31cm程で



第57图 1次調査10~12・14~17号土坑実測図(1/60)

床面はほぼ平坦である。南は14号土坑を切り、東は3号土坑に切られる。埋土は明黄色の整地層が被らない。主軸方向はN-32°Eをとる。

出土遺物は二重網目文皿と内面口縁部袈裟文帯の筒形染付碗や、広東型の染付碗片があることから、18世紀後葉から19世紀初頭に属する。

#### 18号土坑 (第58図)

調査区水路西側の中央南部に位置する、径88cmの平面円形プランの土坑である。床面はやや南側に傾く。壁はほぼ直立しているが72cm程の深さしかないので、井戸とは考えにくい。19号土坑に切られる。主軸方向はN-16°10'Eをとる。

出土遺物はわずかで不確定だが、菊花文染付の筒形碗と高台付皿から、年代は18世紀中葉から後葉であろう。

#### 19号土坑 (第58図)

調査区水路西側の中央部南側に位置し、15・18・41号土坑に切られる。長軸が226cm、短軸は190cm、46cm程の深さがあり、主軸方向はN-14°26'Wをとる。碗や下駄などの木製品や紐が多く出土し、下位に貝殻が層を成していた。

出土遺物の網目文の染付碗と蛸唐草文皿から18世紀初頭から前葉だろう。

#### 21号土坑 (第58図)

調査区水路西側の中央部東側に位置し、6号溝状遺構を切る。隅円方形プランで、長軸が262cm、短軸は207cm、120cmと深い。主軸方向はN-23°20'Wをとる。木製品や完形に近い貝殻が出土している。

格子目文小皿や微塵唐草文の合子があることから19世紀前葉に属する。

#### 22号土坑 (第58図)

調査区北西側に位置する略方形プランの小型土坑で、主軸方向はN-90°Wをとる。現存で長軸が252cm、短軸は185cm前後で、6cm程しかない。

出土遺物はわずかで、端反染付碗から19世紀前葉に属する。

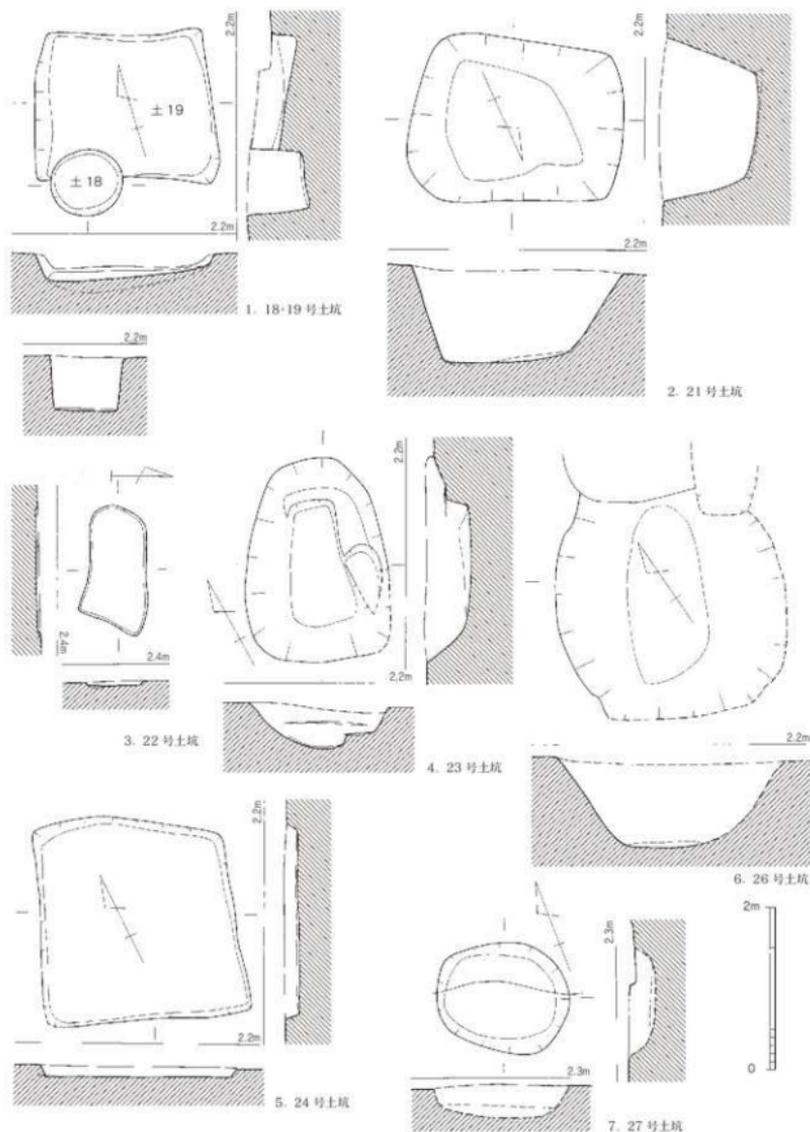
#### 23号土坑 (図版13、第58図)

調査区水路西側の北東側に位置する平面隅円方形プランの土坑で、壁が緩やかに床面は細長くグライ化して青灰色を呈する。長軸が252cm前後、短軸は185cm前後で、主軸方向はN-28°20'Eである。南側は26号土坑を切る。南東隅は攪乱坑に切られている。甕や摺鉢など大型品の廃棄が目立つ。

出土遺物に唐草文皿のモチーフと摺鉢の口縁部から18世紀後葉に属する。

#### 24号土坑 (第58図)

調査区水路西側の中央に位置する平面正方形プランの大型土坑で、長軸が253cm前後、短軸は252cm前後で、深さは18cmほどしかない。主軸方向はN-24°40'Wで、6号溝状遺構と一致する。床面はほぼ平坦である。



第58図 1次調査18・19・21～24・26・27号土坑実測図(1/60)

出土遺物に古相の蛸唐草文をもつ染付小皿があることから18世紀後葉である。

#### 26号土坑 (第58図)

調査区水路西側の西側に位置する楕円形プランの大型土坑で、長軸が280cm前後、短軸は不明で、深さは112cm程ある。壁は緩やかで床面は細長い。主軸方向はN-34°20'-Eをとる。北側は23号土坑に切られ、北西部は攪乱土坑に切られる。埋土上位は焼土を多く含み、下位は炭化物バンドが入る。

見込みに菊花文の入る染付碗とコンニャク印判手小皿があることから18世紀中葉に属する。

#### 27号土坑 (図版13、第58図)

調査区水路西側の中央部西側に位置する平面楕円形プランの小型土坑で、2号廃棄土坑に切られる。主軸方向はN-21°-Eをとる。現存で長軸が161cm前後、短軸は138cm前後で、深さはレベルの記録をとり忘れていたが、50cm前後だったものと思われる。床から樹皮が数枚縦横に重なって出土した。編んだ痕跡はなかったが、意図的に敷いたものが。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

#### 28号土坑 (図版13、第59図)

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面方形プランの小型土坑で、北側は5次調査区20号土坑と重複する。西側が1号井戸に切られ、南側は35号土坑を、東側は29号土坑を切る。主軸方向はN-15°30'-Eをとる。長軸が170cm前後、短軸は約100cm前後で、深さは58cm程ある。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

#### 29号土坑 (第59図)

調査区の水路西側の中央部北側に位置する。平面方形プランの小型土坑で、北側は5次調査区の21号土坑と重複している。東側は32号、西側は28号土坑に切られる。南東では30号土坑を切る。主軸方向はN-16°-Eをとる。長軸が188cm前後、短軸は150cm前後で、深さは80cm程ある。

出土遺物は、無文の大振りの磁器碗と直線的な唐草文の入る染付皿から17世紀末から18世紀初頭に属する。

#### 30号土坑 (図版14、第59図)

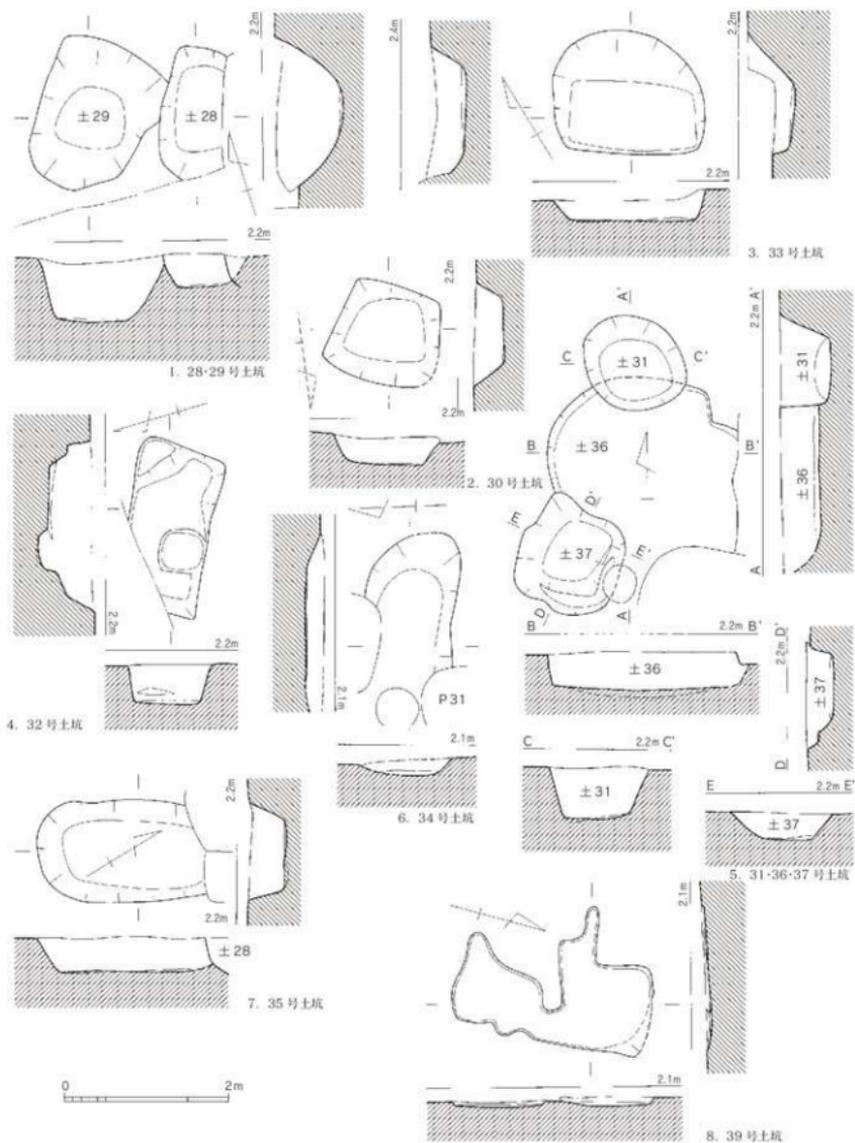
調査区水路西側の中央部北側に位置する平面正方形プランの小型土坑で、北側は29号土坑に切られる。長軸が135cm前後、短軸は122cm前後で、深さは37cm程しかない。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

#### 31号土坑 (図版14、第59図)

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面円形プランの小型土坑で、南側は36号土坑を切る。長軸が137cm前後、短軸は112cm前後で、深さは68cm程しかなく井戸ではない。埋土を掘り抜いたものだろうか。主軸方向はN-40°30'-Wをとる。

出土遺物がほとんどないので時期不明。



第59图 1次調査28~37·39号土坑夷測図(1/60)

### 32号土坑 (図版14、第59図)

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面方形プランの小型土坑で、北半分は5次調査区22号土坑と重複している。長軸が199cm前後、短軸は110cm前後で、深さは63cm程ある。主軸方向はN-17°50'-Wである。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

### 33号土坑 (図版12、第59図)

調査区水路西側の中央部南側に位置する小型の土坑で、攪乱土坑の20号土坑と4号土坑に切られる。4号土坑の床面から大部分を検出したため平面形は現状で不整形だが、床面が長方形であることから、本来隅円方形だったと思われる。長軸が184cm前後、短軸は152cm前後で、深さ58cmを測る。主軸方向はN-58°50'-Wをとる。

出土遺物に内面口縁部袈裟襷文、天井部に整った5弁花文染付の蓋があることから18世紀後葉に属する。

### 34号土坑 (図版14、第59図)

調査区水路西側の中央部西側に位置する小型の土坑で、平面形は隅円方形と思われる。南を6号土坑に切られるが、3号埋甕と切り合い関係はわからなかった。長軸が220cm前後、短軸は110cm前後で、深さは22cm程しかない。主軸方向はN-87°40'-Wをとる。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

### 35号土坑 (図版13、第59図)

調査区水路西側の中央部北側に位置する。北は28号土坑と1号井戸に切られる。平面プランは隅円方形で、主軸方向はN-31°30'-Eをとる。現存で長軸が207cm前後、短軸は123cm前後で、深さは46cm程ある。

出土遺物はほとんどないが内面に花唐草文が入る皿があることから、18世紀中葉に属する。

### 36号土坑 (図版14、第59図)

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面不整形の大型土坑で、北は23号土坑に、南は37号土坑に切られる。長軸が270cm以上で、短軸は約220cmで深さは47cm程ある。主軸方向はN-55°40'-Wである。

出土遺物に台付皿があることから18世紀中葉に属する。

### 37号土坑 (図版14、第59図)

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面方形の小型土坑で、北は36号土坑を切り、東は柱痕が残っている柱穴に切られる。主軸方向はN-29°40'-Eをとる。長軸が130cm前後、短軸は124cm前後で、深さは33cm程ある。

出土遺物がほとんどないが、筒型碗があることから18世紀後葉に属する。

### 38号土坑 (第60図)

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面方形になるものと思われる大型土坑で、北は5次

調査側に延びるが5次調査側では繋がる遺構が見られなかったので平面プランは不明である。長軸が443cm前後、短軸は250cm以上だろう。深さは55cm程である。西は32号土坑に切られる。主軸方向はN-61°-Wである。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

#### 39号土坑 (図版14、第59図)

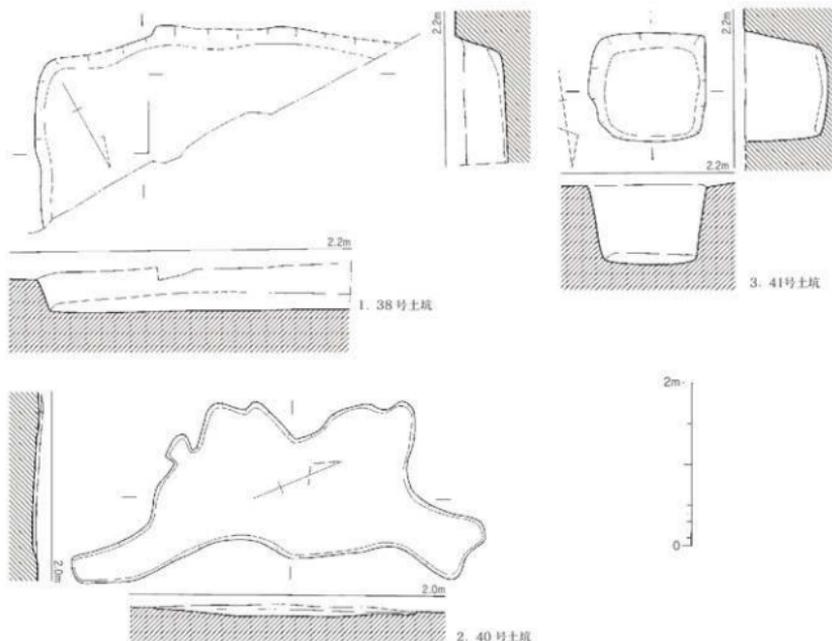
調査区水路西側の中央部東側に位置する不整形の土坑で、落ち込み状の窪みであるが、黒色土を埋土とするので、明瞭に検出された。26号遺構との切り合い関係は不明瞭だった。主軸方向はN-17°40'-Wとする。現存で長軸が224cm前後、短軸は193cm前後で、深さは12cm程しかない。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

#### 40号土坑 (第60図)

調査区水路西側の中央部東側に位置する不整形の土坑で、落ち込み状の窪みであるが、黒色土を埋土とするので、明瞭に検出された。7号溝状遺構を切る。主軸方向はN-23°40'-Eとする。現存で長軸が410cm前後、短軸は170cm前後で、深さは14cm程しかない。

出土遺物がほとんどないので時期不明。



第60図 1次調査38・40・41号土坑実測図(1/60)

#### 41号土坑 (図版13・14、第60図)

調査区水路西側の中央部南側に位置する平面正方形プランの土坑で、壁が直立する。15号土坑に切られ、19号土坑を切る。長軸が142cm、短軸は170cm、101cm程の深さがあり、主軸方向はN-6°40'-Eをとる。

### 大土坑

検出段階で大型の土坑については土坑とは別に遺構名をつけた。2号大土坑は掘り進めた過程で溝状遺構とわかったので2号大溝に名称を変更しており、2号大溝の上層部分のみを指すのではない。2号大土坑は欠番とし、3基の大土坑を掲載する。

#### 1号大土坑 (図版14、第61図)

調査区水路西側の西端に位置する隅円方形の大型土坑で、1号溝状遺構と2号廃棄土坑に切られ、10・11号土坑を切っている。長軸652cm前後、短軸は485cm前後で、深さ50cm程である。壁は緩やかである。埋土上位は黒色土が斑に入っており、その下は硬化していた。中位には木質の層がある。主軸方向はN-75°20'-Wをとる。

出土遺物の無文の磁器碗や摺鉢の口縁部形態から17世紀末から18世紀初頭に属する。

#### 3号大土坑 (図版15、第61図)

調査区水路西側の南東端に位置する不整形の大型土坑で、5号溝状遺構を切っている。長軸210cm前後、短軸は150cm前後で、深さは最深部で44cm程あるが、壁面の土層断面の掘り込み面では約340cm程になり、深さは76cmに達する。主軸方向はN-56°-Wをとる。

出土遺物のやや崩れた蛸唐草文の染付蓋と広東型染付碗から19世紀初頭に属する。

#### 4号大土坑 (図版15、第66図)

調査区水路西側の南東端に位置する不整形の大型土坑で、長軸562cm前後、短軸は355cm前後で、深さは25cm程しかない。主軸方向はN-26°40'-Wをとる。

出土遺物に花唐草文の皿片やくらわんか手があるので、18世紀中葉に属する。

### 廃棄土坑

検出段階で遺物が集中して検出された土坑については廃棄土坑であることが明らかであったので、土坑とは別に遺構名をつけた。

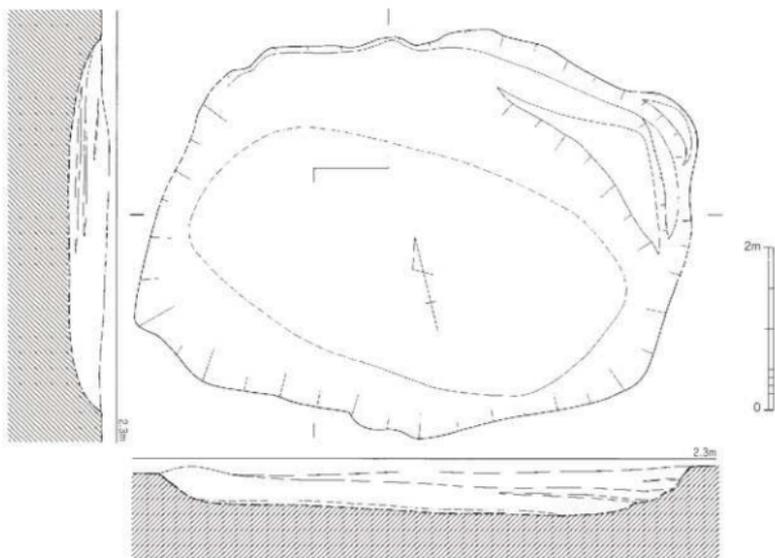
#### 1号廃棄土坑 (第62図)

調査区水路西側の北東側に位置する不整形の土坑で、10・12号土坑を切る。西側は削られておりプランが不明確主軸方向はN-34°-Eである。現存で長軸が285cm前後、短軸は183cm前後で、最深部で11cm程しかなく、床面はほぼ平坦である。埋土は黒色土で、遺物は集中していた。

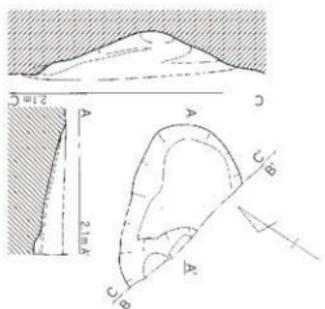
出土遺物の蛸唐草文の染付鉢と無文の磁器碗から18世紀中葉に属する。

#### 2号廃棄土坑 (図版14、第62図)

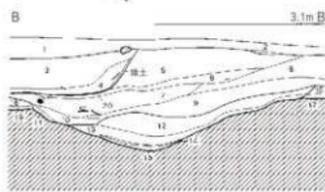
調査区水路西側の南東側に位置する長方形の土坑で、南は27号土坑を切る。主軸方向はN-6°



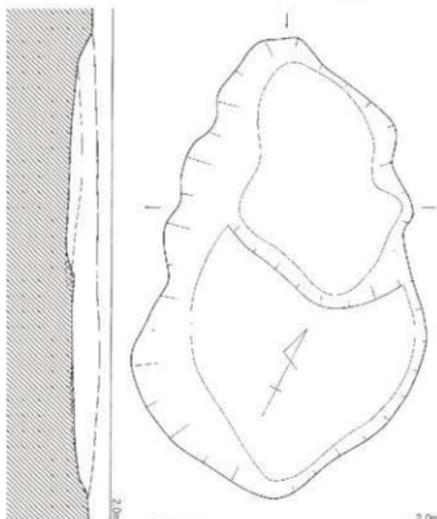
1. 1号大土坑



2. 3号大土坑



- |                 |               |            |
|-----------------|---------------|------------|
| 1 表土            | 11 褐色粘土       | 21 褐色粘土層   |
| 2 赤色パンテ層        | 12 褐色粘土       | 22 褐色粘土    |
| 3 赤色土層 粘土塊を多く含む | 13 褐色粘土       | 23 3号大土坑埋土 |
| 4 褐色粘土          | 14 褐色パンテ層     |            |
| 5 赤色粘土          | 15 褐色粘土       |            |
| 6 赤色粘土          | 16 赤色粘土       |            |
| 7 赤色粘土          | 17 赤色粘土       |            |
| 8 赤色粘土          | 18 赤色粘土       |            |
| 9 赤土            | 19 紅色粘土層 (埋埋) |            |
| 10 赤褐色粘土        | 20 褐色パンテ層     |            |



3. 4号大土坑

第61図 1次調査1・3・4号大土坑実測図(1/60)

-Wをとる。現存で長軸が239cm前後、短軸は112cm前後で、深さはわずかに14cm程ある。瓦片が多く出土した。

出土遺物の端反染付碗と鳥居文染付皿から19世紀中葉に属する。

## 埋甕

2号埋甕の北西側に上位の整地面から掘り込まれた土師質の埋甕があったが、これは機械掘削作業中に掛かったもので番号もとらず記録なしに廃棄した。遺物の出土しなかった9号埋甕については写真記録だけ残し、8基の埋甕について報告する。

### 1号埋甕 (図版15)

調査区水路西側中央に位置し、2号埋甕に切られる。埋設されていたのは陶器大甕で、重機による表土剥ぎの際に引っ掛けて斜めになったのだろう口縁部が内部に落ちていたのはそのためではない。1号埋甕の南側には胎衣壺が2点表土剥ぎ中に検出されたが、元位置がわからなくなったため、遺構としては記録に留めておらず、遺物のみ回収した。

甕の口縁形態から19世紀代であろう。

### 2号埋甕 (図版15)

調査区水路西側中央に位置し、1号埋甕を切る。埋設されていたのは土師質大甕で底面だけが残っていた。底部内面の中央に寛永通宝があった。調査区水路西側中央に位置し、1号埋甕を切る。埋設されていたのは土師質大甕で、底面が半分失われていた。また、銅銭が底面に貼り付いていた。

甕が時期不明の土師質土器であり、出土遺物がほとんどないので時期不明。

### 3号埋甕 (図版15)

調査区水路西側中央南に位置し、34号土坑との関係はわからない。内面には何も残っていない。内面にカルキが付くことから便壺とわかる。

甕は土師質土器であり、出土遺物がほとんどないので時期不明。

### 4号埋甕 (図版15)

調査区水路西側西端に位置し、明治後半から大正時代の整地面から掘り込まれ、甕の上面は削られている。明黄色粘土の掘り方に土師質土器の大甕が埋設されていた。内面にカルキが付くことから便壺とわかる。

出土遺物がほとんどないので時期不明だが、大正時代の面から掘り込まれているので、近代に属するだろう。

### 5号埋甕 (図版15)

調査区水路西側西端に位置し、明治後半から大正のものが出土しており、明治後半から大正整地層から掘り込まれていた。

甕は土師質土器であり、出土遺物がほとんどないので時期不明。

## 6号埋甕 (図版15)

調査区水路西側中央北に位置し、土師質の大甕の内面に陶器の甕片が重なっていた。

17世紀代の甕だが、出土した碗は19世紀代のものであった。出土遺物がほとんどないので時期不明。

## 7号埋甕 (図版15)

陶器の半胴甕の内面に陶器の碗と小壺が2つ並んで入っていた。単に廃棄されたものか、意図的なものかわからない。

陶器の甕から17世紀後半から18世紀前半代のものだろう。

## 8号埋甕 (図版15、第62図)

調査区水路西側の中央北西側に位置し、壁にかかった状態で検出した。土層から見て、掘り込み面で長軸70cmほどあり、80cm掘り込んだ後裏込め土を敷いて土師質の大甕が埋設されている。内部に黒色土が堆積していた。甕自体は胴部しか残っていなかったので図化していないが、丸腰碗や蛸唐草文が出土していることから19世紀前葉に属する。

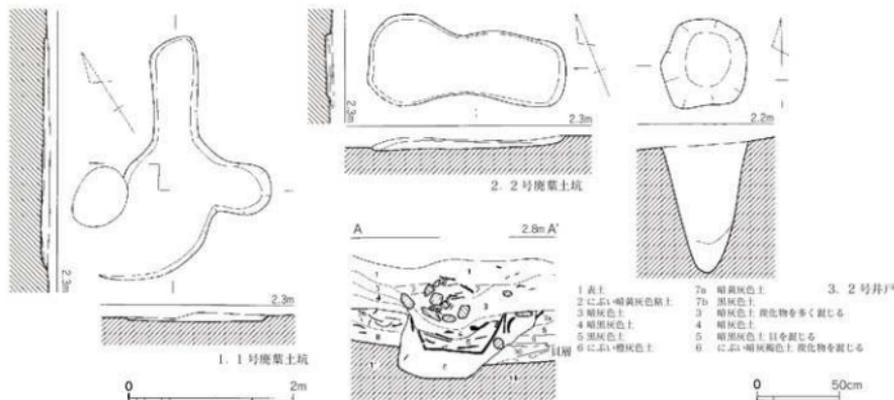
## 井戸

3基の井戸が検出されたが、このうち2号井戸以外はコンクリートの井戸枠をもつことから記録していないので、1基のみ報告する。

## 2号井戸 (第62図)

調査区水路西側の中央北側に位置する平面隅円正方形で、方形の地上部があったのだろう。長軸が106cm前後、短軸は104cm前後で、深さは156m程ある。

出土した摺鉢から18世紀後葉に属する。



第62図 1次調査 I・2号廃棄土坑、2号井戸実測図、8号埋甕土層断面図(4は1/30、他は1/60)

## 溝状遺構・大溝遺構

溝状遺構は7条検出されている。大溝は溝状のなかでも特に大きいものを別遺構名にしたものだが、2号大溝は当初2号大土坑を掘り下げていく過程で溝状遺構とわかったので、遺構名をつけかえたものである。5・7号溝は規模が等しく同じ方向に一定間隔に走っていることから畑の畝跡かもしれない。

### 1号溝状遺構（図版11）

調査区の西端に位置し、北西から南東方向に走る大溝で、南東端で南に直角に折れていた。長く検出された部分を東西軸、折れた部分を南北軸と称した。さらに南北軸の南端の東角から幅の狭い2号溝状遺構が繋がっており、本来同じ遺構であったのかもしれない。3号溝状遺構を切っているが、これは掘り直し段階の埋土と切り合っていただけで、掘り直し前の段階の掘り込み面とは切り合っていなかった可能性が高い。

幅162cm、深さは検出面から約30cmで、土層断面でみる限り掘り直しがあり、最終掘り直しはコンクリートの基礎が掘り込まれた整地面から掘り込まれており、多色刷の絵皿やヤクルトの瓶などが入っていた。検出された溝状遺構はその下の明治後半から大正の整地面から掘り込まれている。

半球形碗や腰張形碗など18世紀中葉から後葉のものと同様に鳥居文の染付小皿など19世紀中葉のものが混在しており、1号大土坑を切っていることから後者に属するだろう。

### 2号溝状遺構（図版11）

調査区の西端に位置し、1号溝状遺構南北軸南東隅から派生している。幅42cm、深さ5cm前後で、南東端は木杭が集中する落ち込みと繋がっており、床面は西に向かって下がっている。この施設の機能はわからないが、屋根の雨水の導水的な施設だろうか。

摺鉢の口縁部形態や湯飲み形の小碗から19世紀前葉に統するだろう。

### 3号溝状遺構（図版11）

調査区の西端に位置し、渠道と併走して北東から南西方向に走っていた。1号溝状遺構に切られていたが、1号溝状遺構は掘り直しされていることから、掘り直される前の段階の溝は共存していたかもしれない。上面は整地層があり、中位には黄灰色の軟質粘土が堆積していた。西壁が調査区外にかかるため幅は明らかでないが、現存で95cm、深さは約30cmあった。

遺物は摺鉢の口縁部形態から18世紀後葉に統するだろう。

### 4号溝状遺構（図版11）

調査区の西端に位置し、3号溝状遺構と垂直に走る小溝で、北西から南東方向に走る。幅40cm、深さは9cmと浅い。遺物が少なく時期を特定できない。

### 5号溝状遺構（図版11）

調査区水路西側の南東端に位置し、6・7号溝状遺構と平行に走る小溝で、3号大土坑に切られる。幅68cm、深さは5cm前後と浅い。遺物が少なく時期を特定できない。

## 6号溝状遺構 (図版11)

調査区水路西側の中央に位置し、21・38号土坑に切られる小溝で、幅63cm、深さは10cm前後と浅い。遺物が少なく時期を特定できない。

## 7号溝状遺構 (図版11)

調査区水路西側の南東端に位置し、5・6号溝状遺構と平行に走る小溝で、幅58cm、深さは17cmと浅い。40号土坑との切り合い関係は不明。遺物が少なく時期を特定できない。

## 1号大溝遺構 (図版11)

調査区西端に位置し、県道と併走して北東から南西方向に走っていた。当初西端クリークとしていたが、掘削すると溝であることがわかったので大溝とした。埋土内に遺物がほとんどなかったため、重機で大部分を掘削し、壁と底面は人力で掘削した。壁は緩やかで、東壁は1号大土坑の下位で東に張り出していた。埋土は完全埋没後に上位が整地されており、その上位を1・3・4号溝状遺構、1号大土坑に切られていた。西壁は調査区内には検出されておらず、正確な幅はわからないが、現存で4.1mほどあり、深さは190cm前後である。

大振の磁器碗や陶器甕の口縁部形態など17世紀後半のものが出土しており、上位を切る1号大土坑が17世紀末から18世紀初頭に属するので、17世紀末には埋没していたことがわかる。

## 2号大溝遺構 (図版11・15)

調査区水路西側の北東端から東に走り、南側には張り出し部があり、北側は5次調査の1号大土坑に繋がる。当初2号大土坑としていたが、水路西側の調査区の溝と繋がることがわかったので、大溝に変更した。西部の南壁には土管が埋設されており、排水されていた。南壁側には杭列があり、横木が残る部分もあった。

この杭列は5次調査の1号土坑の護岸施設と繋がるので、1号土坑の南側は2号大溝の北壁と考えるべきだろう。水路西側には護岸施設は残っていない。土管は遺構面から10cm程掘り下げると3本が露出した。溝内には土管の破片が見られなかったので、先端から残っていたといえる。土管は調査区外まで続いていたが、近代のものと想定してすべてを掘削せず、3本だけ取り上げた。基盤層を埋土としているため、掘り方がわからず、埋設の方向がわからないが、南端のトレンチにはかからず集水枡のような土管の先端部分も見られなかったので、トレンチの東を調査区外まで走っていたと思われる。

溝幅は広い所で420cm、深さは最深部で70cmほどである。最上位の埋土は万年筆や豆電球などの入る現代の層で、その下に大正包含層である黒色土層がバンドを成していた。

遺物はパンケース8箱程あり、年代幅も広い。18世紀前葉の半球形碗染付から20世紀初頭ほどの遺物を掲載している。

## 3号大溝遺構 (図版11)

調査区中央水路東部に位置し、南北方向に走る。幅は約3mあり、2号大溝に繋がる。深さは80cmほどで2号大溝より浅いことから水を落としていたのだろう。4号溝状遺構とは切り合わないが、併走することから、掘り直しの可能性が高い。

遺物は少ないが、摺鉢から18世紀後葉に属する。

#### 4号大溝遺構 (図版11)

調査区中央水路東部に位置し、南北方向に走る。幅は西側の壁がコンクリート揚水ポンプの導水管の下に入るため確認できないが、現存で192cmある。2号大溝に繋がる可能性が高く、西壁は現在の水路のため検出していない。深さは45cm前後、2号大溝より浅いことから水を落としていたのだろう。3号溝状遺構とは切り合わないが、併走することから、掘り直しの可能性が高い。

遺物が少なく時期を特定できない。

#### 1次調査の出土遺物

1次調査ではパンケース約40箱分の陶磁器類や8箱分の木製品が出土している。個々の遺物については観察表を掲載しているので、追記するべき事項のある遺物についてのみ記述する。

63図1は染付碗で、見込みの菊花文にダミを施す文様構成は珍しいので、肥前産ではないかもしれない。63図2は底部の小片だが、高台径が小さく畳付の外縁に丸みがあるので呉器手の碗とみてよいだろう。63図3は磁器皿で、小片のためモチーフがわからないが、亀甲文のような区画線が入る。

64図3は磁器碗で、外面の寿字を帆に見立てた船の横に栗が3つと船の下に筆が描かれている。絵文字の「はんじ文」と考えられるが、何と読むべきものかわからない。64図5・7は陶器の小皿で、外底に胎土目跡がある。

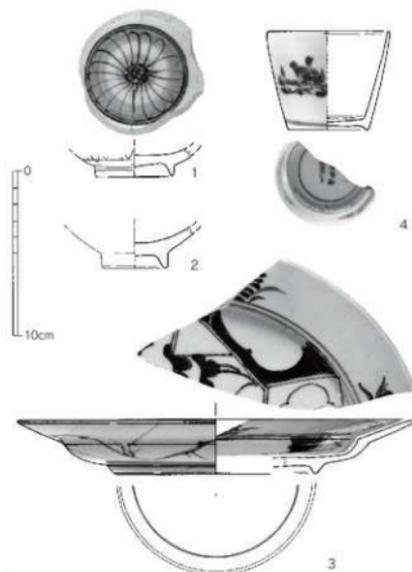
65図7は陶器の大鉢で、上掛けしている釉薬は灰釉のように見えるが、鉄釉が発色不良のために色調が異なっているものと判断した。65図12は土師質の甕で、口縁下にわずかに段があるので、口縁部が肥厚する甕の小型のものだろう。口縁部の穿孔は2つ並び、紐を結ぶためのものだろうか。

66図8は陶器の摺鉢で、外面胴部に子供の手の跡が付着している。施釉作業後に両手を置いて手の置いた部分だけ釉の掛かり方が薄くなったものである。類例がないのでモチーフとして意図的につけたものではないと思われる(巻頭図版)。

68図5は「水田庄」のスタンプの入る火鉢で、水田焼の製品とわかる。

69図14と15は絵の特徴が異なるので、同じ工房で別の絵付け工人が描いたのだろう。5次調査の42図1も同じモチーフで、やはり別の絵付け工人の手によるものだろう。

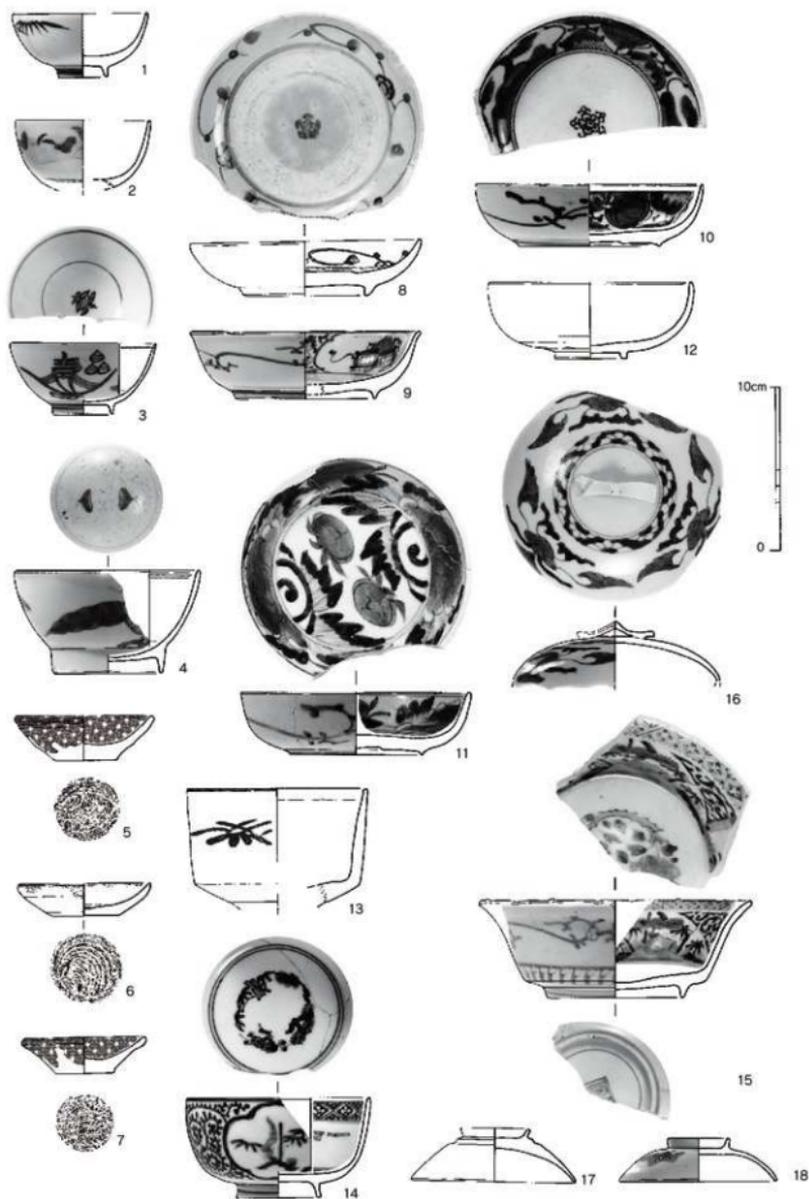
70図2は土師質土器の甕戸である。内面に付く煤は、口縁下に厚く付着し、口縁部は煤が付着していないことから、上に何か土瓶や鍋などを掛けて使用していたことがわかる。口唇部に突起があるので、口唇



第63図 1次調査1号土坑出土陶磁器実測図(1/3)

表28 1次調査出土土器・陶磁器観察表1

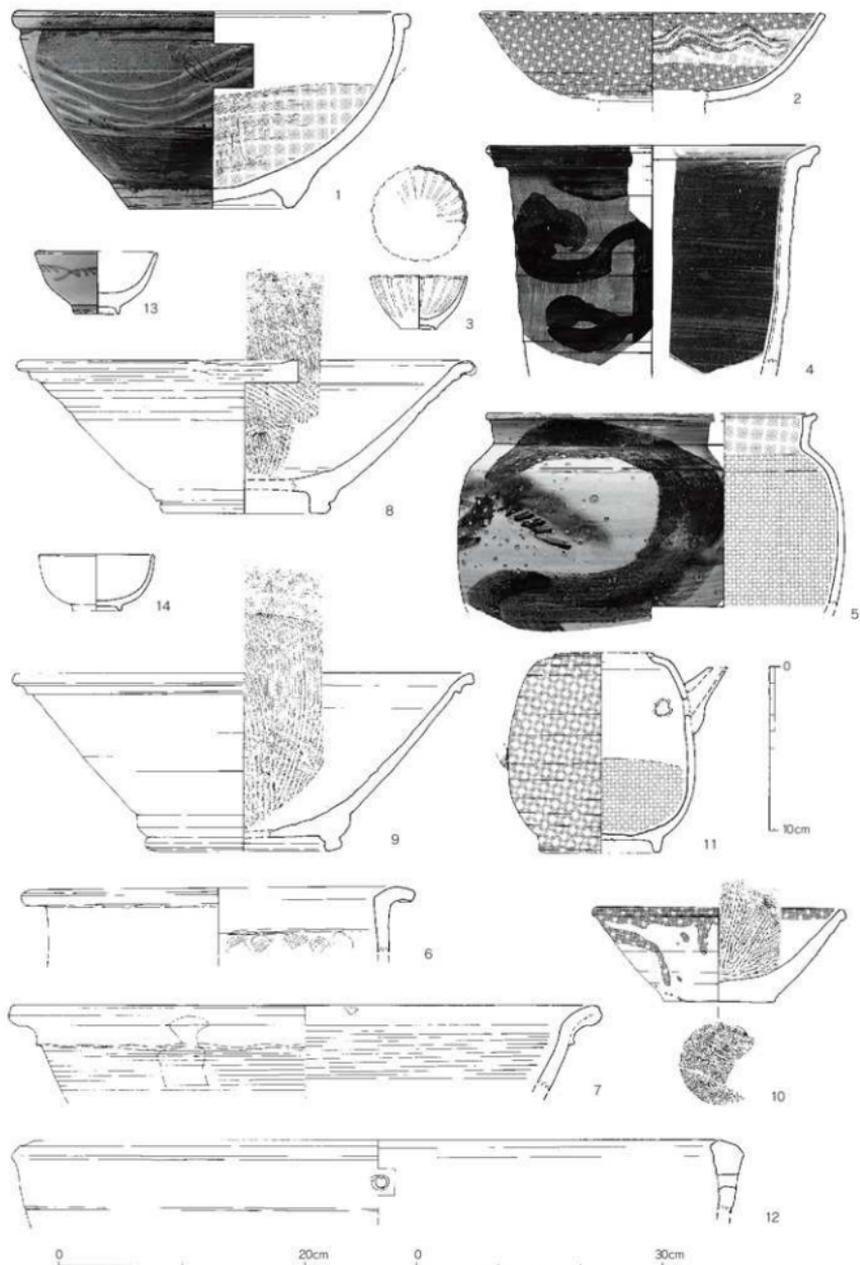
遺構名 探検番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) ( )は復元値	胎の種類	胎面	調整・整形・装飾技法	装品の技法	所 見		
							特記事項	鑑定産地	鑑定年代
土坑1 630R1	甕	高台径4.7	磁器 胎灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面刷目文、見込みにほゞ法と 目文を共須染付	襷付輪調子		肥前か	1750 Y 1770
土坑1 630R2	甕	高台径4.1	陶器 灰白色	透明釉全面に掛け 貫入 あり	無文	襷付輪調子		肥前	不明
土坑1 630R3	甕	口径24.0 高台径12.3 胎高3.3	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け 貫入あり	外面は枝文、内面は口縁部に草文、 見込みに幾何学文 裏面の有無不 明で穿線のみあり 須染付	襷付輪調子 へ り目跡の有無は 不明		肥前	不明
土坑1 630R4	瓶口	口径7.6 高台径15.0 胎高6.0	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け	外面草花文、外底大明成化年号 を共須染付	襷付輪調子	5割残存	肥前	1650 Y 1780
土坑3 640R1	小甕	口径8.2 高台径3.0 胎高3.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は竹節文を共須染付	襷付輪調子		肥前	不明
土坑3 640R2	小甕	口径8.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面下位は変形藤高文を共須染付 刺繍は緑・赤・金彩で草花文の上 絵付け	-		肥前	1740 Y 1780
土坑3 640R3	小甕	口径8.8 高台径2.8 胎高4.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は波文と万字を斜に見立てた 刺繍に紫が3つ定珠と下に紫の ほんじ文、内面口縁部は穿線、見 込みに提出文を共須染付	襷付輪調子	9割残存	肥前	19世紀半 Y 20世紀前半
土坑3 640R4	甕	口径11.1 高台径6.4 胎高6.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に雲と鳥文、見込みに雲文が 対面に入る 共須染付	襷付輪調子		肥前	1780 Y 1810
土坑3 640R5	小皿 広底形	口径7.6 底径3.5 胎高2.3	陶器 櫻褐色	鉄釉を内面から外面割下 位まで	外底赤切り	外底にアルミナ 塗布		肥前	不明
土坑3 640R6	小皿	口径8.0 底径4.1 胎高2.0	土師質土器 にぶい黄灰 色	-	外底赤切り 内外面ナデ	使用により内面黒灰色、 口縁部の一部が黒く黒 ており打明焼と異 て使用したとわかる		産地地	不明
土坑3 640R7	小皿	口径7.6 底径3.5 胎高2.2	陶器 櫻褐色	鉄釉を内面から外面割下 位まで	外底赤切り	外底に胎土目跡 あり		肥前	不明
土坑3 640R8	小皿 5寸皿	口径4.0 高台径7.6 胎高2.4	磁器 胎灰白色	硝い透明釉 全面掛け	外面は無文、内面は平菊草文、 見込みに5弁花文のコンニャク菊 刺繍の共須染付	襷付輪調子 砂 目付首 見込みに 蛇ノ目輪調子	ほぼ完成 見込みに蛇ノ目輪調子 部に雲ね巻き痕あり	波佐見	1680 Y 1740
土坑3 640R9	小皿 花卉口縁	口径14.0 高台径6.6 胎高4.1	磁器 灰白色 焼成不良	透明釉を全面に掛ける	外面草文文 内面唐草文と並文 内に草文 裏縁は紅だが、意図か 濃縮か不明 須染付	襷付輪調子	小片のため見込みの有 無不明	肥前	18世紀半
土坑3 上位 640R10	小皿	口径13.8 高台径8.4 胎高3.8	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け 貫入あり	口縁部は低い山形 外面唐草文、 内面刺繍牡丹花文が花と雷が対に なる 見込みに雷と蕨と鶴文を共 須染付	蛇ノ目高台で、 台座輪調子		肥前	18世紀後半
土坑3 上位 640R11	皿 花卉口縁	口径14.0 高台径8.0 胎高3.8	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け 貫入あり	外面草文文、内面刺繍牡丹花文が 花と雷が対になる 見込みに雷と 蕨と鶴文を共須染付	蛇ノ目高台で、 台座輪調子	高台がない	肥前	18世紀後半
土坑3 640R12	皿	口径12.4 高台径4.4 胎高4.6	陶器 黄灰白色	透明釉を割下位以外に掛 け 貫入あり	無文	底面磨胎		肥前	不明
土坑3 上位 640R13	鉢	口径11.0	陶器 灰色	白化粧土を外面割上から内面口縁部に つけた後、外面に竹節文の鉄絵と口縁	-	-		肥前	不明
土坑3 640R14	小鉢	口径11.5 高台径5.1 胎高1.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は唐草草文地に雲形意文 文2つの中に松と竹があるので 松竹梅の3つがある 内面口縁部 は芙蓉文等で、見込みに開伏松 竹文を共須染付	襷付輪調子	5割残存		1780 Y 1810
土坑3 下層 640R15	皿 花卉口縁 磨胎形	口径16.4 高台径8.4 胎高6.0	陶器 灰白色	透明釉 全面掛け	外面草文文と不明文帯、内面口縁 部四方唐文、内面口縁内に花蕨 文、見込みに開伏松葉文、裏縁に 濃縮を共須染付	襷付輪調子 砂 目付首	共須染付は色が薄い	不明	1680 Y 1700
土坑3 640R16	蓋	つまみ長軸4.6 つまみ短軸1.1 胎径12.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面天牛平草文文、中位は牡丹 花文を共須染付	襷付輪調子		肥前	1690 Y 1860
土坑3 上位 640R17	蓋	直径9.9 つまみ径4.2 胎径3.2	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	無文	つまみ縁部輪調 子		肥前	1740 Y 1750
土坑3 640R18	蓋	直径9.7 つまみ径3.8 胎径4.6	陶器 灰白色	透明釉 全面	外面は刺文のコンニャク印刺繍 刺文は位置関係から3つあった だろう 須染付	つまみ部上縁部 調子	8割残存	肥前	1700 Y 1740
土坑3 650R1	片口鉢	口径24.0 高台径9.8 胎高12.0	陶器 黄褐色 胎灰	内面刺繍中位は白化粧土 塗布後、太い磨胎き取り 掛け、内面と外面刺繍中位まで オリーブ色の鉄絵掛け	外面割下位から高台内は鉄絵ハ タ掛け、内面と外面刺繍中位まで オリーブ色の鉄絵掛け	高台調子	刺繍中に形状に磨胎部 がある	肥前	不明
土坑3 上位 650R2	鉢	口径21.0	陶器 にぶい灰褐色 胎黄	外面割下位調整で鉄墨を掛けた後、 内面刺繍に白化粧土をハ タ掛けし、細く磨胎き取り 透明釉を割下位から内面に掛ける	-	見込みに蛇ノ目 輪調子		肥前	不明



第64图 1次調査3号土坑出土土器・陶磁器実測图1(1/3)

表29 1次調査出土土器・陶磁器観察表2

遺物番号 採掘番号 図録番号	器種 形状 通称名	容量(cm) ( )は復元値	胎の産地	胎土	調整・整形・装飾技法	装飾技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑3 65083	小鉢	口径5.8 高台径2.2 胎高3.3	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	型打ち成型 口縁	復付輪調子		肥前	不明
土坑3 65084	鉢 半割葉	口径20.0	陶器 暗栗灰色	内面から外面口縁部は鉄釉掛け、外面は白化粧土を縦にハケ掛けし、鉄絵で松文を描く		復付輪調子 高台 内面に砂目付着 見込みで環状の砂目付あり	内面に縦に四脚があるが、意味不明	肥前	18世紀後半 19世紀中葉
土坑3 65085	鉢 半割葉	口径27.0	陶器 によい淡明灰褐色	内面にオリーブ色の灰釉を掛け、外面から内面胎まで白化粧土ハケ掛けし、外面に鉄絵と緑彩で松絵を土絵付けし、透明釉を全面に掛ける		—	白化粧土の上の透明釉が薄れている	肥前	18世紀後半 19世紀中葉
土坑3 65086	大鉢	口径32.0	瓦葺土器 によい灰白色が灰黒色を挟む 金雲母多い	—	外面口縁下は接合の工具痕あり (口縁部ナズナ 内面は口縁下に沈降の下にハケ状のオリーブあり)	不明	外面の黒色は鉄雲母によるもの	在地	不明
土坑3 65087	大鉢	口径48.0	陶器 橙濁色	内外面鉄釉掛け 黄色不良	内面ナズナ 外面口縁下はナズナ、口縁部は折り返して肥厚	口縁部内面に胎土目録付着		肥前	1750 1860
土坑3下層 65088	割鉢	口径37.0	陶器 橙濁色	内外面鉄釉掛け	割り目は17本単位 外面上半はナズナ、下半はケズリ	復付輪調子後砂目付着 見込みで環状赤い鉄雲母あり	重ね焼き 別個体の裡付の一部が付着している	肥前	1750 1860
土坑3 65089	割鉢	口径37.0	陶器 橙濁色	内外面鉄釉掛け	割り目は18本単位 外面上半はナズナ、下半はケズリ	復付輪調子 見込みで環状赤い胎土目録あり	内底の窪みは胎土目録あり	肥前	1750 1860
土坑3下層 65090	小割鉢	口径15.4 胎高5.8 胎高5.8	陶器 橙濁色	口縁部のみ鉄釉	内面割り目9本単位 外底赤切り	底雲母胎 見込み 中央の窪みは胎土目録あり		肥前	1650 1690
土坑3下層 65091	水注	口径6.0 高台径7.5	陶器 橙濁色	胎土を外面全面、内底にオリーブ色の灰釉掛け	把手部は欠損	復付輪調子 アルミナ散布	内面部分的に透明黄色	肥前	不明
土坑3上位 65092	大甕	口径90.0	土質瓦土器 によい灰色 砂粒多い	—	内外ケズリ状のナズナ 胎面残りよい 穿孔は焼成前で、継ぎれなし	—		在地	不明
土坑3 65093	杯	口径7.4 高台径2.8 胎高3.7	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面竹筵文の呉須染付	復付輪調子 砂目付着	胎の色から呉須染付の可能性あり	肥前	1680 1740
土坑3 65094	杯	口径7.0 高台径3.0 胎高3.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文	復付輪調子		肥前	不明
土坑4 66081	碗	口径9.2 高台径3.4 胎高4.7	磁器 灰白色	発色の悪い透明釉を外面に掛ける	外面は3つの花文のコンニャク印刷り 呉須染付	復付輪調子		肥前	1680 1700
土坑4 66082	碗	口径10.0 高台径4.1 胎高4.4	磁器 発色のため不明	透明釉全面掛け	外面は3つのお田木瓜文を手書き呉須染付	復付輪調子		肥前	1680 1700
土坑4 66083	碗	口径10.7 高台径4.5 胎高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面には草花文、裏面は「大明製器」を呉須染付	復付輪調子		肥前	1680 1740
土坑4 66084	碗 半球形	口径10.2 高台径5.2 胎高4.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に雲母と牡丹文 呉須染付	復付輪調子		肥前	18世紀前半
土坑4 66085	碗 半球形	口径11.4 高台径4.2 胎高4.1	陶器 黄灰白色	透明釉を外面口縁部以外に全面掛ける	見込みで鉄絵の山水文あり	底雲母胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉 18世紀後半
土坑4 66086	小皿 花形	口径9.2 高台径5.2 胎高2.3	磁器 灰白	透明釉 全面掛け	型作りで、花弁形に成型、内外面は花雲母文、見込みは5弁花文、裏面は「大明製器」を呉須染付 口縁	復付輪調子	ほぼ完形	肥前	1680 1700
土坑4 66087	片口鉢	口径21.0 高台径9.2 胎高10.8	陶器 灰黄褐色 粒質	外面胴位と内面は白化粧土ハケ掛けし、外面は緑鉄雲母取り 外面胴位から高台内は鉄雲母掛け、内面と外面胴位までオリーブ色の灰釉掛け	割り目は16本単位 外面ナズナ、高台胎り付け後、外底の接合部を丸くナズナ	復付輪調子 復付 と見込みで6つの子脚の窪みあり	胴中に帯状に雲母胎がある	肥前	不明
土坑4 66088	割鉢 香頭環状	口径39.4 高台径16.7 胎高14.0	陶器 暗栗灰〜橙灰色	内外面鉄釉掛け	割り目は16本単位 外面ナズナ、高台胎り付け後、外底の接合部を丸くナズナ	復付輪調子 復付 と見込みで6つの子脚の窪みあり	胴中に雲母胎の跡が残る	肥前	17世紀後半
土坑4 66089	割鉢	口径32.8 高台径13.3 胎高13.0	陶器 橙濁色	口縁部のみ鉄釉	内面割り目15本単位 外底赤切り	底雲母胎 見込み と外底に7つの子脚目録	ほぼ完形	肥前	1650 1690
土坑5 67081	碗 筒形	口径8.1 高台径4.3 胎高6.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は3分割され、同じモチーフが描かれる 管文を陶印にて、中央に草花文と竹筵文らしいモチーフがある 体部下位は管文、内面口縁部は四方様文帯で、見込みには5弁花文を呉須染付	復付輪調子	9割残存	肥前	1780 1810
土坑5 67082	中皿	口径20.6 高台径10.8 胎高3.8	磁器 灰白色	透明釉 全面	内面に草花文が 見込みは5弁花文を呉須染付	復付輪調子 見込みで口縁部	胴ノ口縁調子 部に重ね焼き	肥前	1680 1740
土坑5 67083	中皿 花弁口縁	口径18.3 高台径11.0 胎高2.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は管文文、内面は牡丹花文を呉須染付 口縁部は切り込みあり	復付輪調子	9割残存	肥前	18世紀後半



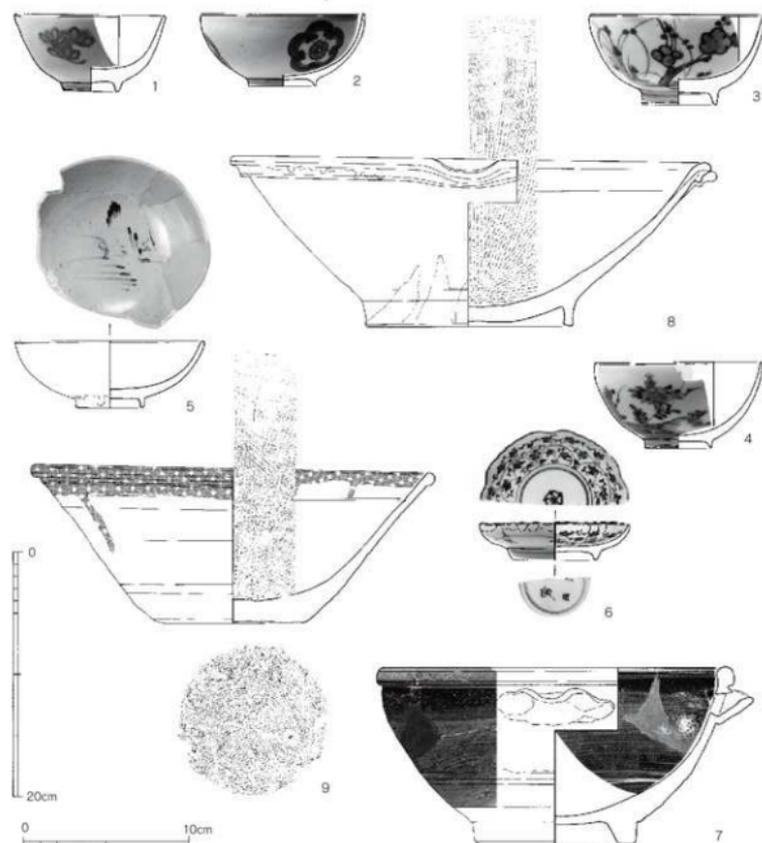
第65図 1次調査3号土坑出土土器・陶磁器実測図2 (12は1/6、6~9は1/4、他は1/3)

部に接してないと判断した。70図9は陶器の小型甕で、内面は強く火を受けているが、外面には被熱痕跡がないので、内部で火を使っているとわかる。したがって、火入れかあるいは火消し壺だろう。

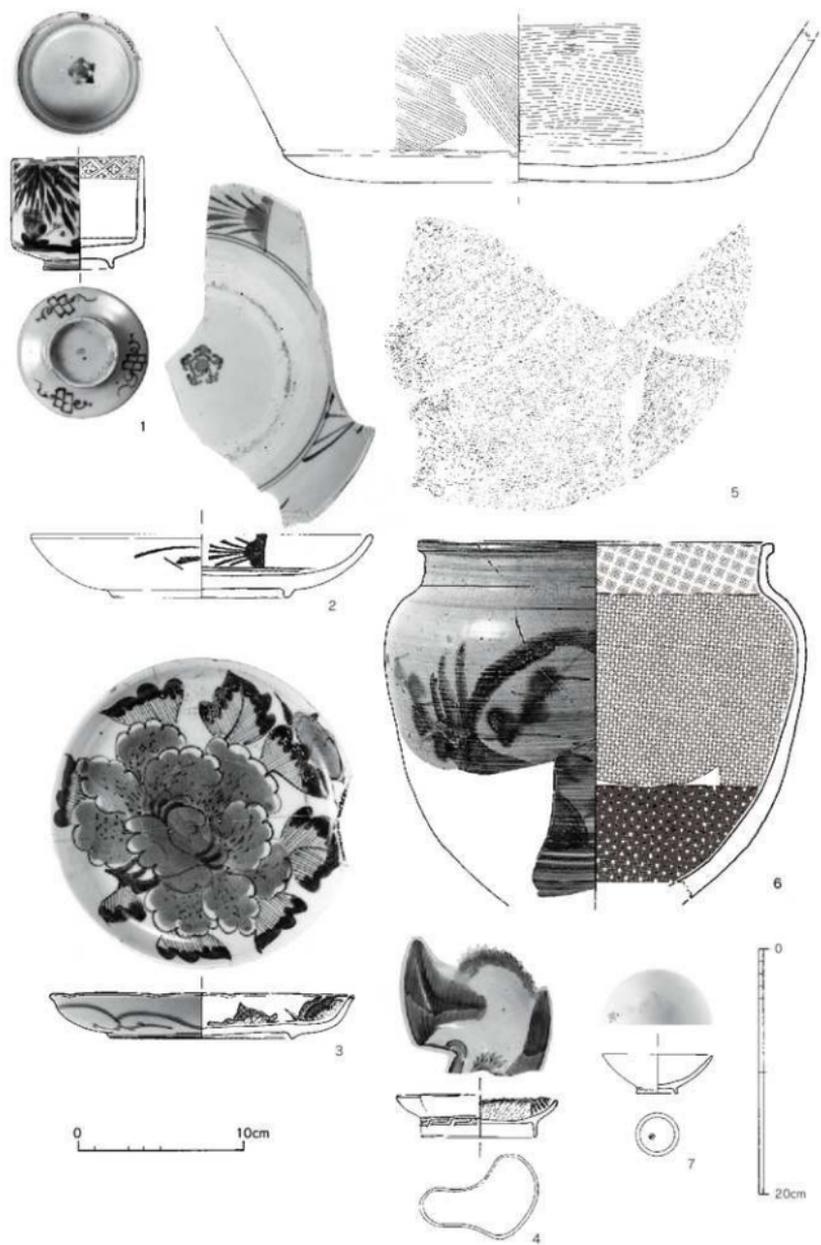
71図4は陶器の乗燗で、鉛軸が内面から外面体部に掛かっているが発色不良のため鉄軸に見える。外底の穿孔は行灯の台座に固定用の釘を打って、そこに押し込むための釘であろう。

72図6・7は土師質土器の小皿で、6は外面の煤が付着する部分に口縁部の打ち掻きがないが、灯明皿として使用しただろう。7の内面の変色は油によるものではないだろうか。

73図7は陶器の香が火入れに使用される小型鉢で、口唇部の軸が部分的に崩落しており、一部黒変しているので、煙草の灰落として使用したものと思われる。73図8は美濃・瀬戸産の香が火入れであろう。



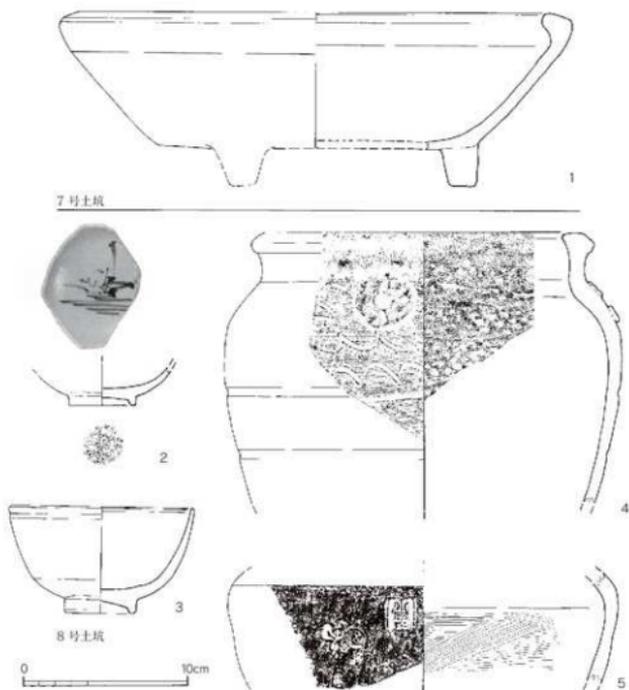
第66図 1次調査4号土坑出土陶磁器実測図(8・9は1/4、他は1/3)



第67图 1次調査5号土坑出土土器・陶磁器実測図(5-6は1/4、他は1/3)

表30 1次調査出土土器・陶磁器観察表3

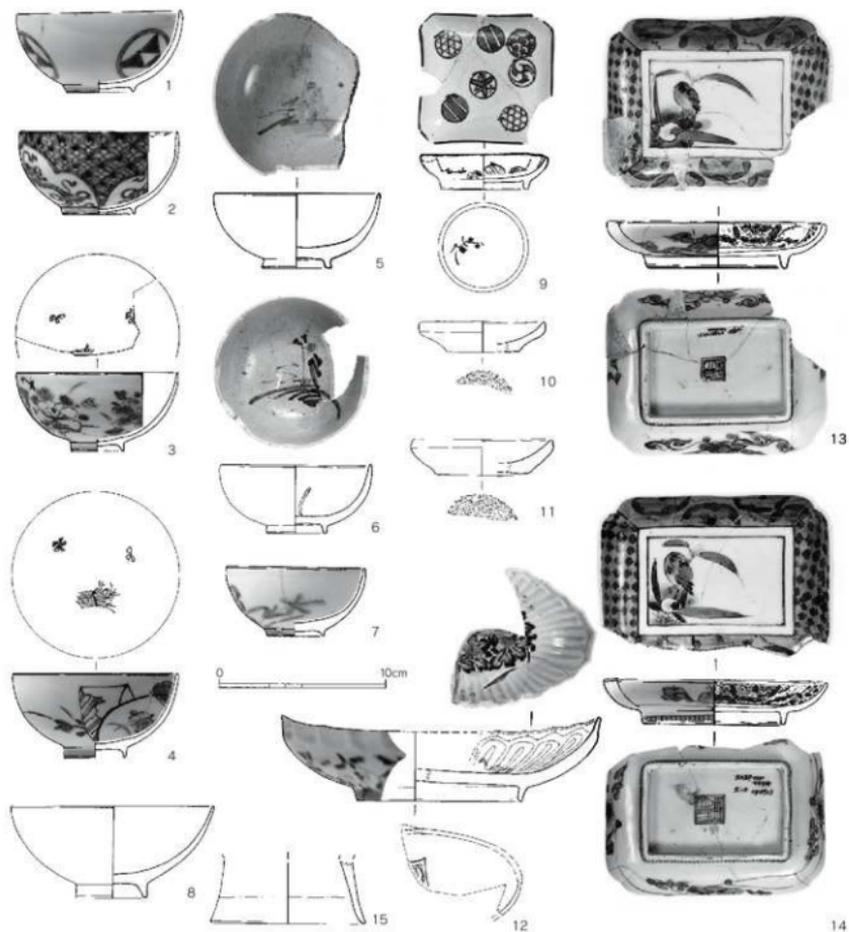
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	胎薬	調整・整形・装飾技法	装飾の技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
探検番号 図版番号 通称名	形状 通称名	( )は数値 ( )は略記							
土坑5 67846	小皿 変形小皿 方形	短軸9.5 高2.4	磁器 灰白色	透明釉 全面	赤切り組工の型押し成型、足端は切り込み 体部の引文は型押しによる彫刻で、それ以外 は鉄線とゴミ。高台外面は黒文を呉須染付	髹付輪漉ぎ	肥前		不明
土坑5 67855	大甕	直径38.0 高19.4	瓦質土器 ぶい・灰色 黒入 物粒子小さく均一	—	内外側丁寧なハケが既染まで入る	不明	内外面淡灰色で、茶 色はない	在地か	不明
土坑5 67866	鉢 平脚盤	口径28.8 高4.6	陶器 暗緑褐色	—	内外側下位は鉄軸ハケ掛け、外面側下位には白化粗土ハケ掛けし、 外面下位は帯状漆塗り取り。鉄軸は緑灰色の鉄軸で黒文を土絵付 けし、内面側面は下から脚子位までネーリーブ色の鉄軸を掛ける。 最後に内面側面から外面に透明釉掛け	—	肥前	18世紀後半 19世紀中葉	
土坑5 67867	杯 盃念杯	口径6.7 高台径2.5 高2.4	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛 ける	見込みに金彩で「舞見商標」、その下に輪軸で □に区と掛っている。商店名の右には2文字 があるが、判読できない。その上方に原号の 山形に「タ」が入る。商店名の対面に黒文字が あるが、「井」だけが判読できる。高台外面の 内凹文と、判読できない鉄線はコバルト染付	—	瀬戸か	20世紀前半	
土坑7 68801	大鉢	口径31.0 高19.8	瓦質土器 ぶい・黄灰色	—	内外子ナデ	不明	内面の暗黄灰色は使 用灰色か	在地か	不明
土坑8 68822	碗 平脚形	高台径4.0 高2.8	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底面 以外に全面掛ける	見込みに鉄線の山水文あり 外底に不明の刻印	底面磨胎	京地風陶器	肥前	18世紀中葉 18世紀後半
土坑8 68823	碗 平脚形	口径11.2 高台径4.4 高6.5	陶器 灰白色	透明釉に近い鉄軸 を外底以外に掛ける	高台頂出し	底面磨胎	—	肥前	1600 1780
土坑8 68824	小甕 平脚形	口径(20.8) 高脚(20.4)	陶器 黄灰へぶい・灰色	鉄軸を全面に掛 ける	胴部外面はかり目は、その上に波状文上下に 反斜に施す。その上に花弁浮文刷り付け 内面は格子目タテキョウで目録	口唇中央 のみ輪漉	—	肥前	17世紀後半か
土坑8 68825	大鉢	最大径23.6 高14.8	土質土器 にぶい・黄灰色が灰 白色を挟む	—	外面は「華」なゴキの土上地方区画に「水田 」と「花付巴文」のスタンプ、内面は丁寧な 輪ハケのモノナデ	不明	輪土はだが、外面は 炭素を吸着させてい るので瓦質土器	水田焼	不明
土坑10 69811	碗 平脚形	口径10.0 高台径4.1 高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面には三角形に重むた三日月文で北宗家の 家紋を呉須染付	髹付輪漉ぎ	—	肥前	1710 1750
土坑10 69812	碗 平脚形	口径9.4 高台径4.3 高5.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は七宝文地に宝珠形密文内文を呉須染 付	髹付輪漉ぎ	—	肥前	1710 1750
土坑10 69813	碗 平脚形	口径9.4 高台径3.1 高4.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は布文・牡丹文を呉須染付、内面は見 込みに花弁文を赤・緑・紫・金彩で土絵付け	髹付輪漉ぎ	—	肥前	1710 1740
土坑10 69814	碗 平脚形	口径10.0 高台径3.8 高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	透明釉を全面に掛ける で掛く。見込みに紫紺文の赤線	髹付輪漉ぎ	変形	肥前	1710 1740
土坑10 69815	碗 平脚形	口径10.0 高台径4.2 高4.5	陶器 黄灰白色	透明釉を側下位以 外に掛け 買入あり	見込みに鉄線の山水文 外底に円輪	底面磨胎	京地風陶器	肥前	1780 1810
土坑10 69816	碗 平脚形	口径9.1 高台径3.7 高4.1	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底面 以外に全面掛ける 買入あり	見込みに鉄線の山水文あり 外底に環状状に 円文を線刷	底面磨胎	京地風陶器	肥前	18世紀中葉 18世紀後半
土坑10 69817	小甕 平脚形	口径8.4 高台径3.4 高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける 買入あり	外面は花草文の呉須染付 口縁あり	髹付輪漉ぎ	—	肥前	1700 1750
土坑10 69818	碗 平脚形	口径12.2 高台径4.3 高5.5	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛 け買入あり	無文	底面磨胎	京地風陶器	肥前	1780 1810
土坑10 69819	小皿 変形小皿 方形	一辺7.6 高台径5.3 高2.2	磁器 灰白色	発色よく乳白色の 透明釉 全面掛け	赤切り組工の型押し成型で、見込みに丸文散 らしと外面側面と外底に紅葉文を呉須染付 口唇部は口縁	髹付輪漉ぎ	—	肥前	不明
土坑10 69820	小皿	口径7.4 直径(4.4) 高1.8	土質土器 淡褐色	—	外底赤切り 内外面ナデ	不明	内面の黒文は使用に よるものか不明	鎌池焼	不明
土坑10 69821	小皿	口径8.4 直径(5.5) 高2.1	土質土器 黄灰白色	—	外底赤切り 内外面ナデ	不明	変色なし	鎌池焼	不明
土坑10 69822	鉢 変形	長軸19.8 短軸不明 高5.5	磁器 灰白色	青みのある透明釉 全面掛け	赤切り組工の型打ち成型 外面は花草文、高 台は黒文帯、内面は側面に花卉の彫刻、見込 みに牡丹文、外底の黒線は「輪」らしいコバ ルト染付 内面には赤と緑彩色の土絵付け	髹付輪漉ぎ	—	肥前	不明
土坑10 69823	小皿 変形小皿 方形	長軸8.6 短軸5.4 高2.6	磁器 暗灰色	透明釉 全面	赤切り組工の型押し成型で、見込みに丸文散 らしと外面側面と外底に紅葉文を呉須染付 口唇部は口縁	髹付輪漉ぎ	—	肥前	不明
土坑10 69824	小皿 変形小皿 方形	長軸8.6 短軸5.4 高2.6	磁器 暗灰色	透明釉 全面	赤切り組工の型押し成型で、内面は側面に美 容文、短脚部は赤文、見込みに草に似、外 面は牡丹唐草文、高台に内凹文、鉄線は不明 文を呉須染付	髹付輪漉ぎ	—	肥前	不明
土坑10 69825	台付皿	直径9.2	陶器 黄灰白色	透明釉を額以外に 全面掛け	無文	底面磨胎	京地風陶器	肥前	1780 1810



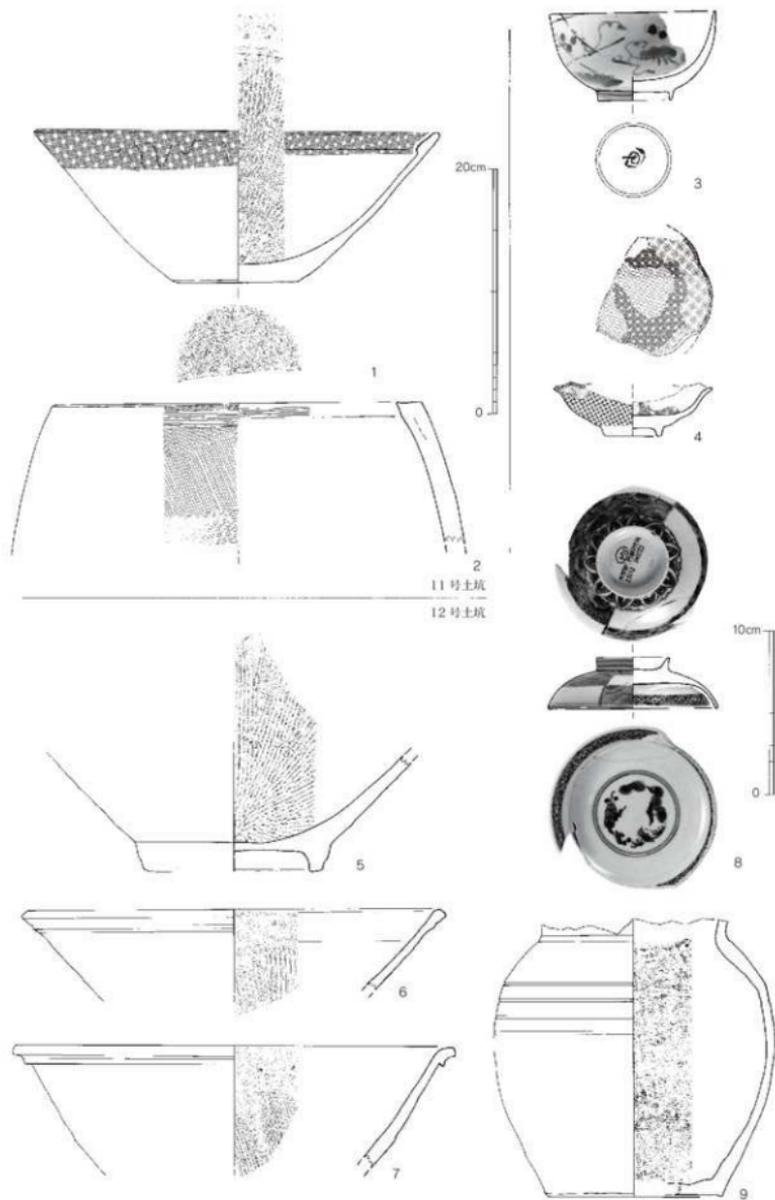
第68図 1次調査7・8号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

74図3は土師質土器の小皿で、赤変している部分があるのは焼塩壺の蓋であるからだろう。外底には胎土目跡が3ヶ所に残る。74図6の見込みには重ね焼きの痕跡が残る。74図6は陶器の摺鉢で、胎土から小石原焼と推定できる。

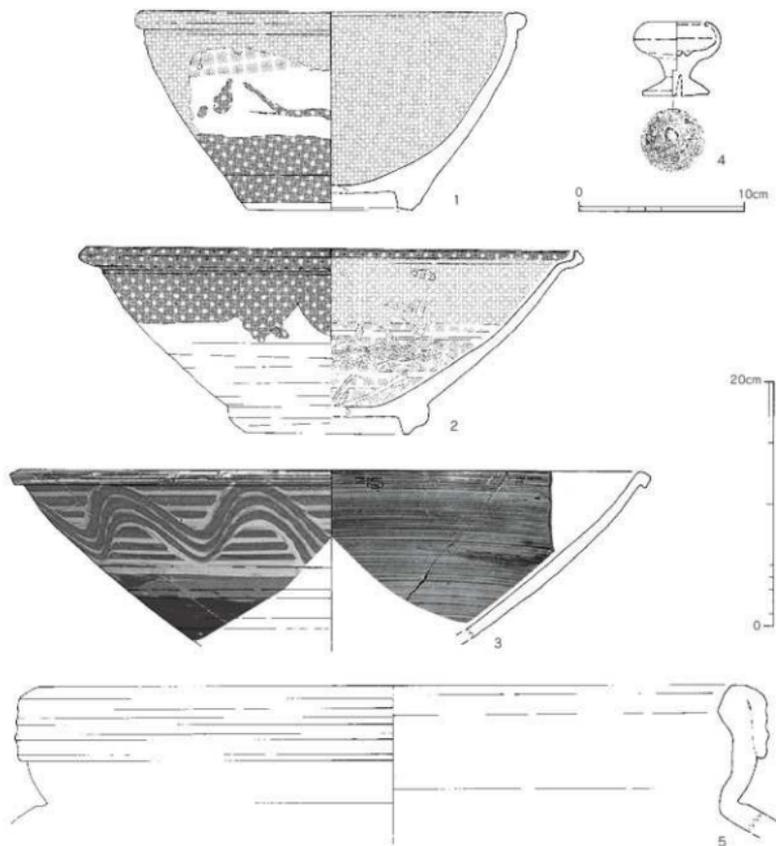
75図8は土師質土器の小皿で、内面は口縁下に煤が付着し、その下は油による変色と見られ、灯明皿として使用されたことがわかる。75図13は施釉作業の最後に通常は掛ける透明釉を掛けないので、白化粧土が剥落している。75図17は陶器の鉢で、外面口縁下に格子目タキがわずかに残るのは、口縁の突帯の下にほとんど隠れることから、接合のために貼り付け部に施したものであろう。



第69圖 1次調査10号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)



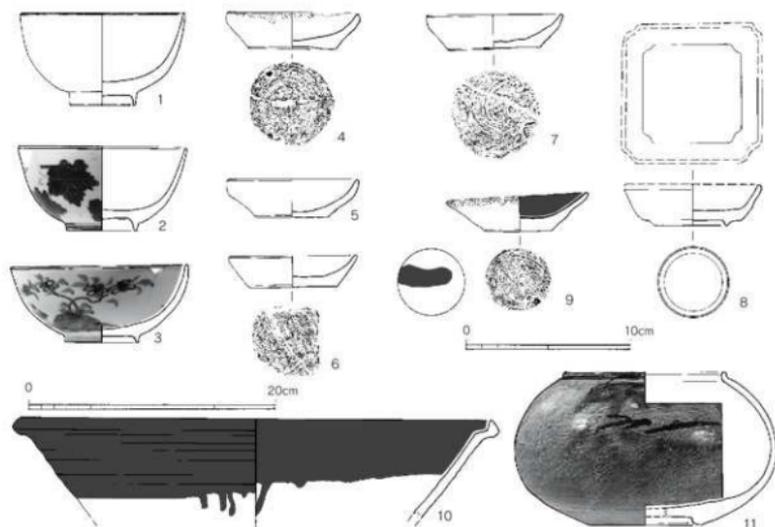
第70图 1次調査11・12号土坑出土土器・陶磁器実測図(1・2・5~7は1/4、他は1/3)



第71図 1次調査12号土坑出土陶器実測図(2・3・5は1/4、他は1/3)

表31 1次調査出土土器・陶器観察表4

遺構名 探検番号 図版番号	器種 形状 通称名	法華(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑11 70図1	鉢鉢	口径(32.9)	陶器 橙褐色	口縁部のみ鉄釉 黄色不具	内面すり目12本単位 外底糸切り	底面磨削 輪ノ下らしい胎土目跡あり		肥前	1650 S 1690
土坑11 70図2	甕?	口径(30.0)	土質質土器	—	外面丁寧なハケ 内面は煤が付着し、調整がほとんどわからないが、口縁部のみハケとわかる	不明	内面の煤は口縁下に厚く付着し、口縁部は煤が付着していない	在地	不明
土坑12 70図3	甕	口径(10.1) 高台径4.5 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面は花・竹・相模文 裏面は渦風 雲頭染付	骨付輪調子		肥前	1680 S 1740
土坑12 70図4	小皿 花卉形	口径(9.6) 高台径3.5 器高3.3	陶器 灰色	型打ち成型 藍釉を全面に掛け、その上に黒鉄釉を流し掛け	—	—		小石原	不明
土坑12 70図5	鉢鉢	高台径14.4	陶器 茶褐色	鉄釉を全面に掛ける	外面ケズリ すり目は単位不明	骨付輪調子鉄砂目付着 見込みに骨付裏ね焼き痕		肥前か	1750 S 1860
土坑12 70図6	鉢鉢	口径(34.4)	陶器 淡茶褐色	鉄釉を全面に掛ける	外面ナデ すり目は単位不明	—		肥前	1690 S 1750



第72図 1次調査14号土坑出土土器・陶磁器実測図(14は1/4、他は1/3)

表32 1次調査出土土器・陶磁器観察表5

遺物名 扉印番号 図版番号	器種 ( )は復元額 通称名	法量(cm)	胎の種類	胎素	調整・整形・裝飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑12 7007	盃鉢	口径30.0	陶器 洗茶褐色	鉄軸を全面に掛ける	外面ナデ 磨り目は単位不明	—	肥前	1750 ∧ 1860	
土坑12 7008	盃	胴径11.0 つまみ径4.4 器高3.1	磁器 灰白色	透明軸 全面 貫入あり	外面は胴下位と中位は、格子文地に半花輪文帯と白地が交互に入る 上位は花葉文帯 内面胴部は四方様文帯で、内面天井部に環状樹文文須染付	つまみ厚上端軸割ぎ	肥前	1740 ∧ 1780	
土坑12 7009	小型甕	胴部17.0 底径10.8	陶器 外面は橙灰、内面はぶい灰色	鉄軸を全面に掛ける	外面はナデ後胴部にかき目状沈彫、内面は格子目タタキ当て為肌	外底部に胎土目跡残る	臼縁部は断面状に打ち欠いている	肥前	17世紀後半か
土坑12 7101	片口鉢	口径23.6	陶器 暗紫灰～橙灰色	外面上位～中位は白化粧土掛けし、その後下半に鉄軸ハケ掛け、外面臼縁部から内面は褐色の灰軸掛け 高台は備り出し	—	撥付と臼唇部軸割ぎ	肥前	不明	
土坑12 7102	鉢	口径40.8 底径16.2 器高15.1	陶器 ぶい～暗橙灰色 滲入物あり	外面胴部上半分ナデで、鉄軸掛け、下半はケズリによる軸割ぎ 内面白化粧土をハケ掛けした後、懸状と帯状の磨き取り 上半分は船軸丸掛け	—	高部露胎 高台に胎土目跡4つ付着	肥前	1690 ∧ 1750	
土坑12 7103	大鉢	口径52.0	陶器 橙褐色	外面下半に鉄軸をハケ掛けし、外面上半分に白化粧土を塗布して帯状磨き取りし、内面は白化粧土をハケ掛け、内面は絨彩と鉄絞のモチーフを上絵付けし、最後に内面から外面に発色不良の透明軸掛け	—	—	肥前	1690 ∧ 1750	
土坑12 7104 図版16	兼帯	口径3.3 底径4.0 器高4.5	陶器 完整のため不明	発色不良の胎軸が内面から外面体部に掛かる	外底赤切り 芯立欠損 内外面ナデ	高部露胎 胎土目跡あり	定形	小石原か 不明	
土坑12 7105	大甕	口径61.0	陶器 黄灰色	鉄軸を全面に掛ける	内外ナデ 臼縁部は外側に鉆り曲げて肥厚させている	—	肥前	17世紀後半か	
土坑14 7201	甕	口径10.0 高台径4.0 器高5.6	磁器 灰白色	透明軸全面掛け	無文 口縁	撥付軸割ぎ	肥前	1680 ∧ 1740	
土坑14 7202	甕	口径10.1 高台径4.1 器高5.1	磁器 灰白色	透明軸全面掛け 貫入あり	外面は刺文のコンナク印判刷り 須染付	撥付軸割ぎ	肥前	1680 ∧ 1700	
土坑14 7203	甕 半球形	口径10.8 高台径4.5 器高4.8	磁器 灰白色	透明軸全面掛け 貫入あり	外面は花刺文・刺堂文 須染付	撥付軸割ぎ	肥前	1710 ∧ 1750	
土坑14 7204	小甕	口径8.0 底径5.2 器高2.2	土器質土器 ぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ 外底赤切り	不明	内面は胎による発色、外面は臼縁部に撥付着しているので打明部として使用	在地 不明	

表33 1次調査出土土器・陶磁器観察表6

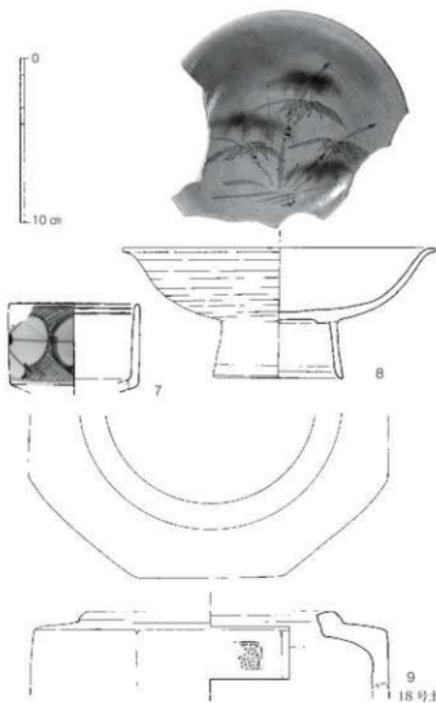
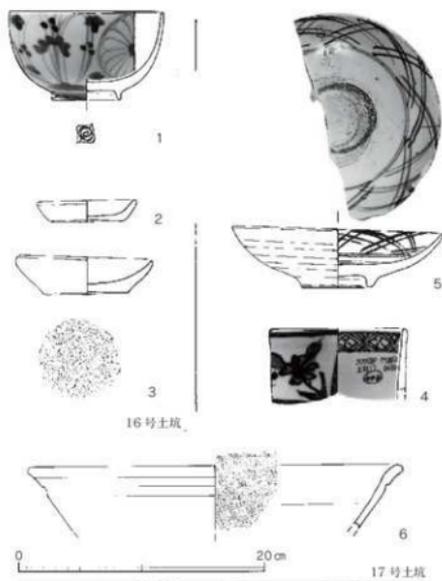
遺物番号 ( )は復元品 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm)	胎の種類	胎表	調整・整形・裝飾技法	窯詰の技法	所 見		
							特記事項	鑑定産地	鑑定年代
土坑14 72図5	小皿	口径8.0 底径4.3 器高2.3	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ 外底糸切りの摩滅	不明	変色なし	鎌池焼	不明
土坑14 72図6	小皿	口径7.8 底径5.2 器高1.9	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ 外底糸切り	不明	内面底面と外面の 一部に厚付	在池	不明
土坑14 72図7	小皿	口径8.3 底径5.4 器高2.0	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ 外底糸切りの摩滅	不明	口縁部に厚が付着 し、内面も変色し ていて見られ、 右側面としての使 用とわかる	在池	不明
土坑14 72図8	小皿 変形小皿 方形	高台径4.2 器高2.5	陶器 灰白色	透明釉を外底以外 全面に掛ける 貫 入あり	糸切り紐上の習習し成費で、外底削り 出し 貫入を避けている	底面露胎	瀬戸	19世紀後半か	
土坑14 72図9	小皿	口径8.3 底径4.1 器高2.4	陶器 内面灰色、外面 棕色	鉄軸を内面から外 面中位まで	外底は糸切り	底面アクリナ 能を厚く塗布	外面口縁部に厚付 着 外底の墨書状 のものは鉄軸か	肥前	1600 \ 1750
土坑14 72図10	大鉢	口径39.6	陶器 暗紫褐～茶褐色	内面に白化粘土を塗布して帯状抜き取りし、内外面口縁部 に鉄軸を厚く掛ける	—	—	—	肥前	1750 \ 1800
土坑14 72図11	土瓶	口径9.8 底径6.8 器高9.3	陶器 にぶい暗黄灰色 稍良	外底は削り出しで帯筒底状、白化粘土を胴中部の一部に打 ちハッ目付けし、鉄軸の竹篋文を描いた後、緑灰色の灰軸 で竹篋文を上書きする 最後は外面口縁部から斜下位に透 明釉掛け	底面露胎 口 唇部と内面口 縁部は釉滑り	内面使用変色はと んどなし	不明	不明	
土坑15 73図1	碗 半球形	口径9.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面には竹文のみ見えるが、他竹篋文 だろう 貫入露胎	貫付軸滑り	肥前	1710 \ 1750	
土坑15 73図2	小皿	口径13.1 高台径4.4 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉 全面	内面に折竹篋文と菊文を貫入露胎	斜下位露胎 見込みにて蛇ノ 目軸滑り	蛇ノ目軸滑り部に 重ね焼き痕	奈良見	17世紀後半
土坑15 73図3	皿	口径13.4 高台径7.4 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け 貫入あり	口縁部は狭い山形 外面帯草文、内面 は松ゴツリと松の枝葉文を貫入露胎	蛇ノ目高台で、 実的に掛かっている	肥前	18世紀後半	
土坑15 73図4 図版16	5寸皿	口径13.9 底径7.8 器高3.1	磁器 完形のため不明	透明釉 全面 貫 入あり	内面無文、内面に山水文、口唇部に口 筒状の貫入露胎	貫付軸滑り	完形 歪みあり	不明	18世紀前半
土坑15 73図5	小皿 5寸皿	口径14.0 高台径7.6 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける 貫入あり	無文	貫付軸滑り	肥前	1700 \ 1740	
土坑15 73図6	器口	口径8.2 高台径5.1 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面竹文、裏面菊輪の貫入露胎	貫付軸滑り 砂目付着	歪みあり 奈良見か	肥前	1700 \ 1780
土坑15 73図7	香炉・火入	口径10.5 高台径5.1 器高9.7	陶器 黄灰色	外面割上平に鉄軸の竹篋文を描いた後、透明釉掛け 外底に凹の細い縦刻	割下平以下露胎	京焼風陶器	肥前	不明	
土坑15 73図8	鉢	高台径9.8	陶器 灰白色 粗粒	透明釉を外面割中 位以上に掛ける 貫入あり	外底ゴツリ	底面露胎	内面変色なし	瀬戸	19世紀後半か
土坑15 73図9	仏飯器	口径8.5 底径3.9 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける 貫入あり	無文	底面軸滑り	肥前	1600 \ 1780	
土坑15 73図10	大甕	口径100.4	土師質土器 灰白色 取人物 少ない	—	外面観察不能 内面細かいハケ	不明	変色なし	在池	不明
土坑15 73図11	大甕	底径35.5	土師質土器 淡灰色 白色粒 子多く含む	—	内外面目の細かいハケ 内底面ナデ	不明	内外面に変色なし 表面の剥離も無い	在池	不明
土坑15 73図12	小碗	口径7.0 高台径3.2 器高3.0	陶器 完形のため不明	鉄軸を内面から外 面中位まで	高台削り出し	斜下平露胎	ほぼ完形 鉄軸は厚いところ はネグリーブ色を見 せる	肥前	1600 \ 1780
土坑15 73図13	小碗	口径7.0 高台径3.0 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に雨降文を貫入露胎	貫付軸滑り 砂目付着	奈良見	18世紀中葉	
土坑15 73図14	杯	口径6.5 高台径2.4 器高2.6	磁器 白磁軸	透明釉全面掛け	無文 口筒	貫付軸滑り	奈良見	1680 \ 1740	
土坑15 73図15 図版16	急須	口径6.7 底径5.7 器高7.7	陶器 完形のため不明	無釉の焼き締め陶 器	習作で、外底は布目粗粒 口唇部や注口の先端、把手の先端など 鉄軸が掛かる	不明	ほぼ完形	不明	不明
土坑16 74図1	碗 半球形	口径9.2 高台径4.1 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は花唐草文地に菊文文、裏面は菊 輪を貫入露胎	貫付軸滑り	肥前	1700 \ 1750	
土坑16 74図2	小皿	口径6.0 底径4.4 器高1.3	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ 外底糸切り	不明	変色なし	在池	不明



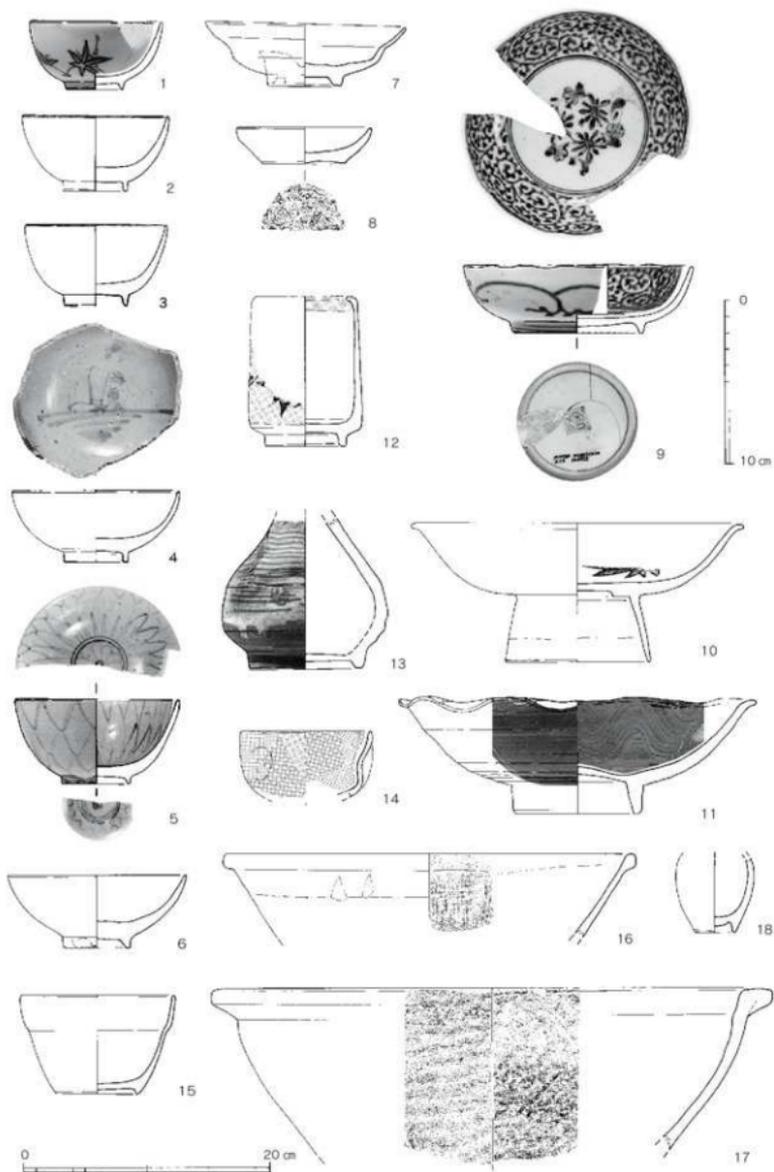
第73図 1次調査15号土坑出土土器・陶磁器実測図(10・11は1/6、他は1/3)

表34 1次調査出土土器・陶磁器観察表7

遺物番号 検出番号 図録番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種別	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑16 74032	小皿	口径8.0 底径4.8 高さ2.4	土加質土器 にぶい黄灰色 敷貫	—	内外ナデ 外底糸切り	不明	内外底部に赤染 している	瀬田焼	不明
土坑17 74034	碗 筒形	口径18.4	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全 面掛け	外面は草花文、内面口縁部四方文等を具 染付け	—	—	肥前	18世紀後半
土坑17 74035	小皿 5寸皿	口径12.8 高台径4.4 高さ3.8	磁器 明灰白色	透明釉を全面に掛 ける	内面に二重刺目文を具染付けに	貫付軸過ぎ 見込みに蛇ノ目軸 過ぎ	蛇ノ目軸過ぎ 部に重ね焼き痕と 瀬田片あり	波佐見	1750 Y 1770
土坑17 74036	餅鉢	口径30.4	陶器 黄褐色 敷貫	鉄釉を全面に掛け る	外面ナデ 割り目は単位不明	—	—	小石原	1750 Y 1860
土坑18 74037	碗 筒形	口径18.0	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全 面掛け	外面は格子目文地に菊花文を具染付け	—	—	肥前	1780 Y 1810
土坑18 74038	白付皿	口径19.0 高台径9.8 高さ8.0	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛け 貫入あり	見込みに鉄絵と緑灰色の灰釉の竹筥文	底面露胎	京焼風陶器	肥前	1780 Y 1810
土坑18 74039	火鉢	口径14.8	瓦質土器 灰白色が黒灰 色を挟む	—	外面は型押しによる方形区画内に珠文の陶 敷、内面は十字、外面区画の意匠はミガキ 小方だが、五角形に復元できる	—	—	在地	不明
土坑19 75001	小碗	口径8.0 高台径3.5 高さ4.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に楓文をコバルト染付	貫付軸過ぎ	9割残存	肥前	19世紀中葉
土坑19 75002	碗	口径16.8 高台径3.9 高さ4.6	磁器 白磁釉	透明釉全面掛け	無文 口縁あり	貫付軸過ぎ	—	波佐見	1680 Y 1740
土坑19 75003	小碗	口径8.6 高台径3.8 高さ5.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文 口縁あり	貫付軸過ぎ	厚手ので表底 見だらう	波佐見	1680 Y 1740
土坑19 75004	碗 平縁形	口径10.0 高台径3.9 高さ4.4	陶器 黄灰白色	透明釉を外周部 以外に全面掛ける	見込みに鉄絵の山水文あり 外底に縦線状 に丹文を線刷	底面露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉 Y 18世紀後半
土坑19 75005	碗	口径9.8 高台径4.1 高さ5.1	磁器 明灰白色	黄色不良の透明釉 を全面に掛ける	外面二重刺目文と内面刺目文、見込み菊文、 表裏渦巻の具染付け	貫付軸過ぎ	軸蓋よりあり	波佐見	1750 Y 1770
土坑19 75006	碗	口径10.8 高台径4.1 高さ4.0	陶器 紫褐色	黄色不良のオリーブ 色の灰釉を外周から 内面側に掛ける	見込みに蛇ノ目軸 過ぎ	底面露胎	—	肥前	不明
土坑19 75007	小皿	口径12.2 高台径4.6 高さ3.6	陶器 紫褐色	黄色不良のオリーブ 色の灰釉を外周から 内面側に掛ける	見込みに蛇ノ目軸 過ぎ	底面露胎	—	肥前	不明
土坑19 75008	小皿	口径8.2 底径5.2 高さ2.1	土加質土器 にぶい黄灰色 敷貫	—	内外ナデ 外底糸切り	不明	内面は口縁下に 横付着、その下 には紫灰色、外面 は横付着なし	在地	不明
土坑19 75009	小皿 変形小皿 花弁形	口径14.0 高台径8.1 高さ4.1	磁器 灰白色	やや暗い透明 釉全面	型押し成型で、内面は横草文、外面は 横草文、見込みに菊花文、源流は渦巻を具 染付け	貫付軸過ぎ	—	肥前	18世紀後半
土坑19 75010	白付皿	口径20.2 高台径8.8 高さ8.5	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛け 貫入あり	見込みに鉄絵と緑灰色の灰釉の竹筥文	底面露胎	京焼風陶器	肥前	1780 Y 1810
土坑19 75011	皿 花弁1種	口径21.6 高台径7.6 高さ7.1	陶器 明灰褐色	外面割上半と内面は 白化粧土掛状態取り、 緑灰色の灰釉を掛 ける 花弁は手で成型	底面露胎 見込みに 窓形の縁付着 見込み蛇ノ目軸 過ぎ部に重ね焼き 痕あり	底面露胎	外底が上がって いるのは型道具 のためか	肥前	不明
土坑19 75012	灰吹き	口径6.4 高台径4.9 高さ0.2	陶器 淡褐色	外面割下位から内面 口縁部に白化粧土を 掛け、外面割下に 鉄絵を入れた後、 透明釉を白化粧土と 同じ範囲に掛ける	割下位居部以下 は軸過ぎ	京焼風陶器	—	肥前	1740 Y 1780
土坑19 75013	広花瓶 梨形	高台径7.0 最大径10.1	陶器 明灰褐色	外面割下位は鉄釉ハ ケ掛けし、細灰吹き 取り、最後に外面に 緑彩の灰釉を流し掛 け 変色も鉄釉も変色 不良	底面露胎	底面露胎	前面に検がある のは17世紀後半 の特徴	肥前	17世紀後半 Y 18世紀前半
土坑19 75014	小碗 巻巻形	口径8.0	陶器 淡褐色	鉄釉の上に鉛釉を 掛け、その上に紫 灰釉を流し掛け 側 面はオヤズによる 隈みあり	—	—	—	小石原	不明
土坑19 75015	飯口	口径9.4 高台径5.0 高さ6.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文 器筒底	貫付軸過ぎ	—	肥前	17世紀中葉 Y 18世紀中葉
土坑19 75016	餅鉢	口径33.6	陶器 灰白色	鉄釉を口縁部に掛 ける	外面ナデ 割り目は単位不明	—	—	肥前	1650 Y 1690
土坑19 75017	鉢 こね鉢	口径45.6	陶器 茶褐色 サーブル手	鉄釉を全面に掛け る	外面格子目タタキ当 り具染ナデ消し、内 面は格子目タタキ当 り具染ナデ消し 部分に具染	不明	マープル手の胎 だが、鉄釉の軸 調は肥前に近い	肥前か	不明
土坑19 75018	瓶 ミニチュア	高台径2.5	磁器 灰白色 白磁釉	鉄釉を外面に掛 ける	白磁釉を外面に掛 ける 高台側出し	貫付軸過ぎ	—	肥前	17世紀代



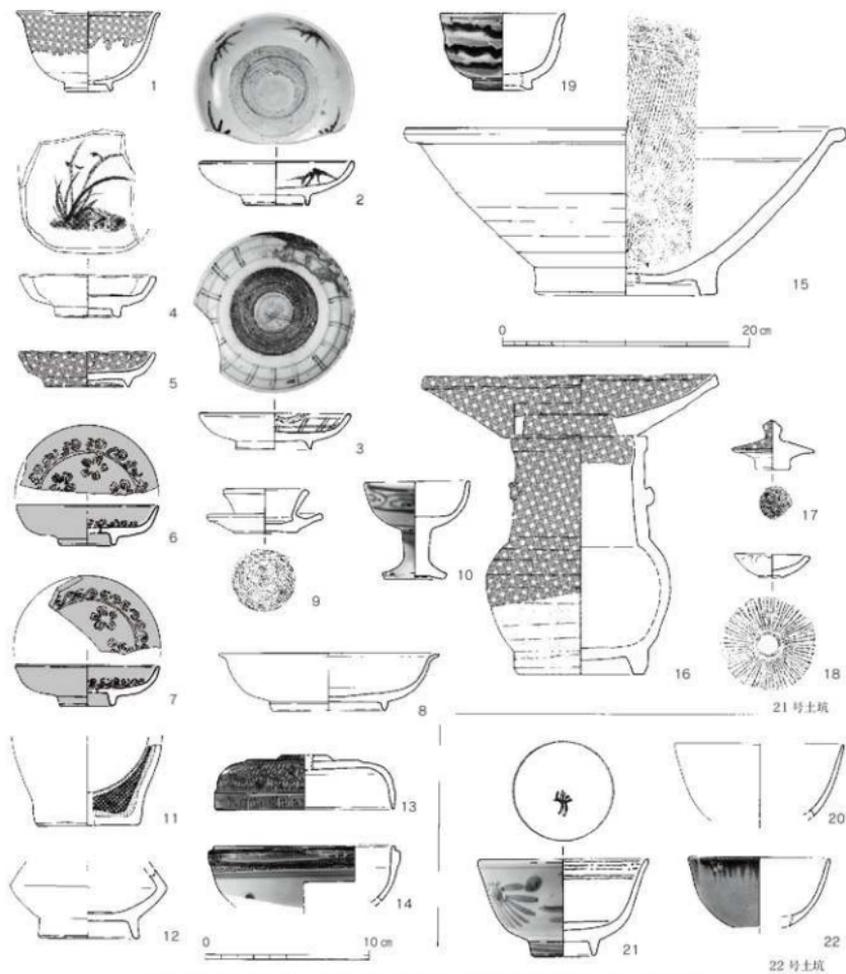
第74图 1次調査16~18号土坑出土土器・陶磁器実測図(6は1/4、他は1/3)



第75图 1次調査19号土坑出土土器・陶磁器実測図(16・17:1/4、他(1/3))

表35 1次調査出土土器・陶磁器観察表8

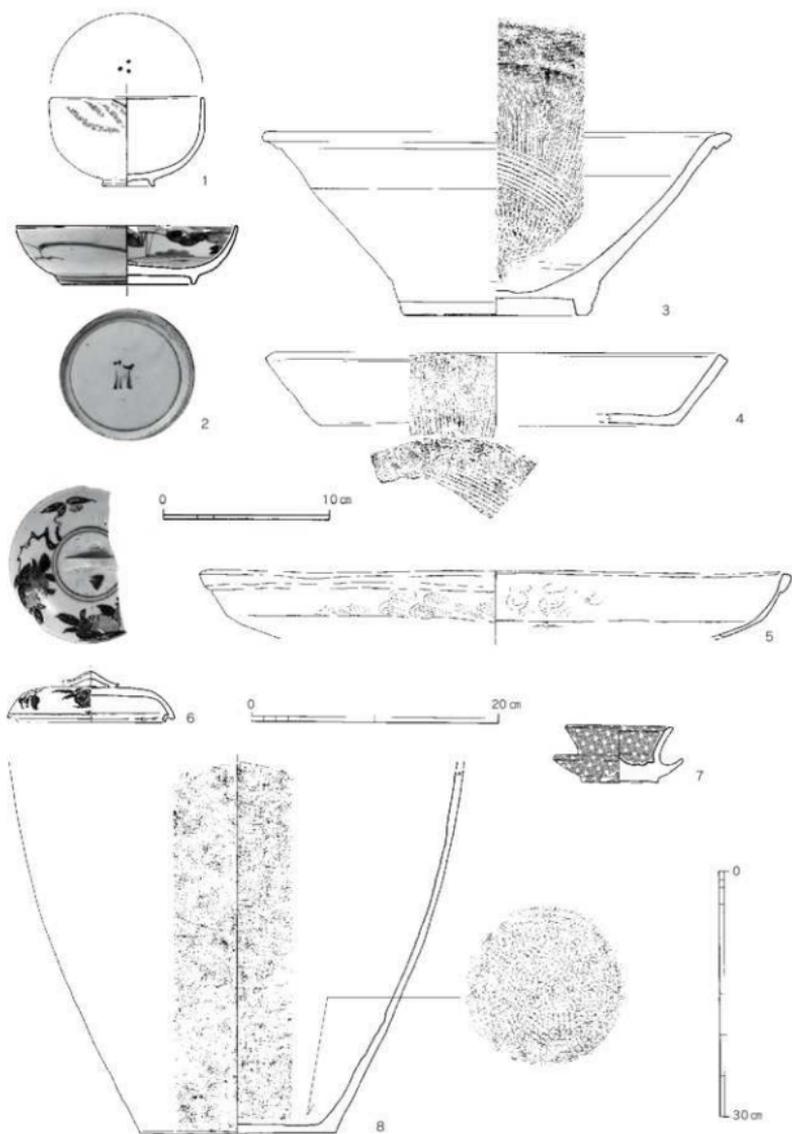
通称名	器種	法量(cm)	胎の種類の	胎薬	調整・整形・裝飾技法	窯跡の技法	所 見		
							特記事項	産定産地	産定年代
通称番号 図版番号	形状 通称名	( )は復元値							
土坑21 7601	小甕 楕圓形	口径8.9 高台径2.8 器高4.9	陶胎 黄灰白色	内外口縁部に刷毛を掛け、透明釉を全面掛け 貫入あり		刷下位輪漕ぎ	透明釉が口縁部と外面側中位で白く変色している	肥前	19世紀中葉
土坑21 7602	小甕	口径9.2 高台径3.8 器高2.7	陶胎 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面は竹葉文の呉須染付	横付輪漕ぎ 見込みに施す 目輪漕ぎ	施す目輪漕ぎに重ね焼き痕と鎌倉片あり	肥前	19世紀中葉
土坑21 7603	小甕	口径9.0 高台径4.6 器高2.2	陶胎 灰白色	透明釉 全面	内面に格子文、見込みに井形文 呉須で染付	横付輪漕ぎ 見込みに施す 目輪漕ぎ	施す目輪漕ぎに重ね焼き痕 1線打ち欠き部に厚付	肥前	19世紀中葉
土坑21 7604	小甕 変形小甕 方形	口径8.3 高台径3.9 器高2.6	陶胎 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	見込みに草文の呉須染付	横付輪漕ぎ		肥前	不明
土坑21 7605	小甕 菊花形	口径(8.2) 高台径(5.2) 器高2.1	陶胎 灰白色	刷毛漕 全面	型打ち成型 口縁	横付輪漕ぎ		肥前か	不明
土坑21 7606	小甕	口径(8.5) 高台径(3.5) 器高2.5	陶胎 橙褐色	三鳥手のモチーフを見込みに刷印し、刷いオリープ色の灰釉を全面掛けた後、印刷部に白化剤土を掛けて、印刷部以外を拭き取って象嵌し、透明釉全面掛け 貫入あり		横付輪漕ぎ	象嵌のS字文はスタンプ	肥前	不明
土坑21 7607	小甕	口径(8.7) 高台径(3.4) 器高2.5	陶胎 橙褐色	三鳥手のモチーフを見込みに刷印し、刷いオリープ色の灰釉を全面掛けた後、印刷部に白化剤土を掛けて、印刷部以外を拭き取って象嵌し、透明釉全面掛け 貫入あり		横付輪漕ぎ 見込みにハリ 目あり	象嵌のS字文はスタンプ	肥前	不明
土坑21 7608	小甕	口径(13.2) 高台径7.8 器高3.5	陶胎 灰白色	透明釉 全面	無文	横付輪漕ぎ		肥前	1690 A 1780
土坑21 7609	打明受皿	口径5.2 最大径7.0 底径3.8	陶胎 橙褐色	鉄軸を内面から外面側中位まで	外縁は糸切り	刷下平塗釉 筋土目跡あり	鉄軸は厚いところはオリープ色を呈する	肥前	不明
土坑21 7610	仏具蓋	口径6.4 筋径3.9 器高6.0	陶胎 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面横筋草文呉須染付	横付輪漕ぎ		肥前	1780 A 1860
土坑21 7611	機軸蓋	直径6.4	土質土器 に白・黄灰白色 粘土	—	外底厚みしているが糸切り 内外面ナシ	—	内面から外面まで、外面は未変色していない	産地焼	不明
土坑21 7612	甕 尊形	高台径6.2	陶胎 黄灰白色	白化剤土を外面に掛けた後、透明釉を掛け 透明釉は発色不良		横付輪漕ぎ		肥前	不明
土坑21 7613 図版16	蓋	直径11.0 つまみ長軸(3.4) 器高3.3	陶胎 灰白色	透明釉 全面	外面は横筋草草に横文、天井部は横文、口縁部は雷文帯、つまみは二つ葉の浮文目付け 呉須染付	受け部輪漕ぎ	75014の身とセットになる	肥前	19世紀前半
土坑21 7614 図版16	蓋物	口径11.0	陶胎 灰白色	透明釉 全面	外面は横文と珠文、口縁部は雷文帯、呉須染付	受け部輪漕ぎ	口縁部に75013の蓋の裾部分と重なっている	肥前	19世紀前半
土坑21 7615	摺鉢	口径(35.4)	陶胎 橙褐色	発色の悪い鉄軸全面掛け	外面上半分はナシ、下半分はケズリ 刷り目は27本単位	見込みに施す 目輪漕ぎ 横付輪漕ぎ	内面の重ね焼き以下は鉄軸が発色していない	肥前	1750 A 1860
土坑21 7616	甕 仏花彫	口径18.1 高台径7.6 器高18.2	陶胎 暗黄褐色	鉄軸を外側下位にハケ掛けし、鉄軸を外側側中位から内面側面に掛ける	耳部は手捏み成形で、退化しているため本来のモチーフがわからない	底面輪漕ぎ 横付輪漕ぎ 横付輪漕ぎ		肥前	不明
土坑21 7617 図版16	小甕	口径9.0 つまみ径1.0 器高2.0	陶胎 橙褐色	鉄軸を上面に掛ける 輪切れあり	底面は糸切り	下手輪漕ぎ しているが、輪の残りあり	蒸入れの蓋か	肥前	不明
土坑21 7618 図版16	紅蓋口 紅蓋	口径4.6 高台径1.5 器高1.5	陶胎 発彩のため不明	白磁釉 内面から外面口縁部	型打ち成型で、外面菊花文	底面輪漕ぎ	定形	肥前	不明
土坑21 7619	小甕 楕圓形 ビラ掛け甕	口径7.9 高台径3.6 器高4.1	陶胎 に白・淡黄褐色	内面に長石釉を掛けた後、外面に長石釉を格子状にイットン掛けし、その上に黒釉を横に3条上掛ける		高台輪漕ぎ		産地	19世紀前半
土坑22 7620	甕	口径10.2	陶胎 灰白色	透明釉全面掛け	無文	—		肥前	1700 A 1740
土坑22 7621	甕 楕圓形	口径10.2 高台径3.8 器高6.0	陶胎 灰白色	透明釉全面掛け 発色不良	外面は菊花文・草文 内面は口縁部に2重の上点横文 見込みに掛けた灰文か 呉須染付	横付輪漕ぎ アルミナ付着		肥前	19世紀中葉
土坑22 7622	小甕	口径8.8	陶胎 灰白色	刷い透明釉全面掛け	外面は横筋文の呉須染付	横付輪漕ぎ		肥前	18世紀後半
土坑23 7711	甕 楕圓形	口径9.4 高台径3.2 器高5.5	陶胎 黄灰白～暗黄褐色	黄灰白色の灰釉を刷下位以外に掛ける	見込みに青帯で三ツ見文を上給付け 外面に横筋と赤彩の上給付け 口縁部がやや厚化する	底面輪漕ぎ		産地か	1780 A 1810
土坑23 7712	小甕	口径13.4 高台径8.0 器高3.5	陶胎 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は刷れた唐草文、表背は刷れた「大明製」、内面側部は扇形区画文内に鳥文、それ以外は菊文、見込みに5弁花文が入る	横付輪漕ぎ		産地見	1680 A 1740



第76図 1次調査21・22号土坑出土土器・陶磁器実測図(15は1/4、他は1/3)

表36 1次調査出土土器・陶磁器観察表9

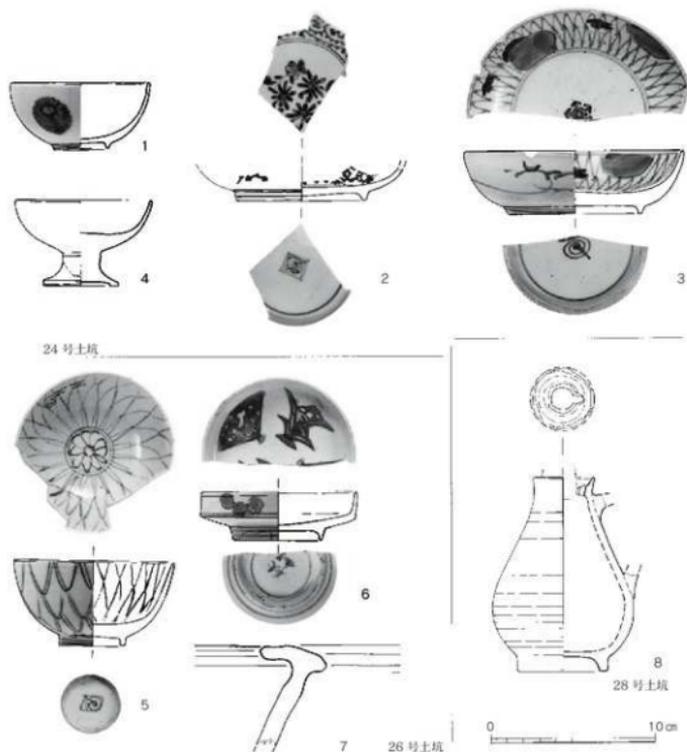
遺物番号 採取番号	器種 形状 通称名	法製(cm) ( )は復元値	胎の種類	胎色	調整・整形・裝飾技法	製品技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑23 77図3	網鉢	口径27.0 高台径14.8 器高14.9	陶磁 橙褐色	鉄軸全面掛け	外面上半分はナデ、下半分はケズリ 磨り目は15本単位	見込みに態の日焼き 重ね煎 貫付輪漉ぎ 襖アルミナ塗布	アルミナは外面高台 にも掛かる	肥前	1750 ~ 1860
土坑23 77図4	鉢	口径(27.0) 底径(22.0) 器高4.4	灰質土部 灰白色が 黒灰色を挟む 金雲 母を含む	—	型内面はハケ状のナデで、外面体部 は縦ハケ。外底は目の太いハケと細 なハケが交差する	不明	内底が黒灰、外面口 縁部が磁付着しており 石明度がろうか	在地	不明
土坑23 77図5	始椀	口径46.6	土質質土部 にふい粉黄灰色	—	外面口縁下はササエ後煎いハケ、外 底はナデ。内面は丁寧なナデ	不明	内面は黄灰色なし、外 面は磁付着し、全体 的に黒灰	在地	不明
土坑23 77図6	蓋	径99.0 つまみ長軸3.3 器高3.0	磁部 灰白色	透明軸 全面	外面は花木文を供頭染付 つまみは 板状で、上面に磨子目取線	受け部輪漉ぎ	—	肥前	18世紀後半
土坑23 77図7	石明受皿	口径(6.5) 最大径7.8 底径4.7	陶磁 暗橙褐色	鉄軸を内面から 外面部中位まで	外面は糸切り	裾下平漉ぎ	—	肥前	不明
土坑23 77図8	大羹	底径24.0	陶磁 暗黄灰色で灰白色が マール状に混じる	鉄軸全面掛け	内外面磨子目ナデで、部分的にナ デ消し。外底部は調整不明	外底にアルミナ塗布	—	肥前	17世紀後半



第77图 1次調査23号土坑出土土器・陶磁器実測図(3・5は1/4、8は1/6、他は1/3)

表37 1次調査出土土器・陶磁器観察表10

遺物名 採掘番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・裝飾技法	実証技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑24 7801	小碗 半球形	口径8.4 高台径3.2 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には菊花文と胴下位に隅丸雷文帯の呉須染付	費付輪画芝		肥前	1710 S 1750
土坑24 7802	小皿	高台径7.9	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け	外面は唐草文、内面は胡唐草文、見込みに花文 裏線露刷の呉須染付	費付輪画芝		肥前	18世紀中葉
土坑24 7803 475	小皿 くらわんか手	口径13.4 高台径8.0 器高3.0	磁器 灰白色	やや暗い透明釉 全面掛け	外面は唐草文、内面は胡日文と雷文、見込みは5弁花文、裏線は露刷を呉須染付	費付輪画芝 砂目付着	5割残存 外面は地けすぎによる変色あり	波佐見	1680 S 1740
土坑24 7804	仏飯器	口径8.2 胴径4.6 器高5.2	磁器 灰白色		無文	底面輪画芝		肥前	1690 S 1780
土坑26 7805	碗	口径9.7 高台径4.0 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に二重胡日文と内面胡日文、見込みに菊花文、裏線は露刷の呉須染付	費付輪画芝 砂目付着		波佐見	1750 S 1770
土坑26 7806	小皿	口径9.5 高台径5.4 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け	外面は3つで1セットの花文、見込みは胡雷文と雷文のコンキヤ印四刷り、裏線は「大明年製」を呉須染付	費付輪画芝	5割残存	肥前	1700 S 1740

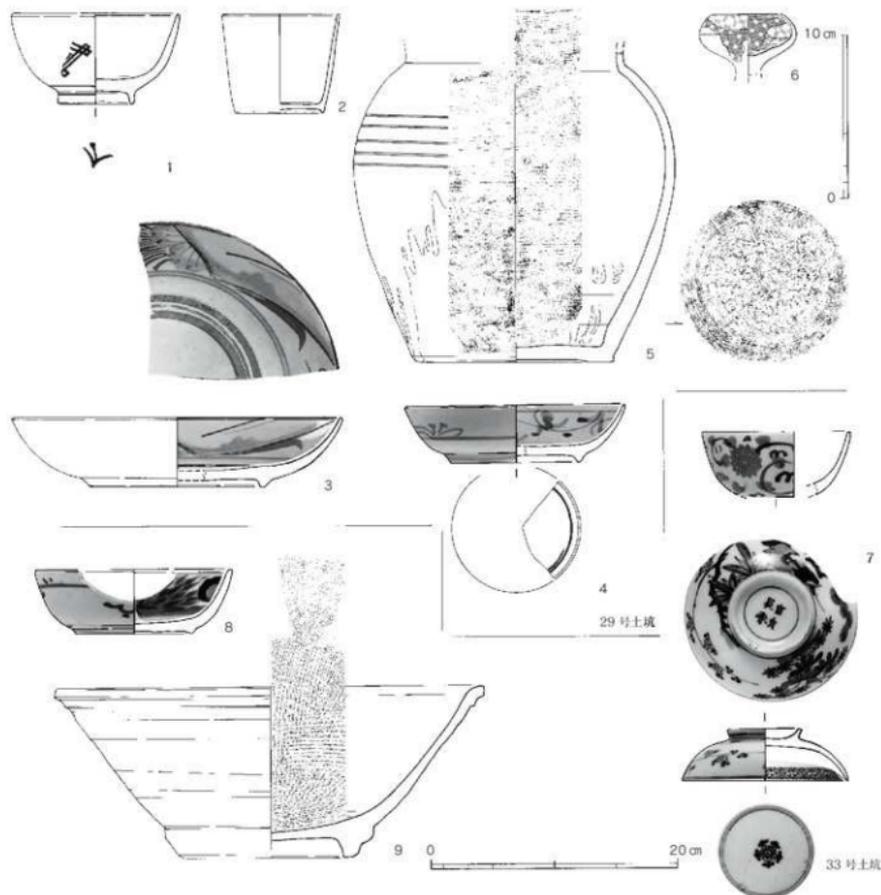


第78図 1次調査24・26・28号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

表38 1次調査出土土器・陶磁器観察表11

通称名 検出番号 図版番号	器種 形状 通称名	直径(cm) ( )は復元値	胎の産地	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑26 7907	大甕 —	—	陶器 内面灰褐色、外面 黒灰色	鉄釉全面掛け	内外ナデ	—	口縁部は軸測 ぎしていない	肥前	17世紀後半
土坑28 7908	瓶 軸測	高台径5.4	陶器 内面、灰白色	黒釉を外周全面に 掛ける。内面はど こまで掛かっている か不明	無文	覆付軸測ぎ 砂目 付着	肥前には 胎が灰白色か	肥前か	不明
土坑29 7909	小型甕 79091 半球形	口径(10.0) 高台径4.6 器高5.5	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面には武田薬文コンニャク印判刷 り、裏面に附いた「大明」を乳須染付	覆付軸測ぎ		筑後見	1750 \3 1770
土坑29 79092	第1口	口径7.0 高台径5.4 器高6.1	磁器 灰白色	黄色不貞で乳白色 を呈する透明釉 貫入あり	無文	覆付軸測ぎ		肥前	1700 \3 1780
土坑29 79093	小型甕 5寸皿 くらわんか手	口径20.0 高台径10.6 器高4.3	磁器 暗灰白色	やや暗い透明釉 全面掛け	外面は無文、内面は花葉文と扇形意文 内書文乳須染付、その上に赤絵を入れ、 口口も入る。見込みの蛇ノ目軸測ぎ部 にも赤絵	覆付軸測ぎ 見込 み蛇ノ目軸測ぎ		筑後見	18世紀中葉 \3 19世紀前半
土坑29 79094	小型 5寸皿 くらわんか手	口径13.4 高台径7.8 器高3.5	磁器 暗灰白色	黄色不貞の暗い透 明釉 全面掛け	外面は直線のう上に草花文、内面は附いた 唐文文乳須染付	覆付軸測ぎ		筑後見	1750 \3 1810
土坑29 79095	中型甕	肩径径26.0 口径16.0	陶器 外面暗褐色灰色、内 面暗褐色灰色	内外鉄釉薄掛け	外面オケ目、内面椅子目タテキで器 底の上を横ナデ、内底は椅子目タテキ で器底縁が円形に磨る	外底アルミナ付着 外底部はアル ミナのため観 望できない	肥前	不明	
土坑29 79096	瓶 軸測	口径4.1	陶器 橙黄色	鉄釉内面から外面口縁部除け。その上に黒釉を施し掛け。内 面に赤立ての乳須あり		底面露筋		肥前	不明
土坑33 79097	甕	口径6.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面はコンニャク印判刷りの草花文を 中心とする唐草文の乳須染付	覆付軸測ぎ		肥前	1700 \3 1740
土坑33 79098	小型	口径(12.0) 高台径7.0 器高3.9	磁器 灰白色 焼成不貞	透明釉を全面に掛 ける	外面唐草文、内面花草文か、見込みに 不明セナーブを乳須染付	肥ノ目高台で、台 部軸測ぎ	小片なので口 縁部不明、今、 見込み、裏 面は不明	筑後見か 肥前	1680 \3 1740
土坑33 79099	罌鉢	口径(34.8) 高台径14.5 器高14.0	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け	割り目は16本単位 外面ナデ	覆付軸測ぎ 砂目付 着 見込みに唐 草文焼き込みあり	見込みの裏 面は胎土目跡か	肥前	1750 \3 1860
土坑33 79100	蓋	肩径10.0 つまみ径4.4 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面は松竹梅文は、天井部裏面に「富 貴長寿」、内面裏面に四角尊文形で、 内面天井部に5弁花文を乳須染付	つまみ部土曜軸測 ぎ		肥前	18世紀後半
土坑35 80001	小型	口径(13.8) 高台径9.0 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	蟹打ち成型。内面に花唐草文、外面は 唐草文、裏面に「福」か、乳須染付	覆付軸測ぎ		肥前	18世紀後半
土坑36 80002	甕 四角	高台径3.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける。貫入あり	外面は上半分が失われており割断とし ないで埋物に磨らるるか、見込みに5 弁花文のコンニャク印判刷り乳須染付	覆付軸測ぎ	胎の色から 筑後見の 可能性 あり	筑後見か	1780 \3 1810
土坑36 80003	台付皿	高台径8.5	陶器 黄灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	見込みに鉄絵で竹唐文 台部は別造りによるものを貼り付け	台下部軸測ぎ	高台の貼り付 け位置がずれ ている	肥前	1690 \3 1780
土坑36 80004	小型	口径5.8 器径4.0 器高1.6	土器質土器 内面、灰褐色 敷	—	内外ナデ 外底赤切り	不明	彩色なし	産地不明	不明
土坑36 80005	小型	口径8.5 器径4.4 器高2.1	陶器 外面内面、内面 陶器	内面から外面脚中 位まで鉄釉掛け	外底赤切りか 器底はナデ	底面露筋で、アル ミナ塗布		肥前	不明
土坑36 80006	鉢	口径(22.3) 器径(15.8) 器高4.4	土器質土器 灰褐色 全	—	蟹作りで、内面はハケ状のナデで、 外面は赤切り、外底はハケ状のナデ	不明	内底が黒葉、 外面口縁部が 保存	右産地	不明
土坑36 80007	小型甕 仏花甕	高台径5.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける。黄色不貞	外面にモナーブ不明の文様の一部を乳 須染付	覆付軸測ぎ		肥前	1690 \3 1750
土坑36 80008	仏薬甕	口径(7.1) 器径5.4 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉 内面から 外面高台位まで	外面に男前を乳須染付	底面露筋		肥前	1690 \3 1780
土坑37 80009	甕 四角	口径5.8 高台径2.8 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に不明文、内面底は5弁花文を乳 須染付	覆付軸測ぎ		肥前	18世紀後半 \3 19世紀前半
土坑41下層 80010	小型 変形小型 花弁形	口径13.7 高台径8.1 器高4.0	磁器 灰白色	やや暗い透明釉 全面	蟹押し成型で、内面は暗唐草文、外面 は唐草文、見込みに唐草文、裏面に 扇縁の乳須染付	覆付軸測ぎ		肥前	18世紀後半
土坑41下層 80011	鉢	高台径13.5	陶器 橙褐色	外面割下位に鉄釉ハケ掛け、その上は 白化粒土をハケ掛けて、その上に 緑灰色の呉釉を施し掛け	外面はハケ状のナデで、 内面は白化粒土をハケ掛けて、暗 緑灰色の呉釉を施し掛け	高台軸測ぎ 見込 みと高台に唐 草文土曜目跡 あり		肥前	1750 \3 1860

76図1は陶器の小碗で、透明釉が口縁部と外面胴中位で白く変色している。これは焼成時の灰被りによるためと考えられる。76図6は陶器の小皿で、三鳥手の象嵌のS字文には線の一部が切れる特徴があるが、どのS字文にも見られるので、同じスタンプで施文していると思われる。76図13と14はセットになる染付の蓋物で、焼成時に14の口縁部に13の蓋の裾部片が融着していたらしく、蓋に融着した破片と接合する。したがって、焼成後に融着していた蓋と身を本体部分が割れないように外して、販売したものであろう。76図15は陶器の摺鉢で、外面胴下半と高台内面は露胎のように見えるが、鉄釉が発色していないだけで、釉は掛かっている。76図16は陶



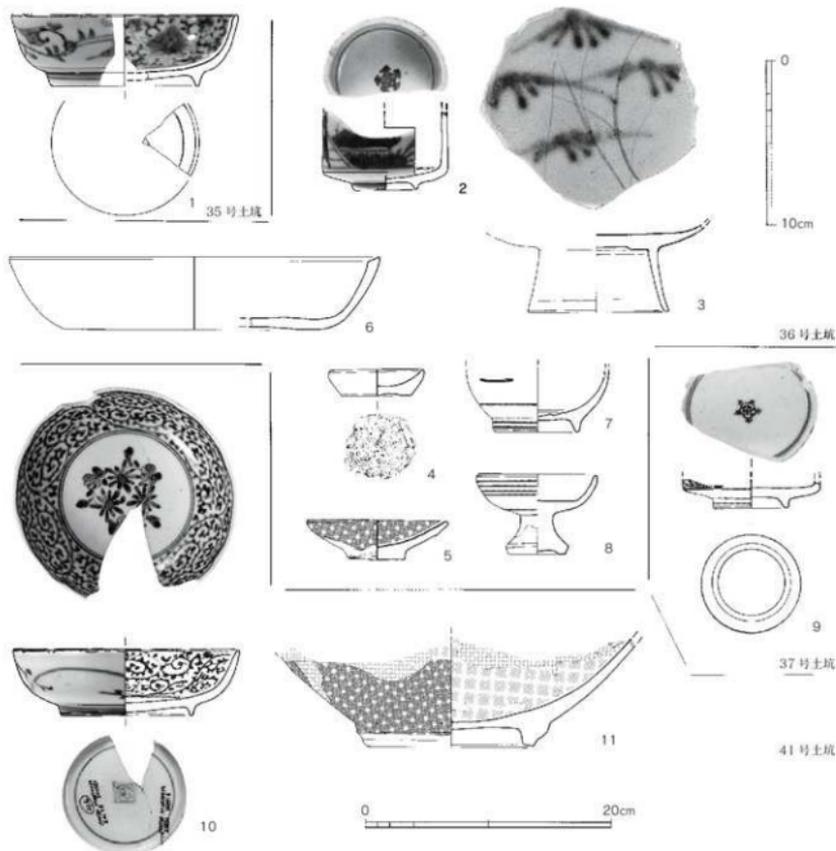
第79図 1次調査29・33号土坑出土陶磁器実測図(5・9は1/4、他は1/3)

器の仏花瓶で、耳部は何らかのモチーフになっていない。外面に異なる鉄軸が掛け分けている。外面胴下位は鉄漿をハケ掛けし、外面胴中位から内面頸部に鉄軸を掛けている。

77図1は陶器の碗で、京焼の可能性を提示したが、胎に肥前との差はないので肥前産京焼風陶器の可能性もある。77図3は陶器の摺鉢で、見込みに蛇の目状の重ね焼き痕があり、外底は畳付軸剥ぎ後に高台外面までアルミナを塗布している。

79図3は磁器の小皿で、見込みの蛇ノ目軸剥ぎ部にも赤絵が施されており、赤絵が削れていないことから、重ね焼きはしていない。79図9は陶器摺鉢で、畳付軸剥ぎ後に砂目が付着しており、見込みに環状重ね焼き痕があり、重ね焼きの痕跡に見られる窪みは胎土目跡であろう。

80図2は染付の筒型碗で、外面は上半分が失われておりモチーフが判然としなない。胎の色調から波佐見焼の可能性がある。80図10は75図2・78図2と同じモチーフだが、78図2とは描き方も同じなので、絵付け工人も同じとわかる。80図11は陶器の鉢で、見込みと高台に環状に巡



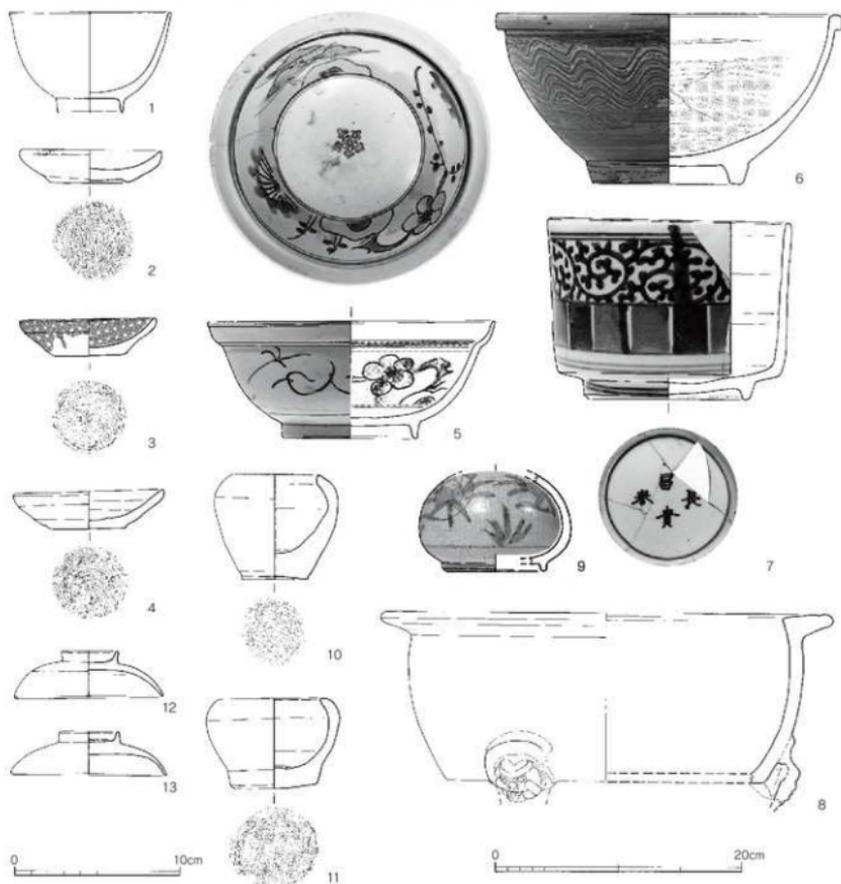
第80図 1次調査35～37・41号土坑出土土器・陶磁器実測図(11は1/4、他は1/3)

る胎土目跡が8つあり、胎土目跡が一部残っていて、砂目だけが残っている部分もある。外底には砂目もなく胎土圧痕のみが残る。

81図3は陶器の小皿で、内面の鉄軸は劣化しているが、これは灯明皿として使用されたためだろう。81図10・11は土師質土器の焼壺壺で、10の断面は赤化しておらず、全体に橙色に変色している。焼壺作業のためだろう。11はほぼ完形のため断面の胎の変色は確認できない。

82図4・5は磁器の小皿で、4は裾部が一部打ち欠いており、そこに煤が付着していたので転用して灯明皿に使用したことがわかる。5と6は若干異なるモチーフだが、絵付けの工人は同じと皿で、高台外面と畳付にカンナ痕状の段があるので、型打ち成型だろう。

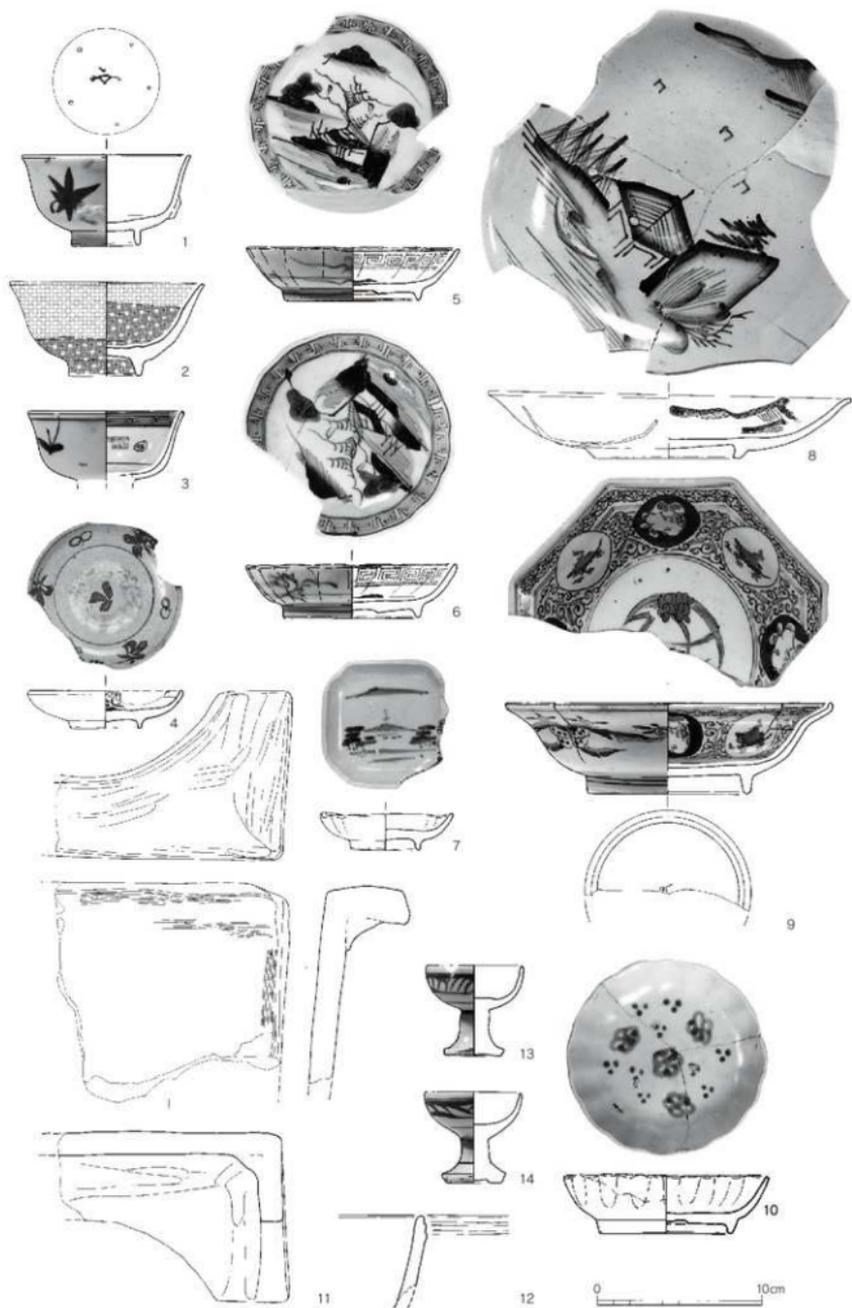
83図17は土師質土器の火鉢で、底部だけ灰黒色になっていないのは、重ね焼きのためか。83図19は口縁部が部分的に残っているので、磁器の筒状の瓶であり、欠損部は煙管を打ち付けた際の打ち抜きによるもので、灰落としとして使用したものである。



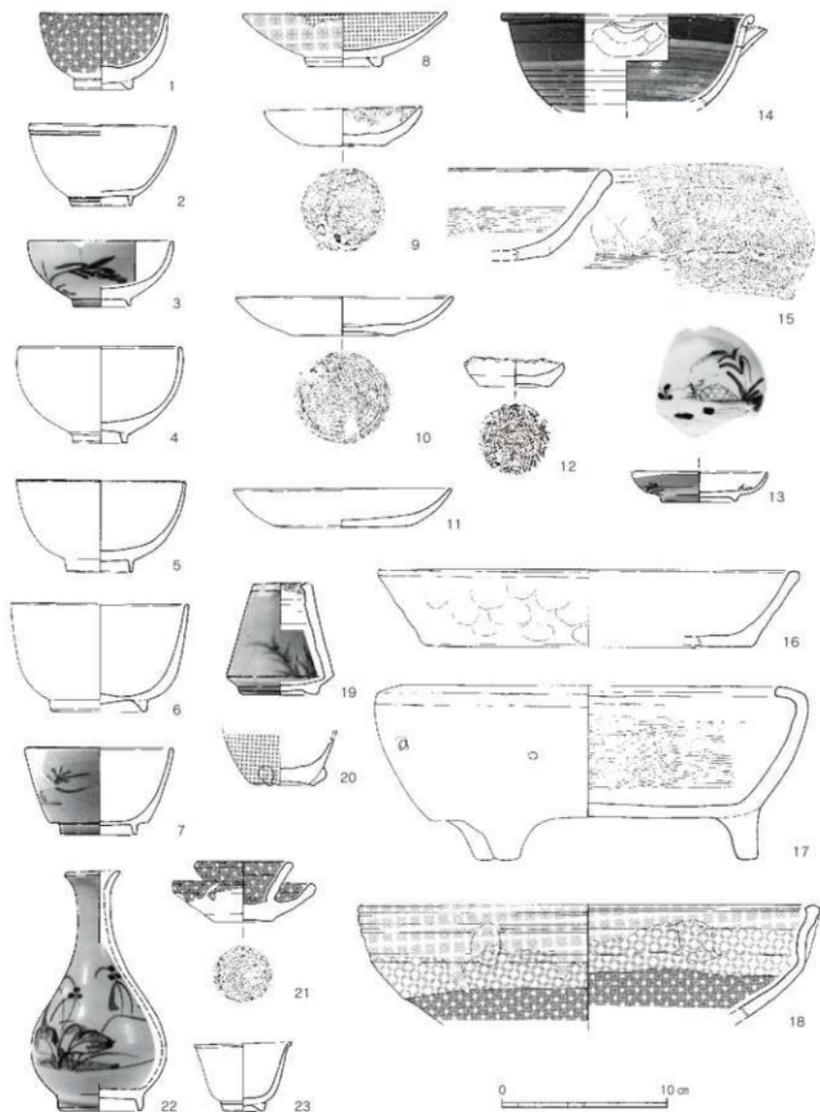
第81図 1次調査1号廃棄土坑出土土器・陶磁器実測図(8は1/4、他は1/3)

表39 1次調査出土土器・陶磁器観察表12

遺物名 群団番号 図版番号	器種 形状 ( )は復元図	法量(cm)	胎の種類	胎薬	調整・整形・装飾技法	窯話の技法	所 見			
							特記事項	埋定地産	埋定年代	
産業土坑1 81001	碗	口径9.8 高台径2.0 器高8.1	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文	貫付輪漉ぎ		肥前	不明	
産業土坑1 81002 図版16	小皿	口径8.4 底径5.1 器高2.0	土師質土器 完形のため不明	—	外底糸切り 内外面ナデ	不明	不明	外面口縁部の一部に 彫付着し 灯明皿 として使用	肥前	不明
産業土坑1 81003	小皿	口径8.3 底径4.4 器高2.3	陶器 にぶい褐色色	内面から外面製 中位まで鉄粒掛け	外底糸切り 器面はナデ	不明	不明	器壁が薄い 外面の釉が劣化	肥前	不明
産業土坑1 81004 図版16	小皿	口径9.2 底径4.5 器高2.4	土師質土器 黄灰白色 精良	—	外底糸切り 外面ナデ 内面黒炭ナデ	不明	不明	外面口縁部の一部に 彫付着している ので灯明皿として 使用	肥前	不明
産業土坑1 81005	鉢	口径17.2 高台径7.9 器高7.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 黄色不良で輪切 れあり	外面は唐草文 内面は松竹梅文 見込みは5 弁花文のコンチャク印刷か 貫須染付	貫付輪漉ぎ		ほぼ完形	肥前	17世紀後半
産業土坑1 81006	片口鉢	口径21.0 高台径9.3 器高10.3	陶器 灰～褐色色 精良	外面製下半は鉄粒ハケ掛け。外面製上半には白化土ハケ掛けし、帯状抜き取り施。緑灰色の鉄粒を掛ける。内面は製中位以下に白化土ハケ掛けし、透明釉掛け	口縁部・器底露胎				肥前	不明
産業土坑1 81007	蓋物	口径14.3 高台径10.1 器高11.0	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け	外面は製上半は唐草文、下半はツノの裏面 で色分けした唐文、内面は唐草文 裏彫り 表長巻。貫須染付	口縁部と器付 輪漉ぎ 砂目付着			肥前	18世紀中葉
産業土坑1 81008	火鉢	口径36.8 底径25.4	瓦質土器 にぶい黄灰色 混入物あり	—	外面器面露胎。脚下方に彫りし獅子面の彫り 付け 外底の器面調整は不明、内面はナデ 口縁部外縁は肥厚	—			在池	不明
産業土坑1 81009	瓶 仏花瓶	高台径6.2	陶器 灰白色	黄色の悪い透明 釉を外面に掛ける	外面は花草文を貫須染付	貫付輪漉ぎ			肥前	18世紀前半
産業土坑1 81010	焼飯壺	口径5.2 底径4.1 器高9.4	土師質土器 黄褐色色 精良	—	外底糸切り 内外面ナデ	—			遠地焼	不明
産業土坑1 81011 図版16	焼飯壺	口径6.2 底径5.2 器高5.5	土師質土器 明褐色色 精良	—	外底ハツケり 内外面ナデ	—		ほぼ完形 器面露 胎	遠地焼	不明
産業土坑1 81012 図版16	蓋	直径9.0 つまみ径3.5 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉 全面 やや黄色不良	無文	つまみ部土層輪漉 ぎ	ほぼ完形		肥前	1700 ～ 1740
産業土坑1 81013	蓋	直径9.4 つまみ径3.6 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文	つまみ土層輪漉 ぎ			肥前	不明
産業土坑2 82001	碗	口径10.0 高台径3.9 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は楓文、見込みに彫れた唐文をコバルト 染付	貫付輪漉ぎ 見込みにハリ目5 つあり	口縁部に歪みあり		肥前	19世紀中葉
産業土坑2 82002	碗	口径11.8 高台径4.5 器高6.8	陶器 褐色色	頸輪を全面に掛 け、内外上半に 黒炭輪土掛け	—	貫付輪漉ぎ	見込みにハリ目3 つあり	小石原	19世紀前半	
産業土坑2 82003	碗 磁反形	口径9.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は龍・牡丹文、内面口縁部は彫れた唐文 をコバルト染付	貫付輪漉ぎ			肥前	19世紀中葉
産業土坑2 82004	小皿	口径9.4 高台径4.3 器高2.3	陶器 青灰色	黄色不良の透明 釉 全面	内面は花文を連結丸文 コバルトで染付	貫付輪漉ぎ 見込みに蛇ノ目輪 漉ぎ	ほぼ完形 頸部が一部打ち欠 いており、そこに 窪みあり		肥前	19世紀中葉
産業土坑2 82005	小皿 菊花形	口径12.8 高台径8.0 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に 掛ける	型打ち成型 外面は唐草文、内面は口縁部露 胎等、見込みに山水文をコバルト染付	蛇ノ目高台で、右 部輪漉ぎ	9割残存		肥前	19世紀後半
産業土坑2 82006	小皿 菊花形	口径12.7 高台径8.0 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に 掛ける	型打ち成型 外面は唐草文、内面は口縁部露 胎等、見込みに山水文をコバルト染付	蛇ノ目高台で、右 部輪漉ぎ	9割残存		肥前	19世紀後半
産業土坑2 82007	小皿 方形 彫形	一辺8.0 高台径4.2 器高2.2	磁器 灰白色	やや暗い透明釉 全面掛け	糸切り職工の型押し成型で、見込みに山水文 貫須染付	貫付輪漉ぎ			肥前	19世紀中葉
産業土坑2 82008	中皿	口径22.0 高台径8.9 器高4.1	磁器 灰白色	やや暗い透明釉 全面掛け	外面は無文、内面は山水文のコバルト染付	貫付輪漉ぎ 見込 みにハリ目5つと 見込みに外面製 中に露胎痕あり	歪みあり		肥前	19世紀中葉
産業土坑2 82009	鉢 8角形	口径19.8 高台径(10.0) 器高5.6	陶器 灰白色	透明釉 全面掛 け	型打ち成型 顔文、内面は口縁部に七宝文、 内面は唐草文地に他と金魚が交互に入る 見 込みに赤文 漢字「龍」の「コバルト染付	貫付輪漉ぎ			肥前	19世紀後半 5 20世紀前半
産業土坑2 82010 図版16	5寸皿	口径12.4 底径8.2 器高3.5	磁器 灰白色 やや粗粒	透明釉全面掛け 焼成不良で白濁	外面無文、内面に花文と三つ星文貫須染付	貫付輪漉ぎ 高台 内底ノ目輪漉ぎ	ほぼ完形 見込みにハリ目3 つ付着		肥前	19世紀中葉
産業土坑2 82011	丸罐鉢小	—	瓦質土器 灰白色	—	板造りで接合部は鉄粒沈着を施し、接合部は ナデ 内底には目の粗いハツケり、丸みがある 面が顔面で、ここだけヒゲキが入る	不明			不明	不明
産業土坑2 82012	鉢	—	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外面口縁部に沈着した 器面はナデ	不明			遠地焼	不明



第82图 1次調査2号廃棄土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)



第83图 1次调查1号大土坑出土土器·陶磁器实测图I(1/3)

表40 1次調査出土土器・陶磁器観察表13

遺構名	器種	容量(cm <sup>3</sup> )	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	装飾技法	所 見		
押込番号	形状	( )は復元値					特記事項	測定座地	測定年代
図版番号	通称名								
縄文土瓦2 82R13	仏飯蓋	口径5.9 胴径3.6 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面平直文赤絵上絵付け	襷付輪調子		肥前	1690 Y 1780
縄文土瓦2 82R14	仏飯蓋	口径4.9 胴径3.5 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面竹文文赤絵上絵付け	襷付輪調子		肥前	1690 Y 1780
土瓦1 83R1	小甕	口径7.8 高台径3.6 器高3.7	陶器 灰白色	鉄釉を内面から外面中位まで	高台留り出し	割下半蓋胎	ほぼ完成	肥前	1690 Y 1780
土瓦1 83R2	小甕	口径8.7 高台径3.6 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に口縁部と高台部に青緑色の染付	襷付輪調子		肥前	1650 Y 1670
土瓦1 83R3	小甕	口径8.8 高台径3.5 器高4.0	磁器 灰白色	発色の悪い透明釉を全面に掛ける	外面黒文か 呉須染付	襷付輪調子		肥前	1700 Y 1740
土瓦1 83R4	甕 半球形	口径9.7 高台径3.4 器高5.9	陶器 暗黄灰白色	透明釉を高台以外全面に掛ける 貫入あり	高台留り出し	高台部蓋胎		肥前	1780 Y 1810
土瓦1 83R5	小甕	口径10.3 高台径4.0 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文 口縁	襷付輪調子		肥前	1680 Y 1740
土瓦1 83R6	甕	口径10.6 高台径(5.6) 器高6.6	陶器 暗黄灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり		高台部蓋胎		肥前か	不明
土瓦1 83R7 図版16	小甕 小杉形	口径9.0 高台径4.6 器高5.4	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に鉄絵のモチーフ	襷付輪調子	ほぼ完成	肥前	1710 Y 1740
土瓦1 83R8	小甕	口径12.2 胴径4.7 器高3.3	陶器 黄灰白色 焼色が粗粒	内面から外面中位まで緑灰色の灰釉が掛かり、その上に銅緑色の内面から外面口縁部に掛かる 外面割下位にカンナ痕あり		外面下半蓋胎	5割残存	肥前	1650 Y 1690
土瓦1 83R9	小甕	口径9.4 胴径5.0 器高2.4	土師質土器 外面黄灰色、内面黄褐色	—	外底赤切り 内外面ナデ	—	口縁部に厚付けするが、内面は厚付け被熱を受け変色	池田地	不明
土瓦1 83R10	小甕	口径13.1 胴径5.8 器高3.3	土師質土器 灰白色	—	外底赤切り 内外面ナデ	—	内外とも黒文、内面はケール状の異化物が付着	池田地	不明
土瓦1 83R11	小甕	口径13.2 胴径8.2 器高2.5	土師質土器 灰白色	—	ヘラケズリ 内外面ナデ	—	変色なし	池田地	不明
土瓦1 83R12 図版16	小甕	口径9.1 胴径4.3 器高2.7	土師質土器 黄褐色灰白色	—	外底赤切り 外面ナデ 内面黄褐色ナデ	不明	外面口縁部に厚付け 内外面ともに変色	池田地	不明
土瓦1 83R13	小甕	口径8.2 高台径4.4 器高1.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	内面草文・龍文、外面不明モチーフの呉須染付	襷付輪調子	歪みあり	肥前	不明
土瓦1 83R14	片口鉢	口径15.2	陶器 黄灰色	内外面口縁部は鉄釉、割下位は白化粒土ハケ掛けで最後に全面透明釉掛け		見込みで焼付のアルミナ付		肥前	不明
土瓦1 83R15	焙烙	—	土師質土器 にぶい黄褐色 金雲母あり	—	外面口縁部は輪ナデ、胎内面はオサエ、接合部下は輪ハケ、内面は接合部が細かい輪ハケで、輪ナデ	不明	内面は黄灰色、外面は厚付け	池田地	不明
土瓦1 83R16	焙烙	口径25.0 器高4.7 鉄径20.2	土師質土器 にぶい黄褐色 金雲母あり	—	外面はオサエ、底面はハケ、内面はナデ	不明	内面は変色少ない、外面は厚付け	池田地	不明
土瓦1 83R17	大鉢	口径26.4 器高10.6 器径17.2	土師質土器 にぶい黄褐色	—	外面はナデ 外底と内面はハケ 器3つ焼り付け	不明	胴部の穿孔は補修孔だらう	池田地	不明
土瓦1 83R18	鉢	口径28.0	陶器 にぶい黄褐色	内外鉄釉掛け、口縁部鉄釉2度掛け	外面割下位ケズリ、口縁部にオサエによる窪み1つあり	—		肥前か	不明
土瓦1 83R19	灰吹き	口径3.5 高台径5.0 器高5.8	磁器 灰白色	青緑釉を外面から内面口縁部に掛ける 貫入あり 高台内の灰白色は発色不良だらう		襷付輪調子	口縁部に打ち突きが全周する	不明	
土瓦1 83R20	小鉢 香炉か	直径3.6	磁器 灰白色	暗緑色の緑釉を割下位まで掛ける	無文 脚は4つのうち2つが残存 土瓦	外底に鉄葉掛け		肥前	不明
土瓦1 83R21	灯明受皿	口径(5.6) 最大径8.8 直径3.5	陶器 灰白色	鉄釉を内面から外面中位まで	外底は赤切り	割下半蓋胎	割下半蓋胎 胎土目録あり	肥前	不明
土瓦1 83R22	仏花瓶	口径3.5 高台径7.4 器高14.7	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け 発色不良	外面花葉文と呉須染付	襷付輪調子	完成	肥前	1690 Y 1750
土瓦1 83R23	杯	口径6.0 高台径2.5 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	無文	襷付輪調子	ほぼ完成	肥前	1650 Y 1680
土瓦1 84R1	小鉢	口径22.0	陶器 にぶい黄灰白色	内外鉄釉掛け、口縁部オリーブ色の灰釉上掛け	口縁部に鉄ねじり	—		小石原	不明
土瓦1 84R2	餅鉢	口径31.0	陶器 橙褐色	口縁部のみ鉄釉	内面割り目12本単位	不明		肥前	1650 Y 1690

83図16は土師質の鉢で、外面の調整はオサエのみ。83図20は瑠璃釉の小鉢で豆状の脚が3つ付く。

84図5は土師質の焔炉片で、窓の大きさと下部の湾曲ラインは推定である。

85図7は陶器の摺鉢で、内面下半に釉がないのは、発色不良で定着していないため摩耗したためだろう。11は土師質土器の焼塩壺の蓋で形態から18世紀中葉の

大阪難波産の焼塩壺である。12は磁器仏飯器で、モチーフが崩れているので新しい。

86図1は土師質小皿で、口縁部の一部が黒変しているので灯明皿として使用している。

87図1は1号埋壺本体の陶器大甕で、内面はカルキが付着しているため白色に変色している。付着物はないので、小便壺と考えられる。裏底の墨書の屋号の記号に下にある「七平」とあるが、生産・販売に関わる人物の名前であろう。

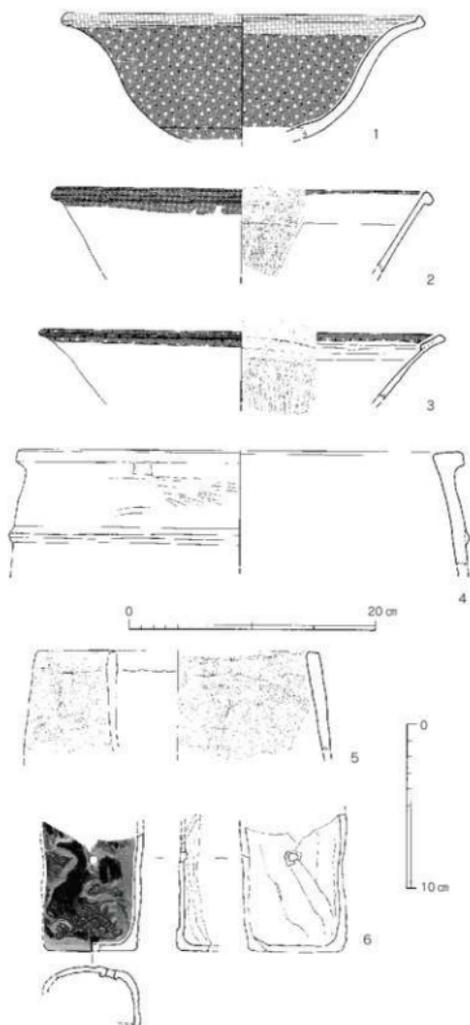
88図4は3号埋壺本体で、内面はカルキが付着しているため便壺として使用していたとわかる。内面はカルキ付着のため調整の観察ができなかった。

91図2は6号埋壺本体の土師質土器の大甕で、内面に変色がないので水甕か穀物を入れた甕ではないだろうか。5は土師質の蓋であろうが、これを蓋にする身になるものがない。

92図4は7号埋壺の本体で、小甕なので便槽ではない。内部に2の碗と3の壺が入っていたが、意図的なものかわからない。

93図5は土師質土器の大甕で、内面はカルキのため白色に変色しているが、付着物はないので、小便壺ではないだろうか。

96図19・20は磁器の小皿で、モチーフの構成が同じで描き方が異なっているので、同じ窯で絵付け工



第84図 1次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図2(2~4は1/4、他は1/3)

表41 1次調査出土土器・陶磁器観察表14

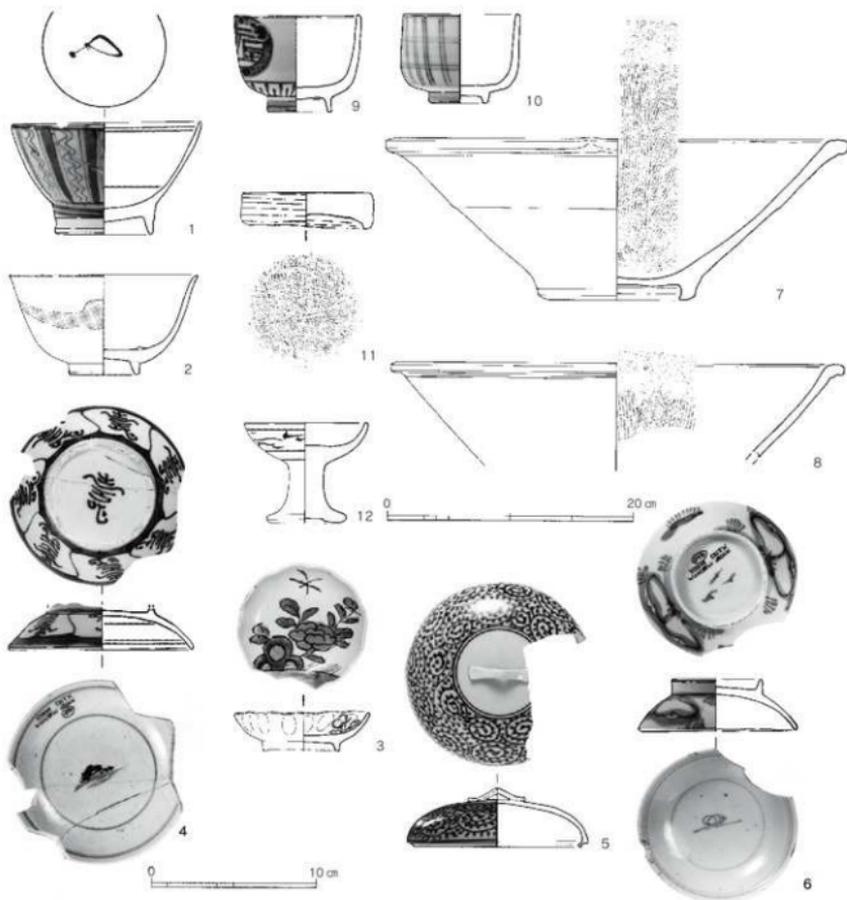
遺物名 検出番号 図録番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯込の技法	所 見			
							特記事項	推定産地	推定年代	
大土坑1 84図3	割鉢	口径(32.2)	陶器 褐色	口縁のみ鉄釉	内面磨り目12本単位	不明	器壁薄く、大きく 反るのが特徴的	肥前	1650 \	1690
大土坑1 84図4	大鉢	口径(36.0)	瓦質土器 灰白色が灰黒色 を挟む	—	外面から口縁部ミゾキ 内面はナデ	不明	外面の黒色は灰黒 噴着によるもの	在地か	不明	
大土坑1 84図5	甕鉢	口径(30.0)	土師質土器	—	外面丁寧なハケ 内面は煤が付着し、 調整がほとんどわからないが、口縁 部のみハケとわかる	不明	内面の煤は口縁下 に厚く付着し、口 縁部は煤が付着し ていない	在地	不明	
大土坑1 84図6	水筒	短輪(6.0)	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け	赤切り皿1の型押し成型流木文・青 海鼠文と黒文の型押しによる除却で、 外底の濃灰色で色分けしている染付 上面に上から厚孔	下端面磨削	—	肥前	不明	
大土坑3 85図1	甕	口径11.5 高台径6.0 器高6.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける 黄色やや不 良	外面によれば黒文と黒帯文が交互に 入る。見込みも奇文を具頭染付	横付軸測寸	高台中位に段がツ くのはへたれ 見 込みにひつつき多 い	筑前見	1780 \	1810
大土坑3 85図2	甕	口径11.3 高台径4.3 器高6.1	陶器 褐色	—	オリーブ色の鉄釉を全面に掛け、外面中に黒灰釉或し 掛け	横付軸測寸	見込みハリ目3つ あり	小石原	19世紀前半	
大土坑3 85図3	小甕 5寸皿 菊花形	口径8.2 高台径4.6 器高2.4	磁器 灰白色	透明釉 全面	型打ち成型 牡丹文と黒文、黒鼠染 付	横付軸測寸	—	肥前	19世紀中葉	
大土坑3 85図4	蓋	直径11.0	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面はデザイン化した方文、外面天 井部も奇文、内面天井部は波と岩文 を具頭染付	—	—	肥前	1780 \	1810
大土坑3 85図5	蓋	直径10.2 最大径11.0 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面天井部縮草文を具頭染付	受け軸測寸	—	肥前	1690 \	1780
大土坑3 85図6	蓋	直径9.5 つまみ径5.4 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面は草文、外面天井部は鳥文、内 面天井部は彫れた波と岩文 具頭染 付	つまみ上端輪 測寸	9割残存	肥前	1780 \	1810
大土坑3 85図7	割鉢	口径(39.6)	陶器 褐色	内外面鉄釉掛け 黄色不良	磨り目は26本単位	横付軸測寸 見 込み現状に重ね 焼き痕あり	—	肥前	1750 \	1860
大土坑3 7割 85図8	割鉢	口径(37.0)	陶器 褐色	内外面鉄釉掛け	磨り目は23本単位	不明	—	肥前	1750 \	1860
大土坑3 85図9	小甕 蓋のみ	口径(7.7) 高台径(3.9) 器高5.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 釉の濃薄あり	外面に帯丸に直線のみでデザインさ れた「瓢」字、割下位に菱形、扇面文 を具頭染付	横付軸測寸	—	肥前	19世紀中葉	
大土坑3 85図10	小甕 蓋のみ	口径(6.8) 高台径(3.7) 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に二重輪子文を具頭染付	横付軸測寸	—	肥前	19世紀中葉	
大土坑3 上期 85図11 図録16	徳染由蓋	直径(8.6) つまみ径1.9 器高3.9	土師質土器 文型のため不明	—	外底割ナデによる凹みあり 内面天井部和目あり、型押し成型 内面天井部はナデのみ	不明	—	不明	不明	
大土坑3 7割 85図12	仏飯器	口径(7.5) 直径4.8 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける 貫入あり	外面割ナデに彫れた鳳凰文コバルト染 付	横付軸測寸	割部に丸みがあり、 モチーフが彫れて いるので磨しい	肥前	19世紀後半か	
大土坑4 86図1	小甕	口径(6.2) 直径4.6 器高1.7	土師質土器 黄灰色	—	外底赤切り 内面ナデ	不明	内外とも口縁部 の一部に黒変	在地	不明	
大土坑4 86図2	小甕	口径(8.9) 直径3.4 器高2.6	陶器 褐色	鉄釉を内面から外 面割下位まで	外底赤切り	底面磨削	—	肥前	不明	
大土坑4 86図3	小甕	口径13.4 高台径7.8 器高3.3 5寸皿	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け	外面は唐草文、内面は半唐草文、 見込みは5弁花文のコンニャク印判 刷りの具頭染付	横付軸測寸 砂 目付着 見込み 絶ノ目軸測寸	ほぼ完形	筑前見	1690 \	1740
大土坑4 86図4	小甕 花弁口縁	口径21.0 高台径12.0 器高2.5	磁器 明灰白色	やや暗い透明釉 全面掛け	型打ち成型 外面は唐草文、内面は 半花文散らしの黒文に唐草文、見 込みに5弁花文、外底の裏筋は渦線 を具頭染付	横付軸測寸 砂目付着ハリ目 跡3つ外底にあり 位置関係から 本底を推す	—	肥前	1740 \	1780
大土坑4 86図5	中甕	口径(22.3) 高台径12.0 器高4.2	磁器 灰白色	青みのある透明釉 全面掛け	外面は対面に草文、内面は流木文と 草文、牡丹文を具頭染付	横付軸測寸 外 底にハリ目	5割残存 見込みにひつつき あり	肥前	1680 \	1740
大土坑4 86図6	灯明受皿	口径(5.9) 最大径5.9 直径4.0	陶器 暗褐色	鉄釉を内面から外 面割中位まで	外底は赤切り	割下平端磨	—	肥前	不明	
大土坑4 86図7	甕	口径5.8 高台径6.7 器高27.3	磁器 灰白色 黒色粒 子を含む	透明釉を内面割部 から外面に掛ける	外面割部に花葉文の具頭染付 底面は赤褐色	横付軸測寸	—	筑前見	1650 \	1690
大土坑4 86図8	甕	最大径16.0 高台径8.8	磁器 灰白色	外面に透明釉掛け	外面花文を具頭染付	横付軸測寸	—	肥前	1650 \	1690

人が違うのではないか。

99図4は陶器の鉢で、肥前産としたが胎の密度が高く、外面の一部に白化粧土・鉄軸・透明釉のすべてが縮れて剥がれている焼成不良さから二川焼の可能性もある。

100図1・2は陶器大鉢で、1はの内面が白いのは白化粧土を塗布したのではなく、胎が白い上に透明釉が掛かっているためである。胎に特徴があるので、肥前産でないかもしれない。2は畳付に胎土目が外されなまま付着している。100図5は陶器の摺鉢で底部だけ胎の表面が橙色なのは発色不良のため、釉が剥がれているのもそのためである。

102図1は磁器鉢で、器形や文様から朝鮮半島向けに作られた製品とわかる。102図5は小型



第85図 1次調査3号大土坑出土土器・陶磁器実測図(7・8は1/4、他は1/3)

の半胴甕だが、内面にカルキが付着しているので尿瓶として使用したものである。

103図1は土師質の火鉢で、口縁部の炭化物を吸着させた範囲は丁寧に磨かれており、光沢を持っている。

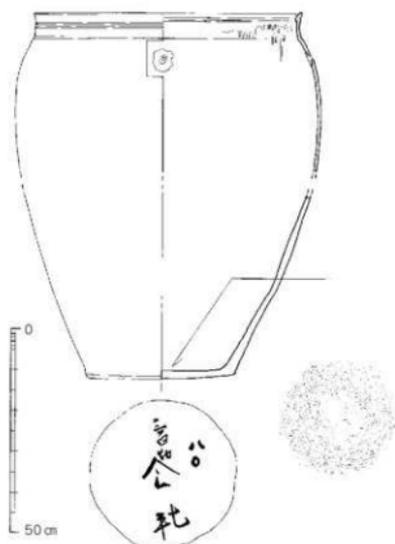


第86図 1次調査4号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

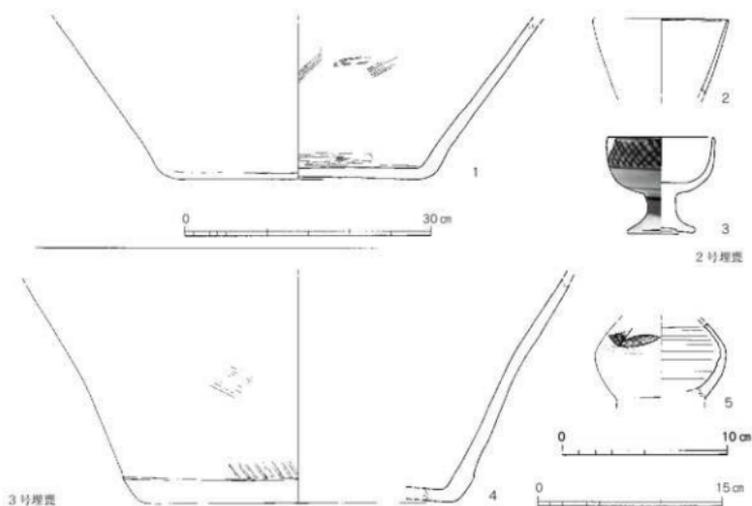
103図65の半胴甕は白化粧土の上には透明釉を掛けていないので、鉛釉が褪色している。103図7は陶器の仏花瓶で、頸部の中間の上下で色調が異なるのは、透明釉の有無であり、胴下位の屈曲部の上下で混入物に差があるのは下地の灰釉の有無の差であろう。

104図2は磁器の貧乏徳利で、奥田商店の貸し酒瓶であろう。「ㄣ長」は屋号で「七平」「丑」の下は欠損のため読めない。104図6・7は土師質の焼塩壺で、6は胎土と底部形態がやや蒲池産のものと異なるので、別の地域の産ではないだろうか。7は内面の赤変した範囲白色の斑点が見られるが、塩の影響ではないだろうか。

105図1は土師質の七輪で、扇形の窓内に「勸業課御口」「筑前博多産口」「更荘」というスタンプが残っており、博多七厘の類例から「勸業課御試験済」「筑前博多産物」である。同じ形態で同じスタンプをもつものが北九州市木屋瀬宿本陣跡でも出土している。



第87図 1次調査1号埋壺実測図(1/12)



第88図 1次調査2・3号埋壺出土土器・陶磁器実測図(1は1/6、4は1/4、他は1/3)

表42 1次調査出土土器・陶磁器観察表15

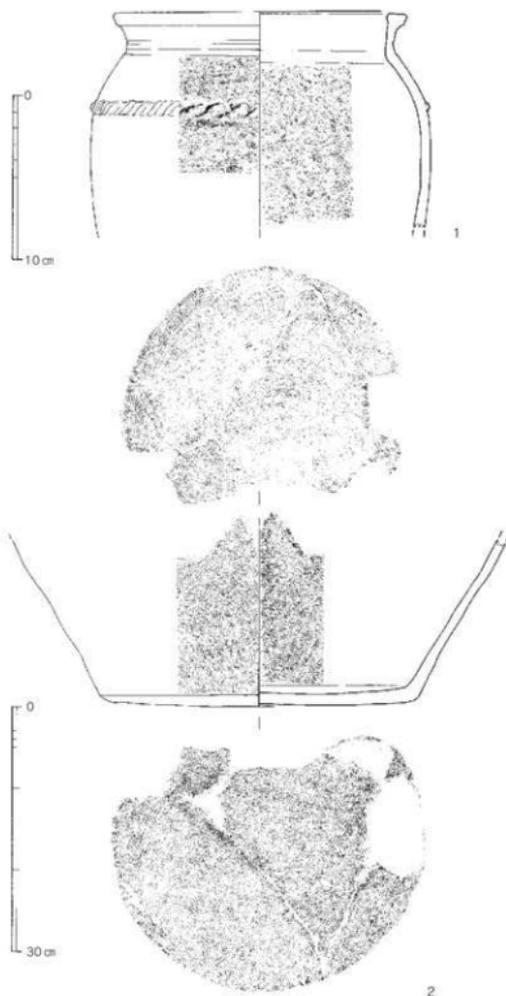
遺物番号 ( )は復元額	器種 形状	法量(cm) ( )は復元額	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯話の技法	所 見		
							特記事項	産定産地	産定年代
埋蔵品 8701	大壺 底径36.8	陶器 粉褐色に灰 白色のマーブル状 に染じる	鉄釉全面掛け	不明	内外面格子目タタキ痕ナデ消しで、 内底面は同心円状に格子目タタキ痕 が残る。外底に黒線	不明	肥前	17世紀後半	
埋蔵品 8801	大壺 底径34.0	瓦葺土器 灰色 混人物少ない	—	—	外面磨面調高のため不明 内面目の 細かいハケ	不明	在池	不明	
埋蔵品 8802	節口	口径8.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	口縁あり	—	肥前	1700 Y 1780	
埋蔵品 8803	仏飯器	口径6.6 胴径4.2 器高5.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面格子文を貫頭染付	横付輪調子	肥前	1090 Y 1780	
埋蔵品 8804	大壺	底径26.0	土加質土器 にぶい暗褐色 混 人物多い	—	外面は磨面調高のための調整を調整で きない 内面カルク付着のための調整 調整不能 外底磨面磨損	不明	内面はカルクのた め変色している	在池	不明
埋蔵品 8805	梨輪壺 割丸形	最大径8.0	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面は花草文を貫頭染付	—	肥前	1650 Y 1690	
埋蔵品 8901	小壺	口径17.8	陶器 橙褐色 やや軟質	鉄釉全面掛け 焼成不良	内面は同心円タタキ痕を、外面は格 子目タタキ痕ナデ消し、胴部は円線	口唇部輪調子 で目線あり	肥前	17世紀中葉	
埋蔵品 8902	大壺	底径39.2	瓦葺土器 にぶい黄灰色 白 色粒点多く含む	—	内外面目の細かいハケ	不明	内外面に変色なし	在池	不明
埋蔵品 9001	大壺	底径34.0	土加質土器 にぶい暗黄白色	—	内外面目の細かいハケ	不明	外面に変色・磨損 なし 内面は黒灰 色に変色し、部分 的に鉄片が付着し ている	在池	不明
埋蔵品 9002	小型鉢 香粉か	口径7.0	磁器 灰白色	緑釉を全面に掛ける 貫入あり	無文	不明	肥前	不明	
埋蔵品 9101	大壺	口径58.0	陶器 暗紫灰色	内外鉄釉	外面はタタキ痕をナデやハケで消し、 内面も同様だが格子目タタキ目が残 る	口唇部の輪調 子や目線なし	肥前	17世紀中葉	
埋蔵品 9102	大壺	底径33.2	土加質土器 にぶい暗黄白色	—	外面ナデ 内面内底面細かいハケ	不明	変色・付着物はない	在池	不明
埋蔵品 9103	甕	口径11.0 高台径4.0 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は割れた彫り香文と水鳥文と墨 引きの渦文、高台外面は曲線文、内 面口縁部は菱形編文帯、見込みは割 れた隠状松竹文のコンパルト染付	横付輪調子	内面口縁部の文様 帯は目の精足で雷 文帯に見える	肥前	19世紀後半
埋蔵品 9104	甕	口径10.4 高台径4.2 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には草書文と龍文を貫頭染付	横付輪調子	肥前	1710 Y 1750	
埋蔵品 9105	盃 半球形	最大径4.4 底径3.0 器高2.6	土加質土器 褐色パシス入る	—	手捏ね成型 胴内面はケズリ	不明	在池	不明	
埋蔵品 9201	甕 半球形	口径10.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に刺繍文を貫頭染付	—	肥前	1710 Y 1740	
埋蔵品 9202	甕	口径10.7 高台径4.5 器高6.8	陶器 灰白色	淡緑灰色の灰釉を外 面口縁部から胴下位まで 掛け、その上に濃い緑 灰色の副輪軸を2度掛け、 内底は透明釉掛け	外面胴下位はカンナ痕	底面磨損 見 込み蛇の目輪 調子部に筋土 目4つあり	肥前	1090 Y 1780	
埋蔵品 9203	小壺	肩径12.0 底径6.8	陶器 にぶい暗褐色	内面に鉄釉を掛けた後、 外面に白化粧土を掛け、その上に肩部か 胴部中央に副輪軸を掛ける	外面の胴下位は鉄釉をハケ掛け、 外面肩部まで白化粧土を掛け、その上 に肩部か胴部中央に副輪軸を掛ける	横付輪調子	肥前	17世紀後半	
埋蔵品 9204	中壺	口径27.9 底径19.7 器高36.8	陶器 内面暗灰色で外面 褐色	鉄釉全面掛け	肩部に円形浮文 内外面格子目タ タキで、部分的にナデ消し、内底面は タタキが放射状に入る 外底面は調 整不明 白化粧土を肩部に掛け流し	外底は未調整 内底は未調整	内底の変色はカ ルクか	肥前	18世紀
埋蔵品 9301	小甕 四角	高台径3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 外底に軸付あり	外面に楓文と格子区画文が入る 体 部下位は割れた鳳凰文、内面見込み に凸花文のコンファレ印判り貫 頭染付	横付輪調子	肥前	1740 Y 1780	
埋蔵品 9302	甕 腰差形	口径8.0 高台径3.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は散文、見込みに松竹鳥文を貫 頭染付	横付輪調子	肥前	19世紀前半	
埋蔵品 9303	小皿 腰差形	口径14.6 高台径10.4 器高4.2	陶器 暗黄灰～橙白色	発色不良の透明釉 全 面掛け	外面は暗褐色した横帯散文、内面は 亀甲文と草文、見込みに花文を貫 頭染付	縦ノ目高台で 内底がへたれてい る	浜佐見	1820 Y 1860	
埋蔵品 9304	鉢 畚物	口径13.4 高台径8.0 器高6.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は磨面草地に雲形の意匠を施さ す、その中に宝文を貫頭染付	横付輪調子 内面口縁部 輪調子	肥前	18世紀後半 Y 19世紀前半	
埋蔵品 9305	大壺	底径36.2	土加質土器 橙褐色 混人物少 ない	—	外面細かいハケ 内面調整不能 外 底面細かいハケ目	不明	内面はカルクのた め白色に変色し ているが、付着物 はない	在池	不明

105図3は土師質の七輪で、四角の中に「喜八」のスタンプがある。3の形態のものは広い範囲に出土するので、産地を特定できない、スタンプの位置は復元である。

106図2は陶器の中型甕で、外底に陶器片を胎土目に利用することは珍しい。胎は肥前に近く、内底の放射状のタタキ痕も乱れているので、肥前産ではなく二川焼だろう。106図9は磁器の蓋だが、裾部が一部打ち欠いており、そこに煤付が見られるので、転用して灯明皿にしている。

107図12は従軍記念杯で、金彩の「四連隊」が残っているので、久留米歩兵第四八連隊のことだろう(注1)。107図14は磁器杯で、「野田新平」の金彩が書かれている(注2)。107図17は土師質の急須で、胎の色調から見て博多瓦町焼だろう。107図19から21は土師質の土管で、土師質瓦の胎や調整に近く、製作地に近いのだろう。107図22は陶器の摺鉢で、見込みに胎土目跡と環状の砂目跡の両方が見られる。焼成技法の過渡期ではなかろうか。

108図2は京焼風陶器碗だが、高台が小さく、胴の張りが大きい。胎のざらつきもあるので肥前産でないかもしれない。108図3は陶器碗で、外面胴中位の沈線と下位のカンナ痕は成型時のものである。108図6は磁器小皿でアルミナが軸廻り部からはみ出している。108図7は土師質土器の小皿で、内外の色調は黄灰白色だが、見込みに螺旋ナデがあるので、蒲池焼だろう。108図9は陶器の香炉で、オリーブ色の灰軸は緑軸のようである。108図12は陶器の小甕で、胎がややにぶいが肥前産だろう。108図14は水滴の内面に墨書が見られるもので、最も上



第89図 1次調査4号埋出土土器・磁器実測図(1は1/3、2は1/6)

のものは屋号だろうか。「千之」と読むべきか。板作り成型なので成型してしまつと墨書を書けな  
い上に、目に触れることもなくなるので、工人が書いたものだろう。何の意図なのかわからない。

109図1は陶器の摺鉢で、鉄軸が薄く掛かっていることから二川焼の可能性を残す。109図5  
は陶器の嗽茶碗で、胎が灰色なのが特徴的である。109図7は土師質の焙烙で肩部の接合部にハ  
ケ調整が入る。金雲母が入らない胎土の異なるもの。内面の井桁沈線文は112図10にも見られる  
が、戦国時代のもので久留米市城島町北ノ屋敷遺跡(引用文献1)の鉢にも見ることができ、焼  
成前に施文されたものである。

110図2は瓦質土器の火鉢で、外面・口唇部にはミガキがあるが、単位がわからないほど入念  
に磨かれている。口唇部内面側が白化しているのは被熱のためである。112図10・11は土師質土  
器の焙烙で、反転復元できない大型品の破片である。

113図6は瓦質土器の火鉢で、口縁部下に突帯がつくのは珍しい。

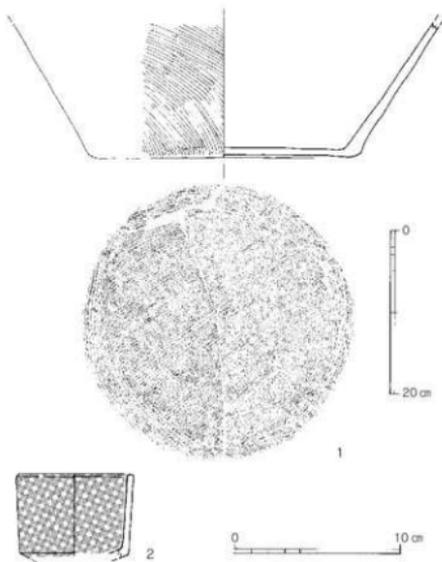
114図1は磁器蓋物の鉢で、焼成時のひびが入っており、ひびの入ったものを買入れたものだ  
ろう。114図7は瓦質土器の火鉢で、胎が瓦質らしくなくミガキがない。114図5・6は土師質の  
焼塩壺で、断面に赤色の変色がある。114図8は瓦質の火鉢で、胴下位には型押しによる鋸歯文帯、  
亀甲文帯などの陽刻がある。突出部の接合部には沈線がある。窓にはミガキが入る。

115図・116図は土師質瓦で、116図1は同一個体の両端部の破片で、接合しないため、図上  
復元している。117図3は玉緑状の突帯部の上面を面取りしている部分があるので、側端部の破  
片とわかる。

118図1から3は瓦質の丸瓦で、1は蓆と模骨痕が明瞭に残る。模骨は幅から竹製と見られ、  
円柱の模骨の上に蓆を掛けて成型したものである。118図2・3は蓆よりも目が細かいので、麻布  
のようなものではなかろうか。4・5は屋  
根の棟の先端につく「堤瓦」である。

119図6は磁器の唐人人形の芯押さえ  
で、型合わせの痕跡がなく、裏面は型  
で成形されたものがないことから、表  
面を型押しするのみで、裏面は手捏ね  
とナデのみで仕上げていると見られる。  
頭部を失っているが、頭頂部に鉄軸を掛  
ける唐人人形であろう。7は兵隊人形  
で、前面にのみ着色しているので、子  
供の玩具ではなく、置物として飾るた  
めのものだろう。4次調査で出土した  
着せ替え人形(『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ 4』  
55図13・1)とつくりが似ている。

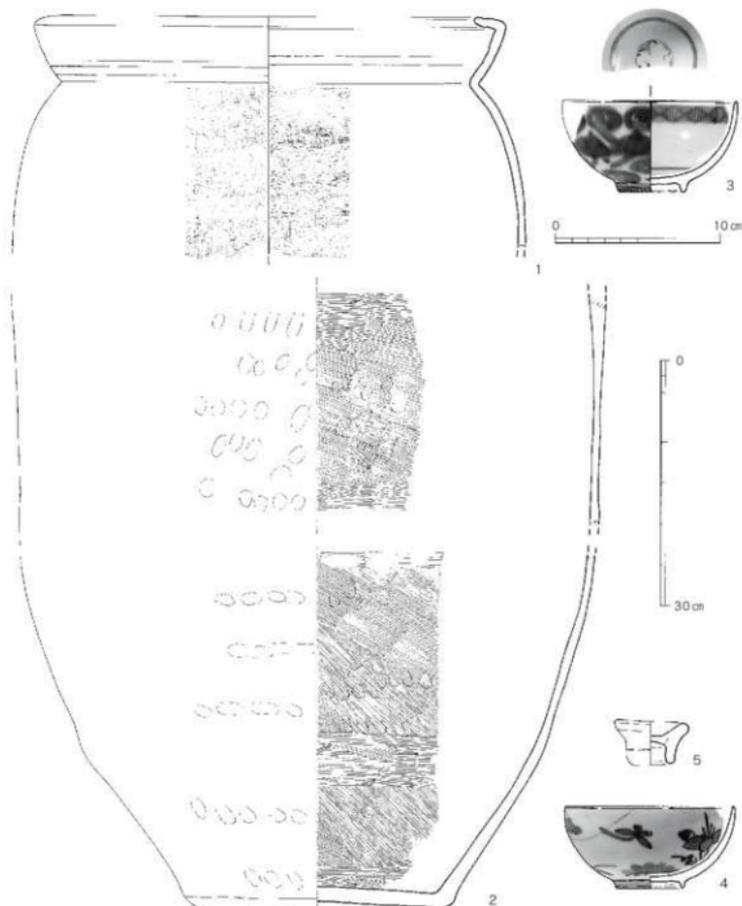
119図12は土師質の鳩笛で、胎が土師  
質の赤瓦に近いことから、水田焼の可  
能性が高い。基部は細い方形の穿孔が  
あるのみなので、吹き口がつくのだろ  
う。119図14は極小形の土鈴で、手捏ね  
成型である。119図20は窯道具で、被熱



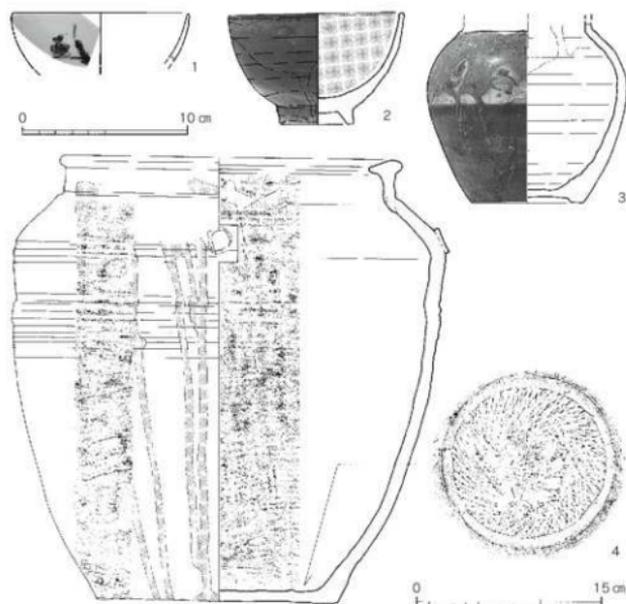
第90図 1次調査5号埋壺出土土器・磁器実測図(1は1/6、2は1/3)

をあまり受けていない面に黒い円形の痕跡がある。119図20は窯道具で、被熱をあまり受けていない面に黒い円形の痕跡がある。119図21・22はサナ状土製品で、21は歪みが大きく破片が小さいため、径を復元できない。22は外縁部の作りが荒いことから、七輪にセットされないものかもしれない。

120図1から5は大型の土人形で、鎧を着けた武者人形と、袴を履いた人形の少なくとも2種類があるようだ。胎土は大黒天人形の底部に抉りの入らないものに近く、在地産である。節句人形と思われ、彩色はなく、つくりと胎は大型土人形のいずれも同じである。120図9は灰落としの際打ち付ける部分に鉄版を貼って強化したもので、管の縦じ目に板を被せている。120図18は非常に薄い金輪であるので、それ単体で使用するものではなく、何かの部品の1つであろう。



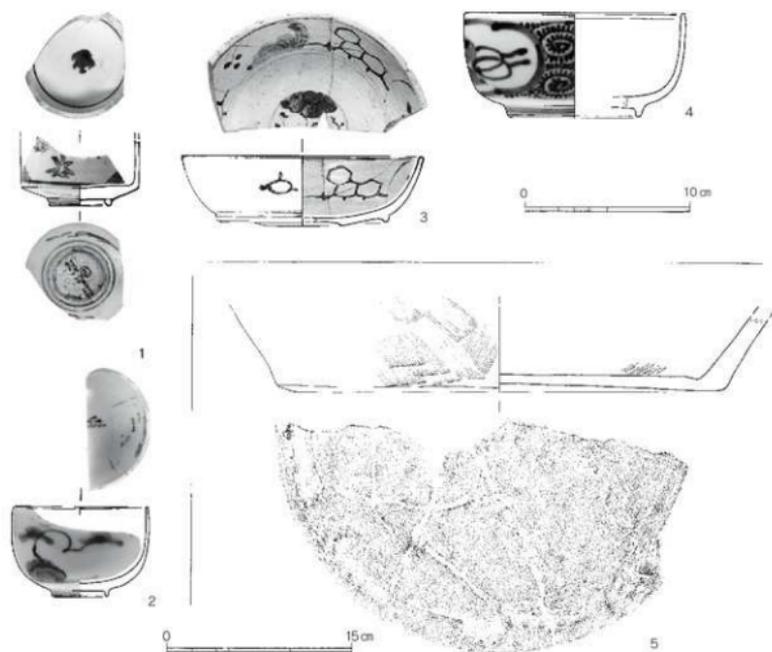
第91図 1次調査6号埋甕出土土器・陶磁器実測図(1・2は1/6、他は1/3)



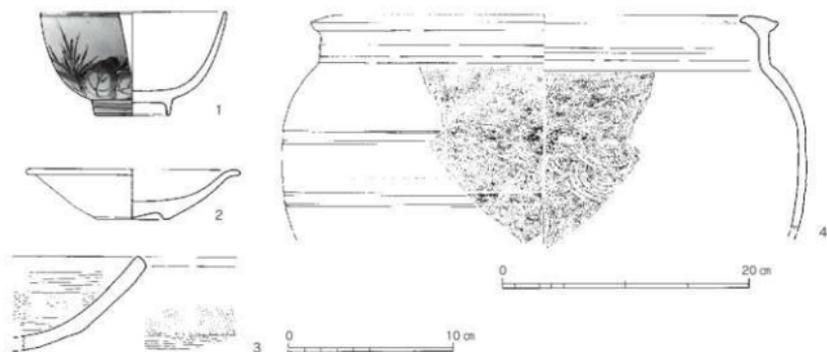
第92図 1次調査7号埋甕出土陶・磁器実測図(4は1/4、他は1/3)

121図はるつぽで、すべて被熱を強く受けており、融着物が著しいため、本来の器面や胎は観察できない。ほとんどの個体の内面には銅の粒が付着していたが、1・12・16は溶解鉄が、3は銅が流れた痕跡が残る。

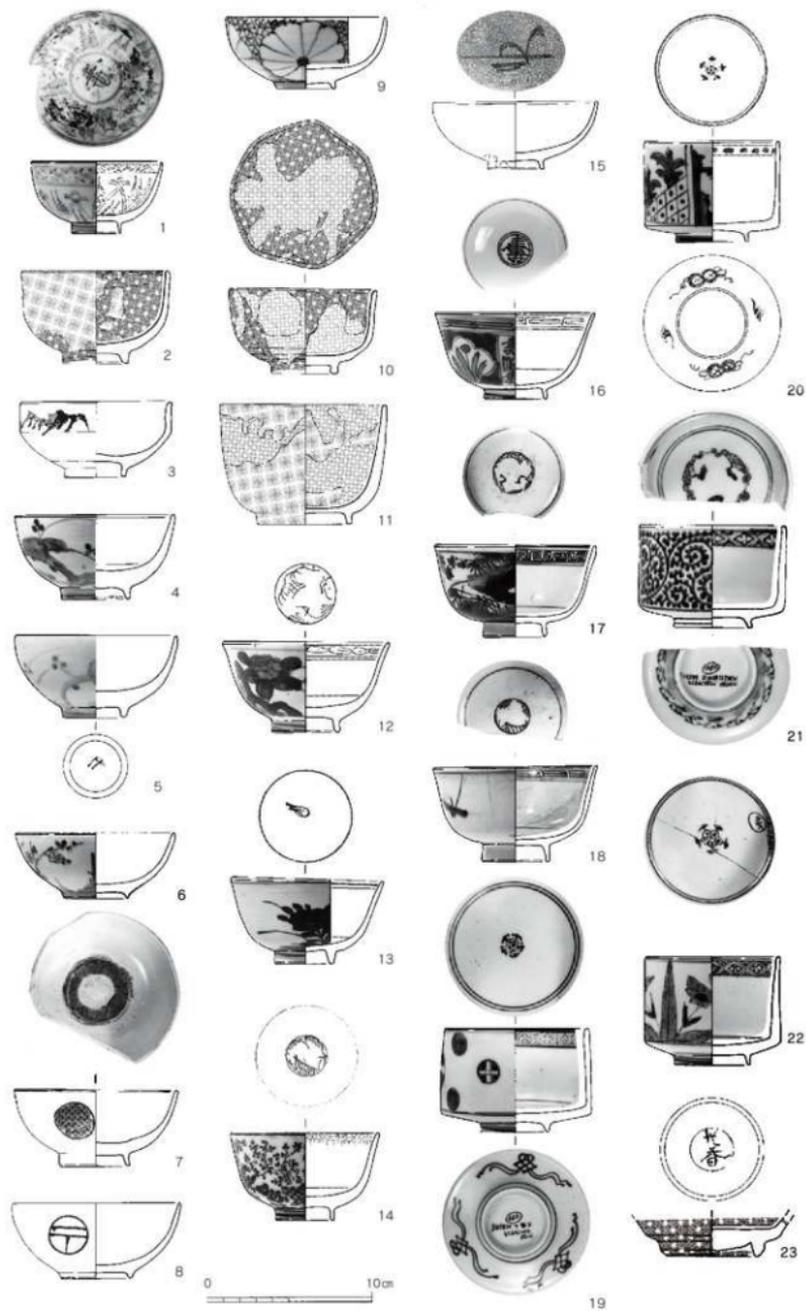
図版20-1～5は近代の攪乱土坑である20号土坑出土であったため、写真のみ掲載していた鋳型で、1は円盤形の上下の鋳型のうちの上型である。湯釜の鋳型であり、内部には製品が残ったまま廃棄されている。X線CTでスキャンしたところ、製品が確認されたがその鉄には素が多く入っており、取り出したとしても製品にならないことがわかった。これほど質の悪い鉄を使用したとは考えられないので、鋳型に問題があったのではなく、鋳造時の不具合が鋳型に流し込んだ段階で発見されたのではないだろうか。また、X線CTによると鋳型の上部の断面が2層になっていた。これは粘土が異なっていることを示しており、別の粘土を貼り付けたものと思われる。湯口に近いことから使用に欠損を補修した痕跡であろう。このことから1度鋳型として使用しており、それを再利用しようとしているので前回はこの鋳型で鋳出すことができたと見てよく、やはり弊に問題があったのだろう。また、外面の一部に鉄部が露出しており、X線CTスキャンでは製品部分から棒状の鉄部が伸びているように見えた。湯釜に取り付けるものとも考えられず、上面の釜口縁部に湯口があるので、ガス抜きには近すぎる。現段階ではこの小さな管状の鉄部の機能はわからない。



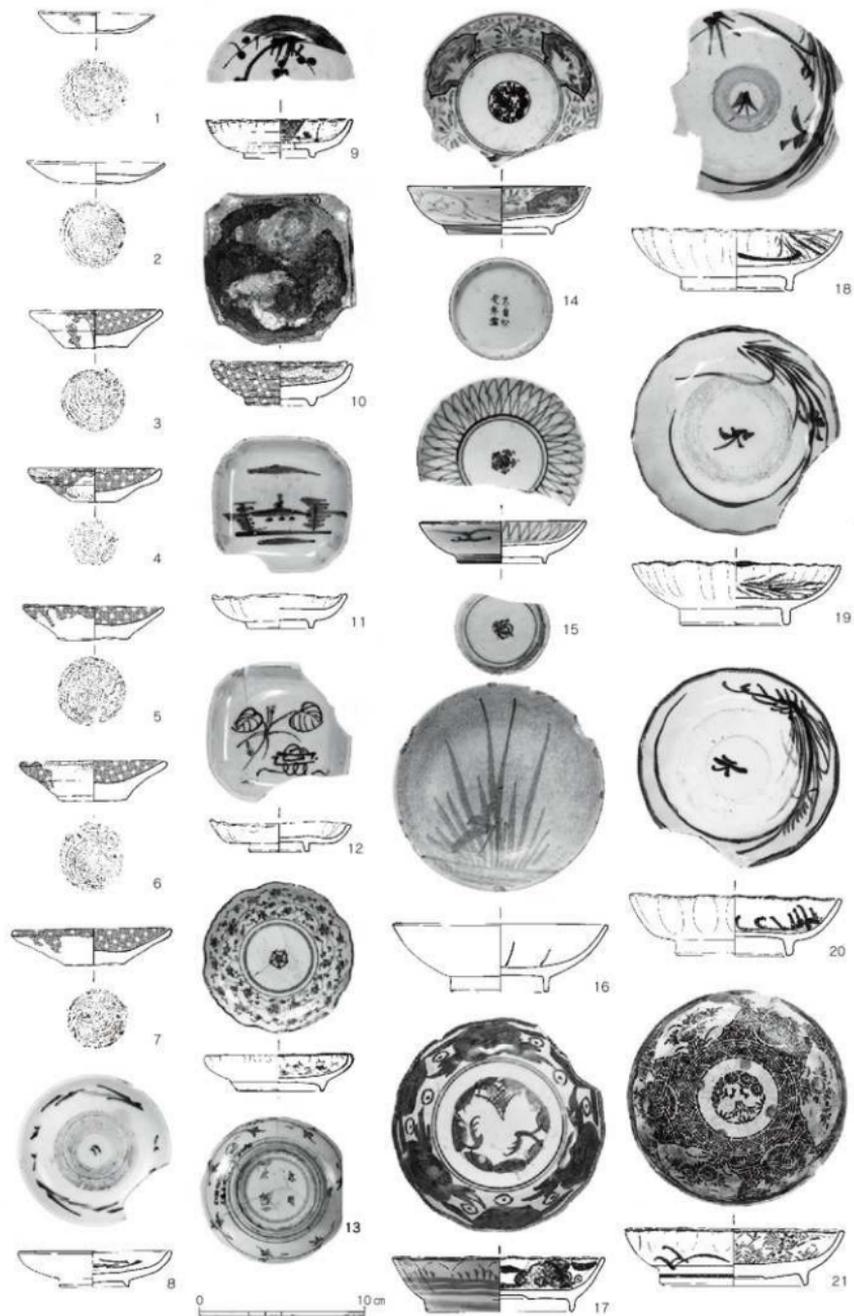
第93図 1次調査8・9号埋藏出土土器・磁器実測図(5は1/4、他は1/3)



第94図 1次調査1号大溝出土土器・陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3)



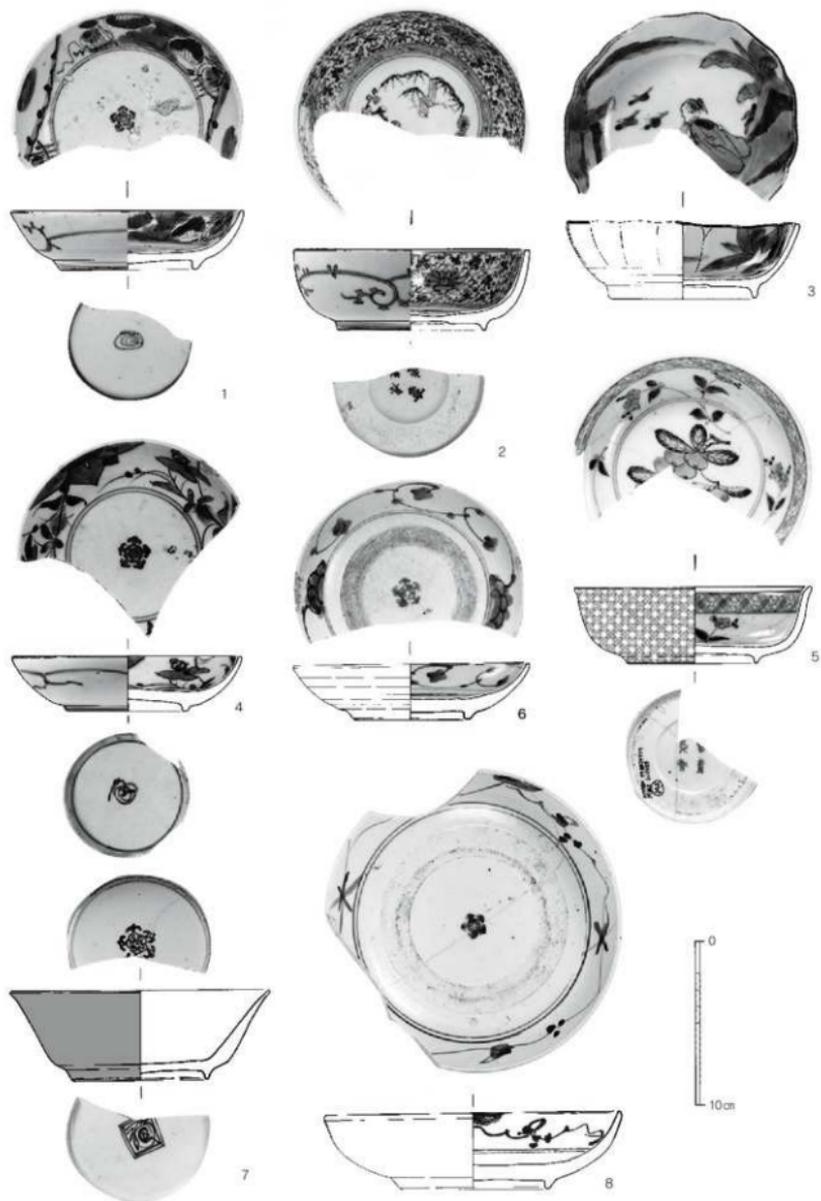
第95図 1次調査2号大溝出土陶磁器実測図1(1/3)



第96图 1次調査2号大清出土陶磁器実測図2 (1/3)

表43 1次調査出土土器・陶磁器観察表16

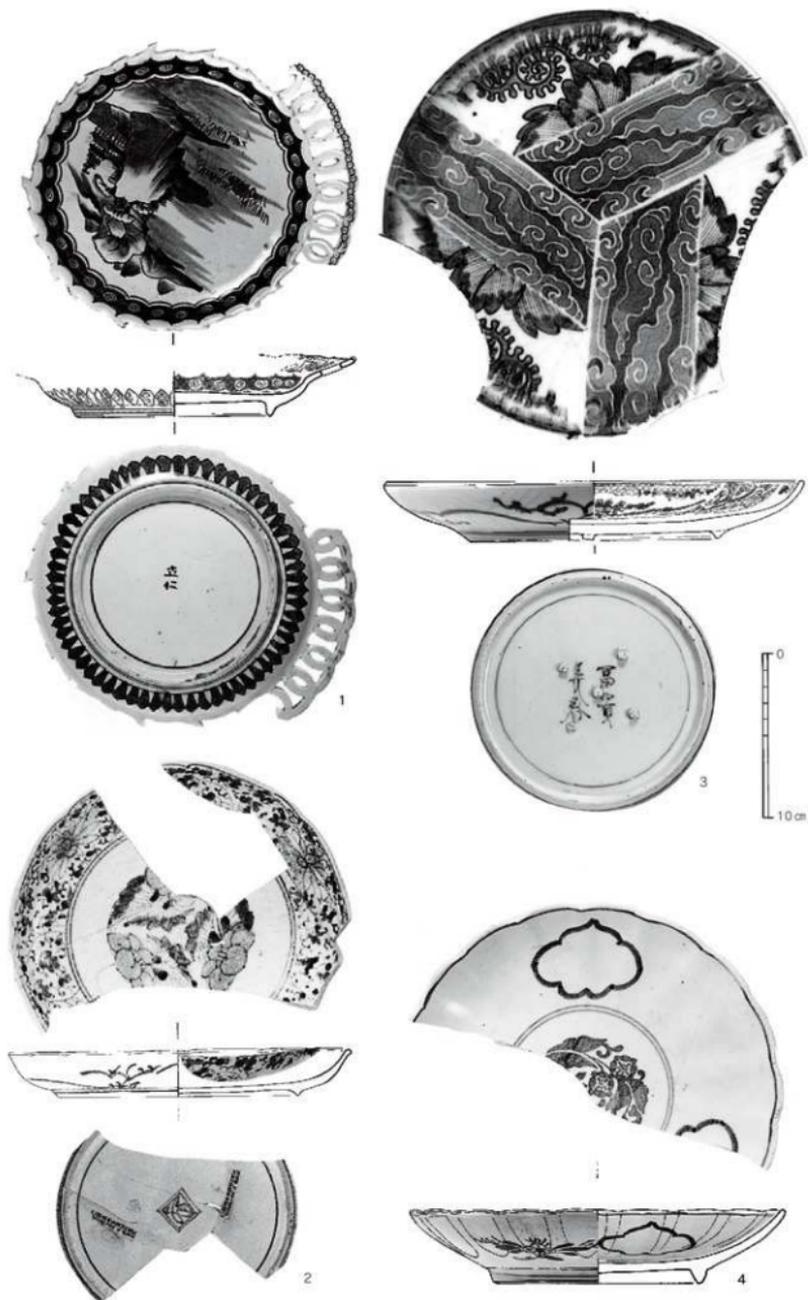
遺物名 検出番号 図録番号	器種 形状 通称名	量量(cm) ( )は復元部	釉の種類	釉薬	調整・整形・裝飾技法	窯造り技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大溝1 94図1	碗 94図1	口径11.3 高台径4.6 高さ6.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に草葉文を須弥染付	貫付輪漉し	不明	肥前	1690 S 1720
大溝1上層 94図2	小皿 94図2	口径12.50 高径4.4 高さ3.1	陶器 緑灰色	長石釉が内面から外面口縁部に掛かる 外底磨り出しで非目録		底澤澱粉	見込みは胎土目付着	不明	不明
大溝1 94図3	拍毬 94図3	—	土師質土器 灰色 磨光	—	内面ハケ状の横ナズ、外面は縦ハケ状、底澤は斜めのハケ	不明	外面磨り着しい	在池	不明
大溝1 94図4	鉢 半割漉 94図4	口径(38.0)	陶器 外面磨削紫灰褐色 ～内面磨削緑灰色	内外面鉄粒掛け 内面は発色不良	外面かき目と横ナズナキ目、内面同心門文目録	口唇部に貝目録		肥前	17世紀後半
大溝2北部上層 95図1	小皿 95図1	口径7.9 高台径2.8 高さ4.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面口縁部は実用四方障文、内面口縁部は変化格子目文等、内外変形雲草文の須弥染付	貫付輪漉し	9割残存	肥前	19世紀後半 S 20世紀前半
大溝2 95図2	碗 95図2	口径10.2 高台径4.0 高さ5.6	陶器 明黄灰色		黄褐色の灰釉全面の上に外面のみ灰白色の灰釉上掛け	貫付輪漉し		肥前	不明
大溝2南部3 95図3	碗 95図3	口径9.2 高台径3.8 高さ4.6	陶器 灰白色	外面は鉄粒と緑灰色の灰釉で竹置文、最後は外面割下位以下を除いて透明釉掛け 貫入あり		底澤澱粉		肥前	18世紀後半
大溝2 95図4	碗 くらわんか手 95図4	口径9.5 高台径3.9 高さ5.1	磁器 灰白色	釉・透明釉全面掛け	外面は花輪文、裏面に「大明」を須弥染付	貫付輪漉し		波佐見	1680 S 1700
大溝2北部中層 95図5	碗 くらわんか手 半球形 95図5	口径9.5 高台径(3.9) 高さ5.0	陶器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は花輪文、裏面に「大明」を須弥染付	貫付輪漉し		波佐見	1680 S 1740
大溝2北部中層 95図6	碗 95図6	口径9.4 高台径3.8 高さ4.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面は柳樹文・竹文を須弥染付	貫付輪漉し		肥前	1710 S 1750
大溝2 95図7	小笠筒 95図7	口径9.5 高台径4.3 高さ4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に赤絵の丸文、見込みは胎土目録漉して緑彩を塗布した上に胎地で花弁を嵌め、花弁の周囲に赤彩の影線、1口の土胎付し	高台内面に砂目付着		肥前	不明
大溝2 95図8	碗 95図8	口径10.2 高台径4.4 高さ4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面は郵便局の記号状の家紋文を手書き須弥染付	—		肥前	1710 S 1740
大溝2北部中層 95図9	碗 95図9	口径9.7 高台径3.6 高さ4.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は本聚文地に菊枝文を須弥染付	貫付輪漉し		肥前	1710 S 1750
大溝2 95図10	碗 95図10	口径8.4 高台径4.0 高さ5.1	陶器 灰白色	鉄粒を全面に掛ける、その上に墨灰釉を流し掛け 裏面はササエによる落みあり		貫付輪漉し	ほぼ完整	小石原	不明
大溝2北部 95図11	碗 95図11	口径10.2 高台径5.8 高さ7.3	陶器 灰白色	鉄粒を全面に掛ける、その上に墨灰釉を流し掛け		貫付輪漉し		小石原	不明
大溝2北部中層 95図12	碗 95図12	口径10.1 高台径4.1 高さ5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面は「牡丹」内面口縁部澱粉、見込みに附いた隈状松竹梅文をコバルト染付	貫付輪漉し		須恵焼か	19世紀中葉
大溝2北部上層 95図13	碗 95図13	口径9.2 高台径3.6 高さ5.3	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面は花文・縦文をコバルト染付	貫付輪漉し		肥前	19世紀中葉
大溝2北部上層 95図14 図録16	小笠筒 95図14 図録16	口径9.0 高台径3.6 高さ5.3	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け	外面赤に塗られた菊花と本木文、内面口縁部は唐文が雲間彫り、見込みは附いた隈状松竹梅文をコバルト染付	貫付輪漉し	完形	不明	19世紀後半
大溝2北部中層 95図15	碗 95図15	口径9.9 高台径3.4 高さ4.2	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底澤以外に全面掛け 貫入あり	見込みに鉄粒の山水文あり	底澤澱粉	京焼陶脚	肥前	18世紀中葉 S 18世紀後半
大溝2北部中層 95図16	碗 95図16	口径9.5 高台径3.6 高さ5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	口縁部は内外両端にぎつぎつ文帯、外面はゴシとの中に花弁形の墨文内花文とその間に「寿福寿」と「福寿福」が交互に入る。見込みに花文をコバルト染付	貫付輪漉し		肥前	19世紀中葉
大溝2北部 95図17	碗 95図17	口径9.8 高台径3.8 高さ5.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は唐文と花輪文、内面口縁部は唐文文、見込みは附いた隈状松竹梅文をコバルト染付、外面は金彩の上絵付け	貫付輪漉し	7割残存	肥前	19世紀後半
大溝2北部上層 95図18	碗 95図18	口径10.0 高台径4.1 高さ5.9	陶器 灰白色	やや暗い透明釉を全面に掛ける	外面は縦糸文と横文、内面口縁部はゴシに附いた唐文文帯、見込みに附いた隈状松竹梅文をコバルト染付	貫付輪漉し	5割残存	肥前	19世紀後半
大溝2北部中層 95図19	碗 95図19	口径8.7 高台径4.2 高さ6.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は丸の中に斜格子・龜甲などのモチーフが横かれる丸文散らし、体部下位は宝文、内面口縁部は雲文を須弥染付、見込みに5弁花文を須弥染付	貫付輪漉し	7割残存	肥前	1780 S 1810
大溝2北部中層 95図20 図録16	碗 95図20 図録16	口径8.2 高台径4.3 高さ6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は2分磨り、同じモチーフが横かれる。暫くを左廻りして、山を遠景に大石を右廻りして草花、体部下位は宝文、内面口縁部は珠文帯で、見込みに5弁花文を須弥染付	貫付輪漉し	ほぼ完整	肥前	1780 S 1810



第97图 1次調査2号大溝出土磁器実測図1(1/3)

表44 1次調査出土土器・陶磁器観察表17

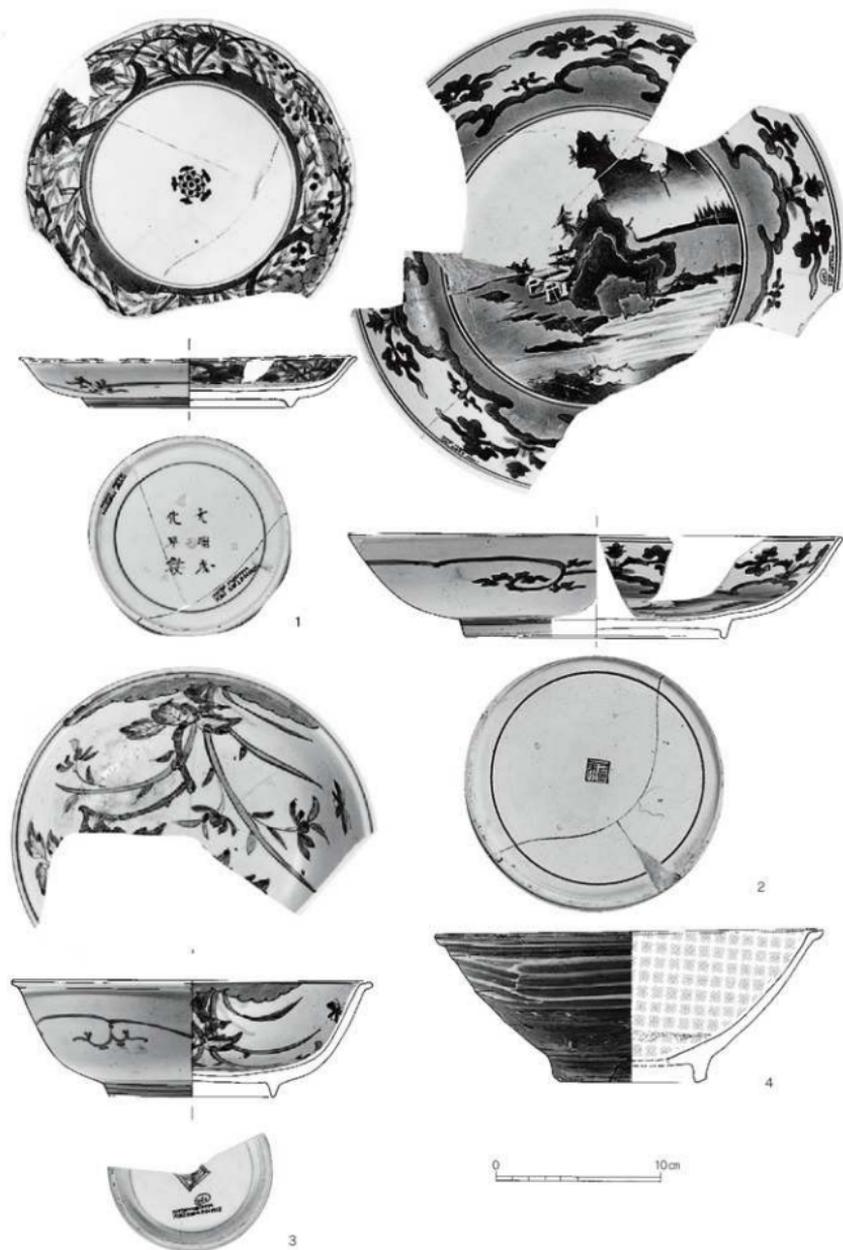
遺物名 調査番号 図版番号	遺物 形状 通称名	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰の技法	所 見		
							特記事項	推定産地 推定年代	
大洞2北部 95R21	碗 筒形	11F8.9 高台径4.7 脚高6.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に 掛ける	外面は船首草文 体部下位は不明モ チーフ、内面口縁部は四方障文帯で、 見込みに隈状樹文を乳白染付	髹付輪漕ぎ	5遺残存	肥前	1780 ～ 1810
大洞2北西部中層 95R22	碗 筒形	11F8.2 高台径4.6 脚高6.5	磁器 灰白色	やや暗い透明釉 を全面に掛ける	外面は4分割され、3つ葉の花文と丸 い葉のつづ草文が同じモチーフが対面 に描かれ、内面は口縁部は裏波帯で、 見込みに5弁花文を乳白染付	髹付輪漕ぎ	5遺残存	肥前	1780 ～ 1810
大洞2北西部中層 95R23	碗	高台径5.8	磁器 灰白色	青磁釉	高台内へう閉り 見込みに片切り菊の 甲の中に、毛彫りで丸の中に「大春」	髹付輪漕ぎ		鹿泉堂	不明
大洞2北西部上層 96R1	小皿	11F7.1 底径4.2 脚高1.3	土師質土器 光沢のため不 明	—	外底赤切り 外面ナデ 内面隈状ナデ	内面口縁部と胴部の 境界が境成不良なのは 重ね焼きのため	外面口縁部 に灰存部	漆油焼	不明
大洞2北西部中層 96R2	小皿	11F8.4 底径3.9 脚高1.3	土師質土器 黄白～黄褐色	—	内外隈状ナデ 外底赤切り	不明	赤変は境成 が激いため	漆油焼	不明
大洞2北西部中層 96R3	小皿	11F8.1 底径3.8 脚高2.3	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から 外面新緑まで	外底赤切り	内面に同じ部種の 底部の大ききの重ね 焼き		肥前	不明
大洞2 96R4	小皿	11F8.2 底径2.9 脚高2.1	陶器 よい橙灰色	黄色の悪い鉄 釉が内面から外面 口縁部に掛かる	外底赤切り 内外面ナデ	底面露胎	口縁部の一 部に灰存部	不明	不明
大洞2北西部中層 96R5	小皿	11F8.6 底径4.0 脚高2.2	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から 外面新緑まで	外底赤切り	不明		肥前	不明
大洞2北西部上層 96R6 図版16	小皿	11F8.5 底径4.2 脚高2.5	陶器 橙褐色	鉄釉が内面から 外面口縁部に掛 かる	外底赤切り 内外面ナデ	底面露胎 胎土目跡 あり	口縁部の打ち 欠き部に 灰存部	不明	不明
大洞2北西部中層 96R7	小皿	11F8.7 底径3.6 脚高2.3	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から 外面新緑まで	外底赤切り			肥前	不明
大洞2北西部上層 96R8	小皿	11F9.2 高台径3.8 脚高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に 掛ける	内面は植物文、見込みに葉文か 乳白 染付	髹付輪漕ぎ 見込みに 蛇の目輪漕ぎ	蛇ノ目輪漕 肥前 鹿島嶽と磯 焼片あり	19世紀中葉	
大洞2北西部中層 96R9	小皿 菊花形	11F8(8.9) 高台径4.3 脚高2.3	磁器 灰白色	黄色不良の透明 釉 全面	型打ち成型 見込みに樹文のフォル ト染付	髹付輪漕ぎ		肥前か	19世紀中葉
大洞2 96R10 図版16	小皿 菱形小皿 方形	一辺8.6 高台径5.9 脚高2.7	陶器 暗灰色	鉄釉を全面掛け た上に、内面灰白色の曇灰焼直し掛け		髹付輪漕ぎ		肥前	不明
大洞2北西部中層 96R11	小皿 菱形小皿 方形	一辺8.2 高台径4.0 脚高2.1	磁器 灰白色	やや暗い透明釉 全面掛け	赤切り組工の型押し成型で、見込みに 山文文を乳白染付	髹付輪漕ぎ		肥前	19世紀中葉
大洞2北西部上層 96R12	小皿 菱形小皿 方形	一辺8.5 高台径3.7 脚高1.9	磁器 灰白色	やや暗い透明釉 全面掛け	赤切り組工の型押し成型で、見込みに 山手葉文と宝文をフォルト染付	髹付輪漕ぎ	へたれている	肥前	19世紀中葉
大洞2 96R13	小皿 花弁形	11F8.8 高台径4.4 脚高2.1	磁器 灰白色	透明釉 全面掛 け	型作りで、花弁形に成型、内外面は花 碧草文、見込みは5弁花文、裏面は「大 明化朝」を乳白染付 1筋あり	髹付輪漕ぎ		はば実形	肥前 1680 ～ 1700
大洞2北西部 96R14	散手 散手	11F11(5) 高台径6.5 脚高2.9	磁器 灰白色	透明釉 全面掛 け	外面無葉草文、内面は割漕に染付の 雲形意匠の赤土金彩の花文、その間に は黒土赤と緑彩の花葉文、見込みに 赤彩の散手文帯と中心に染付の花鳥舞 と鳥文、外底の裏面は「大明成化年號」 を乳白染付	髹付輪漕ぎ 砂目付 筋		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀前半
大洞2北西部 96R15	小皿	11F10.1 高台径7.3 脚高2.6	磁器 灰白色	やや暗い透明釉 全面掛け	外面は唐草文、内面は緞目文、見込みに は5弁花文、裏面は裏波を乳白染付	髹付輪漕ぎ 砂目付 筋	7遺残存	肥前	1680 ～ 1740
大洞2北西部上層 96R16 図版17	5寸皿 筒形	11F13.1 底径6.0 脚高4.1	磁器 灰白色 やや粗粒	透明釉全面掛け 掛ける	外面鳥文、見込みに水草文をフォルト 染付	髹付輪漕ぎ		不明	19世紀後半
大洞2北西部上層 96R17	小皿 菊花形	11F12.7 高台径8.7 脚高3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に 掛ける	型打ち成型 外面水面文か 内面花 文、見込みに隈状の不明文 口縁部に フォルト染付	蛇ノ目高台で、台座 輪漕ぎ 見込みにハ リ目跡5つあり		肥前	19世紀後半
大洞2北西部 96R18	小皿 5寸皿 菊花形	11F12.7 高台径6.8 脚高3.8	磁器 暗い灰白色	透明釉 全面	型打ち成型 葛葉文と見込みに龍文、 口縁部にフォルト染付	髹付輪漕ぎ 見込みに蛇ノ目輪漕 ぎ		肥前か	19世紀中葉
大洞2北西部 96R19	小皿 5寸皿 菊花形	11F12.6 高台径6.7 脚高3.9	磁器 灰白色	透明釉 全面	型打ち成型 水草文と見込みに龍文、 口縁部にフォルト染付	髹付輪漕ぎ 見込みに蛇ノ目輪漕 ぎ		肥前	19世紀中葉
大洞2北西部 96R20	小皿 5寸皿 菊花形	11F12.8 高台径7.1 脚高3.7	磁器 灰白色	透明釉 全面	型打ち成型 水草文と見込みに龍文、 口縁部にフォルト染付	髹付輪漕ぎ 見込みに蛇ノ目輪漕 ぎ		肥前	19世紀中葉
大洞2北西部上層 96R21	5寸皿 菊花形	11F13.1 底径6.0 脚高3.5	磁器 灰白色 やや粗粒	透明釉全面掛け 境成不良	型打ち成型 外面草文、内面雲緞漕、 牡丹文地に碧内帯花文、見込みに隈状 松竹梅文で、口縁部に乳白染付	高台内蛇ノ目輪漕ぎ 見込みにハリ目跡4 つあり		浜佐見か	19世紀後半



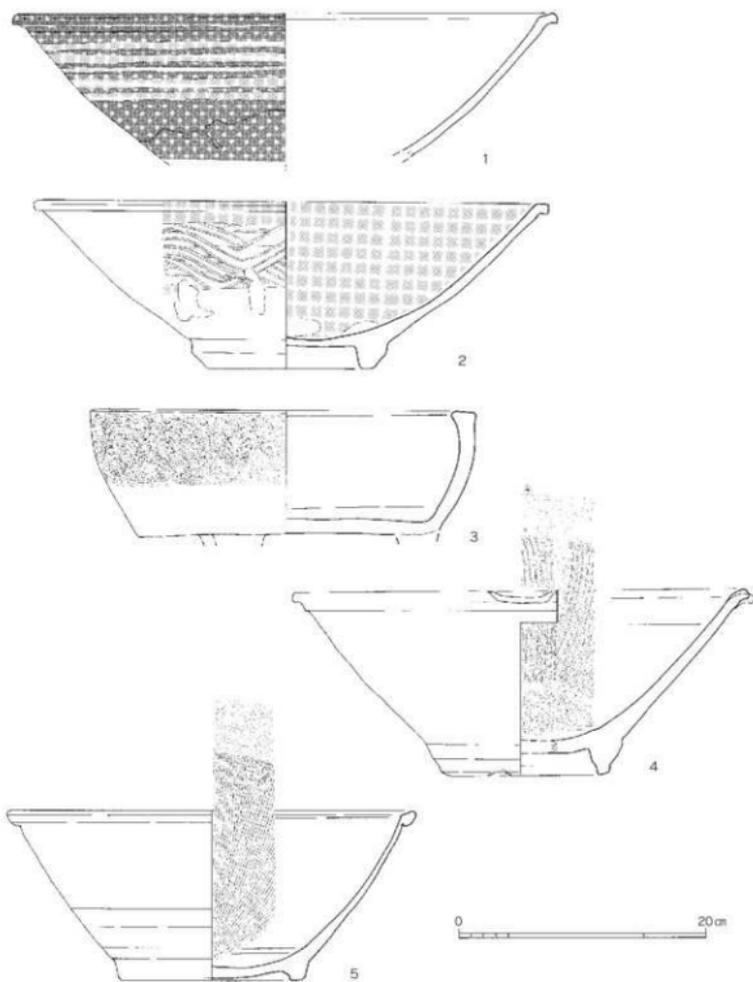
第98图 1次調査2号大溝出土磁器実測図2(1/3)

表45 1次調査出土土器・陶磁器観察表18

遺物名 検出番号 図版番号	形状 通称名	直径(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	産出産地	測定年代
大溝2北部 97001	小皿 5寸皿 5.6x6.5寸	口径14.1 高台径8.4 器高3.6	磁器 灰白色	明い透明釉 全面 掛け	外面は唐草文、内面は平花輪文と蔓文、 見込みは5弁花文、裏面は渦渦を供須染付	費付輪調子	5箇横文 見込みにひつ きあり	波佐見	1680 S 1740
大溝2北部 97002	小皿	口径14.2 高台径9.0 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け	外面は唐草文、内面は花唐草文、見込み は扇状牡丹文、裏面は高貫長巻を供須 染付 遺書あり	費付輪調子	蛇ノ目高台で、 白部は 裏割	肥前	1740 S 1780
大溝2 97003	小皿 5寸皿 5.6x6.5寸	口径14.0 高台径9.0 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け	費打ち成型 内面は山水文と鳥・人物文 を供須染付 口縁あり	費付輪調子	蛇ノ目高台で 白部輪調子	肥前	1810 S 1860
大溝2北部 97004	小皿 5寸皿 5.6x6.5寸	口径13.8 高台径7.2 器高3.4	磁器 灰白色	やや明い透明釉 全面掛け	外面は唐草文、内面は桔梗文、見込みの 5弁花文はコネクチャ印判刷り 裏面は 渦渦を供須染付	費付輪調子 砂 目付君	口縁部は斜めに平 担面もつ花弁 で、表いもの之 知いものがある	波佐見	18世紀中葉
大溝2 97005	小皿	口径14.3 高台径7.8 器高4.6	磁器 灰白色	外面は青磁釉、外 底と内面は透明釉 を掛ける	内面は緑染雲形四方唐文、胴部は花文、 見込みは梵文、裏面は高貫長巻を供 須染付	費付輪調子	蛇ノ目高台で、 白部輪調子	肥前	18世紀前半
大溝2北部中割 97006	小皿 5寸皿 5.6x6.5寸	口径14.3 高台径7.2 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け	外面は額文、内面は平帯唐草文、見込み は5弁花文のコンネクチャ印判刷りの供 須染付	費付輪調子 見 込み蛇ノ目輪 調子		波佐見	1680 S 1740
大溝2北部 97007	小皿	口径15.8 高台径8.3 器高5.5	磁器 灰白色	内面青磁釉、外面 内面透明釉、裏面 あり	見込みは5弁花文、裏面渦渦を供須染付	費付輪調子		肥前	18世紀後半
大溝2北部中割 97008	中皿	口径18.0 高台径9.1 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉 全面	内面に花文と唐草文 見込みに5弁花文 を供須染付	費付輪調子 見 込みに蛇ノ目 輪調子	蛇ノ目輪調子 波 佐見に 重ねぬき痕	波佐見	1680 S 1740
大溝2 98001	中皿	口径21.8 高台径11.8 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉 全面	口縁部は切り抜きによる透かしで、外面 舞伎唐文等、内面は緑染雲形蓮散人文、 見込みに墨引きの扇状文と山水文 裏面 は「立仁」をコナルト染付	費付輪調子	「立仁」は立林仁 蔵の略	石田 立林堂	19世紀末
大溝2北部中割 98002	中皿 花卉1口縁	口径20.7 高台径14.5 器高5.9	磁器 明灰白色	黄色不良の透明釉 全面掛け	費打ち成型 外面は唐草文、内面は花唐 草文、見込みに扇状牡丹文、外底の渦 渦は渦渦を供須染付	費付輪調子 砂 目付君 ハリ目 輪2つ外底に あり 位置関係 から本来3つか つ		肥前	1680 S 1700
大溝2 98003	中皿	口径25.6 高台径15.0 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面部は唐草文、内面は額唐草文と蔓文、 書文が横写りに配置されている。裏面 は高貫長巻を供須染付	費付輪調子 ハ リ目跡5つあり		肥前	18世紀前半
大溝2北部 98004	皿 花卉口縁	口径22.7 高台径12.6 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け 黄色不良で乳白 色を呈する	費打ち成型 外面は扇を延びきない七宝 文の花唐草文、内面は緑染雲形唐文、 見込みに墨引りの花文を供須染付	費付輪調子 ハ リ目跡の有無は 不明		肥前	1680 S 1740
大溝2北部上割 98001	中皿 花卉1口縁	口径20.4 高台径12.4 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け	費打ち成型 外面は唐草文、内面は色竹 梅文、見込みに5弁花文、外底の裏面は 「大明成化年製」を供須染付	費付輪調子 ハ リ目跡5つ外底 にあり		肥前	1740 S 1780
大溝2北部上割 98002	大皿	口径40.0 底径21.1 器高8.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	内面に花唐草文、見込みに山水文、外面 は唐草文、裏面は「龍」を供須染付	費付輪調子 ハ リ目跡5つあり		肥前	1740 S 1780
大溝2北部中割 98003	鉢	口径21.7 高台径10.0 器高7.0	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け 貫入あり	外面は唐草文、内面は纏と牡丹文、裏 面渦渦を供須染付	費付輪調子 砂 目付君		肥前	1700 S 1740
大溝2北部上割 98004	鉢	口径31.6 高台径12.4 器高12.0	陶器 暗紫灰色	内外白化粧土を掛けた後、外面上半は 鉄釉ハケ掛け、内面から外面上半に 透明釉を掛ける		費付輪調子 見 込みみに砂目 跡付君	外面の一部に白 化粧土・鉄釉・ 透明釉のすべて が配て着がれて いる	肥前か	19世紀代か
大溝2北部中割 100001	大鉢	口径44.2	陶器 外面上段以下は暗紫 灰色、外面上段から 内面は黄白灰色	外面上段以下に鉄釉をハケ掛けした後、外面上半に白化粧 土を塗布して帯状縁取りし、最後に透明釉を内面から外面 胴中央まで掛ける		不明		不明	1690 S 1750
大溝2 100002	大鉢	口径41.38 高台径15.8 器高13.7	陶器 暗褐色	内外に鉄釉をハケ掛けした後、外面上半に白化粧土を塗布 して帯状縁取りし、内面から外面1/3部まで白化粧土をハケ 掛けする		見込みに鉄土目跡が7つあり、費 付けに鉄土目跡が4つ残っている 鉄土目跡が3つあり本来は7つだった		肥前か	1690 S 1750
大溝2北部中割 100003	大鉢	口径31.3 底径24.4 器高10.5	瓦葺土 灰白・淡褐色白化粧が 黄色を抜く	—	内面黒染、口縁 部に黒染	不明	不明	不明	不明
大溝2北部中割 100004	煎鉢	口径37.6 高台径13.8 器高15.5	陶器 暗褐色	内外面鉄釉掛け	割り目は10本単位 外面上半ナズ、下 半ナズ	見込みに蛇の目 焼き重ねぬき 費 付輪調子後高台 に砂目跡		肥前	1750 S 1860
大溝2北部上割 100005	煎鉢	口径30.2 高台径15.2 器高13.8	陶器 暗紫灰色 裏面だけ 表面釉なし	鉄釉を全面に掛ける	裏面赤切り 割り目は20本単位	裏面裏割 見込 みに扇状の砂目 跡付君	上半の裏割が赤 面に薄い 裏面 は裏ぬきのため 黄色不良	肥前	19世紀後半
大溝2北部中割 101001	煎鉢	口径34.0 高台径14.4 器高14.8	陶器 暗褐色	鉄釉は外面下半に ハケ掛けした後、 外面上半に厚掛け	外面上半はナズ、下半分はナズ 割 り目は11本単位	見込みに蛇の目 焼き重ねぬき 費 付輪調子		肥前	1750 S 1860
大溝2北部中割 101002	煎鉢	口径37.2 高台径13.6 器高15.2	陶器 暗褐色	鉄釉全面掛け	外面上半分はナズ、下半分はナズ 割 り目は13本単位	見込みに蛇の目 焼き重ねぬき 費 付輪調子後高台 に砂目跡		肥前	1750 S 1860
大溝2北部 101003	煎鉢	口径27.0 高台径13.6 器高14.3	陶器 暗褐色	内外面鉄釉掛け	割り目は15本単位 中位に横に入る 外面上半ナズ、下半ナズ	費付輪調子 見 込みみに帯状重 ぬき痕あり		肥前	1750 S 1860
大溝2北部上割 101004	煎鉢	口径38.0 高台径8.3 器高15.0	陶器 暗紫灰色	鉄釉を全面に掛ける	裏面赤切り 割り目は18本単位以上	裏面裏割 見込 みに扇状の砂目 跡付君	上半の裏割が赤 面に薄い	肥前	19世紀後半

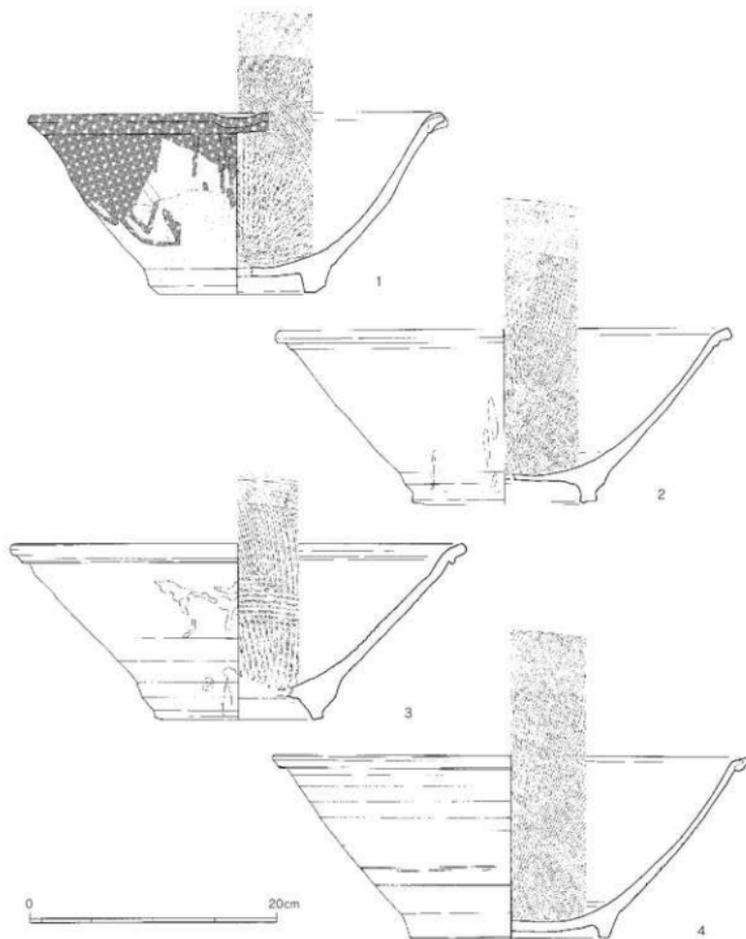


第99图 1次調査2号大清出土陶磁器実測図3(1/3)

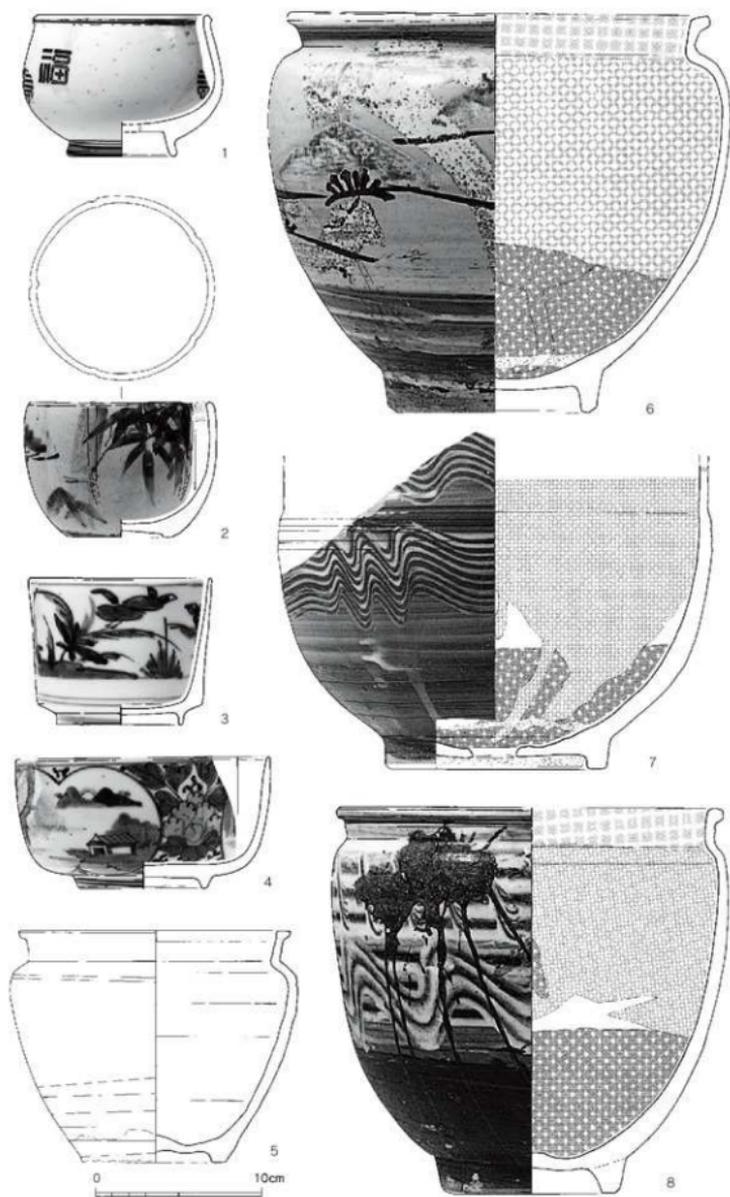


第100図 1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図1(1/4)

欠損して剥がれた部分から、製品の表面らしい鉄錆の広がりが見られ、剥がれた部分の中子と鋳型表面の間には炭化物が存在し、製品の離脱を促す素材であったものと思われる。『大川市の民俗』の榎津地区の調査報告によると、鋳物屋では中子を外れ易くするため、白で搗いて粉にした炭の粉を水で溶いて、刷毛で中子の表面に塗り、炭火で乾燥させ、この作業を繰り返して器表面

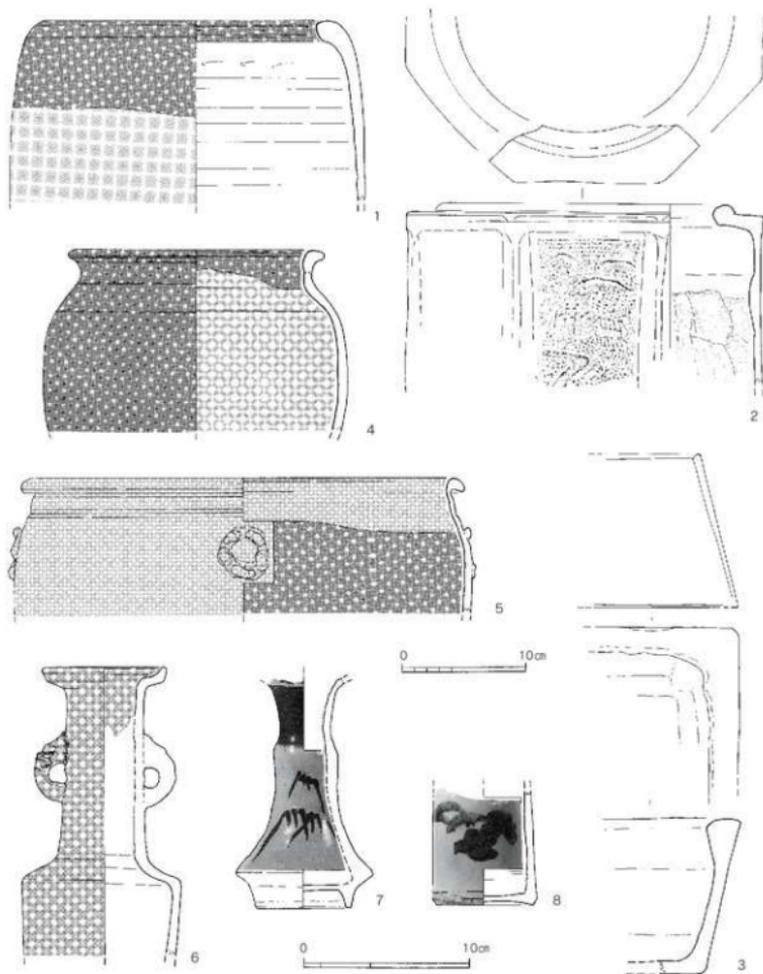


第101図 1次調査2号大清出土陶器実測図(1/4)



第102图 1次調査2号大清出土陶磁器実測図4(1/3)

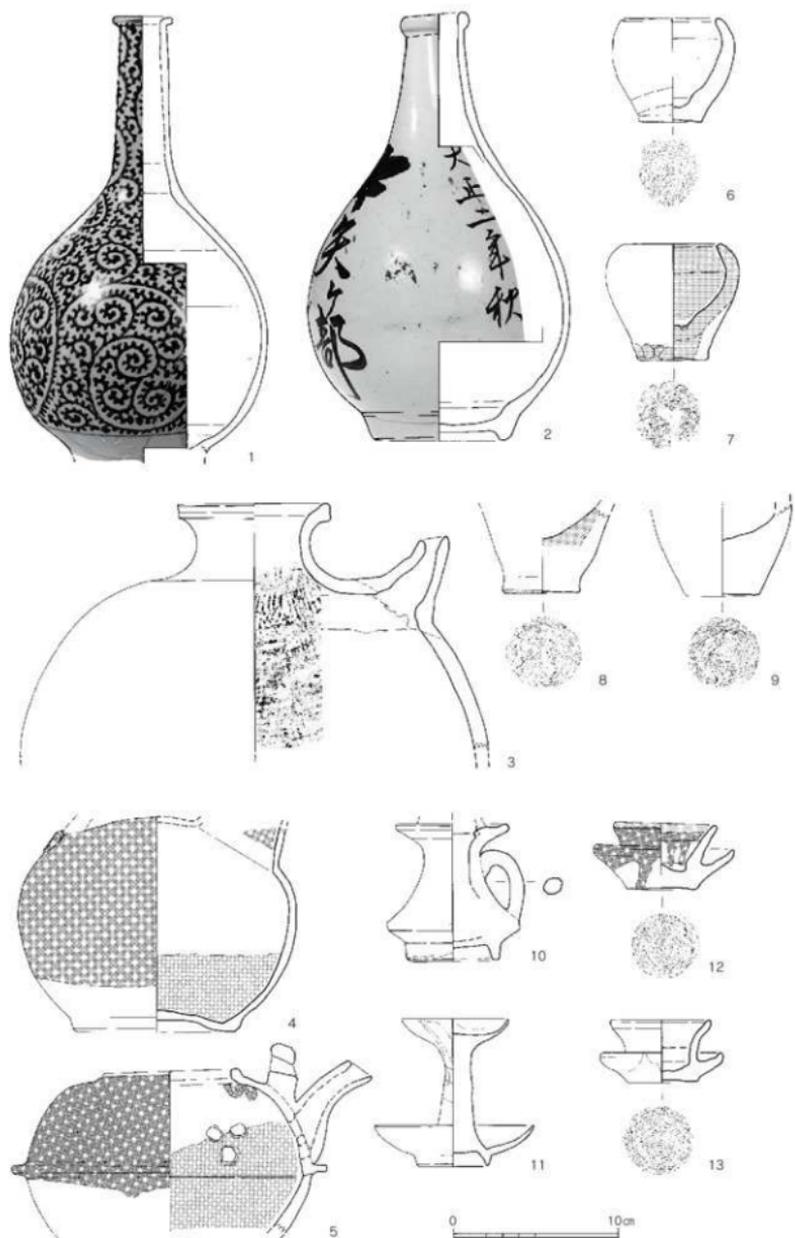
をなめらかに仕上げたとある(引用文献2)。図版20-3の鋳型内面の×形沈線は中子を外しやすくするための加工ではなく、鋳出されて陽刻になる文様だろう。この鋳型によって鋳出された製品と思われるものに3次調査1号溝出土の湯釜がある(『矢加部町屋敷遺跡1』72図2)。



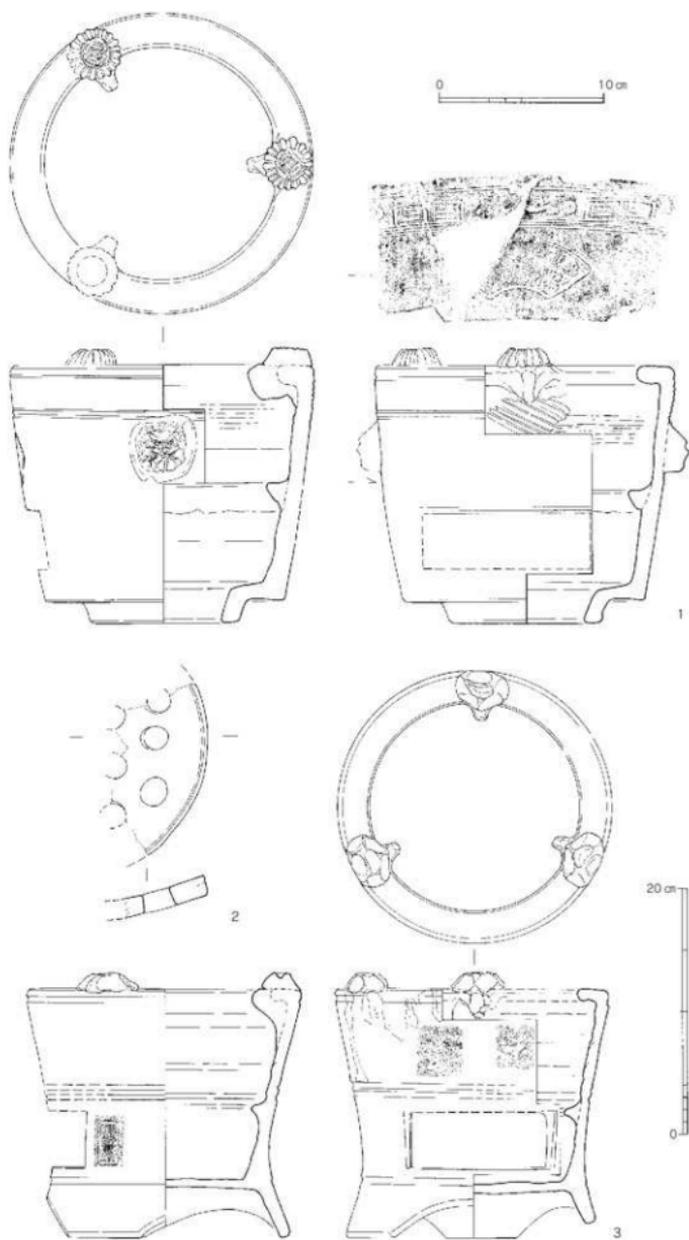
第103図 1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図2(5は1/4、他は1/3)

表46 1次調査出土土器・陶磁器観察表19

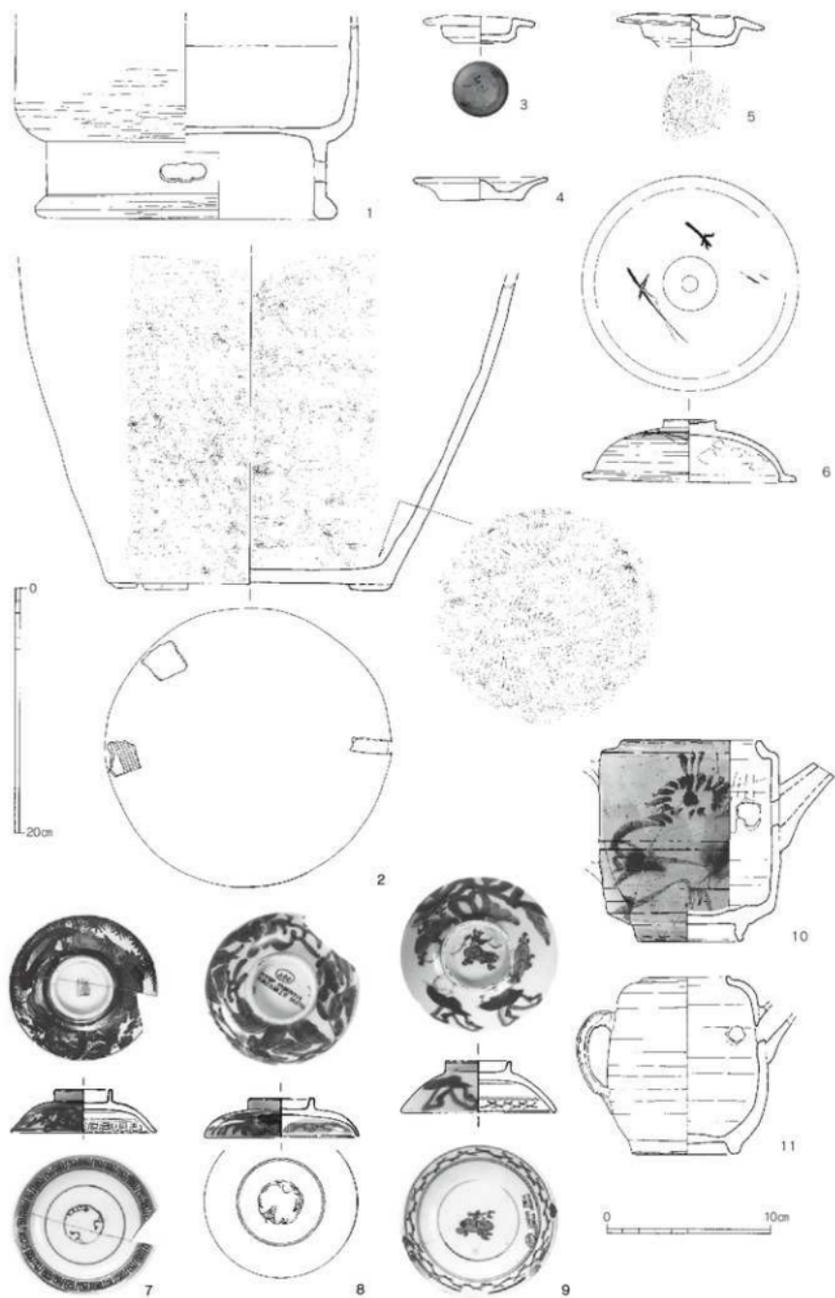
遺物名	器種	法量(cm)	胎の産地	胎土	調整・彫形・装飾技法	装飾の技法	所 見			
							特記事項	推定産地	推定年代	
大溝2上層包合層 102081	鉢	口径10.8 高台径6.6 器高8.6	磁器	灰白色	透明釉を全面に掛ける。貫入あり	外面コバルトの京線を施した後、透明釉を全面掛け、最後に外面に黒縁刷りで茶彩で"龍、緑彩で"舟"を上絵付け	貫付輪割ぎ	肥前	20世紀前半	
大溝2北部中層 102082	花弁鉢	口径11.2 底径6.2 器高6.1	陶器	灰白色	帯打り成型で、外面は白化粧土の上に乗鉄の竹笹文をいれ、内面割下位から外面に透明釉を掛ける。外面はその上緑・紺色で絵文を上絵付け。透明釉には貫入あり	底面露胎	外底の胎にざらつきあり 内面変色なし	不明	不明	
大溝2北部 102083	蓋物	口径11.0 高台径7.4 器高8.8	磁器	灰白色	透明釉 全面掛け	外面は花草文 貫筋染付	口縁部内面輪割ぎ	肥前	18世紀前半	
大溝2北部中層 102084	蓋物	口径15.2 高台径7.5 器高7.9	磁器	灰白色	透明釉 全面掛け	外面は割下位に牡丹文地に、意文内山水文を貫筋染付	貫付輪割ぎ	外面に磨ぎした割割の縁あり	18世紀中葉 Y 19世紀前半	
大溝2北部中層 102085	小壺鉢	口径16.2 高台径8.7 器高13.0	陶器	褐色〜暗紫灰色	鉄釉を外面全面掛け		割下位から高台に砂目付着	内面にカキ目付着	肥前	18世紀後半 Y 19世紀中葉
大溝2上層 102086	平割鉢	口径25.2 高台径10.6 器高23.7	陶器	灰褐色	内外割下位は鉄釉ハケ掛け、内外割下位まで鉄釉を掛け、外面割下位から内面割部まで白化粧土ハケ掛けし、外面割下位は帯状焼き取り。最後に外面に鉄釉と緑彩と胎釉を鉄釉を上絵付け	貫付輪割ぎ	高台に砂目付着。見込みに胎状の砂目付着	白化粧土の上には透明釉を掛けていない	肥前	18世紀後半 Y 19世紀中葉
大溝2 102087	平割鉢	高台径13.3	陶器	褐色	内外割下位は鉄釉ハケ掛け、外面割下位には白化粧土ハケ掛けし、外面割下位は帯状・帯状焼き取り後、内外割下位までオリープ色の灰釉を掛ける	貫付輪割ぎ	高台内面に砂目付着。見込みに胎状の砂目付着	底面の穿孔は焼成後なので、挿本に再利用している	肥前	18世紀後半 Y 19世紀中葉
大溝2上層 102088	平割鉢	口径23.0 高台径10.6 器高23.1	陶器	暗灰茶褐色	内外割下位は鉄釉ハケ掛け、内外割下位までオリープ色の灰釉を掛け、外面割下位から内面割部まで白化粧土ハケ掛けし、外面割部は帯状焼き取り。最後に前面に鉄釉を掛ける	貫付輪割ぎ	高台に砂目付着。見込みに胎状の砂目付着	白化粧土の上には透明釉を掛けていない	肥前	18世紀後半 Y 19世紀中葉
大溝2北部 103081	火鉢	口径17.0	土師質土器	褐色。金葉母を多く含む	—	外面から内面口縁部は単位がわからないほど丁寧な加工。外面はオリープを掛け、口縁部は黒赤紫で光沢をもちつ	不明	内面上半は使用変色あり	在池	不明
大溝2 103082	火鉢	口径18.0 最大径21.3	瓦葺土器	灰白色	—	外面は磨りしによる方眼型山水文の陰彫、内面は口縁部は回紋ナゲ、割部はハケ状工具によるケズリ	不明	変色は内底中央のみある	在池	不明
大溝2北部中層 103083	方形鉢	器高9.4	土師質土器	褐色。金ウレキを多く含む	—	外面と割部の接合部内面は板状工具で放射状にオサエている。外面はオリープを掛けて丁寧な加工。高台割部に雲形透かし孔の面がある	不明	変色は内底中央のみある	在池	不明
大溝2 103084	小壺鉢	口径15.4 器高18.4	陶器	灰〜灰白色	内面鉄釉を塗布し、胎釉外面から内面口縁部まで掛ける	口縁部外面の積み目は、磨かれていない部分もあるが意図的なものか不明	口唇部露胎後、アルミ塗布	小石原	不明	
大溝2北部上層 103085	蓋	口径36.0	陶器	灰白色	内外面に鉄釉を掛けた後、胎釉を全面に掛ける	割部内面に雲形彫の流し掛け後、花弁浮文貼り付け	口唇部中央のみ輪割	小石原	不明	
大溝2 103086	瓶	口径7.6	磁器	灰白色	外面から内面口縁部は青釉、内面割部以下は透明釉	其部は磨りし成形で、人物の顔が陶刻されている	—	肥前	不明	
大溝2 103087	仏花瓶	高台径5.8	陶器	灰白色	鉄釉を内内口縁部、割下位はオリープ色の灰釉を掛け、外面割中に竹笹文を鉄釉で描いて、外面割中位から高台まで透明釉を掛ける		貫付輪割ぎ	肥前	1710 Y 1740	
大溝2北部中層 103088	灰吹き	底径5.8 最大径6.3	陶器	灰白色	外面に白化粧土を塗布した上に鉄釉の竹笹文と赤紫色の不明セラーが、内面割下位は鉄釉、最後に外面と内面口縁部、見込みに透明釉 貫入あり		底面露胎	外底の胎にざらつきあり	17世紀後半 Y 18世紀前半	
大溝2北部中層 104081	瓶	口径3.6 最大径15.5	磁器	灰白色	透明釉全面掛け	外面は納言草文 貫筋染付	不明	肥前	1650 Y 1690	
大溝2北部中層 104082	瓶	口径4.1 高台径8.4 器高26.1	磁器	灰白色	透明釉を内面割部から外面に掛ける	外面割部に「中央ヶ部」「大正二年秋、長興田商店」「店口」をコバルト染付	貫付輪割ぎ	肥前	大正二年	
大溝2 104083	変形鉢	口径9.2	陶器	外面に黒灰色、それ以外は暗紫灰色	鉄釉全面掛け	内面に格子目タテが当て貫入あり 口はに格子目成形	—	底面は欠損しているが、平底の胎形だと思われる	1690 Y 1780	
大溝2上層 104084	灰瓶	口径16.8 底径10.1	陶器	灰白色	割線紋を外割中位位位から内面に掛け、内底は鉄釉掛け	外底は磨り出しで帯筒状を見出す	底面露胎	内面にカキ目付着	肥前	19世紀後半
大溝2北部中層 104085	土瓶	口径8.1	陶器	灰白色	胎釉を外面割下位から口縁部、内面は帯状・帯状焼き取り	外面割下位はケズリ、割下位は磨りし成形らしくオサエがある。肥手は磨りし成形。割中位内面には接合線跡が未調整で残る	口唇部輪割ぎ	内外使用変色なし	小石原	不明
大溝2北部中層 104086	地蔵皿	口径5.5 高台径4.4 器高3.3	土師質土器	灰褐色	—	外底未切り 内外面ナゲ	—	胎土の赤褐色	在池	不明
大溝2北部中層 104087	地蔵皿	口径6.0 底径4.1 器高6.0	土師質土器	灰白色	—	外底未切り 内外面ナゲ 内底中央部は工具跡の窪みがある	—	胎土赤褐色、外面と口縁部が割部まで赤褐色	蓮池地	不明
大溝2北部中層 104088	地蔵皿	口径4.7	土師質土器	灰白色	—	外底未切り 内外面ナゲ	—	胎土赤褐色、外底も赤褐色	蓮池地	不明



第104図 1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図3 (1/3)



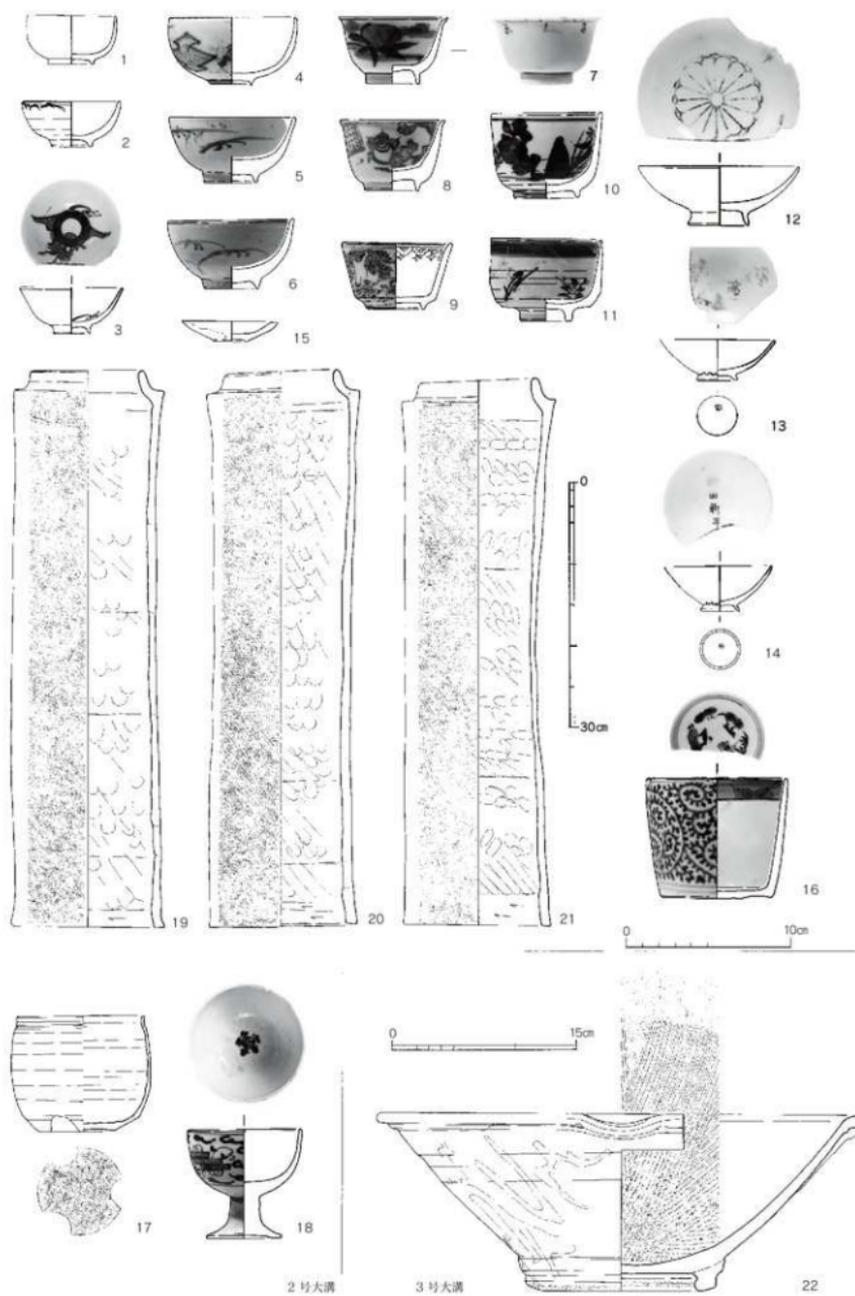
第105図 1次調査2号大冨出土土器実測図(3は1/4、他は1/3)



第106図 1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図4(2は1/4、他は1/3)

表47 1次調査出土土器・陶磁器観察表20

遺物名 検出番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm)	胎の種類	胎象	調整・整形・裝飾技法	窯詰の技法	所 見			
							特記事項	鑑定産地	鑑定年代	
大溝2北部中層 104図9	埴師盆 底径4.5	土師質土器 にぶい黄灰 白色 精良	—	—	外底赤切り 内外面ナデ	—	—	断面変色は見られないが、外底が染変している	瀬田	不明
大溝2北部上層 104図10	瓶 素壇 高台径5.0 最大径5.0	陶器 淡黄灰色	黒胎全面掛け	—	把手は手捏ね成型	貫付にアルミナ付着	—	—	肥前	不明
大溝2北部中層 104図11	灯明受皿 口径6.4 最大径9.6 底径4.3	陶器 橙褐色～灰褐色	—	—	高台内は傾り出し	裾下平塗胎	—	裾部外面中位まで露胎	肥前	不明
大溝2北部中層 104図12	灯明受皿 口径6.3 最大径8.5 底径4.3	陶器 橙褐色	—	—	染色の悪い鉄胎を内面割部から外底割中位まで	裾下平塗胎 1)緑塗アルミナ塗布	—	—	肥前	不明
大溝2北部中層 104図13	灯明受皿 口径6.1 最大径7.4 底径4.2	陶器 橙褐色	—	—	染色の悪い鉄胎を内面から外面割中位まで	裾下平塗胎	—	—	肥前	不明
大溝2北部上層 105図1	七輪 口径18.4 底径9.3 器高16.8	土師質土器 黄褐色	—	—	型押し成型で、外面はナデ、内面は下位がケズリ。上位はハケ、内面の変形部の接合部は脚状のハケが入り、内面上面の変形部と脚部の脚子面は滑造りの型押し成型したものを貼り付けている。脚部に全面スリッパ掛け。外面の文様はスタンプと洗刷	不明	—	—	博多	19世紀後半 5 20世紀前半
大溝2北部上層 105図2	七輪サナ 径18.0 厚さ1.2	土師質土器 暗黄褐色	—	—	穿孔径1.6	不明	—	下面のみが火を強く受ける	在地	19世紀半 5 20世紀前半
大溝2北部上層 105図3	七輪 口径22.2 高台径21.0 器高21.6	土師質土器 黄褐色	—	—	型押し成型で、内面の変形部の接合部は脚状のハケが入り、内面上面の変形部は滑造りの型押し成型したものを貼り付けている。外面の文様はスタンプと洗刷	不明	—	内面使用変色はほぼ完成	在地	19世紀後半 5 20世紀前半
大溝2 106図1	鉢 口径16.0	土師質土器 暗黄褐色～橙灰色 金雲母入	—	—	口縁部に黒色灰末を噴き寄せ、内面口縁部より外底まで染変している。外底はケズリ	—	—	胎は灰白色でないので瀬田産でないかもしれない	瀬田	不明
大溝2北部上層 106図2	中環壇 底径(21.4)	陶器 暗黄褐色	鉄胎全面掛け	—	内面は格子目タキ箱をナデ滑し、外面下位は同様にナデ滑し、上位はタキ目。内面は平行タキ箱が現状にまわる。内底はぬみ上げ箱が残る。外底は未調整	外底に胎土目の代わりには陶器片を使用	—	—	二川	不明
大溝2 106図3	蓋 底径6.8 底径3.2 器高1.7	陶器 暗黄褐色	黒胎を上面に掛ける	—	底面は回転赤切り。底面に垂書あり「下半ろか」	下半輪ナデ	—	ほぼ完成	肥前	不明
大溝2北部上層 106図4	蓋 底径8.1 底径5.2 器高1.3	土師質土器 にぶい暗灰褐色	—	—	底面赤切り	不明	—	胎面の濃赤著しい	肥前	不明
大溝2北部中層 106図5 図版17	蓋 底径9.0 つまみ径1.0 器高2.0	陶器 橙褐色	鉄胎を上面に掛ける。胎切れあり	—	底面は赤切り	下半輪ナデしているが、胎の残りあり	—	—	不明	不明
大溝2北部上層 106図6	蓋 底径13.0 つまみ径3.2 器高3.7	陶器 灰白色	鉄胎を内面に掛ける	—	外面は鉄胎の折物重文を対面に施す	不明	—	—	不明	不明
大溝2北部上層 106図7 図版17	蓋 つまみ径3.5 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	—	外面は草文、内面大丹塗は割れた脚状の竹筒文、口縁部は重文帯のコバルト染付、外面は赤粉の上塗り、つまみ内面裏面は赤絵で書かれているが判読できない	つまみ部上輪輪ナデ	—	ほぼ完成	肥前	19世紀後半
大溝2北部中層 106図8	蓋 底径9.2 つまみ径4.0 器高2.4	磁器 灰白色	透明釉 全面	—	外面は楕圓文か、内面割部は変形重文帯で、内面大丹塗は脚状の竹筒文をコバルト染付	つまみ部上輪輪ナデ	—	ほぼ完成	肥前	19世紀後半
大溝2 106図9 図版17	蓋 底径9.4 つまみ径4.0 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	—	外面は唐子に花文、大丹塗は花文がなくなっている。内面大丹塗は花文、内面は口縁部に割れた網格子文帯を対面に施す	つまみ部上輪輪ナデ	—	ほぼ完成 裾部が一部打ち欠いており、そこに復付	肥前	1700 5 1740
大溝2北部中層 106図10	水注 口径8.5 高台径6.5 器高3.2	陶器 暗黄灰色 精良	—	—	白化土を外面から内面口縁部まで掛けた後、外面に鉄胎と緑彩の花文を施し、最後に透明釉を全面掛け	貫付輪ナデアルミナ付着。口縁部透明のみ輪ナデ	—	—	肥前	不明
大溝2北部中層 106図11	水注 口径5.3 高台径6.5 器高11.7	陶器 橙褐色	黒胎を外面全面掛け	—	注口文銀	口縁部輪ナデ。貫付輪ナデ。アルミナ塗布	—	—	肥前	不明
大溝2北部中層 107図1	杯 口径5.4 高台径2.8 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	—	無文	貫付輪ナデ	—	ほぼ完成	肥前	不明
大溝2北部上層 107図2	杯 口径6.0 高台径2.4 器高2.8	磁器 変形のため不明	透明釉全面掛け	—	外面は竹笠文を呉須染付	貫付輪ナデ	—	赤みがあるが、注口状に判別したか	肥前	不明
大溝2北部 107図3	杯 口径6.2 高台径2.2 器高2.8	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉全面掛け	—	見込みに絶り台高台の脚部を持つ脚文を吹き寄せた文を施し、最後に透明釉を全面掛け	貫付輪ナデ	—	ほぼ完成	肥前	19世紀後半
大溝2北部中層 107図4	杯 口径7.9 高台径2.5 器高4.0	陶器 灰白色	透明釉全面掛け	—	外面は唐子と丹塗は呉須染付。赤彩による樹文・竹笠文・帯内花文、緑・黒彩による松文の上塗り付	貫付輪ナデ	—	—	肥前	1700 5 1740
大溝2北部中層 107図5	杯 口径7.7 高台径3.3 器高4.1	磁器 灰白色	胎透明釉全面掛け	—	外面は竹笠文を呉須染付	貫付輪ナデ 砂目付着	—	—	浜佐見	18世紀代



第107図 1次調査2・3号大溝出土土器・陶器実測図5 (19~21は1/6、22は1/4、他は1/3)

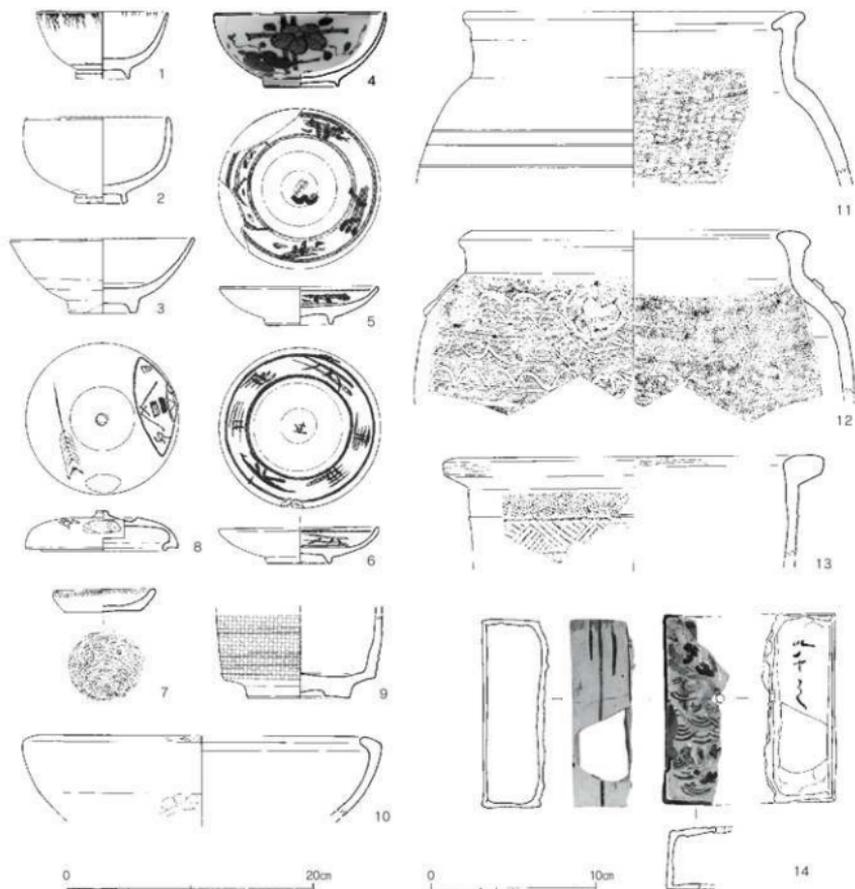
表48 1次調査出土土器・陶磁器観察表21

遺物名 検出番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	染込の技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大溝2北庫 107図6	杯 107図6	口径7.7 高台径3.3 器高4.2	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け 胎の沖彫あり	外面に準丸に内縁のみでデザインされた「福」字、胴下部に斐布刺繍帯を乳濁染付	襷付輪調子	肥前	19世紀中葉	
大溝2北庫上層 107図8	杯 107図8	口径8.6 高台径3.4 器高5.1	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉全面掛け	外面の華文文の裏に「吉人業」とあるコバルト染付	襷付輪調子	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大溝2北庫上層 107図9	杯 107図9	口径6.4 高台径3.4 器高4.3	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉全面掛け	外面皿と大根と宝尽くしが裏面に刷り残す。また、「美濃国土岐郡原村ノ内定林寺西二軒倉庫戸後欄八番倉」とある	襷付輪調子	ほぼ完形	美濃	19世紀後半
大溝2北庫 107図10	杯 107図10	口径6.7 高台径3.5 器高4.9	磁器 完形のため不明	彩色不貞の透明釉が全面に掛かる。胎切れあり	外面竹文を乳濁染付	襷付輪調子	ほぼ完形	波佐見	1680 V 1740
大溝2北庫 107図11	小型碗 107図11	口径6.7 高台径4.0 器高5.2	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け	外面網と直線文をコバルト染付	襷付輪調子	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大溝2北庫 107図12	小型碗 107図12	口径6.8 高台径3.2 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 彩色不貞	外面筋紋と華文をコバルト染付	襷付輪調子	ほぼ完形	肥前	20世紀前半
大溝2北庫上層 107図13	杯 107図13	口径7.0 高台径2.4 器高2.5	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに彩色で華文文の上に「四徳」と描いているので、久留米御八幡戸施願の胎跡かろう	襷付輪調子	肥前	20世紀前半	
大溝2北庫 107図14	杯 107図14	口径6.5 高台径2.3 器高2.8	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに彩色で「野田新」を描いている高台外面の四凸文と、田の字らしい裏筋はコバルト染付	襷付輪調子	肥前	20世紀前半	
大溝2北庫 107図15	杯 107図15	口径6.0 高台径2.1 器高1.2	磁器 完形のため不明	白磁胎 内面から外面に緑帯	型打ち成型で、外面不明な顔付華文	底面磨胎	完形	肥前	不明
大溝2北庫 107図16	杯 107図16	口径6.6 器高7.3	磁器 灰白色	透明釉 全面掛け 胎切れあり	口縁部は深い山形 外面積草文、内面口縁部が不明、見込みに環状松竹梅文を乳濁染付	蛇ノ目輪調子	高台がない	不明	18世紀中葉
大溝2北庫上層 107図17	急須 107図17	口径5.3 最大径8.4	土質質土器 灰白色	—	底面赤褐色 底面縁が3つ折れて通かした状になる	不明	内面に赤褐色と見られる使用彩色あり	不明	天明時代
大溝2北庫 107図18	仏飯器 107図18	口径6.9 高台径4.5 器高6.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面胴部に幾重文地に散らした宝紋らし文、見込みに5弁華文を乳濁染付	高台襷付輪調子	9割残存	肥前	1690 V 1780
大溝2 107図19	土管 107図19	基部径9.2 基部径14.0 長さ68.8	土質質土器 淡黄灰色 精土	—	型作りでなく、粘土板を繋いで成型している 外面は丁家なハケ 内面はオサエ、基部内面はナゼ	—	ほぼ完形 内外変色なし	在地	不明
大溝2 107図20	土管 107図20	基部径18.4 基部径14.2 長さ68.8	土質質土器 淡黄灰色 精土	—	型作りでなく、粘土板を繋いで成型している 外面は丁家なハケ 内面はオサエ、基部内面はナゼ	—	ほぼ完形 内外変色なし	在地	不明
大溝2 107図21	土管 107図21	基部径18.2 基部径14.6 長さ67.5	土質質土器 淡黄灰色 精土	—	型作りでなく、粘土板を繋いで成型している 外面は丁家なハケ 内面はオサエ、基部内面はナゼ	—	ほぼ完形 内外変色なし	在地	不明
大溝3 107図22	網鉢 107図22	口径39.4 高台径15.4 器高14.5	陶磁 陶褐色	内外面鉄黒胎掛け	外面に粗降り文を乳濁染付 割り目は20本単位	見込みに蛇の目輪調子と下位の目縁を襷付輪調子	肥前	1750 V 1860	
溝1南北庫 108図1	小型碗 108図1	口径10.0 高台径3.3 器高4.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に粗降り文を乳濁染付	襷付輪調子	波佐見か	不明	1700 V 1740
溝1 108図2	碗 108図2	口径8.7 高台径3.2 器高5.2	陶磁 灰白色 やや粗粒	透明釉を外面縁部以外に全面掛ける 貫入あり 口縁部は半分しか残っており鉄粒の有無は不明	底面磨胎	京焼風陶器か	肥前か	18世紀中葉 V 18世紀後半	
溝1東西庫 108図3	茶碗 108図3	口径11.1 高台径4.2 器高4.3	陶磁 灰～糖灰白色	—	オリブ色の灰釉を高台内以外全面に掛ける	襷付輪調子	見込みに蛇の目輪調子と下位の目縁を襷付輪調子	肥前	不明
溝1東西庫 108図4	碗 108図4	口径10.4 高台径4.6 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は葛と竹組文を乳濁染付	襷付輪調子	ほぼ完形	肥前	1710 V 1750
溝1南北庫 108図5	小皿 108図5	口径9.7 高台径4.1 器高2.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に昇龍の間に山文と社文、見込みに不明文様を乳濁染付	襷付輪調子	見込みに蛇の目輪調子後、アルミナ施布	肥前	19世紀中葉
溝1南北庫 108図6	小皿 108図6	口径9.7 高台径4.0 器高2.2	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける 胎切れあり	内面に昇龍の間に本文と社文、見込みに不明文様をコバルト染付	襷付輪調子	見込みに蛇の目輪調子後、アルミナ施布	肥前	19世紀中葉
溝1東西庫 108図7	小皿 108図7	口径6.1 器径6.1 器高1.4	土質質土器 完形のため不明	—	外底赤褐色 内外面ナゼ	不明	内外口縁部に襷付着	不明	不明

122図16は砥石で、方柱形の置き砥石を粗割りして再利用した手持ち砥石で、断面逆台形状に加工している。

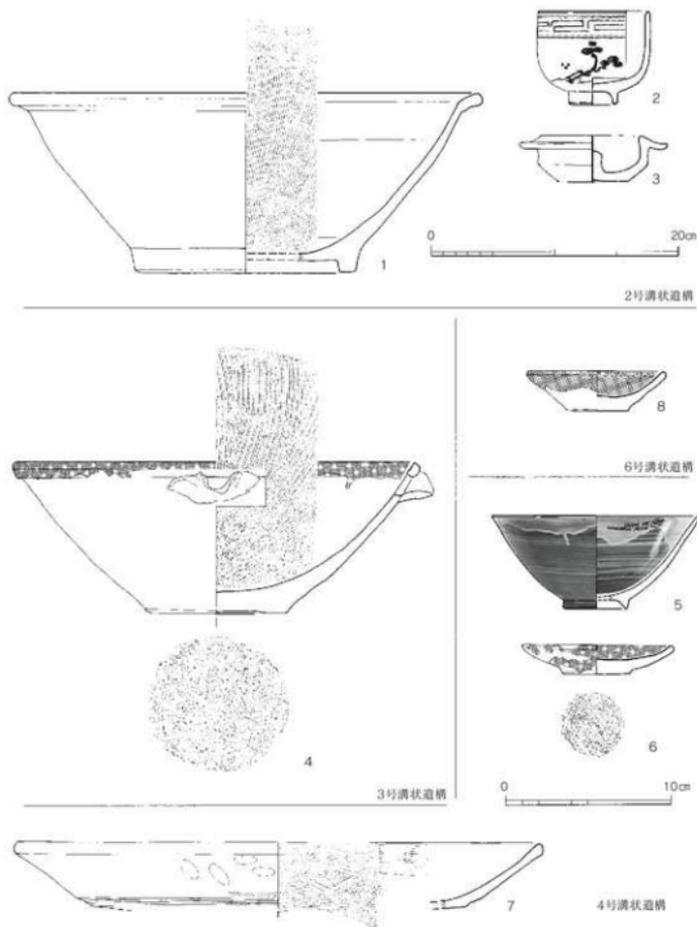
123図1は火打石で、チャート製である。火打金との擦痕が上端の尖った稜線部分にある。ほかに剥離や欠損の痕跡はなく、使用頻度は多くなかったようだ。123図2は朱墨用の硯で朱墨が残っている。朱墨は後述の蛍光X線分析から水銀朱を使用していることがわかった。

123図3は裏面に「赤間関」と彫られているので、山口県産の赤間硯である。赤間硯は赤紫色



第108図 1次調査1号大溝出土土器・陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3)

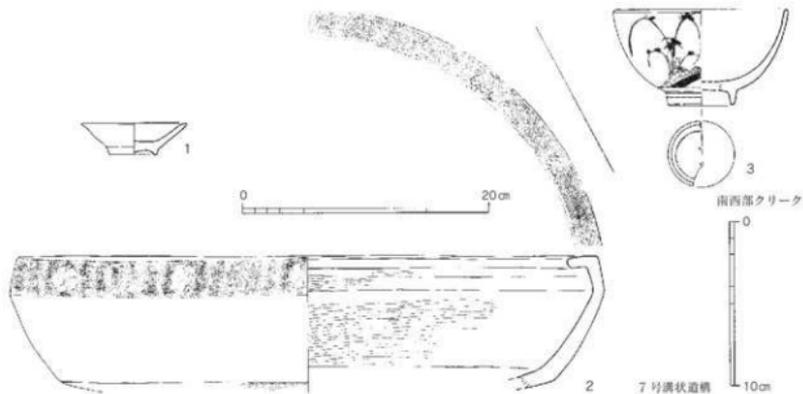
の輝緑凝灰岩製で、江戸時代前期には当時赤間関といわれた下関市で行われていたが、坑内掘り(たぬき掘り)の限界から、江戸時代後期には宇部市西万倉周辺で採石が始まると、次第に採石・一般書道用硯の製作は宇部市西万倉周辺で、販売・文様彫刻などを施した細工硯の製作は下関市で行われるようになったらしく、「赤間硯」と彫られてはいるが前者の宇部市産である可能性が高い。



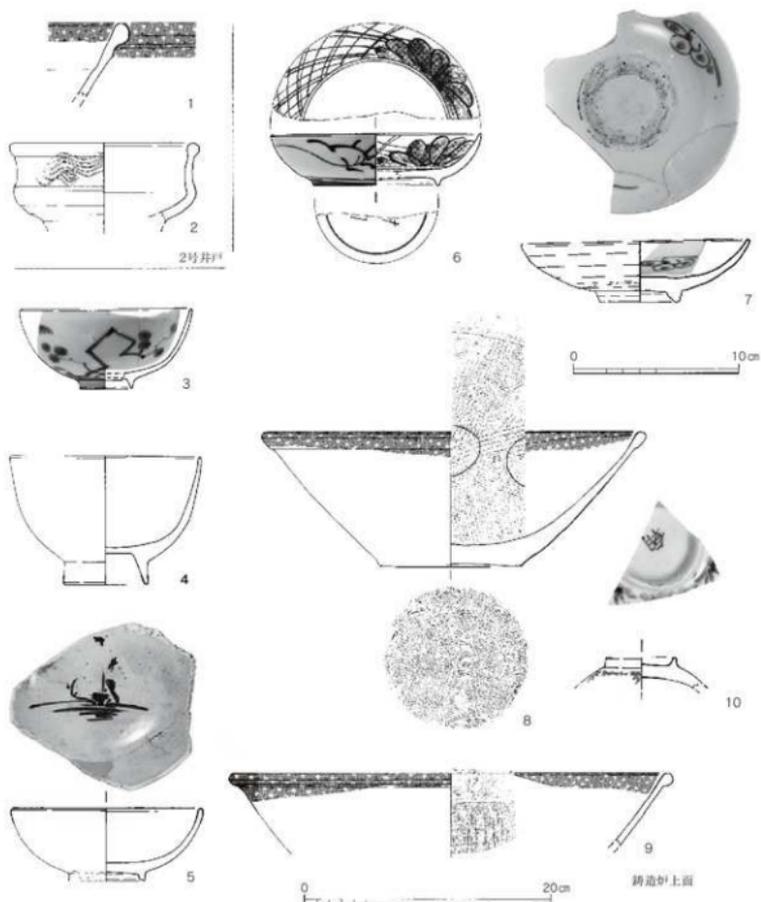
第109図 1次調査2～4・6号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1・7は1/4、他は1/3)

表49 1次調査出土土器・陶磁器観察表22

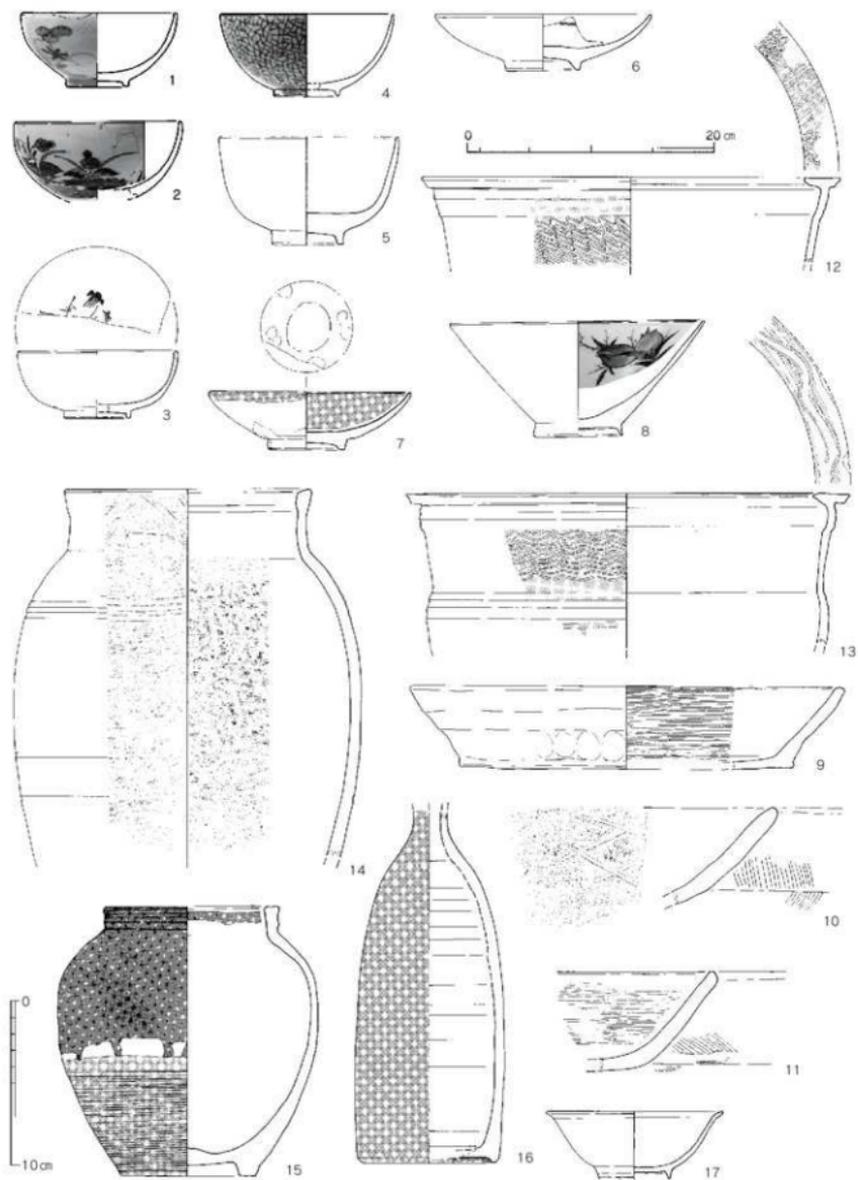
遺物名 探検番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯造の技法	所 見	
							特記事項	推定産地 推定年代
溝1南北輪 10808H	蓋	径径49.2 つまみ径0.8 器高2.4	磁器 定形のため不明	透明釉 全面	外面矢文・屈文を対面に配置、 屈内面には「日」「印」の間に印号 の記号を共通染付	受け部輪割ぎ	外面側面に胎土目 らしみの付着	肥前 18世紀後半 X 19世紀前半
溝1東内輪 10809H	香炉	高径径6.3	陶器 灰白	オリブ色の鉄釉を 胴下位以外の外面に 掛ける	外面胴中位と下位に沈線	底面露胎 アルミナ らしみのが胴下位 と高台内に付着	内面やや灰色に灰 色	不明
溝1 10809H10	火鉢	1径(35.2)	瓦質土器 灰白	—	外面胴下位はケズリとオサエ、 その上はナデ、口唇部は丁寧な ミガキ。内面はナデのみ	不明	胎土は土師質だ が、外面は灰土を 焼ききけているの で瓦質土器	在地 不明
溝1東内輪 10809H11	小甕	1径(20.8)	陶器 外面黒明茶灰色、 内面桃褐色	内外鉄釉	外面はナデ後肩部に沈線、内面 は格子目タキ目ナデ消し	口唇部外面側を残し て輪割ぎ	—	肥前 18世紀代
溝1東内輪 10809H12	小甕	1径(21.2)	陶器 灰白	内外鉄釉	外面は肩部にカキ目の後、沈線 による弧文、その上に環状の花 形浮文、内面は格子目タキ目 ナデ消し	口唇部外面側を残し て輪割ぎ	—	肥前 17世紀後半
溝1東内輪 10809H13	火鉢	1径(18.0) 最大径(21.3)	瓦質土器 表面黒灰色、内面 は灰白色、肥厚部 中央は黒灰色	—	小甕型で、外面は磨りしによる 斜線交差の扇向文と珠文の陽刻、 内面は口縁部は刻線ナデ、割線 はハケ状工具によるケズリ	不明	口縁部内面に煤付 着	在地 不明
溝1東内輪 10809H14	水筒	共輪11.4 高3.6	磁器 灰白色	白磁釉を外面の上 部以外に掛ける。内 面は穿孔孔から流れ 出した部分のみ	底面より磨りし成型で、底面は 表面に布目肌紋。その他の面を 磨りしして上面に垂を陽刻。赤・ 青・緑・紫で上絵付け	内面土の上端部が露 胎なので、立てて焼 成している	内側面に墨書あり 「口千之か」	肥前 不明
溝2上層 10809H	厨鉢	1径(38.4) 底径(18.0) 器高14.7	陶器 暗茶褐色	鉄釉を底面に外に 掛ける	内外ナデ 煎り目は32本単位	唇付輪割ぎ 見込みに環状重ね 帯彫	—	肥前か 不明
溝2上層 10809H2	小甕 黒飯み	1径(6.7) 高径5.0 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面口縁下に雷文帯・割線に胎 本文を共通染付	唇付輪割ぎ	—	肥前 19世紀中葉
溝2上層 10809H3	蓋	径径49.0 つまみ径1.0 器高2.8	陶器 灰白	透明釉を上面に掛け る 貫入あり	底面は赤切り後ヘラケズリ	下字輪割ぎ	—	肥前 不明
溝3 10809H4	厨鉢	1径24.6	陶器 赤紫灰色	口縁部のみ鉄釉	内面煎り目13本単位 外面赤 切り	底面露胎 外面胴下 位と見込みに胎土目 跡5つあり	—	肥前 1650 Y 1690
溝4 10809H5	甕 黒玉面	1径(12.6) 高径(3.9) 器高5.7	陶器 灰色	内外白化粧土をハケ 掛けした後、口縁部 に2度掛けし、 前面透明釉掛け 貫入あり	—	—	—	肥前か 不明
溝4上層 10809H6	小皿	1径(9.2) 底径4.1 器高1.7	陶器 褐色	発色の悪い鉄釉が内 面から外面口縁部に 掛かる	内底赤切り 内外面ナデ	底面露胎	口縁部の一部に煤 付着	肥前 不明
溝4 10809H7	切塔	1径(43.0)	土師質土器 灰白	—	外面はオサエ、底面はハケ、内 面はハケの上に拵文の沈線	不明	内面は紫色少な い、外面は煤付着	在地 不明
溝6 10809H8	小皿	1径8.4 底径3.8 器高2.5	陶器 褐色褐色	発色の悪い鉄釉が内 面から外面口縁部に 掛かる	—	底面露胎	内外面口縁部に煤 付着	不明
溝7 11008H1	杯	1径(6.4) 高径3.0 器高1.9	磁器 灰白色	透明釉外装以外全面 掛け	無文 高台内出し	唇付輪割ぎ	—	肥前 不明
溝7 11008H2	火鉢	1径(46.7)	瓦質土器 灰白	—	外面・口唇部はミガキで、単位 がわからない。内面はハケ、口 縁下にオサエあり。口唇部に 木葉文、外面口縁部下に花文の スタンブ列	不明	外面の紫色は灰土 焼きによるもの	在地か 不明
南西溝クワーク 11008H3	甕	1径10.6 高径4.0 器高4.9	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛け る	外面には弧文を共通染付	唇付輪割ぎ	—	肥前 1700 Y 1740
井戸2 11108H1	厨鉢	—	陶器 暗茶褐色	口縁部のみ鉄釉	内面煎り目1単位不明	—	—	肥前 1650 Y 1690
井戸2 11108H2	小鉢	1径(11.4)	陶器 褐色	内面口縁部から外面 胴上平に鉄釉を掛けた後、外面上 平は磨削輪割ぎ	下字露胎	鉄釉は発色不良	—	肥前 1650 Y 1690
崎辺遺構H上層 11108H3	甕 半球形	1径(10.4) 高径(3.2) 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛け る	外面には他と竹文があるので胎 竹文だらう 共通染付	唇付輪割ぎ	—	肥前 1710 Y 1750
崎辺H上層 11108H4	甕	1径(11.5) 高径(5.1) 器高7.8	陶器 灰〜褐色	黒釉全面掛け	無文 外底内出し	唇付輪割ぎ	見込みの釉の発れ はひつつきだが、 外面の白変は2次 的焼成によるもの	肥前 不明
崎辺H上層 11108H5	甕 半球形	1径(11.5) 高径4.6 器高4.4	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底面に 外に全面掛ける	見込みに鉄絵の山水文あり。外 底に磨削状に門文を縁刻	底面露胎	京焼陶器	肥前 18世紀中葉 Y 18世紀後半
崎辺遺構H上層 11108H6	小皿	1径(12.7) 高径(7.6) 器高3.1	陶器 灰白色	発色の悪い透明釉を 全面に掛ける	外面唐文、内面2重割目文と 手書文、裏面「大明年製」を共通 染付	唇付輪割ぎ	—	灰土見 1680 Y 1740



第110図 1次調査7号溝状遺構・南西部クリーク出土土器・磁器実測図(2は1/4、他は1/3)



第111図 1次調査2号井戸・鑄造炉上面出土陶磁器実測図(8・9は1/4、他は1/3)



第112図 1次調査ピット出土土器・陶磁器実測図(12・13は1/4、他は1/3)

表50 1次調査出土土器・陶磁器観察表23

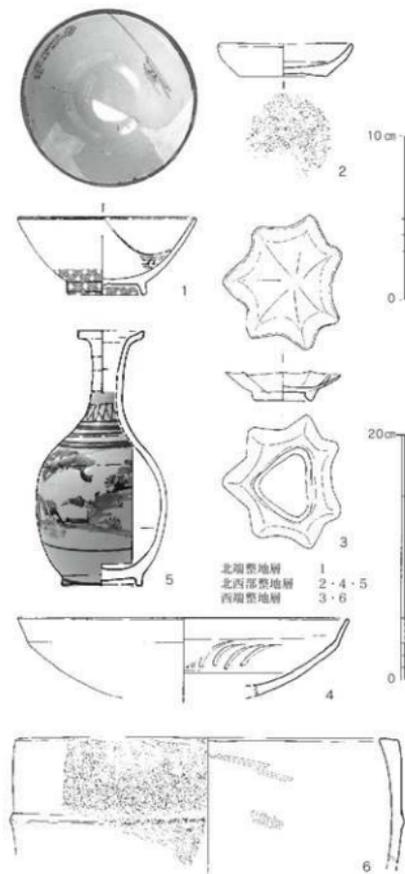
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯造り技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
採取番号 図版番号	形状 通称名	( )は復元値							
111077 344	小皿	1径13.8 高台径4.9 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉を外面基部以外に全面掛ける	内面に菊文染付	底面磨削	底面見	1680 Y 1740	
111088 593	脚鉢	1径31.1 底径11.7 器高11.0	1径31.1 陶器 胎赤紫系～赤紫系	1径部のみ鉄釉	内面磨り目12本単位 外底糸切り	底面磨削 外面磨削	内面の色調差は下位と見込みから取ぬ機のため	1650 Y 1690	肥前
111089 591	脚鉢	1径36.0	陶器 灰白色	1径部のみ鉄釉	内面磨り目12本単位	不明	肥前	1650 Y 1690	
111010 318	碗	高台径4.3	磁器 胎灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面草花文、真部に朝、外底染付	貫付軸割ぎ	朝妻焼	1714 Y 1728	
112081 502	碗	1径9.4 高台径3.8 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面は花草文のみ 外底染付	貫付軸割ぎ	肥前か	18世紀後半	
112082 485	半球形	1径10.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色やや不良	外面には草花文乳白染付	貫付軸割ぎ	肥前	1710 Y 1750	
112083 718	碗	1径9.6 高台径4.0 器高4.1	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛け 貫入あり	見込みに山水文の鉄絵	割下位軸割ぎ	京焼風陶器	1690 Y 1810	肥前
112084	碗	1径10.4 高台径3.9 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は赤紫文のみ 外底染付	貫付軸割ぎ	肥前	18世紀前半	
112085	碗	1径10.8 高台径4.3 器高6.5	陶器 黄灰白色	緑灰色の灰釉を高台 内面以外全面掛け	無文 外面割下位にカンナ肌	貫付軸割ぎ	灰釉は1径部に 2度掛け	1690 Y 1810	肥前
112086	小皿	1径3.0 高台径4.4 器高3.4	磁器 灰白色	光沢のある透明釉内面 から外割割下位まで	内面に折敷葉文らしいモチーフの乳白染付	底面磨削 見込み 地の目軸割ぎ	底面見	1680 Y 1740	
112087	小皿	1径12.2 高台径4.7 器高3.4	陶器 灰白色	緑灰色の灰釉を内面から 外割割下位まで掛け、そ の上に内面から外割割 部は銅緑釉を上掛け	外面割下位はカンナ肌	底面磨削 見込み 地の目軸割ぎ部に 計目4つあり	肥前	1650 Y 1690	
112088	大碗	1径15.5 高台径5.4 器高7.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面無文、内面ザクロ文か	貫付軸割ぎ	肥前	不明	
112089	磁系碗	1径26.0 底径20.0 器高5.0	土師質土器 にふい暗黄灰色	—	外面1径部は横ナデ、基部との接合 部はすずえ、内面は細かい横ハケ 外底は赤調整	不明	内面は発色なし、 外面は横付着	在地	不明
112090	磁系碗	—	土師質土器 にふい暗黄灰色	—	外面1径部は縦ハケの上を横ナデ だけ横ナデ、基部部以下も縦ハケ、 内面は横付着の横ナデ	不明	内面は発色なし、 外面は横付着し、 全体的に黒変	在地	不明
112091	磁系碗	—	土師質土器 にふい暗黄灰色	—	外面1径部は縦ハケの上を横ナデ、 基部部以下は目の細かい横ハケ、 内面は細かい横ハケ	不明	内面は黒変、外 面は横付着し、 全体的に黒変	在地	不明
112092	鉢	1径34.0	陶器 赤紫灰色	内面に鉄釉掛け、外面と1径部は白化粧土を掛けて面状焼き 取り、その上に暗黄灰色の灰釉を上掛け	口唇部内側は軸割ぎ	不明	肥前	17世紀後半	
112093	鉢	1径26.0	陶器 灰白色	内面に鉄釉掛け、外面と1径部は白化粧土を掛けて面状焼き 取り、その上に黄灰色の灰釉を上掛け	口唇部上面側は緑 のみ、下面側は横 割ぎ	不明	肥前	17世紀後半か	
112094	小皿	—	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け	内外面割部に格子目タケタテ酒 し	口唇部は灰釉のみ 軸割ぎ	1径部は軸割ぎ していない	肥前	18世紀 19世紀
112095	小皿	1径10.6 底径6.0 器高10.6	陶器 橙褐色	鉄釉は外面下半にハケ つけた後、外面上半から 内面1径部に厚掛け	外面上半分はナデ、下半分はケ ズリ目11本単位	貫付軸割ぎ 口唇部軸割ぎ	肥前	不明	
112096	瓶	高台径9.5	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	—	貫付軸割ぎ後、鉄 葉密着	肥前	19世紀中葉	
112097	杯	1径10.6 高台径4.4 器高4.1	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛け	無文	貫付軸割ぎ	器高の低いもの	肥前	19世紀前半
113081	杯	1径10.8 高台径4.8 器高4.8	陶器 発色のため不明	外面割下位は鉄釉、透明 釉を内面から外割割位 まで掛け 貫入あり	内面に山水文の鉄絵	割下位軸割ぎ	京焼風陶器	不明	不明
113082	小皿	1径8.1 底径5.4 器高2.0	土師質土器 黄灰白色 発人物なし	—	外底糸切り	不明	外底が黒く発色	瀬島焼	不明
113083	小皿	長軸8.0 短軸5.7 器高1.8	磁器 発色のため不明	透明釉 全面 貫入あり	糸切り細工の貫付し成型で、製器時 内底は葉巻を隠蔽 高台おにぎり形 に手摺	貫付軸割ぎ	発色	肥前	不明
113084	皿	1径20.0	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛け	内面に草文状の片切磨り	—	肥前	1780 Y 1810	

124図1・2は方柱状の石材で、1には梵字が文字の外郭線を線刻する字体で書かれている。上下端面を除き、欠損した1面以外の3面に1文字づつあるので、本来は4面にあったものだろう。

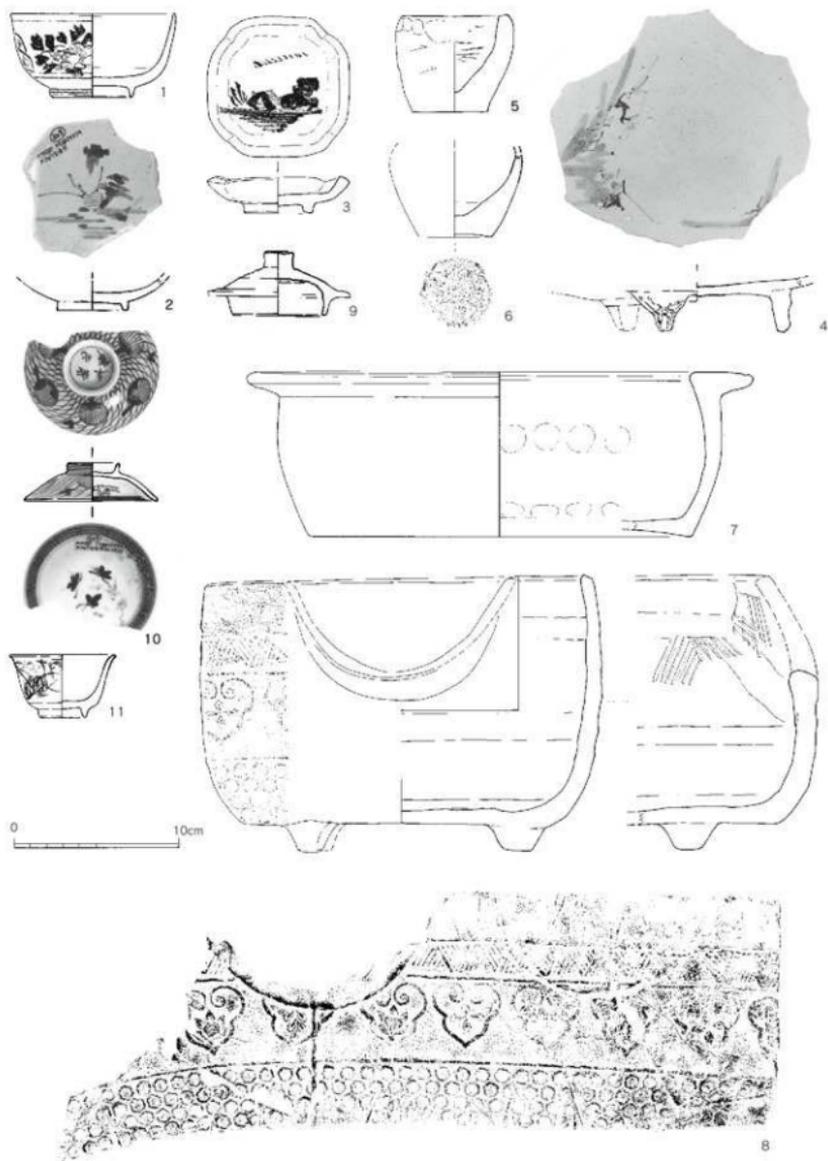
図の左から「悉キリク」「悉タラク」「悉ウーン」なので、四方梵字と見られる。したがって、欠損部に彫られていたのは「悉アク」である。この四方梵字が彫られることが多い石製品といえば宝篋印塔なので、これは宝篋印塔の塔身部と考えられる。ウーンは阿闍如来、タラクは宝生如来、キリクは阿弥陀如来、アクは釈迦如来かあるいは不空成就如来を顕しており、金剛界五仏あるいは塔自身を大日如来として金剛界五仏となる(引用文献3)。124図2には明らかに梵字はないが、規格がほぼ同じなので、この石材も宝篋印塔の塔身部ではあろう。戦国時代の集落遺跡である柳川市矢加部南屋敷遺跡(引用文献4)で出土した宝篋印塔は同じサイズの塔身部であり、ちょうどこの石材のサイズに適合する。また、柳川高校に置かれている天文19(1550)年銘の「蒲池鑑盛造立覚童御篋印塔」の宝篋印塔も規格的には一致する。

宝篋印塔の存在からこの集落内に屋敷墓が置かれた可能性も考えられるが、本遺跡は近世の町屋なので、裏庭にあったとしても屋敷墓とは考えにくいし、実際墓らしい遺構は発見されていない。むしろ、戦国時代から江戸時代初頭に存在していた墓が久留米柳川街道の敷設か、町屋敷集落の造成に伴ってそれ以前にあった墓が掘り崩されたか、あるいは礎石などの石材として転用するために持ち込まれた可能性が高い。

125図7はボマードのガラス瓶で、「IUZUTSUBAKI」の陽刻がある。椿油の商品名であろうが詳細はわからない。8の牛乳瓶は蓋が締まった状態で出土している。蓋の天井部には「え」と線刻されており、同じ形態の牛乳瓶の蓋である9には「永」と線刻されているので、同じ「え」のつく名称の牧場の製品である可能性が高い。



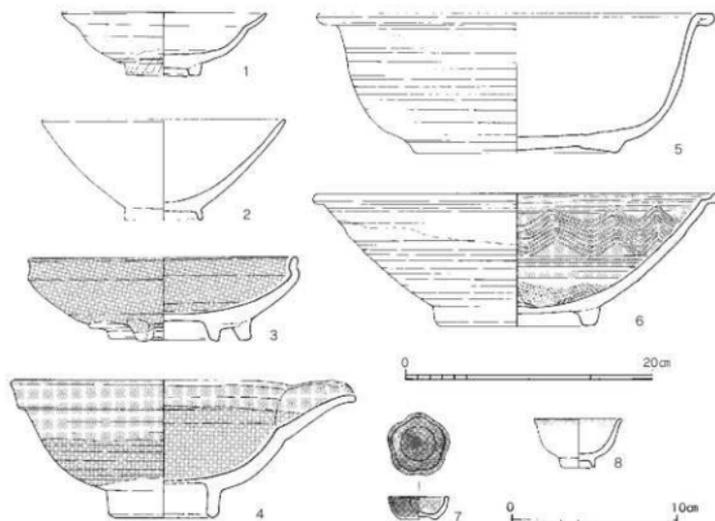
第113図 1次調査整地層出土土器・陶磁器実測図(6は1/4、他は1/3)



第114图 1次調査大正包含層出土土器・陶磁器実測図(1/3)

表51 1次調査出土土器・陶磁器観察表24

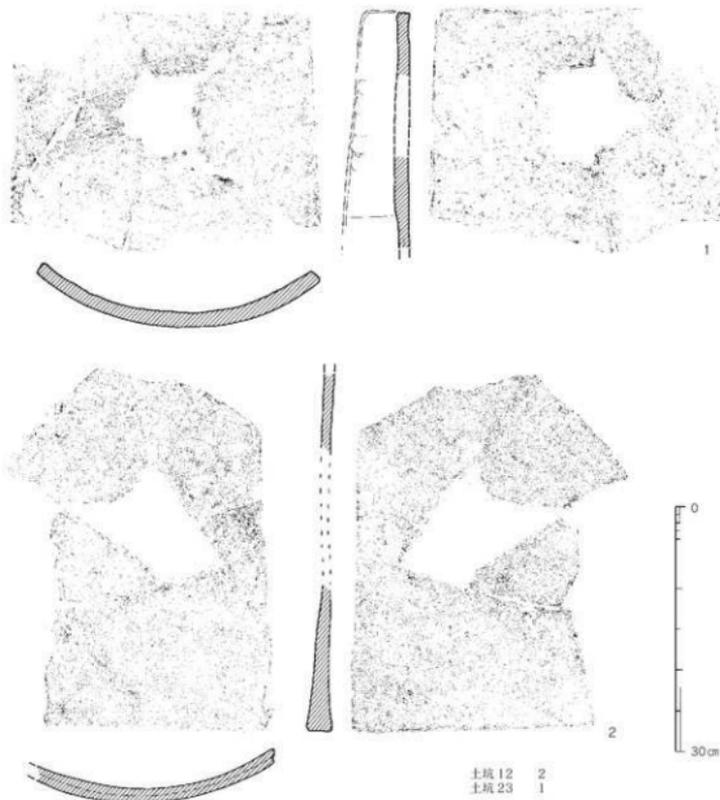
遺構名 図版番号 図版番号	器種 形状 通称名	寸法(cm) ( )は復元前	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	装飾の技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
北西部築地層 11304 5	甕	口径4.0 最大径8.0 高台径4.8	磁器 灰白色	—	外面から内面口縁部まで透明釉を掛け、その上に赤・緑・青彩で山水文の土絵付け	襷付輪調子	—	肥前	1650 ~ 1690
西部築地層 11306 1	大鉢	口径(31.0)	瓦質土器 灰色	—	内外とも器面の調整済しい 外面はミガキの上に菊花文のスタンプ 内面はナデ	不明	内面口縁部に襷付	在地か	不明
大正包合層 11401 1	鉢	口径10.0 高台径4.8 器高5.2	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面紫よろけ編文と牡丹花文のコバルト染付	襷付輪調子 口唇部輪調子	焼成時のひびかきが入る 完形	肥前か	20世紀前半
大正包合層 11402 2	蓋物	高台径4.2	陶器 黄灰白色	透明釉を外表面胚漆に全面に掛ける	見込みに鉄絵の山水文あり 外底に「清水」の刻印	瓦葺露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉 ~ 18世紀後半
大正包合層 11403 3	小皿 実形小皿 方形	一辺8.6 高台径4.2 器高2.1	磁器 完形のため不明	透明釉 全面	型押し成型で、見込みに海虎の目文コバルト手書き染付	襷付輪調子	完形	肥前	不明
新緑色土包合層 11404 4	皿 脚付	底径9.9	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛け 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文 脚は3つで、後面の型押し成型	外底は肥ノ目高台状で、台部は露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
大正包合層 11405 5	椀飯碗	口径6.5 底径4.6 器高5.9	土師質土器 にぶい黄灰色 釉良	—	外底赤切り 口縁部に一部ケズリあり 内面ナデ	—	ほぼ完形 器面摩滅	在地	不明
大正包合層 11406 6	椀飯碗	底径4.4	土師質土器 外面にぶい黄灰色 内面淡棕色 中央は黄黑色 釉良	—	外底へう張り 内面ナデ	—	断面赤染	在地	不明
大正包合層 11407 7	大鉢	口径30.6 底径23.0 器高10.0	瓦質土器 にぶい灰褐色 白色粒が入る	—	外底切り離し地未調整 器面は外面ナデ、内面オレセ後ナデ	—	ほぼ完形 器面摩滅	在地	不明
大正包合層 11408 8	大鉢	口径23.1 底径19.2 器高16.6	瓦質土器 灰白色が黄灰色を挟む	—	外面側下位は型押しによる龍雲文帯、龜甲文帯などの飾刻、脚は円柱状で2つ残る 外底はハケ状ナデ、内面はケズリ、突出部の後合部の残跡がある 器はミガキ	—	外面のミガキ部は光沢あり	在地	不明



第115図 1次調査視乱土坑出土陶磁器実測図(5-6は1/4、その他は1/3)

表52 1次調査出土土器・陶磁器観察表25

遺構名 探函番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	装飾の技法	所 見		
							特記事項	産定産地	産定年代
大正包合群 11409 図版17	蓋	胴径5.6 つまみ径8.6 器高4.0	陶胎 橙褐色	鉄釉を上面に掛ける 釉切れあり	底部は糸切り	下半輪滑ぎしているが、釉の残りあり	肥前		不明
大正包合群 114010	蓋	胴径8.0 つまみ径3.1 器高2.3	磁胎 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	外面に格子文の上に団扇文と横文、内面に口縁部に書文、天井部に横文 外面滑ぎは「成化半製」を然原産旨	つまみ扉上縁輪滑ぎ	肥前		1700 X 1740
大正包合群 114011	杯 壺反形	口径6.5 高台径2.9 器高3.8	磁胎 灰白色 ガラス質	透明釉全面掛け	外面に茶と緑の草文の上絵付け	費付輪滑ぎ	完形	肥前	19世紀後半
土坑20 11501	小皿	口径12.4 底径4.4 器高3.8	陶胎 暗灰白色	内面から外面脚中位まで 緑灰色の灰輪掛け	外底削り出し 割下位にカンナ痕	底部磨蝕 見込みに縦の目輪滑ぎ	肥前		1600 X 1780
土坑20 11502	大皿 壺茶碗	口径(14.7) 高台径(4.7) 器高6.2	磁胎 灰白色	透明釉全面掛け	無文	費付輪滑ぎ	肥前		不明



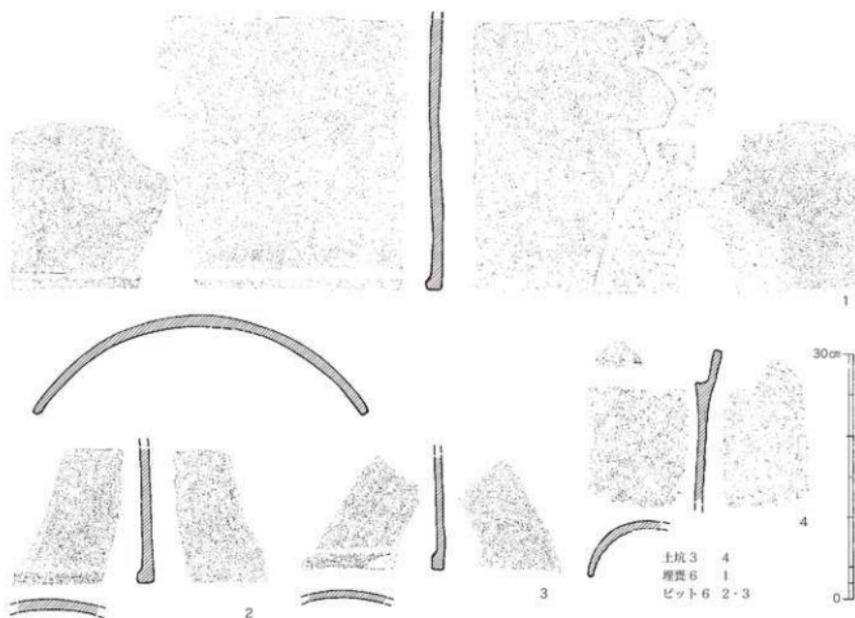
第116図 1次調査出土土師質瓦尖測図1(1/6)

13はガラス製おはじきで、じゃんけんのグーが陽刻されており、2次調査1号溝出土のチョキとパー(『矢加部町屋敷遺跡1』41図37・38)とセットになる。

128図4~7は膳の脚で、6・7は木釘で固定されておらず、膠のようなものが付着しているので、接着材で固定したと考えられる。脚の低い膳は板部と脚部を木釘で固定しなかったのではないだろうか。128図8・9は箱の側板でセットになるものだろう。

128図11・12の箸はいずれも出土時には直線であったが、水漬けしていたにも関わらず報告時までに变形してしまった。129図16は全面は透明漆塗りの方形板で、1面に透明漆塗りされていない長方形の接合痕があり、そこに木釘孔が2つずつある。箱の身側の板材にしては、木釘孔が足りないことから、受部が2つ付いて蓋になると考えられる。

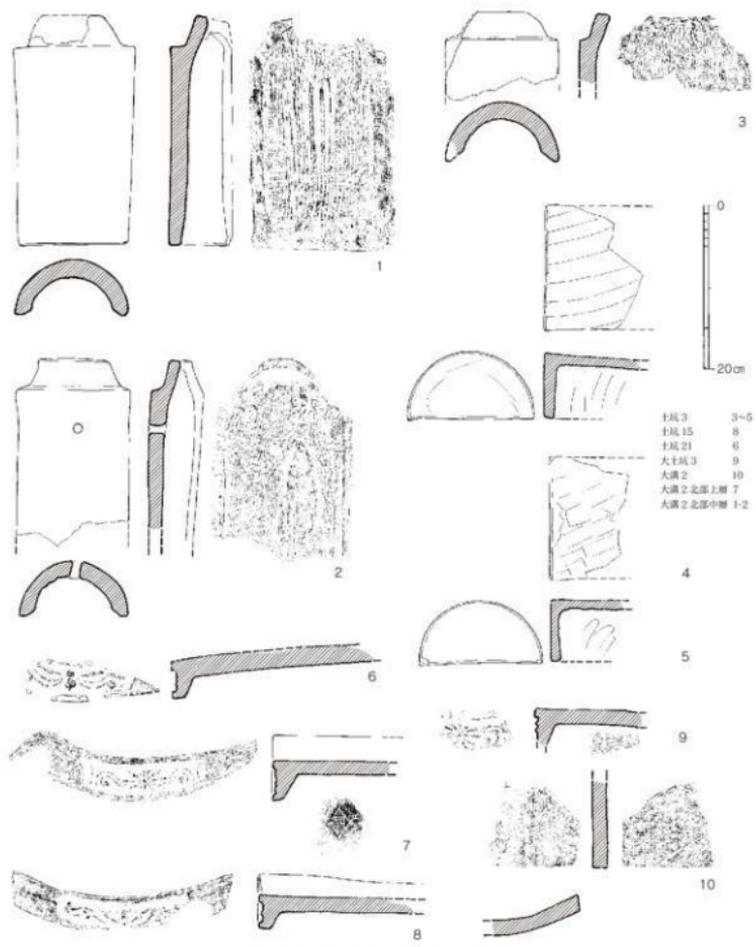
129図2は全面に顔料が塗布されているので、貼り付けるものでもない。赤漆にしては色調がピンクであることと、厚みがないことから、顔料と考えた。129図6は薄い台形の板材で、セットになる。逆台形の上の角を取ったもので、木釘孔が左右の下角から上がったところと、上辺の中央の3箇所ある。木釘孔は側板との固定を目的としたものにしては数が少なく、位置がおかしい。また、5とセットになることから考えても、別の部分を介して接合したことが推測される。129図9は板材の側縁が劣化しておらず、孔は大きく、鉄孔ではない。孔には擦れた痕跡がないので、紐を通すものでもないので、棒を差し込んだのだろう。本来の形態は想定できない。



第117図 1次調査出土土師瓦実測図2(1/6)

表53 1次調査出土土器・陶磁器観察表26

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	空法の技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑20 11500 3	小皿 脚付皿	口径16.4 底径6.6 器高5.1	陶器 暗灰色	暗いオリーブ色の灰釉 底面以外全面	脚は手捏ねの低い方柱形	底面露胎 見込み乾し/目 輪溝まで、重ね焼きの痕 跡あり	陶胎発汗の跡 たが、発汗部に 発汗はない。	肥前	不明
土坑20 11500 4	片口鉢	口径18.4 高台径6.6 器高8.4	陶器 灰～黄褐色 粗良	内外面胴中位までオリーブ色の灰釉掛け。口縁部 内外は白化粧土掛けし、その上に内外胴中位まで 透明釉を掛ける 高台は削り出し	底面露胎			肥前	不明
土坑20 11500 5	鉢	口径(32.4) 高台径16.6 器高11.3	陶器 黄灰色 粗良	輪軸を全面掛け		高台輪溝が 見込みにハリ目跡が5つ		肥前	20世紀前半



土坑3 3-5  
土坑15 8  
土坑21 6  
大土坑3 9  
大溝2 10  
大溝2北部上層 7  
大溝2北部中層 1-2

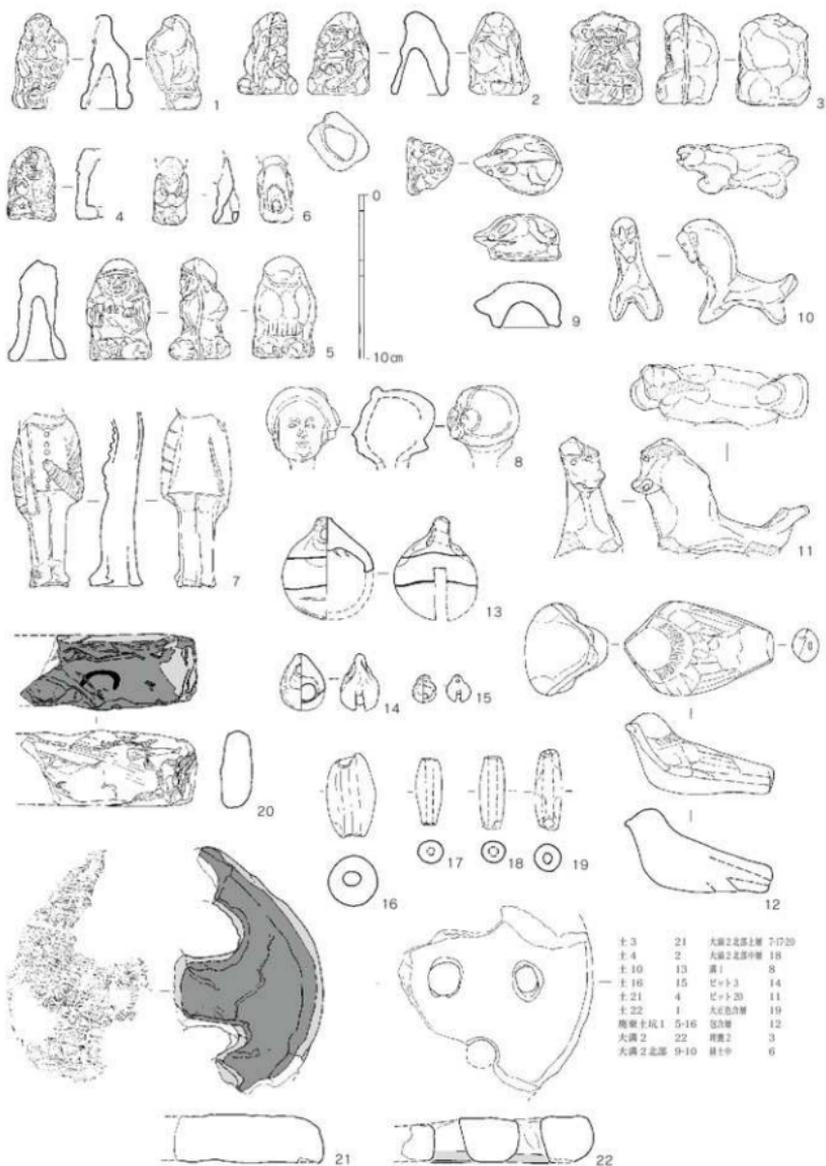
第118図 1次調査出土瓦実測図(1/6)

表54 1次調査出土土器・陶磁器観察表27

遺構名 探検番号 図取番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は取元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・整形・ 装飾技法	窯話の技法	所 見			所 見			
							特記事項	鑑定産地	推定年代	特記事項	推定 産地	推定 年代	
土坑20 115066	鉢	口径33.0 高台径12.4 器高10.8	陶器 褐色灰白色	内面白化粧土を撒付置き取りし、内面から内縁までオレンジ色の灰釉を掛ける			見込みに撒付粉砕白磁土がみつあり、骨付部は7つ痕跡がある	灰釉は透明釉に近い	肥前	1000 5 1750	内面だけが摩滅しているのので、胎瓦と鑑定	在地	不明
土坑20 115077	ミニチュア杯 花卉形	口径3.7 高台径2.1 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け	コバルト全面塗付		骨付輪割ぎ	完形	不明	20世紀前半		在地	不明
土坑20 115088	杯	口径5.3 高台径2.1 器高3.0	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉全面掛け	口縁部に口縁塗付のコバルト		骨付輪割ぎ	ほぼ完形	瀬戸	20世紀前半		在地	不明

表55 1次調査出土土瓦観察表

遺構名 探検番号 図取番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は取元値	胎の種類 胎の特徴	色調	調整・整形・装飾技法				製作技法	所 見			
					凹面	凸面	上下端部・瓦当	側面		特記事項	推定 産地	推定 年代	
土坑23 116081 図取18	平瓦 楕瓦	長さ29.3 幅15.4 厚さ1.8	土師質土層 黄灰白色	暗灰白～灰黒色	ハケで、やや摩滅	ハケ	ハケ	ハケ	切り離し後下家ナデ	1枚作り	内面だけが摩滅しているのので、胎瓦と鑑定	在地	不明
土坑12 116082 図取18	平瓦 楕瓦	長さ43.5 幅28.6 厚さ1.1	土師質土層 黄灰白色 カクセン石を含む	凹凸面にぶい暗黄灰色	ナデ後ハケ	ハケ	基部顔面ナデ	凸面から切り込みを入れ、凹側を少し残して外している		1枚作り		在地	不明
埋蔵6 117011 図取18	平瓦 楕瓦	長さ33.6 幅41.2 厚さ1.4	土師質土層 橙黄色が黄灰白色を挟む	凹凸面橙黄色	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリと面取り	1枚作り			在地	不明
ピット6 117082	平瓦 楕瓦	長さ13.7 幅11.5 厚さ1.8	土師質土層 中心が黄灰色、その外縁が橙黄色、外縁が橙黄色	凹凸面橙黄色	ナデ	ナデ	ナデ	ケズリと面取り	1枚作り	実物に押印が見られるので右端付近の破片		在地	不明
ピット6 117083	平瓦 楕瓦	長さ11.1 幅10.9 厚さ2.2	土師質土層 橙黄灰白色が灰色を挟む	凸面暗黄灰色、凹面暗黄灰色	ハケ	ハケ	ナデ	ケズリと面取り	1枚作り		外面のみ変色	在地	不明
土坑3 117084	丸瓦	長さ14.9 幅9.9 厚さ0.9	土師質土層 ぶい暗黄灰色	ぶい暗黄灰色～ぶい暗黄灰色	オセエ後ナデ	ナデ	ナデ	ケズリと面取り	不明		水田の赤瓦が変色したもの	在地	不明
大溝2北部小割 118011 図取18	丸瓦	長さ28.2 幅14.0 厚さ2.4	瓦質 灰白色	表面側は灰黒色で、内面は灰白色	産と橙骨痕の土をなでている	ナデ	ナデ	ケズリと面取り	不明		一部割化	在地	不明
大溝2北部小割 118022 図取18	丸瓦	長さ23.3 幅13.2 厚さ1.8	瓦質 ぶい～灰白色	ぶい～灰白～黄灰色	股骨と布目痕あり	ナデ	ナデ	ケズリ後ナデ			着色していない 釘孔あり	在地	不明
土坑3 118033	丸瓦	長さ10.0 幅13.0 厚さ2.0	瓦質 灰白色	灰白～灰黒色	不明	ハケ状のナデ	ナデ	ケズリと面取り	不明		着色していない	在地	不明
土坑3 118044 図取18	楕瓦	長さ9.8 幅14.9 厚さ1.4	瓦質 灰白色が黒灰色を挟む	外面 灰白色、内面 灰黒色	脂ナデ	ハケ状のナデ	ナデ	ケズリ	1枚作り			在地	不明
土坑3 118055 図取18	楕瓦	長さ13.3 幅15.5 厚さ1.2	瓦質 灰白色が黒灰色を挟む	外面 灰白色、内面 灰黒色	脂ナデ	ハケ状のナデ	ナデ	ケズリ	1枚作り			在地	不明
土坑21 118066	平瓦	長さ24.6 幅17.0 厚さ2.2	瓦質 灰白色が黒灰色を挟む	内外灰黒色	ナデ	ナデ	瓦当は主文を宝珠文とする唐草文が描かれる	—	1枚作り		着色していない	在地	不明
大溝2北部小割 118077 図取18	平瓦	長さ18.6 幅30.0 厚さ1.5	瓦質 灰白色が黒灰色を挟む	内外灰黒色	ナデ	ナデ	瓦当は主文が菊花文で、唐草文が描かれる	—	1枚作り		着色していない	在地	近代
土坑15 118088 図取18	平瓦	長さ19.9 幅26.4 厚さ2.0	瓦質 青灰色	内外灰黒色	ナデ	ナデ	瓦当は主文3弁菊花文で、唐草文が描かれる	—	1枚作り		着色していない	在地	不明
大土坑3 118099	平瓦	長さ13.5 幅9.7 厚さ1.8	瓦質 灰白色	橙灰色	ナデ	ナデ	瓦当は主文が菊花文で、唐草文が描かれる	—	1枚作り		着色していない	在地	近代
大溝2 118010	平瓦	長さ15.8 幅10.7 厚さ2.0	瓦質 灰白色	端部が黒灰色、他は灰白色	摩滅	摩滅	ナデ	ケズリ	輪割ぎ	胎面摩滅で調整不明		在地	不明

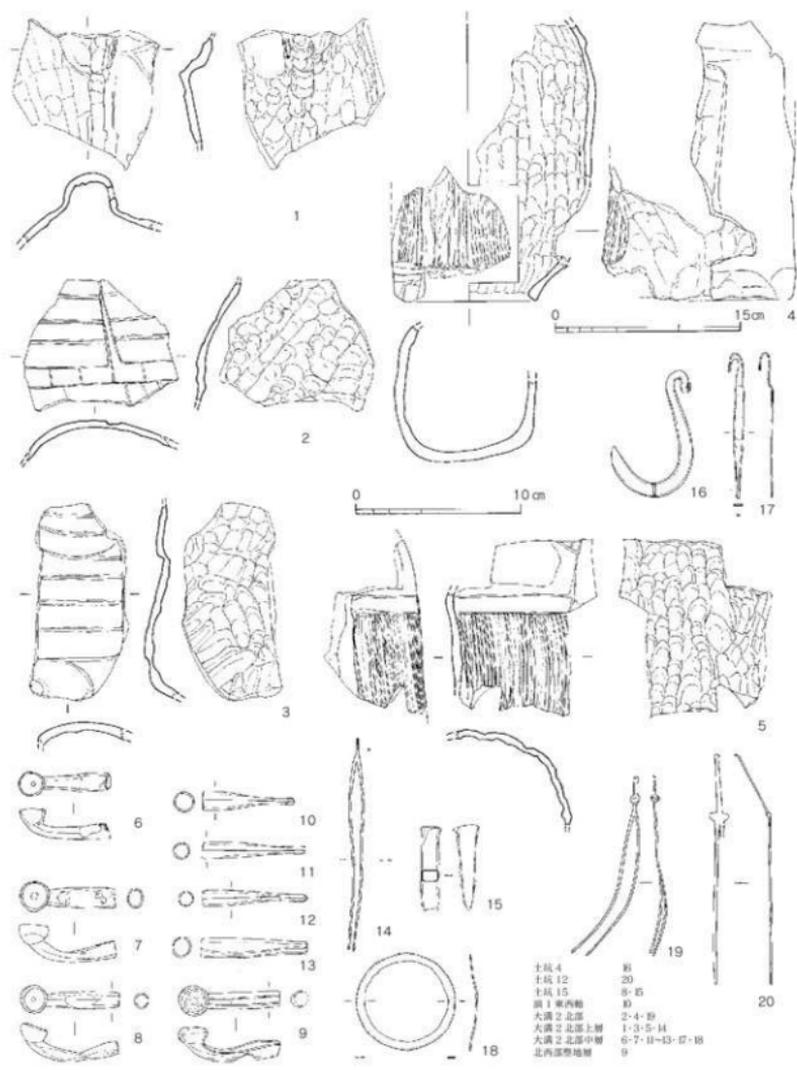


土 3	21	大塚之北塚1層 7-17-20
土 4	2	大塚之北塚中層 18
土 10	13	遺1 9
土 16	15	ビツト3 14
土 21	4	ビツト20 11
土 22	1	大塚色舟層 19
藤原土坑1	5-16	色舟層 12
大塚2	22	埋藏2 3
大塚之北塚	9-10	墓土中 6

第119図 1次調査出土土製品実測図(1/3)

表56 1次調査出土土製品観察表1

遺物名	器種	法量(cm)	胎の種類	調整・整形・装飾技法	製作技法	所 見			
						特記事項	鑑定産地	鑑定年代	
押印番号	形状	( )は復元値	胎の特徴						
図録番号	通称名								
土坑22	119001 図録19	土人形 大黒天像	長3.1 幅3.2 高さ3.7	土師質土師 金葉母なし 黄褐色	後頭部から鼻にかけて長くナデている 後面から押し上げあり	型合わせ成型		在地	不明
土坑4	119002 図録19	土人形 布袋像	長3.0 幅3.4 高さ4.9	土師質土師 黄褐色	表面型合わせた後に下面を押し上げが高く、ほぼ中央になっている	型合わせ成型 表面の型は真鍮でなく銅め	ほぼ定形	在地	不明
埋蔵2	119003 図録19	土人形 大黒天像	長3.44 幅3.3 高さ5.6	土師質土師 金葉母なし 黄褐色	型合わせ成型の接合痕が隆起している	型合わせ成型	後面はヒビ多い 定形	不明	不明
土坑21	119004 図録19	土人形 大黒天像	長さ2.5 幅1.2 高さ4.5	土師質土師 金葉母なし 黄褐色	型合わせ成型の合わせ部で割れたもの	型合わせ成型		不明	不明
埋蔵土坑1	119005 図録19	土人形 大黒天像	長3.38 幅3.0 高さ6.2	土師質土師 金葉母なし 暗灰色	型合わせ成型の接合痕が隆起している 下面から押し上げあり	型合わせ成型	後面はヒビ多い 定形	在地	不明
埋土中	119006 図録19	志保丈夫 掛人形	長3.21 幅1.4 高さ4.2	磁器	型押し成型で、背面はナデ後穿孔している 胸は彫り付く 透明釉全面掛け		頭部欠損	埋蔵	不明
大溝2北部上層	119007 図録19	土人形 兵隊人形	長3.44 幅2.9 高さ10.5	土師質土師 金葉母あり 暗灰白色	型合わせ成型の接合部を削っている 中央で、下面を削いでいない	型合わせ成型	後面は着色なし	在地	不明
大溝2北部上層	119008 図録19	土人形 モダンガール人形	長3.46 厚3.47 高さ4.6	土師質土師 暗灰白色	型合わせ成型と思われるが、接合痕が見られない 着色していたらしく、親子に白かピンクが付着している	型合わせ成型		在地	不明
大溝2北部	119009 図録19	土人形 鼠	長3.38 幅5.3 高さ3.0	土師質土師 暗黄褐色	表面型合わせた後に下面を押し上げる	型合わせ成型	定形	土師	不明
大溝2北部	119010 図録19	土人形 土馬	長さ2.8 幅5.4 高さ6.4	土師質土師 黄灰白色	耳は沈めを入れることで表現	手捏ね	定形	在地	不明
ピット20	119011 図録19	土人形 土馬	長さ3.6 幅8.0 高さ6.8	土師質土師 暗黄灰白色	耳がなく顔は平形で、尻尾を扇形にしている	手捏ね		在地	不明
ピット26	119012 図録19	船笛	長さ5.6 幅9.0 高さ3.1	土師質土師 にぶい黄灰白色	型から外してナデているので、内面が不鮮明	型合わせ成型	型から取壊れか	在地	不明
土坑10	119013 図録19	土鈴	長さ3.6 幅5.0 高さ6.4	土師質土師 黄灰色	天井部内面にしぼりあり 下に方形の穿孔があり、側面に2本の垂線あり	型合わせ成型	褐色色は焼成による色調	在地	不明
ピット3	119014 図録19	土鈴	長さ2.8 幅2.3 高さ3.5	土師質土師 黄灰色	天井部内面にしぼりあり 下に方形の穿孔があり、内部に球が入っている	型合わせ成型	定形	在地	不明
土坑16	119015 図録19	土鈴	長さ3.14 幅1.3 高さ1.6	土師質土師 黄褐色	天井部内面観察不能 下に方形の穿孔があり、内部に球が入っている	型合わせ成型	定形	在地	不明
埋蔵土坑1北部下層	119016	土鐘	長さ3.2 最大径3.0 垂線3.2	土師質土師 にぶい黄灰色	手捏ね ナデ 穿孔径1.0cm	手捏ね成型	ほぼ定形	在地	不明
大溝2	119017	土鐘 菅型	長さ3.8 最大径1.4 垂線8	にぶい暗黄灰色	手捏ね ナデ 穿孔径0.5cm	—	定形	在地	不明
大溝2北部中層	119018	土鐘 菅型	長さ3.40 最大径1.6 垂線7	にぶい暗黄灰色	手捏ね ナデ 穿孔径0.5cm	—	ほぼ定形	在地	不明
大正包含層	119019	土鐘 菅型	長さ2.49 最大径1.7 垂線12	土師質土師 暗黄褐色	手捏ね ナデ 穿孔径0.7cm	手捏ね成型	ほぼ定形	在地	不明
大溝2北部上層	119020	御道具	長さ10.0 幅5.6 厚さ1.8	土師質土師	上面の御紐が尖を強く受け、中央部に平門に掛く変色した痕跡がある 下面は焼けが強くハケ 垂線あり	手捏ね		在地	不明
土坑4	119021	サナ伏土製品	長さ14.8 幅10.0 厚さ2.9	土師質土師	下面は平形で、板状圧痕が残る、焼けが強い 上面は丸みを持ち、良く焼けている 孔の表面も赤色している 径6cm程度で、孔は楕円形に復元できる	手捏ね		在地	不明
大溝2	119022	サナ伏土製品	長さ11.8 幅11.0 厚さ2.8	土師質土師	下面が凸面、上面が凹面を成すのは、焼成時か使用時の歪みだろう 上面は平 下面は焼けていないが断面厚径 径9cmほどに復元できる	手捏ね	調整がなく、側面が丸みをもつので、土輪のサナではない	在地	不明
大溝2北部上層	120001 図録19	大型土人形 手・脚部	長さ10.4 幅5.7 高さ11.8	土師質土師 暗黄褐色 褐色パリスを含む	型押し成型で、踵部分の下位だろう	型合わせ成型		在地	不明
大溝2北部上層	120002 図録19	大型土人形 組武着人形	長さ12.1 幅3.3 高さ10.1	土師質土師 暗黄褐色 褐色パリスを含む	型押し成型で、踵部分以外の部分は何の部位か不明	型合わせ成型		在地	不明



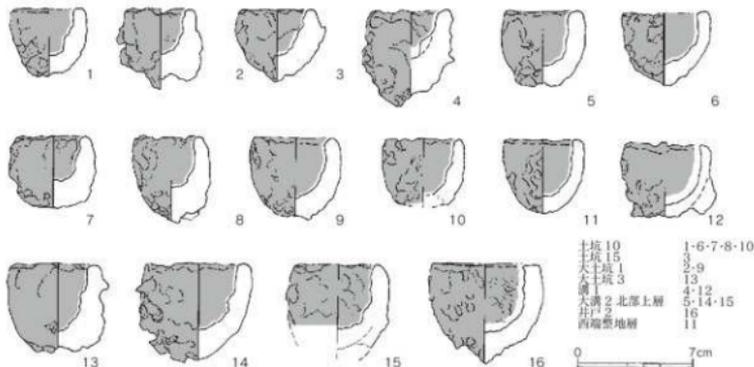
第120圖 1次調査出土土・金属製品実測図(1~5は1/4、他は1/3)

表57 1次調査出土土製品観察表2

遺構名 神12001号 12000号 図版19	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種別 胎の特徴	調整・整形・裝飾技法	製作技法	所 見		
						特記事項	推定産地	推定年代
大溝2北部 12003 図版19	大型土人形 類武者人形	長さ7.5 幅1.8 高さ16.2	土師質土胎 明黄褐色土 褐色パミスを含む	型押し成型で、顔部分の下位だらう	型合わせ成型		在地	不明
大溝2北部 12004 図版19	大型土人形	長さ16.1 幅13.8 高さ22.8	土師質土胎 明黄褐色土 褐色パミスを含む	型押し成型で、外面の浅線から胸の線だらう 5と同一個体だらうが接合しない	型合わせ成型		在地	不明
大溝2北部上層 12005 図版19	大型土人形	長さ12.3 幅8.3 高さ15.5	土師質土胎 明黄褐色土 褐色パミスを含む	型押し成型で、外面の浅線から胸だらう 4と同一個体だらうが接合しない	型合わせ成型		在地	不明

表58 1次調査出土金属製品観察表

遺構名 神12001号 12000号 通称名	器種 形状 通称名	法量(cm・g) ( )は復元値	特 徴	遺構名 神12001号 12000号 通称名	器種 形状 通称名	法量(cm・g) ( )は復元値	特 徴
大溝2北部中層 12006 図版19	柳管釧首	長さ5.5 大径径1.3 首径径0.9	銅製 釧首の木質がわずかに残る	大溝2北部上層 120014 図版19	釧首	長さ13.1 幅1.0 厚さ0.1	真鍮製 上端は尖っているので珠を刺していただらう
大溝2北部中層 12007 図版19	柳管釧首	長さ5.6 大径径2.2 首径径1.1	真鍮製 金メッキ一部残る 跡内部に炭化物残る	土坑15 120015 図版19	釧首	長さ35.2 最大幅1.2 厚さ0.8	鉄製で、頭部は折り曲げて叩いて広くしている
土坑15 12008 図版19	柳管釧首	長さ6.0 大径径1.7 首径径0.8	真鍮製 中央部が折れ曲がっている	大溝2北部中層 120016 図版19	自在鉤	長さ4.8 高さ7.6 厚さ0.2	銅製 無文
北西部豊地層 12009 図版19	柳管釧首	長さ6.2 大径径1.7 首径径0.8	真鍮製 接合部に補修材を嵌せて肥厚している	土坑4 120017 図版19	金具	長さ8.7 幅0.8 厚さ0.1	鉄製 無文 先端は欠損しているか
溝1東西輪 120010 図版19	柳管轆口	長さ5.9 最大径1.2	真鍮製 金メッキなしか 短いもの	大溝2北部中層 120018 図版19	金輪	径7.0 厚さ0.02	銅製 周縁に刻み目があり、組み合わせの金具だらう
大溝2北部中層 120011 図版19	柳管轆口	長さ5.9 最大径1.2	真鍮製	大溝2北部 120019	釧首	長さ11.3 幅1.1 厚さ0.5	銅製 頭部に耳かきがあり、玉は材質が不明だが劣化している
大溝2北部中層 120012 図版19	柳管轆口	長さ6.3 最大径1.1	真鍮製 金メッキ部分的に残る	大溝2北部 120020 図版19	釧首	長さ15.3 幅0.8 厚さ0.3	銅製 頭部に耳かきがあり、玉は失われている
大溝2北部中層 120013 図版19	柳管轆口	長さ6.3 最大径1.3	真鍮製 金メッキ全面				



第121図 1次調査出土土製品(1/3)

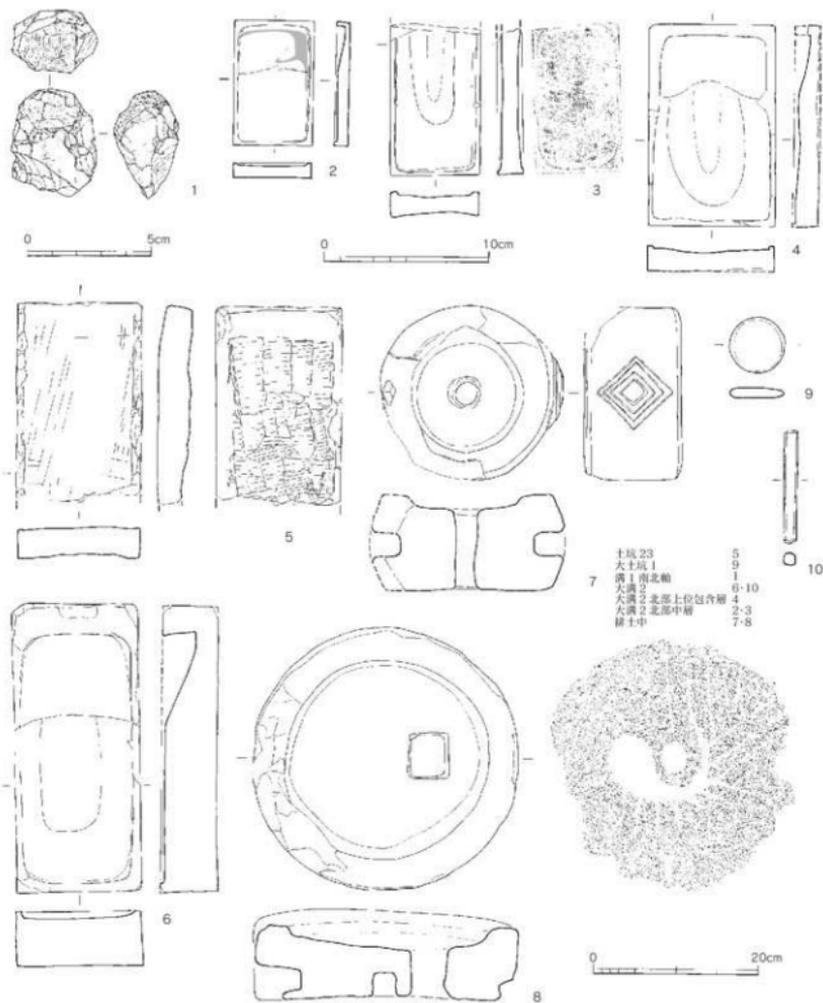
130図1は刀の鞘の半身で、型合わせではなく、刀身を挿し込む部分を繰り込んだものである。表面を繊維質で覆った痕跡や、紐で巻いた緊縛痕はなく木質のみである。刀身を固定する目釘孔はないので、挿し込むだけで固定することになる。上端部と中央部に方形の繰り込みがあるが通常は刀装具の口金物と櫛金物が付く位置だが、付設した痕跡もない。道具刀か白鞘刀であれば、刀装具は必要ないので、未製品なのかもしれない。内面に鉄錆が付着していないことから、刀身を抜いた状態で廃棄したのか、あるいは刀身を抜きとるために半載した可能性もあるが、外面の加工から未製品とするべきだろう。130図2は矢羽形木製品で、表裏ともに間を空けて黒塗りすることで、鷹羽形にしている。『大川の民俗』調査報告によると、上棟式では家の前に破魔矢と弓を飾り、式終了後は棟梁が持ち帰るとされている(引用文献5)。

表59 1次調査出土土製品観察表3

通称名 神国番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種別 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所 見		
						特記事項	埋定産地	埋定年代
土坑10 121図1 図版19	ろっば	口径4.8 器高4.5	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面に鋼の付着物 あり	在地	不明
大土坑1 121図2 図版19	ろっば	口径5.0	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	宛形 内面の一部 に鋼付着	在地	不明
土坑15 121図3 図版19	ろっば	口径4.6 器高4.4	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	宛形 内外面全面 に鋼付着	在地	不明
溝1横 121図4 図版19	ろっば	口径5.1 器高5.2	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	宛形 内面の一部 に鋼付着	在地	不明
大溝2北部上層 121図5 図版19	ろっば	口径4.6 器高4.6	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	宛形 内面の一部 に鋼付着	在地	不明
土坑10 121図6 図版19	ろっば	口径4.2 器高5.4	土師質土器 にぶい灰色 混 入物多い	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面に鉄らしい付 着物あり	在地	不明
土坑10 121図7 図版19	ろっば	口径4.6 器高4.4	土師質土器 にぶい灰色 混 入物多い	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面一部に鋼付着	在地	不明
土坑10 121図8 図版19	ろっば	口径4.2 器高5.4	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	宛形 外面一部に 鋼付着	在地	不明
大土坑1 121図9 図版19	ろっば	口径5.1 器高5.0	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	宛形 内面の一部 に鋼付着	在地	不明
土坑10 121図10 図版19	ろっば	口径4.6	土師質土器 にぶい灰色 混 入物多い	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面に白い付着物 あり	在地	不明
土坑10 121図11 図版19	ろっば	口径5.1 器高4.5	土師質土器 にぶい灰色 混 入物少ない	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面一部に鋼付着	在地	不明
溝1横 121図12 図版19	ろっば	口径5.3 器高4.5	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	宛形 内面の一部 に鋼付着	在地	不明
大土坑3 121図13 図版19	ろっば	口径5.0	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	宛形 内面に白色 の付着物	在地	不明
大溝2北部上層 121図14 図版19	ろっば	口径6.4 器高6.0	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	宛形 内面の一部 に鋼付着	在地	不明
大溝2北部上層 1 21図15 図版19	ろっば	口径5.0	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか 砥 部欠損	手捏ね	宛形 内面の一部 に鋼付着	在地	不明
井戸2 121図16 図版19	ろっば	口径(6.4) 器高(6.0)	土師質土器 宛形のため胎土 不明	全面ガラス化のため胎面観察できないが手捏ねか	手捏ね	宛形	在地	不明



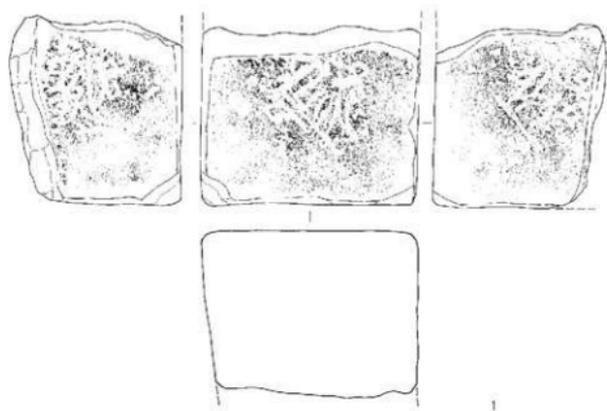
第122圖 1次調査出土磁石実測圖(1/3)



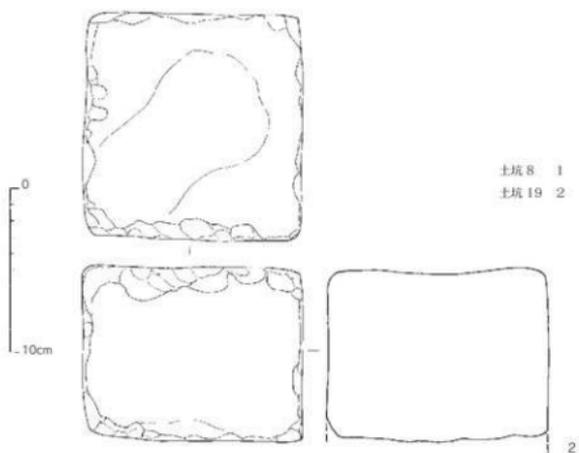
第123圖 1次調査出土石製品実測図(1・9・10は1/2、7・8は1/6、他は1/3)

表60 1次調査出土石製品観察表

遺構名 棟回番号 図取番号	器種 形状 通称名	質量(cm・g)		特 徴	遺構名 棟回番号 図取番号	器種 形状 通称名	質量(cm・g)		特 徴
		( )は復元値	( )は復元値				( )は復元値	( )は復元値	
北西部整地層 12201 1 図取20	砥石 中砥 手持ち砥石	長さ5.0 幅4.8 厚さ4.2重さ134		砂石製 使用面は上面のみで他は整形面と異なるが、断面形状が詳しく不明	土坑12 1220116 図取20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ9.3 幅4.3 厚さ7.8重さ437		天草石製 方形の置き砥石を粗磨りして再利用している
北西部整地層 12202 2 図取20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.9 幅5.6 厚さ1.8重さ140		天草石製 表面にやや窪みと使用痕跡あり 裏面は使用しており、両側面は整形面 上下面は欠損後整形	土坑11 122017 図取20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ9.0 幅7.8 厚さ3.0重さ229		天草石製 裏面は欠損後整形面新たに底面を作り、左側面は一部に整形面が残る
土坑4 12203 3 図取20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ7.5 幅5.9 厚さ0.6重さ53		頁石製 表裏が使用面で、表面に潤滑痕があるように、薄く削られた破片を利用している 側面と上面は整形面	西端整地層 122018 図取20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ14.2 幅6.4 厚さ3.9重さ427		天草石製 上下端面が使用面に対して斜めに整形面があり、両側・裏面は欠損後整形面
井戸2 12204 4 図取20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.3 幅5.0 厚さ5.2重さ133		天草石製 欠損部を整形しているのみで、片面はすべて使用している面に凸面はない	溝1南北軸 12301 図取20	火打石	高さ4.3 幅3.2 厚さ23重さ37		チャート製 表面を土層に残し、表面を潤滑し下層を刃端のように尖らせて使用部を形成している
ピット7 12205 5 図取20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ8.1 幅4.3 厚さ2.6重さ124		天草石製 使用面はやや窪む 裏面と下端面は欠損後の整形面 右側面の上面は集中的に使用されている	大溝2北部上位包合層 12302 図取20	硯	長さ7.6 幅4.7 厚さ0.8重さ67		水磨朱が残るので、朱用粘板岩製 黒 完形
土坑12 12206 6 図取20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ4.5 幅3.2 厚さ2.5重さ341		天草石製 上端面のみ整形面で、他は使用面だろうか 左側面の凸面は曲面用か	大溝2北部中層 12303 図取20	硯	長さ9.1 幅5.6 厚さ1.6重さ159		裏面に緑輝で「赤陶関」とあるので赤陶石 輝緑板岩製
北西部整地層 12207 7 図取20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ5.6 幅4.7 厚さ1.7重さ51		天草石製 両側面は整形面、裏面・上端面は欠損後の整形面	大溝2北部上位包合層 12304 図取20	硯	長さ12.3 幅7.8 厚さ1.6重さ267		裏面は潤滑しているが、緑輝文字はない 粘板岩製 黒
土坑24 12208 8 図取20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ6.0 幅3.0 厚さ1.5重さ332		天草石製 上端の欠損面以外すべて使用面	土23 12305 図取20	硯	長さ12.1 幅7.5 厚さ1.8重さ315		天草石製だが茶色の筋が入っていない 上下端と側面の高い部分を打ち欠いて平削りにし、底を磨って再利用しようとして廃棄している
産業土坑1 12209 9 図取20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ9.1 幅4.0 厚さ2.4重さ163		天草石製 左側面は整形面だが、右側面は段がつくで使用面 上端面は整形面	大溝2 12306 図取20	硯	長さ14.2 幅7.6 厚さ3.5重さ773		天草石製だが茶色の筋が入っていない はは完形 磨が著しく付着
土坑37 122010 10 図取20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ10.1 幅4.8 厚さ3.8重さ298		天草石製 上面は欠損後整形面 下面は潤滑しているが、整形面	溝出土中 12307 7	茶白上白	径21.4 高さ12.0 重さ8.06g		凝灰岩製 多孔質 多孔質
土坑3 122011 11 図取20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.8 幅3.6 厚さ3.3重さ162		上端面と裏面は欠損後整形面	溝出土中 12308 8	上白	径32.2 高さ11.2 重さ13.98g		凝灰岩製 多孔質
大七坑1 122012 12 図取10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ8.6 幅5.8 厚さ3.2重さ236		天草石製 使用面は本来直方体の砥石の端であったが、欠損後上面に転用したものであり、整形面の中央部だけを使用している 表面・下端面は欠損後整形面、上端面は本来の整形面	大七坑1 12309 9 図取20	蒜石	径2.2 厚さ0.4 重さ3		粘板岩製 黒 よく磨かれている
大溝2 122013 13 図取20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.4 幅5.5 厚さ4.5重さ223		天草石製 置き砥石の欠損部を粗磨りして再利用したもので、断面逆台形にして持ちやすくしている	大溝2 123010 10	石筆	長さ4.6 径6.6 重さ4		滑石製 側面は6面に平削面を持ち、上下端面は両方使用している
産業土坑2 122014 14 図取20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ8.0 幅5.9 厚さ5.8重さ333		天草石製 下端面は欠損後整形面で、側面は整形面が欠損したもので、部分的に使用している	土坑8 12401 図取20	石磨部材	長さ10.8 幅13.2 厚さ10.1重さ2850		凝灰岩製 多孔質 文字が磨りこぼされる
産業土坑2 122015 15 図取20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ10.6 幅9.3 厚さ3.5重さ558		天草石製 裏面は平削り整形面で中央に最打痕が残る 左側面も整形面で、その他は使用面	土坑19 12402 2 図取20	石磨部材か	長さ10.6 幅13.5 厚さ13.4重さ4150		凝灰岩製 緑輝や加工痕はない



1



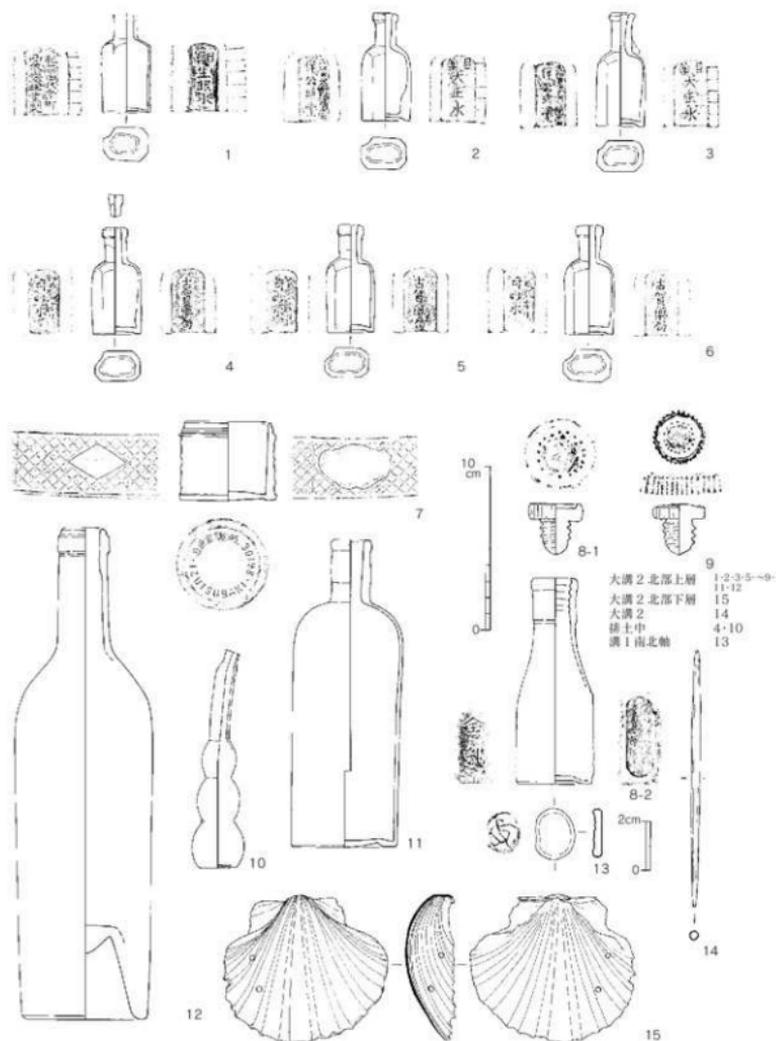
土坑 8 1

土坑 19 2

0  
10cm

2

第124図 1次調査出土石塔部材実測図(1/3)



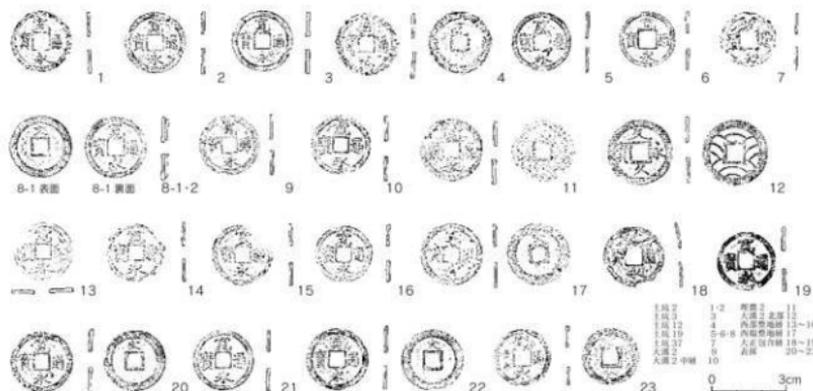
第125図 1次調査出土ガラス・鹿角・貝製品実測図(13は1/2、他は1/3)

131図1は大ききから子供用のものだろう。前歯は大ききからこの下駄の歯と想定したが厚きが合っておらず確認にかける。131図2の「善」の焼印は製作者の名前ではないかと思われるので、この記号は屋号かもしれない。131図5の前歯は欠損したものであって、摩滅したものでない。131図7は前歯に裏から釘が打ち込まれているが、欠けた面から打ち込んでいるので補修痕ではない。『久留米市史』によると、「家出人が出たら、その人の履物に釘を打つ」という記述があるので、下駄を焼くこと自体が禁忌行為だった可能性がある。これは×の上に横線があるので、単に×のモチーフではないようだ。132図6のぼっくりの台の裏には3つの山形の抉りが入っているが、加工痕跡ではなく、意図的な形態である。132図10は歯の厚さがわずかに1cmしかない。129図15の下部に焼印があるが、残りが悪く判読できないものの、おそらく131図2の丸に「善」と同じ焼印であろう。そういった俗信の類かもしれない(引用文献6)。131図11の中央の孔は穿孔したのではなく、節穴である。131図16は横緒穴がないので未製品だろうか。釘穴らしいものが横穴の位置にあるので、ぼっくりと草履下駄の折衷のような製品の可能性もある。

図版24-1~5は紐で、材質は分析にかけていないが、棕桐製のものほとんどだろう。1は紐紐で結び目は馬車馬のごぶと呼ばれるものである。2は幅5から7ミリの樹皮のようなものを纏ったもので、弾力性がない。3本はあるが本来1本のものだろう。3の結び目は止め結びであろう。4は2本の撚り紐2本で、漁師結びで結び目を2つ作っている。5は2本で纏った紐3本の組紐で、2本の紐を漁師結びで、結び目を2つ作っている。

表61 1次調査出土ガラス・鹿角・貝製品観察表

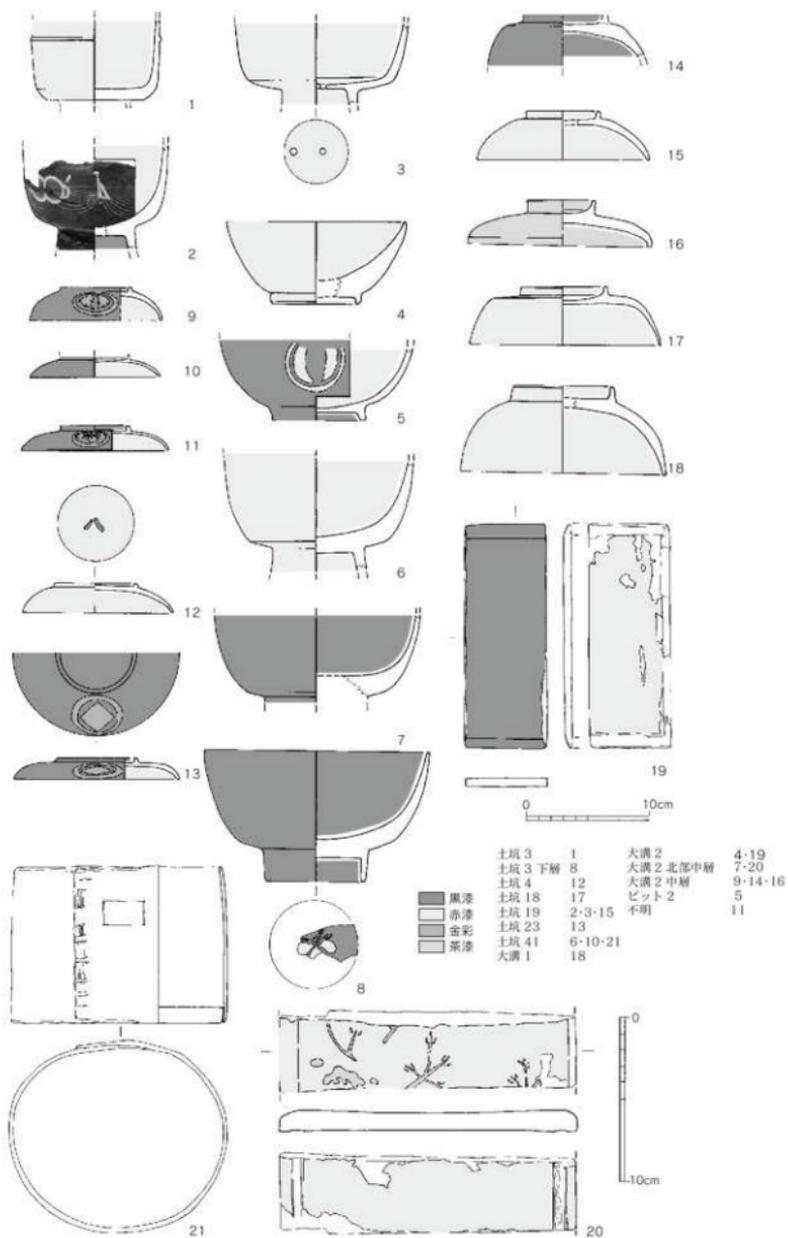
遺物名	器種	法量(cm)	特 徴	遺物名	器種	法量(cm)	特 徴
捺印番号	材質	( )は復元値		捺印番号	形状	( )は復元値	
図版番号	通称名			図版番号	通称名		
大溝2北部上層 125図1 図版21	瓶 緑ガラス 日薬瓶	底面長軸2.8 底面短軸2.1	整合させ「肥前田代町内浦愛生堂製」と「日業」/生煎水、の陶器あり 両側の5本の凸部は目盛りの特徴があるのだろうか	大溝2北部上層 125図8-2 図版21	瓶蓋 緑ガラス 牛乳瓶蓋	口径3.2 ネジ部径1.8 部高3.1	ネジ式 整合させ 接合痕わずかに上の形状は接合後のステップで「え」とも読める
大溝2北部上層 125図2 図版21	瓶 青ガラス 日薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸2.0 部高6.6	整合させ「久留米市局四」/伴公明堂、「日業」/大正水。目盛りの陶器あり 口縁部が玉粒状で、バリが残る	大溝2北部上層 125図9 図版21	瓶 緑ガラス 牛乳瓶蓋	口径3.2 ネジ部径1.8 部高3.0	ネジ式 整合させ 接合痕わずかに上の内面は接合後のステップで、「水」と書かれている
大溝2北部上層 125図3 図版21	瓶 青ガラス 日薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸2.0 部高6.6	整合させ「久留米市局四」/伴公明堂、「日業」/大正水。目盛りの陶器あり	大溝2北部上層 125図10 図版21	瓶 緑ガラス ニキ瓶	口径6.8 底径2.1 部高13.6	口縁部は打ち欠けなし。定形 整合させ 口縁部が曲がっているのは口縁部の処理の失敗 気泡あり
大溝2北部上層 125図4 図版21	瓶 青ガラス 日薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸2.0 部高6.6	整合させ「古賀薬局」/奇妙水「めですり」の陶器あり コスモ瓶が残っていた	大溝2北部上層 125図11 図版21	瓶 緑ガラス	口径2.5 底径5.4 部高8.5	整合させの接合痕なく、全体がややひびつたので、吹きガラスか 定形 無気
大溝2北部上層 125図5 図版21	瓶 青ガラス 日薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸2.0 部高6.6	整合させ「古賀薬局」/奇妙水「めですり」の陶器あり 胴部が曲がっている	大溝2北部上層 125図12 図版21	瓶 ワインか 緑ガラス	口径2.2 底径2.1 部高29.8	底面を1/3だけしている 整合させの接合痕わずかにあり
大溝2北部上層 125図6 図版21	瓶 青ガラス 日薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸2.0 部高6.6	整合させ「古賀薬局」/奇妙水「めですり」の陶器あり	大溝2 125図13 図版19	おはじき 青ガラス	長軸2.1 短軸2.0 部高4.4	定形 扁平な楕円形で、片面にじゃんけんの「グー」の陶器がある
大溝2北部上層 125図7 図版21	瓶 透明ガラス ボヤード瓶	口径5.1 底径5.7 部高4.7	円柱状 側面は点線格子で、窓が両面にあり。表裏に「東 匠 登 録 N630148」と上と下逆に「U/ZU/TSU/BAKI」の陶器がある	大溝2 125図14 図版19	箸	長さ15.7 底径10.6	鹿角製 定形 細い方が先端で、先端以外は光沢がある
大溝2北部上層 125図8-1 図版21	瓶 緑ガラス 牛乳瓶	口径2.7 底径4.5 部高12.6	口縁部はネジ式 整合させ 接合痕わずかに内面に牛乳のカルシウム分が残る	大溝2北部上層 125図15 図版19	貝杵子	長さ9.0 幅9.9 高さ3.0	板厚貝製 内面の着色は使用によるものだろう



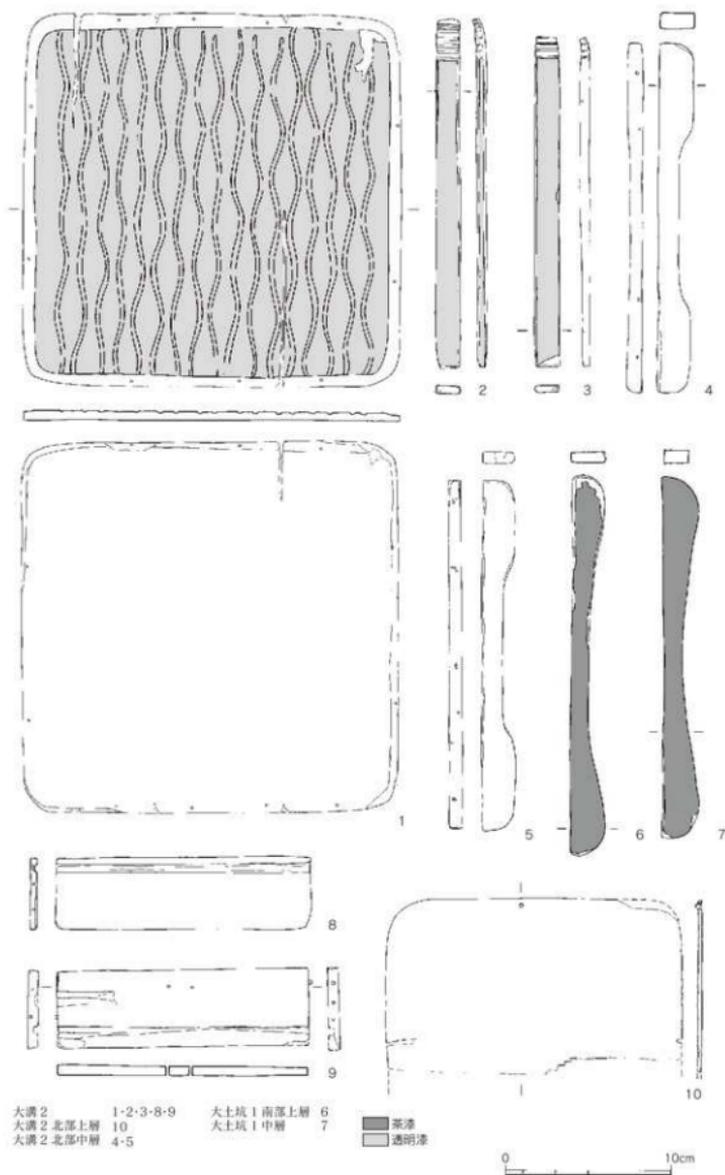
第126図 1次調査出土銭実測図(1/2)

表62 1次調査出土銭観察表

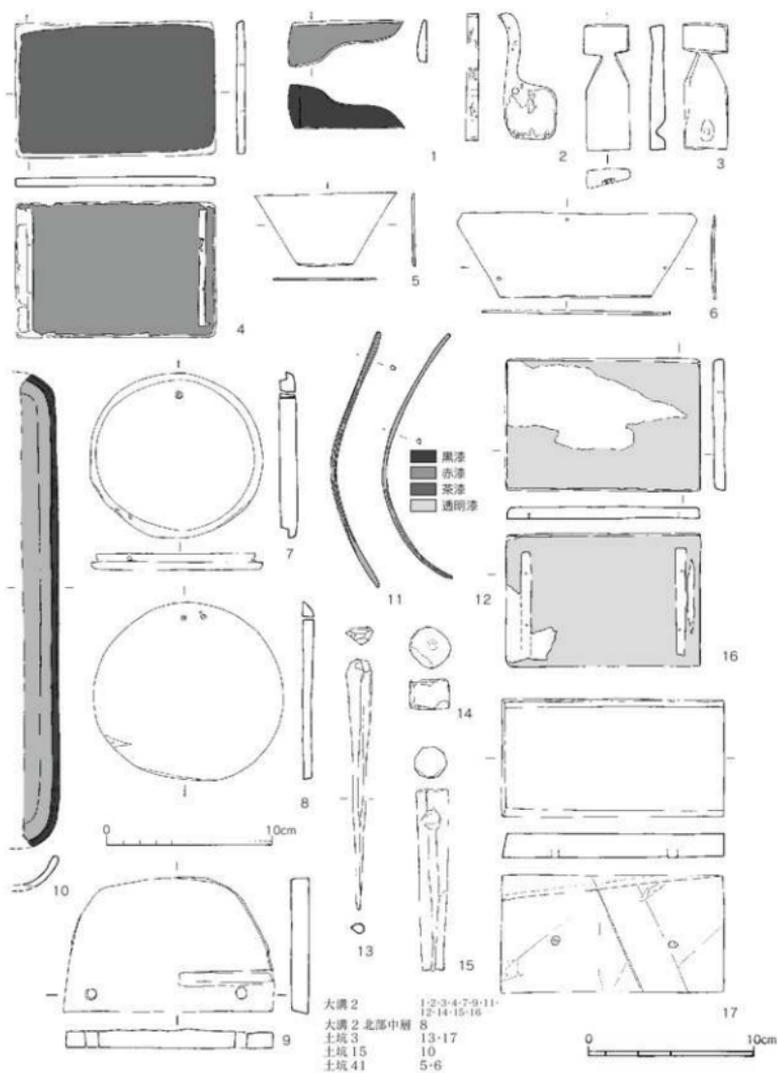
遺物番号	銭名	法量(cm)		特徴	遺物番号	銭名	法量(cm)		特徴
		径	孔径				径	孔径	
土坑2 126図1 図版19	寛永通宝 新寛永	2.5 0.6		銅質が良いが緑青多く付着 「宝」の字体から平田手(1726年初鋳)	大溝2北庫 126図12 図版19	文久永宝	2.7 0.6		銅質が良い、残りも良い (1863年初鋳)
土坑2 126図2 図版19	寛永通宝 新寛永	2.5 0.6		錆びが少なく、裏がやや摩滅	西部築地層 126図13 図版19	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		銅質良好 銅質が良い、残りも良い 「宝」の字体から芝新開手銭(1716年初鋳)
土坑3 126図3 図版19	寛永通宝 新寛永	2.5 0.6		銅質が良い、残りも良い 「宝」の字体から石巻銭(1730年初鋳)	西端築地層 126図14 図版19	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		銅質が良い、残りも良いが、縁が欠損 「宝」の字体から芝新開手銭(1716年初鋳)
土坑12 126図4 図版19	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		緑青多く付着 (1668年初鋳)	西部築地層 126図15 図版19	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		銅質悪く、摩滅している 欠損あり 二日市村銭(1637年初鋳)
土坑19 126図5 図版19	寛永通宝 古寛永	2.5 0.5		「宝」の字体が独特で分類不明	西部築地層 126図16 図版19	寛永通宝 古寛永	2.3 0.6		裏面は摩滅して、外縁と文字の高さが同じになっている 古田銭(1716年初鋳)
土坑19 126図6 図版19	寛永通宝 新寛永	2.4 0.7		錆びが少なく、残り良い 十方理銭様(1768年初鋳)	西端築地層 126図17 図版19	寛永通宝 文銭	2.4 0.6		銅質が良い、残りも良い (1668年初鋳)
土坑37 126図7 図版19	寛永通宝 古寛永	2.2 0.6		外縁が磨り減っている 文字の遺存状況が悪いので分類不明	大正包含層 126図18 図版19	寛永通宝 新寛永	2.4 0.6		表面摩滅して、外縁と文字の高さが同じ になっている 「宝」の字体から平田手 (1726年初鋳)
土坑19 126図8-1 図版19	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		表面で8-2と鎌倉 (1668年初鋳)	大正包含層 126図19 図版19	寛永通宝 新寛永	2.3 0.6		歪みあり 「宝」の字体から平田手(1726年初鋳)
土坑10 126図8-2 図版19	寛永通宝 不明	2.3 0.6		表面で8-1と鎌倉 裏に文字なし	表探 126図20 図版19	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		残り良い 裏面のみ茶色に変色 (1668年初鋳)
大溝2 126図9 図版10	寛永通宝 新寛永	2.5 0.7		銅質が良い、残りも良い 裏に文はない	表探 126図21 図版19	寛永通宝 古寛永	2.4 0.7		銅質よ、残りよい 高田所造銭(1717年初鋳)
大溝2 中興 126図10 図版19	寛永通宝 古寛永	2.2 0.6		錆びが少なく、やや摩滅している 二日市村銭(1637年初鋳)	表探 126図22 図版19	寛永通宝 文銭	2.4 0.7		銅質が悪く、裏面は摩滅している 1668初鋳
埋蔵2 126図11 図版19	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		錆び著しい (1668年初鋳)	表探 126図23 図版19	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		銅質がやや悪いが、残りが良い 1668初鋳



第127図 1次調査出土木製品実測図1 (1941/4、他は1/3)



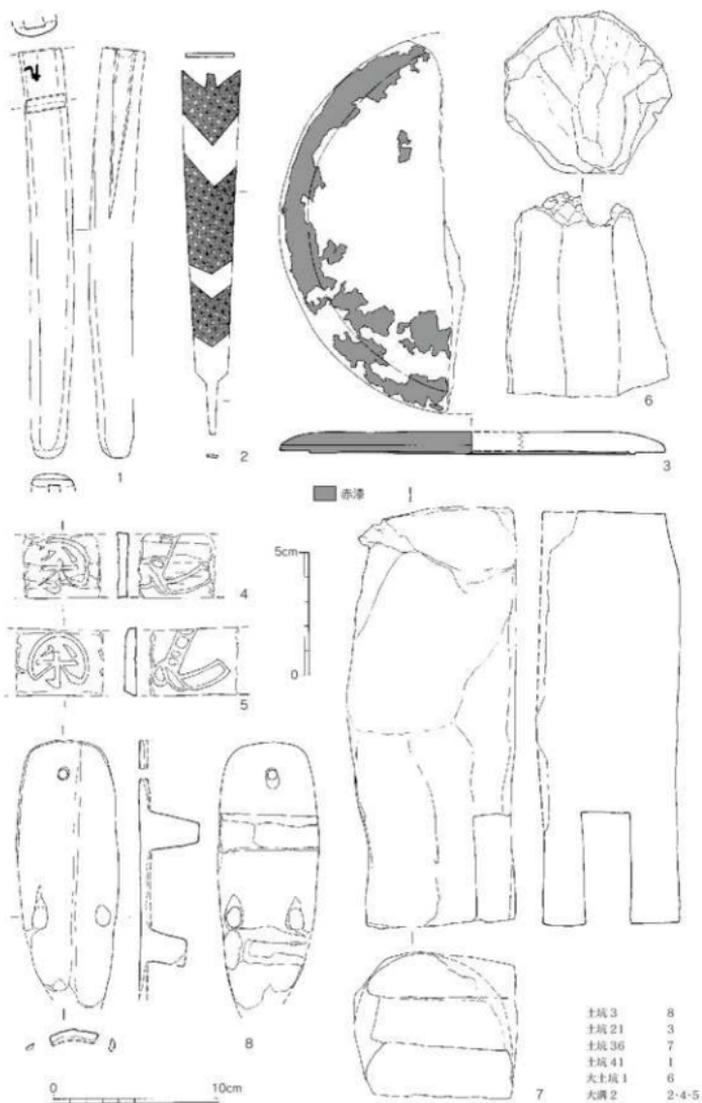
第128図 1次調査出土木製品実測図2 (1/3)



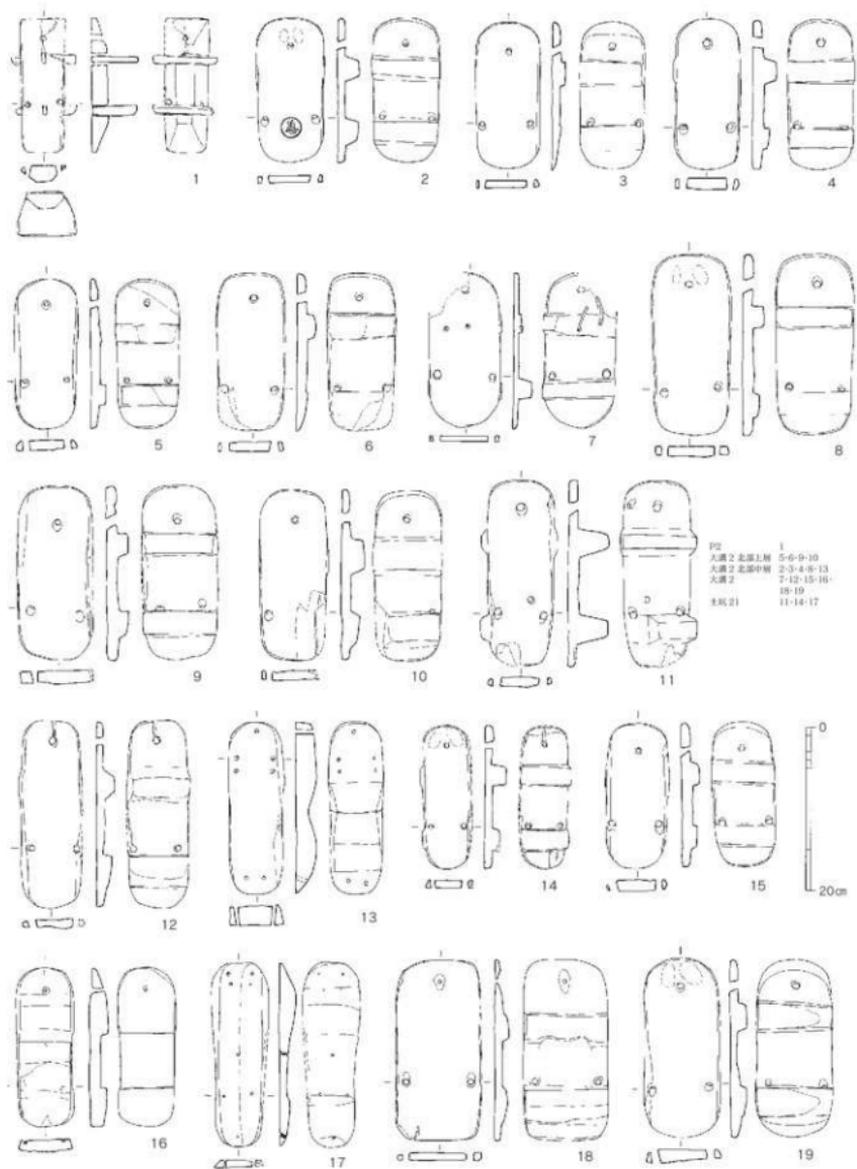
第129図 1次調査出土木製品実測図3(4・17は1/4、他は1/3)

表63 1次調査出土木製品観察表1

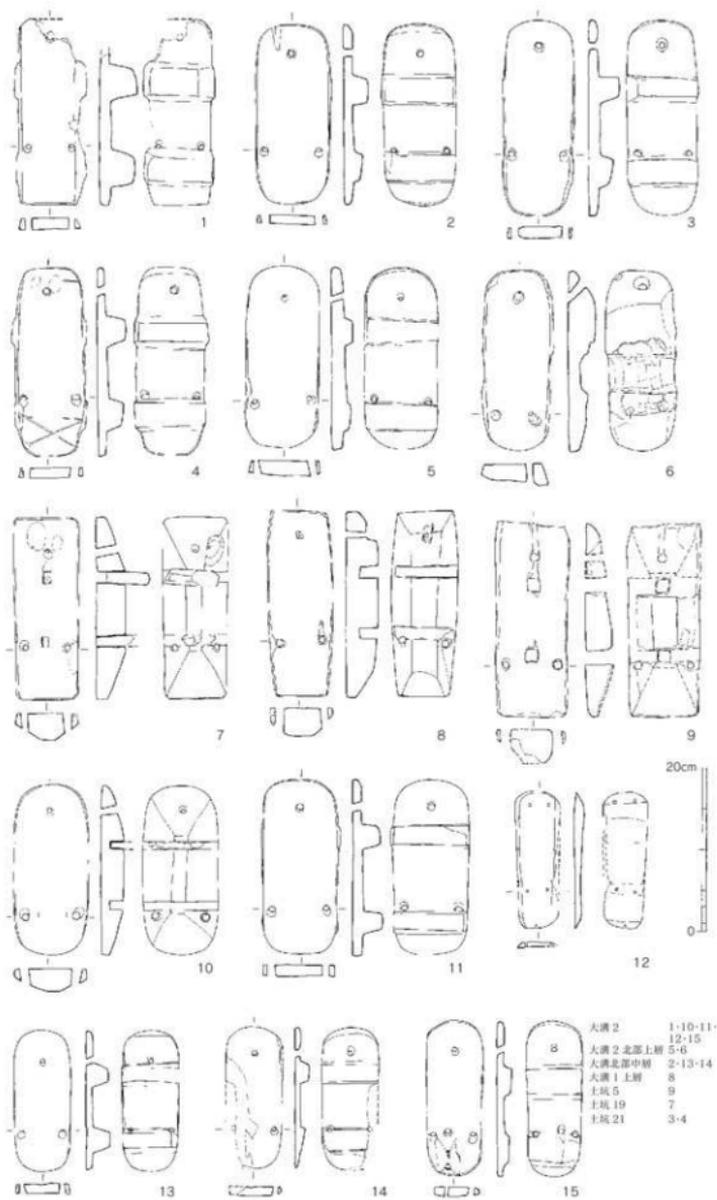
遺構名	遺種	法量(cm)	特徴	遺構名	遺種	法量(cm)	特徴
神田番号	形状	( )は復元値		神田番号	形状	( )は復元値	
図版番号	通称名						
土坑3	127R11 図版21	小樽瓶 最大径(7.8)	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆。高台内面の赤漆は剥落しており、裏面が合ったのか不明。押し跡がよくみられる。	大溝2北条上層	128R5 図版21	腰丸形 長さ20.3 幅2.0 厚さ0.7	2脚 上端面に目釘孔あり
土坑15	127R2 図版21	瓶 最大径(8.8)	内外面黒漆。1線部が欠損している。外面に金彩の文様あり。モチーフ不明。14個残存	大土坑1南条上層	128R6 図版21	足打折敷の脚 長さ2.0 幅23.3 厚さ0.7	赤漆塗りで2脚。上端面に目釘孔がなく、脚のような接合材のようなものが付着していた
土坑19	127R3 図版21	瓶 最大径(10.7) 高さ(4.6)	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆だが、内面は赤漆に黄色している。蓋もあり。漆の残りが多い。底面に2つの穿孔があり、何かと繋げたか	大土坑1中層	128R7 図版21	足打折敷の脚 長さ3.8 幅24.6 厚さ0.7	赤漆塗りで2脚。上端面に目釘孔がなく、脚のような接合材のようなものが付着していた
大溝2	127R4	瓶 口径(11.0) 高さ(5.6) 部高5.0	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆。外底部の赤漆は剥落している	土坑21	128R8 図版21	脚板 長さ2.0 幅23.3 厚さ0.7	側面の片側に木釘孔があるので、方形脚の上端は欠損しているの、もう少し長いものか。つくりは粗雑
ピット2	127R5 図版21	瓶 最大径(11.4)	内外面黒漆で、外面に赤漆で丸に向かい合う双葉文を描く	大溝2	128R8 図版21	脚板 長さ3.0 幅15.4 厚さ0.5	側面に木釘孔が2つあり、内面下端に溝を彫っているの、その溝に黒漆を塗り込んだもの。上端面に目釘孔がなく、上には接かない
大溝2中層	127R6	瓶 最大径(11.5)	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆。高台は欠けている。5個残存	大溝2	128R9 図版21	脚板 長さ4.9 幅11.5 厚さ0.6	木釘孔が1個側面に2つ、前面に3つあり、内面下端に溝を彫っているの、その溝に黒漆を塗り込んだもの。上端面に目釘孔がなく、上には接かない
大溝2北条上層	127R7	瓶 最大径(12.6)	内外面黒漆	大溝2北条上層	128R10 図版21	折敷 長さ10.5 幅17.8 厚さ0.3	木釘孔が中央に挿入されている。脚があったら
土坑3下層	127R8	瓶 口径(13.1) 高さ(6.2) 部高8.0	内外面黒漆で、図上接合。高台内に赤漆で割文が描かれる	大溝2	128R11 図版21	折敷の脚 長さ2.7 幅9.9 厚さ0.6	上端部の欠損部に膠状のものが付着しているの、膠の跡と見た。内外面黒漆塗りで、反つて内面には赤漆を上塗り
大溝2中層	127R9	瓶 つまみ径(4.2) 部径(7.8) 部高1.2	内外面黒漆、内面赤漆で、外面に金彩で丸に片葉文を向かい合わせたに似た家紋文	大溝2	128R12 図版22	不明木製品 長さ7.7 幅3.2 厚さ0.7	全面に漆料が塗布されている漆材で、表面が。穿孔部に目釘の跡がない。漆は色褪した赤か
土坑41	127R10	瓶蓋 つまみ径(4.2) 部径(7.8)	内外面黒漆塗りで、図上接合。高台内に赤漆で割文が描かれる	大溝2	128R13 図版22	曲げ物固定具 長さ7.7 幅2.8 厚さ1.0	下層に木釘孔らしいものあり。底板と接合したもののか
西風不明	127R11	蓋 つまみ径(4.2) 部径(8.0) 部高1.5	内外面黒漆、内面赤漆で、外面に金彩で丸に四つ葉文を描く家紋文。4個残存。蓋大きい	大溝2	128R14 図版22	脚板 長さ10.0 幅17.2 厚さ0.7	内外面黒漆、内面赤漆。木釘孔が左下の下角から上がったところと、上辺の中央の3箇所あり
土坑4	127R12	瓶蓋 つまみ径(5.1) 部径9.2 部高1.8	内外面赤漆で、下塗りなし。1線部が欠損している。外面と片面に「八」と赤漆の跡	土坑41	128R15 図版22	脚板 長さ4.6 幅8.5 厚さ0.2	逆合の上部を取っていないので、宛明木釘孔が十分に挿入するの
土坑23	127R13	瓶蓋 つまみ径(4.9) 部径(10.0) 部高1.3	内外面黒漆、内面赤漆で、外面に金彩で丸に片葉文を向かい合わせたに似た家紋文	大溝2	128R16 図版22	不明木製品 長さ8.3 幅12.8 厚さ1.1	板材の側面に劣化していない。孔は大きく、釘孔ではない。下板の作りにも似る
大溝2中層	127R14	瓶蓋 最大径(10.5)	内外面黒漆	大溝2	128R17 図版22	曲げ物板 長さ11.5 幅10.8 厚さ2.1	柄の先端を留める部材を固定する木釘孔がある。側面に段があり、横板を固定する木釘孔がある
土坑19	127R15	瓶蓋 つまみ径(4.4) 部径(10.4) 部高3.1	内外面赤漆	大溝2北条中層	128R18 図版22	曲げ物板 長さ11.5 幅10.1 厚さ0.7	柄の先端を留める部材を固定する木釘孔が2つある。側面に段がなく、横板を固定する木釘孔もない
大溝2中層	127R16 図版21	瓶蓋 つまみ径(4.1) 部径(11.1) 部高2.8	内外面赤漆。9個残存。蓋なし	大溝2	128R19 図版22	不明木製品 長さ8.3 幅12.8 厚さ1.1	板材の側面に劣化していない。孔は大きく、釘孔ではない。下板の作りにも似る
土坑18	127R17 図版21	瓶蓋 つまみ径(5.4) 部径(11.4) 部高3.5	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆。無文	土坑15	128R19 図版22	脚 長さ18.7 幅14.0 部高1.5	全面黒漆塗りの上に1線部以外赤漆上塗りのため、1線部のみ黒漆が見える
大溝1	127R18	瓶蓋 つまみ径(6.2) 部径(11.2) 部高2.8	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆。外底部の赤漆は剥落している。5個残存	大溝2	128R19 図版22	蓋 長さ(約16.5) 幅(約16.4)	板材の側面に劣化していない。孔は大きく、釘孔ではない。下板の作りにも似る
大溝2	127R19 図版21	瓶蓋 つまみ径(5.7) 部径(13.7) 厚さ0.6	表面黒漆で、表面赤漆で側面に受け厚の跡がつく。膠のような接合材らしいもので付着しているか	大溝2	128R20 図版22	蓋 長さ(約11.5) 幅(約10.4)	正みが大きく正確な長さはない。不明。赤漆塗りで、表面は一貫している
大溝2北条中層	127R20 図版21	重箱蓋 長さ4.8 幅18.0 厚さ1.2	表面赤漆で、新漆で植物文を描き、内面赤漆。側面から7mm離れた位置に受け厚の跡がつく。膠のような接合材らしいもので付着しているか	土坑3	128R21 図版22	脚か 長さ15.3 幅18.0 部高1.1	蓋部は正方形で六角形で、先端は尖らされている
土坑41	127R21	曲げ物 部高9.5 長さ13.1 幅11.9	底板は付いており、取り上げ後部材が崩壊した。復元に図化	大溝2	128R21 図版22	柱 径2.4 部高1.5	平面四角で、板材の周囲を覆って作っている
大溝2	128R1 図版21	脚 長さ22.5 幅21.0 厚さ1.6	表面透明漆で、上面の端部は木釘あり、縁がつく。表面にはよけ板文の跡が見える。表面に、木釘孔がなく、脚を固定する溝もない	大溝2	128R15 図版21	柱 長さ2.0 幅2.0 部高11.0	平面8角形で、板材の周囲を覆って作っている。下部に面取り残る
大溝2	128R2 図版21	蓋 長さ21.2 幅1.5 厚さ0.6	内面のみ透明漆で、端部は内面側に短みが入っており、溝曲でできるよりにしている	大溝2	128R16 図版21	蓋か 長さ8.0 幅11.8 厚さ0.8	全面は透明漆塗りで、1面に長方形の接合部があり、そこに木釘孔が2つずつある
大溝2	128R3 図版21	蓋 長さ20.1 幅1.5 厚さ0.6	内面のみ透明漆で、端部は内面側に短みが入っており、溝曲でできるよりにしている	土坑3	128R17 図版22	不明木製品 長さ9.7 幅17.9 厚さ2.0	側面や後面に木釘がなく、裏面中央に釘が2つあることから、裏面側から固定しており、表面は平面に彫形している
大溝2北条中層	128R4	脚板 長さ21.2 幅3.1	2脚。上端面に目釘孔あり				



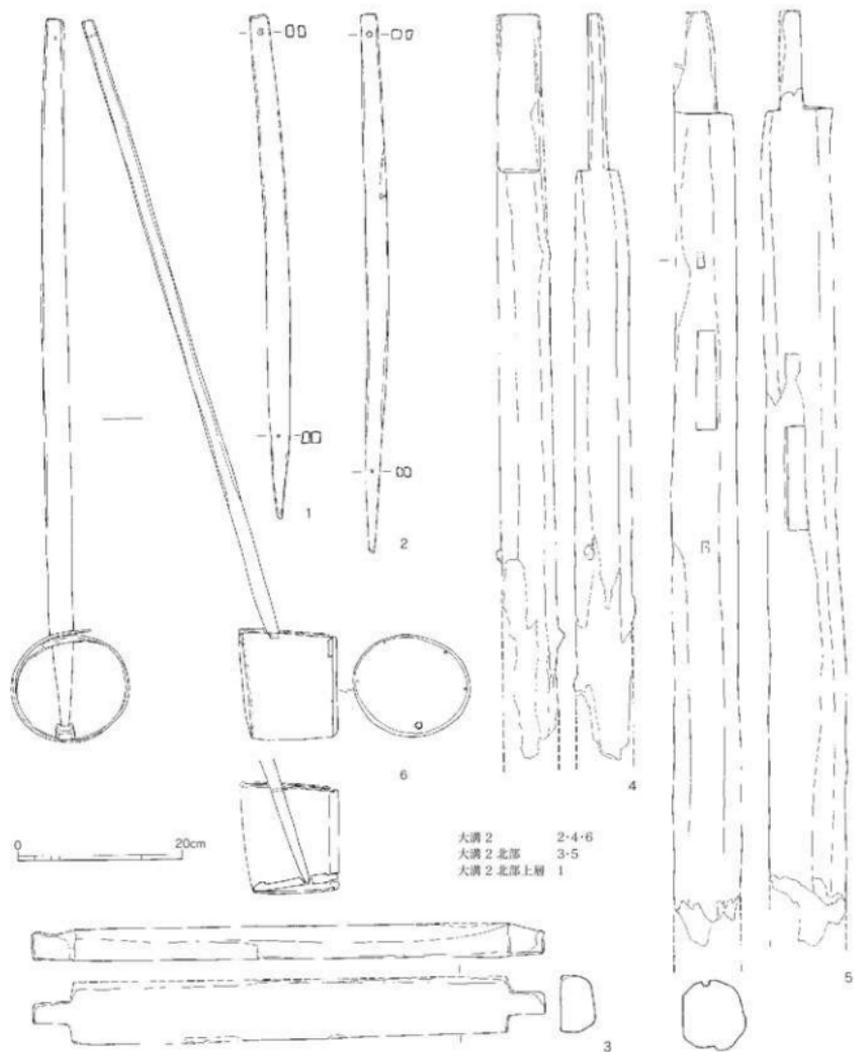
第130图 1次調査出土木製品実測図4 (4・5は1/2、他は1/3)



第131図 1次調査出土木製品尖測図5(1/6)



第132図 1次調査出土木製品実測図6 (1/6)



第133圖 1次調査出土木製品実測図7(1/6)

表64 1次調査出土木製品観察表2

遺物名	器種	法量(cm)	特徴	遺物名	器種	法量(cm)	特徴
検出番号	形状	( )は取元		検出番号	形状	( )は取元	
図録番号	通称名	( )は取元		図録番号	通称名	( )は取元	
土坑41	箱	長さ33.3 幅3.5 厚さ1.2	板を合わせたものでなく、上から穿孔したもので、上面に溝があり、丸に見えるが、幅端の溝に見えるだろう。止め孔はない。方形の厚みはほぼ長さを表すものか。	大溝2	下駄	長さ22.8 幅8.7 厚さ4.4	面は溝縁が少なく、焼けて表面は炭化している。
大溝2	縦向き矢筈	長さ29.8 幅4.7 厚さ0.4	板材を知したもので、表面は黄褐色の漆に塗られていて、先端は矢筈に押し込む形。	大溝2北条中層	下駄	長さ22.8 幅11.1 厚さ2.9	後面は左側が溝縁であるので、右足用。定形板材が溝縁で接合している。
土坑21	箱蓋	径(11.2) 高さ1.5	表面は漆で塗られていたうえに赤か黄銅箔やお飾りの漆か。	土坑21	下駄	長さ23.6 幅8.8 厚さ3.8	前面の一部が欠けており、そのため厚薄したのもか。後面は右が溝縁しているので左足用。ほぼ定形。後面が溝縁で接合している。
大溝2	不明板材	長さ2.6 幅3.1 厚さ0.4	細長い板材の1面に丸に「八木」、裏面に削り跡の跡らしい印がある。13005と同一種類。	土坑21	下駄	長さ22.8 幅9.0 厚さ3.4	面が左に傾いて見えるが、左側縁が欠損したため。面はほとんど溝縁していない。上面右側部に×印の上辺がつくものがある。
大溝2	不明板材	長さ2.7 幅3.5 厚さ0.5	細長い板材の1面に丸に「八木」、裏面に削り跡の跡らしい印がある。13004と同一種類。	大溝2北条上層	下駄	長さ22.2 幅9.0 厚さ2.6	前面は右が溝縁しているので左足用。ほぼ定形。後面が溝縁で接合している。
大土坑1	柱材	最大径13.0 高さ17.6	柱材で、上面は切端だろうが、工具痕はわからない。上面に木材表面の丸みを残し、残りの部分は削り加工している。	大溝2北条上層	下駄	長さ22.1 幅8.7 厚さ3.4	前面の中央に欠けを入れ、後面の前方中央に横溝穴にかけて方形に削り込んでいる。後面は左側の溝縁のみで右足用。
土坑30	柱材	最大径16.0 高さ17.6	柱材で、上面は切端だろうが、工具痕はわからない。上面に木材表面の丸みを残し、残りの部分は削り加工している。	土坑19	下駄	長さ22.3 幅8.0 厚さ3.6	前面溝縁以外に面が炭化したものか。表面は炭化していない。
土坑3	下駄	長さ23.8 幅板最大幅8.4 幅板最大厚0.8	欠損が大きく、左右どちら側の羽根はできない。中央部が割れたことが発露原因だろう。	大溝1上層	下駄	長さ22.7 幅8.0 厚さ3.9	前面上面は方形、裏面は長方形に削り込んでいる。割がなく、固定用の溝が幅にあり、厚さ約2つあり。
ピット2	下駄	長さ16.3 幅8.0 厚さ5.4	子供用の溝縁は整った長方形。前面溝縁は大きい。	土坑5	下駄	長さ23.9 幅9.0 厚さ3.3	面の劣化著しい。前面溝縁は大きい。
大溝2北条中層	下駄	長さ17.6 幅8.2 厚さ2.7	後面は左側が溝縁するので、右足用。定形。後面が溝縁で接合している。上面に丸に削り跡の印がある。	大溝2	下駄	長さ20.8 幅9.1 厚さ3.4	後面は押し込みだが、割がない。上面は丸い。
大溝2北条中層	下駄	長さ17.9 幅7.9 厚さ2.6	後面は左側が溝縁し、台縁も右が張り出しているために、左右両方で右足用。定形。後面が溝縁で接合している。	大溝2	下駄	長さ22.4 幅9.4 厚さ3.7	面の溝縁が深くて、丸のわずかに溝縁し、後面が溝縁しているのみ。ほぼ定形。後面が溝縁で接合している。
大溝2北条中層	下駄	径54.0 厚さ1.0	前面の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後面は右側が大きく右側の左足用。定形。後面が両面よりやや溝縁している。	大溝2	下駄	長さ21.6 幅9.3 厚さ1.2	裏面は側が溝縁するので、左足用。ほぼ定形。孔のほとんどに木釘がある。
大溝2北条上層	下駄	長さ18.2 幅7.4 厚さ3.9	後面は左側が溝縁するので、右足用。ほぼ定形。面の溝縁はほとんどないので、後面が欠けたところで見えるものか。	大溝2北条中層	下駄	長さ17.2 幅7.0 厚さ2.8	後面は左側が溝縁するので、右足用。ほぼ定形。面の溝縁はほとんどない。子供用。
大溝2北条上層	下駄	長さ19.2 幅8.4 厚さ2.3	後面は左側が溝縁するので、右足用。後面が溝縁はほとんどなくなっている。	大溝2北条中層	下駄	長さ16.3 幅8.9 厚さ3.7	前面の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後面は左側が溝縁するので、右足用。後面が溝縁で接合している。
大溝2	下駄	長さ19.0 幅9.0 厚さ2.2	後面は左側が溝縁するので、右足用。後面が溝縁が少なく、前面は凹型に削りこぶ状に打ち込まれていて、欠損は凹型削りこぶ状のものだが、面の表にも溝を出しているので、板の厚さが厚く中層になっている。	大溝2	下駄	長さ20.0 幅9.9 厚さ3.8	後面は左側が溝縁するので、右足用。後面が溝縁で接合している。裏面に板材が欠けており、口に寄るだろう。
大溝2北条中層	下駄	長さ22.0 幅8.6 厚さ2.5	前面の周囲が窪んでいるが、左右の窪みの大きさが、面の溝縁も左右で差があるので、左右どちらにも溝の跡か。定形。面の溝縁部は凹型になっている。	大溝2北条上層	箱材の柄	長さ61.8 幅2.9 厚さ3.8	小型の柄材。
大溝2北条上層	下駄	長さ21.2 幅8.3 厚さ2.7	溝縁穴が右の下で欠けている。後面は左側が溝縁するので、右足用。後面が両面よりやや溝縁している。	大溝2	柄材の柄	長さ66.2 幅2.6 厚さ3.7	柄材に磨き跡と孔がある。
大溝2北条上層	下駄	長さ20.9 幅8.7 厚さ2.9	前面縁に凹型に削りこぶ状のものか。後面は右側が溝縁するので、左足用。ほぼ定形。後面が溝縁はほとんどないので、後面が欠けたところで見えるものか。	大溝2北条	部材	長さ62.4 幅7.1 厚さ4.0	1面は丁寧に平削りにされ、他の面は材の丸みを残す。裏面の溝は中央ではなく平削り面側と同一面にある。
土坑21	不明板材	長さ22.4 幅3.2 厚さ5.0	前面縁に凹型以外は面の溝が炭化したものか。後面は左側が溝縁するので、右足用。定形。後面が溝縁で接合している。	大溝2	部材	長さ69.5 幅3.4 厚さ2.4	欠損縁の跡も削り込みがみられるので、柄部であったことか。
大溝2	下駄	長さ22.9 幅7.4 厚さ2.1	前面の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後面は左側が溝縁するので、右足用。ほぼ定形。後面が溝縁で接合している。	大溝2北条	部材	長さ61.4 幅7.7 厚さ2.6	全面に削孔がある。貫通しない。溝みが見られるが、後面が欠損しているため断面の丸みも不明。
大溝2北条中層	草履下駄	長さ22.2 幅6.4 厚さ1.6	面の削り跡はほとんどない。定形。孔が右の角が特徴的。	大溝2	柄材	長さ88.5 幅17部最長幅14.4 厚さ3.8	曲げ部が前面凹型削りだが、乾煎によるものではないだろう。
土坑21	下駄	長さ19.0 幅8.8 厚さ2.3	前面の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後面は右側が溝縁するので、左足用。ほぼ定形。後面が溝縁で接合している。	土坑21	組	長さ約8.0 太30.5	2本の棒材で後面結びで輪を作る。組を構成する曲線は結びが弱い。柳製か。
大溝2	下駄	長さ17.7 幅7.4 厚さ2.1	前後ともに面は右が溝縁しているので左足用。ほぼ定形。後面が溝縁で接合している。	大溝2北条中層	組	長さ約23.0 太30.6	材質は不明だが、繊維でなく、幅約5mmの帯状の紐を縫った物で輪が作れない。柳製か。
大溝2	下駄	長さ18.5 幅7.1 厚さ2.4	丁髷つくりだが釘が打っている。溝縁穴がなく、木製品のものか。ほぼ定形。	大溝2北条	組	長さ約30.0 太30.7	2本の棒材で後面結びで輪を作る。組を構成する曲線は結びが弱い。柳製か。
土坑21	草履下駄	長さ22.4 幅7.0 厚さ2.0	薄ったばかりのような草履で、未使用か定形。	大溝2北条中層	組	長さ約45 太30.9	2本の棒材で後面結びで輪を作る。組の結びが弱い。柳製か。
大溝2	下駄	長さ22.2 幅10.3 厚さ1.8	後面は左側が溝縁するので、右足用。定形。後面が溝縁で接合している。前面の中央縁部が凹型に削り込んでいる。上面は丸い。	大溝2北条中層	組	長さ約50.5 太31.2	3本の組み組で、結び目を作る。組を構成する曲線は結びが弱い。柳製か。
大溝2	下駄	長さ20.8 幅7.4 厚さ2.1	前面の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きく、後面は右側が溝縁するので、左足用。ほぼ定形。後面が溝縁で接合している。	大溝2	組	長さ約75 太31.2	3本の組み組で、結び目を作る。組を構成する曲線は結びが弱い。柳製か。

## 1次調査のまとめ

1次調査は矢加部町屋敷遺跡の最初の調査であり、試行錯誤した段階の調査分を最後に報告することになったため、調査担当者が同じでありながら遺構面や埋藏遺構の調査手法が一環していないような印象を与えたのは否めない。

本書が矢加部町屋敷遺跡での最終報告になるため、ここでの記述は最低限に留め、次の1から5次調査全体のまとめの中で調査区内の全体像を把握したい。

1次調査で報告した遺構は、土坑37基、廃棄土坑2基、大土坑3基、溝7条、大溝4条、埋藏8基、井戸1基であったが、埋藏など時期を特定しにくいものについては近代のものも含んでいる。

大正時代包含層である黒色土層の下に明治後半代から大正時代の整地面があり、その下にさらに黄灰褐色粘土層の整地層と黄緑灰色粘土の整地層の2枚の整地層があり、そこまでが近代の遺構面と考えた。

江戸時代の遺構面はその下から検出され、薄い数枚の整地面があったものと思われるが、明瞭に捉えることのできたのは2面のみであった。上面の整地面は基盤層と同じ粘土を使用しているため、整地面と基盤層の判別が難しく、上層の遺構の壁面に別の遺構が見えて初めて検出できることが多かった。県道側では近世の整地層の下に大溝が掘り込まれており、遺物はほとんど出土しないことと、堆積層から人為的に埋められた可能性が高い。これは久留米柳川往還道の東側溝と考えられ、調査範囲内に確認された側溝は直線的に走る部分のみであることがわかった。

1次調査範囲内ではこのほか近代のものだが、土製鋳型が出土しており、近世に属するつぼもこの鋳物師と関連があると思われる。

### 3. 矢加部町屋敷遺跡のまとめ

有明海沿岸道路に伴う矢加部町屋敷遺跡の発掘調査は、調査用地内のうち3,400㎡を、平成16年度から19年度まで断続的ではあるが4年間にわたって発掘調査し、その整理報告作業も5年におよんだ。報告書の刊行については平成18年度報告が4次調査の遺構のみになったため、Ⅲについては4次調査の遺物と5次調査の遺構のみとなり、Ⅳでは5次調査の遺物から掲載するというずれが生じてしまった。本報告が最終年度であり、このような利用しにくい状態で刊行した反省も踏まえて、ここで調査成果を総括したい。

矢加部町屋敷遺跡は久留米柳川往還という街道沿いの藩境の町屋であることから、街道の側溝と藩境木埋設坑を発見することができた。遺物については柳川市域の近世遺跡としてまとまった資料が得られたことから、これまで筑後市や久留米市で発見されてきた土師質瓦については有明海沿岸という軟弱土壌に適応した特徴的な家屋に伴うものと推察できる資料が得られた。また、水田焼や蒲池焼、在地産焼壺などの筑後地域の近世土器や燻し瓦に新たな知見を見出すことができた。

出土遺物については、木製品の残りが良かったものの、量が多かったので残存率の高いものを優先的に掲載した。

#### 遺構の変遷

本遺跡は微高地に展開する自然発生的な集落でなく、街道沿線に計画的に設置された集落であるため、通常は集落を形成しない軟弱土壌に展開している。出土遺物中の弥生土器や須恵器、中世陶磁器などは、いずれも混入品であり、最も古い時期のものは17世紀中葉段階である。戦国時代においても、柳川城から北に向かう道路は矢加部地区を迂回して蒲池地区に通っており、それまではこの地区は耕地としても使用されていない低湿地だったようである。

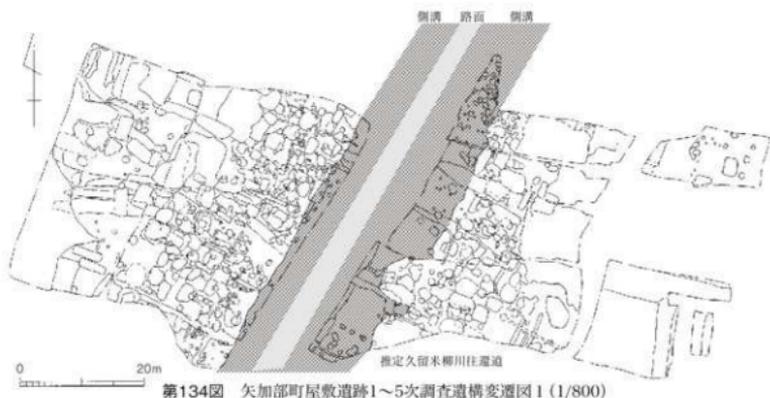
最初に遺跡が形成されたのは17世紀であろう。遺物自体は17世紀中葉から見られるものの、土坑など居住地の痕跡はなく、県道に沿って走る県道西側の4次調査西区の4号溝状遺構と県道東側の4次調査東区10号溝状遺構・5次調査3号溝状遺構・1次調査の1号大溝だけが存在していた。県道の左右に併走する溝は、県道が久留米柳川往還に比定されていることから、この街道の側溝と考えられる。

県道の左右の調査区とも県道側に溝の壁が発見されておらず、溝の幅と道路の幅はわからない。西側溝側の検出範囲が少ないことから、現在の県道の東側車線側に道路があったと推定できる。

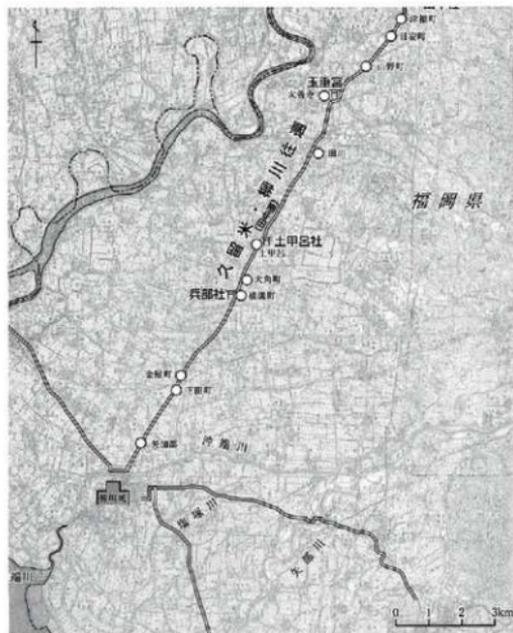
久留米柳川往還は久留米城下町から柳川城下町を繋ぐ街道で、田中吉政が慶長7(1602)年に整備したものである(第135図)。「台所入之掟」によると「新道の両脇に溝を幅4尺(1.2m)に掘るように」とあるが、道路幅についての記載はない。『山門郡柳河村他地誌』(引用文献7)では山門郡外町から三藩町矢加部までは幅二間と記している。これは柳川市三橋町橋本地区にこの久留米柳川往還が道幅約2mで両脇に4m幅ほどの側溝をもって現存しており、矢加部町屋敷遺跡の側溝規模と推定道路幅と合致する(写真1・2)。

17世紀中葉には側溝は埋め戻されて整地され、集落が形成されるようになる。これは田中家が断絶し、筑後国が久留米藩と柳川藩に分かれた時期にあたり、矢加部地区に国境が置かれることになる。側溝を埋めたのは関所を置くためには道幅が狭すぎたためであろう。

17世紀中葉の陶器摺鉢片が出土した藩境木の埋設坑はこの時期に置かれたものだろう。当時は藩境木周辺から離れて家屋が建てられていたと推定している。



第134図 矢加部町屋敷遺跡1～5次調査遺構変遷図1 (1/800)



柳川旅書館「秀吉を支えた武将 田中占政」より

第135図 久留米柳川往還路線と現存する往還遺跡

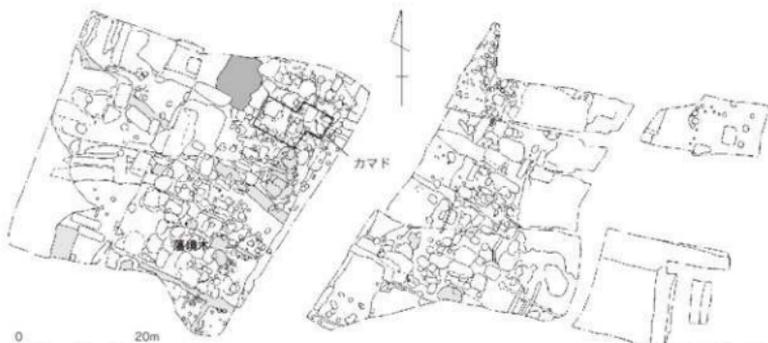


写真1 久留米市柳川往還道跡1(北東から)  
矢加部町屋敷遺跡の  
道路側溝跡

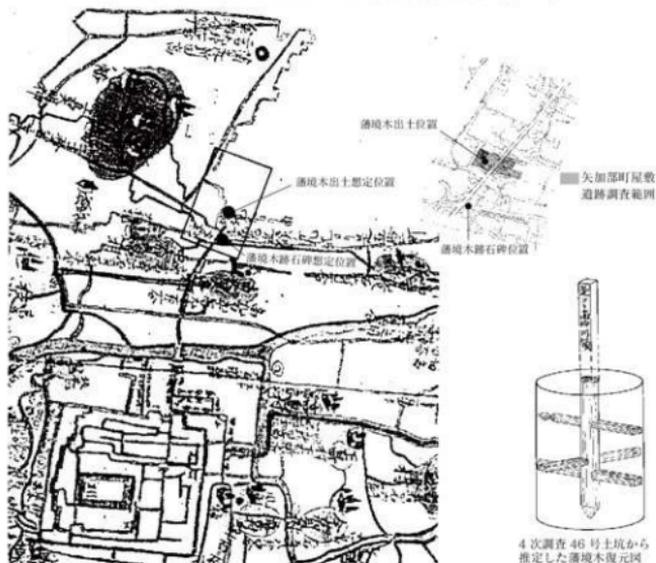


写真2 久留米柳川往還道跡2(北東から)

現在の藩境木跡の石碑は100mほど南の県道脇に建てられているが、この藩境木が移転したのか、別の藩境木がその場所に立っていた双方の可能性がある。「御領内絵図」(注3)には藩境木の存在が記されているが、道路との位置関係は記されていない。少なくとも調査区内の藩境木は次の18世紀前葉段階には失われている。18世紀初頭から遺構が急速に増え、集落が発展したことがわかる。18世紀から多く見られるのは、方形で壁が直立する深さ50cm以上ある土坑で、桐柄と炭化物の層が互層を成しており、種子や木製品も多く出土する。この特徴的な土層は自然に堆積したのではなく、県道西側の4次調査区では方形の大型土坑にも見られ、規模の大小があっても同じ機能を有していたと考えるべきだろう。



第136図 矢加部町屋敷遺跡1～5次調査遺構変遷図2 (1/800)



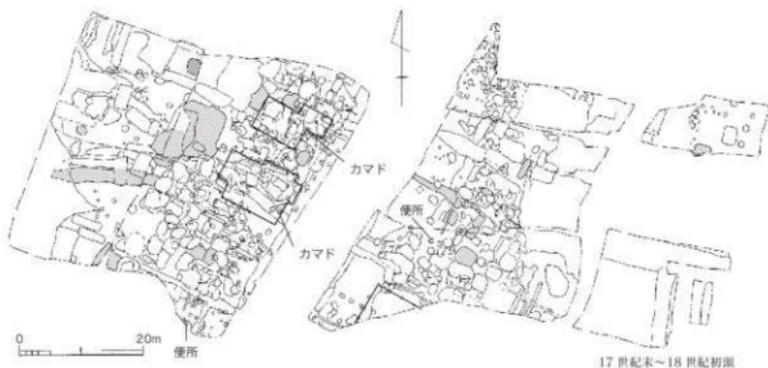
第137図 藩境木位置図と推定復元図

大型土坑は近世遺跡では地下室や大規模な災害の跡の片付け用の廃棄土坑であるなど施設として検出されることが多いが、本遺跡のように薄い瓦層は自然堆積とは考えにくく、廃棄土坑としては遺物が少ない。また、4次調査4号大土坑には護岸施設もあり、単なる廃棄土坑ではないだろう(注4)。

最も近い民俗例として、堆肥小屋の記事があった。大川市向島地区の堆肥つくりの記事によると、土堀で壁を作り壁が崩れないように「ヨシ」で囲い、ヨシが取れないように縄で横木を結んだ堆肥小屋を作るらしく、本遺跡の土留遺構はこれではないだろうか(引用文献8)。そこに馬の敷き藁や刈り草、ワラくずを積み上げて堆肥を作ったとあるので、つまり、土留遺構としたものは土坑の壁ではなく、縁で作られた土壁を補強するものということになる。土留遺構は細い竹が挿し込まれて並んでいるとしたが、ヨシであったかもしれない。4次調査の64号土坑の土留が平面方形プランの2辺にしか設けられないのは作業しやすいように2辺は簡易的な土留が置かれたということだろう。堆肥は発酵させることで肥料になるが、初殻が腐っていないのは発酵に失敗して堆肥にできずに廃棄したためだろう。小規模な土坑で作られる堆肥は小規模な畑用かもしれないが、大規模な堆肥小屋の存在は農家があったことを意味する。したがって、県道西側の調査区には農家があっただろう。出土した栽培植物は消費したものだけでなく、生産したものもあるのではないだろうか。

また、『福岡県農業誌』(引用文献9)に安政六(1859)年に蒲池村の近藤茂三郎という莫産商人がいたことが記されており(注5)、5次調査1号大土坑出土の大型の縫い針(47図9~11)は莫産用であったのではないだろうか。近代のものだが4次調査客土層出土の「莫産問屋」杯(49図12)が出土しているので、農業農家が近代になって莫産商を営むようになったのかもしれない。

県道東側でも堆肥を作ったと思われる土坑があるので、畑は作っていただろうが、他の業種を想定させる遺物が出土しているので、本業は別にあったのだろう。5次調査1号大土坑では布を送ったという内容の荷札木簡が出土しており、呉服店宛のものと思われる。東区では1号大土坑があるために家屋の裏手の空間が狭く、農作業する場所がないので、ここには呉服店があったことが推察できる。1次調査2号大溝出土の朱墨用の硯(第123図2)もこの呉服店で使用されたものだろうか。地元の古老の聞き取りでは、与田商店という呉服店があったということである。



第138図 矢加部町屋敷遺跡1~5次調査遺構変遷図3(1/800)

また、1次調査2号大溝から出土した飾り矢(第130図2)は上棟式で使うものであり、式後に棟梁が持ち帰るものらしいので、大工の棟梁の家が近隣にあった可能性がある(引用文献10)。

県道東側の南部では近代の鋳造遺構や鋳型が出土しており、幕末から明治の鉄滓を入れた土瓶が胞衣壺(第33図6)に見立てられて埋められていたことから、鋳掛屋が存在していたと思われる。本遺跡から出土する鋳造関連の遺物で最も古いものは4次調査84号土坑のつぼの羽口であり、17世紀後葉から存在していたであろう。明治36(1903)年の「蒲池村足」(文献11)によると金納・矢加部・東蒲池・西蒲池・立石・高島の6村を合わせて蒲池村とし、村内に鋳物繕師3名がいると記載されており、鍛冶職人の記載はなかったので、少なくとも明治後期には鋳造のみを行っていたようだ。

また、植物遺体の分析で、1次調査3号土坑で漆の実が絞られた後の状態で多く出土しており、4次調査5号大土坑出土の碗(『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』第37図3)の内面には漆らしいものが付着しているが、漆職人がいたにしては漆の付着した遺物が少なすぎるので、自家製の漆糊を作った痕跡だろう。実際に漆糊で継いだ蓋が出土している(『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』第51図11)。

これらの家屋は集落成立後、建て替えをしながら近代まで存続している。大正包含層が厚く堆



第139図 矢加部町屋敷遺跡1～5次調査遺構変遷図4(1/800)

積んでいるのでこの時に大きく地上げされ、大溝も埋められて現在の土地区画に近い状態になったようである。

## 瓦について

本遺跡の煙瓦の出土数はわずかだが、製作地を記した刻印のつく軒平瓦・平瓦が出土したことで、柳川で生産された軒平瓦の瓦当文や製作地が明らかになった。

筑後地域では瓦の生産地として久留米市城島地方が有名だが、それ以外にも柳川市やみやま市でも近世の瓦生産の記録がある。本遺跡の資料と蓄積された筑後地域の近世軒平瓦資料を比較検討することで、本遺跡出土の軒平瓦の年代を推定するとともに、筑後地域の瓦の生産状況を推察したい。

矢加部町屋敷遺跡からは大きく、三葉文・菊花文・宝珠形三葉文を中心飾りとする瓦当文が見られるが、このうち製作地の刻印を持ち、久留米市・みやま市・大川市で類例の出土する前2者について検討する。まず三葉文だが、これは播磨系工人が製作するモチーフとして知られており、瀬戸内を中心とした西日本に広汎に見られる。モチーフを比較すると、本遺跡2次調査2号溝状遺構出土の140図22は、久留米市城下町の佐々木家屋敷遺跡出土軒平瓦B類の1つに酷似している。同範ではないが、同じ工房で生産された可能性は高い。これに対して140図23は唐草のモチーフに類例がないで、柳川で生産されたものかもしれない。

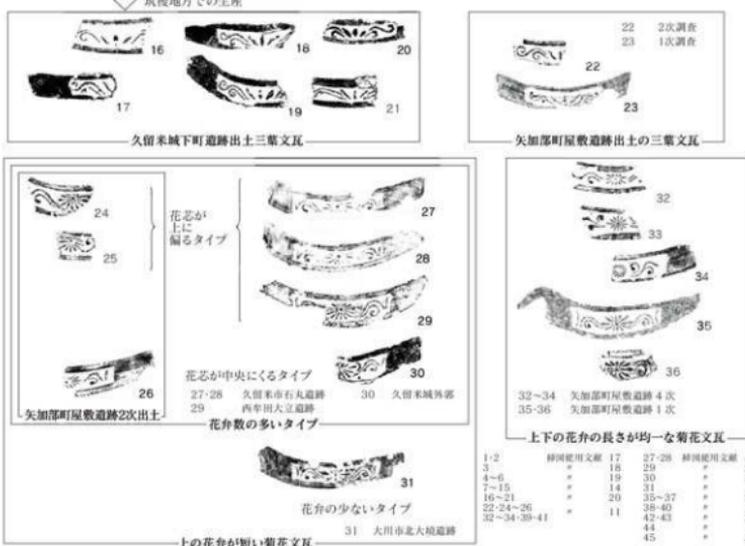
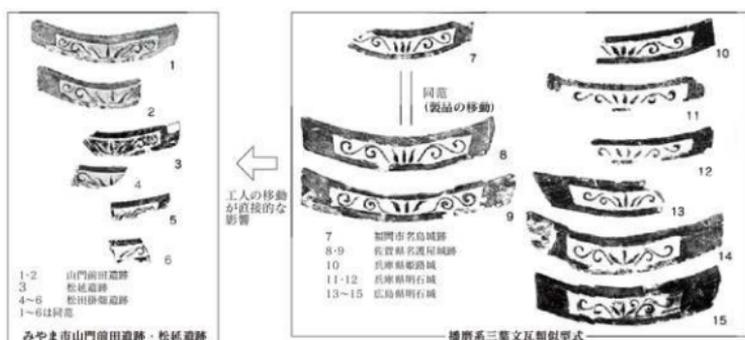
久留米城外郭佐々木家屋敷遺跡出土瓦は18世紀代に製作されたものが廃棄されたと考えられる。久留米市三本松町遺跡SK21出土品は写真の掲載しかないが、第2唐草文の先端が反る特徴が140図18と一致しており、三本松SK21は18世紀前半の遺構なので、140図22は18世紀代に久留米市域で製作されたものとみてよい。

一方、みやま市山門前田遺跡・松延遺跡・松田掛畑遺跡で出土した三葉文軒平瓦(140図1～6)は、近接地点から出土した同範品である。松田掛畑遺跡では17世紀末から18世紀初頭の遺物を主体とする18世紀後半以前の遺物に伴っているため、それ以前に製作されたものである。

このモチーフに類似するのは福岡市名島城跡出土の140図7や広島城跡出土の140図14など17世紀代の瓦なので、これらも17世紀代の可能性が高い。山門前田遺跡では、鯪瓦や鬼瓦など寺社や富裕層でしか使わない道具瓦が出土しており、近隣で当てはまるのは立花宗茂が社領15石を寄進して祈願所とした松延天満神社しかない。立花宗茂がこの神社を再興したのが天正16(1588)年なので、瓦の使用年代とも一致する。これらが柳川藩内で生産されたのか、久留米藩内産かわからないが、筑後地域の三葉文では最も古相であることから、以後の三葉文軒平瓦はここから変化したものだろう。

次に、菊花文を中心飾りとする軒平瓦だが、本遺跡ではさまざまなバリエーションが出土している。久留米市域の出土品は140図27～29のように菊花文の花芯が上に偏り、花卉数が多く、花卉自体も長く先端がやや太い特徴を持つ。久留米市石丸遺跡第6次調査SD40出土瓦(140図27・28)は相伴する肥前陶磁器から18世紀後葉に廃棄されたものと考えられる。また、久留米市三浦町西牟田大立遺跡でも明治期のもの(140図29)が出土しており、同じ特徴を有したまま、モチーフが変化したことがわかり、これらは久留米市域で製作された可能性が高い。一方、花卉数が少ないものは、本遺跡に多く存在する。(140図32～36)それ以外にも大川市北大境遺跡瓦溜SK1(140図31)にも見ることができ、これらは柳川市域の特徴であろう。

本遺跡出土の140図37には「柳川散田」の刻印がある。「柳川散田」とは三橋町蒲船津地区のこと



第140図 椀瓦・軒平瓦当文と刻印の比較図

で、近世・近代には瓦生産が盛んだったらしく塩塚川の対岸には現在も江崎洋瓦本店が存在しており、刻印に「散田」と記されたものは小倉城にも見ることができ(140図42・43)。大川市北大境遺跡瓦溜Ⅰには「藤吉製」・「三橋」(140図44)の刻印を持つ瓦を伴っており、大川市小深町遺跡と同じ瓢箪文の中に「枝光富吉製」の刻印がある(140図45)ことから、これらは柳川市三橋町で生産された可能性が高く、大川市域の旧柳川領内では柳川産の瓦が流通していたようだ。柳川市域では製品や材料の運送に水運を利用するために柳川市の中心部を通る塩塚川沿いに小規模な瓦製作所が点在していたことがわかる。

以上のように、筑後地域の近世の軒平瓦は、久留米市域・柳川市域・みやま市域ともに、18世紀後半代に三葉文から菊花文に移行したことがわかる(注6)。この動態は唐津城にも見られるが、相互に関連があったかは現段階ではわからない(引用文献12)。

## 土師質瓦について

『矢加部町屋敷遺跡Ⅱ』ですでに土師質瓦については述べたが、その機能は茅葺屋根の棟に置く「雁振瓦」と雨樋に使用する「樋瓦」(写真3-4)である。5次調査ではこの使用方法を傍証する変色のある資料が出土したので、カラー写真(写真4)を掲載した。42図2・6は「樋瓦」で、2は凸面側から基部に褐色の付着物があり、凹面側には見られない。これは凸面側が煙などに燻され、凹面側は水が流れるので付着しなかったためである。6の凹面側の中央部だけが暗褐色に変色しているのは、この部分に汚水が流れたことを示している。

43図4は雁振瓦(写真3-1～3)で、凹面側が煤で変色しているので屋内の煙が萱葺屋根を通して付着したものである。また、内外側端部だけが器面が剥落しているのは写真3-1のように漆喰で固めた部分が剥落したためと考えられる。

上述の「樋瓦」は有明海沿岸に特徴的に分布する近世の漏斗造り家屋の雨樋に使われるものである。

より広く分布する平面コ字形の「くど造り」の家屋の場合、中央に集まった雨水を口の開く部分に屋根瓦を葺いて排水することができるが、平面コ字形の「漏斗造り」は開閉口がないため、屋内に排水路を通すことになり、屋内の天井に平瓦を縦に並べて雨樋にしたものである(写真3-5・6)。ここには通常の平瓦より大型のものが使われ、『福岡県の民家』では雁振瓦を転用とした「テイ瓦」と報告している(文献13)。しかし、凸帯が凹面側につくものと凸面側につくものと同じように使用していたとは考えにくく、当初は転用であったが専用に発展したのかもしれない。

前述したように「くど造り」家屋の場合、開口部に排水のための瓦を葺く必要があり、本遺跡から出土する少量の近世の燻し瓦や土師質の軒丸瓦は、屋根全体や軒先のみを使用したのではなく「くど造り」家屋に使用した瓦と考えられる。したがって、矢加部町屋敷遺跡には「漏斗造り」家屋と「くど造り」の両方が存在していたであろう。『福岡県の民家』(引用文献14)によると、「漏斗造り」家屋は「くど造り」家屋の発展形であり、「くど造り」家屋の分布域の中により狭い範囲で点在するという。したがって、両者が混在していても不自然ではない。

双方とも軟弱地盤対策のための建築様式であり、第141図3のように「クド造り」家屋は柱間が他の屋根構造の民家よりも狭く、それだけ屋根の重量を多くの柱に分散できるので軟弱地盤には適しているとされている。しかしながら、「クド造り」家屋は軟弱地盤でない山間部にも見られることから、本来の意味とは無関係に伝統的な様式として伝播したのかもしれない。それに比べて「漏斗造り」については顕著な分布上の偏りが見られ、佐賀県側の調査では、「漏斗造り」は福岡県



4 漏斗谷の樋吐出口

1 「漏斗造」の家屋全景



5 漏斗造の樋見上

2 漏斗屋根の俯瞰



6 同上

3 同上近写 福岡県教育委員会「福岡県の民家」より

写真3

土師質瓦の使用状況

- 1・6 柳川市海崎武美氏宅
- 2・3 久留米市城島町江口伊吉氏宅
- 4・5 柳川市松藤キヨ氏宅



42図2



42図6



43図4

写真4 使用変色のある土師質瓦

側の東部に偏って分布している。福岡県でも久留米市内では「樋瓦」は出土していないようで、『久留米市史』の民家の記録にも「クド造り」はあるが、「漏斗造」はない(引用文献15)。筑後市内では「樋瓦」が見られるので、福岡県内では筑後市域を北限とする狭い範囲に限定されるようだ。また、雁振瓦については、久留米市京隈侍屋敷遺跡第5次SK141で出土しているものが北限であろう。突帯が突面に付く冠瓦状のものは佐賀県内にもあるようだが、水田の赤瓦の産地である筑後市水田地区の筑後市水田上町遺跡SK015(文献16)にも見られるので、必ずしも佐賀県内のものが搬入されたものではないだろう。土師質の雁振瓦の分布は樋瓦よりも広がったものと思われる。

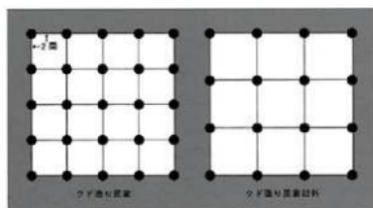


- 【くど造り】分布限界線
- 【くど造り】主要分布地域
- 【二ツ家(熊本二棟造り)】分布地域

1 二ツ家・くど造り民家分布図



2 二ツ家造り民家 熊本県玉名郡玉東町境家 川島寅次『民家の来た道』より



3 民家・柱配置模式図



4 佐賀県における有明粘土層と民家の関係

1~3・4は佐賀県立博物館『有明海・博物館』より

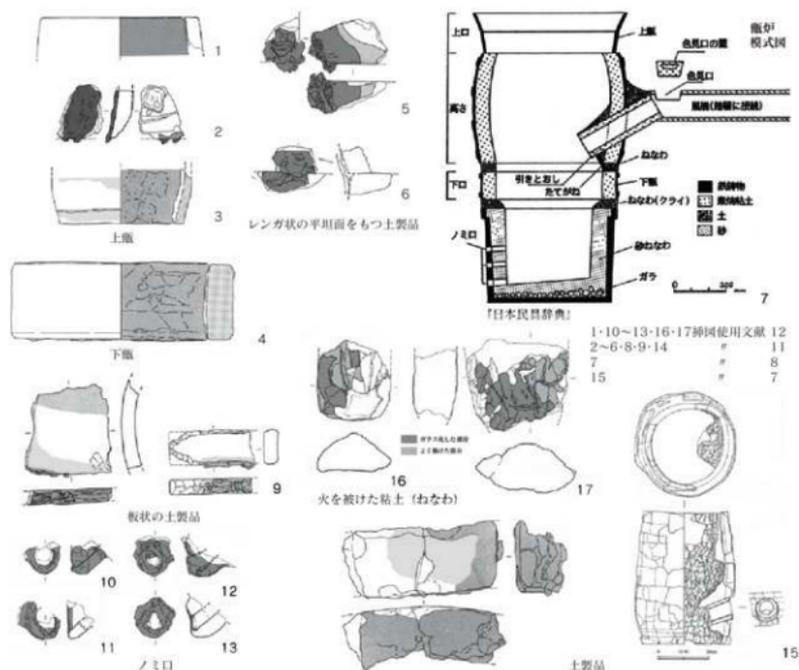
第141図 「クド造り」「漏斗造」家屋の分布と柱配置模式図

## 棒状土製品

『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』の中でも窯道具の可能性については述べたが、鋳型など鋳造関係遺物が多く出土していることから再考し、こしき炉の壁体の可能性も指摘しておきたい。

棒状土製品の中の大型で湾曲しているものと、瓦片を転用しているものが中央部だけが焼けない理由が窯道具としてはわからなかったので、ここではこしき炉の部材と考えたい。142図2・3は器壁の薄い炉の壁体、外面に粘土を貼って使用し、142図6・7は積み重ねて使用するものであり、これらは第142図7のようなこしき炉であつたであろう。142図10から13は溶解した金属の出るノミ口であろう。142図14は大型の棒状土製品で、142図15のようなこしき炉の上櫃の壁体ではないかと考えた。比熱を受けた煙し瓦片(142図8・9)が側端部のみ焼けて中央部だけ焼けないのは、こうしたこしき炉の部材の隙間に挟んだため、重なった部分だけが焼けなかったためだろう。142図16・17のような粘土塊もこしき炉の充填粘土であつたのではないだろうか。

家屋の密集する町屋で鋳掛屋を営むには炉は小規模なものであろうから、こしき炉を使った可能性は十分にある。



第142図 矢加部町屋敷遺跡出土鋳造関係遺物とこしき炉の例

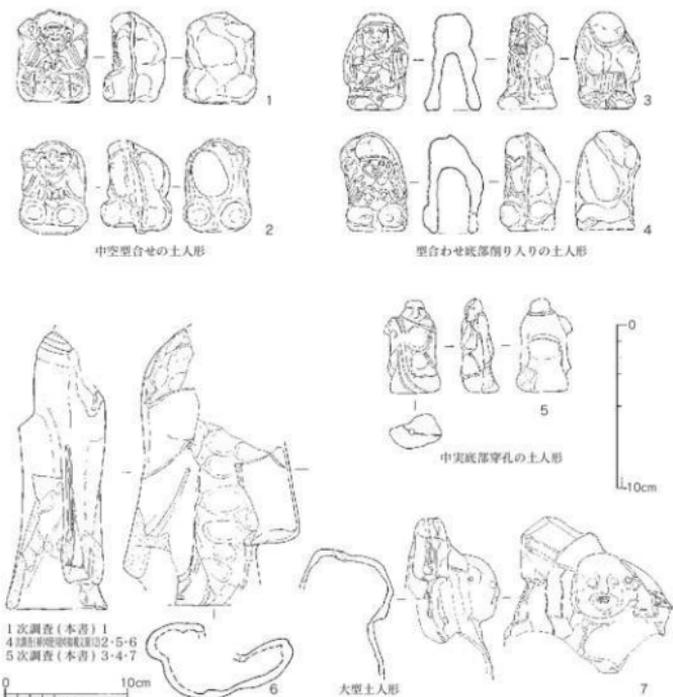
## 土人形

土人形で多く見られたのは、大黒天と恵比寿像だが、本遺跡は町屋なので商売の神様として信仰されたのだろう。『久留米市史民俗編』によると、「かせどりとって、元旦の夕方に女の人が土製の大黒天などを持って訪れ、餅や銭をもらった。赤坂の土塙笛もこれに使用されたという」という記載がある(引用文献17)。「かせどり」とは「かせぎどり」として他地域にも見られる習俗で、地域によって差異があるが、正月や新生児の祝いに各戸をまわって祝いの品を送ったり、なんらかの行為の返礼の品をもらったりする点で共通している。欠損していないものが必要以上に多量に出土しているのは、毎年購入する縁起物であったためだろう。

これらの土像は底面からヘラで削りを入れないもの(144図1)と入れるもの(144図2)の2種類の成型技法が見られる。

ヘラで削りを入れるものは粘土塊を表裏の型に入れた後、中実にならないように内部に空間を設けて焼成を良くしようとしたものであり、削りを入れやすいように頭部が向かって細長い形態になっている。

一方、挟りがなく、平底のものは表裏の型にそれぞれ粘土板を貼って、接合しているため中空

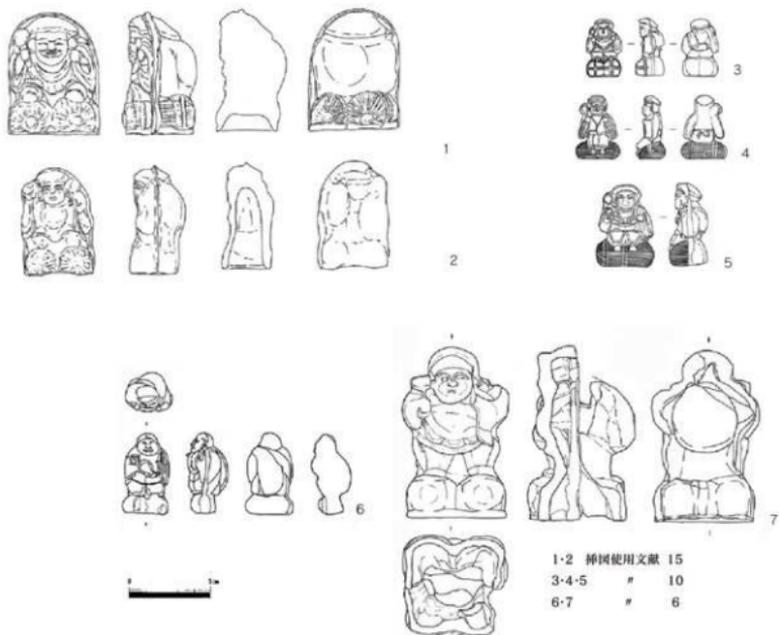


第143図 矢加部町屋敷遺跡出土の主要な土人形(6・7は1/4、他は1/3)

になっている。そのため接合痕を十分に削ることができずに大きな痕跡を残すのである。底部にへうで抉りを入れる必要がないので、前者に比べて膨らみのあるものが多い。抉りを入れる方の胎は赤茶色の色調に鉄分と思われる褐色パミスを多く含んでおり、入らないものは精良な黄白色で器面の劣化が少ないという胎土の相違がある。胎土も製作技法も異なるので、産地が異なっていると考えるべきだろう。

近世の筑後市内には赤坂人形と水田人形という土師質土器窯で製作された土人形があり、赤坂人形については現在も製作が続いており、店舗で先代製作者の作品を見ることができる(注8)。赤坂人形は「不器用」という意味から「ててぼっぼ」と呼ばれ、接合痕を残す点に特徴があるらしい。現代の赤坂人形の大黒天には厚みがあり、型に粘土板を貼る方法で製作している。このことから、抉りが入らず接合痕を残すものを赤坂人形とし、抉りの入るものは水田人形としたい。本遺跡で抉りの入るものが多く出土するもの、水田焼の窯場の方が近いためであろう。水田人形はつくりが良く大型人形も作つたらしく、120図1から5や4次調査出土(『久加部町屋敷遺跡跡III』第55図16・17)の大型品は水田人形であろう。

なお、『久留米市史』民俗編(引用文献18)によると、土人形は「金丸川付近の久留米高等学校工程の粘土で製作した」とあり、赤坂人形・水田人形とは別に久留米市内に土人形の製作地があっ



第144図 福岡・北九州・筑後市域出土の土人形(1/2)

たらしい。久留米城下町からは確かに赤坂・水田人形とは異なる形態のものが出土しており、本遺跡で出土する赤坂・水田人形以外の人形は久留米城下町産のものかもしれない(注9)。

## 焼塩壺

本遺跡で出土した焼塩壺は、すでに久留米市城下町の京限侍屋敷遺跡第5次SK141・第7次SK150(引用文献19・20)などで出土しており、塩壺として報告されている。筆者の知見では、江戸時代の福岡城下町でも小倉城下町でも筑後地方焼塩壺は出土しておらず、流通圏は筑後地方に留まるのではないだろうか。

このように筑後地方の焼塩壺についてはすでに知られていたが、セットになる蓋の存在はわかっていなかった。焼塩壺は蓋をして焼成するので(写真5-3)、焼塩壺にはセットになる蓋が存在するはずであるが、本遺跡では写真5-2のように口縁部が赤くなった焼塩壺に伴って内外面に赤い輪ができていた土師皿が出土し、ちょうど赤変する範囲が一致したので、土師質土器の小皿を蓋にしていたことがわかった(写真5-1)。これまで確認されなかったのは、蓋は土師質小皿として再利用され、灯明皿に転用されることが多いので、小皿や灯明皿として認識されていたためである(写真5-4)。

焼塩壺の蓋となる小皿は外面回転ナデの後、スリップを掛けるような静止ナデが見られる。この特徴は焼塩壺にも見られ、蓋にはならない小型の土師皿(写真5-5)にも見られるので、同じ産地で作られたものである。この土師質小皿は灰白を呈する精良な胎土から蒲池焼と想定しているので、必然的に焼塩壺も柳川産と考えられる。この精良な胎土の小皿は、蒲池地区に所在する東蒲池西門前遺跡(注11)の戦国時代の土師器にも見ることができたので、蒲池地区で作られた土師器の伝統を引くものと考えられる。雑器については厳密な意味では蒲池焼ではないのかもしれないが、蒲池に土着し土器司として在来の工人を統括したとすれば、雑器もまた蒲池焼としてよいのではなかろうか。

以上のように今回の矢加部町屋敷遺跡の調査によりいろいろな知見が得られたが、筆者の考察したものなので、今後の筑後地域の近世遺跡の調査の中で検証していただきたい。

最後に長期間にわたる発掘調査に際しては、振動や騒音により周辺住民の方々にはたいへんご迷惑をお掛けしました。発掘作業に参加していただいたの方々には、足場の悪い中で強粘土を掘削していただき、ご苦労に感謝申し上げます。今回の調査で、福岡県内の近世遺跡・遺物の研究が進展するとともに、全国的な近世遺跡・遺物の研究に役立つことを望みます。

## 注

- 1 久留米第四歩兵連隊は明治30(1897)年福岡県久留米市国分町に創設され、主として佐賀県、福岡県の南部地区、長崎県の一部が兵役につく部隊で、連隊前には田中軍人デパートという軍人に記念杯など記念品を販売する専門店があったらしく、そこで販売されたものだろうか。
- 2 罌器杯の形態は従軍記念杯と同じものだが、個人名のみが書かれた例は知見にない。地元の古者によると町矢加部地区には野田姓は3軒あり、4次調査区で近代の「野田正人」の表札(「矢加部町屋敷遺跡田圃」図版12-10)が出土しているので、調査区付近に野田氏の宅地が存在していたことは間違いない。親類縁者にあたる人物からもらったのだろう。
- 3 「寛保年間柳川藩領図」は「寛保年中柳川藩領図」ともいわれているが、寛保年間(1741~1743)である根拠はなく、年代が遡る可能性があると考えられている。
- 4 圃業の盛んな地域でもあるので、大型土坑についてはい草の泥染め用槽の可能性も考えたが、泥染めは大正13(1924)年頃から普及したもので、それまではクレークで洗って天日干しする習慣らしく、これは当てはまらない。(文献22)また、「大川市の民俗」(文献20)によると、三丸地区西田口の頃で、「水田を地下げして出た土を瓦屋に売りにいく専門の人がいた」という記事があり、粘土の探掘孔の可能性もない。
- 5 この記事は「福岡県花菱治承証」の記事らしいが、文献22には引用文献の記載がなかった。

- 6 久留米市内の城島で作られる瓦と柳川市・みやま市で作られる瓦の間には僅差しかなく、城島瓦の系譜を引く瓦が両筑後に広がっている、これらは「城島系瓦」というべきだろう。
- 7 博多遺跡群第62次調査2203号遺構は12世紀後半から13世紀初頭のこしき軒で、径80cm程の小型の軒で、銅の鋳造用であった(文献24)。
- 8 赤坂人形は野口祐一氏で5代目、店舗に展示しているのは先代野口文蔵氏作品である。  
「福岡県特産民芸品指定の赤坂人形赤坂人形製作宗元 赤坂始本舖」として現在も営業している。「矢加部町屋敷Ⅰ」第41回3の鳩笛片は同範と思われる型が残っており、「矢加部町屋敷Ⅱ」第56回7はまったく同じ製品が残っている。矢加部町屋敷出土の笛「矢加部町屋敷遺跡Ⅱ矢加部御反田遺跡」第38回11も現代の製品に類似する形態のものがあるので、赤坂人形であろう。
- 9 佐賀県神埼市に尾崎人形という土人形の製作地がある。ここで製作された鳩笛は「矢加部町屋敷遺跡Ⅰ」41回1の鳩笛に近い。また、三義基郡北茂安町白壁の白石焼でも鳩笛を作っていたらしく、久留米市内と筑後市内、佐賀県内の製作地の土人形が流通していたようだ。
- 11 九州歴史資料館で整理中。

#### 引用文献

- 1 城島町教育委員会1994「北ノ屋敷遺跡」城島町文化財調査報告書第1集
- 2 大川市教育委員会2002「榎津調査報告」大川市民俗聞き取り調査報告書(第一集) 大川の民俗
- 3 川勝政太郎1980「梵字講話」株式会社河原書店
- 4 福岡県教育委員会2009「矢加部町屋敷遺跡 矢加部五反田遺跡」有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第5集
- 5 大川市教育委員会2002「向島調査報告」大川市民俗聞き取り調査報告書(第一集) 大川の民俗
- 6 久留米市史編纂委員会1986「第7編 久留米の民俗 第5節 俗信」久留米市史第5巻
- 7 柳川市史編纂委員会2001「山門郡柳河地誌」『柳川市史 史料編1』
- 8 大川市教育委員会2008「三丸調査報告西田川」大川市民俗聞き取り調査報告書(第四集) 大川の民俗
- 9 福岡県い製品商工業共同組合1996「福岡県の陶業誌」
- 10 文献8
- 11 文献7
- 12 「第4節瓦」唐津市教育委員会2005「唐津城跡(IV)」唐津市文化財調査報告書第123集
- 13 福岡県教育委員会1972「福岡県の民家 民家緊急調査報告書」
- 14 文献12
- 15 久留米市史編纂委員会S61「第7編 久留米の民俗 第3節 住」久留米市史第5巻
- 16 筑後市教育委員会2005「水田上町遺跡Ⅰ」筑後市文化財調査報告書第63集
- 17 久留米市史編纂委員会S61「第11編久留米の民俗 第3節 郷土玩具」久留米市史第5巻
- 18 文献17
- 19 久留米市教育委員会2006「京原待屋敷遺跡第5次発掘調査」久留米市文化財調査報告書第220集
- 20 久留米市教育委員会2008「京原待屋敷遺跡第7次発掘調査」久留米市文化財調査報告書第266集
- 21 久留米市教育委員会1996「久留米城岡替町遺跡発掘調査」久留米市文化財調査報告書第116集
- 22 文献9
- 23 文献8
- 24 福岡市教育委員会1995「博多48」福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集

#### 挿図使用図掲載文献

- 1 大川市教育委員会1999「北大境遺跡」大川市文化財調査報告書第8集
- 2 大川市教育委員会2001「小深町遺跡」大川市文化財調査報告書第10集
- 3 久留米市教育委員会1992「久留米市三本松町遺跡」久留米市文化財調査報告書第74集
- 4 久留米市教育委員会2001「Ⅱ、石丸遺跡(第6次調査)」平成12年度久留米市内遺跡群Ⅱ久留米市文化財調査報告書第175集
- 5 佐賀県立博物館1999「平成10年度佐賀県立博物館企画展 有明海博物館」
- 6 財団法人北九州市教育文化財埋蔵文化財調査センター2000「壱町遺跡第1地点」北九州市埋蔵文化財調査報告書第244集
- 7 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター2002「郡司造所跡」山口県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
- 8 日本民具学会1997「日本民具辞典」
- 9 福岡県教育委員会1972「福岡県の民家 民家緊急調査報告書」
- 10 福岡県教育委員会2001「西新町遺跡Ⅲ」福岡県文化財調査報告書第157集
- 11 福岡県教育委員会2007「矢加部町屋敷遺跡Ⅰ」有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集
- 12 福岡県教育委員会2011「矢加部町屋敷遺跡Ⅲ」有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第11集
- 13 柳川古文書館2005「秀吉を支えた武将 田中吉政」
- 14 山崎信二2008「近世瓦の研究」奈良文化財研究所学報第78冊
- 15 筑後市教育委員会2005「水田上町遺跡Ⅰ」筑後市文化財調査報告書第63集
- 16 川島寅次1992「民家の来た道」
- 17 福岡県教育委員会2006「山門前田遺跡」九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第3集
- 18 瀬高町教育委員会1998「瀬高地区遺跡群Ⅱ」瀬高町文化財調査報告書第15集
- 19 みやま市教育委員会2010「松田掛畑遺跡Ⅱ松延城跡」みやま市文化財調査報告書第1集
- 20 久留米市教育委員会1995「久留米城外郭」久留米市文化財調査報告書第96集
- 21 福岡県教育委員会2006「西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡(2次調査)」

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第5集

22 福岡北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室2004『小倉城代米御蔵跡Ⅳ』北九州市埋蔵文化財調査報告書第313集

23 九州歴史資料館2012『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ 蒲船津西ノ内遺跡蒲船津水町遺跡』有明海海岸道路

大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集

参考文献

江戸遺跡研究会2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房株式会社

秋田裕毅2002『ものと人間の文化史104 下駄』法政大学出版局

大分市歴史資料館H3『第10回特別展 九州の土人形』

福岡県教育委員会2008『矢加部町屋敷遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集

渡辺誠1992『焼壺壺 補注1・3』『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編 吉川弘文館



81図11  
1 81図2・11



写真5  
焼壺壺の蓋と見られる小皿と  
蛍光X線分析試料写真

## 4. 矢加部町屋敷遺跡の自然科学系の分析

### 矢加部町屋敷遺跡出土赤色顔料の保存科学的調査

九州歴史資料館 加藤 和哉

#### 1. はじめに

古代日本において出土赤色顔料は、鉱物である辰砂を粉状にしたもので、硫化水銀を主たる成分とするものである朱と、鉱物としての赤鉄鉱を粉状にしたものや磁赤鉄鉱を焼成して得るもの、その他、鉄細菌、鉄錆が由来となる、酸化第二鉄を主たる成分とするベンガラの種類に大別できることがこれまでの研究から知られている。

本稿では、福岡県柳川市矢加部町屋敷遺跡から出土した硯(写真5-8)および播鉢(写真5-6)に付着した赤色顔料の種類を同定することを目的とし、保存科学的手法により調査を行った。

#### 2. 調査方法

まず、デジタルマイクロスコープを用いて、20~100倍程度の倍率で、顔料の付着状態を観察し、遺物本体が赤色を発しているのではないことを確認した。その後、顔料付着箇所を、直接、蛍光X線分析法により、含有される元素を定性的に分析した。

赤色顔料の場合、冒頭で述べたように、各種の顔料において、朱である場合、水銀(Hg)、ベンガラである場合、鉄(Fe)というそれぞれに特徴づけられる元素が含まれており、これらの存在によって、顔料の種類を推定を行うこととした。

測定は九州歴史資料館にて行い、測定機器および分析条件は以下のとおりである。

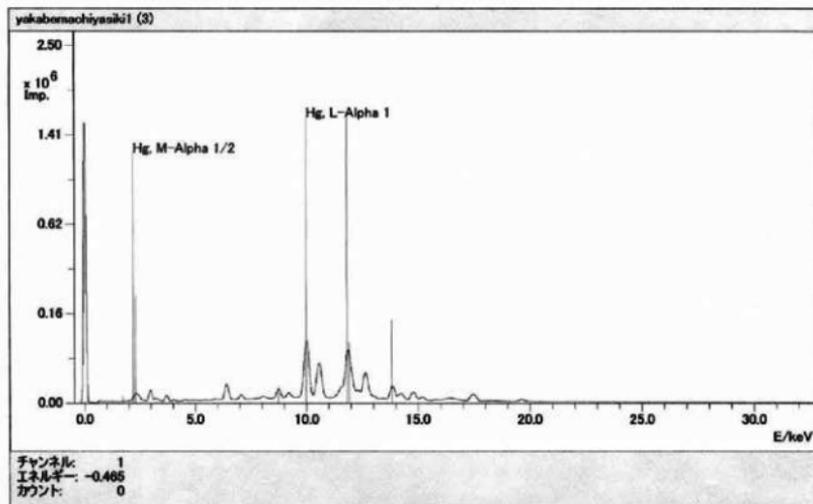
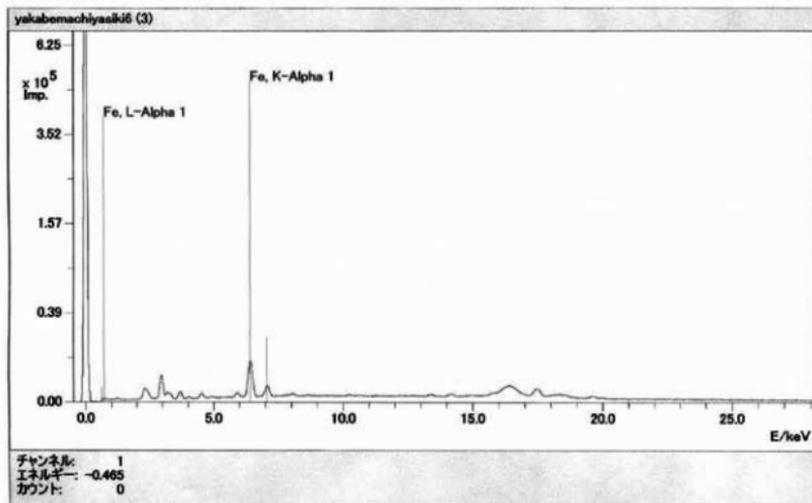
- ・使用機器：エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SPECTRO MIDEX)
- ・分析条件：電圧 45kV/電流 0.3mA/対陰極 モリブデン(Mo)/検出器 シリコンドリフト検出器/測定雰囲気 大気/測定範囲 0.3ミリ/測定時間 300秒

#### 3. 調査の結果

推定にあたっては、主たる元素の存在を、検出されたスペクトルのピークから定性的に判断をおこなった。

まず、硯については、水銀(Hg)のピークが明瞭にみられることから、この赤色顔料は朱であると推定できる。硯に付着しているということから考えて、顔料というよりは、書入れの朱である可能性を指摘することができよう。

次に、播り鉢であるが、鉄(Fe)が検出され、水銀(Hg)は検出されなかったことから、この赤色顔料はベンガラであることが推定できる。なお、比較として播り鉢胎土部分の測定も行ったところ、胎土由来と考えられるケイ素(Si)やアルミニウム(Al)のピークがみられた。顔料にはそのピークがみられないため、赤色部分は鉄(Fe)であると判断できる。この町屋敷跡において、ベンガラを播り潰す作業が行われていたのかと、窺うこともできよう。



第145図 摺鉢(上)・硯(下)付着赤色顔料蛍光X線スペクトル図

## 矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシヤン(パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

矢加部町屋敷遺跡は福岡県柳川市矢加部に位置する17世紀後半から19世紀中葉の町屋敷跡である。遺跡は久留米柳川往還に面し、有明海沿岸に立地する。堆積物は粘土が主体で、動植物遺体の遺存状況が良い。ここでは、土坑から出土した大型植物遺体を同定し、食用などに利用された植物あるいは遺構周辺での栽培状況や植生について検討する。なお、同定にあたっては、千葉大学園芸研究科百原新氏のご教示を得た。

### 2. 試料と方法

試料は、福岡県教育委員会が堆積物の水洗と状態が良好な種実の抽出を行った7試料である(一部未水洗)。1試料中には、1点の種実を含む試料もあれば多種の種実が多数混合した試料もあった。少量の種実を含む試料は、調査時に目視で取り上げられ、多量の種実を含む試料は、パンケース1箱分の堆積物を2mm目の篩で水洗されたものである。試料の内訳は、1次地点の土坑3(試料No.1, 4)と土坑26(試料No.3)、4次地点の土坑7(試料No.5)と土坑12(試料No.2)、土坑80(試料No.7)、土坑84(試料No.6)である。各土坑の詳細な時期は、古い方から4次地点の土坑84が17世紀中葉～後葉、1次地点の土坑26が18世紀中葉、1次地点の土坑3が19世紀初頭、4次地点の土坑7は19世紀中葉で、4次地点の土坑12と80は時期不明である。

試料は、一部の再水洗と表面のクリーニングをした上で、肉眼および実体顕微鏡下で大型植物遺体の抽出・同定・計数を行った。計数が困難な試料や多数含まれている試料は記号(+)で示した。試料および残渣は福岡県教育委員会に保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、木本植物ではヤマモモ核と、クリ果実、コナラ属果実、クスノキ核、ウメ核、モモ核、サンショウ炭化種子、ウルシ炭化内果皮、カキノキ属炭化種子の9分類群、草本植物ではトウガン果実・種子と、メロン仲間種子、カボチャ種子、ヒョウタン仲間種子、ヒシ属果実・炭化果実、ナス属種子、オオムギ炭化種子、イネ籾殻・炭化粉・炭化種子、ホタルイ属果実の9分類群の計18分類群が見いだされた。このうちトウガンには、果実内に多数の種子を残したまま保存されていた試料があり、これらの試料についてはこの状態で果実・種子1として計数した。このほかに科以下の識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。単体で出土した種実は完形で3767点、破片で243点であった。

以下に、産出した種実について地点および遺構別に記載する(同定不能は除く)。

#### [1次地点]

土坑3(19世紀初頭):ウルシが非常に多く、イネがやや多く、メロン仲間とヒシ属が少量、クリとクスノキ、ウメ、トウガン、カボチャ、ナス属、オオムギがわずかに得られた。

土坑26(18世紀中葉):ウルシとイネがやや多く、コナラ属とカキノキ属、ヒシ属、ホタルイ属がわずかに得られた。

#### [4次地点]

表65 矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(括弧は破片を示す)

分類群	部位/試料No.	1次			4次			
		遺構名		土坑26	土坑7	土坑12	土坑80	土坑84
		時期	19世紀初頭	18世紀中葉	19世紀中葉	不明	不明	17世紀中葉 ～後葉
	No.1	No.4	No.3	No.5	No.2	No.7	No.6	
ヤマモモ	核					1		
クリ	果実		(6)					
コナラ属	果実			(1)				
クスノキ	核	2 (1)						
ウメ	核	1	(1)					
モモ	核				1			
サンショウ	炭化種子					1		
ウルシ	炭化内果皮	1061 (27)	1	34 (2)			1	
カキノキ属	炭化種子			(4)				
トウガン	果実・種子							2
	種子	7				2362 (111)	2 (50)	
メロン仲間	種子	16				3 (5)	247	
カボチャ	種子	9 (5)						
ヒョウタン仲間	種子					2		
ヒシ属	果実	1 (21)	(3)	(1)				
	炭化果実	(1)						
ナス属	種子	1						
オオムギ	炭化種子	3					1	
イネ	糊殻	(+++)		(++)				
	炭化初	1					1	
	炭化種子	1		3				
ホタルイ属	果実			1			1	
同定不能	炭化種実	(1)					(3)	

+ : 1-9, ++ : 10-49, +++ : 50-99

土坑7(19世紀中葉):モモが1点得られた。

土坑12(時期不明):トウガンが非常に多く、ヤマモモとサンショウ、メロン仲間、ヒョウタン仲間がわずかに得られた。

土坑80(時期不明):メロン仲間が非常に多く、トウガンが少量、ウルシとオオムギ、イネ、ホタルイ属がわずかに得られた。

土坑84(17世紀中葉～後葉):トウガンの果実(種子を含む)が2破片得られた。1破片あたり、完形の果実の約1/4が残存しており、2破片をあわせると完形の約1/2個体分であった。

以下に、大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1)ヤマモモ *Morella rubra* Lour. 核 ヤマモモ科

淡褐色で、凸レンズ型の扁平な球体。木質で表面は粗い。長さ7.6mm、幅6.6mm、厚さ4.4mm。

(2)クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. 果実 ブナ科

黒褐色で、破片だが、完形ならば側面は広卵形。表面は平滑で、縦に細く浅い筋がみられる。殻斗着痕は果実幅と同じ程度の幅広になり、不規則で微細な丘状の突起が密にある。長さ15.0mm、残存幅10.1mm、厚さ8.8mm。

(3)コナラ属 *Quercus* sp. 果実 ブナ科

茶褐色で、破片だが、完形ならば長楕円形か。果実直径に対し、1/2程度と思われる臍が残る。コナラもしくはウラジロガシか。残存長9.8mm、残存幅5.8mm。

(4)クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J.Presl 核 クスノキ科

明褐色で、上面観・側面観は円形。表面は平滑で一条の稜がある。光沢があり、壁は薄い。長さ6.8mm、幅6.5mm、厚さ6.2mm。

(5)ウメ *Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese 核 バラ科

淡褐色、卵形で上面観は両凸レンズ形。表面には、不規則で深く小さな孔がある。着点は凹む。縫合線に沿って深い溝が入る。長さ17.2mm、幅13.3mm、厚さ8.9mm。

(6)モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。長さ26.2mm、幅19.4mm、厚さ15.3mm。

(7)サンショウ *Zanthoxylum piperitum* (L.) DC. 炭化種子 ミカン科

上面観は卵形、側面観は楕円形ないし倒卵形。基部側面に稜線があり、内側には短く斜め下を向く臍がある。網目状隆線は細かく低い。種皮は厚く硬い。長さ3.3mm、幅2.7mm、厚さ2.5mm。

(8)ウルシ *Toxicodendron vernicifluum* (Stokes) F.A.Barkley 炭化内果皮 ウルシ科

上面観は中央がやや膨らむ扁平、側面観は中央がややくびれた広楕円形。表面には微細な網目状で中央が凹むディンプルがある。断面を観察すると、内層には波状の壁を持つ縦に長い細胞が配列し、中層では正方形に近い細胞が柵状を呈する。外層は上部が炭化により失われているが、長柱状の細胞が配列する。以上の表面および断面構造からウルシと同定した。任意に抽出した10点の大きさは、長さ3.0~4.9(平均3.7)mm、幅4.2~6.6(平均5.1)mm、厚さ2.0~3.2(平均2.6)mm。

(9)カキノキ属 *Diospyros* spp. 炭化種子 カキノキ科

黒色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で、基部がやや曲がり突出する。表面にはちりめん状のしわが見られる。長さ13.7mm、幅10.0mm。

(10)トウガン *Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn. 果実・種子 ウリ科

果実は果皮が残存していないが、黄白色の果肉部分が部分的に残存する。果実の大きさは長軸115.0cm、短軸110.0cm。果肉の内部には種子が残存する。種子は黄白色で、倒卵形。表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり、中央部は窪む。任意に抽出した単体出土の種子10点の大きさは、長さ10.8~12.7(平均11.9)mm、幅6.3~7.1(平均6.7)mm。

(11)メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

黄白色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。表面は平滑で、基部は突出せず直線状の隆線となる。藤下(1984)は、種子の大きさからおおむね次の3群に分けられるとしている。長さ6.0mm以下は雑草メロン型、長さ6.1~8.0mmはマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1mm以上はモモルディカメロン型である。任意に抽出した10点の大きさは、長さ6.7~8.2(平均7.5)mm、幅3.0~3.7(平均3.5)mmで、大ききで分類するとほとんどがマクワウリ・シロウリ型であるが、モモルディカメロン型も混じる。

(12)カボチャ *Cucurbita moschata* (Duchesne ex Lam.) Duchesne ex Poir. 種子 ウリ科

淡褐色で、長倒卵形。周縁を毛が取り囲む。長さ16.3mm、幅8.5mm。

(13)ヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* (Molina) Standl. 種子 ウリ科

やや淡黄褐色~褐色で、上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや湾曲して左右は非対象、本来ならば先端はW字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が2本走る。壁はややスポンジ質。長さ14.3mm、幅6.4mm。

(14)ヒシ属 *Trapa* spp. 果実・炭化果実 ヒシ科

黒褐色で、不整三角形。細く先端が尖った角が2方向にのびる。上位角は細く鋭い。長さ10.0mm、幅14.0mm。

(15)ナス属 *Solanum* spp. 種子 ナス科

褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には畝状突起が細かい網目模様がある。着点の一端がやや突出する。ここでいうナス属とは、栽培植物のナス以外のナス属である。長さ3.0mm、

幅2.9mm。

(16)オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子 イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は楕円形～円形となる(Jacomet, 2006)。長さ6.6mm、幅3.2mm、厚さ2.4mm。

(17)イネ *Oryza sativa* L. 籾殻・炭化籾・炭化種子 イネ科

籾は黄褐色～淡褐色で、側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。長さ7.0mm、幅3.3mm。種子は上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の2本の浅い溝があり、中央がやや盛り上がる。長さ4.7mm、幅2.8mm。

(18)ホタルイ属 *Scirpus* spp. 果実 カヤツリグサ科

黒色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は短倒卵形。頂部は尖り、基部は狭まって着点がある。壁は硬く、光沢がある。長さ2.1mm、幅1.8mm。

#### 4. 考察

17世紀後半から19世紀中葉の6基の土坑から産出した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物が種類および産出数ともに非常に多かった。栽培植物は、木本植物ではウメとモモ、ウルシの3種類、草本植物ではトウガンとカボチャ、メロン仲間、ヒョウタン仲間、オオムギ、イネが産出した。ウルシ以外は食用に利用した残渣と考えられる。ただし、ヒョウタン仲間は容器に利用した可能性もある。ウルシは18世紀中葉の土坑26と19世紀初頭の土坑3、時期不明の土坑80から産出し、特に土坑3では1000点以上産出した。内果皮がすべて炭化していたため、中果皮に含まれる蠟を採取後に土坑内に廃棄された可能性がある。トウガンは単体出土の種子だけでも破片を含めて2500点以上産出したが、17世紀中葉から後葉の土坑84では、低地遺跡でも通常残存しない黄白色の果肉ごと残存しており、内部に種子が残存した状態で約1/2個体が産出した。メロン仲間も時期不明の土坑80で約250点と多産したが、種子の大きさからほとんどが栽培種のマクワウリ・シロウリ型に分類され、一部モモルディカメロン型が含まれる可能性がある。

18世紀中葉の土坑26から見いだされたカキノキ属には栽培種と野生種があり、出土した種子は栽培種の大きさに近いが、破片が多く、断定できなかった。また野生植物であるが食用可能な種実としてヤマモモとクリ、コナラ属、サンショウ、ヒシ属が見いだされた。クリやコナラ属、ヒシ属はほとんど破片で、利用後の残渣の可能性が高い。

土坑の周辺から自然の営力で土坑内に堆積したと考えられる種実としては、クスノキとナス属、ホタルイ属がある。このうち、ホタルイ属は抽水植物であるため、土坑26や土坑80では土坑内もしくは周辺に水が溜まる環境があった可能性がある。しかし、これらの種実の産出数はわずかで、土坑内に偶発的に入ったと考えられる。

以上のことから、土坑内に堆積した植物では当時食用された植物や利用された植物の種実が主体となって堆積していたと考えられる。

#### 引用文献

藤下典之(1984)出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法、渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学—総括報告書」: 638-654, 同朋舎出版。

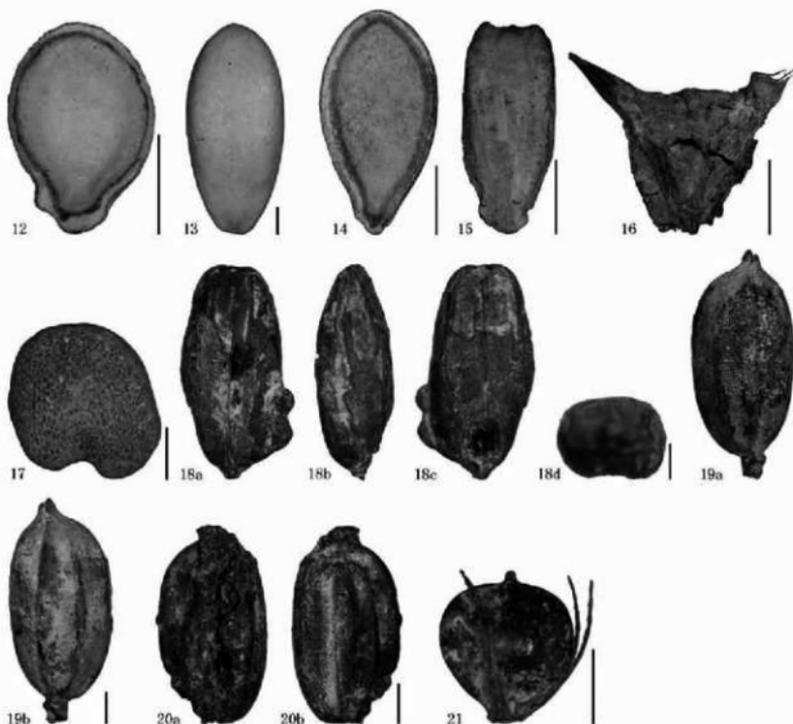
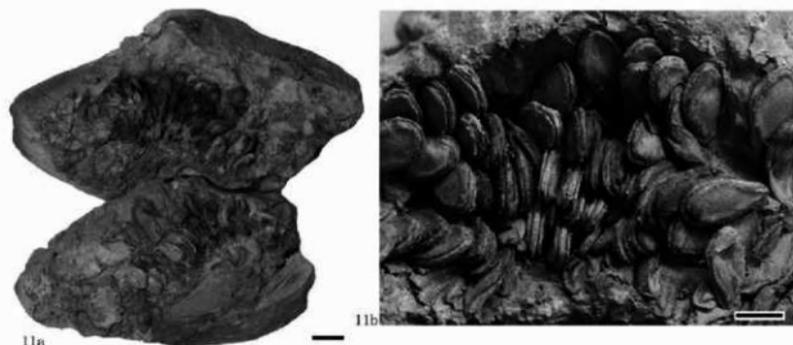
Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.



スケール 1, 3, 4, 7-9b: 1mm, 2, 5, 6, 10: 5mm

写真6 矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(1)

1. ヤマモモ核 (土坑 12, No. 2)、2. クリ果実 (土坑 3, No. 4)、3. コナラ属果実 (土坑 26, No. 3)、4. クスノキ核 (土坑 3, No. 1)、5. モモ核 (土坑 7, No. 5)、6. ウメ核 (土坑 3, No. 1)、7. サンショウ炭化種子 (土坑 12, No. 2)、8. ウルシ炭化内果皮 (土坑 3, No. 1)、9a-b. ウルシ炭化内果皮 (土坑 3, No. 1)、9c-d. ウルシ炭化内果皮断面而走査電子顕微鏡写真 (土坑 3, No. 1)、10. カキノキ炭化種子 (土坑 28, No. 3)



スケール 11a:10mm, 11b:5mm, 12, 14-16:5mm, 13, 17-21:1mm

写真7 矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(2)

11a. トウガン果実・種子 (土坑84, No.6)、11b. 11aの拡大 (土坑84, No.6)、12. トウガン種子 (土坑3, No.1)、13. メロン仲間種子 (土坑3, No.1)、14. カボチャ種子 (土坑3, No.1)、15. ヒョウタン仲間種子 (土坑12, No.2)、16. ヒシ属果実 (土坑3, No.1)、17. ナス属種子 (土坑3, No.1)、18. オオムギ炭化種子 (土坑3, No.1)、19. イネ炭化粉 (土坑3, No.1)、20. イネ炭化種子 (土坑3, No.1)、21. ホタルイ属果実 (土坑26, No.3)

# 矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体の同定

中村賢太郎(パレオ・ラボ)

## 1. はじめに

福岡県柳川市矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡は、有明海沿岸に立地し、久留米柳川往還に面した町屋遺跡である。矢加部町屋敷遺跡の発掘調査では、17～20世紀に属する遺構から魚骨、獣骨、貝が良好な保存状態で出土した。ここでは矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体の同定結果を報告する。なお、現生標本の閲覧にあたっては、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生と早稲田大学の樋泉岳二先生にご協力をいただいた。

## 2. 試料と方法

試料は、福岡県教育委員会が発掘調査現場での目視あるいは水洗により採取した動物遺体である。試料の多い土坑3などは、堆積物が2mm目の篩で水洗され、試料が回収されている。

試料が採取された遺構は、1次地点の大溝2、土坑3、土坑19、2次地点の溝2、4次地点の埋藏2、茶褐色土落ち込み、大土坑2、大土坑5、土坑64、ビット83、土坑84、土坑88、土坑90、5次地点の大土坑1、ビット24である。各遺構の時期は、古い方から4次地点の土坑84が17世紀中葉～後葉、同土坑64が17世紀末～18世紀初頭、同大土坑5が18世紀初頭以前、同土坑90が18世紀初頭、同埋藏2と1次地点の土坑19が18世紀初頭～前葉、1次地点の大溝2が18世紀前葉～19世紀中葉、5次地点の大土坑1が18世紀前葉～中葉、4次地点の土坑88が18世紀中葉～後葉、1次地点の土坑3が19世紀初頭、4次地点の大土坑2が19世紀中葉、2次地点の溝2が19世紀後葉～20世紀前葉、4次地点の茶褐色土落ち込みと同ビット3および5次地点のビット24は時期不明である。

同定は肉眼で現生標本との比較により行った。試料は九州歴史資料館に保管されている。

## 3. 結果

同定された動物遺体の一覧を表1に、個々の動物遺体の同定結果と観察所見は表2、3に示す。

### (1) 貝類

貝類では、オオタニシ、ツメタガイ、アカニシ、バイ、オニニシ、フネガイ科(ミミエガイ類)、サルボウ、マガキ、ドブガイ属、アゲマキ、シジミ属、アサリが同定された。

貝類の多くは1次地点の大溝2北部から出土しており、大溝2北部の中層でフネガイ科、ドブガイ属、シジミ属、アサリ、上層でアカニシ、バイ、オニニシ、サルボウ、層不明ではマガキ、アゲマキが見られた。その他の遺構では、1次地点の土坑19でオオタニシ、2次地点の溝2でツメタガイが見られた。

### (2) 魚類

魚類では、サメ類、真骨類、ヒラ、スズキ属、シイラ、タイ科、マダイ、ボラ科、マグロ属、ヒラメ科が同定された。

1次地点の大溝2で、スズキ属左主鰓蓋骨、真骨類左鰓条骨が見られた。同土坑3で、ヒラ右主上顎骨、シイラ腹椎、タイ科犬歯、同左方骨、同左主鰓蓋骨、同腹椎、同鱗、ヒラメ科右前上顎骨、真骨類の各部位が見られた。

表66 矢加部町屋敷遺跡出土動物遺体種名表

軟体動物門	Mollusca
腹足綱	Gastropoda
扇形螺科	Architaenioglossa
ニシキ科	Viviparidae
ツニシ属	<i>Cyprangopulidina</i>
オオツニシ属	<i>Cyprangopulidina japonica</i>
腹足目	Discopoda
ツマガイ科	Naticidae
ツメケガイ目	Glossaulax
ツメケガイ属	<i>Glossaulax dityma</i>
新腹足目	Neogastropoda
アラキガイ科	Muricidae
Rapana属	<i>Rapana</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
エソバイ科	Buccinidae
バイ属	<i>Babylonia</i>
バイ	<i>Babylonia japonica</i>
キナヅニシ属	<i>Hemillusus</i>
オニニシ	<i>Hemillusus crassicaudus</i>
二枚貝綱	Bivalvia
フネガイ目	Arctiada
フネガイ科	Arctidae
フネガイ科の一種	Arctidae gen. et sp. Ined.
サルボウ属	<i>Scapharca</i>
サルボウ	<i>Scapharca subcrenata</i>
ウグイスガイ目	Pterioida
イタボギ科	Ostreidae
マガキ属	<i>Crassostrea</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
インガイ目	Mytiloidea
インガイ科	Unionidae
ドブガイ目	Anodonta
ドブガイ科の一種	Anodonta sp.
マルステレガイ目	Veneroida
ナクマガイ科	Pharellidae
アゲマキ属	<i>Sinonovacula</i>
アゲマキ	<i>Sinonovacula constricta</i>
シジミ科	Corticulidae
シジミ属	<i>Corbicula</i>
シジミ属の一種	<i>Corbicula</i> sp.
マルステレガイ科	Veneridae
アサリ属	<i>Ruditapes</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
脊椎動物門	Chordata
軟骨魚綱	Chondrichthyes
サメ科	Selachii
サメ類の一種	Selachii ord., fam., gen. et sp. Ined.
硬骨魚綱	Actinopterygii
高骨類	Teleostei
高骨類の一種	Teleostei ord., fam., gen. et sp. Ined.
ニシシ目	Clupeiformes
ニシシ科	Clupeidae
ヒラメ属	<i>Liha</i>
ヒラメ	<i>Liha elongata</i>
スズキ目	Perciformes
スズキ科	Percichthyidae
スズキ属	<i>Lateolabrax</i>
スズキ属の一種	<i>Lateolabrax</i> sp.
シイラ科	Coryphaenidae
シイラ属	<i>Coryphaena</i>
シイラ	<i>Coryphaena hippurus</i>
タイ科	Sparidae
タイ科の一種	Sparidae gen. et sp. Ined.
マガイ属	<i>Plagus</i>
マガイ	<i>Plagus major</i>
ボラ科	Mugilidae
ボラ科の一種	Mugilidae gen. et sp. Ined.
サバ科	Scombridae
マガロ属	<i>Thunnus</i>
マガロ属の一種	<i>Thunnus</i> sp.
カレイ目	Pleuronchiformes
ヒラメ科	Paralichthyidae
ヒラメ科の一種	Paralichthyidae gen. et sp. Ined.
爬虫綱	Reptilia
カメ目	Tesudinidae
インガメ科	Geomydidae
インガメ科の一種	Geomydidae gen. et sp. Ined.
スッポン科	Trogonidae
スッポン属	<i>Pelodiscus</i>
スッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>
哺乳綱	Mammalia
哺乳綱の一種	ord., fam., gen. et sp. Ined.
獣脚目	Cetartiodactyla
ウシ科	Bovidae
ウシ属	<i>Bos</i>
ウシ属の一種	<i>Bos taurus</i> ?
ウマ目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ属	<i>Equus</i>
ウマ	<i>Equus caballus</i>
鳥綱	Aves
キジ目	Galliformes
キジ科	Phasianidae
ヤケイ属	<i>Gallus</i>
ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i>
アビ目	Columbiformes
アビ科	Columbidae
アビ属	<i>Columba</i>
アビ属の一種	<i>Columba</i> sp.

4次地点の埋藏2でマダロ属腹椎、同大土坑5でスズキ属右角骨、同ビット83でマダイ前頭骨、同土坑84でサメ類椎骨が見られた。

5次地点の大土坑1で、ボラ科左主鰓蓋骨、マダロ属尾椎、真骨類右鰓条骨が見られた。

### (3) 爬虫類

爬虫類では、イシガメ科とスッポン科が同定された。

1次地点の大溝2でイシガメ科腹甲が見られた。同土坑3および4次地点の土坑64、同土坑90でスッポン腹甲、5次地点の大土坑でスッポン背甲が見られた。

### (4) 哺乳類

哺乳類では、哺乳綱、ウマが同定された。その他にウシの可能性のある大型哺乳類骨が見られた。

1次地点の大溝2で、ウシ?の左脛骨と長骨骨端破片、哺乳綱の各部位が見られた。

4次地点の大土坑2でウマ左基節骨、同土坑64でウマ左肩甲骨、同土坑88でウマ右中足骨が見られた。

5次地点のビット24でウマの上顎切歯5本が見られた。5本の歯種は左第1切歯、左第3切歯、右第1~3切歯である。

### (5) 鳥類

鳥類では、鳥綱、ニワトリ、アビ属が同定された。

1次地点の大溝2で、ニワトリの胸骨と右足根中足骨、アビ属左足根中足骨、鳥綱右足根中足骨が見られた。

4次地点の茶褐色土落ち込みでニワトリの右足根中足骨、同大土坑5でニワトリの左上腕骨、同土坑88で鳥綱の右肩甲骨が見られた。

## 4. 考察

貝類では、淡水域に生息するオオツニシやドブガイ属、淡水域あるいは汽水域に生息するシジミ属、海の内湾に生息するツメケガイ、アカニシ、フネガイ科(ミミエガイ類)、サルボウ、マガキ、アゲマキ、アサリ、湾外に生息するバイ、オニニシなどが見られた。河川や湖沼から有明海にかけ

表67 矢加部町屋敷遺跡出土の魚類、爬虫類、哺乳類、鳥類

番号	調査次・遺構	分類群	部位	部分・状態	左右	数量	備考
1	1次大溝2北部上層	スズキ属	主鰓蓋骨	ほぼ完形	左	1	
2	1次土坑3	タイ科	方骨	関節部	左	1	
3	1次土坑3	ヒラメ科	前上顎骨	中央部	右	1	
4	1次土坑3	真骨類	不明	破片	?	1	
5	1次土坑3	真骨類	擬鎖骨?	完形	?	1	
6	5次大土坑1南部上層	ボラ科	主鰓蓋骨	ほぼ完形	左	1	
7	4次大土坑5	スズキ属	角骨	ほぼ完形	右	1	
8	4次ビット83	マダイ	前頭骨	破片	—	1	
9	1次土坑3	真骨類	擬鎖骨	破片	?	1	
10	1次土坑3	真骨類	不明	破片	?	1	
11	1次土坑3	タイ科	主鰓蓋骨	関節部	左	1	
12	5次大土坑1南部上層	マクロ属	尾椎	椎体	—	1	
13	1次土坑3	シイラ	腹椎	ほぼ完形	—	1	
14	4次埋藏2	マクロ属	腹椎	椎体	—	1	
15	1次大溝2北部上層	ニワトリ	胸骨	破片	—	1	
16	1次土坑3	真骨類	間鰓蓋骨	完形	?	1	
17	1次土坑3	タイ科	腹椎	ほぼ完形	—	1	
18	4次土坑84	サメ類	椎骨	完形	—	1	
19	1次土坑3	ヒラ	主上顎骨	ほぼ完形	右	1	
20	4次土坑88	烏綱	肩甲骨	関節部	右	1	
21	1次土坑3	タイ科	犬歯	先端欠損	?	1	
22	1次土坑3	タイ科	鱗	ほぼ完形	?	14	
23	1次土坑3	真骨類	鰓棘	ほぼ完形	—	1	
24	1次土坑3	真骨類	不明	破片	?	1	
25	5次大土坑1中層	マクロ属	尾椎	椎体	—	1	
26	1次大溝2北部上層	哺乳綱	頭蓋骨	破片	?	1	
27	1次大溝2北部上層	真骨類	鰓条骨	完形	左	1	大型
28	5次大土坑1	真骨類	鰓条骨	完形	右	2	大型, 切創
29	1次大溝2北部上層	アビ属	足根中足骨	完形	左	1	
30	1次大溝2北部上層	ニワトリ	足根中足骨	ほぼ完形	右	1	
31	4次茶褐色土落ち込み	ニワトリ	足根中足骨	ほぼ完形	右	1	
32	1次大溝2北部上層	烏綱	足根中足骨	骨幹	右	1	
33a	5次ビット24	ウマ	上顎切歯	第1切歯	左	1	
33b	5次ビット24	ウマ	上顎切歯	第3切歯	左	1	
33c	5次ビット24	ウマ	上顎切歯	第1切歯	右	1	
33d	5次ビット24	ウマ	上顎切歯	第2切歯	右	1	
33e	5次ビット24	ウマ	上顎切歯	第3切歯	右	1	
34	1次大溝2北部	哺乳綱	不明	破片	?	1	大型獣
35	4次大土坑5	ニワトリ	上胸骨	完形	左	1	
36	4次大土坑2	ウマ	基節骨	前後不明	左	1	
37	1次大溝2北部	哺乳綱	寛骨	脛骨	右	1	大型獣
38a	1次大溝2北部	ウシ?	脛骨	骨幹	左	1	
38b	1次大溝2北部	ウシ?	長骨	骨端	?	1	
39	4次土坑88	ウマ	中足骨	近位端~骨幹	右	1	
40	4次土坑64	ウマ	肩甲骨	関節部	左	1	
41	4次土坑64	スッポン	腹甲	中腹骨板破片	右	1	
42	1次土坑3	スッポン	腹甲	下腹骨板破片	右	1	
43	4次土坑90	スッポン	腹甲	下腹骨板破片	左	1	
44	5次大土坑南部中層	スッポン	背甲	破片	—	1	
45	1次大溝2北部	イシガメ科	腹甲	破片	—	4	

ての広い範囲で採取された貝類が持ち込まれ、食料として利用されたと考えられる。ただし、ドブガイ属とシジミ属は、1次地点の大溝2から出土しており、溝に自然に生息していた可能性も考えられる。

表68 矢加部町屋敷遺跡出土の貝類

番号	調査次・遺構	分類群	左右	数量	備考
1a	1次大溝2北部	マガキ	左	1	1bと癒着
1b	1次大溝2北部	マガキ	右	1	1aと癒着
2	1次大溝2北部	アゲマキ	右	1	半欠
3	1次大溝2北部上層	オニニシ	—	1	ほぼ完形
4	1次大溝2北部上層	アカニシ	—	1	ほぼ完形
5	1次土坑19	オオタニシ	—	1	完形
6	1次大溝2北部上層	バイ	—	1	完形
7	2次溝2	ツメタガイ	—	1	完形
8	1次大溝2北部上層	サルボウ	右	1	完形
9	1次大溝2北部中層	フネガイ科	左	1	完形、放射肋32条、放射肋上に顆粒、ミミエガイ類
10	1次大溝2北部中層	ドブガイ属	右	1	完形、タガイorヌマガイ
11	1次大溝2北部中層	シジミ属	右	1	完形、マシジミorヤマトシジミ
12	1次大溝2北部中層	アサリ	左	1	完形

魚類では、汽水

域から内湾に生息するヒラ、スズキ属、ボラ科、沿岸に生息するヒラメ科、沿岸～沖合のマガイなどタイ科、外洋を回遊するシイラ、マグロ属などが見られた。魚類も比較的広い範囲で採取されたものが持ち込まれ、食料として利用されたと考えられる。

爬虫類のうち、イシガメ科は、人により利用されていた可能性の他に、1次地点の大溝2に自然に生息していた可能性がある。スッポンは複数の土坑で見られ、食用にされていたと考えられる。

哺乳類では、ウシの可能性のある大型哺乳類とウマが見られ、これらは家畜として利用されたと考えられる。

鳥類では、ニワトリが家畜として利用されたと考えられる。また、野鳥としてはアビ属が見られた。アビ属は狩猟されたものが持ち込まれ、食料として利用されたと考えられる。

#### 参考文献

- 金子浩昌(2001)食料残滓とその他の動物遺体、江戸遺跡研究会編「図説江戸考古学研究事典」:393-401、柏書房。  
 松井章(2008)動物考古学、312p、京都大学学術出版会。  
 西本豊弘・松井章編(1999)考古学と動物学、210p、同成社。

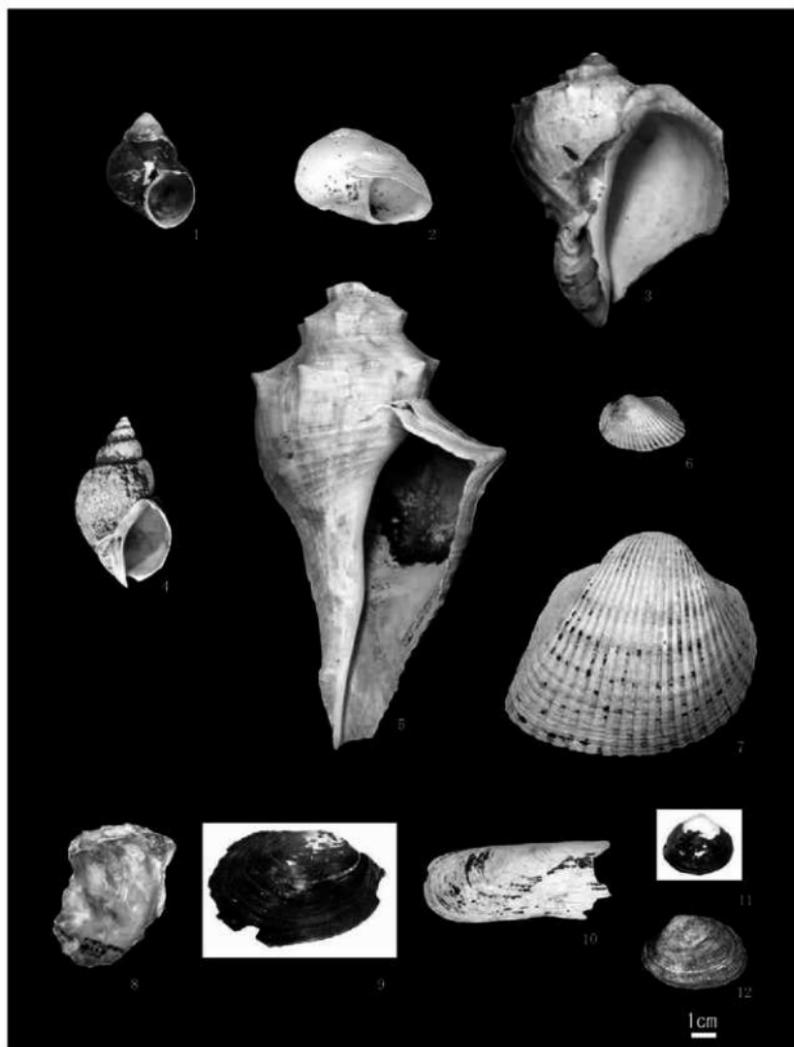


写真8 矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体(1)

1. オオタニシ (土坑 19, No. 5)、2. ツメタガイ (溝 2, No. 7)、3. アカニシ (溝 2, No. 4)、
4. バイ (溝 2, No. 6)、5. オニニシ (溝 2, No. 3)、6. フネガイ科 (溝 2, No. 9)、
7. サルボウ (溝 2, No. 8)、8. マガキ (溝 2, No. 1a)、9. ドブガイ属 (溝 2, No. 10)、
10. アゲマキ (溝 2, No. 2)、11. シジミ属 (溝 2, No. 11)、12. アサリ (溝 2, No. 12)



写真9 矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体(2)

1. サメ類歯骨(土坑64, No.18), 2. ヒラギ上顎骨(土坑3, No.18), 3. スズキ属胸骨(大土坑6, No.7), 4. スズキ属生胸骨(大土坑2, No.1),  
 5. シイタ鹿(土坑3, No.12), 6. マダヒ鹿歯骨(ピット83, No.8), 7. タイ科生胸骨(土坑3, No.11), 8. ホシ科生胸骨(大土坑1, No.6),  
 9. マダヒ鹿尾骨(大土坑1, No.23), 10. ヒラギ科上顎骨(土坑3, No.33), 11. イシガキ科股骨(大土坑2, No.43), 12. スッポン骨甲(大土坑44),  
 13. スッポン骨甲(土坑64, No.41), 14. ウシ?股骨L(大土坑2, No.26a), 15. ウマ上顎切歯(ピット24, No.23), 16. ウマ肩甲骨(土坑64, No.40),  
 17. ウマ尾骨(土坑58, No.20), 18. ウマ尾骨L(大土坑2, No.20), 19. ニワトリ胸骨(大土坑2, No.15), 20. ニワトリ上顎骨L(大土坑5, No.28),  
 21. ニワトリ尾椎中尾骨(大土坑2, No.30), 22. アジ属尾椎中尾骨L(大土坑2, No.29)



6図5



9図3



13図15



15図4



16図10



18図20



18図22



18図23



18図24



18図27



31図9



31図11



32図4



36図1



36図2



36図4



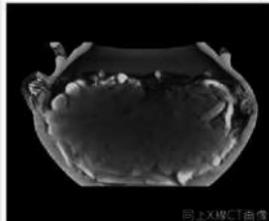
37図12



33図6-1-2



33図6-2上圖



同X線CT画像



37図2



37図7



37圖15



37圖27



37圖28



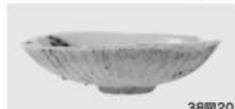
38圖7



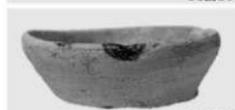
38圖10



38圖19



38圖20



39圖5



39圖9



41圖7



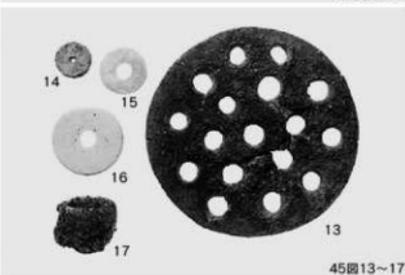
40圖7



41圖88



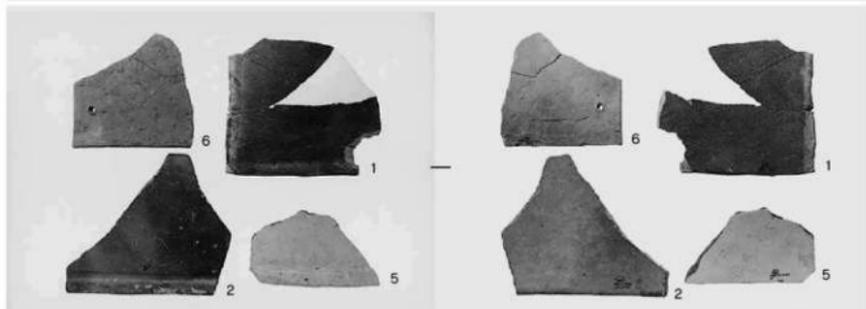
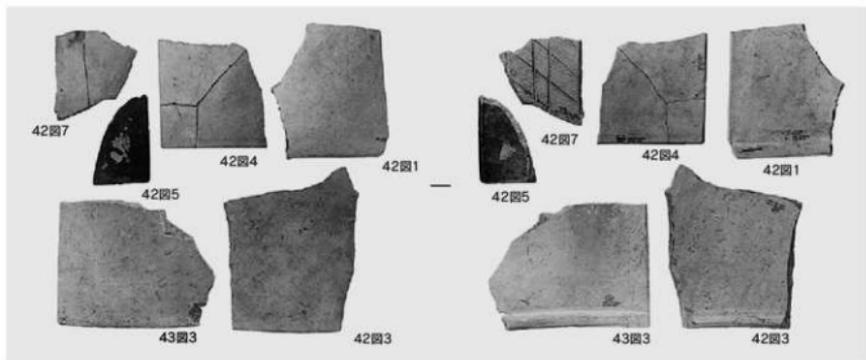
45圖1~12



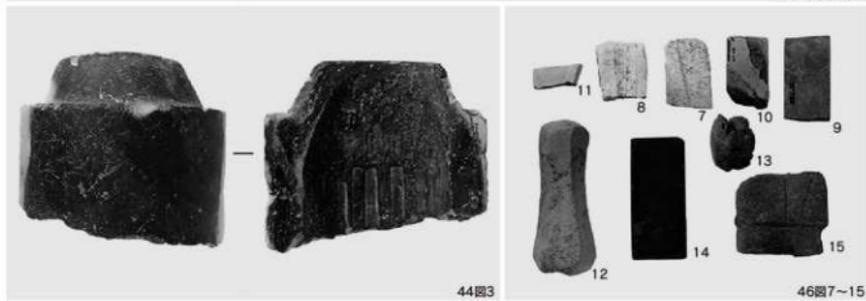
45圖13~17



46圖1~6

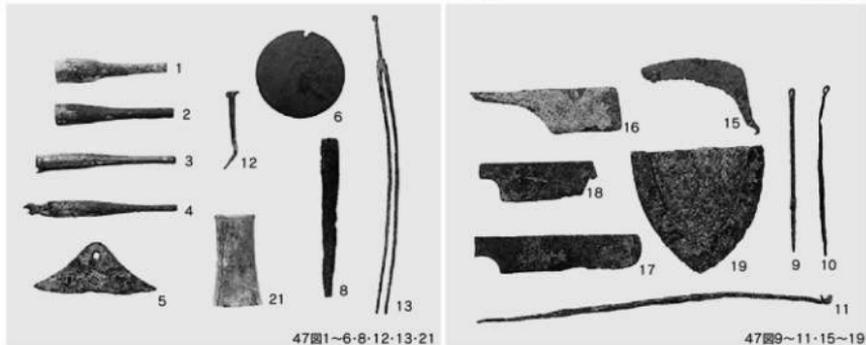


43圖1・2・5・6



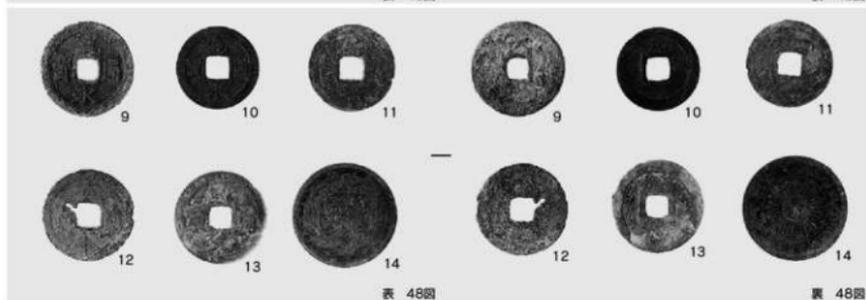
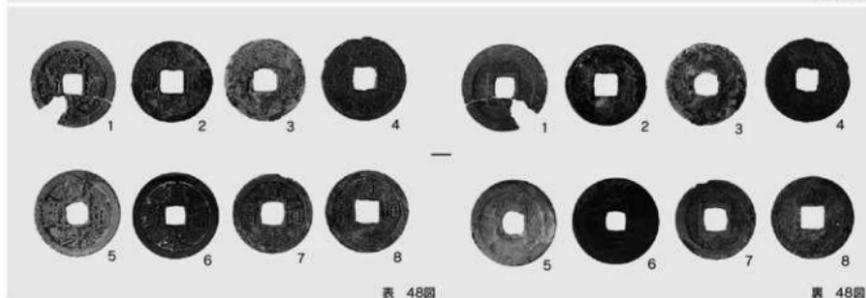
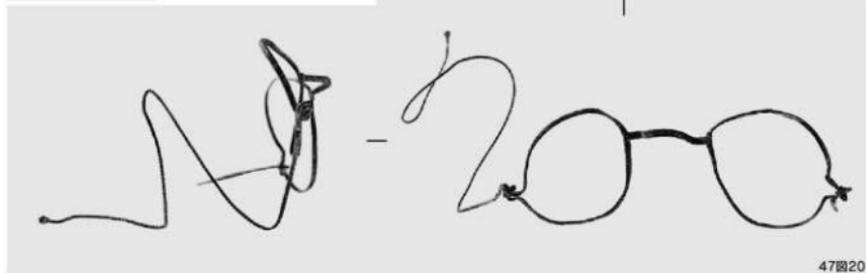
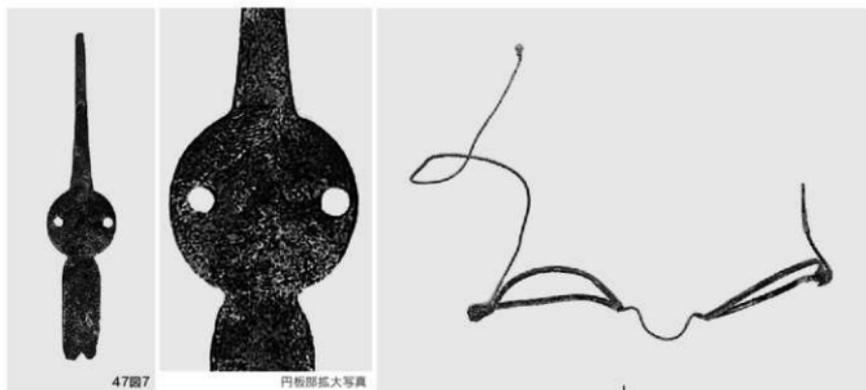
44圖3

46圖7~15



47圖1~6・8-12・13・21

47圖9~11・15~19





47図14 表



47図14 裏



1



2



3



4



5



6



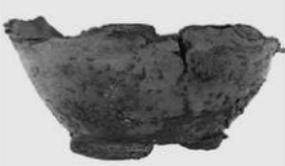
7



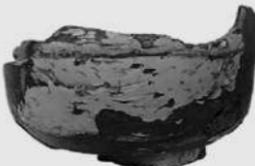
49図1



49図3



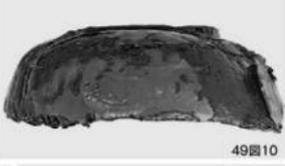
49図9



49図5



49図4



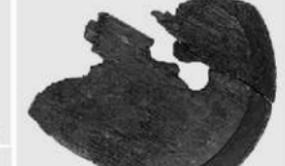
49図10



49図6



49図14



49図18



49図7



49図19



49図22



木簡1(52图1) 表



表 赤外線写真



木簡1(52图1) 裏



裏 赤外線写真



木簡2(52图2) 表



表 赤外線写真



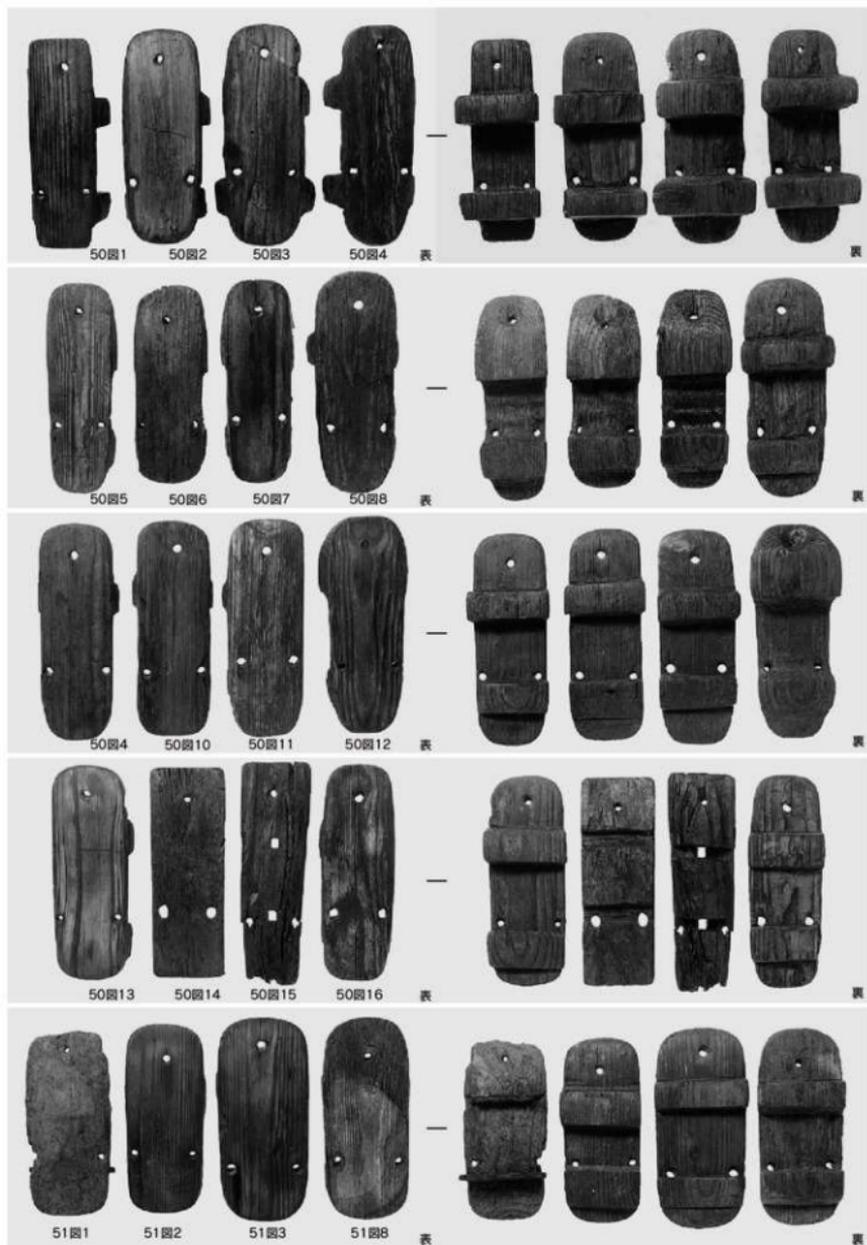
木簡2(52图2) 裏

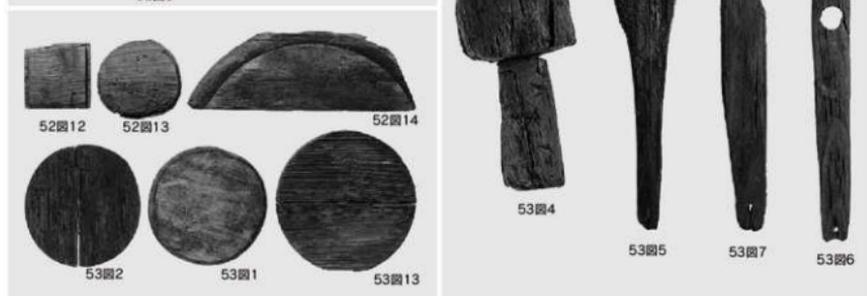
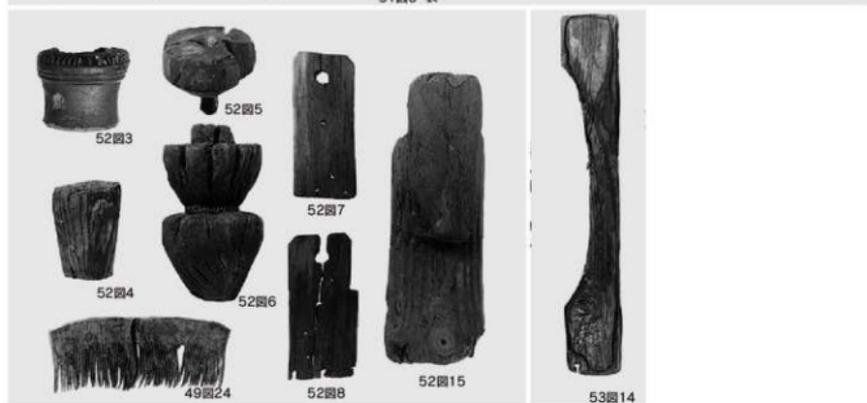
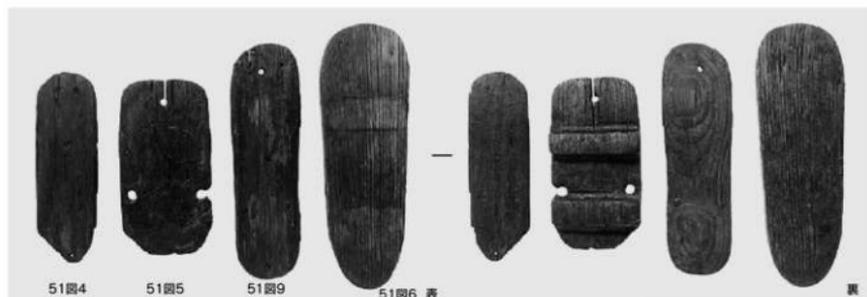


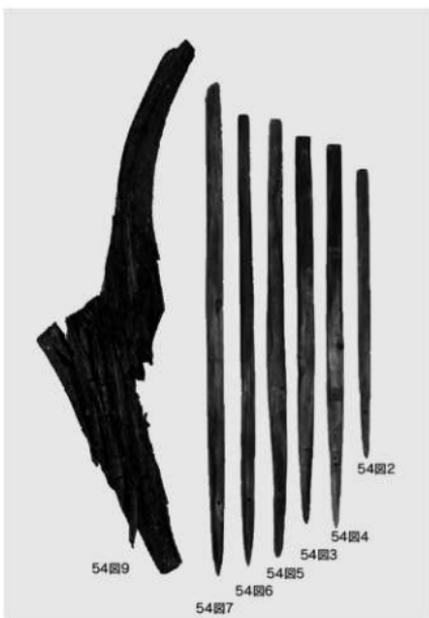
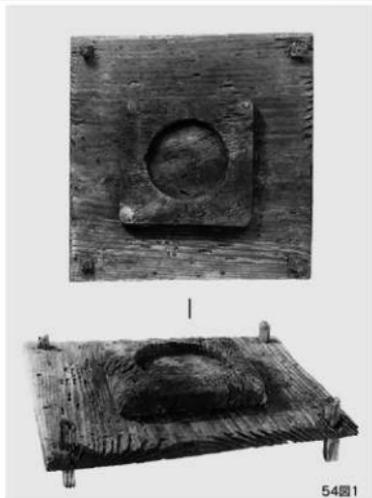
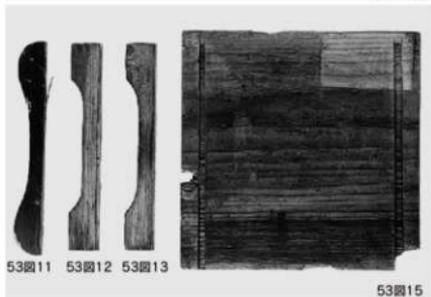
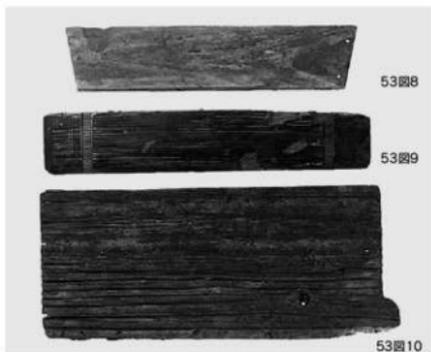
裏 赤外線写真

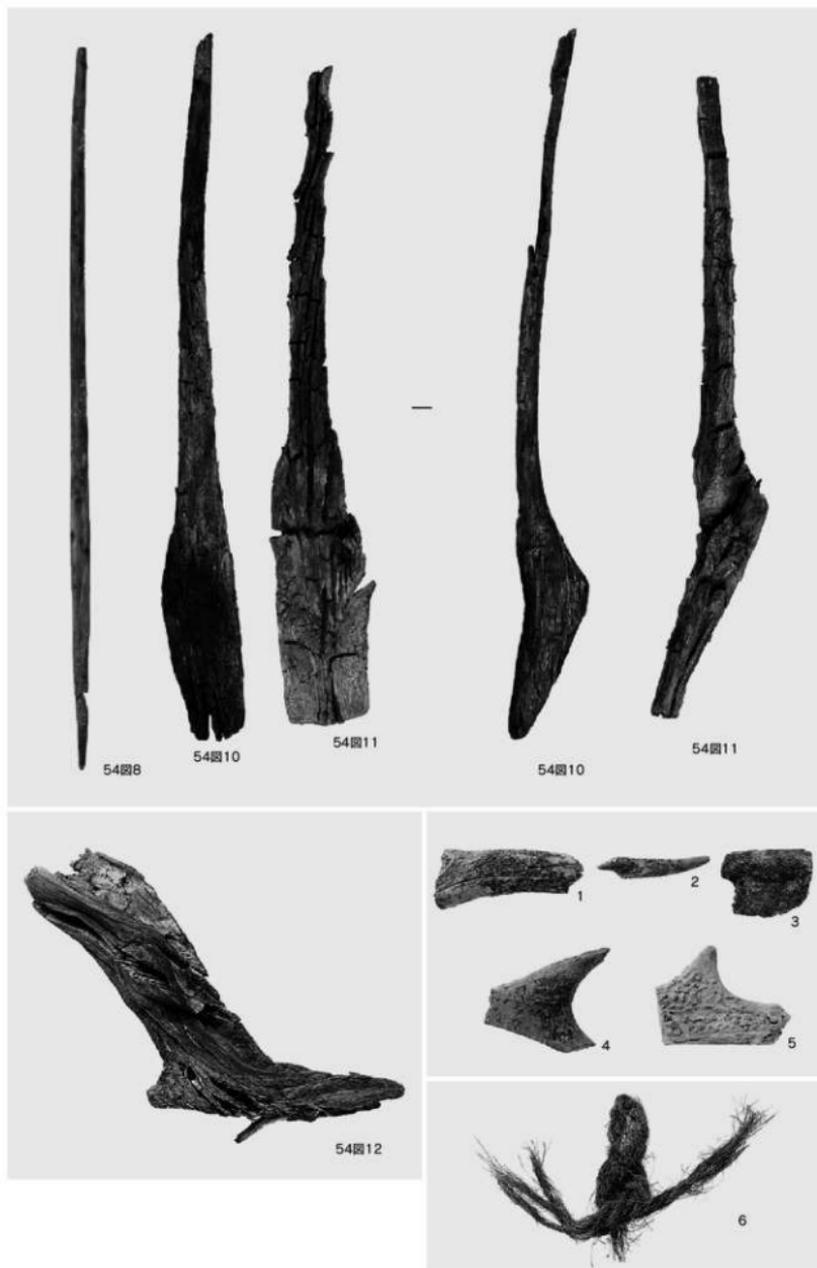


1 木簡3











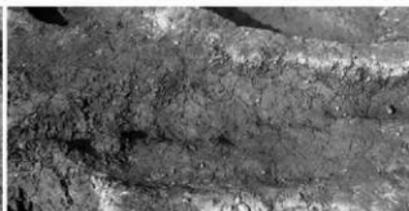
1. 矢加部町屋敷遺跡遠景（西上空から）



2. 1次調査区全景（上空から）



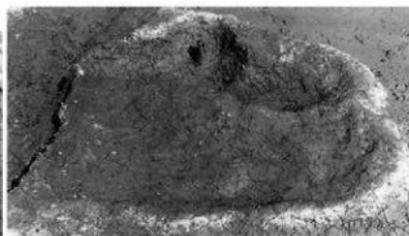
1, 1号土坑 (北東から)



6, 7号土坑 (南東から)



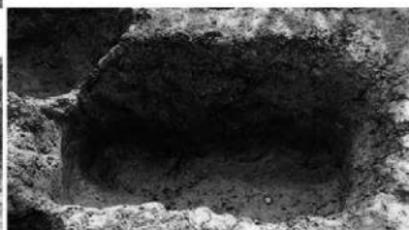
2, 3号土坑 (南東から)



7, 8号土坑 (西から)



3, 4・33号土坑 (北から)



8, 9号土坑 (北東から)



4, 4号土坑遺物出土状態 (西から)



9, 11・22号土坑 (北から)



5, 6号土坑 (東から)



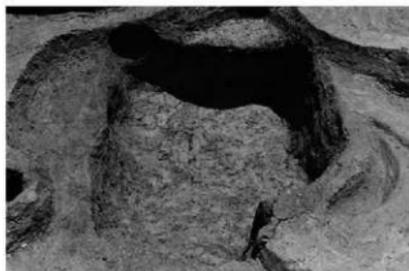
10, 12号土坑 (北東から)



1, 15・19・41号土坑 (南から)



5, 23・25号土坑 (南東から)



2, 16号土坑 (南西から)



6, 23号土坑遺物出土状態 (北西から)



3, 16・17号土坑 (北東から)



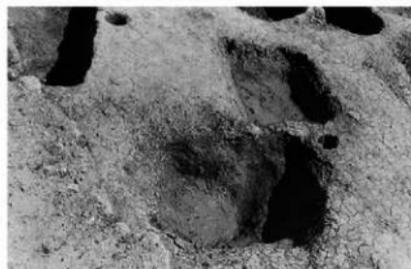
7, 27号土坑 (北から)



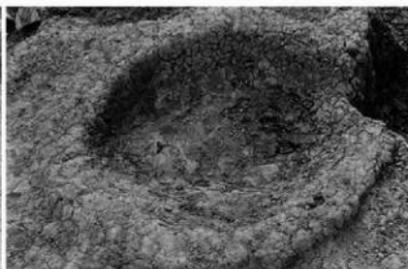
4, 21号土坑 (北東から)



8, 28・35号土坑・1号井戸 (西から)



1. 30・39号土坑（北西から）



5. 41号土坑（南西から）



2. 31・36号土坑（西から）



6. 37号土坑（南西から）



3. 32号土坑（南西から）



7. 2号廃棄土坑（南西から）



4. 34号土坑（南から）



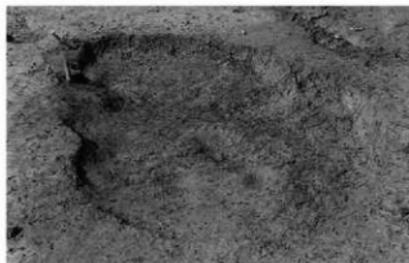
8. 1号大土坑（北西から）



1. 3号大土坑 (北から)



3. 2号大溝排水管 (南西から)



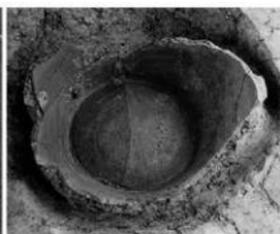
2. 4号大土坑 (南から)



4. 同上  
(西から)



5. 1・2号埋甕 (南西から)



8. 5号埋甕 (北東から)



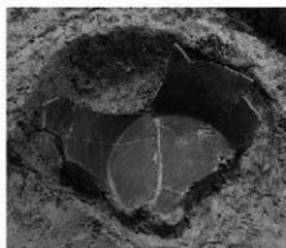
6. 3号埋甕 (南から)



9. 6号埋甕 (西から)



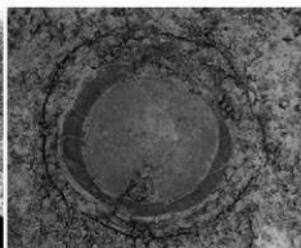
11. 8号埋甕 (南から)



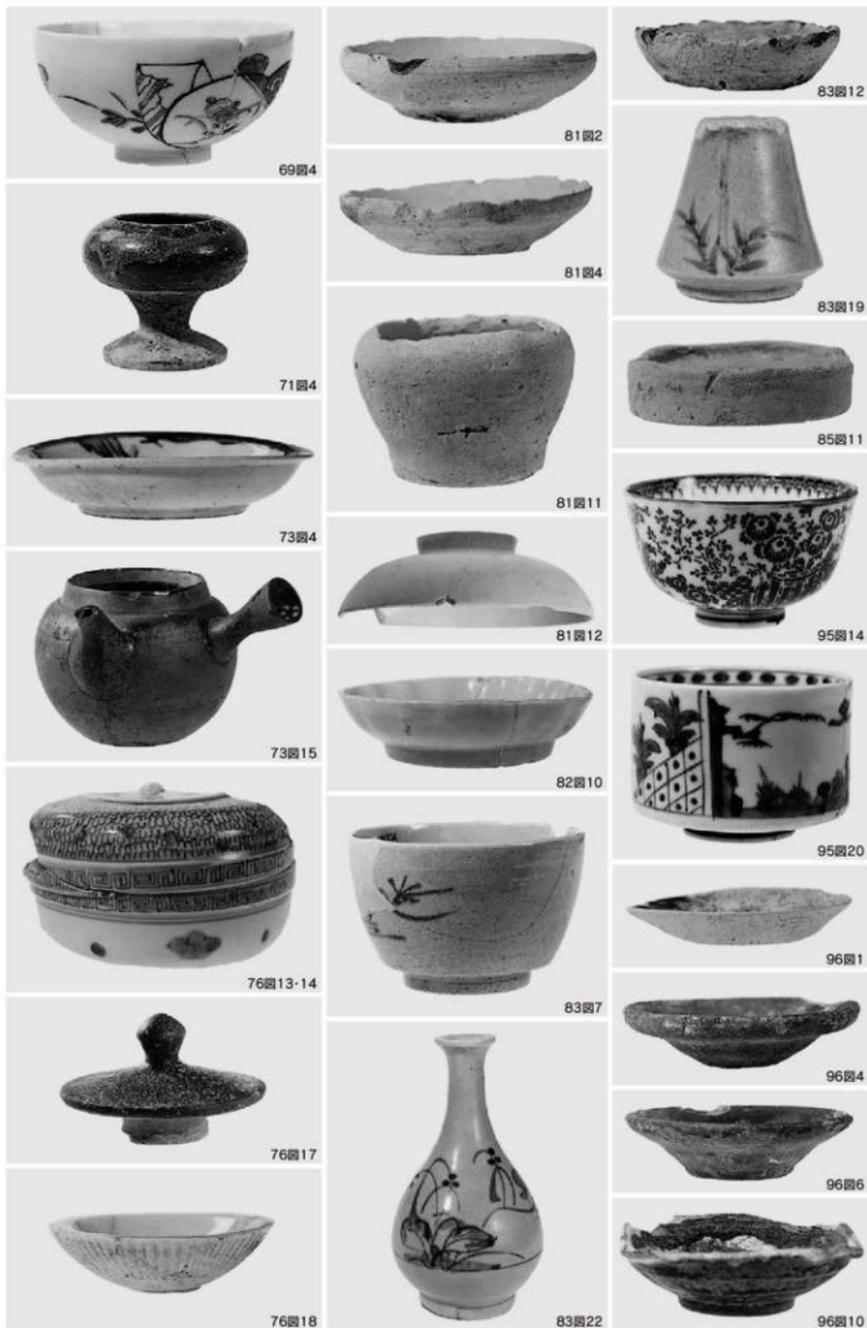
7. 4号埋甕 (西から)



10. 7号埋甕 (南から)

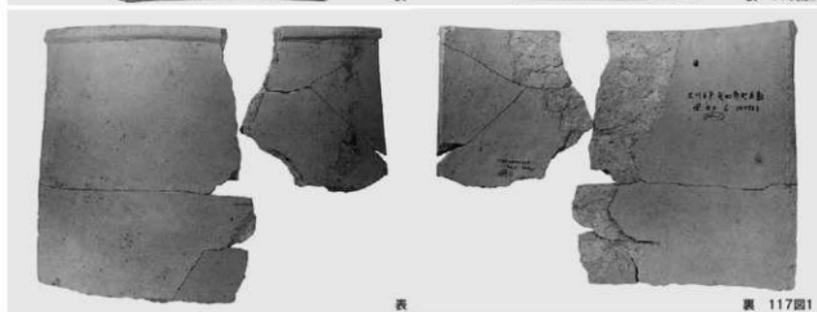
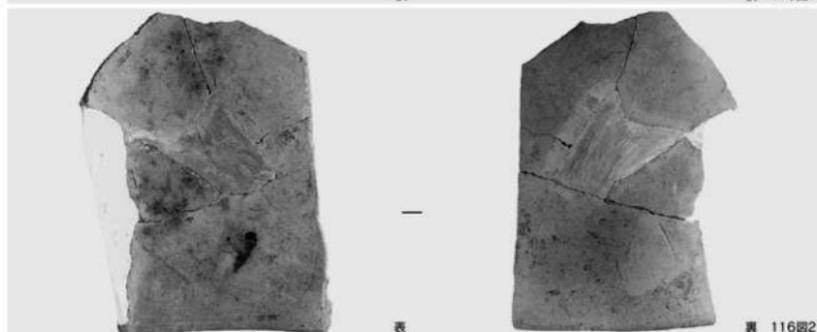
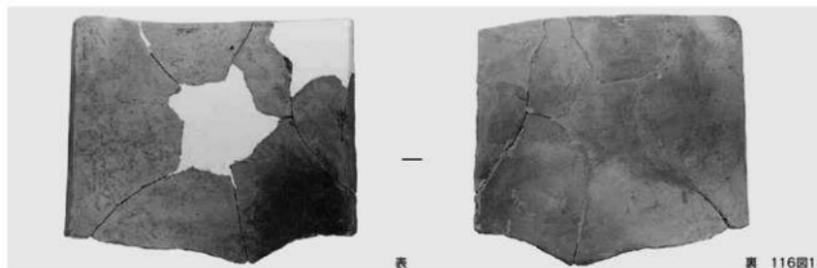


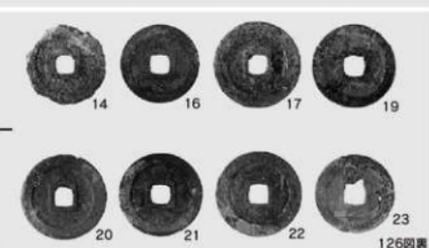
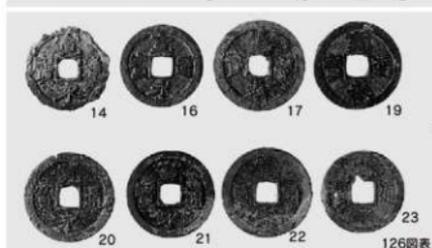
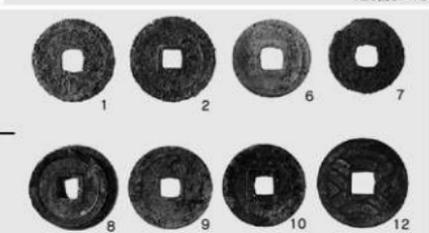
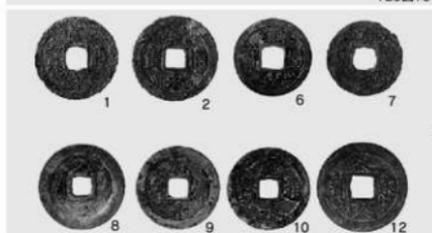
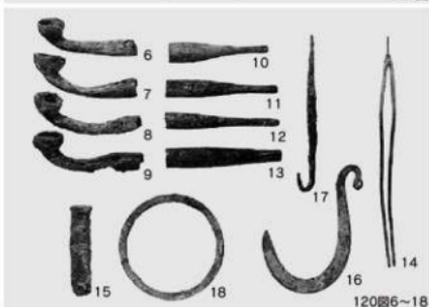
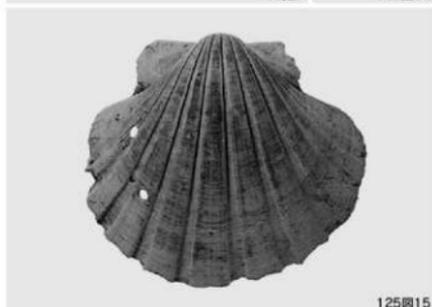
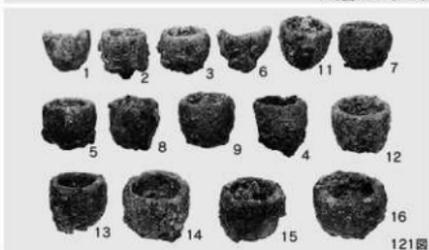
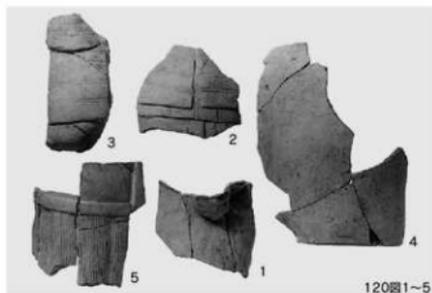
12. 9号埋甕 (北から)

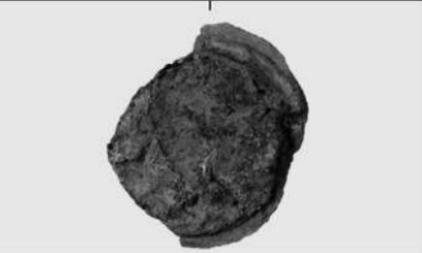
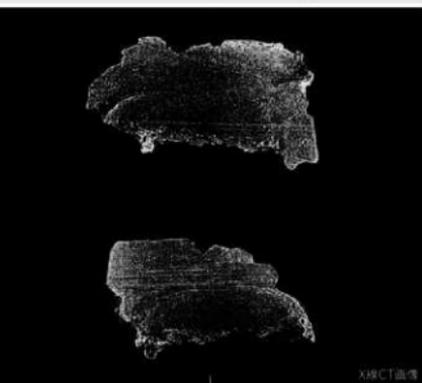
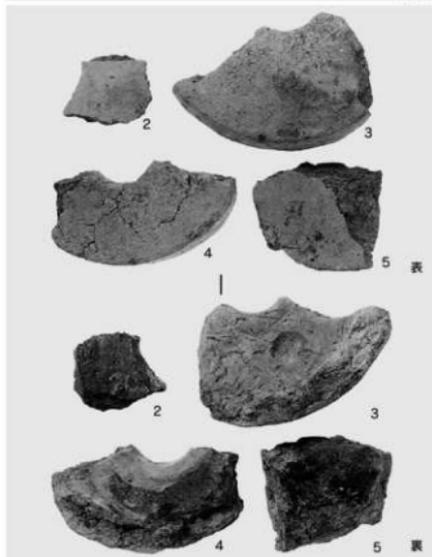
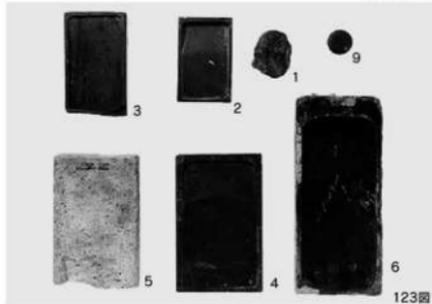
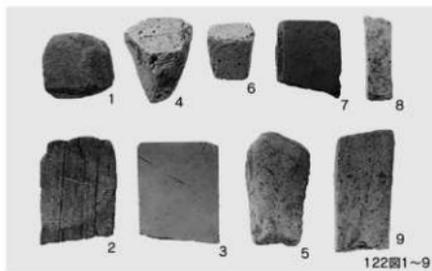


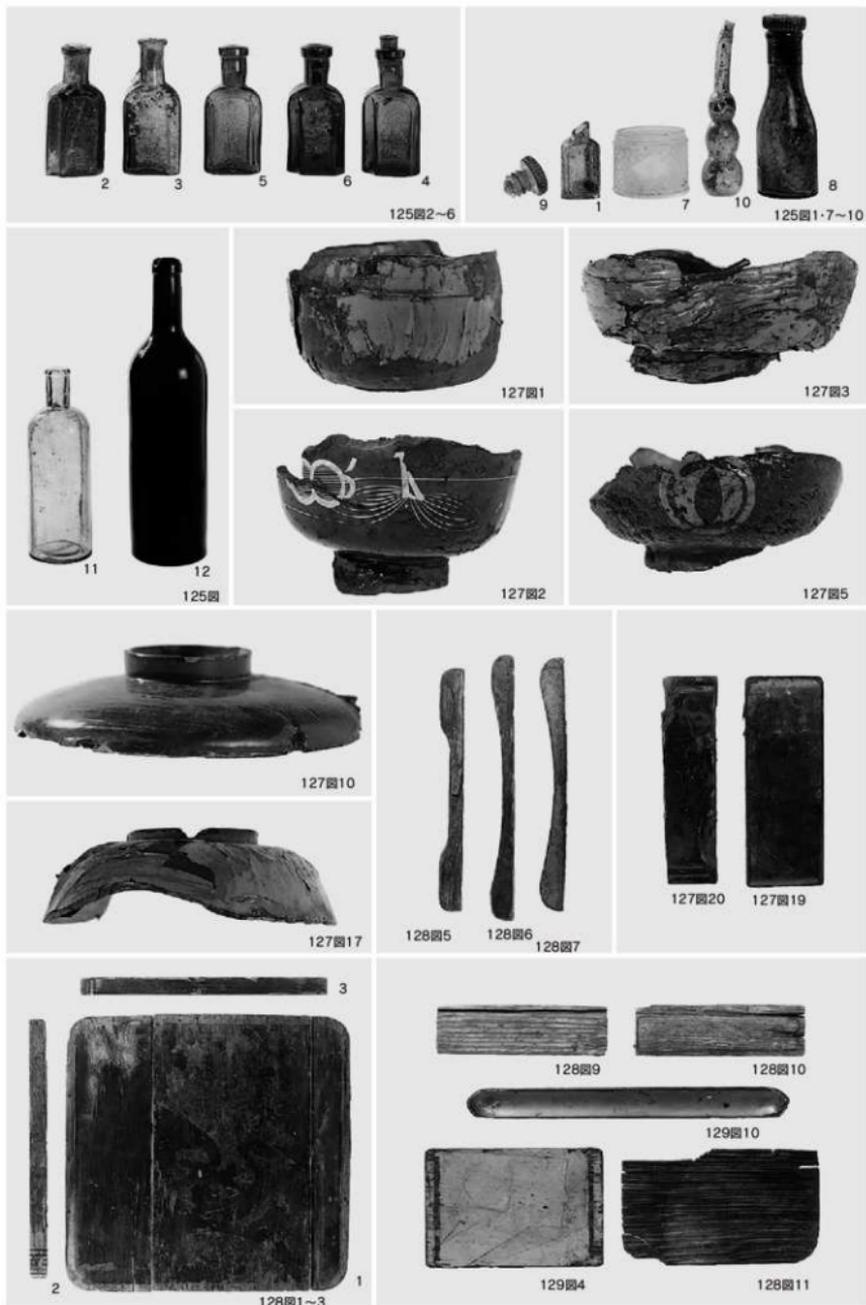


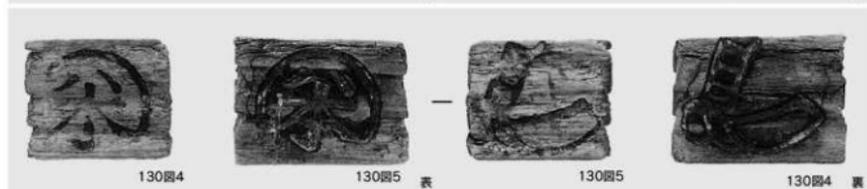
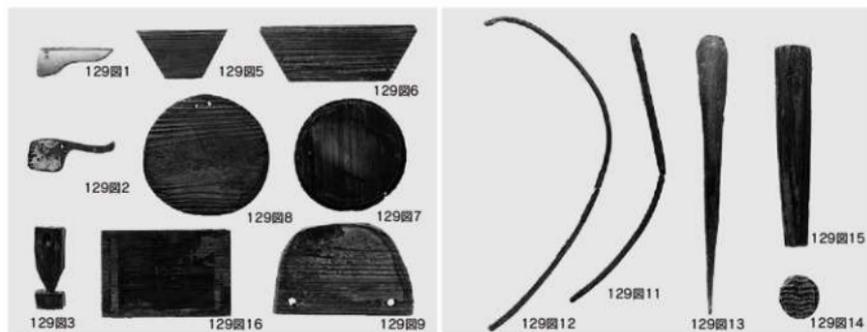
1次調査出土陶磁器

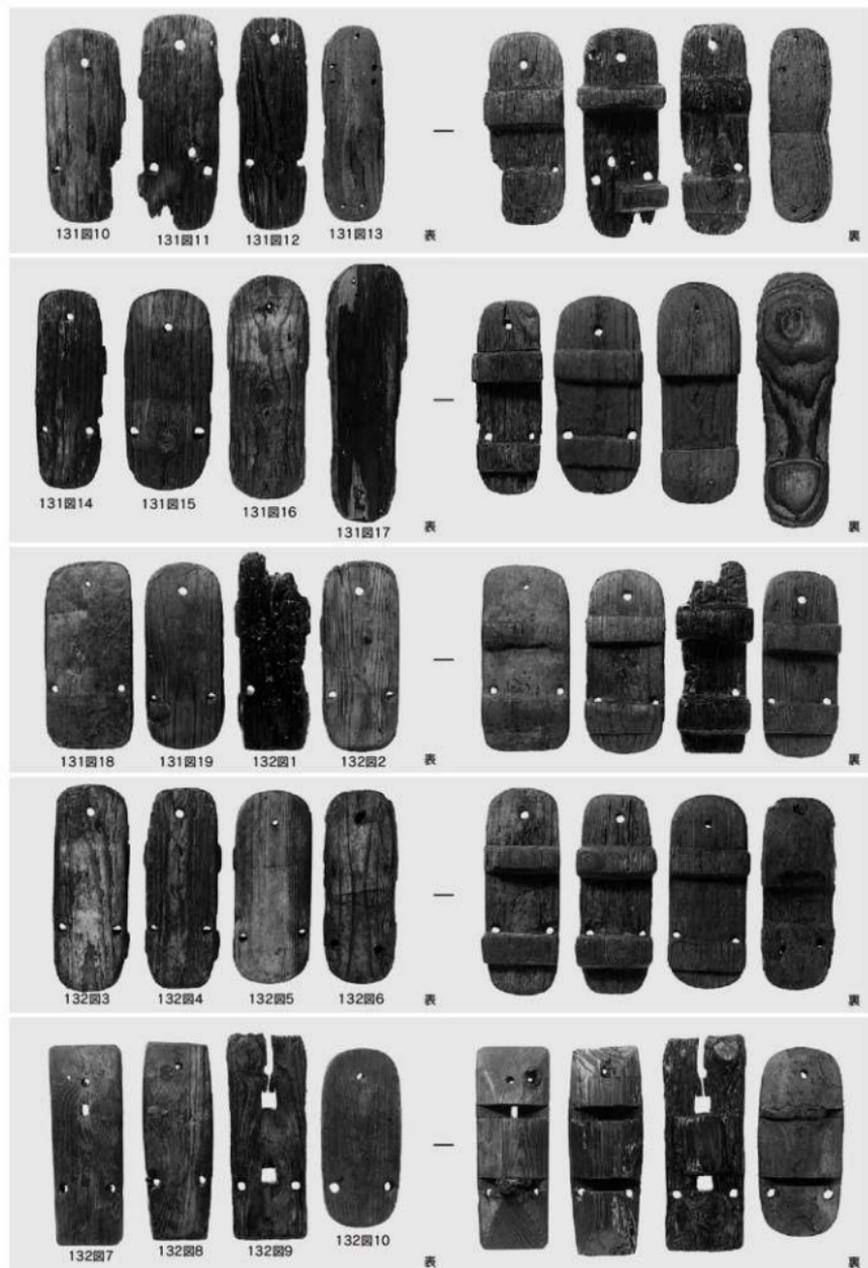














1次調査出土木製品3

## 蒲船津西ノ内遺跡



## 5. 蒲船津西ノ内遺跡

本遺跡は柳川市の東部、福岡県柳川市三橋町大字蒲船津314-1~4・5A番地に所在する。調査面積は約900㎡である。発掘調査は、平成18(2006)年12月4日より重機による掘削から開始した。12月6日より作業員による掘削を開始した。平成19(2007)年1月15日、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。1月31日に埋め戻しを終了し、調査を完了した。

### 1) 遺構 (図版25)

遺跡は西鉄天神大牟田線の西側に展開する現在の集落の西端に位置する。遺跡の現況は水田であった。周辺には、低湿地の水はけの悪さを解消するため、この地域特有の掘削(クリーク)が縦横に掘られている。

遺構面は標高約2.0mである。工事用の客土および約30cmの耕土の下に淡茶褐色土の遺構面が存在していた。遺構の埋土は暗茶灰色を中心とした土で、検出は比較的容易であった。しかし、低湿な遺構面であり、粘質な埋土の掘削には大きな労力を要した。

検出した遺構は、土坑2基、灰だまり1基、溝状遺構2条である。時期的には中世後期にほぼ限定される。

### a) 土坑

#### 1号土坑 (図版26、第149図)

調査区の北寄りに位置する。ほぼ円形の土坑である。東側半分を試掘トレンチによって削っているが、現存で長軸58cm、短軸57cmのほぼ円形を呈する。深さは約158cmで、壁の立ち上がりは急である。埋土は暗茶灰色であった。形状から素掘りの井戸の可能性が高いと考えている。遺物は、土製鈴1点が出土しているのみである。

#### 出土遺物(図版30、第151図)

1は土製の鈴である。全長4.2cm、最大径3.2cmである。手づくねでつくられており表面には指の圧痕が残る。上部の穿孔は焼成前に両側から行われている。鈴口の部分は鋭利な工具で開口されている。

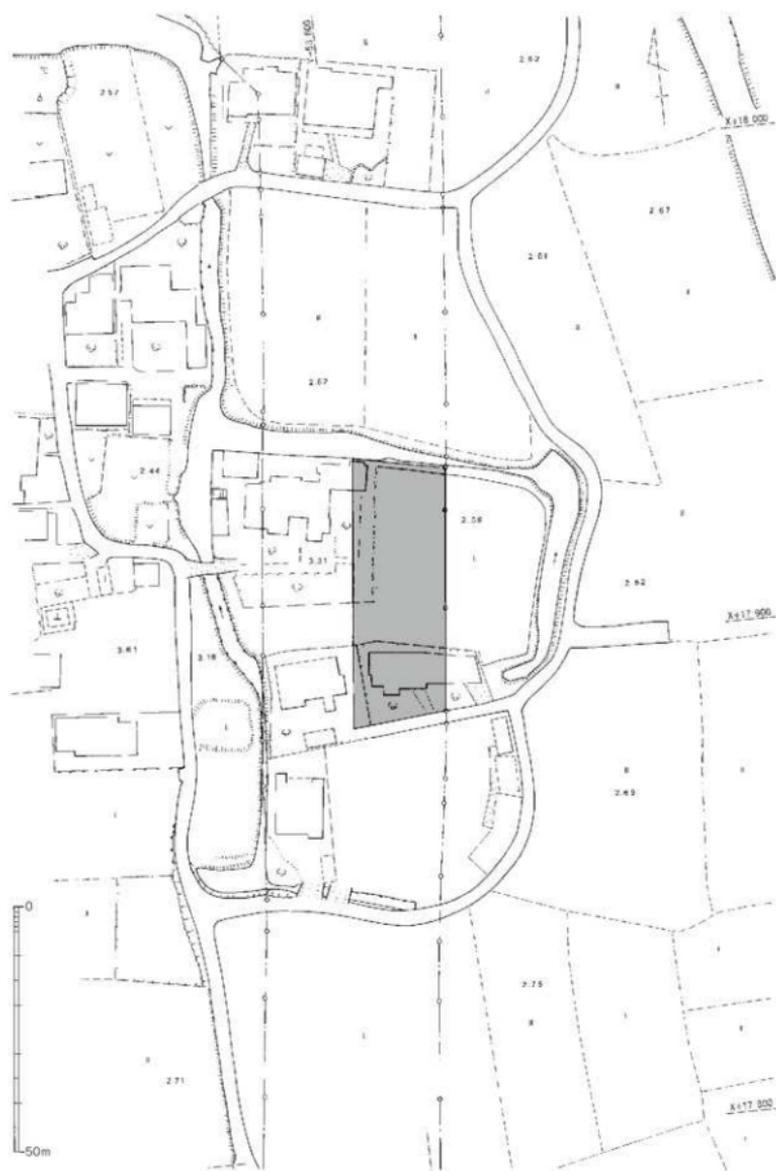
#### 2号土坑 (図版26、第149図)

調査区の中央やや東寄りに位置する。長軸65cm、短軸58cmのやや楕円形を呈する。深さは約26cmで、壁の立ち上がりはやや急である。埋土は暗茶灰色であった。遺物は出土していない。

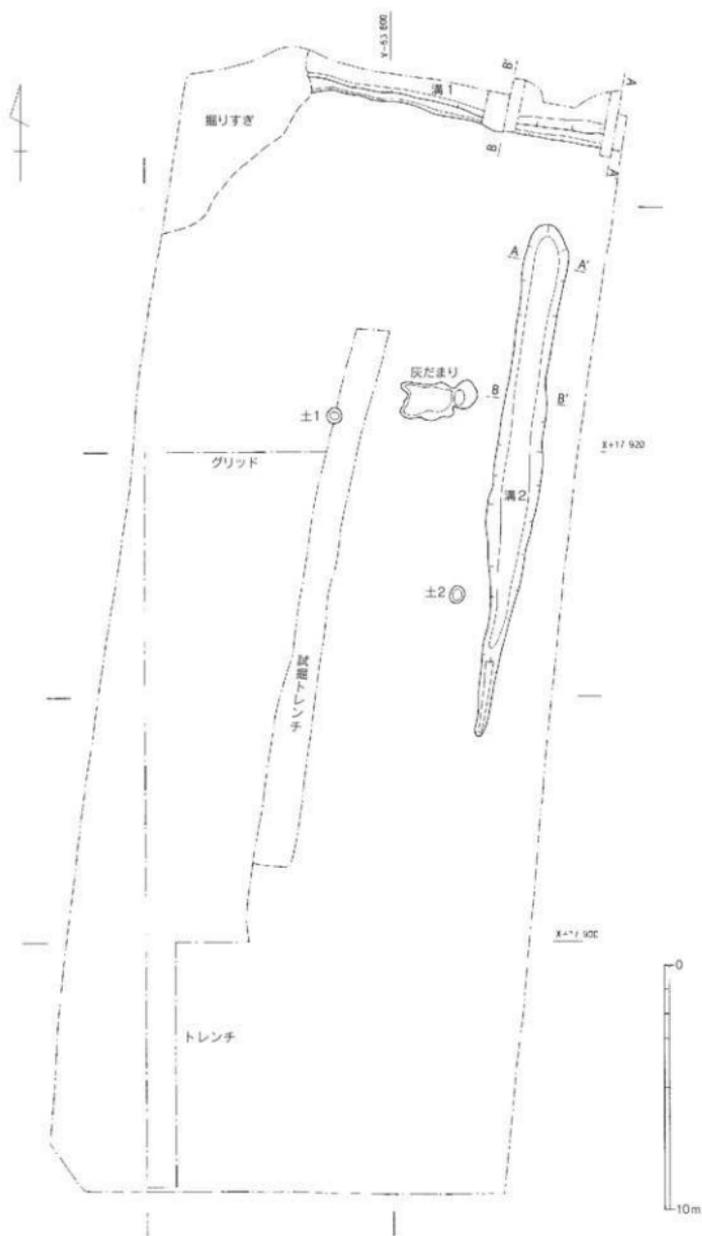
### b) 灰だまり

#### 灰だまり (図版26、第149図)

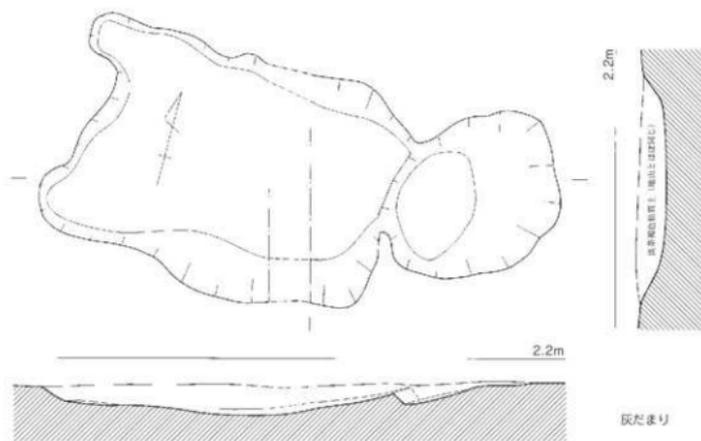
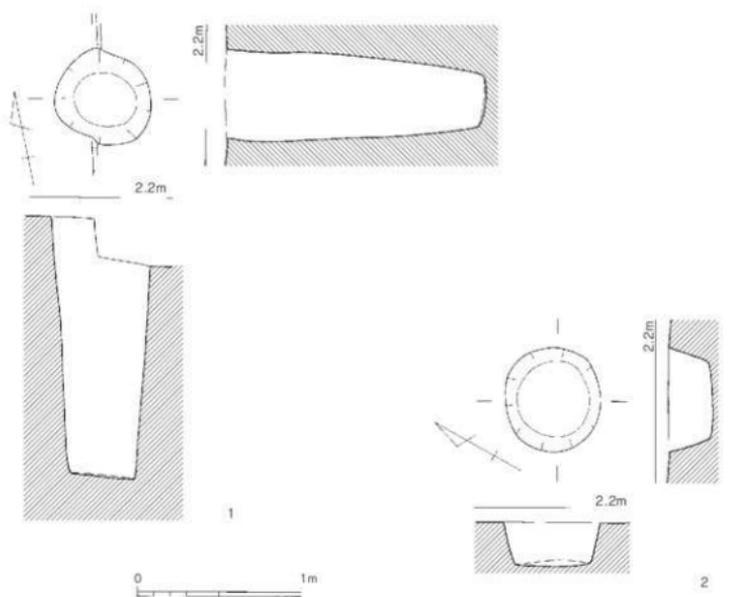
調査区の北寄りに位置する。長軸315cm、短軸152cmの不整形を呈する。深さは約17cmで、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は淡茶褐色であり、地山の色と酷似する。底面および壁面には、暗灰色の灰が薄く堆積しており、灰の上にある埋土を剥ぐような状況で掘削を行った。人為的なものではなく、自然にできた凹凸のある地形に灰が堆積した可能性もある。遺物は出土していない。



第146図 蒲船津西ノ内遺跡調査区位置図(1/1,000)



第147図 蒲船津西ノ内遺跡遺構配置図(1/200)



第148図 1・2号土坑・灰だまり実測図(1/30)

## c) 溝状遺構

### 1号溝 (図版27、第147・149図)

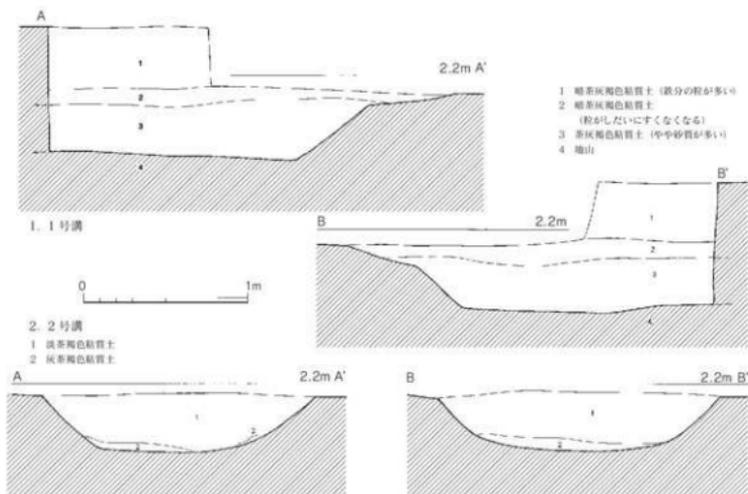
調査区の北端部に位置する。北側の立ち上がりは調査区外へ広がるため、溝の幅は不明である。深さは約40cmである。東西方向に走る溝で、東側は調査区外へ延び、西側は重機による表土掘削時に掘りすぎってしまったため、失われた。埋土は暗茶灰褐色であった。遺物は出土していない。

### 2号溝状遺構 (図版27・28、第147・149図)

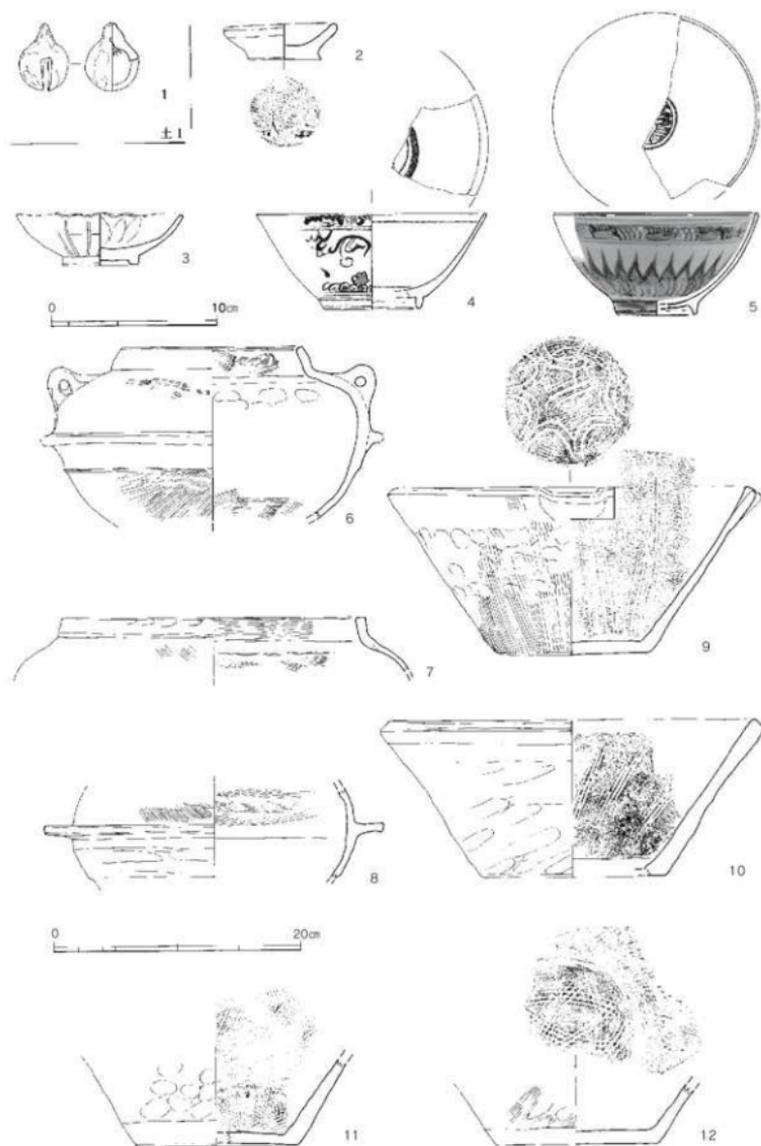
調査区の東寄りに位置する。南北方向に走る溝で、北側は端部が丸く終わる。幅は約160cm、深さは約35cmである。南側は次第に浅く、細くなり消えている。埋土は淡茶灰色であった。遺物は陶磁器、瓦質土器が出土している。

#### 出土遺物(図版30、第150図)

2は土師皿である。器壁が厚く、底部も極めて厚い。内外面ともにナデ調整であり、底部は糸切りである。口径6.9cm、底径4.2cm、器高2.3cmである。3は陶器の皿である。内外面に菊花状に型押ししている。軸色は黄灰色を呈する。口径10.2cm、底径4.6cm、器高3.1cmである。4は青花である。いわゆる蓮子碗と呼ばれるもので、外面には雲状の文様と波状の文様が描かれる。見込みにも文様が描かれるが、図案は不明である。畳付け部分は露胎である。15世紀後半から16世紀前半であろう。口径14.0cm、底径6.0cm、器高5.8cmである。5も青花の蓮子碗である。外面には芭蕉文、内面には巻貝の文様であろうものが描かれている。畳付け部分は露胎である。15世紀後半から16世紀前半であろう。口径12.4cm、底径4.5cmである。6は瓦質の茶釜である。口縁部がやや内傾し、肩の張る器形である。肩部の2箇所に環付が付く。胴部にはやや短めの羽が付く。内外面の調整は刷毛目である。肩部内面には圧痕が見られる。底部付近にはスガが付着する。口径14.6cm、胴部最大径28.0cmである。7はやや大ぶりの釜の口縁部分である。わずかに



第149図 1・2号溝状遺構土層実測図(1/30)



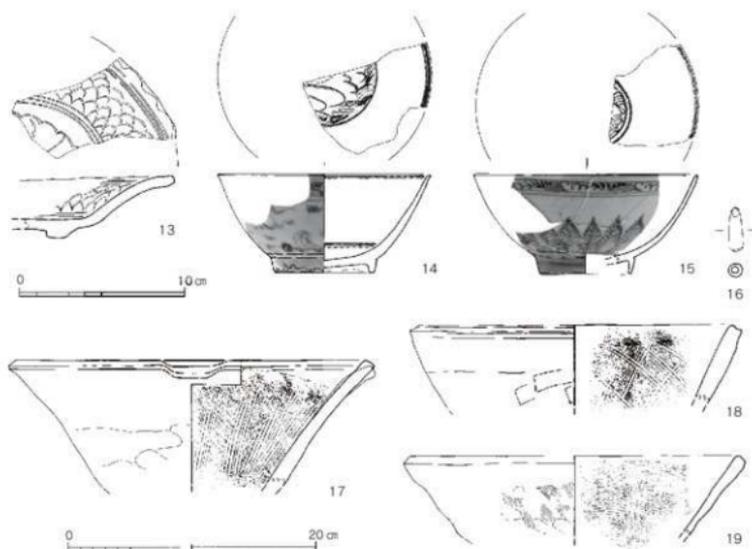
第150图 1号土坑・2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1~5は1/3、他は1/4)

溝2

内傾する口縁である。内外面の調整は刷毛目で、部分的に圧痕が残る。口径24.8cmである。8は釜の胴部である。わずかに上を向いて羽が付けられる。内外面は刷毛目調整で、部分的にナデ調整である。内面には圧痕が残る。胴部最大径27.6cmである。9～12は瓦質の擂鉢である。9はほぼ直線的に広がり、口縁部の一ヶ所に口を付ける。外面の調整は刷毛目で、内面は、刷毛目調整の後、擂目を施す。口径29.0cm、底径12.4cm、器高13.5cmである。10の外面は強いナデ調整である。内面はナデの後、擂目を施す。内外面にススが附着する。口径30.8cm、底径15.0cm、器高12.8cmである。11の外面は強いナデである。内面には擂目を施す。底径12.9cmである。12の外面は刷毛目で、圧痕が残る。内面には擂目を施す。底径は13.1cmである。

#### d) 遺構面出土遺物 (図版30、第151図)

13は青磁の皿である。腰折れで、口縁が大きく開く。口縁端部は削って輪花状に仕上げている。見込みは花文であろうか、内面には花卉を重ねたような文様が描かれる。軸葉は厚く施される。器高は3.8cmである。畳付けおよび底面は露胎である。14は青花の蓮子碗である。外面には飛馬文と雲状の文様が描かれる。見込みには巻貝が描かれる。畳付け部分は露胎である。15世紀後半から16世紀前半であろう。口径13.0cm、底径6.0cm、器高6.0cmである。15も蓮子碗である。外面には芭蕉文が描かれる。見込みの文様は不明である。畳付け部分は露胎である。口径13.5cm、底径5.4cm、器高6.2cmである。16は素焼きの土錘である。直径0.9cmである。表面の調整は不明である。17から19は瓦質の擂鉢である。17は口縁部に口を設けるものである。外面はナデ調整である。内面はナデ調整の後、擂目を施す。外面にはススが附着する。口径30.0cmである。



第151図 遺構面出土土器・陶磁器実測図(13～16は1/6、他は1/4)

18の外表面はナデ調整である。内面は格子状に摺目を施す。口径26.8cmである。19の外表面は刷毛目調整である。部分的に圧痕が残る。内面は刷毛目調整で摺目を施している。口径は27.5cmである。

## 2) 小結

本調査区では、土坑2基、灰だまり1基、溝状遺構2条を検出した。遺構の希薄さから今回の調査区は遺跡の縁辺部と考えられる。現在の集落は調査区の西側に展開しており、遺跡の本体も、現集落の下に広がるものと考えられる。今後の調査に期待したい。



1. 蒲船津西ノ内遺跡全景  
(西から)



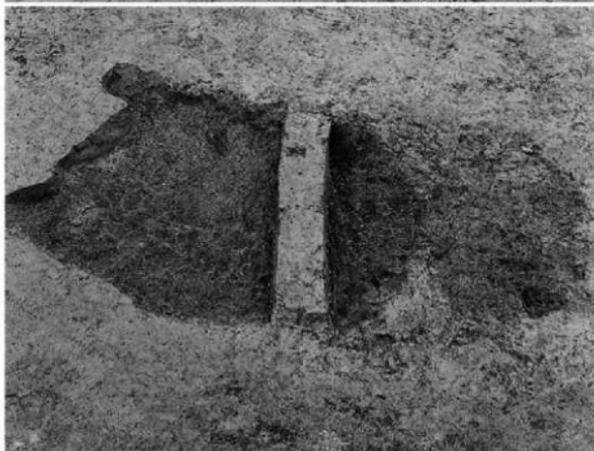
2. 同上全景 (北から)



1. 1号土坑 (東から)



2. 2号土坑 (南から)



3. 灰だまり (南から)



1. 1号溝状遺構 (東から)



2. 1号溝状遺構 (西から)



3. 2号溝状遺構 (南から)



1. 2号溝状遺構（南から）



2. 西壁土層（東から）



3. 西壁土層（東から）



1. トレンチ (北東から)



2. トレンチ (南から)



3. 全景 (南東から)



1号土坑、2号沟状遺構、遺構面出土土器

## 蒲船津水町遺跡



## 6. 蒲船津水町遺跡

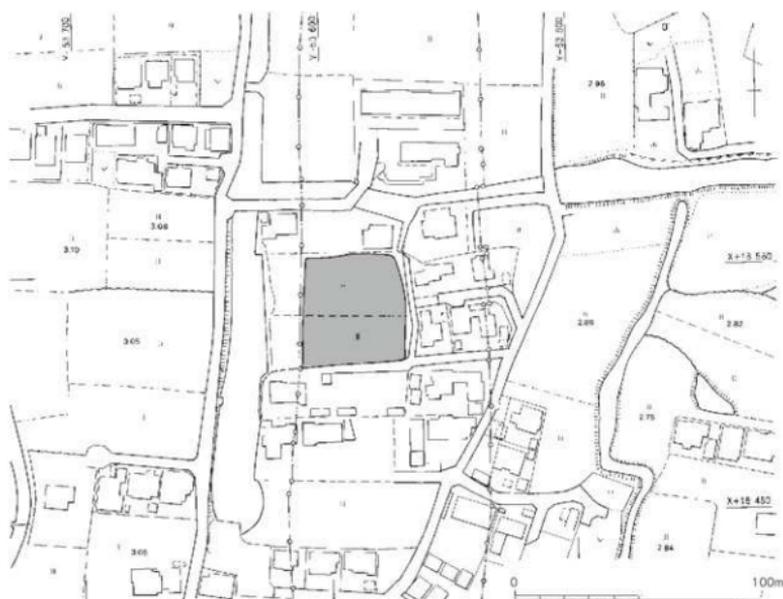
蒲船津水町遺跡は、柳川市三橋町大字蒲船津534-1、534-2、534-11～14に所在し、柳川市街地の東部に位置し、西鉄柳川駅の北東約500mにあたる。付近は沖端川の左岸の沖積地であるが、標高3m程度の低湿地、いわゆる「クリーク地帯」であり、現在でも多くの水路が縦横にはしる。地形の起伏はほとんど見られない。

発掘調査は、平成18年3月22、23日と19年5月10、11日に行った試掘調査の結果に基づいて、約1,800㎡の範囲に調査区を設定して実施した。平成19年5月11日から重機による表土除去作業を開始し、5月28日からは作業員による人力での作業に移行して、8月10日に東亜航空技研(株)による空中写真撮影、8月21日には現地での調査をすべて終了した。その後、重機による埋め戻し作業を行った。

### 1. 遺構と遺物

調査地点周辺は、現在まで水田として利用されてきており、標高は極めて低い。周囲は現在ではコンクリート擁壁で囲まれてかつての姿は留めていないもののクリークが縦横に張り巡らされている。

調査の結果、遺構面は現在の地表面からわずかに10～20cm程度の深さで検出し、標高2.6～



第152図 蒲船津水町遺跡周辺地形図(1/2,000)

2.8mの範囲である。

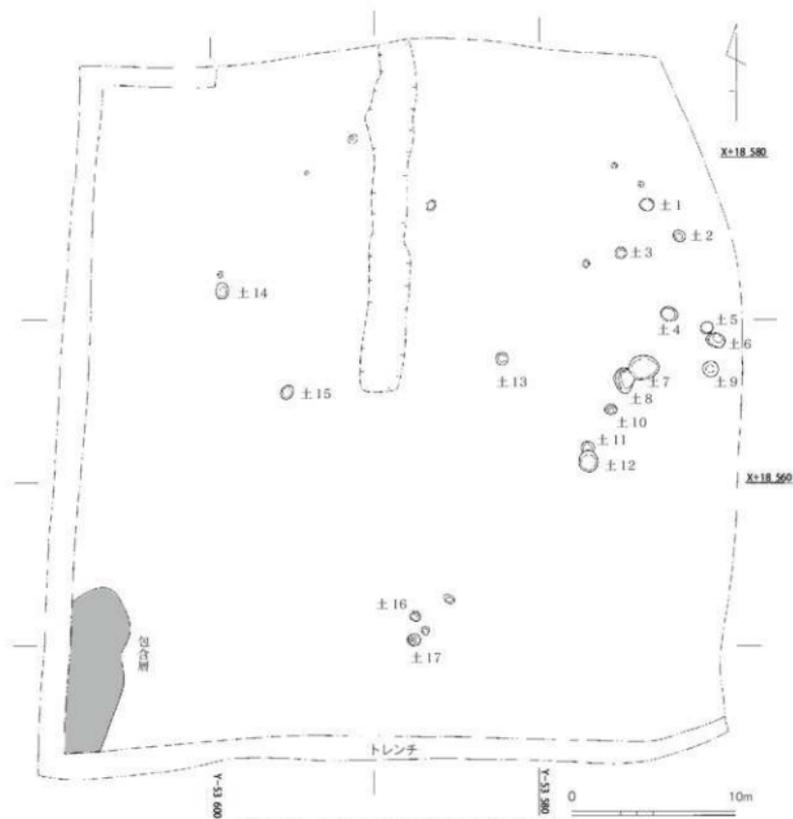
主な遺構は、井戸状の土坑17基と、調査区南西隅部で遺物包含層を検出した。

### (1) 土坑

今回の調査では17基の土坑を検出した。ほとんどの土坑が平面円形または楕円形で、深いものが多いのが特徴で、一見素掘りの井戸のようである。しかしながら、土坑は地山の黄灰色粘土層と下層の灰色粘土層までを掘り込んでいるに過ぎず、湧水層には到達していないため、井戸とは考えにくい。

#### 1号土坑 (図版32、第154図)

調査区北東隅に位置する。平面形は上縁部径80cmの円形で、底面はレンズ状に中央部が深く



第153図 蒲船津水町遺跡遺構配置図(1/300)

て40cm程。埋土は3層に分かれて同様にレンズ状に堆積しており、上層は黒灰色粘土・灰色粘土のブロックを含んだ黒色粘質土、中層は灰色粘土と暗灰色粘土の混合土、下層は暗灰色粘土と黒色粘質土の混合土である。

#### 出土遺物(第155図1)

土師器甕。口縁部内面は横方向のハケメ、胴部外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリ調整。

### 2号土坑(図版32、第154図)

調査区の北東隅部に位置する。平面形は75×65cmの若干歪んだ楕円形で、深さ155cm。底面は45×40cmの同じく楕円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

#### 出土遺物(図版40、第156図2～5)

5は須恵器皿で、約半分が欠失するが、復元径17.4cm、器高1.7cm。焼成は軟質である。底部外面中央部には墨書があり、「衆カ」。2～4は土師器甕。2は口縁部が強く外反する。胴部内面は横方向のヘラ削り調整。3・4は「く」字に近く外反して端部が薄く比較的シャープな口縁部を持つ。胴部外面は縦方向のハケメ、4は内面が横方向のハケメ調整。いずれも破片であるが、復元可能な4では口径26.0cm、胴部最大径23.1cm。

### 3号土坑(図版32、第154図)

調査区北東部に位置する。径65cmの平面円形で、深さ90cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

#### 出土遺物(図版40、第155図6～13)

6は須恵器皿で、器高1.9cm。7は須恵器甕で、復元口径18.2cm。内外面ヨコナデ調整であるが、頸部内面にはケズリの痕跡が残る。8～10は土師器杯。8は体部と底部の境に明瞭な稜を持ち、9はやや不明瞭、10は不明瞭で底部にヘラ切り痕が残り不安定である。9の復元口径は12.4cm、器高3.1cm。11・12は皿で、11は復元口径12.4cm、器高1.6cm、12は復元口径11.6cm、器高2.0cm。13は甕で、「く」字形に開口縁部を持つ。

### 4号土坑(図版33、第154図)

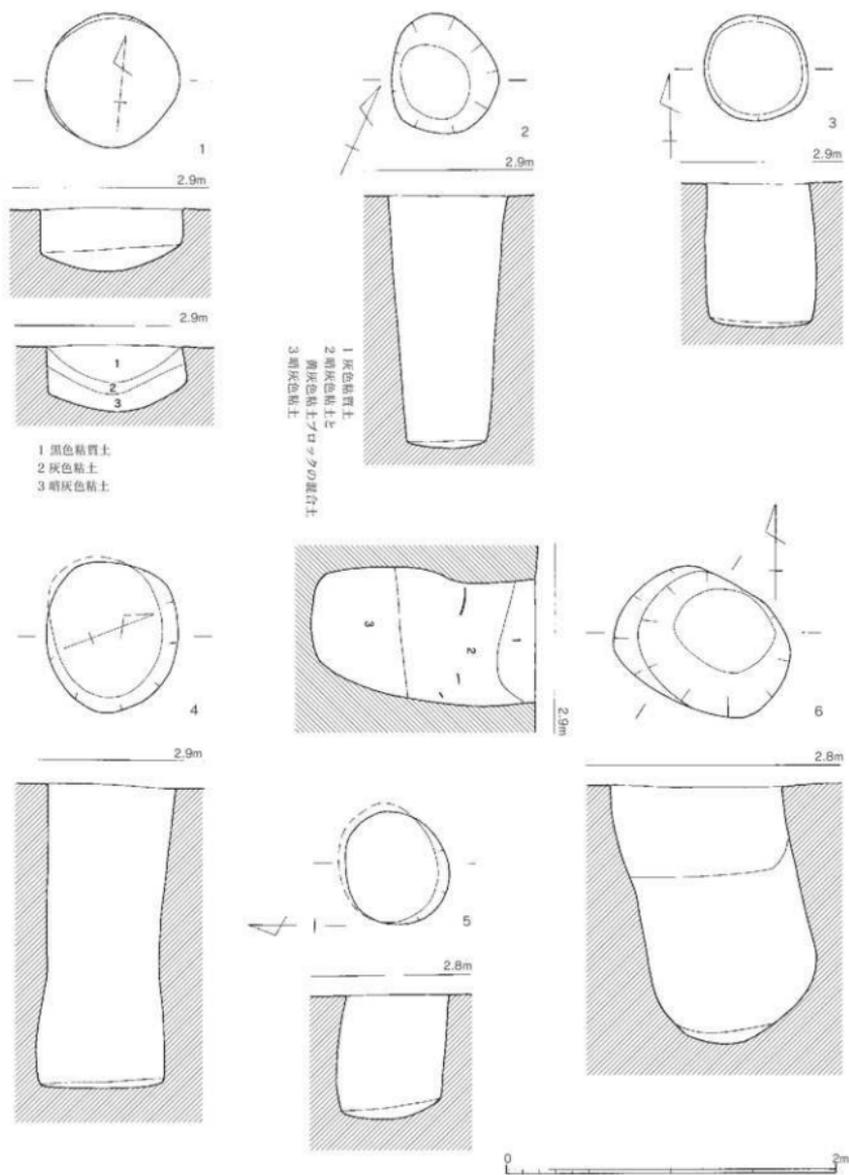
調査区東部に位置する。上縁部で95×80cm、底面では90×65cmの楕円形で、深さ185cm。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、底から75cm程の部分でわずかに段を持って細くなる。

#### 出土遺物(図版40、第155図14～17)

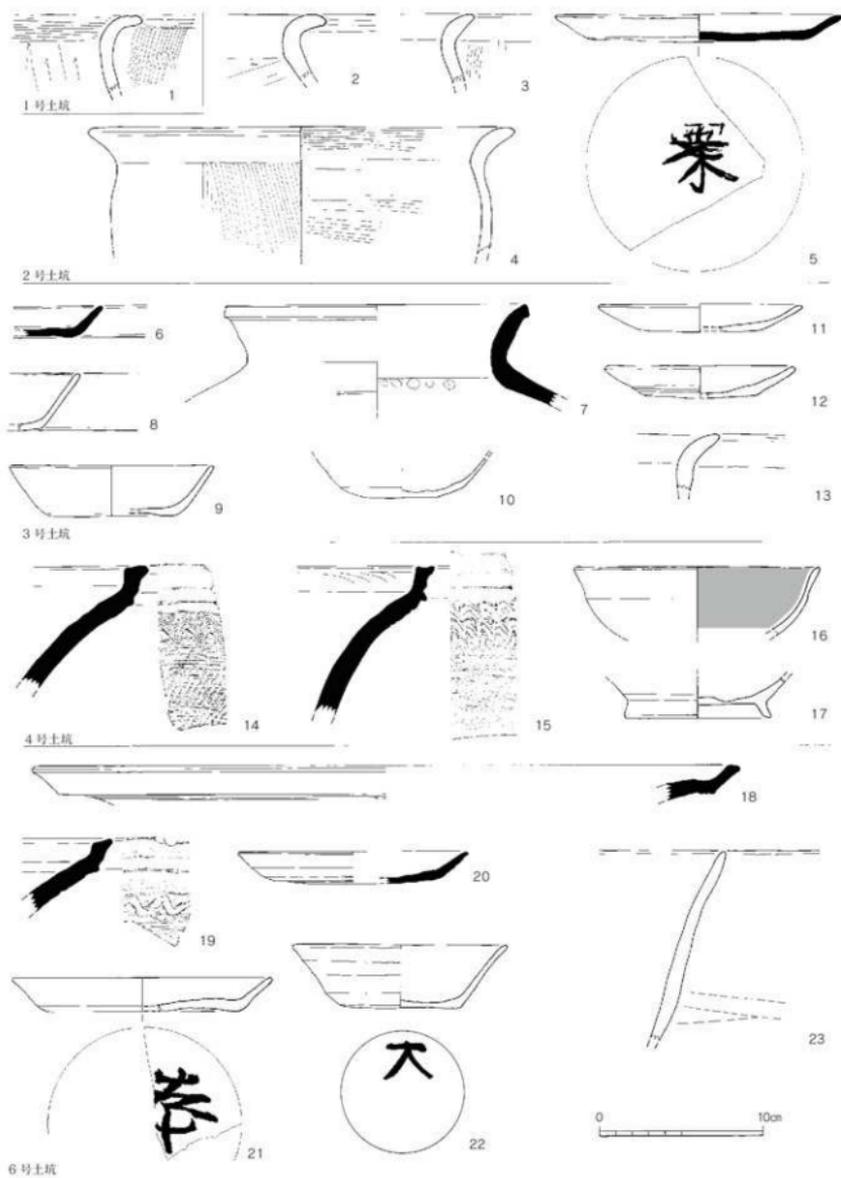
14・15は須恵器甕で、ほぼ円形のもの。頸部は外反して開き、口縁部は屈曲して上方に立ち上がり上端部は平らになる。口縁部と頸部の境の屈曲部には三角突帯をつくり出し、その下には14は単位7条の、15は単位2条2段の波状文を施文する。16は黒色土器碗で、内面のみを焼している。体部は丸く、口縁部をわずかに外反させる。復元口径15.0cm。17は瓦器碗であろうが焼成が堅緻で須恵質である。高台は高く「ハ」字に開く。内外面ヨコナデ後に内底部はナデ調整を行うが粗い。

### 5号土坑(図版33、第154図)

調査区東部隅に位置する。70×65cmの平面楕円形で、深さは75cm。底はほぼ平らだが、中央部が若干深くなる。出土遺物はない。



第154図 1～6号土坑実測図(1/30)



第155图 1~4·6号土坑出土遗物实测图(1/3)

## 6号土坑 (図版33・34、第154図)

調査区東部隅に位置し、5号土坑と近接する。平面形は105×80cmの楕円形で、深さ155cm。断面形はやや歪んだ袋状で、底も不整形である。埋土は上層から灰色粘質土、暗灰色粘土と黄灰色粘土ブロックの混合土、暗灰色粘土である。

出土遺物(図版40、第155図18～23)

18・19は須恵器甕。18は復元すると口径43.2cmの大形のもので、頸部が大きく広がり、鋭利な稜を作って口縁部が立ち上がる。外面はカキメ調整で口縁部はその後ヨコナデ調整。19は口縁部と頸部の境を三角突帯状につくり出して屈曲する。頸部外面には1条の波状文を施文する。20は皿で、底部にやや丸みを持つ。復元口径14.0cm、器高2.0cm。21は土師器皿で、復元口径15.9cm、器高2.0cm。底部外面には墨書があり、「幸」と読める。22は坏で、口径13.1cm、器高3.9cm。底部外面に墨書があり、「大」であろう。23は鉢と考えられ、外面下位は回転ヘラケズリ調整を行っている。

## 7号土坑 (図版34、第156図)

調査区東部に位置し、8号土坑の一部を切る。平面形は長軸長180cm、短軸長140cmの楕円形で、深さ45cm。埋土は上層から黒色シルト質土、黒色土ブロックを含む黄灰色粘土、黒色土、黄灰色粘土ブロックを含む暗灰色粘土の順で堆積している。

出土遺物(図版40、第157図1～4)

1は土師器碗。体部は底部との境に丸みを持ち、高台は低く畳付部が細く三角形になる。2は坏で、底部と体部の境が明瞭である。3・4は瓦器碗で、高台は三角形で外に開く。

## 8号土坑 (図版35、第156図)

調査区東部に位置し、遺構の北東部を7号土坑によって切られる。平面形は現状で155×115cm程度の楕円形であるが、遺構の北西から西側の上面から約10cmの部分には崩落の痕跡があることから、本来の規模は145×85cm程度の楕円形で、深さは115cmが残存する。また、底面はほぼ水平で、壁面との境には明確な角を持っており、今回調査した他の土坑と比較して整然とした印象を受ける。

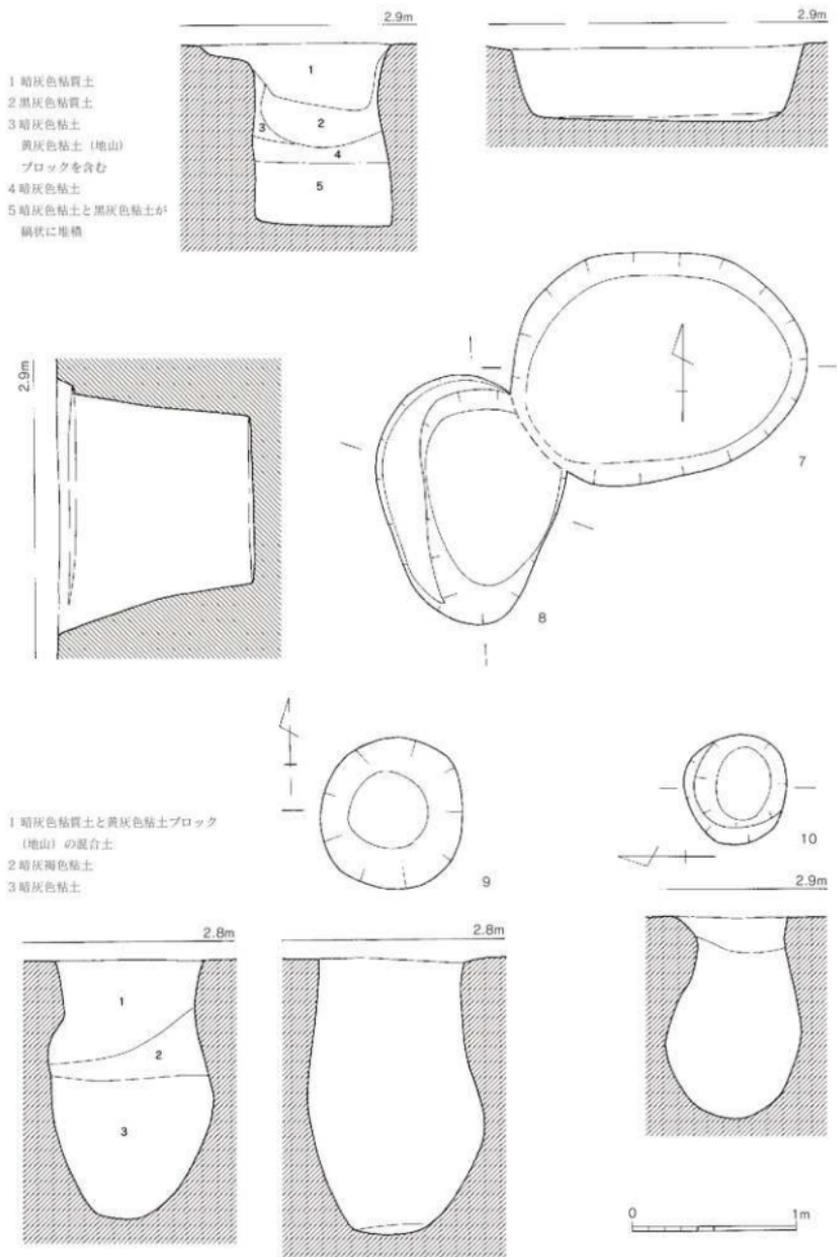
出土遺物(図版40、第157図5～12)

5は須恵器甕で、頸部は短く開き、口縁部の下が三角突帯状に張り出す。口径18.0cm。6は土師器碗で、体部は直線的に開くが下位で若干屈曲する。高台は端部が丸く外に開く。復元口径16.0cm、器高6.0cm。7～10は坏で口径12.0～13.7cm。体部が比較的直線的に開くもの(7・8・10)と、彎曲するもの(9)がある。7は口縁部が3箇所欠けているが完形に近い。8の底部外面には墨書があり、「春カ」。11は皿で、復元口径15.0cm。体部外面に不明瞭ながら暗文状の工具痕が観察できる。12は甕で、復元口径・胴部最大径ともに29.0cm。

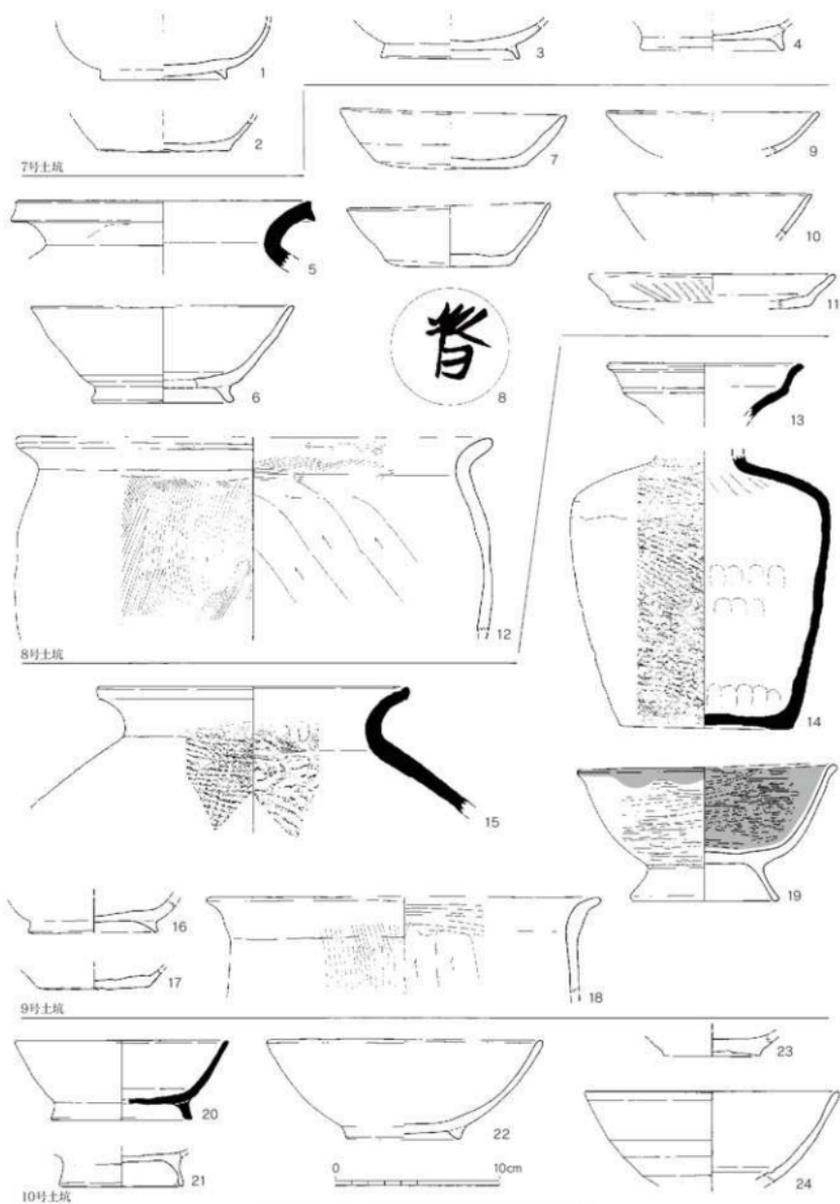
## 9号土坑 (図版35・36、第156図)

調査区東隅部に位置する。平面形は95×85cm程のほぼ円形で、深さ165cm。断面形は中位で一旦105cm程度まで広がり、底ですばまるが平坦面をもたない袋状を呈する。埋土は上層から暗灰色粘質土と黄灰色粘土ブロックの混合土、暗灰褐色粘土、暗灰色粘土の順で堆積していた。

出土遺物(図版40、第156図13～19)



第156図 7～10号土坑実測図(1/30)



第157图 7~10号土坑出土遗物实测图(1/3)

13・14は須恵器壺で、同一個体の可能性が高い。口縁部は頸部との境で屈曲して外反する。体部は肩の強く張った器形で、外面にタタキ痕が残る。復元口径12.0cm、最大径15.8cm。15は甕で、口頸部は短く外反する。復元口径19.0cm。16は土師器碗で、畳付部が細くなる。17は坏か。わずかに残存している体部は薄い。18は甕で、口縁端部は細くシャープである。復元口径24.0cm。19は黒色土器碗で、口縁部の一部を欠くがほぼ完形。口縁部は短く外反し、高台は高く大きく開く。内面のみを焼し、ミガキも内面は丁寧であるが、外面は比較的粗く体部下位にはヘラケズリ痕が残る。口径15.8cm、高台径9.0cm、器高8.5cm。

#### 10号土坑 (図版36、第156図)

調査区東部の7・8号土坑と11・12号土坑の中間に位置する。上縁部での平面形は65×60cmの円形であるが、遺構の南から西にかけての部分に崩落の痕跡があるため、本来は径約55cm程度の円形であろう。深さ125cmで、断面形は9号土坑と同様に袋状で、中位で80cm程に広がり底に平坦面をもたない。

出土遺物(図版40・41、第157図20～24)

20は須恵器碗。体部は直線的に広がり、高台は「ハ」字に広がる。復元口径13.0cm、器高4.9cm。21は黒色土器碗の底部と考えられ、胎土は精良である。高台は薄く高い。内面は増減しているが焼した痕跡が残る。22は瓦器碗で、体部は丸みを持ち、高台は断面三角形。復元口径16.8cm、器高6.1cm。23は越州窯系青磁碗の底部で、蛇ノ目高台である。復元底径5.9cm。24は白磁碗で、体部下位に丸みを持ち上位は直線的に開き、また見込みに沈線をもつ。復元口径15.6cm。

#### 11号土坑 (図版36、第158図)

調査区東部に位置し、遺構の南側1/3程を12号土坑によって切られる。上縁部で径80cm程度の円形で、深さ140cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、上面から20cm程の部分で段をもって下位が狭くなっているのは上部の崩れによるものか。

出土遺物(図版41、第159図1・2)

1は須恵器鉄鉢形土器。口縁端部は上方に摘み上げ、最大径は口縁部直下にある。復元口径16.6cm、体部最大径18.8cm。2は黒色土器皿であろうか。完形で、体部は丸みをもって広がる。口径16.1cm、器高3.0cm。内外全面黒色を呈し、底部外面はヘラケズリ調整、それ以外の内外面は丁寧なヘラミガキ調整である。ヘラミガキ部分には通有の黒色土器には見られない光沢があり、漆等を塗布したのと考えられる。

#### 12号土坑 (図版37、第158図)

調査区東部に位置し、11号土坑を切る。平面形は130×110cm程度の楕円形で、深さ185cm。壁面は底からほぼ垂直に立ち上がり、中位で段をもって上方が若干広がる。崩落によるものか。埋土は上層から暗灰褐色粘質土、暗灰色粘土と黒色粘土の混合土、暗灰色粘土の順で堆積している。

出土遺物(図版41、第159図3～11)

3は須恵器坏か。体部は直線的に広がり、焼成はやや軟質。復元口径13.0cm。4・5は土師器坏で、4は体部に丸みがあり、5は直線的である。6・7は皿で、体部はほぼ直線的に広がる。6は底部外面に板状圧痕が残り、復元口径15.6cm、器高2.4cm。8・9は黒色土器碗で、2点とも

内面のみを燻す。8は比較的小形品で、体部下位で内彎して立ち上がり、9は高台が「ハ」字に開く。10・11は甕の口縁部破片で、内面は口縁部にまで横方向のハケ目調整を行う。

### 13号土坑 (図版37、第158図)

調査区中央東寄りに位置する。75×65cmの円形に近い楕円形で、深さ55cm。埋土は2層に分かれ、上層から黒色粘質土、黒灰色粘質土と黄灰色粘土の混合土の順になっている。

出土遺物(図版41、第159図12・13)

12は瓦器碗で、高台は逆台形状を呈する。13は白磁碗で、器壁は薄く、口縁部がわずかに屈曲して開く。復元口径15.4cm。

### 14号土坑 (図版38、第158図)

調査区北西に位置する。平面形は90×75cm程度の楕円形で、底では60×35cm程に狭くなり、深さは165cm。埋土は上部の一部が黒色粘質土と黒灰色粘質土の混合土である以外は、灰色粘土ブロックを若干含む黒灰色粘土である。

出土遺物(図版41、第159図14・15)

14は滑石製石鍋。口縁部は内傾し、横長の方形把手をもつ。内面には楔形に工具痕が多く残る。外面には煤が付着しており、使用の痕跡が認められる。15は土錘で、上下端部の1/5程を欠く。長さ4.6cm、最大径2.3cm、重さは現状で18g。

### 15号土坑 (図版38、第158図)

調査区中央西寄りに位置する。平面形は85×70cm程度のやや歪んだ楕円形であるが、断面形は深さ105cmで、底が水平で壁が垂直な整然とした形態をしている。埋土は4層に分かれてレンズ状に堆積しており、上層から黒灰色粘質土、黒色粘質土ブロックと灰色粘質土ブロックを含む暗灰色粘質土、黒色粘質土、灰色粘土と黒色粘質土の混合土の順になっている。

出土遺物(図版41、第159図16・17)

16は土師器碗で、体部から口縁部の半分程を欠失する。胎土は精良で、体部は下位で内彎し、口縁部は外反する。復元口径12.2cm、器高4.7cm。また、体部中央には縦2.0cm程度、横2.5cmの穿孔が認められる(図版41-17)。周囲の摩耗の状況から古く開いたものと考えられるが、意図的なものか不明なため図示はしていない。17は完形の土錘で、長さ3.6cm、最大径1.5cm、重さ6g。

### 16号土坑 (図版39、第158図)

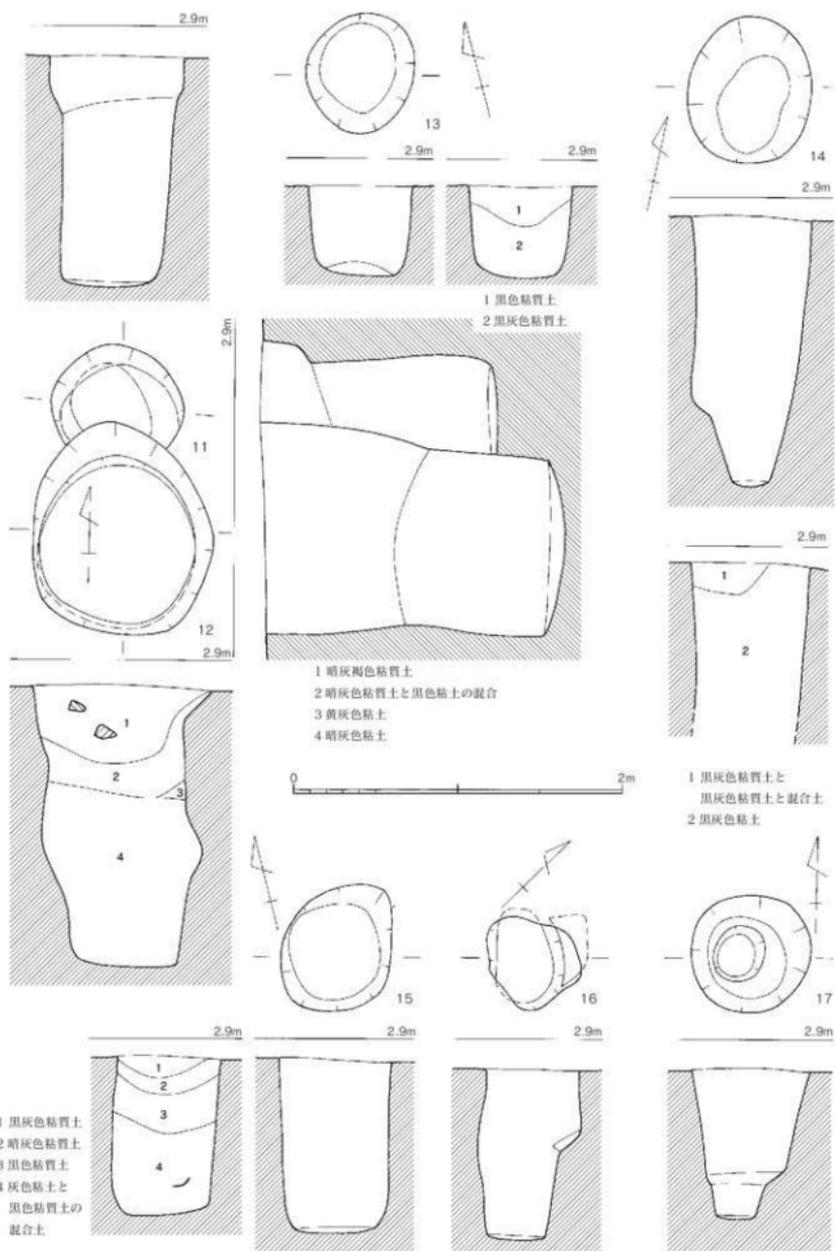
調査区南部に位置する。平面形は現状では60×55cmの不正形であるが、土坑の北東側の上半部には崩れた痕跡があるため、本来は60×45cm程度の楕円形であると考えられる。底は平坦で60×35cmの同じく楕円形で壁は垂直に近く立ち上がる。

### 17号土坑 (図版39、第158図)

調査区南部に位置し、16号土坑とは近接する。平面形は径70～75cmの円形で、底をさらに35×30cmの楕円形に掘り込む二段掘り状の形状を呈する。深さ90cmで壁は斜めに立ち上がる。

出土遺物(図版41、第159図18)

土師器碗で、体部は丸みをもち、高台は高い。器面は風化しているが、内面にはヘラミガキの



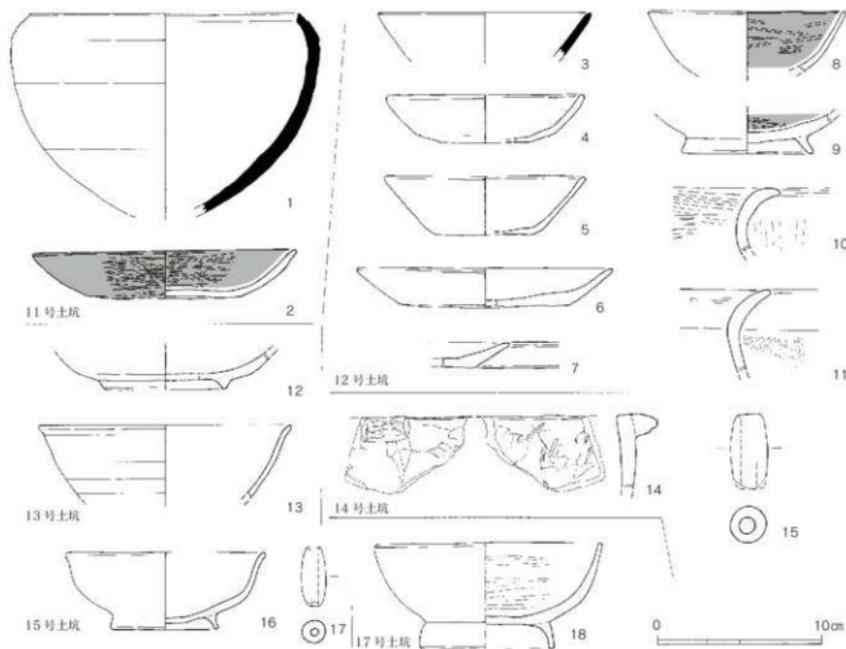
第158図 11～17号土坑実測図(1/30)

痕跡がわずかに残る。口径13.9cm、器高6.5cm。

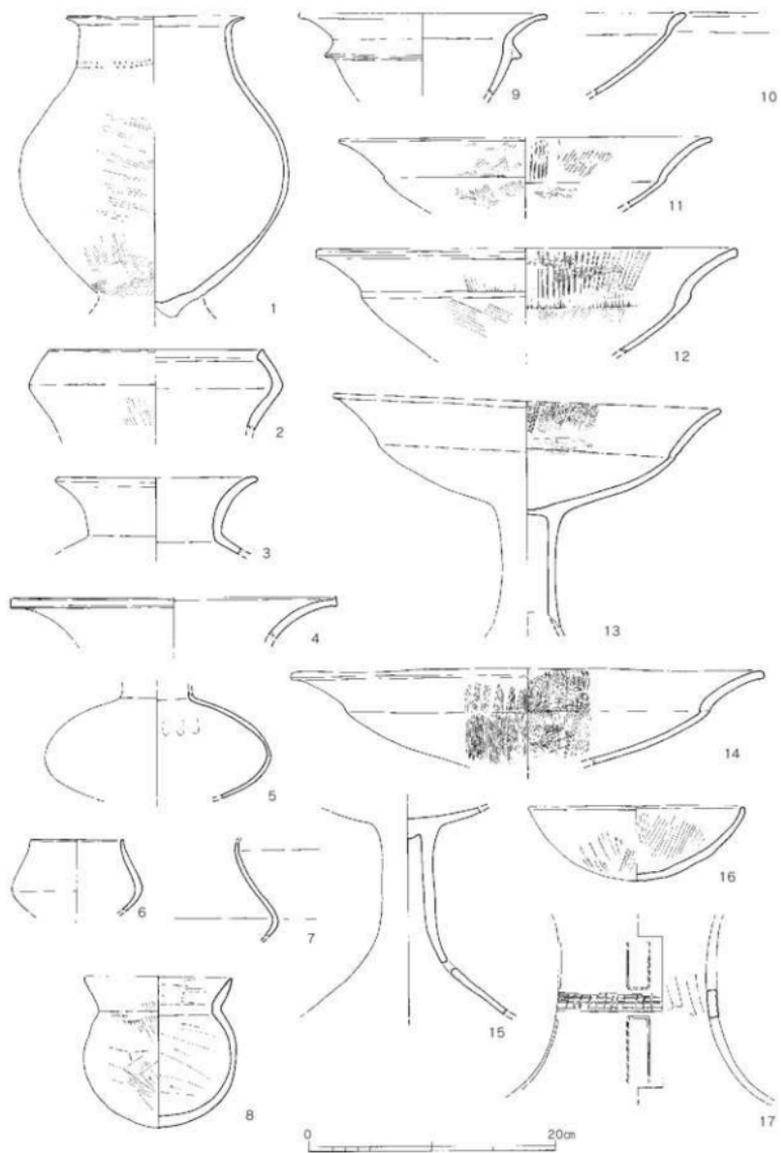
## (2) 遺物包含層

本遺跡は遺構面がきわめて低く、西側に近接するクリークの水位とほとんど差がないことから、雨季とも重なり調査期間中水には終始悩まされた。このため調査区の南側から西側の外周に沿って幅1.5m程の排水溝を手作業で掘削した。作業の途中、調査区の南西隅部から弥生時代後期の土器がまとまって出土したため、この周囲を精査したところ、10×3.5mの範囲で不整形の浅い落ち状の部分を検出し、弥生土器・土師器が出土した。この部分はさらに南西側の調査区外に延びるものと考えられるが、深さは10~15cm程度とごく浅く、またその埋土は周囲の遺構面の地山である灰色粘土に対して区別の付きにくい黄灰色粘土で判然としない部分もあった。遺構とするのはもちろん、地形の落ちとするのも躊躇されるため、ここでは遺物包含層として報告する。出土遺物(図版41、第160図)

1~7は弥生土器壺。1は中位に最大径がある球形の体部をもち、また体部と頸部の境は不明瞭でなだらかにすばまるが、この位置に上下二段の列点文を施文する。口縁部は器壁がごく薄く、屈曲して短く開く。底部には剥離の痕跡が残り、この部分に裾広がりの脚部が付くものと考えられる。口径14.4cm、体部最大径21.6cm。2は外面に稜をもつ袋状口縁部分。3は口頸部が外反



第159図 11~15・17号土坑出土遺物実測図(1/3)



第160图 包含層出土土器実測図(1/4)

して開く広口壺で、口径16.4cm。4は口頸部が大きく開き、口縁端部を上方に摘み上げる。復元口径26.3cm。5は長頸壺の体部で扁球形である。器壁は薄く胎土は精良。復元最大径18.2cm。6・7は小型の短頸壺で、体部最大径が下位にあり、この部分で屈曲して直線的にすぼまる。口縁部は6はわずかに上方に伸び上がり、7は短く外反する。ともに胎土は精良。8は土師器の小型丸底壺で、口縁部の一部を欠く以外はほぼ完形。球形の体部に直線的に広がる口縁部が付く。器面は全体的に風化による剥落が多いが、体部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整。口径11.8cm、体部最大径12.3cm、器高12.3cm。9～15は弥生土器高坏。9は外反する口縁部に半球形の坏部をもち、外面に1条の三角突帯が付く。復元口径20.0cm。10は口縁部内面を肥厚させる。11～14は坏部中位で屈曲して、口縁部は外反して開く。全体的に器面は風化しているが、ハケメ調整の後放射状に暗文様のミガキ調整を行う。復元口径30.0～38.2cm。15は脚部で、1箇所に穿孔が認められる。16は鉢で、素口縁の半球形を呈する。器面は不明瞭ながら、内外面ともハケメ調整と考えられるが、外面は砂粒が動くほど強く工具を当てている。口径17.3cm、器高6.0cm。17は器台で、上下2段の方形透かし孔が確認でき、その間には3～4条の沈線を廻らせ縦位のキザミを入れることによって格子目文をつくりだす。

## 小結

今回の調査で検出した主な遺構は、土坑17基である。出土した遺物は9世紀から12世紀頃のもので、ほぼ平安時代を通して掘削されたことを示している。土坑の平面形は円形あるいは楕円形で、深いものが多く、一見すると素掘りの井戸のようでもある。しかしながら、いずれの土坑も粘土層を掘り込んでいるに過ぎず、湧水層にまでは到達していない。したがって井戸とするのは困難と考えるが、土坑の周囲にはこれと関連する遺構も認められず、用途等は不明と言わざるを得ない。

出土遺物の中には墨書土器や、漆を塗布したと考えられる土器、輸入陶磁器などが含まれており、ここが重要な地点であることは間違いないものと考えられる。とはいえ、遺構の性格が不明である以上、今回の調査区だけで遺跡の性格を判断することは困難であろう。



1. 蒲船津水町遺跡全景  
(北上空から)



2. 同上全景(上空から)



1. 1号土坑 (南から)



2. 2号土坑 (南から)



3. 3号土坑 (南から)



1. 4号土坑(北から)



2. 5号土坑(西から)

3. 6号土坑土層  
(北西から)



1. 6号土坑 (西から)



2. 7号土坑土層  
(東から)

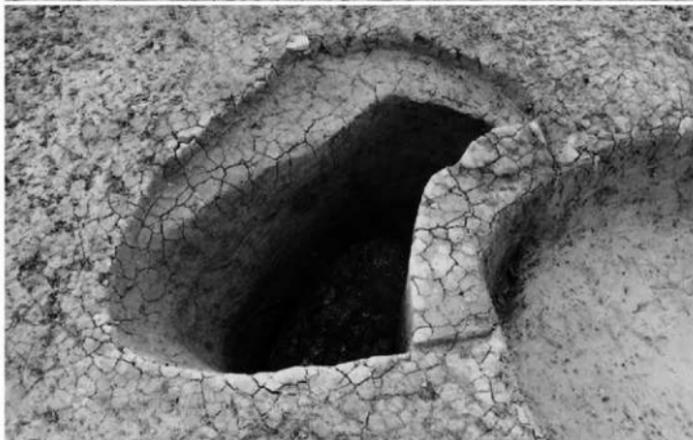


3. 7号土坑 (南から)

1. 8号土坑土層  
(南から)



2. 8号土坑 (東から)



3. 9号土坑土層  
(南から)





1. 9号土坑 (東から)



2. 10号土坑 (東から)



3. 11号土坑 (南から)

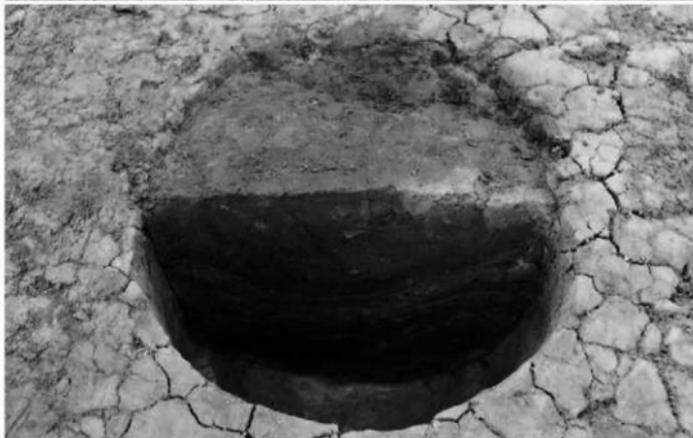
1. 12号土坑土層  
(南から)



2. 12号土坑(東から)



3. 13号土坑土層  
(南西から)





1. 14号土坑土層  
(南から)



2. 14号土坑 (南から)



3. 15号土坑土層  
(南から)

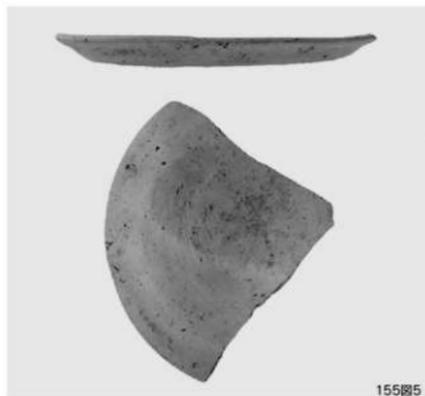


1. 16号土坑 (西から)

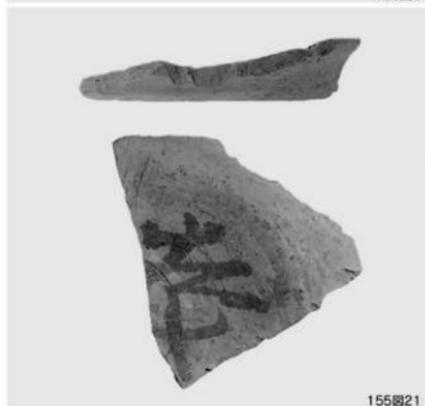


2. 17号土坑 (南から)

3. 遺物包含層掘削状況  
(北から)



155圖5



155圖21



155圖22



157圖7



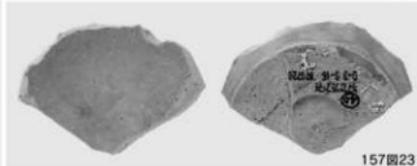
157圖8



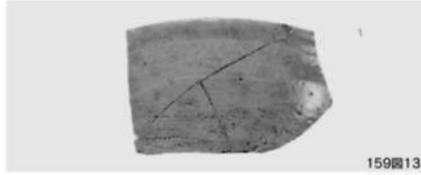
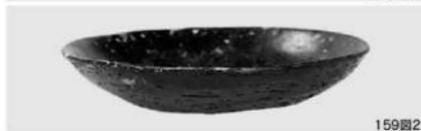
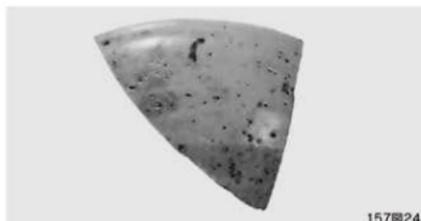
157圖14



157圖19



157圖23



## 報告書抄録

ふりがな	やかべまちやしきいせきよん・かまふなつにしのうちいせき・かまふなつみずまいせき	
書名	矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡	
副書名		
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告	
シリーズ番号	第12集	
編著者名	秦 憲二・進村真之・小川泰樹	
編集機関	九州歴史資料館	
所在地	〒838-0106 小郡市三沢5208-3	
発行年月日	西暦2012年3月31日	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	° 〃	° 〃			
矢加部町屋敷 5・1次調査	福岡県柳川市 大字矢加部字町屋敷	402079	140392	33° 10' 46"	130° 24' 47"	2004.6.15 ～ 2004.10.4	1,730㎡	国道バイパス
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
矢加部町屋敷 5・1次調査	集落	江戸 明治 大正 昭和	土坑・廃棄土坑 大土坑 溝状遺構・大溝 埋甕 井戸	39 3 10 8 1	土師器 瓦質土器 陶磁器 瓦 窯道具	ガラス製品 銅銭 木製品 下駄 建築材	キセル るつぼ 土人形 鋳型 砥石	木間 近世・近代の鋳造関係 遺物・鋳型

### 遺跡の概要

本遺跡は江戸時代の町屋跡の端部にあたり、17世紀中葉から現代にいたる遺構・遺物が見られ、連続と集落が宮まわっていたことが分かった。町屋の中心部分は今次調査区の東側の久留米柳川街道沿いであり、その通りに面して並ぶ建物群の裏手にあたる。

18世紀中葉から飛躍的に遺物が増加し、多くの土器・陶磁器類が出土したが、なかでも鋳造関係の遺物が注目される。また、近世の築後地方に見られる土師質の瓦や窯道具も多量に出土している。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	° 〃	° 〃			
蒲船津西ノ内 遺跡	福岡県柳川市三橋町 蒲船津314-1～4・ 5A番地	402079	780048	33° 9' 52"	130° 25' 22"	2006.12.4 ～ 2007.1.31	800㎡	国道バイパス
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
蒲船津西ノ内 遺跡	集落	中世	土坑 灰だまり状遺構	2 1	土師器 磁器	瓦質土器 銅銭	土鈴	

### 遺跡の概要

本遺跡は戦国時代の集落で、建物跡は発見されていないが井戸らしい土坑が検出された。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	° 〃	° 〃			
蒲船津水町遺跡	福岡県柳川市三橋町 蒲船津534-2番地	402079		33° 10' 2"	130° 25' 24"	2007.5.10 ～ 2007.8.29	1,800㎡	国道バイパス
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
蒲船津水町遺跡	集落	古墳 平安	不整形落ち込み 井戸状遺構	1 20	土師器 砥石	須恵器 土鍾	滑石製石鐮	墨書土器

### 遺跡の概要

本遺跡では、古墳時代初頭の不整形な落ち込みと、平安時代の井戸状遺構が約20基あり、その埋土からは墨書土器が出土している。

**福岡県行政資料**

分類番号 JH	所属コード 217104
登録年度 23	登録番号 0013

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第12集

**矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡**

平成24年(2012年)3月31日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園7番7号  
印刷 株式会社 三光  
福岡市博多区山王1丁目14-4